

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅱ

—— 白井町一本桜南遺跡 ——

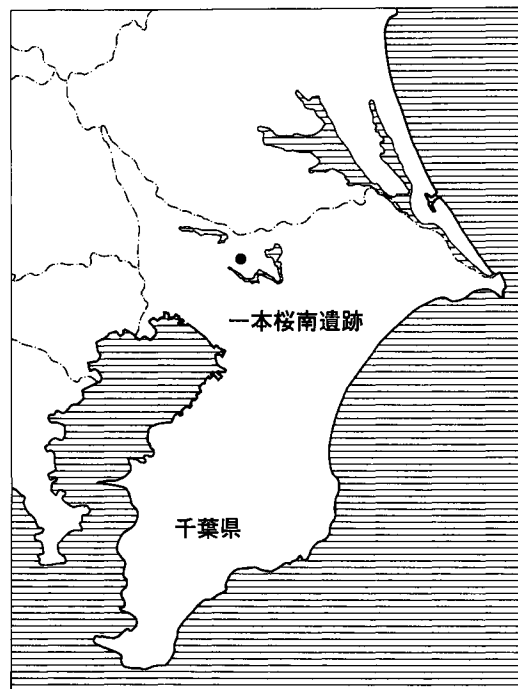
平成10年3月

住宅・都市整備公団 千葉地域支社

財団法人 千葉県文化財センター

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅱ

—— しろ い いっほんざくらみなみ 白井町一本桜南遺跡 ——



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第318集として、住宅・都市整備公団の千葉北部地区新住宅市街地開発事業に伴って実施した白井町一本桜南遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代石器群を初め、縄文時代及び古墳時代前期の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術的資料として、また郷土史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係諸機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年 3月31日

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

本文目次

序文

凡例

I	はじめに	1
1	調査の経緯と経過	1
2	遺跡の位置と環境	2
3	調査の方法と概要	7
II	遺構と遺物	11
1	旧石器時代	11
(1)	第1文化層	17
(2)	第2文化層	28
(3)	第3文化層	34
(4)	第4文化層	55
(5)	第5文化層	61
(6)	第6文化層	76
(7)	第7文化層	103
(8)	第8文化層	121
(9)	第9文化層	141
(10)	第10文化層	153
(11)	その他の遺物	168
2	縄文時代	172
(1)	竪穴住居跡	172
(2)	炉 穴	176
(3)	陥 穴	186
(4)	石鏃製作跡	189
(5)	その他の遺物	209
3	古墳時代	216
(1)	竪穴住居跡	216
(2)	その他の出土遺物	303
4	近世ほか	305
(1)	炭 窯	305
(2)	溝	310
(3)	土 坑	312
(4)	粘土採掘跡	317
III	まとめ	318

1 旧石器時代	318
2 縄文時代	319
3 古墳時代	320
報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図 遺跡位置図（平成9年版）	3	第29図 第5ブロック石材別石器分布図	45
第2図 遺跡位置図（昭和58年版）	4	第30図 第5ブロック出土遺物（1）	46
第3図 グリッド名称図	8	第31図 第5ブロック出土遺物（2）	47
第4図 確認調査グリッド配置図	9	第32図 第6ブロック器種別石器分布図	49
第5図 遺構配置図	10	第33図 第6ブロック石材別石器分布図	50
第6図 基本土層図	12	第34図 第6ブロック出土遺物	51
第7図 遺跡土層断面図	14	第35図 第7ブロック器種別石器分布図	52
第8図 旧石器ブロック分布図	15	第36図 第7ブロック石材別石器分布図	53
第9図 第1・4ブロック器種別石器分布図	18	第37図 第7ブロック出土遺物	53
第10図 第1・4ブロック石材別石器分布図	19	第38図 第8ブロック器種別石器分布図	54
第11図 第1ブロック出土遺物（1）	21	第39図 第8ブロック石材別石器分布図	55
第12図 第1ブロック出土遺物（2）	22	第40図 第8ブロック出土遺物	55
第13図 第1ブロック出土遺物（3）	23	第41図 第9ブロック器種別・石材別石器分布図	56
第14図 第1ブロック出土遺物（4）	24	第42図 第9ブロック出土遺物	57
第15図 第1ブロック出土遺物（5）	25	第43図 第10ブロック器種別石器分布図	59
第16図 第2ブロック器種別・石材別石器分布図	27	第44図 第10ブロック石材別石器分布図	60
第17図 第2ブロック出土遺物	27	第45図 第10ブロック出土遺物	61
第18図 第3ブロック器種別石器分布図	30	第46図 第11・12・29ブロック器種別石器分布図	63
第19図 第3ブロック石材別石器分布図	31	第47図 第11・12・29ブロック石材別石器分布図	65
第20図 第3ブロック出土遺物（1）	32	第48図 第11ブロック出土遺物（1）	68
第21図 第3ブロック出土遺物（2）	33	第49図 第11ブロック出土遺物（2）	69
第22図 第4ブロック出土遺物（1）	36	第50図 第11ブロック出土遺物（3）	70
第23図 第4ブロック出土遺物（2）	37	第51図 第11ブロック出土遺物（4）	71
第24図 第4ブロック出土遺物（3）	38	第52図 第12ブロック出土遺物（1）	74
第25図 第4ブロック出土遺物（4）	39	第53図 第12ブロック出土遺物（2）	75
第26図 第4ブロック出土遺物（5）	40	第54図 第13ブロック器種別石器分布図	78
第27図 第4ブロック出土遺物（6）	41	第55図 第13ブロック石材別石器分布図	79
第28図 第5ブロック器種別石器分布図	44	第56図 第13ブロック出土遺物	80

第57図	第14ブロック器種別石器分布図	81	第94図	第23ブロック出土遺物 (2)	130
第58図	第14ブロック石材別石器分布図	82	第95図	第24・25ブロック器種別石器分布図	131
第59図	第14ブロック出土遺物	83	第96図	第24・25ブロック石材別石器分布図	133
第60図	第15ブロック器種別石器分布図	85	第97図	第24ブロック出土遺物 (1)	135
第61図	第15ブロック石材別石器分布図	86	第98図	第24ブロック出土遺物 (2)	136
第62図	第15ブロック出土遺物 (1)	87	第99図	第25ブロック出土遺物 (1)	138
第63図	第15ブロック出土遺物 (2)	88	第100図	第25ブロック出土遺物 (2)	139
第64図	第15ブロック出土遺物 (3)	89	第101図	第26ブロック器種別石器分布図	142
第65図	第16ブロック器種別石器分布図	91	第102図	第26ブロック石材別石器分布図	143
第66図	第16ブロック石材別石器分布図	92	第103図	第26ブロック出土遺物	144
第67図	第16ブロック出土遺物	93	第104図	第27ブロック器種別石器分布図	145
第68図	第17ブロック器種別石器分布図	95	第105図	第27ブロック石材別石器分布図	147
第69図	第17ブロック石材別石器分布図	96	第106図	第27ブロック出土遺物	150
第70図	第17ブロック出土遺物	97	第107図	第28ブロック器種別石器分布図	151
第71図	第18ブロック器種別石器分布図	98	第108図	第28ブロック石材別石器分布図	152
第72図	第18ブロック石材別石器分布図	99	第109図	第28ブロック出土遺物	153
第73図	第18ブロック出土遺物	100	第110図	第29ブロック出土遺物 (1)	156
第74図	第19ブロック器種別石器分布図	101	第111図	第29ブロック出土遺物 (2)	157
第75図	第19ブロック石材別石器分布図	102	第112図	第29ブロック出土遺物 (3)	158
第76図	第19ブロック出土遺物	103	第113図	第29ブロック出土遺物 (4)	160
第77図	第20ブロック器種別石器分布図	104	第114図	第29ブロック出土遺物 (5)	162
第78図	第20ブロック石材別石器分布図	105	第115図	第30ブロック器種別・石材別石器分布図	163
第79図	第20ブロック出土遺物	106	第116図	第30ブロック出土遺物	164
第80図	第21ブロック器種別石器分布図	107	第117図	第31ブロック器種別石器分布図	165
第81図	第21ブロック石材別石器分布図	109	第118図	第31ブロック石材別石器分布図	166
第82図	第21ブロック出土遺物 (1)	111	第119図	第31ブロック出土遺物	167
第83図	第21ブロック出土遺物 (2)	112	第120図	ブロック外出土遺物 (1)	169
第84図	第21ブロック出土遺物 (3)	114	第121図	ブロック外出土遺物 (2)	170
第85図	第21ブロック出土遺物 (4)	116	第122図	縄文時代遺構分布図	173
第86図	第21ブロック出土遺物 (5)	118	第123図	099号住居跡実測図及び出土遺物	174
第87図	第21ブロック出土遺物 (6)	119	第124図	125A・125B号住居跡実測図	175
第88図	第22ブロック器種別石器分布図	123	第125図	125A・125B号住居跡出土遺物	176
第89図	第22ブロック石材別石器分布図	124	第126図	018A・018B号炉穴実測図	177
第90図	第22ブロック出土遺物	125	第127図	071・072号炉穴実測図及び 071号炉穴出土遺物	178
第91図	第23ブロック器種別石器分布図	126	第128図	073・075号炉穴実測図及び出土遺物	179
第92図	第23ブロック石材別石器分布図	127	第129図	076・077号炉穴実測図及び	
第93図	第23ブロック出土遺物 (1)	129			

	077号炉穴出土遺物 ……………181	第162図	029号住居跡実測図 ……………230
第130図	086・096号炉穴実測図及び 096号炉穴出土遺物 ……………182	第163図	030号住居跡実測図及び出土遺物 ……232
第131図	100・115号炉穴実測図及び出土遺物 ……184	第164図	031号住居跡実測図及び出土遺物 ……233
第132図	117・120・124・126号炉穴実測図 及び117号炉穴出土遺物 ……………185	第165図	032号住居跡実測図 ……………234
第133図	005・011・012号陥穴実測図 ……………187	第166図	032号住居跡出土遺物 ……………235
第134図	013・037・040号陥穴実測図 ……………188	第167図	033号住居跡実測図及び出土遺物 ……238
第135図	縄文時代石鏃製作跡分布図 ……………190	第168図	034号住居跡実測図及び出土遺物 ……240
第136図	第1石鏃製作跡出土遺物 (1) ……………191	第169図	035号住居跡実測図 ……………241
第137図	第1石鏃製作跡出土遺物 (2) ……………192	第170図	035号住居跡出土遺物 ……………242
第138図	第2石鏃製作跡出土遺物 ……………194	第171図	036号住居跡実測図及び出土遺物 ……243
第139図	第3石鏃製作跡出土遺物 ……………195	第172図	038号住居跡実測図及び出土遺物 ……245
第140図	第4石鏃製作跡出土遺物 ……………197	第173図	039号住居跡実測図及び出土遺物 ……247
第141図	第5石鏃製作跡出土遺物 ……………199	第174図	041号住居跡実測図 ……………248
第142図	第6石鏃製作跡出土遺物 ……………201	第175図	041号住居跡出土遺物 (1) ……………250
第143図	第7石鏃製作跡出土遺物 ……………202	第176図	041号住居跡出土遺物 (2) ……………251
第144図	第8石鏃製作跡出土遺物 ……………204	第177図	042号住居跡実測図及び出土遺物 ……253
第145図	第9石鏃製作跡出土遺物 ……………205	第178図	043号住居跡実測図及び出土遺物 ……254
第146図	第10石鏃製作跡出土遺物 ……………206	第179図	044号住居跡実測図及び出土遺物 ……255
第147図	第11石鏃製作跡出土遺物 ……………208	第180図	045号住居跡実測図 ……………257
第148図	グリッド出土遺物 (1) ……………210	第181図	045号住居跡出土遺物 ……………258
第149図	グリッド出土遺物 (2) ……………211	第182図	046号住居跡実測図及び出土遺物 ……261
第150図	グリッド出土遺物 (3) ……………213	第183図	047号住居跡実測図及び出土遺物 ……262
第151図	グリッド出土遺物 (4) ……………214	第184図	048号住居跡実測図及び出土遺物 ……264
第152図	古墳時代遺構分布図 ……………217	第185図	049号住居跡実測図及び出土遺物 ……265
第153図	014・015・016・019号住居跡実測図 及び014・015号住居跡出土遺物 ……218	第186図	050・053号住居跡実測図 及び053号住居跡出土遺物 ……………267
第154図	020・021・022・023号住居跡実測図 及び021号住居跡出土遺物 ……………220	第187図	055号住居跡実測図 ……………268
第155図	024・025号住居跡実測図 ……………221	第188図	055号住居跡出土遺物 ……………269
第156図	026号住居跡実測図 ……………223	第189図	056号住居跡実測図 ……………271
第157図	026号住居跡出土遺物 (1) ……………224	第190図	056号住居跡出土遺物 (1) ……………273
第158図	026号住居跡出土遺物 (2) ……………225	第191図	056号住居跡出土遺物 (2) ……………274
第159図	026号住居跡出土遺物 (3) ……………226	第192図	057号住居跡実測図 ……………277
第160図	027号住居跡実測図及び出土遺物 ……228	第193図	057号住居跡出土遺物 (1) ……………278
第161図	028号住居跡実測図及び出土遺物 ……229	第194図	057号住居跡出土遺物 (2) ……………279
		第195図	057号住居跡出土遺物 (3) ……………280
		第196図	057号住居跡出土遺物 (4) ……………281
		第197図	058号住居跡実測図 ……………284

第198図	059号住居跡実測図及び出土遺物	…285	第210図	グリッド出土遺物	……………304
第199図	062号住居跡実測図及び出土遺物	…287	第211図	近世ほか遺構分布図	……………306
第200図	063号住居跡実測図及び出土遺物	…288	第212図	004・006～010号炭窯実測図	……………307
第201図	064～067号住居跡実測図	……………290	第213図	078～081号炭窯実測図	……………308
第202図	068～070・084号住居跡実測図	……………292	第214図	082・083・097・121・122号 炭窯実測図	……………309
第203図	085・087号住居跡実測図及び出土遺物	294	第215図	001～003号溝実測図	……………311
第204図	088・089号住居跡実測図及び出土遺物	296	第216図	017・051・052・054・060・061・074・ 098・101号土坑実測図	……………313
第205図	090号住居跡実測図	……………297	第217図	102～110号土坑実測図	……………315
第206図	090号住居跡出土遺物	……………298	第218図	123号土坑実測図	……………316
第207図	091・092・093号住居跡実測図	……………300	第219図	114A・114B号粘土採掘跡実測図	…317
第208図	094号住居跡実測図及び出土遺物	…301			
第209図	095・127号住居跡実測図 及び127号住居跡出土遺物	……………302			

表 目 次

第1表	第1ブロック石器組成表	……………19	第21表	第11ブロック石器観察表	……………72
第2表	第1ブロック石器観察表	……………26	第22表	第12ブロック石器組成表	……………73
第3表	第2ブロック石器観察表	……………27	第23表	第12ブロック石器観察表	……………76
第4表	第3ブロック石器組成表	……………29	第24表	第13ブロック石器組成表	……………78
第5表	第3ブロック石器観察表	……………33	第25表	第13ブロック石器観察表	……………79
第6表	第4ブロック石器組成表	……………35	第26表	第14ブロック石器組成表	……………81
第7表	第4ブロック石器観察表	……………42	第27表	第14ブロック石器観察表	……………82
第8表	第5ブロック石器組成表	……………44	第28表	第15ブロック石器組成表	……………89
第9表	第5ブロック石器観察表	……………48	第29表	第15ブロック石器観察表	……………89
第10表	第6ブロック石器組成表	……………49	第30表	第16ブロック石器組成表	……………94
第11表	第6ブロック石器観察表	……………51	第31表	第16ブロック石器観察表	……………94
第12表	第7ブロック石器組成表	……………52	第32表	第17ブロック石器組成表	……………94
第13表	第7ブロック石器観察表	……………53	第33表	第17ブロック石器観察表	……………96
第14表	第8ブロック石器組成表	……………54	第34表	第18ブロック石器組成表	……………97
第15表	第8ブロック石器観察表	……………55	第35表	第18ブロック石器観察表	……………99
第16表	第9ブロック石器組成表	……………58	第36表	第19ブロック石器組成表	……………102
第17表	第9ブロック石器観察表	……………58	第37表	第19ブロック石器観察表	……………103
第18表	第10ブロック石器組成表	……………60	第38表	第20ブロック石器組成表	……………104
第19表	第10ブロック石器観察表	……………60	第39表	第20ブロック石器観察表	……………105
第20表	第11ブロック石器組成表	……………67	第40表	第21ブロック石器組成表	……………110

第41表	第21ブロック石器観察表	120	第78表	026号住居跡出土遺物表	222・226
第42表	第22ブロック石器組成表	124	第79表	027号住居跡出土遺物表	227
第43表	第22ブロック石器観察表	125	第80表	028号住居跡出土遺物表	230
第44表	第23ブロック石器組成表	128	第81表	030号住居跡出土遺物表	231
第45表	第23ブロック石器観察表	130	第82表	031号住居跡出土遺物表	233
第46表	第24ブロック石器組成表	136	第83表	032号住居跡出土遺物表	236
第47表	第24ブロック石器観察表	136	第84表	033号住居跡出土遺物表	238
第48表	第25ブロック石器組成表	137	第85表	034号住居跡出土遺物表	239
第49表	第25ブロック石器観察表	140	第86表	035号住居跡出土遺物表	242
第50表	第26ブロック石器組成表	142	第87表	036号住居跡出土遺物表	244
第51表	第26ブロック石器観察表	144	第88表	038号住居跡出土遺物表	244
第52表	第27ブロック石器組成表	149	第89表	039号住居跡出土遺物表	246
第53表	第27ブロック石器観察表	150	第90表	041号住居跡出土遺物表	249・251
第54表	第28ブロック石器組成表	151	第91表	042号住居跡出土遺物表	254
第55表	第28ブロック石器観察表	152	第92表	043号住居跡出土遺物表	255
第56表	第29ブロック石器組成表	155	第93表	044号住居跡出土遺物表	256
第57表	第29ブロック石器観察表	162	第94表	045号住居跡出土遺物表	257・259
第58表	第30ブロック石器組成表	164	第95表	046号住居跡出土遺物表	260・262
第59表	第30ブロック石器観察表	164	第96表	047号住居跡出土遺物表	263
第60表	第31ブロック石器組成表	166	第97表	048号住居跡出土遺物表	263
第61表	第31ブロック石器観察表	168	第98表	049号住居跡出土遺物表	266
第62表	ブロック外石器観察表	171	第99表	053号住居跡出土遺物表	268
第63表	第1石鏃製作跡石器観察表	193	第100表	055号住居跡出土遺物表	270
第64表	第2石鏃製作跡石器観察表	195	第101表	056号住居跡出土遺物表	275
第65表	第3石鏃製作跡石器観察表	196	第102表	057号住居跡出土遺物表	281
第66表	第4石鏃製作跡石器観察表	198	第103表	059号住居跡出土遺物表	286
第67表	第5石鏃製作跡石器観察表	200	第104表	062号住居跡出土遺物表	286
第68表	第6石鏃製作跡石器観察表	201	第105表	063号住居跡出土遺物表	289
第69表	第7石鏃製作跡石器観察表	202	第106表	085号住居跡出土遺物表	293
第70表	第8石鏃製作跡石器観察表	205	第107表	087号住居跡出土遺物表	295
第71表	第9石鏃製作跡石器観察表	206	第108表	088号住居跡出土遺物表	295
第72表	第10石鏃製作跡石器観察表	207	第109表	089号住居跡出土遺物表	295
第73表	第11石鏃製作跡石器観察表	207	第110表	090号住居跡出土遺物表	299
第74表	グリッド出土石器観察表	212	第111表	094号住居跡出土遺物表	302
第75表	014号住居跡出土遺物表	216	第112表	127号住居跡出土遺物表	303
第76表	015号住居跡出土遺物表	216	第113表	グリッド出土遺物表	303
第77表	021号住居跡出土遺物表	219	第114表	砂鉄分析値表	324

図版目次

- 図版 1 航空写真（平成9年撮影）
- 図版 2 航空写真（昭和52年撮影）
- 図版 3 遺跡全景
- 図版 4 遺跡近景（東から） 第1・4ブロック石器出土状況（西から） 第1・4ブロック土層断面
- 図版 5 第1・4ブロック石器出土状況（西から） 第2ブロック石器出土状況（東から） 第2ブロック土層断面
- 図版 6 第3ブロック石器出土状況（東から） 第3ブロック局部磨製石斧出土状況（西側から） 第5ブロック石器出土状況（東から）
- 図版 7 第6ブロック石器出土状況（北から） 第7ブロック石器出土状況（東から） 第8ブロック石器出土状況（北から）
- 図版 8 第9ブロック石器出土状況（南から） 第10・27・31ブロック石器出土状況（北から） 第12ブロック石器出土状況（西から）
- 図版 9 第13ブロック石器出土状況（西から） 第13ブロック土層断面 第14・15・16ブロック石器出土状況（南から）
- 図版 10 第14ブロック石器出土状況（南から） 第15ブロック石器出土状況（南から） 第16ブロック石器出土状況（南から）
- 図版 11 第17ブロック石器出土状況（西から） 第18ブロック石器出土状況（西から） 第18ブロック土層断面
- 図版 12 第19ブロック石器出土状況（北から） 第20ブロック石器出土状況（東から） 第21ブロック石器出土状況（北から）
- 図版 13 第21ブロック石器出土状況（西から） 第22ブロック石器出土状況（西から）
- 第23ブロック石器出土状況（西から）
- 図版 14 第23ブロック搔器出土状況（西から） 第23ブロック槍先形尖頭器出土状況（西から） 第24ブロック石器出土状況（北から） 第26ブロック石器出土状況（北から）
- 図版 15 第28ブロック石器出土状況（東から） 第29ブロック石器出土状況（西から） 第30ブロック石器出土状況（南から）
- 図版 16 第1ブロック出土遺物（1）
- 図版 17 第1ブロック出土遺物（2）
- 図版 18 第1ブロック出土遺物（3） 第2ブロック出土遺物 第3ブロック出土遺物（1）
- 図版 19 第3ブロック出土遺物（2） 第4ブロック出土遺物（1）
- 図版 20 第4ブロック出土遺物（2）
- 図版 21 第4ブロック出土遺物（3）
- 図版 22 第4ブロック出土遺物（4）
- 図版 23 第5ブロック出土遺物
- 図版 24 第6ブロック出土遺物 第7ブロック出土遺物 第8ブロック出土遺物 第9ブロック出土遺物（1）
- 図版 25 第9ブロック出土遺物（2） 第10ブロック出土遺物 第11ブロック出土遺物（1）
- 図版 26 第11ブロック出土遺物（2）
- 図版 27 第11ブロック出土遺物（3） 第12ブロック出土遺物（1）
- 図版 28 第12ブロック出土遺物（2） 第13ブロック出土遺物
- 図版 29 第14ブロック出土遺物 第15ブロック出土遺物（1）
- 図版 30 第15ブロック出土遺物（2）

- 図版 31 第16ブロック出土遺物 第17ブロック
出土遺物 第18ブロック出土遺物
- 図版 32 第19ブロック出土遺物 第20ブロック
出土遺物 第21ブロック出土遺物 (1)
- 図版 33 第21ブロック出土遺物 (2)
- 図版 34 第21ブロック出土遺物 (3)
- 図版 35 第21ブロック出土遺物 (4)
- 図版 36 第21ブロック出土遺物 (5) 第22ブ
ック出土遺物 第23ブロック出土遺物
(1)
- 図版 37 第23ブロック出土遺物 (2) 第24ブ
ック出土遺物
- 図版 38 第25ブロック出土遺物 (1)
- 図版 39 第25ブロック出土遺物 (2) 第26ブ
ック出土遺物 第27ブロック出土遺物
- 図版 40 第28ブロック出土遺物 第29ブ
ック出土遺物 (1)
- 図版 41 第29ブロック出土遺物 (2)
- 図版 42 第29ブロック出土遺物 (3)
- 図版 43 第30ブロック出土遺物 第31ブ
ック出土遺物
- 図版 44 ブロック外出土遺物 (1)
- 図版 45 ブロック外出土遺物 (2)
- 図版 46 099号住居跡全景 (西から) 125A・B
号住居跡全景 (西から)
- 図版 47 099号住居跡出土遺物 125A号住居跡
出土遺物 125B号住居跡出土遺物
- 図版 48 018A・B号炉穴 (北から) 071・072
号炉穴 (北から) 及び071号炉穴出土遺
物 073号炉穴 (西から) 及び出土遺物
075号炉穴 (西から) 及び出土遺物
- 図版 49 076号炉穴 (西から) 077号炉穴 (西
から) 及び出土遺物 086号炉穴 (北か
ら)
- 図版 50 096号炉穴 (北から) 及び出土遺物
100号炉穴 (東から) 及び出土遺物
115号炉穴 (南から) 及び出土遺物
- 図版 51 117号炉穴 (南から) 117号 炉穴遺物
出土状況 117号炉穴出土遺物 120号
炉穴 (北から) 124号炉穴 (北から)
126号炉穴 (西から)
- 図版 52 005号陥穴 (南西から) 011号陥穴
(南西から) 012号陥穴 (南西から)
013号陥穴 (北から) 037号陥穴 (北
西から) 040号陥穴 (北東から)
- 図版 53 第1石鏃製作跡遺物出土状況 (北から)
第2～7石鏃製作跡遺物出土状況 (北
から) 第8石鏃製作跡遺物出土状況
(東から)
- 図版 54 第9石鏃製作跡遺物出土状況 (西から)
第10石鏃製作跡遺物出土状況 (北から)
第11石鏃製作跡遺物出土状況 (北から)
- 図版 55 第1石鏃製作跡出土遺物
- 図版 56 第2石鏃製作跡出土遺物 第3石鏃製
作跡出土遺物 第4石鏃製作跡出土遺
物 (1)
- 図版 57 第4石鏃製作跡出土遺物 (2) 第5石
鏃製作跡出土遺物 第6石鏃製作跡出
土遺物
- 図版 58 第7石鏃製作跡出土遺物 第8石鏃製
作跡出土遺物 第9石鏃製作跡出土遺
物 第10石鏃製作跡出土遺物
- 図版 59 第11石鏃製作跡出土遺物 グリッド出
土遺物 (1)
- 図版 60 グリッド出土遺物 (2)
- 図版 61 グリッド出土遺物 (3)
- 図版 62 グリッド出土遺物 (4)
- 図版 63 014号住居跡全景 (東から) 014号住
居跡遺物出土状況 (東から) 015号住
居跡全景 (東から)
- 図版 64 016号住居跡全景 (北東から) 019号
住居跡全景 (東から)
- 図版 65 020号住居跡全景 (南東から) 021号
住居跡全景 (東から) 022号住居跡全

- 景（東から）
- 図版 66 023号住居跡全景（東から） 024号住居跡全景（東から） 025号住居跡全景（東から）
- 図版 67 026号住居跡全景（東から） 026号住居跡貯蔵穴部分（東から） 026号住居跡遺物出土状況（上・右）（西から）
- 図版 68 027号住居跡全景（東から） 027号住居跡遺物出土状況（東から） 027号住居跡遺物出土状況（西から） 028号住居跡全景（左）（南東から） 028号住居跡遺物出土状況（北西から） 028号住居跡炭化材出土状況（下）（南東から）
- 図版 69 029号住居跡全景（北から） 030号住居跡全景（南東から） 030号住居跡遺物出土状況（北西から） 030号住居跡遺物出土状況（北西から） 030号住居跡遺物出土状況（西から）
- 図版 70 031号住居跡全景（北東から） 032号住居跡全景（南西から）
- 図版 71 032号住居跡遺物出土状況（南西から） 032号住居跡遺物出土状況（南東から） 032号住居跡遺物出土状況（南から） 032号住居跡壁貯蔵穴（北西から） 032号住居跡炭化材出土状況（南西から）
- 図版 72 033号住居跡全景（西から） 033号住居跡遺物出土状況（左）（北西から） 034号住居跡全景（北から） 034号住居跡遺物出土状況（下）（東から） 貯蔵穴（南から）
- 図版 73 035号住居跡全景（東から） 035号住居跡遺物出土状況（東から） 035号住居跡遺物出土状況（南西から） 035号住居跡壁貯蔵穴（西から） 035号住居跡遺物出土状況（南から）
- 図版 74 036号住居跡全景（南西から） 036号住居跡遺物出土状況（南西から） 036号住居跡遺物出土状況（南東から）
- 図版 75 038号住居跡全景（北西から） 039号住居跡全景（南から）
- 図版 76 041号住居跡全景（南から） 041号住居跡遺物出土状況（東から） 041号住居跡遺物出土状況（南から）
- 図版 77 041号住居跡遺物出土状況（南から） 041号住居跡遺物出土状況（南西から） 041号住居跡炉跡（下）（東から） 041号住居跡遺物出土状況（下）（南東から）
- 図版 78 042号住居跡全景（南から） 042号住居跡遺物出土状況（南東から） 042号住居跡壁貯蔵穴（東から） 043号住居跡全景（左）（東から） 043号住居跡遺物出土状況（下）（北東から）
- 図版 79 044号住居跡全景（北東から） 045号住居跡全景（南東から）
- 図版 80 046号住居跡全景（北から） 046号住居跡遺物出土状況（西から）（東から） 047号住居跡全景（北から）
- 図版 81 048号住居跡全景（北から） 048号住居跡遺物出土状況（北東から） 049号住居跡及び008号炭窯全景（東から） 049号住居跡遺物出土状況（南から）
- 図版 82 050号住居跡全景（東から） 053号住居跡全景（東から）
- 図版 83 055号住居跡全景（北西から） 056号住居跡全景（東から） 056号住居跡遺物出土状況（南から）（西から）（南から）（南から）（北東から）（西から）
- 図版 84 057号住居跡全景（南東から） 057号住居跡遺物出土状況（東から）
- 図版 85 057号住居跡遺物出土状況（南西から） 057号住居跡遺物出土状況（右）（西から） 057号住居跡遺物出土状況（右・

- 下) (東から) (東から) (南から)
- 図版 86 058号住居跡全景 (東から) 059号住居跡全景 (東から) 059号住居跡遺物出土状況 (下) (南西から) (北東から)
- 図版 87 062号住居跡全景 (南東から) 062号住居跡遺物出土状況 (南から) 063号住居跡全景 (右) (北東から) 063号住居跡遺物出土状況 (下) (北西から)
- 図版 88 064号住居跡全景 (南から) 065~069号住居跡 (南西から) 065号住居跡全景 (南西から)
- 図版 89 066号住居跡全景 (南西から) 067号住居跡全景 (南西から) 068号住居跡全景 (東から)
- 図版 90 069号住居跡全景 (南東から) 070号住居跡全景 (南西から) 084号住居跡全景 (南から)
- 図版 91 085号住居跡全景 (南から) 087号住居跡全景 (南西から) 087号住居跡遺物出土状況 (南西から)
- 図版 92 088号住居跡全景 (北から) 088号住居跡遺物出土状況 (北から) 088号住居跡炉内遺物 (北から)
- 図版 93 089号住居跡全景 (南西から) 090号住居跡全景 (北西から) 090号住居跡遺物出土状況 (北西から)
- 図版 94 091号住居跡全景 (南東から) 092号住居跡全景 (南東から) 093号住居跡全景 (北西から)
- 図版 95 094号住居跡全景 (南から) 095号住居跡全景 (北西から) 127号住居跡全景 (北東から)
- 図版 96 古墳時代住居跡出土遺物 (1) (014・015・021・026)
- 図版 97 古墳時代住居跡出土遺物 (2) (026)
- 図版 98 古墳時代住居跡出土遺物 (3) (027・028)
- 図版 99 古墳時代住居跡出土遺物 (4) (028・030)
- 図版 100 古墳時代住居跡出土遺物 (5) (031・032)
- 図版 101 古墳時代住居跡出土遺物 (6) (032)
- 図版 102 古墳時代住居跡出土遺物 (7) (032・033)
- 図版 103 古墳時代住居跡出土遺物 (8) (034・035)
- 図版 104 古墳時代住居跡出土遺物 (9) (035・036)
- 図版 105 古墳時代住居跡出土遺物 (10) (038・039)
- 図版 106 古墳時代住居跡出土遺物 (11) (041)
- 図版 107 古墳時代住居跡出土遺物 (12) (041)
- 図版 108 古墳時代住居跡出土遺物 (13) (041)
- 図版 109 古墳時代住居跡出土遺物 (14) (042・043)
- 図版 110 古墳時代住居跡出土遺物 (15) (044・045)
- 図版 111 古墳時代住居跡出土遺物 (16) (045)
- 図版 112 古墳時代住居跡出土遺物 (17) (045・046)
- 図版 113 古墳時代住居跡出土遺物 (18) (046・047・048・049)
- 図版 114 古墳時代住居跡出土遺物 (19) (049・053・055)
- 図版 115 古墳時代住居跡出土遺物 (20) (055・056)
- 図版 116 古墳時代住居跡出土遺物 (21) (056)
- 図版 117 古墳時代住居跡出土遺物 (22) (056・057)
- 図版 118 古墳時代住居跡出土遺物 (23) (057)
- 図版 119 古墳時代住居跡出土遺物 (24) (057)
- 図版 120 古墳時代住居跡出土遺物 (25) (057)
- 図版 121 古墳時代住居跡出土遺物 (26) (057・059)

- 図版 122 古墳時代住居跡出土遺物 (27) (059・062・063)
- 図版 123 古墳時代住居跡出土遺物 (28) (085・087・088・089・090)
- 図版 124 古墳時代住居跡出土遺物 (29) (090)
- 図版 125 古墳時代住居跡出土遺物 (30) (090・094) 及びグリッド出土古墳時代遺物
- 図版 126 炭窯 (1) (004・006・007・009・010・078)
- 図版 127 炭窯 (2) (079・080・081・082・083・097・121・122)
- 図版 128 001号溝 (東から) 002号溝 (北東から) 003号溝 (西から)
- 図版 129 土坑 (017・051・052・054・074・098・101・123)
- 図版 130 粘土採掘跡 (北から)

I はじめに

1 調査の経緯と経過

一本桜南遺跡の調査は、住宅・都市整備公団の委託により、千葉北部地区新住宅市街地開発事業に伴い実施された。調査対象面積は60,000㎡である。

発掘調査は昭和61・62年度の2か年にわたって行われた。

昭和61年度は、上下層の確認調査及び本調査を実施した。上層は、確認調査が6,000㎡/60,000㎡、本調査が本調査決定面積30,000㎡の内の18,000㎡である。下層は、確認調査が912㎡/22,800㎡、本調査が確認調査面積の内の1,820㎡である。

昭和62年度は上層の本調査及び下層の確認・本調査を実施した。上層は、本調査が12,000㎡、下層は、確認調査が1,840㎡/37,200㎡、本調査が6,084㎡である。

整理作業は平成4年度から平成7年度に実施し、報告書の刊行は平成9年度に実施した。

発掘調査及び整理作業の担当者は次の通りである。

昭和61年度 発掘調査

調査期間 昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

調査担当 調査部長 鈴木道之助 部長補佐 岡川宏道 班長 矢戸三男
主任調査研究員 及川淳一 調査研究員 澤野 弘

昭和62年度 発掘調査

調査期間 昭和62年4月1日～昭和63年3月25日

調査担当 調査部長 堀部昭夫 部長補佐 古内 茂 班長 小宮 孟
主任調査研究員 郷堀英司 調査研究員 落合章雄

平成4年度 整理作業

整理内容 水洗・注記から復元まで

整理担当 調査部長 天野 努 部長補佐 佐久間豊 深澤克友 班長 田坂 浩
班長代理 高田 博 主任技師 郷堀英司 技師 落合章雄

平成5年度 整理作業

整理内容 実測からトレースまで

整理担当 調査研究部長 高木博彦 印西調査事務所長 田坂 浩 副所長 及川淳一
主任技師 郷堀英司 技師 落合章雄

平成6年度 整理作業

整理内容 挿図・図版作成から原稿執筆の一部まで

整理担当 調査部長 西山太郎 印西調査事務所長 谷 旬 副所長 及川淳一
主任技師 郷堀英司 落合章雄

平成7年度 整理作業

整理内容 原稿執筆

整理担当 調査部長 西山太郎 印西調査事務所長 谷 旬 副所長 雨宮龍太郎
主任技師 落合章雄

2 遺跡の位置と環境

一本桜南遺跡(1)は印旛郡白井町大字十余一字一本桜52-8-3ほかに所在し、白井町の東端部、印西市と境を接している。現在は、千葉ニュータウンの造成が進み、住宅・都市整備公団北総・公団線千葉ニュータウン中央駅の北西約1kmの地区である。周辺は印西市木刈六丁目、小倉台二丁目・三丁目など住宅街及び学校になっている。周辺にも千葉ニュータウン造成に伴って調査された遺跡が所在する。なお、遺跡名(番号)の番号は第1・2図の番号である。

一本桜南遺跡の近隣では次の遺跡が発掘調査されている。本遺跡北側には、現在の印西市木刈五丁目一本桜遺跡(2)¹⁾、同木刈四丁目木刈峠遺跡(3)²⁾が所在し、発掘調査が行われた。東側では、現在の印西市小倉台二丁目の南に隣接して榎峠遺跡(4)³⁾、高根北遺跡(5)⁴⁾が所在し、発掘調査が行われた。また、同小倉台四丁目には大塚塚群(6)⁵⁾、同小倉台二丁目には大塚前遺跡(7)⁶⁾が所在し、発掘調査が行われた。南東の千葉ニュータウン中央駅付近には、東側の線路敷地部分に南西ヶ作遺跡(8)⁷⁾、南側に猿塚遺跡(9)⁸⁾、大野庚申塚(10)⁹⁾、庚申塚(11)¹⁰⁾が所在し、発掘調査が行われた。一本桜南遺跡をはじめ、これらの遺跡は、現在、住宅街、駅、線路などになり、発掘当時の地形はほとんど残っていない。

一本桜南遺跡は、地形的には印旛沼の低地と手賀沼の低地に挟まれた北総台地にあり、印旛沼水系の神崎川の支流が開析した小支谷最奥部付近の北東側舌状台地上に位置する。現在は宅地の造成が進み、遺跡南西部分の小支谷はほとんど埋められている。一本桜南遺跡が立地する小支谷に沿った舌状台地上には多くの遺跡が位置している。この小支谷は印旛沼の水系の神崎川と新川との合流部分の北側に開口し、開口部東側の舌状台地上には、千葉ニュータウン造成に関連して発掘調査された船尾町田遺跡(12)¹¹⁾が位置している。小支谷には船尾町田遺跡の北側で東側から小支谷が合流している。合流部分の北側の舌状台地上には千葉ニュータウン造成に伴って発掘調査された船尾白幡遺跡(13)¹²⁾が位置する。一本桜南遺跡が臨む小支谷は、この合流部からほぼ真北に向かっている。北に向かう小支谷の西側の舌状台地上には千葉ニュータウン造成に関連して発掘調査された鳴神山遺跡(14)¹³⁾が位置する。小支谷は現在の住宅・都市整備公団北総・公団線付近で、北、東、西の3方向に分かれる。西に向かう小支谷の北側の舌状台地上、言い換えれば、南側に小支谷を望む舌状台地上に、一本桜南遺跡をはじめ、高根北遺跡、榎峠遺跡、一本桜遺跡が位置する。この小支谷は一本桜南遺跡付近でやや北寄りになり、最奥部に至る。

小支谷の分岐部分の東側舌状台地上に南西ヶ作遺跡が位置する。分岐部分から北に向かう小支谷の最奥部の台地上には千葉ニュータウン造成に伴って発掘調査された並塚塚群(15)¹⁴⁾、大木戸根十三塚(16)¹⁵⁾が位置する。

千葉ニュータウン造成に伴って発掘調査された遺跡の中で一本桜南遺跡と同様の内容の遺跡に泉遺跡(17)¹⁶⁾、及び泉北側第2遺跡(18)¹⁷⁾がある。一本桜南遺跡の北東約3kmの所にあり、北側の手賀沼水系に含まれる小支谷の東側舌状台地上に位置する。両遺跡とも、旧石器時代石器ブロック、縄文時代早期の包含層を伴う縄文時代早期炉穴群、古墳時代初頭から前期の集落跡が検出されている。遺跡を分けているのは台地への入り込みがごく浅い谷であるので、同一の集落跡と捉えることができる。両遺跡が立地する舌状



第2図一遺跡位置図(昭和58年版)

台地が臨む小支谷は、手賀沼に流入する亀成川の小支流が開析した小支谷で、北に向かって開口し、やや蛇行しながら南に伸びる。最奥部は一本桜南遺跡が立地する小支谷の北に分岐した谷の最奥部と一致する。両側からの谷のため、最奥部は台地が狭く、尾根状になり、その上に並塚塚群、大木戸根十三塚が立地する。

以上のほかに、一本桜南遺跡周辺の千葉ニュータウン造成地区内には次の遺跡が所在し発掘調査が行われている。印旛沼水系の低地に臨む台地上には、西から清戸Ⅰ遺跡（19）¹⁸⁾、清戸Ⅱ遺跡（20）¹⁹⁾、谷田木曾地遺跡（21）²⁰⁾、北の台遺跡（22）²¹⁾、向新田遺跡（23）²²⁾、白井谷奥遺跡（24）²³⁾が所在する。手賀沼水系に臨む台地上には、泉北側第2遺跡周辺に、泉北側第1遺跡（25）²⁴⁾、泉北側第3遺跡（26）²⁵⁾、大森割野遺跡（27）²⁶⁾、割野所在野馬土手（28）²⁷⁾、鹿黒遺跡（29）²⁸⁾、古新田南遺跡（30）²⁹⁾が所在する。なお、東京電機大学西隣に位置する武西百庚申遺跡（31）³⁰⁾は現状保存される。

千葉ニュータウン造成地区外にも多くの遺跡が所在している。特に、印旛沼水系、手賀沼水系の小支谷に臨む舌状台地上に濃密な分布がみられる。

注)

1) 集落跡。縄文早・前・中期。

中山吉秀「4. 一本桜遺跡（CN401・403）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』財団法人千葉県都市公社 昭和49年

中山吉秀「1. 一本桜遺跡（CN402）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』財団法人千葉文化財センター 昭和51年

2) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文前・中・後期、平安。

鈴木道之助「3. 木刈峠遺跡（CN407）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』財団法人千葉県都市公社 昭和50年

3) 包蔵地。縄文早・前期。

鈴木道之助「5. 榎峠遺跡（CN404）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』財団法人千葉県都市公社 昭和49年

4) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文早・前期、平安。

中山吉秀ほか「1. 高根北遺跡（CN406）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』財団法人千葉県都市公社 昭和51年

5) 塚。中近世。

野村幸希「4. 大塚塚群（CN408）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』財団法人千葉県都市公社 昭和50年

6) 集落跡・寺院跡。奈良・平安、近世。

佐藤克巳「6. 大塚前遺跡（CN405）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』財団法人千葉県都市公社 昭和49年

7) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文早・中・後・晩期、奈良・平安、中世。一部報告書刊行

高木博彦「6. 南西ヶ作遺跡（CN702）」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』財団法人

- 人千葉県都市公社 昭和51年
- 8) 包蔵地。縄文中期、近世。
中山吉秀「6. 猿塚遺跡 (CN501)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅲ』 財団法人千葉県都市公社 昭和50年
 - 9) 塚。近世
中山吉秀「7. 大野庚申塚 (CN502)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅲ』 財団法人千葉県都市公社 昭和50年
 - 10) 塚。中近世。報告書未刊。
 - 11) 集落跡・古墳。弥生後期、古墳前・中期。
田坂 浩ほか「第2篇 船尾町田遺跡 (CN709)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅷ』 財団法人千葉文化財センター 昭和59年
 - 12) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文早・前・後期、弥生後期、古墳後期、奈良・平安。一部報告書刊行
古内 茂ほか「7. 船尾白幡遺跡 (CN705)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 V』 財団法人千葉文化財センター 昭和51年
 - 13) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文早・前・中期、弥生後期、古墳前・後期、奈良・平安、近世。報告書未刊。
 - 14) 塚。中近世。
中山吉秀「5. 並塚塚群 (CN409)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅲ』 財団法人千葉県都市公社 昭和50年
 - 15) 塚。中近世。
及川淳一ほか「Ⅱ. 大木戸根十三塚 (CN412)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅸ』 財団法人千葉文化財センター 平成元年
 - 16) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文早・中期、古墳。一部報告書刊行。千葉県埋蔵文化財分布地図 (1) (平成9年) では新堀遺跡に含まれる。
橋本勝雄ほか「Ⅲ. 泉遺跡 (CN104)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅸ』 財団法人千葉文化財センター 平成元年
 - 17) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文早・前・中・後期、古墳前期。千葉県埋蔵文化財分布地図 (1) (平成9年) では新山北遺跡に含まれる。
高橋博文ほか 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 X』 財団法人千葉文化財センター 平成3年
 - 18) 包蔵地。縄文早期、弥生後期、古墳後期、奈良・平安。
中山吉秀「2. 清戸遺跡 (CN410)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 V』 財団法人千葉文化財センター 昭和51年
 - 19) 包蔵地、集落跡、塚、牧跡。旧石器、縄文、古墳前期、奈良・平安。報告書未刊。
 - 20) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文中期、弥生後期、古墳前期、奈良・平安。
及川淳一ほか「第3篇 谷田木曾地遺跡 (CN411)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅷ』 財団法人千葉文化財センター 昭和59年

- 21) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文中期、古墳前期、奈良・平安。
中山吉秀「8. 北の台遺跡 (CN503)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅲ』 財団法人
千葉県都市公社 昭和50年
- 22) 包蔵地・集落跡。旧石器、縄文早・前・中期、弥生後期、古墳後期、奈良・平安。報告書未刊。
- 23) 集落跡。奈良・平安、中世。報告書未刊。
- 24) 包蔵地。縄文早・中・後期。未調査。
- 25) 包蔵地。縄文早・中・後期。未調査。
- 26) 牧跡。近世。報告書未刊。千葉県埋蔵文化財分布地図 (1) (平成9年) では割野野馬土手
- 27) 包蔵地。縄文早・中・後期、近世。報告書未刊。
- 28) 包蔵地。旧石器、縄文前・中・後期。
橋本勝雄「Ⅳ. 鹿黒遺跡 (CN615)」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 Ⅸ』 財団法人千
葉文化財センター 平成元年
- 29) 包蔵地。旧石器、縄文早期。報告書未刊。
- 30) 石塔列。中近世。未調査。

参考文献

千葉県埋蔵文化財分布地図 (1) - 東葛飾・印旛地区 (改訂版) - 千葉県教育委員会 平成9年

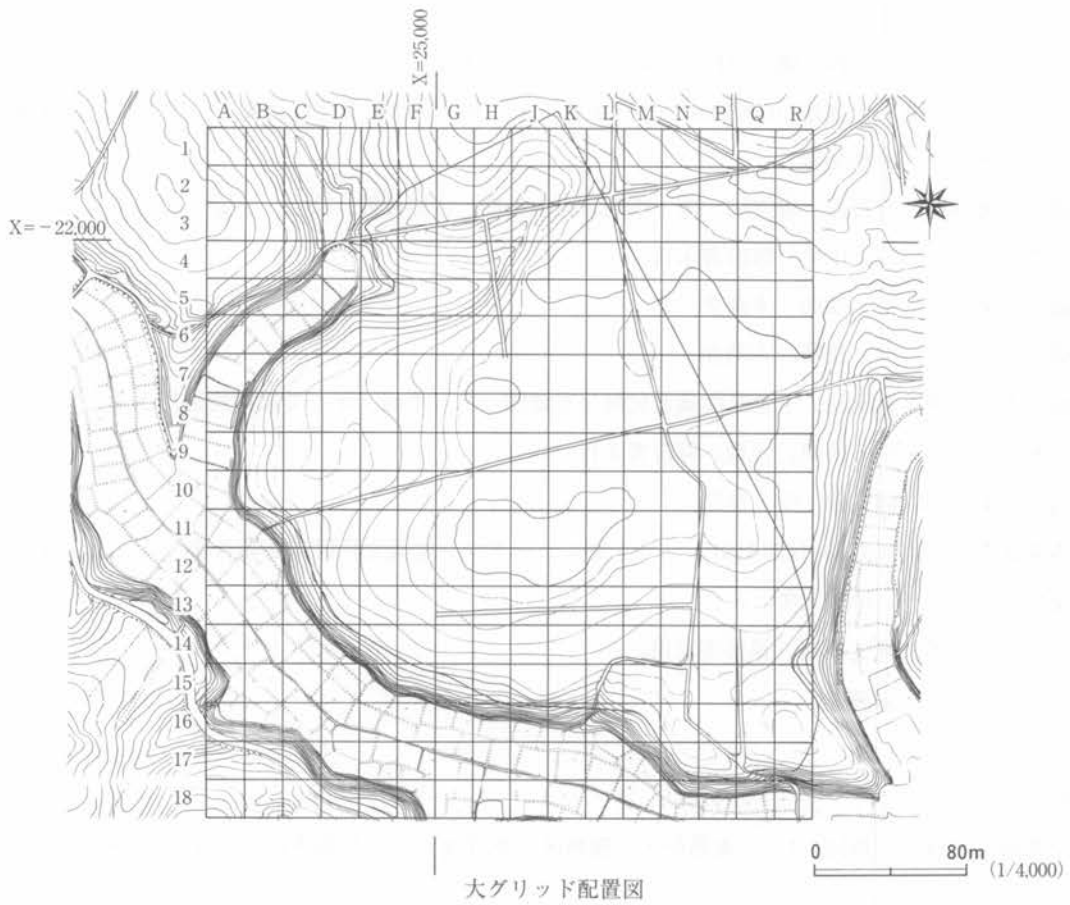
3 調査の方法と概要

発掘調査を始めるに当たり、調査対象区域を公共座標に合わせて、20m×20mの大グリッドを設定した。さらにその大グリッド内を2m×2mに分割し、100個の小グリッドとした。大グリッドは西から東へA、B、C、……、北から南へ1、2、3、と記号を付け、小グリッドについては北西隅を起点に00、01……98、99と番号を付け、これらを組み合わせて呼称することにした。

調査は、上層確認調査→上層本調査→下層確認調査→下層本調査の順で実施した。上層確認調査については、調査対象区域全体に、公共座標に合わせて、主に2m×4mのグリッドを設定し (第4図)、遺構検出グリッドを随時拡張して、調査対象面積の10%を調査し、遺構と遺物の分布状況を確認した。下層確認調査については、調査対象区域全体に、公共座標に合わせて、2m×2mのグリッドを設定し (第4図)、石器検出グリッドを随時拡張して、調査対象面積の4%を調査し、遺物の分布状況を確認した。

遺構番号は、年度、遺構の種類に関係なく通し番号とした。本書でしている遺構番号は発掘調査時の番号である。

検出された主な遺構は、旧石器時代石器ブロック31か所、縄文時代早期竪穴住居跡3軒、縄文時代早期炉穴16基、縄文時代早期陥穴6基、古墳時代前期竪穴住居跡60軒、炭窯15基、土坑21基、溝3条、粘土採掘跡1か所である。

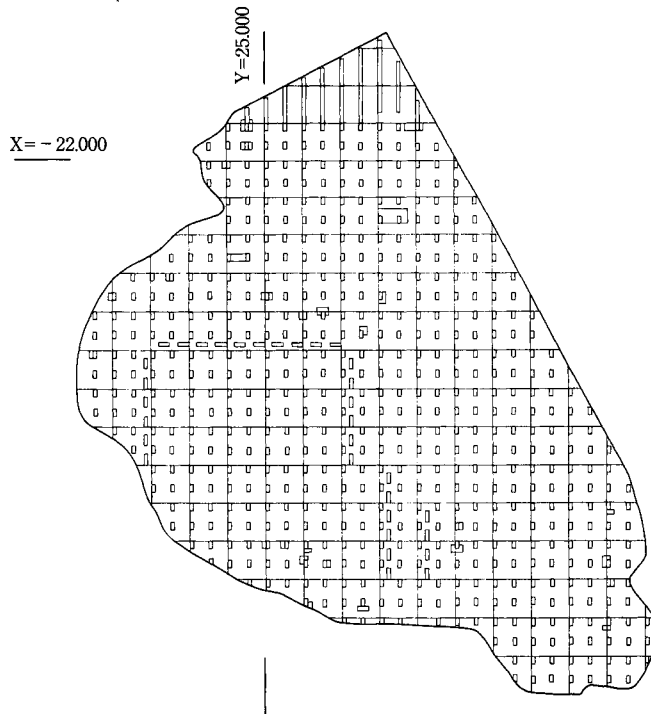


00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

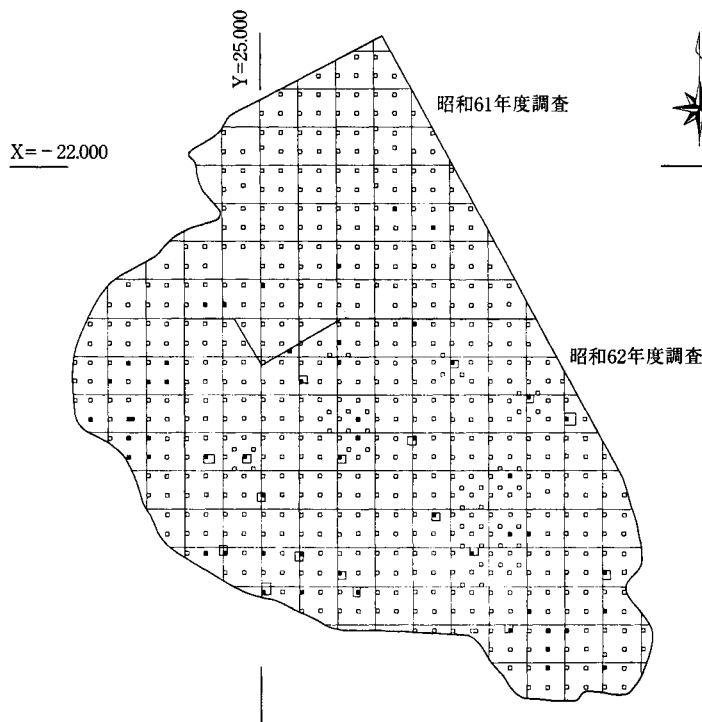
小グリッド分割図



第3図 グリッド名称図

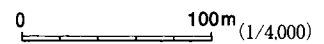


上層確認グリッド配置図

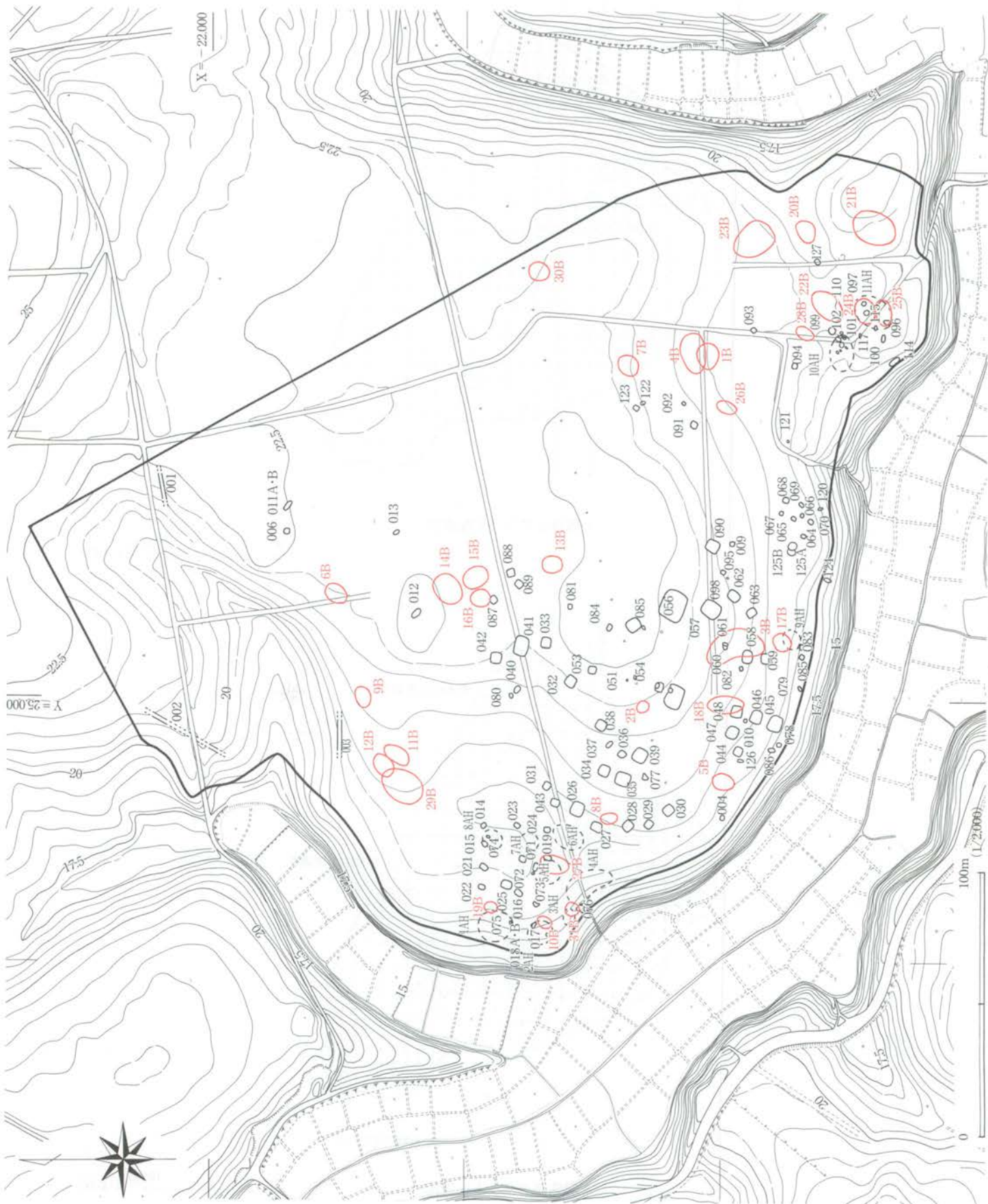


▪ 石器検出グリッド

下層確認グリッド配置図



第4図 確認調査グリッド配置図



第5図 遺構配置図

Ⅱ 遺構と遺物

1 旧石器時代

今回の一本桜南遺跡の調査では、合計31地点の石器集中地点が検出された。これらのブロックは調査区のほぼ全域に分布しており、このなかでも特に調査区南側の台地縁辺部に集中する傾向がある。また、これらのブロックは、立川ローム層の下層であるⅨ層からソフトローム層までほぼ全層にそれぞれ所属し、石器形態や石器組成、また石器に使用される石材の違いから、計10層の文化層に細分することができた。

なお、調査区の基本的な層序は次のとおりである。

一本桜南遺跡は印旛沼に流入する神崎川の支流によって開析された、西にむかって延びる台地の南側の緩斜面部に位置する。このため調査区を南北に縦断する土層断面のようすは、調査区北側の標高23m前後を最高点とし、南にむかって緩やかに堆積している状況を示す。

下総台地における立川ローム層の細分は、武蔵野台地の立川ローム層に対比し、現在の層序区分に至っている。しかし、立川ローム層を形成した要因である火山灰の供給源、関東平野をとりまくように位置する箱根、富士、浅間などから距離をおくため、相模野台地はもとより武蔵野台地でみられるような良好な堆積状態ではなく、また同じ下総台地のなかでも比較的な差は大きい。よって現時点では、ある程度立川ローム層の分層が確立してはいるが、まだ南関東の他の台地との比較、および下総台地の中での相互対比により検討していかなければならない点がある。特に鍵層となるATパミスを含むⅥ層から上位における層序区分、および第2黒色帯については未だ検討しなければならない点がある。

先述したとおり、南関東のなかでも火山灰の供給源から距離をおく下総台地では、火山灰の降灰量が少ないため結果として火山灰の堆積が薄く、よってローム層下の粘土層または地表面からの影響が大きいといえる。このためATパミスを含む層であるⅥ層より上部の層については、ローム層がソフト化されて形成された層、いわば自然の攪乱層によって分層が非常に困難である。ソフトローム層の厚さは武蔵野台地と比較しても大きな差はなく、言い換えればソフトローム層が以下の層に及ぼす影響の度合いには差はなく、よって絶対的に火山灰の堆積の薄い下総台地では、ソフトローム層中に第1黒色帯および第1黒色帯の上部に位置する層が取り込まれた状態となっている。そのためか下総台地では、Ⅳ層より上部に所属する異なる文化層のブロックが同一平面上に位置していた場合、各ブロックの遺物の垂直分布にはほとんど差は認められず、すべてソフトローム層中の出土となってしまう。よって石材が異なるなどの可視的な差が認められない限り、ナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石刃が共伴しているように受け取られてしまう危険性が大きい。

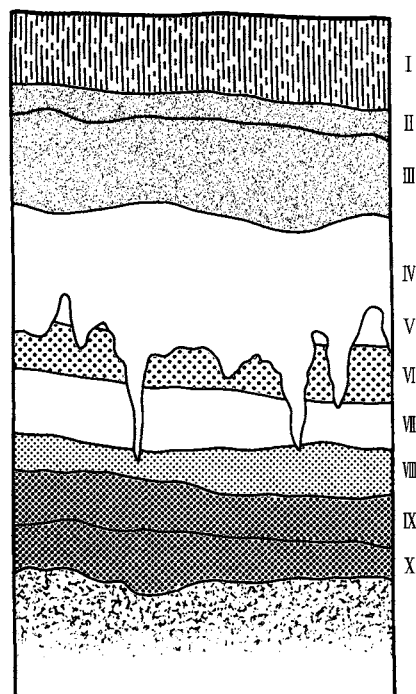
第2黒色帯であるⅦ層からⅨ層は、通常Ⅶ層とされる橙褐色の間層により上部と下部に分層が可能である。一本桜南遺跡においてもⅦ層がブロック状あるいは完全な一枚の層として確認できる。最近の発掘調査の成果として、下総台地においてこの層からのブロックの検出事例が増加し、また層序区分についても、第2黒色帯下部にあたるⅨ層中にさらに間層が確認され、第2黒色帯下部をⅨa、Ⅸb、Ⅸcの3層に分層するという統一見解がなされつつあるが、下総台地では第2黒色帯下部を直視的観察により3層に分層可能な地域は限定され、むしろ不可能な地域が多い。もとより火山灰の供給源に近く下総台地よりも土層の堆積状態の良好な武蔵野台地においても、第2黒色帯下部が分層可能な地域はないに等しい。よって発掘調査時の直視的な土層観察を行う以上に、土層中の鉱物分析、また下総台地のみならず、他地域との検出

例の増加している資料の対比によりさらに検討を行う必要がある。

立川ローム層最下層に相当するⅩ層付近では、地域的もしくは遺跡が所在する台地の標高が低い場合、青灰色の粘土質の層が確認されることがある。一本桜南遺跡の調査範囲内でも標高19m前後の地点ではこの層が顕著に確認できた。この青灰色の層を武蔵野ローム層として分層する事例も少なくない。青灰色の色調を呈していなくても急に粘性を帯びる層があたった場合、やはり武蔵野ローム層とする例もみられるが、これは武蔵野ローム層ではなく、立川ローム層最下層が水の影響によって変化したものである。いわゆるロームのグライ化と呼ばれるものである。この層の具体的な生成要因は明らかではないが、海進・海退による水位の変化によるものか、あるいは下総台地のように立川ローム層直下に常総粘土層が位置している地域は、その影響によりこの現象が起こるとされている。現に一本桜南遺跡でも調査区南側の谷に面した付近では15cmほどの粘土層が確認できた。またⅨ層文化層に属する第1ブロックの石器はこの青灰色の層から出土しており、このブロック付近の土層の状況は、南にむかって緩やかな傾斜をもって堆積するが、この層の表面はほとんど標高を同じくし、拡張区南側では第2黒色帯がこの層に潜り込んでゆくような様子も確認できた。このことからこの青灰色の層は直接的な生成要因ではないが、風成層より水成層としての性格が強いといえる。

上記の問題点あるいは事例もふまえて、ただ単に色調による分層を行うのみでなく、スコリア、パミスの形状、含有量など基本層序の各層の特徴、そして上方あるいは下方に位置する層との相関関係をも念頭に入れて分層を行わなければならない。

以下に一本桜南遺跡の基本となる層序について説明を記す。



0 1 m (1/40)

- I層：黒色土層。表土層。
- II層：黒色土層。縄文時代遺物包含層。一本桜南遺跡では新期テフラ層は確認できなかった。
- III層：ソフトローム層。クラックが発達し、地点によってはⅨ層にまで及ぶ。
- IV層：明橙褐色土層。一本桜南遺跡では完全な一枚の層として確認できる例はなく、Ⅲ層のクラックの間に可視できる程度である。赤色スコリアを少量含み、堅緻である。
- V層：暗褐色土層。第1黒色帯に相当する。ローム層のクラックの間に部分的に観察できることが多く、一枚の層として確認できる地点は限定される。径1mm内の黒色、赤色スコリアを含み堅緻である。直視的観察として黒みを帯びるため分層したが、下位の層より色調がやや暗い程度であり、第2黒色帯のような明確な暗さではない。
- VI層：明るい黄褐色を呈する。この層全体にATパミスが拡散して混入している。土層面精査時の感触は明瞭である。台地縁辺部付近では、このATパミスが径1cmほどのブロックとなり確認される地点がみられた。

第6図 基本土層図

Ⅶ層：第2黒色帯上部に相当する。色調は明瞭な黒色ではなく、Ⅵ層から徐々に暗さを増す程度であり、むしろ漸移層的な感がある。径1.5mmほどの黒色、赤色スコリアを多く含み堅緻である。

Ⅷ層：第2黒色帯の間層に相当する。一本桜南遺跡では一枚の層として確認できる地点は限定され、ほとんどの地点では黒色帯のなかにブロック状に確認される。この層が確認できる地点は標高の高い平坦面ではなく、むしろ台地緩斜面部に層として確認される傾向がある。黒色、赤色スコリアは可視的にほとんどみられない。

Ⅸ層：第2黒色帯下部に相当する。径3mmほどの黒色、赤色スコリアを多く含み堅緻である。可視的にも黒色の度合いは大きく、Ⅶ層と比較するとかなり黒みを帯びている。一本桜南遺跡では一枚の層としてのみ分層が可能である。

X層：橙褐色土層。黒色、赤色スコリアは可視的に若干みられる程度で、Ⅸ層と比較するとその混入率には大きな差がある。緻密ではあるがやや軟弱な感がある。

ここでは検出した31ブロックについて、時期の最も古いⅨ層に属するブロックを第1ブロックとし、このブロックを基準に、それぞれの文化層に属するブロックについて便宜的に番号付けを行い、一本桜南遺跡における旧石器時代の様相を考えてみたい。

それぞれの文化層に属するブロック、および層序は次のとおりである。

第1文化層（Ⅸ層上位）

第1ブロック（13Nグリッド）、第2ブロック（12Fグリッド）

第2文化層（Ⅶ層下部）

第3ブロック（13G、14G、14Hグリッド）

第3文化層（Ⅶ層上部）

第4ブロック（13Nグリッド）、第5ブロック（14Eグリッド）、第6ブロック（6H、6Jグリッド）、第7ブロック（12Nグリッド）、第8ブロック（11D、12Dグリッド）

第4文化層（Ⅵ層）

第9ブロック（7F、7Gグリッド）、第10ブロック（10Bグリッド）

第5文化層（Ⅴ層）

第11ブロック（7E、8E、7F、8Fグリッド）、第12ブロック（7Eグリッド）

第6文化層（Ⅳ層下部）

第13ブロック（10Jグリッド）、第14ブロック（8H、9H、8J、9Jグリッド）、第15ブロック（9Jグリッド）、第16ブロック（9H、9Jグリッド）、第17ブロック（15Hグリッド）、第18ブロック（13F、14F、13G、14Gグリッド）、第19ブロック（9Cグリッド）、第20ブロック（15Q、15Rグリッド）

第7文化層（Ⅳ層上部）

第21ブロック（16Q、17Q、16R、17Rグリッド）

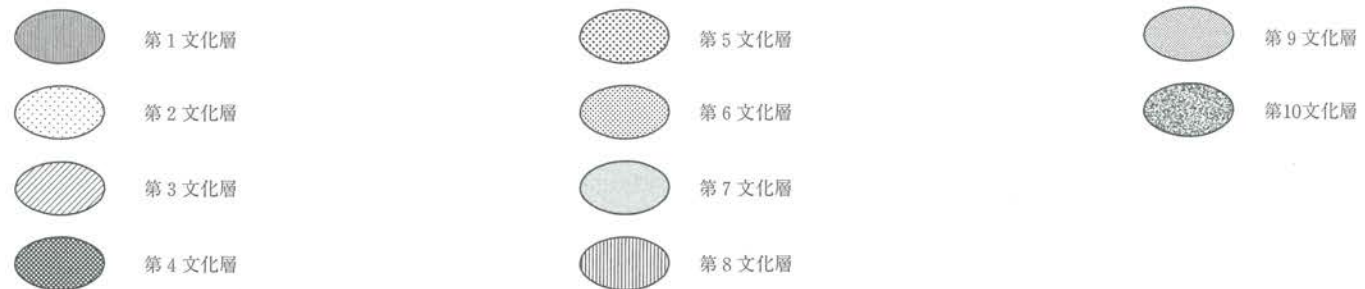
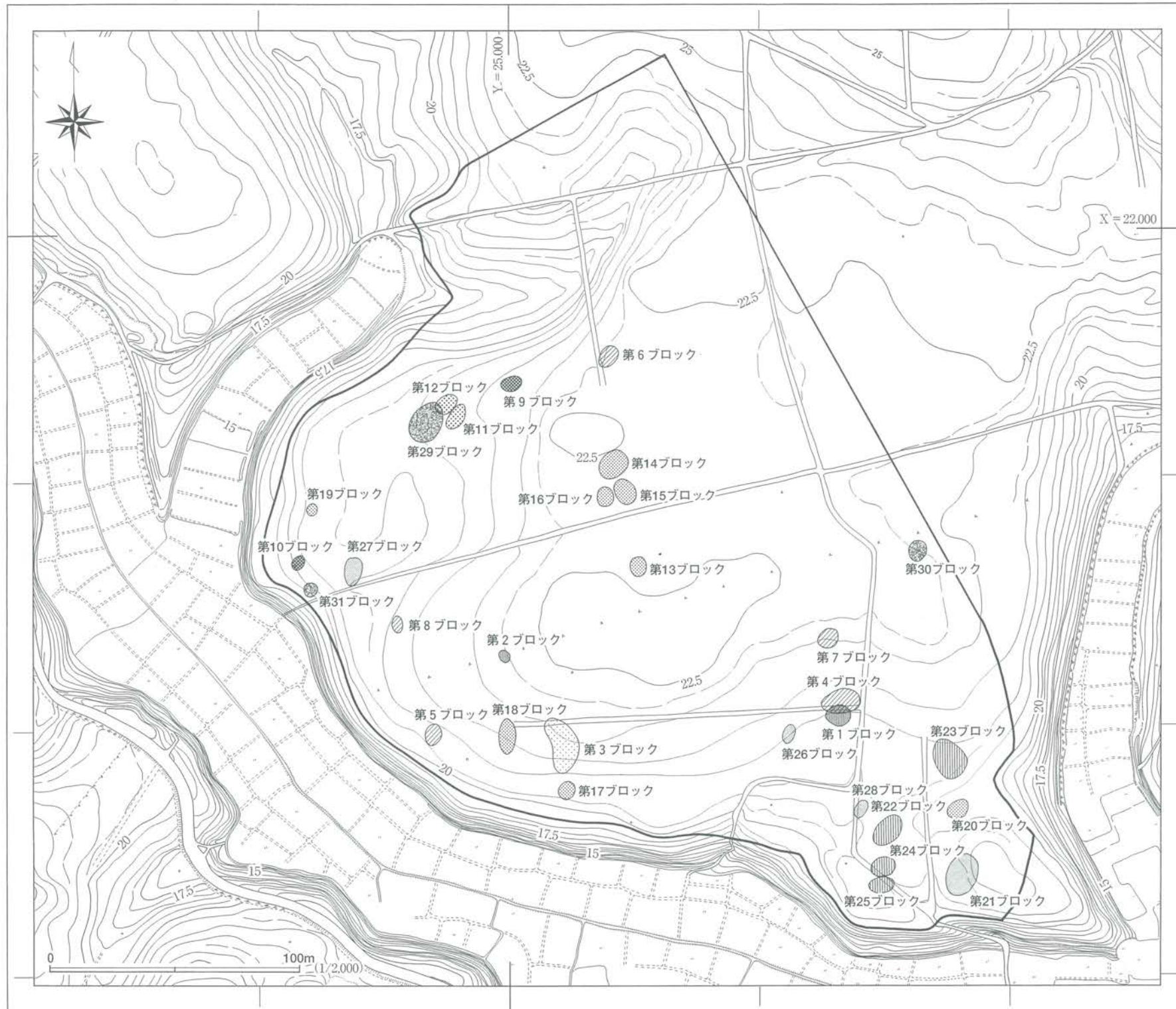
第8文化層（Ⅲ層下部）

第22ブロック（15P、16Pグリッド）、第23ブロック（14Q、15Q、14R、15Rグリッド）、第24ブロック（16Pグリッド）、第25ブロック（17Pグリッド）

第9文化層（Ⅲ層中）



第7図 遺跡土層断面図



第8図 旧石器ブロック分布図

第26ブロック (14Mグリッド)、第27ブロック (10C、11C、10D、11Dグリッド)、第28ブロック (15N、15Pグリッド)

第10文化層 (Ⅲ層中)

第29ブロック (7E、8Eグリッド)、第30ブロック (10Qグリッド)、第31ブロック (11B、11Cグリッド)

一本桜南遺跡で検出した、各ブロックを構成する石器の石材は多種多様であり、同一名称の石材でも文化層により色調や質感が異なるものが多い。ここではまとめて記述することが困難なため、各文化層の概要のところそれぞれ記述したい。

(1) 第1文化層

第1文化層は、一本桜南遺跡で検出した石器集中地点のうち、最も古い段階に属するブロックであり、出土層位はⅨ層に属する。第1ブロックと第2ブロックの計2ブロックがこの文化層に属する。

ブロックを構成する石器のなかには、文化層を特徴づける定型的な石器は含まれないが、使用される石材、また剥片剥離技術および作出された剥片の形状から、台形石器を石器組成に含むと考えられる。

使用される石材の種類および特徴は以下のとおりである。

頁岩 A：色調は緑色または薄い青緑色を呈する。青灰色のチャートによくみられる節理状のものがみられる。きめは細かいが質感に反し光沢があまりない。

頁岩 B：色調は原石面が赤みを帯びた暗褐色、内面は原石面より若干色が薄くなる感がある。きめは細かく光沢があり、質感に反し持った感じが重い。

砂岩：色調はやや青みがかった明灰色を呈し、非常に堅い。岩石を構成する粒子は均一に細かく、おおむね0.5mmから1.0mmである。質感よりも持った感じが重い。

チャート：色調は青灰色を呈するが、節理はみられない。緻密であり光沢がある。

流紋岩：色調は原石面は淡黄褐色、内面は白色を呈する。緻密であるが、所々にカンラン石、石英の結晶が混在する。質感に反し持った感じが軽い。

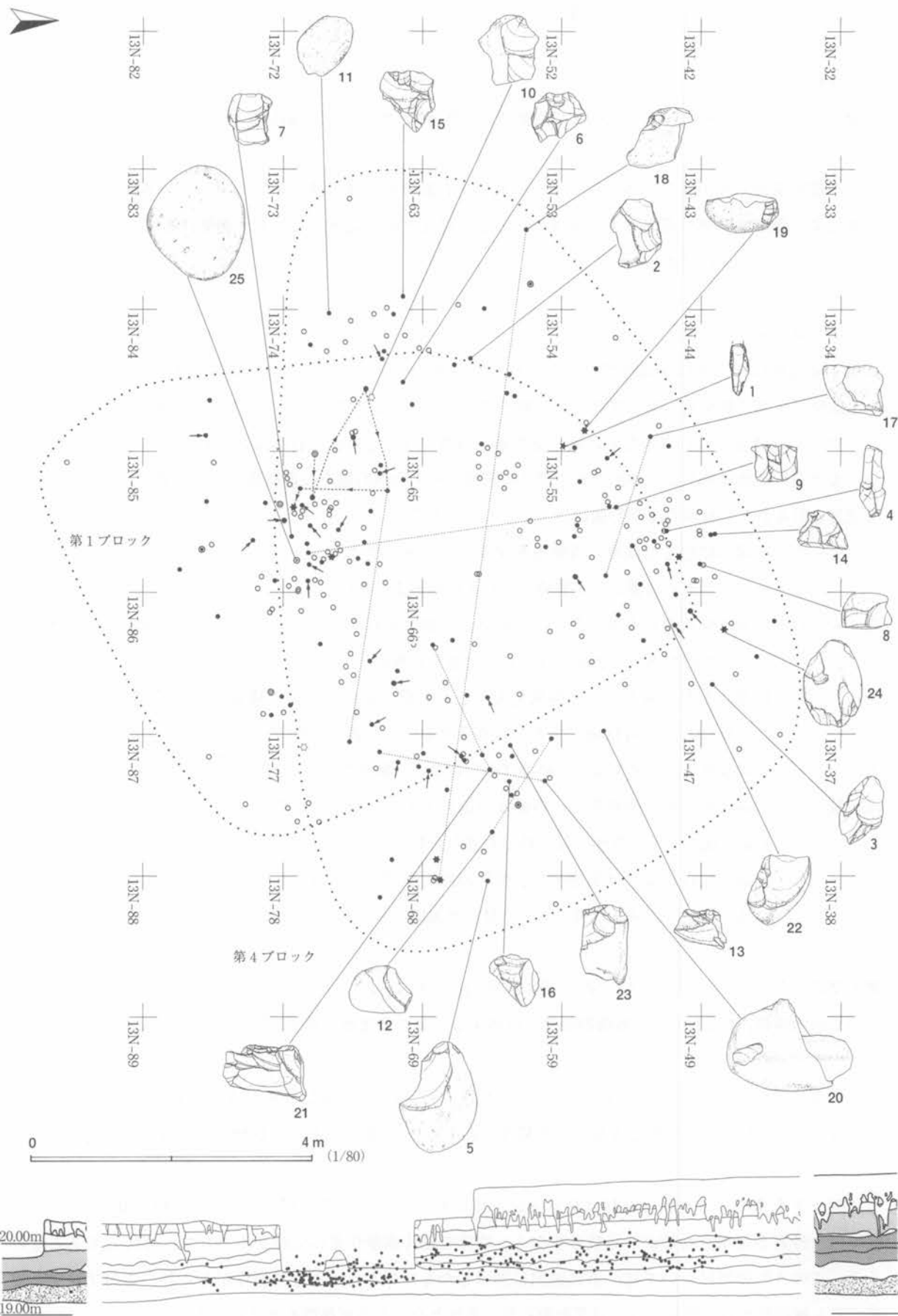
メノウ：色調は乳白色または半透明で、橙色の箇所が部分的にみられる。旧石器時代に限らず、下総台地で出土するメノウ製の石器石材に普遍的にみられるものである。

第1ブロック (第9～15図 第1・2表 図版4・5・16～18)

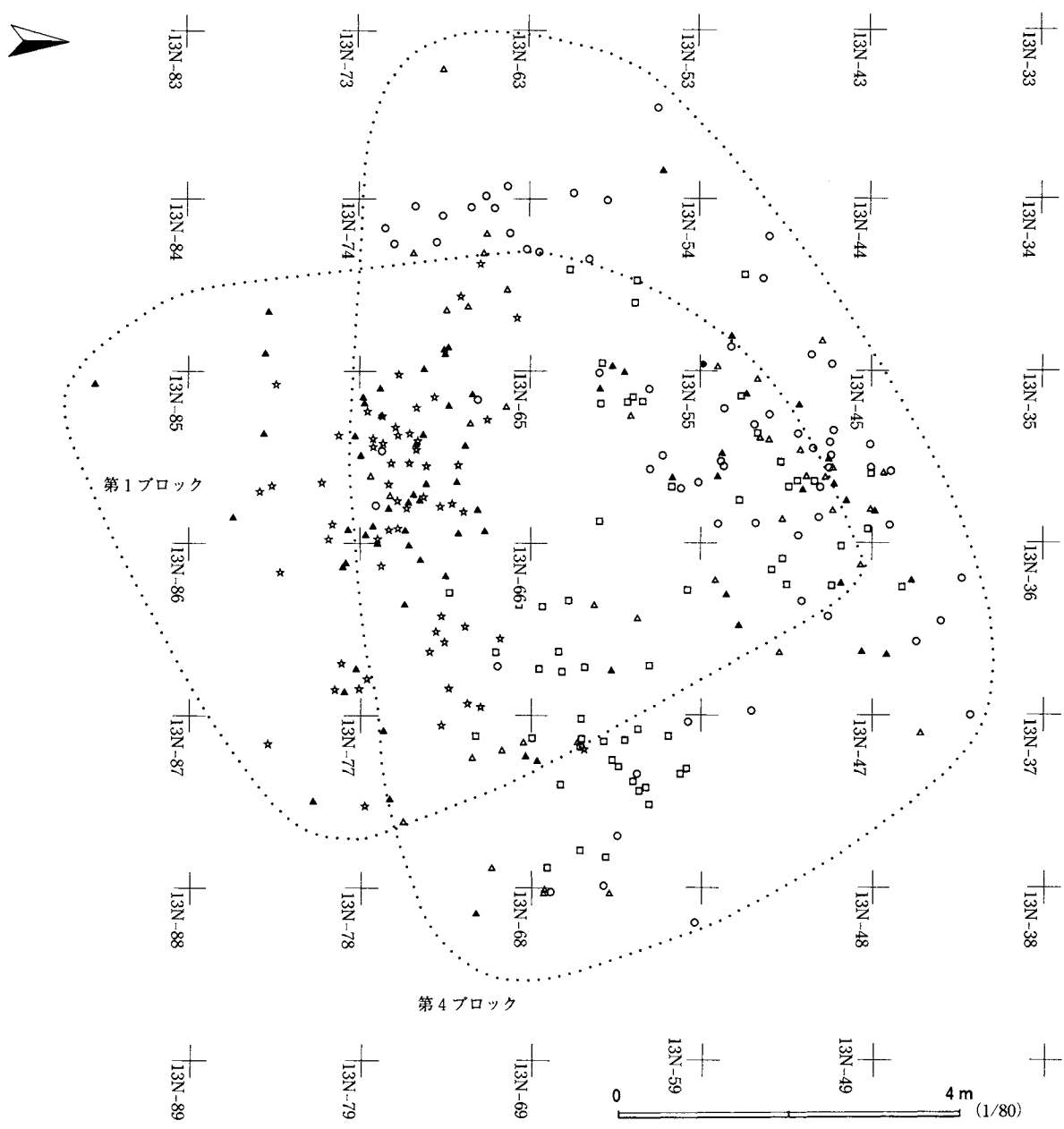
調査区の南側、標高21mの台地緩斜面部に位置する。第3文化層に属する第4ブロックと一部分布が重なる。

石器は長径8mほどの不定形円状に分布しており、特に円の中心部に分布の密な箇所が見受けられる。この部分の出土層位は青灰色層とⅩ層との境界部付近であり、Ⅹ層の上面からⅨ層の最下部に属すると考えられる。

ブロックを構成する石器の石材は頁岩Aが主体であり、全体の85%を占める。他に頁岩B、チャート、流紋岩、砂岩が使用されるが、点数も少なく、明確な剥片剥離作業の痕跡がみられず、客体的であるといえる。このうち砂岩については、第15図24に図示したもののよう大型の剥片がみられ、このブロックが属するⅩ層段階の石器組成から、局部磨製石斧の素材となりうる可能性も考えられる。



第9図 第1・4ブロック器種別石器分布図



第10図 第1・4ブロック石材別石器分布図

第1表 第1ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	撞 器	削 器	とじ す た し	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フルツ	J・ フルツ	剥 片	砕 片	剥 利 石	片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
頁岩 A	-	-	-	-	1 0.9%	-	-	-	-	-	-	1 0.9%	2 1.8%	29 25.8%	62 55.3%	1 0.9%	1 0.9%	-	-	-	-	97 86.5%
頁岩 B	-	-	-	-	1 0.9%	-	-	-	-	-	-	-	1 0.9%	3 2.7%	4 3.6%	-	-	1 0.9%	-	-	-	10 9.0%
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4 3.6%
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.9%	-	-	-	-	-	-	-	4 3.6%
計	-	-	-	-	2 1.8%	-	-	-	-	-	-	1 0.9%	3 2.7%	33 29.4%	66 58.9%	1 0.9%	2 1.8%	-	-	-	-	112 100.0%

頁岩Aについては接合資料に乏しいが、まとまった点数が出土している剥片、碎片、石核から剥片剥離技術を復元することは容易である。また、頁岩Bについては、ほぼ原石の形状と大きさが復元できる接合資料となったが、頁岩Aとは剥片剥離技術に違いがあり、同一のブロック内で、異なる剥片剥離技術が存在することが明確である。頁岩Aは球体または立方体に近い形状の原石を母岩とし、絶えず石核が立方体になるように意識して剥片を作出していることが窺える。このため打面の位置を頻繁に換え、剥片を作出することで打面再生を兼ねている感がある。結果として薄い作りの横長の小型不定形剥片を得ることが目的であろう。頁岩A製の剥片のなかには、長さ5cmを越える大型の剥片もみられるが、これらは一様に厚みがあり、部分的に原石面がみられることから、剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片であると考えられる。これに対し頁岩Bでは、扁平礫を原石として使用し、原石の縁辺部の一端を打面として設定し、連続して小型の不定形剥片を作出している。打撃の方向は両側の偏平面にむかって施され、石斧の刃部を作出するように行われている。剥片剥離はこの打撃の方向のみに留められるが、他の遺跡で検出されたX層段階に属するブロックの剥片剥離技術から推測すると、この後も求心的に剥片が作出されるであろう可能性も考えられる。

出土遺物

1～14は頁岩A製の剥片である。このうち1～6、8は、剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片である。

1は表面の一部に原石面を残し、原石面付近の打撃の方向は上下両端から加えられている。またこれらの剥離より古い大きな剥離痕がみられるが、剥片剥離工程の最も初期の段階に作出されたものと考えられ、おそらく石核整形を目的として打撃を加えた結果作出された剥離であろう。

2は部厚な剥片で、やはり表面にみられる剥離の打撃の方向は一定ではなく、頻繁に打面を転移していることが明確に理解できる。

3はやや小型であり、表面のほとんどを原石面が占める。石核整形剥片と考えられる。

4はやや大型であるが、薄い剥片で石器素材となりうる剥片である。

5は打撃の際に打点から2分したものであり、部厚な縦横の比がほぼ同一の剥片となると考えられる。

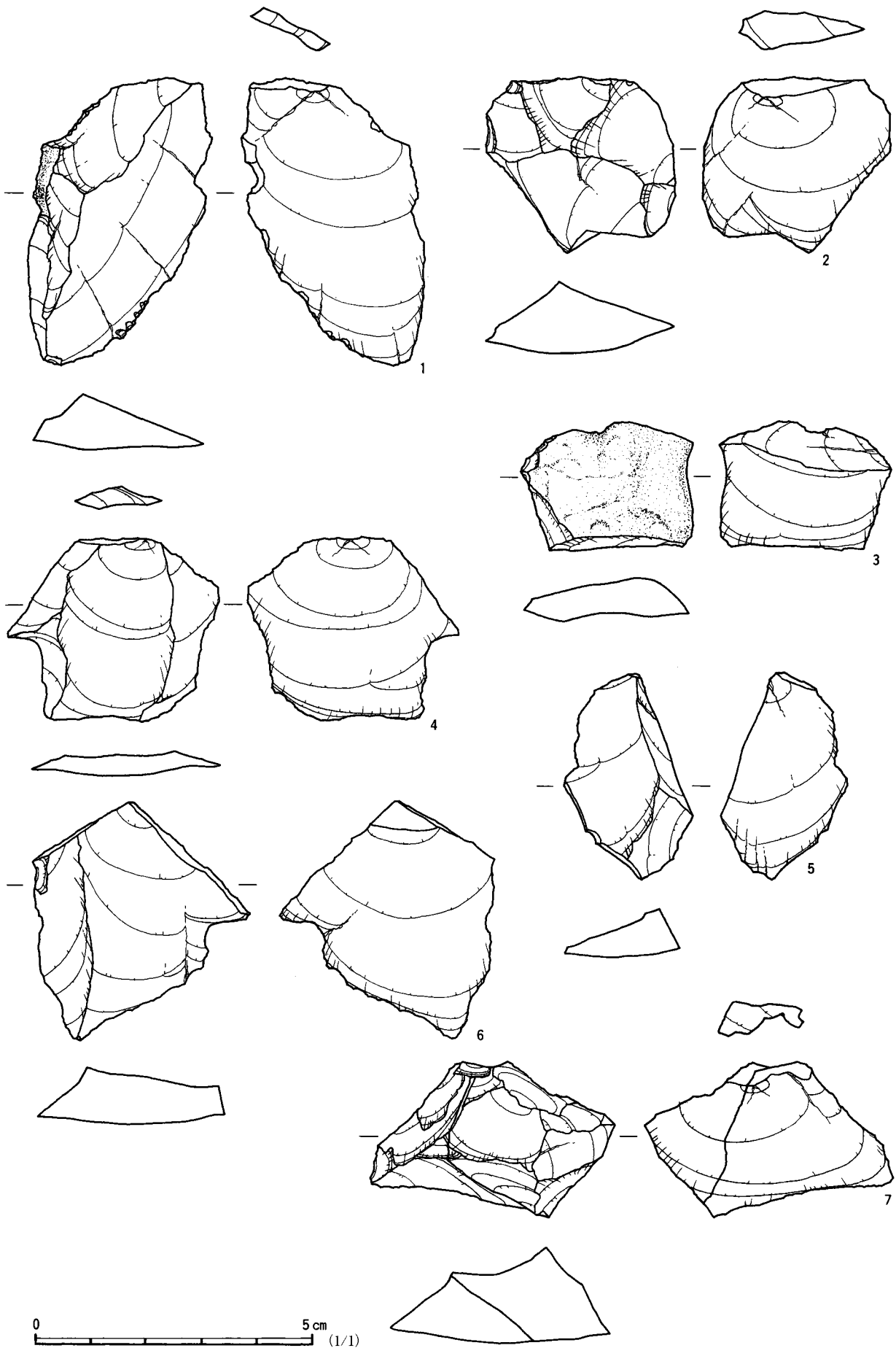
6は部厚な剥片であり、打面部が欠損している。欠損面には節理がみられることから、剥片が作出される際に節理から打面部が欠損したのと考えられる。

8の大型の剥片も同様であり、剥片の中央部に位置する節理面から2分している。

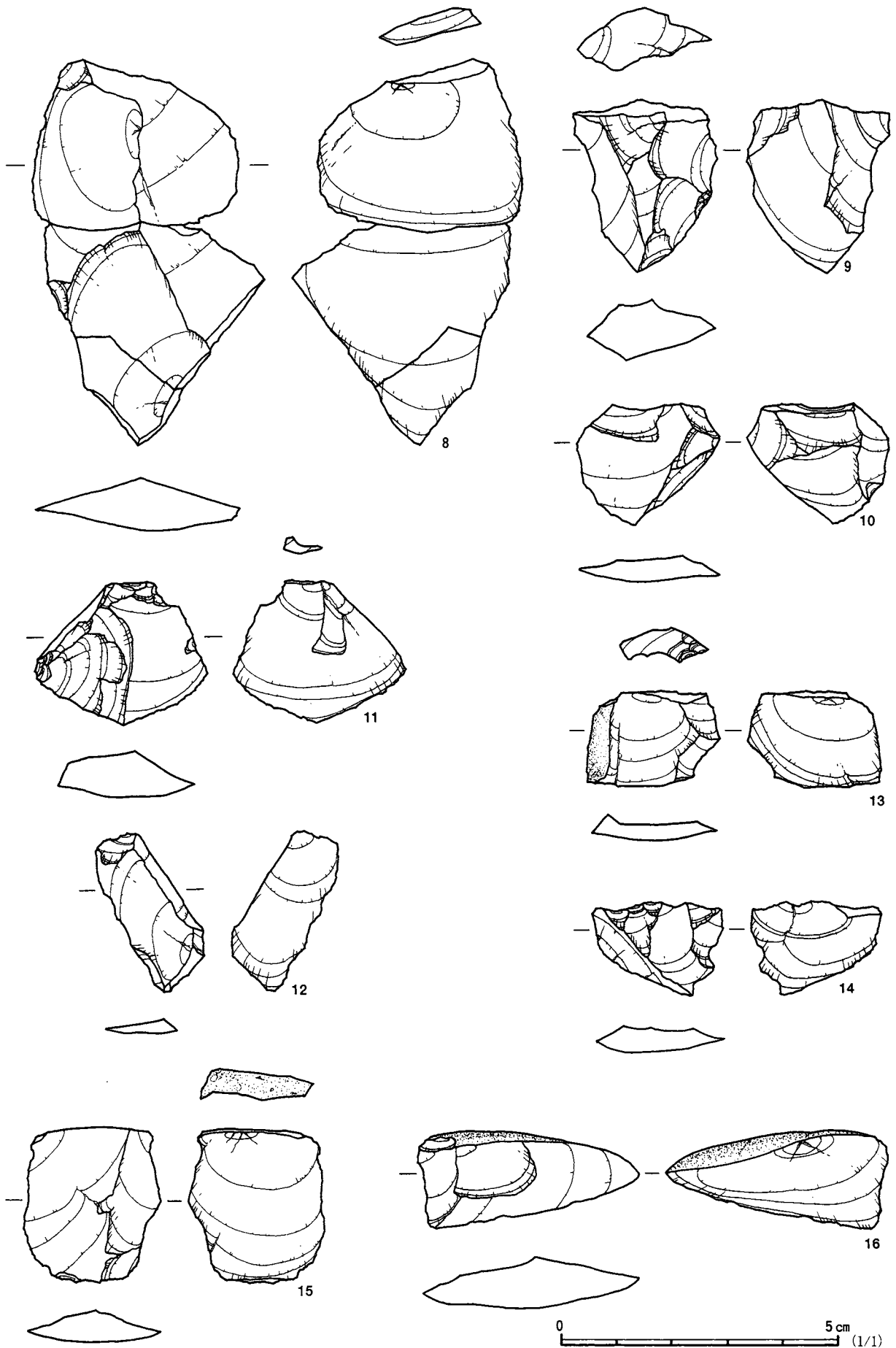
7の剥片の表面には、多方向からの小さな剥離がみられる。また剥片の形状および大きさから、剥片剥離工程の末期の段階で石核整形を目的として作出された剥片であると考えられる。

11～14は石器の素材剥片となりうる剥片である。これらは概して薄く不定形であるが、打面部を除く両側縁と末端部の3辺の断面形状はいずれも鋭角であり、台形石器の作出を意図するならば、いずれの縁辺も刃部となりうる可能性がある。

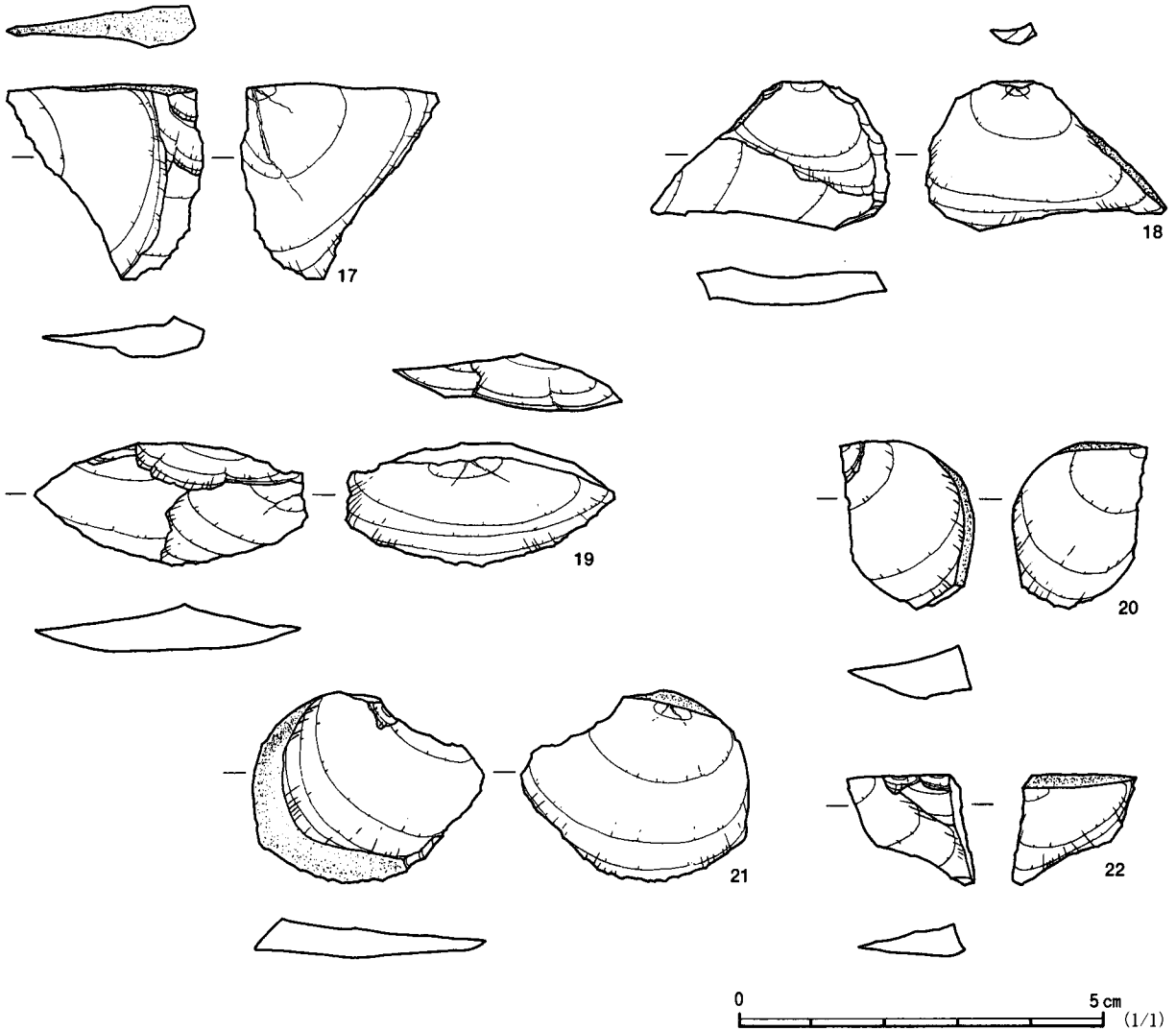
15～19は流紋岩製の剥片である。15は原石面を打面としており、剥片の表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、末端部に残る剥離が打面の方向を違える以外は、15の剥片が作出された時点の打点の方向と同一であるが、基本的には打面の位置を頻繁に換えて剥片剥離を行っていたと考えられる。これは16～19の剥片についても同じ事がいえる。流紋岩製の石器の剥片剥離技術は、点数的に少数なため断定はできないが、原石は扁平礫もしくはそれに近い形状と考えられ、原石面を打面とし求心的に剥片を作出したのと考えられる。



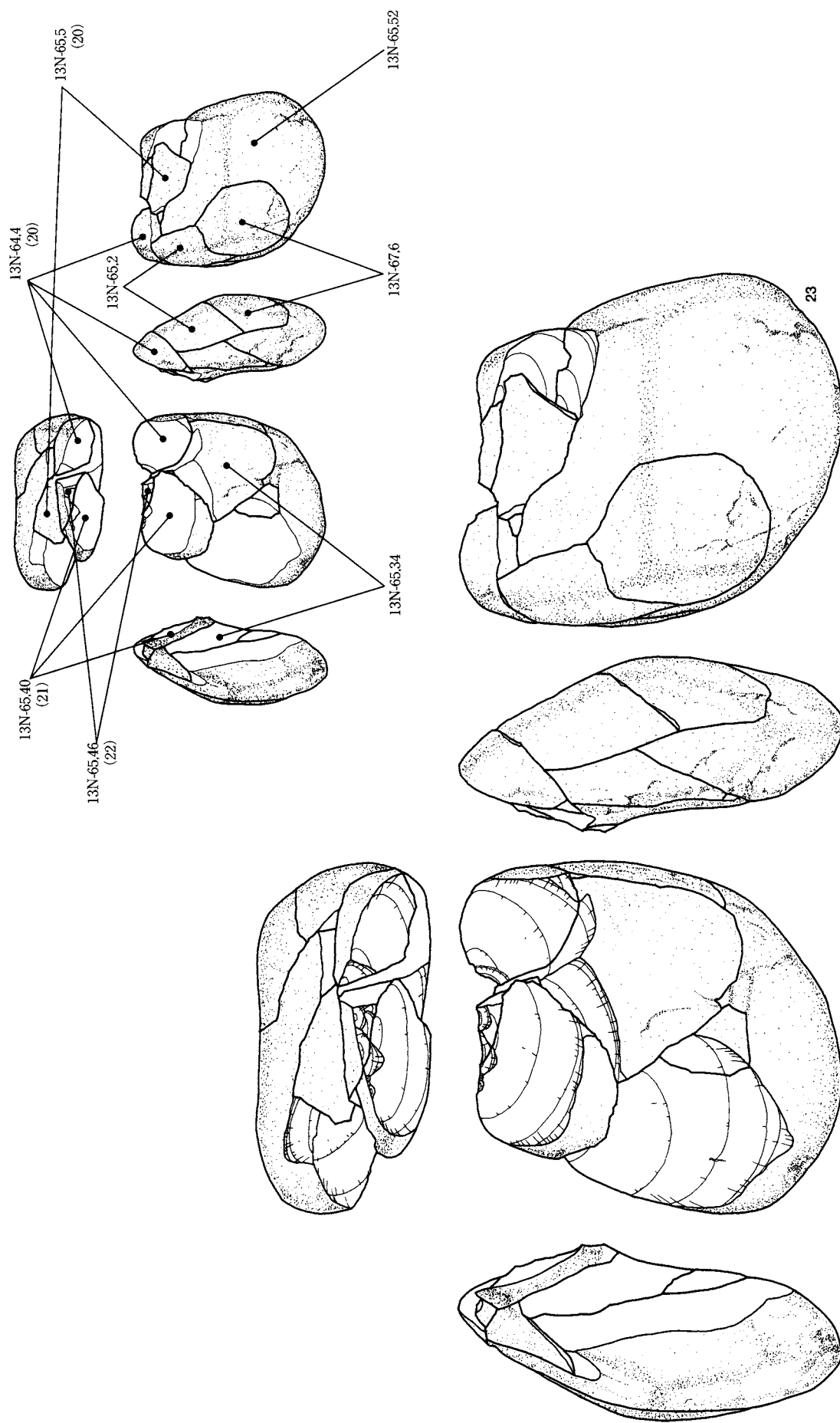
第11図 第1ブロック出土遺物(1)



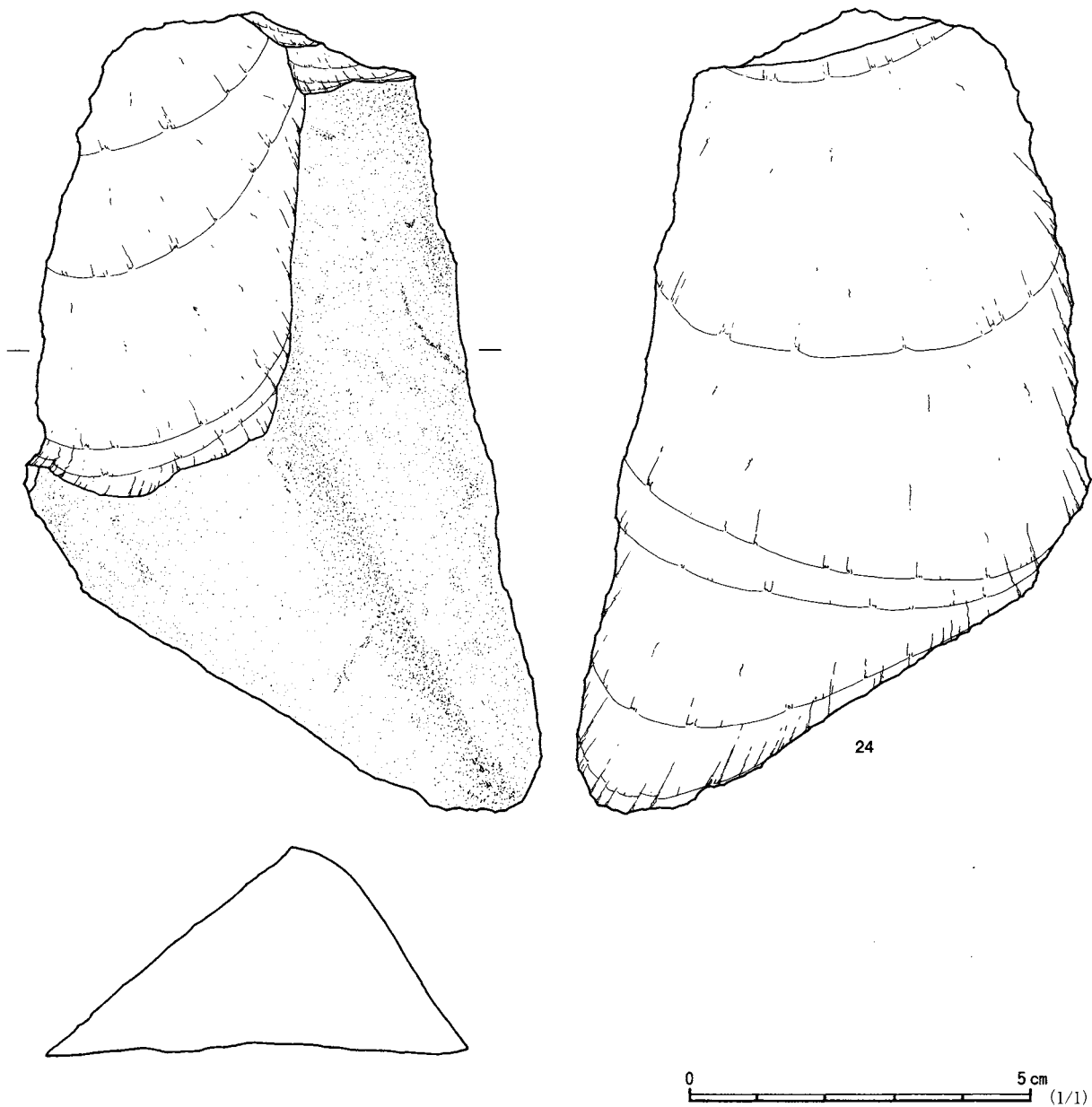
第12図 1ブロック出土遺物(2)



第13図 第1ブロック出土遺物(3)



第14図 第1ブロック出土遺物(4)



第15図 第1ブロック出土遺物(5)

20～22は頁岩B製の剥片である。これらは小型不定形剥片で、原石面を打面としている。23の接合資料を構成する代表的な形状の剥片である。

23の接合資料は扁平礫を母岩とし、その片側縁の原石面を打面とし、終始打面の位置を換えていない。このため剥片の表面にみられる剥離の方向は、すべて同一方向からの剥離であり、この点で第1ブロックを構成する他の石器の剥片剥離技術との差異が指摘できる。裏面の左側縁に大型の剥片が接合するが、これは20～22の剥片が作出された後に、剥離面を打面として作出された剥片である。打面再生剥片のように見受けられるが、この剥片を作出した後に新たに剥片を作出した痕跡は認められず、素材剥片作出のための剥離と考えられる。この接合資料については同位置の打面設定により剥片を作出し剥片剥離を終了している。

24は大型の砂岩製の剥片である。第1ブロックで出土した砂岩製の剥片類は点数的に少なく、剥片剥離の痕跡もみられないため、これらは搬入素材として考えられる。24の剥片の表面には原石面がみられ、原石

第2表 第1ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第11図	1	13N-75, 1	使用痕ある剥片	頁岩 A	5.00	3.50	1.01	15.36	
	2	13N-66, 8	剥片	頁岩 A	3.20	3.47	1.19	11.11	
	3	13N-56, 4	剥片	頁岩 A	2.40	3.18	0.87	7.48	
	4	13N-74, 1	剥片	頁岩 A	3.27	3.82	0.40	4.52	
	5	13N-66, 6	剥片	頁岩 A	2.19	3.43	0.80	6.20	
	6	13N-46, 2	剥片	頁岩 A	3.37	3.90	1.09	13.70	
	7	13N-65, 21 13N-64, 8	剥片	頁岩 A	2.70	3.56	1.59	16.25	
第12図	8	13N-65, 56 13N-45, 32 13N-46, 1	剥片	頁岩 A	3.20	3.92	1.34	25.78	
	9	13N-65, 31	剥片	頁岩 A	3.12	2.57	1.14	7.20	
	10	13N-75, 3	剥片	頁岩 A	2.24	2.48	0.50	2.53	
	11	13N-57, 22	剥片	頁岩 A	2.50	3.08	0.90	6.57	
	12	13N-65, 26	剥片	頁岩 A	2.77	2.05	0.41	1.37	
	13	13N-66, 3	剥片	頁岩 A	1.72	2.45	0.51	2.11	
	14	13N-64, 22	剥片	頁岩 A	1.68	2.40	0.42	1.44	
	15	13N-65, 3	剥片	流紋岩	2.74	2.49	0.59	4.29	
	16	13N-57, 23	剥片	流紋岩	1.70	4.02	1.37	7.16	
	第13図	17	13N-45, 9	剥片	流紋岩	2.42	3.21	0.54	2.98
18		13N-45, 25	剥片	流紋岩	2.01	3.29	0.53	3.26	
19		13N-67, 2	剥片	流紋岩	1.68	3.71	0.74	4.08	
20		13N-64, 4	剥片	頁岩	1.70	2.50	0.70	1.80	
21		13N-65, 40	使用痕ある剥片	頁岩	2.70	3.23	0.51	6.12	
22		13N-65, 45	剥片	頁岩	3.30	3.82	1.63	8.25	
第14図	23	接合資料 13N-65, 40 13N-65, 46 13N-64, 4 13N-65, 2 13N-67, 6 13N-65, 45 13N-65, 52		頁岩	6.67	6.10	2.65	128.55	
第15図	24	13N-65, 53	剥片	砂岩	11.54	6.98	2.95	232.30	

の稜を長軸方向に残している。このため剥片の横断面は三角形状となり、剥片を作出する際に原石の稜を意識して残したと考えられる。大きさと形状から局部磨製石斧の素材として搬入された可能性が考えられる。

第2ブロック (第16・17図 第3表 図版5・18)

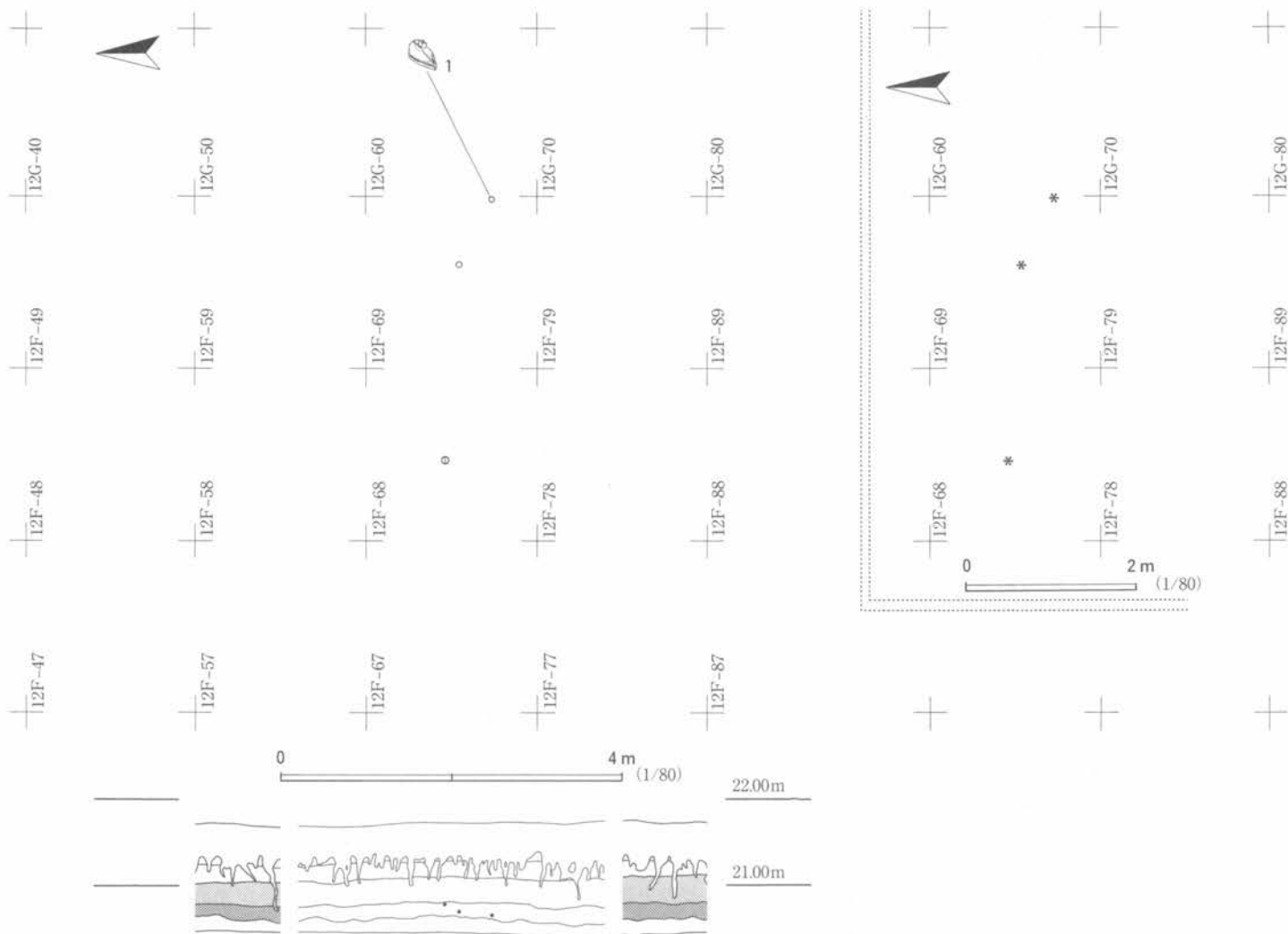
調査区の南西側、標高22mの緩斜面部に位置する。遺物の出土層位はⅨ層の下部である。

出土点数は合計3点と少数であるが、すべてメノウ製の石器であり、小型不定形剥片2点と小礫1点で構成される。

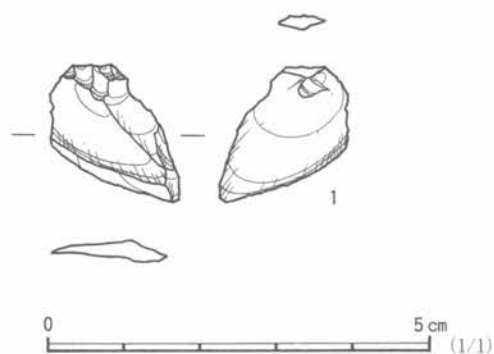
出土遺物

メノウ製の剥片2点のうち1点のみを図示した。

1の表面には剥片剥離時の微細な剥離がみられる。その打撃の方向は一定ではなく、剥片剥離工程の末期の段階に、立方体に近い形状の石核から作出された剥片と考えられる。また打面付近には頭部調整痕と思われる微細な剥離が確認でき、このことから剥片剥離工程の末期段階に作出された剥片であることが理解できる。



第16図 第2ブロック器種別・石材別石器分布図



第17図 第2ブロック出土遺物

第3表 第2ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第17図 1	12F-69, 2	碎片	メノウ	1.76	1.73	0.35	0.90	

(2) 第2文化層

第2文化層は第3ブロックの1ブロックのみが属する。出土層位はⅦ層からⅨ層にかけてであるが、Ⅶ層下部から特に石器が多く出土しており、この層に属する文化層と考えられる。

ブロックを構成する石器の組成中に局部磨製石斧、ナイフ形石器があり、文化層を特徴づける石器として提示できる。また剥片についても石刃技法に基づき作出されたと考えられる剥片と、小型不定形剥片を作出した痕跡の認められる剥片が相伴しており、異なる剥片剥離技術の存在が認められる。

石器の石材は多種であり、メノウを主体に珪質頁岩、頁岩、黒曜石、安山岩等が使用されるが、各々の石材について剥片剥離が行われた明確な痕跡は認められず、素材剥片の搬入と搬入素材の調整により形成されたブロックであると考えられる。

以下に各石材の特徴を記す。

メノウ：色調は乳白色または半透明で、オレンジ色の箇所が部分的にみられる。第1文化層第2ブロックで出土した同石材よりも乳白色の部分が若干多い感がある。

凝灰岩：色調は、表面は緑色を帯びた青灰色、欠損面は暗い青灰色を呈する。水和層が発達し、表面は粉をふいたような感があり、傷が付きやすい。緻密であるが光沢はなく、質感に反し持った感じが重い。

黒曜石：色調は黒色で透明な層と黒色の層がみられる。夾雑物はほとんど含まない。

珪質頁岩A：色調は赤褐色が基本であるが、赤みを帯びた緑色の層が一部にみられる。きめは細かく光沢がある。

珪質頁岩B：色調は緑色を呈する。質感は節理のないチャートと酷似する。

チャート：色調は緑がかった青灰色を呈する。節理が混入するがまばらである。

頁岩：色調は焦げ茶色を呈する。0.3mmほどの夾雑物を少量含む。緻密できめは細かいが光沢はない。

安山岩：色調は表面は淡黄褐色、欠損面は黒色を呈する。原石面は無数の細かい傷が一面にみられ、ざらついた感がある。

砂岩：小礫1点のみが該当するため、内面の色調はわからない。原石面は青みがかった暗灰色を呈し、岩石を構成する粒子は均一に細かく堅緻である。

緑泥片岩：色調は深緑色。所々に黒色の縞模様が混入し、木肌を想像させる。質感に反し硬度がある。

第3ブロック（第18～21図 第4・5表 図版6・18・19）

調査区の南側、標高21m前後の緩斜面部に位置する。緩斜面部はソフトローム層が発達し、出土層位については、標高の低い部分では一部ソフトローム層から出土する石器や、Ⅸ層の直下の青灰色土層から出土する石器もあり、出土層位の限定は非常に困難である。しかし、標高の高い地点ではⅦ層からⅨ層にかけて出土しているため、Ⅶ層の下部に属すると考えられる。

石器は半弧を描くような形状で分布している。台地の谷側にむかって延びるような分布状況であるが、緩斜面部という地形的な影響は受けていないものと思われる。環状ブロック群を想像させるが、付近には同一層からの石器の出土は認められず、石器の分布状況という観点からは環状ブロック群となる可能性は低い。

ブロックを構成する石器は、文化層を特徴づける定型的な石器として局部磨製石斧、ナイフ形石器があげ

られる。局部磨製石斧は小型で薄く、緑泥片岩という石材を使用したものでは他に例がみられない。ナイフ形石器は、安山岩製とメノウ製のものが2点出土しているが、安山岩製のナイフ形石器については搬入品と考えられる。剥片剥離技術はメノウ製の石器については、表面にみられる剥離のようすから、上下両端に打面を設定した石核から連続的に作出されており、石刃の作出を意識していると考えられる。しかし形状は石刃状にはならずせいぜい縦長剥片と呼べるような剥片でしかない。また小型不定形剥片を作出した痕跡の認められる剥片が出土しており、異なる剥片剥離技術の存在が窺える。

第4表 第3ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	擗 器	削 器	ビ ス ・ ス ト	彫 刻 刀 形 石 器	削 片	R ・ フ レ イ	U ・ フ レ イ	剥 片	碎 片	剥 片 用 石 核	石 核	石 斧	燧 石	礫	計
メノウ	1 2.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.0%	4 7.8%	5 9.8%	-	-	-	-	1 2.0%	12 23.5%
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.0%	6 11.7%	-	-	-	-	-	7 13.7%
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 3.9%	-	-	-	-	-	2 3.9%
珪質頁岩A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.0%	4 7.8%	-	-	-	-	-	5 9.8%
珪質頁岩B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 3.9%	11 21.5%	-	-	-	-	-	13 25.5%
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 3.9%	3 5.8%	-	-	-	-	-	5 9.8%
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.0%	-	-	-	-	-	-	1 2.0%
安山岩	1 2.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.0%	2 3.9%	-	-	-	-	-	4 7.8%
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.0%	1 2.0%
緑泥片岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.0%	-	-	1 2.0%
計	2 3.9%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.0%	12 23.5%	33 64.7%	-	-	1 2.0%	-	2 3.9%	51 100.0%

出土遺物

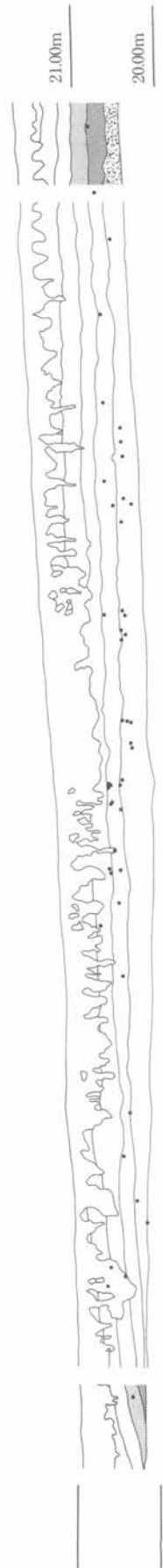
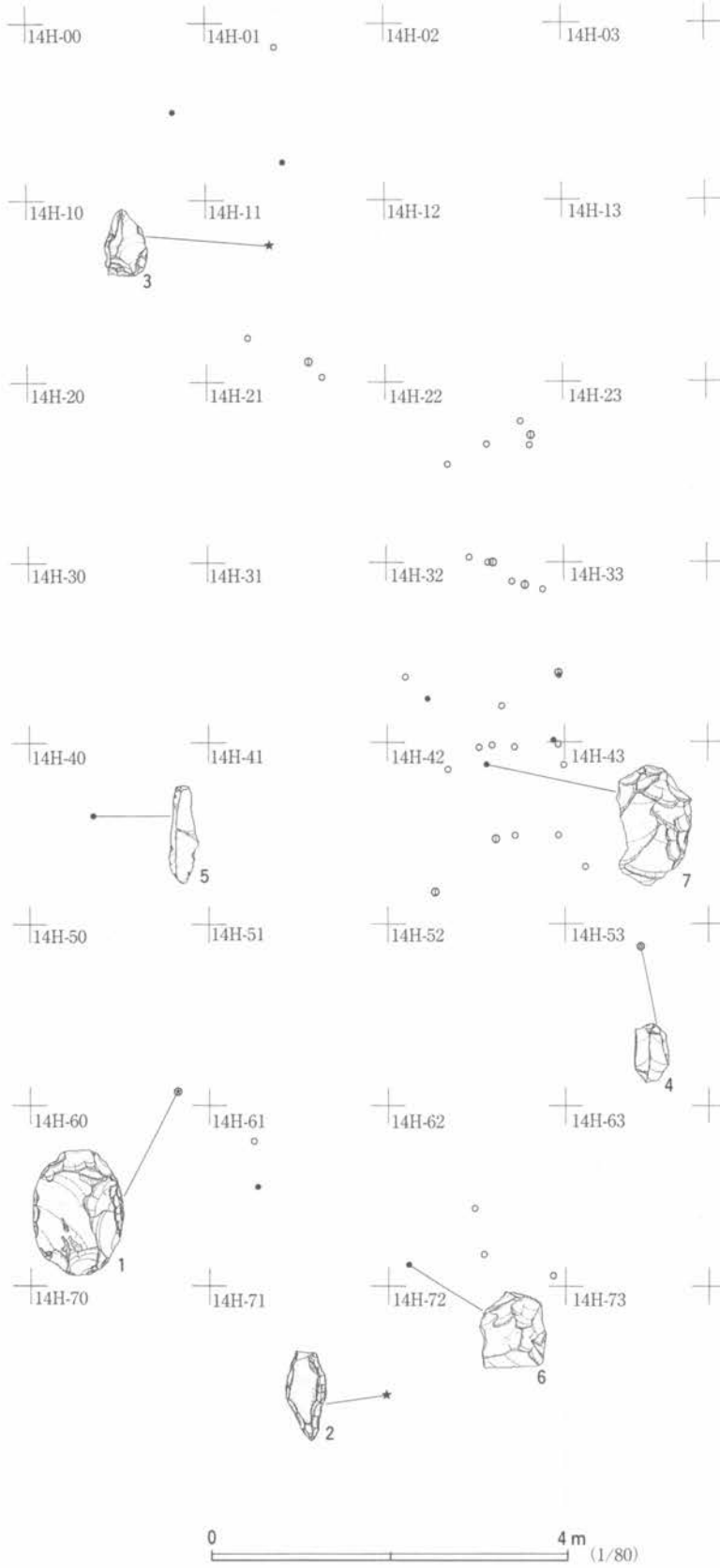
1 は緑泥片岩製の局部磨製石斧である。大型の剥片を素材とし、周縁に調整を施し形状を整えている。研磨痕は表裏面ともにみられるが部分的であり、刃部についてはほとんどみられない。これは、表面の刃部側からの調整痕が研磨痕より新しいことから、刃部付近が欠損したため再調整により刃部を作出したためと考えられる。周縁の調整痕は密に丁寧に施され、その剥離のほとんどが片岩系という石の性質によるものか、末端部が階段状剥離となる。

2・3 はナイフ形石器である。

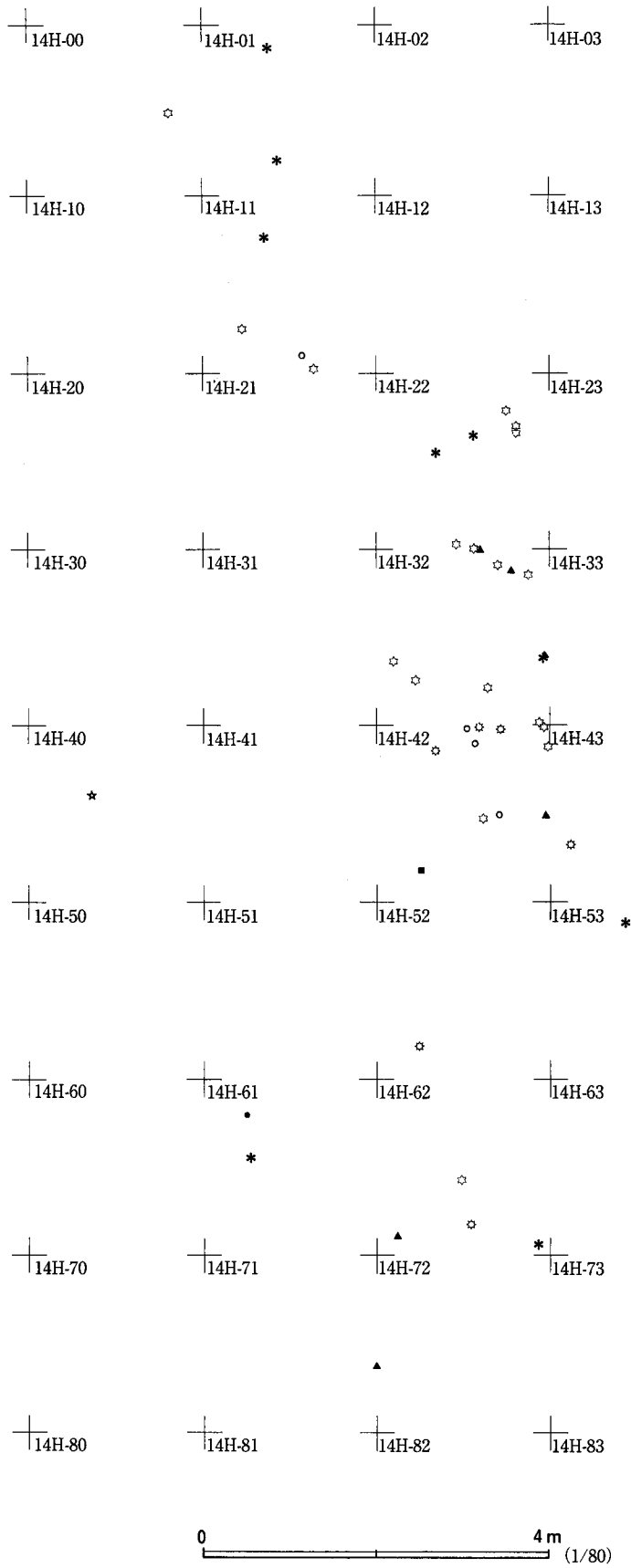
2 は安山岩製の横長剥片を素材とし、先端部が欠損しているが、調整はほぼ全周に施されていると考えられる。調整は密に急角度で施され、3 のナイフ形石器と比較すると丁寧に調整される。安山岩製の石器はこのナイフ形石器の他に剥片、碎片が3点出土しているが、第3ブロック内で剥片剥離が行われた痕跡は認められず、また前述したとおり石器製作における調整部位、調整技術ともに異なるため、製品としての搬入品である可能性が高い。

3 はメノウ製のナイフ形石器である。縦長剥片を素材とし、剥片の末端部を先端部としている。素材剥片の打面を無調整でそのまま残している。調整は両側縁に施されるが、素材剥片の形状をほとんど変えない簡素な調整であり、正面左側縁の調整は表面側と主要剥離面側との両面から施され、企画性がみられない。

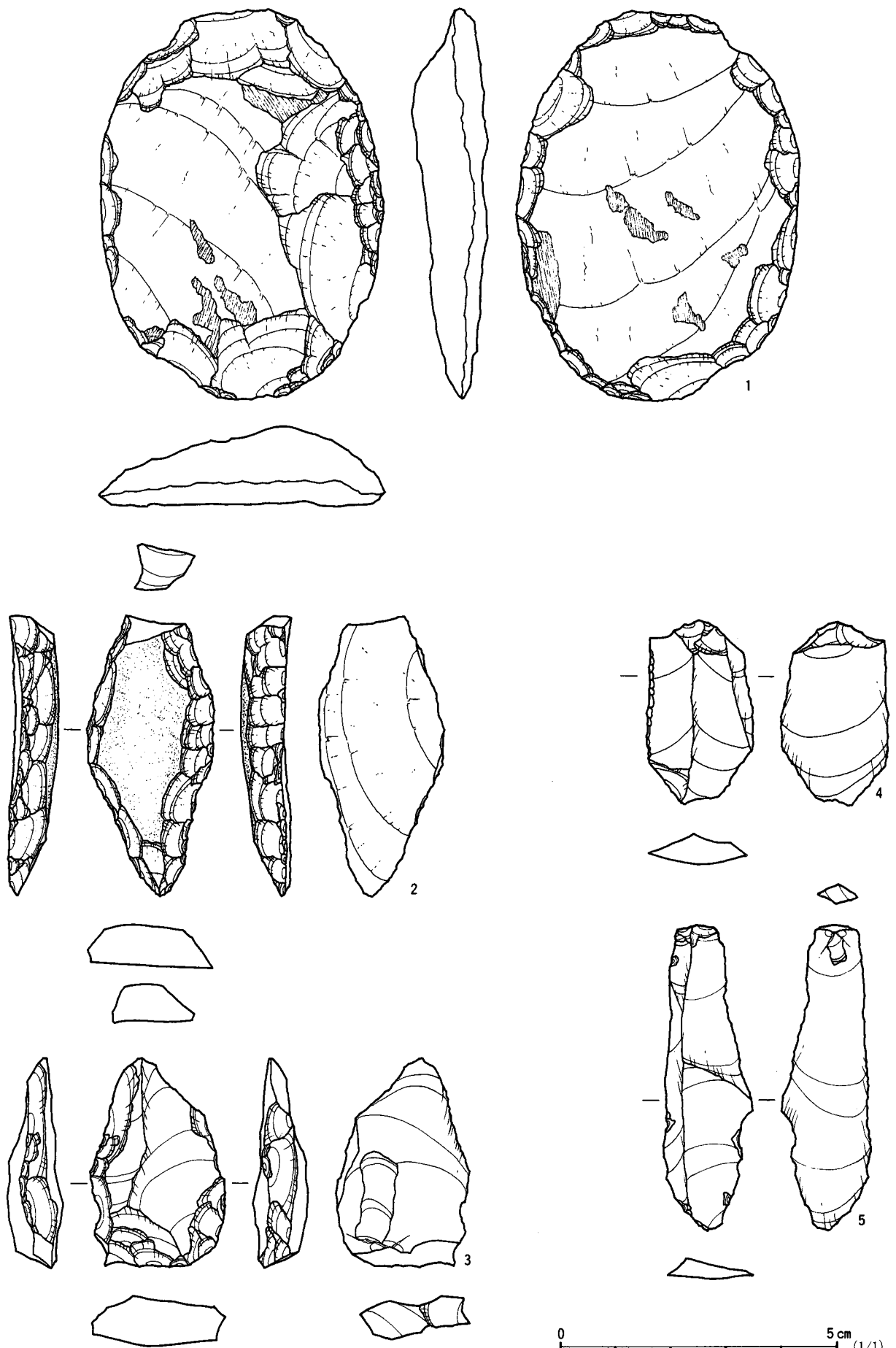
4 はメノウ製の使用痕の認められる剥片である。縦長剥片の片側縁に刃こぼれ状の微細な剥落痕がみられ



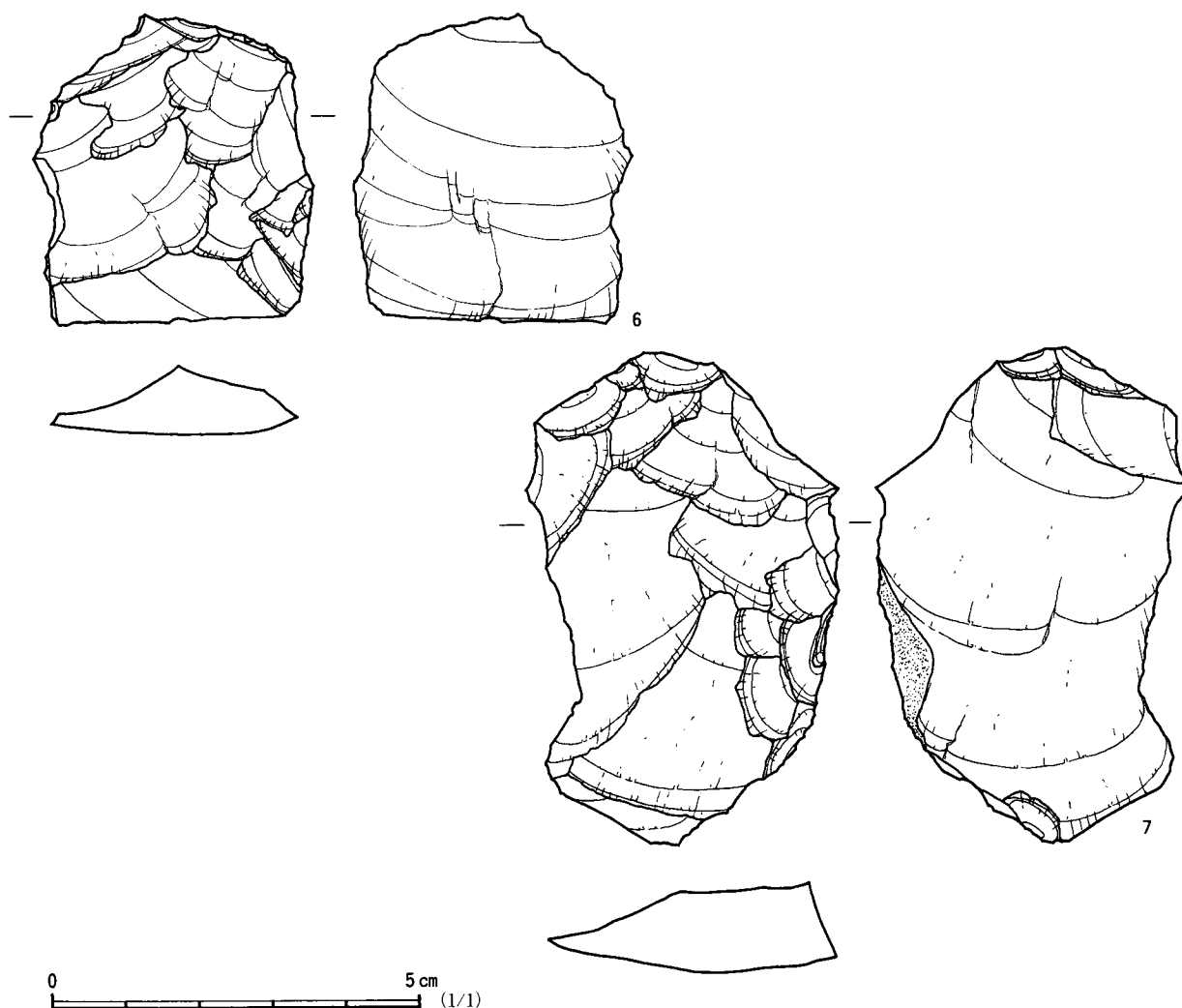
第18図 第3ブロック器種別石器分布図



第19図 第3ブロック石材別石器分布図



第20図 第3ブロック出土遺物(1)



第21図 第3ブロック出土遺物(2)

第5表 第3ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第20図	1	14H-50, 1	局部磨製石斧	緑泥片岩	7.06	5.13	1.26	54.02	
	2	14H-71, 1	ナイフ形石器	安山岩	5.00	2.30	0.73	11.03	
	3	14H-11, 1	ナイフ形石器	メノウ	3.70	2.46	0.90	8.31	
	4	14H-53, 1	使用痕ある剥片	メノウ	3.20	1.98	0.70	4.19	
	5	14H-40, 1	剥片	頁岩	5.42	1.63	0.52	3.64	
第21図	6	14H-62, 4	剥片	チャート	4.24	3.80	1.04	18.27	
	7	14H-42, 6	剥片	安山岩	6.57	4.27	1.37	41.96	

る。3のナイフ形石器も同様であるが、表面に残る剥片剥離時の剥離の方向は、素材剥片の打面の方向と同一のものと、末端部側から施されたものの2方向であり、上下両端に打面を設定した石核から作出した剥片であるといえる。しかし剥片の形状は石刃状とはならず、また調整のようすからも未熟な感を受ける。

5は頁岩製の剥片である。表面の剥離のようすからメノウ製の石器と同様に、上下両端に打面を設定した石核から連続的に作出された剥片であることが理解できる。しかしこの剥片は石刃としての形状が整っており、同じ技術基盤であるが技術的な差が認められる。頁岩製の石器はこの1点のみであり、搬入品と考えられる。

6はチャート製、7は安山岩製の剥片である。

6の表面にみられる剥離からは、多方向から打撃を加えていることが窺える。これらの剥離の大きさと、7の剥片自体の大きさを比較するとかなりの差があるため、石核整形剥片と考えられる。

7の剥片の表面にはやはり多方向からの剥離がみられ、小型不定形剥片の作出を意図していると考えられる。石核整形剥片よりも剥片利用石核と考えるのが妥当である。

(3) 第3文化層

第3文化層に属するブロックは計5地点が検出され、遺跡の所在する台地上に各々距離を置いて分布している。分布状況には立地条件からの見地では特に共通点は見い出せない。出土層位はⅥ層からⅧ層にかけてであり、特にⅧ層に密に分布する。Ⅷ層の上部に属する文化層と考えられる。

各ブロックを構成する石器の組成は、文化層を特徴づける定型的な石器がナイフ形石器1点のみであり、他は剥片、碎片でそのほとんどを占めている。

石器として使用される石材は多種であり、また各ブロックでの主体となる石材も異なる。逆にこの点で特徴として提示することができよう。

剥片剥離技術の点では、定型的な石器素材を作出しようとする意図は窺えず、むしろ大型の不定形剥片の作出が目的である感がある。

第3文化層の各ブロックで使用される石器石材の特徴は以下のとおりである。

安山岩：色調は器表面は黄土色、欠損面は黒色を呈する。第1文化層で出土する安山岩と質感は変わりがないが、水和層がやや発達していない感があり、このため色調はやや暗めとなる。

流紋岩：色調は原石面が黄土色もしくは暗い赤褐色ですべすべしている。内面はクリーム色もしくは乳白色できめは細かい。第1文化層で出土している流紋岩と比較すると石英粒、カンラン石などの混入は少ない。質感に反し持った感じが軽い。

チャート：色調は暗い青灰色を呈し、節理はほとんどみられない。きめは細かく光沢がある。

砂岩：色調は明るい灰色もしくは暗灰色を呈するものがみられるが、岩石を構成する粒子の大きさには差はほとんどみられず0.5mm内外である。

変成岩：色調は原石面は黒色、内面は黒色を基本とし、部分的に灰色の縞状の節理が混入する。原石面には無数の細かい窪みが見られる。緻密であり、光に当てるときらきらと光る微粒子が見られる。

メノウ：色調は乳白色もしくは半透明で、部分的にオレンジ色の箇所が見られる。ごくまれであるが小さな空洞部分があり、なかには六方柱の石英の結晶が無数に存在する。

凝灰岩：色調は器表面は青みがかった乳白色、欠損面は青みがかった灰色を呈する。水和層が発達し、器表面はざらざらしている。質感に反し持った感じが重い。

頁岩：色調は褐色もしくは黒色を呈する。黒色の頁岩は褐色のものと比較して光沢があまりないが、きめの細かさには差はないように感じられる。

黒曜石：色調は濁った黒色である。黒みがかった乳白色と表現した方が適切かもしれない。夾雑物はほとんどみられない。

珪質頁岩：色調は淡黄褐色を呈し、きめは細かく光沢がある。第6ブロックで1点出土するのみで、第3

文化層では極めて客体的である。

第4ブロック (第9・10・22～27図 第6・7表 図版4・5・19～22)

第1文化層に属する第1ブロックとほぼ分布を同じにし、出土層位はⅦ層である。ブロックの規模は長径10m、短径8mほどであり、楕円形状に石器が分布している。

定型的な石器は黒曜石製のナイフ形石器1点のみで、他は剥片、碎片で占められる。剥片は概して大型のものが多くが形状は一定せず、縦長剥片と横長剥片の両者が存在する。また剥片剥離の際の打面の方向は一定せず、絶えず打面の位置を換えて剥片を作出していることが、出土する剥片の表面に残る剥離痕から窺える。

石器に使用される石材は多種にわたり、特に変成岩、安山岩、流紋岩、チャートが多用される。このうち変成岩、安山岩についてはブロックの範囲のなかで特に分布の集中する箇所があり、変成岩はブロックの東側、安山岩は西側に集中している。流紋岩、チャートについてはブロックの範囲内から均一に出土している。

第6表 第4ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 石 形 器	角錐状 石 器	掻 器	削 器	ビリス エヌーコ	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フルイ	じ・ フルイ	剥 片	碎 片	剥 片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
黒曜石	1 0.5%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.5%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18 9.3%	30 15.5%	-	2 1.0%	-	1 0.5%	1 0.5%	52 26.8%
流紋岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.5%	-	17 8.8%	23 11.9%	1 0.5%	-	-	-	-	-	41 21.2%
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6 3.1%	17 8.8%	-	1 0.5%	-	-	-	25 12.9%
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.5%	-	4 2.1%	3 1.5%	-	-	-	-	-	-	7 3.6%
変成岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	22 11.4%	34 17.5%	-	2 1.0%	-	-	-	59 30.4%
メノウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 1.0%	-	-	-	-	-	-	2 1.0%
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.5%	5 2.6%	-	-	-	-	-	6 3.1%
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.5%	-	-	-	-	-	1 0.5%
計	1 0.5%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 1.0%	-	70 36.2%	113 58.3%	1 0.5%	5 2.5%	-	1 0.5%	1 0.5%	-	194 100.0%

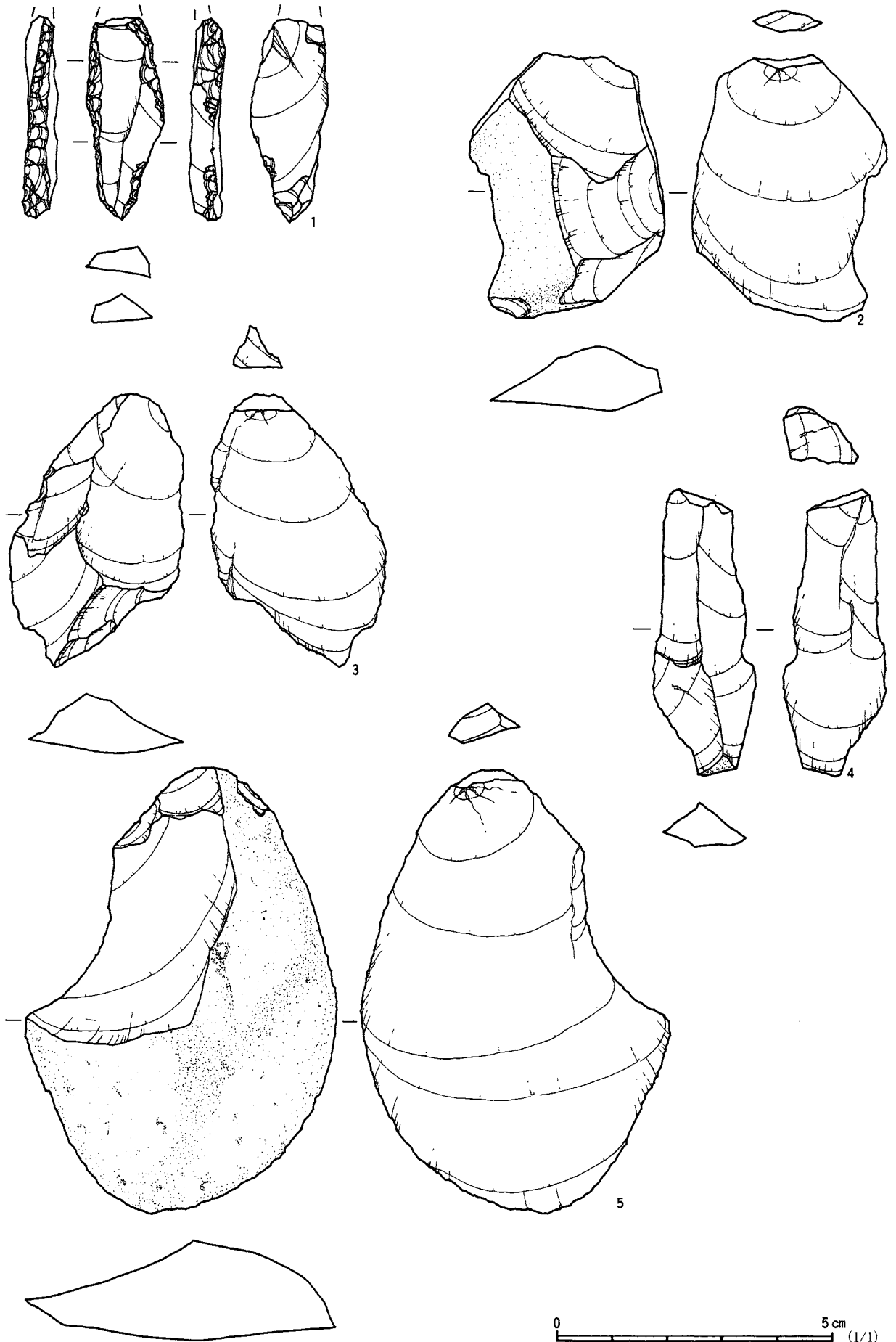
出土遺物

1は黒曜石製のナイフ形石器である。先端部が欠損している。調整は正面左側縁と右側縁の一部に施され、すべて素材剥片の主要剥離面側から行われている。正面にみられる剥離の方向と、主要剥離面の打点の方向に若干に角度のずれがみられるが、同一方向に位置する打面から、縦長剥片の作出を意図して得られた剥片であることが窺える。第4ブロック内での他の剥片剥離技術は、大型の不定形剥片の作出を目的としているため、この石器の剥片剥離技術とは異なる。加えて黒曜石製の石器がこの1点であることを考えると製品としての搬入品であろう。

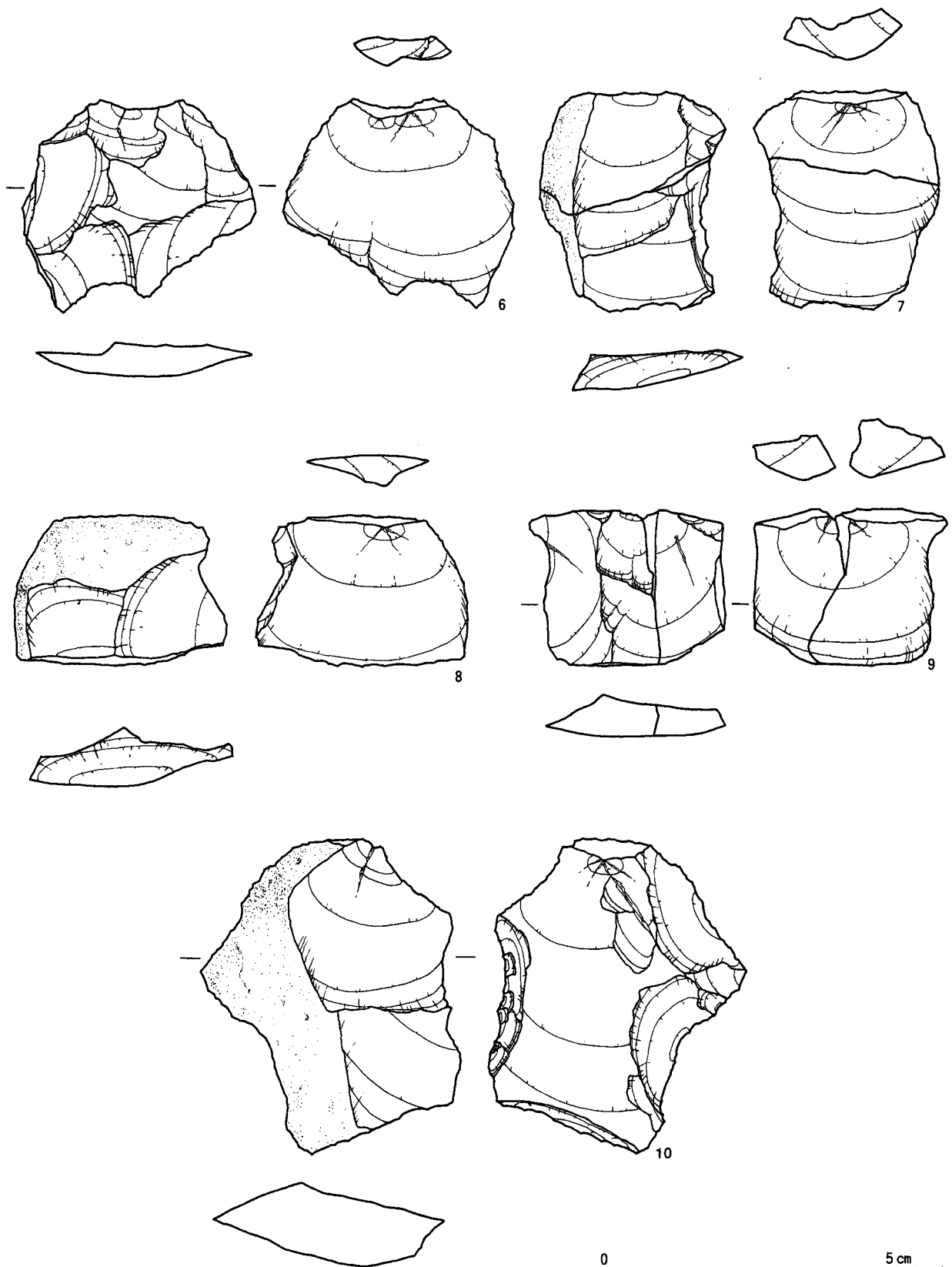
2は凝灰岩製の剥片である。原石面を有し、部厚な大型の剥片である。表面の剥離の方向は主要剥離面の方向とは異なる。剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片と思われるが、石核整形剥片とは考えがたく、素材剥片として作出された剥片であろう。

3はチャート製の剥片である。2と同様に表面の剥離の方向は一定せず、むしろ打撃のたびに打面を換えている感がある。

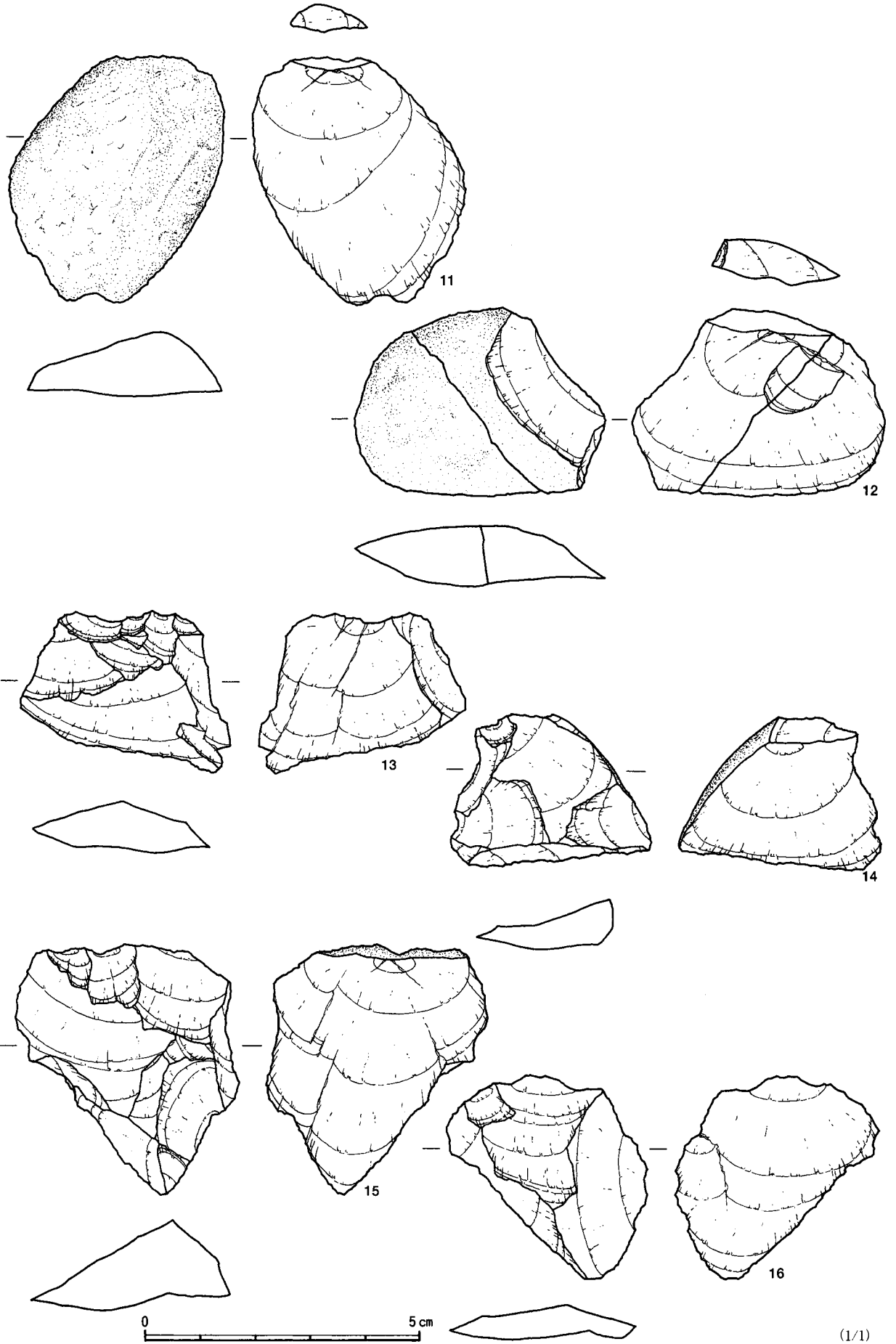
4～9は流紋岩製の剥片である。原石面を有する剥片が多いが、これらには接合関係がみられなかった。



第22図 第4ブロック出土遺物(1)

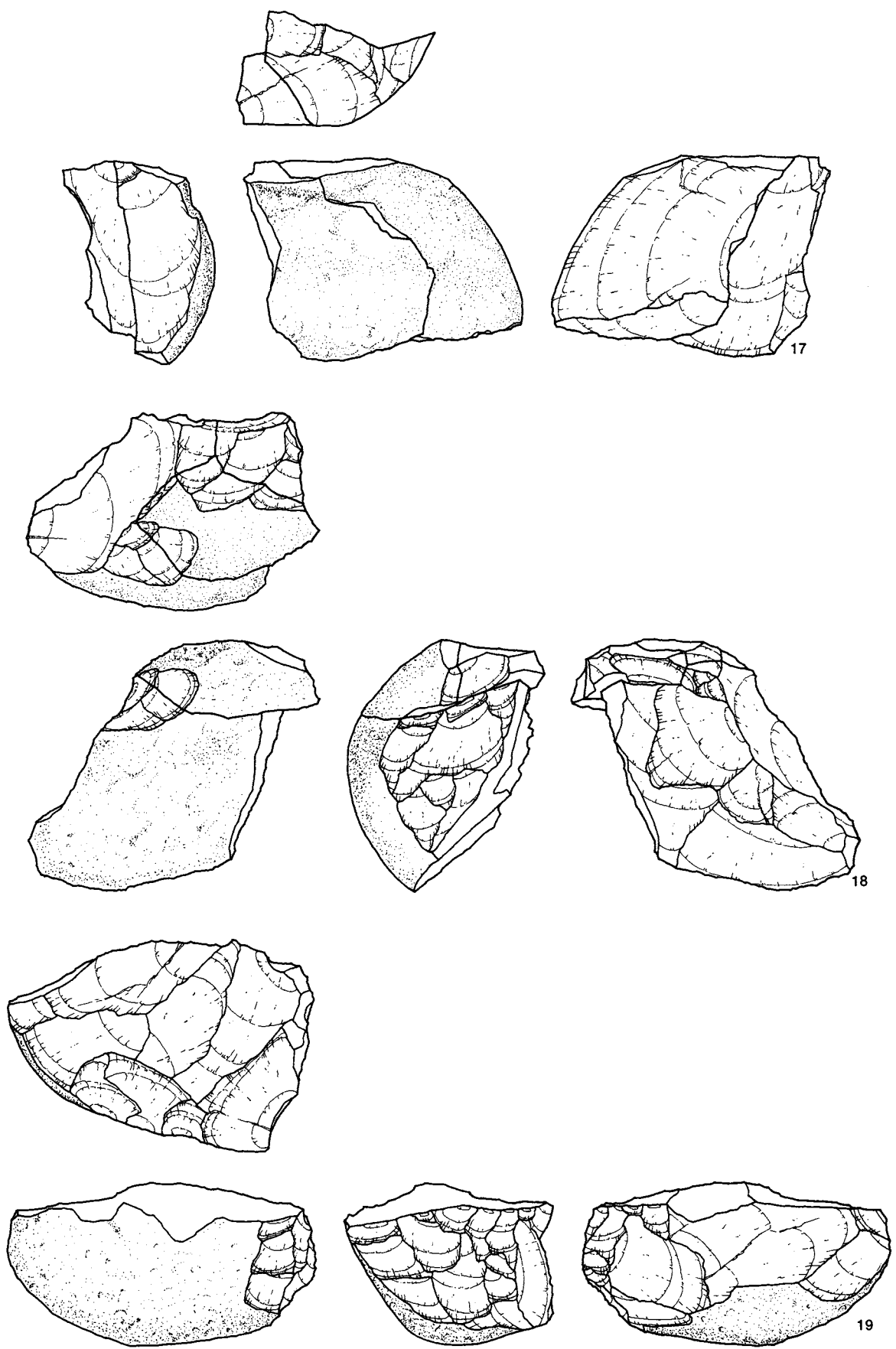


第23図 第4ブロック出土遺物(2)



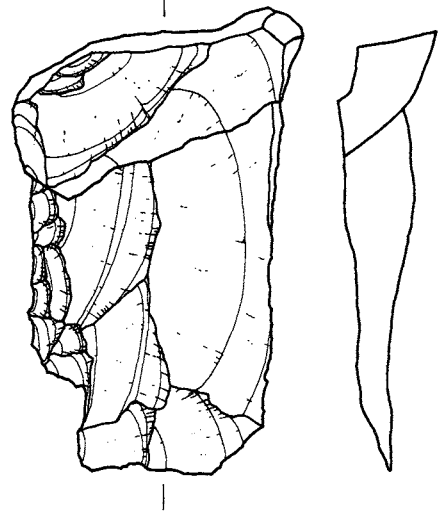
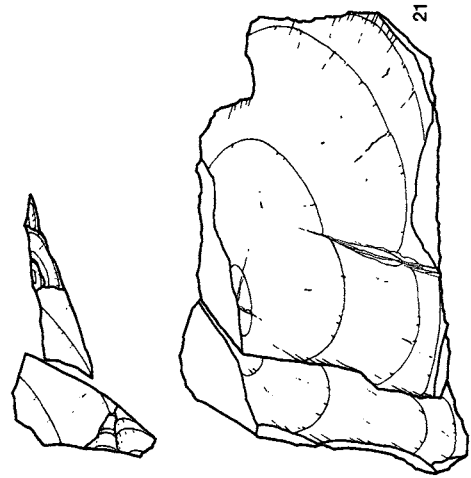
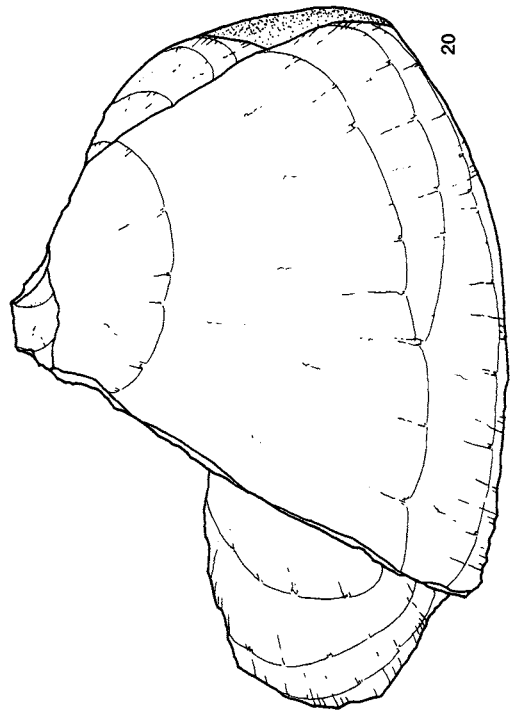
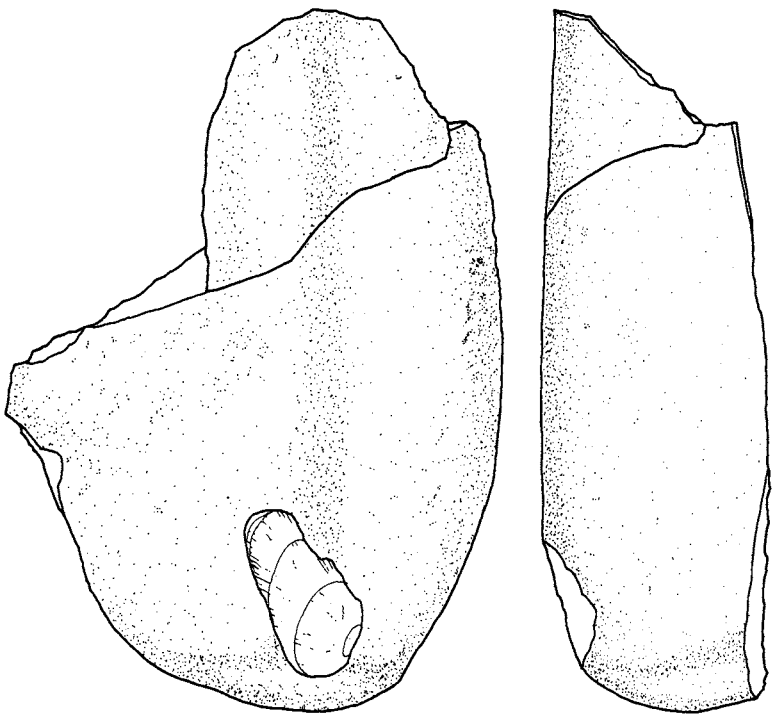
第24図 第4ブロック出土遺物(3)

(1/1)

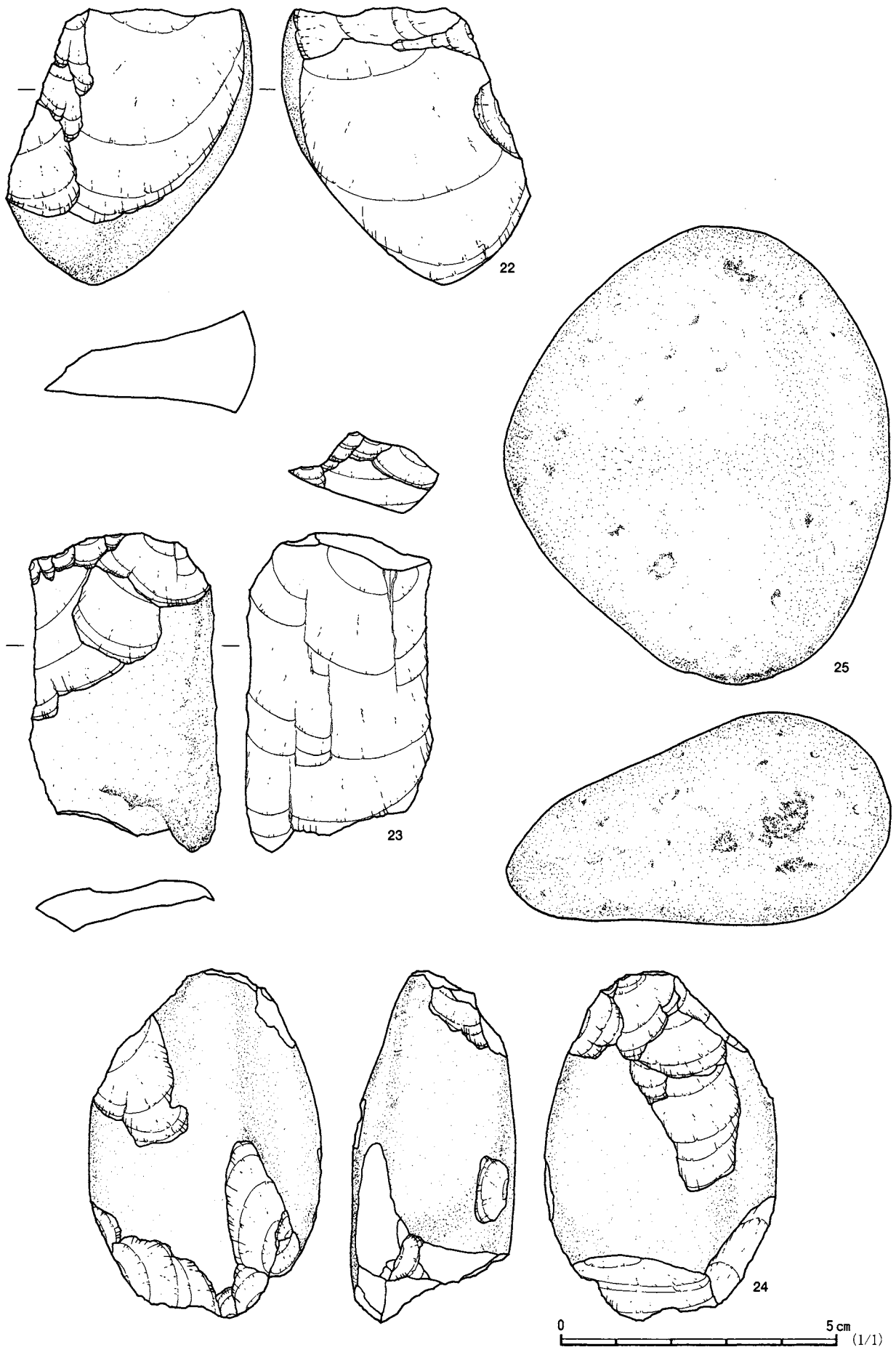


0 5cm (1/1)

第25図 第4ブロック出土遺物(4)



第26図 第4ブロック出土遺物(5)



第27図 第4ブロック出土遺物(6)

石器の素材としての搬出が行われたことが要因と考えられるが、第4ブロックを形成する剥片も石器素材として十分活用できる大きさであり、よほど石器素材としての剥片を厳選していたことが窺える。しかし流紋岩製の定型的な石器が共伴していないため、現時点では断言することはできず、近接地での資料の出土が待たれる。

10は流紋岩製の剥片利用石核である。表面に残る原石面の打面付近には原石の時点での稜があり、剥片剥離工程の初期の段階での石核整形剥片をもとにする。剥片の作出は表面側から主要剥離面側にむかって行われるが、数回の剥離で終了している。石器製作のための調整とも考えられるが、形状を整える調整としては簡素であり、刃部作出を目的とした調整としても粗雑すぎる。剥片利用石核として考えるのが無難であろう。

11～16は安山岩製の剥片である。11の表面には原石面の他剥離痕はみられず、剥片剥離工程の初期の段階で、打面を設定した直後に作出された剥片である。12についても表面に数回の剥離がみられるが、剥片剥離工程の初期段階の剥片であるといえる。13～16の剥片の表面には打面を頻繁に換え剥片剥離を行った痕跡がみられる。形状は一定でない。

17・18は安山岩製の接合資料である。

17は剥片同士の接合であるが、主要剥離面の打点の方向は互いに異なり、打面の位置も同じではない。

第7表 第4ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第22図	1	13N-44, 1	ナイフ形石器	黒曜石	3.73	1.43	0.53	3.06	先端部欠損
	2	13N-54, 5	剥片	凝灰岩	4.90	3.63	1.32	18.02	
	3	13N-36, 5	剥片	チャート	5.00	3.07	1.51	16.78	
	4	13N-45, 7	剥片	流紋岩	5.10	1.87	1.02	8.35	
	5	13N-58, 2	剥片	流紋岩	7.80	5.40	1.69	58.22	
第23図	6	13N-64, 7	剥片	流紋岩	3.57	3.95	0.63	8.38	
	7	13N-65, 49	剥片	流紋岩	2.50	2.98	0.52	8.81	
	8	13N-45, 3	剥片	流紋岩	2.50	3.64	1.00	9.22	
	9	13N-65, 27 13N-45, 15	剥片	流紋岩	2.60	2.40	1.00	7.98	剥片剥離時に2分
	10	13N-64, 5	剥片利用石核	流紋岩	5.15	4.40	1.44	25.55	
第24図	11	13N-64, 20	剥片	安山岩	4.49	3.90	1.20	20.26	
	12	13N-57, 11 13N-57, 1	剥片	安山岩	3.93	3.90	1.29	20.98	
	13	13N-46, 13	剥片	安山岩	3.90	2.91	0.87	9.01	
	14	13N-35, 1	剥片	安山岩	2.77	3.75	1.12	10.08	
	15	13N-63, 2	剥片	安山岩	4.44	3.98	1.63	22.38	
	16	13N-57, 8	剥片	安山岩	3.78	3.40	0.60	7.28	
	17	13N-45, 20 13N-44, 3	剥片	安山岩	3.67	4.10	1.82	38.55	
第25図	18	13N-53, 1 13N-58, 5	剥片 石核	安山岩	3.80	4.85	2.79	60.87	
	19	13N-44, 8	石核	安山岩	2.70	5.20	3.51	62.82	
第26図	20	13N-67, 3 13N-57, 29	剥片	変成岩	6.47	8.00	2.88	168.71	
	21	13N-57, 25 13N-56, 12	剥片	変成岩	4.05	5.60	1.20	29.21	
第27図	22	13N-45, 17	剥片	変成岩	5.03	4.50	1.77	40.77	
	23	13N-57, 5	剥片	変成岩	5.64	3.49	1.22	21.93	
	24	13N-36, 6	石核	変成岩	6.20	4.20	2.95	95.77	
	25	13N-65, 25	敲石	安山岩	8.20	7.00	3.73	270.21	偏平礫の一端を使用

表面側の剥片を作出した後に、打面を別の部位に移動し剥片剥離を行い、その後にもう片方の剥片を作出したものである。

18は石核と剥片が接合したものである。剥片が作出された後に残されたネガティブ面を打面とし、剥片剥離を行っている痕跡がみられる。接合した剥片は意図的に打面を作出しようとして剥ぎ取られたものではなく、素材剥片として作出され、結果としてそのネガティブ面を打面として活用したものと考えられる。

19は安山岩製の石核である。石核の最終打面にあたる上面の剥離は、最終打面となる以前に作出された剥離痕が顕著にみられ、これらは多方向に設定された打面から剥片剥離が行われている。結果として最終打面になったもので、打面の作出を意図して行われた剥片剥離の痕跡ではない。これら安山岩製の石器の母岩は決して大きくなく、19の石核等から復元すると大きくても拳大ほどと推測され、石核整形や打面再生をほとんど意識することなく剥片剥離を行ったと考えられる。

20～23は変成岩製の剥片である。

20は剥片剥離工程の初期段階に作出されたもので、母岩を打割するように剥ぎ取られている。正面右側縁には小型の剥片が接合しているが、これは打撃を加えた際に節理により分割したもので、大型の剥片が作出された後に剥片利用石核のように作出されたものではない。

21は同一の打面から連続して作出された剥片が接合したものである。表面外側の剥片が作出された後に頭部調整が行われているのが確認できる。

22は原石面を残し、打面をかなり広く残すように打撃が加えられ作出されている。表面にみられる剥離の打面の方向と主要剥離面の打面の方向は一致するが、同一打面ではない。23も22と同様に打面を広く取り作出された剥片である。表面の打面付近には微細ではあるが頭部調整痕がみられる。打面には主要剥離面のネガティブ面側からの剥離がみられ、これにより石核は、扁平な、厚みをあまり持たないものであったことが推測できる。

24は変成岩製の石核である。母岩は同じ変成岩製の剥片と比較すると小型であり、前述した剥片と同様の形状の剥片を作出することは不可能である。剥片剥離は主に母岩の上下端に対して行われ、表面、裏面の両面にむかって打撃を加えている。特に打撃を加える際の企画性はみられず、また打面を作出して剥片剥離を行った痕跡もみられない。

25は安山岩製の敲石である。扁平礫の下端を作用部分として使用している。剥落痕はみられず微細な敲打痕が残る。敲石自体は被熱した痕跡はみられない。

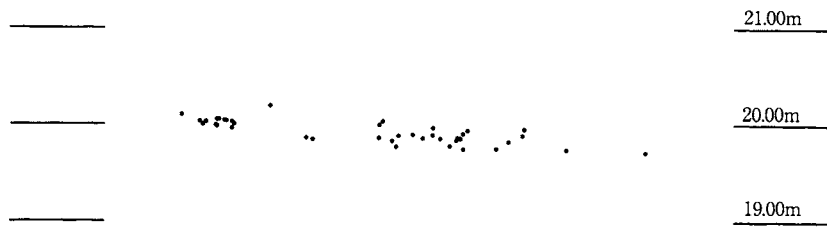
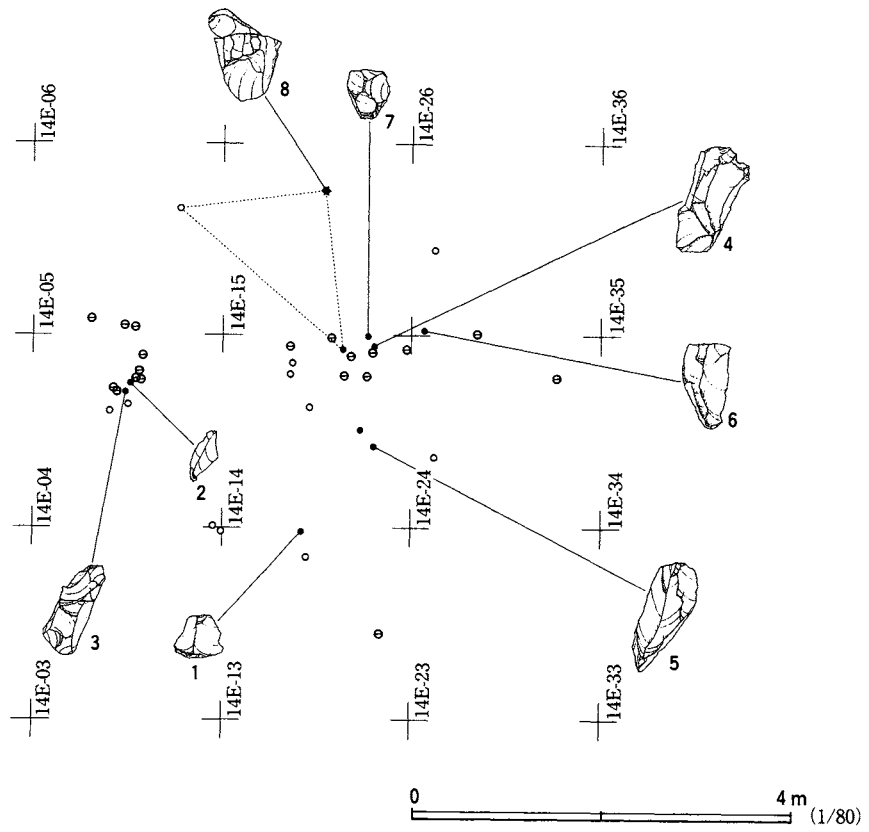
第5ブロック（第28～31図 第8・9表 図版6・23）

調査区の南西、台地が谷にむかって急激に傾斜を増す台地縁辺部に位置する。標高は21mほどである。

石器は直径6mほどの円形の範囲で出土し、台地の縁辺部という立地にしては、地形による石器への影響はなく、まとまった分布状況を呈する。出土層位は青灰色土層からの出土であり、付近の土層の状況からⅦ層と考えられる。

出土した石器のなかには定型的な石器は含まれず、剥片、碎片、石核等であるが、剥片の形状は縦長剥片であり、剥片剥離技術の観点からは一定の形状の剥片を作出しようとする意図が窺える。

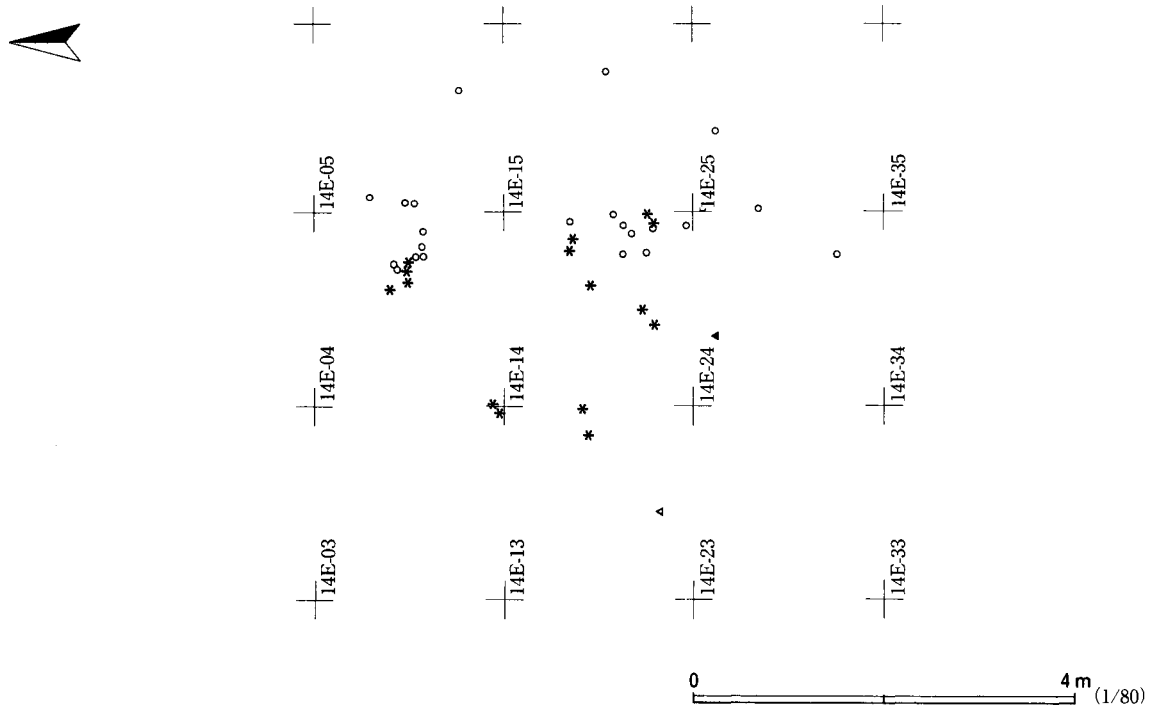
石材はメノウと安山岩の2種類を使用し、特に安山岩製の石器については、同ブロック内で剥片剥離が行われた形跡が顕著に把握できる。



第28図 第5ブロック器種別石器分布図

第8表 第5ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台石 形器	角錐状 石器	掻器	削器	ヒリス・ エスケ	彫刻刀 形石器	削片	R・ フルツ	U・ フルツ	剥片	砕片	剥片 片用核	石核	石斧	徹石	礫	計
メノウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	8	-	-	-	-	-	15
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17.5%	20.0%	-	-	-	-	-	37.5%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	1	-	-	18	23
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5.0%	5.0%	-	2.5%	-	-	45.0%	57.5%
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.5%	-	-	-	-	-	2.5%
流紋岩変	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2.5%	2.5%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	11	-	1	-	-	19	40
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	22.5%	27.5%	-	2.5%	-	-	47.5%	100.0%



第29図 第5ブロック石材別石器分布図

出土遺物

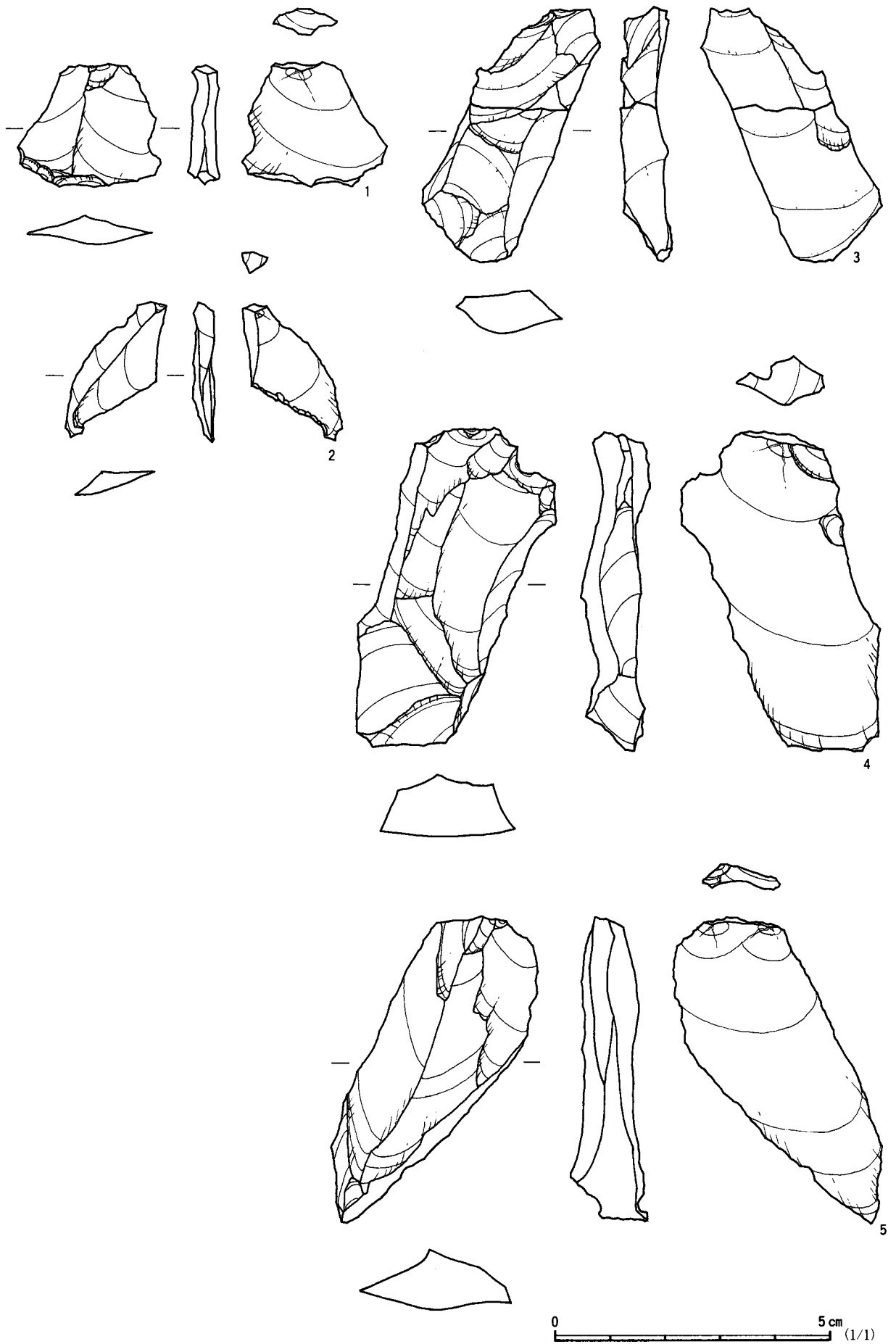
1～5はメノウ製の剥片である。1・2については小型で形状も一定ではなく、剥片剥離の際に意図せず現形状となったものか、あるいは石核整形、打面再生などの素材剥片を得る目的ではない剥離により作出された剥片であろう。3～5は縦長剥片であり、表面にみられる剥片剥離時の剥離の打点の方向はほぼ主要剥離面の打点の方向と同一である。末端部や側縁部には方向の異なる剥離もみられるが、これは石核整形による剥離痕と考えられる。いずれも打面に対して剥片の長軸が傾いており、逆三角錐に近い形状の石核から作出された剥片であり、接合関係はないが極めて近い部位の剥片と考えられる。

6・7は安山岩製の剥片である。

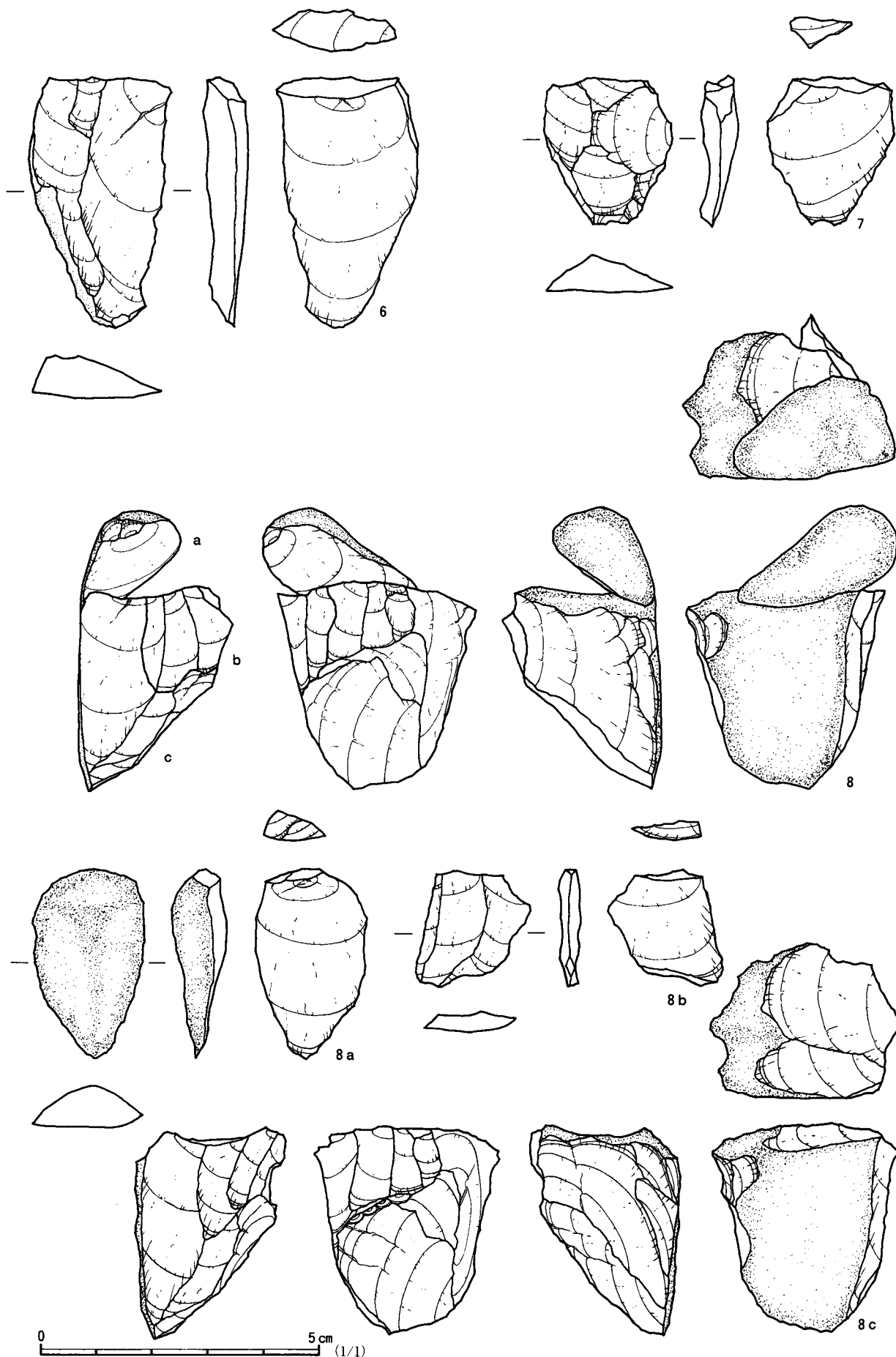
6は縦長剥片で表面にみられる剥離の方向から、同一方向の打面から連続的に剥片を作出しているようすが窺える。ただしこの剥片が作出された打面とは異なり、6の剥片は打面再生後に最初に作出された剥片でであることが窺える。

7は縦長剥片ではないが、6と同様の剥片剥離の段階で作出された剥片であり、結果としてこのような形状になったものである。

8は安山岩製の接合資料である。石核に打面再生剥片と剥片が接合している。石核の裏面には原石面が大きく残り、加えて打面再生剥片の表面の原石面のようにすから、母岩の大きさはさほど大きくなく拳大ほどのものであることが想定できる。打面再生は2回行われた痕跡が認められ、接合している打面再生剥片は最初の打面再生の際の剥片である。8bの表面にみられる剥離は、この打面再生が行われた後の打面から作出された剥片の痕跡であり、8bの剥片自体は次の打面再生後の打面から作出されている。石核は逆三角錐に近い形状であり、大きさは異なるが、前述したメノウ製の剥片が作出された石核も、この安山岩製の石核と同様の形状であると考えられる。



第30図 第5ブロック出土遺物(1)



第31図 第5ブロック出土遺物(2)

第9表 第5ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第30図	1	14E-13, 3	剥片	メノウ	2.20	2.56	0.58	3.06	
	2	14E-04, 6	剥片	メノウ	2.44	1.80	0.42	1.09	
	3	14E-04, 10	剥片	メノウ	2.50	1.72	0.77	9.46	
	4	14E-14, 10	剥片	メノウ	5.72	3.75	1.37	19.00	
	5	14E-14, 1	剥片	メノウ	5.37	3.83	1.40	15.52	
第31図	6	14E-25, 1	剥片	安山岩	4.50	2.48	0.80	8.94	
	7	14E-14, 13	剥片	メノウ	2.20	2.80	0.74	4.36	
	8	接合資料		安山岩				40.65	
	a	14E-14, 8	剥片		3.27	1.96	1.03		
	b	14E-05, 1	碎片		2.00	2.00	0.43		
	c	15E-15, 2	石核		3.68	3.39	2.73		

第6ブロック (第32～34図 第10・11表 図版7・24)

調査区やや北よりの台地平坦面に位置し、今回の調査で出土した旧石器時代石器集中地点のなかで、最も標高の高い地点に位置するブロックである。

ブロックは小規模で、総計15点の石器が直径4mほどの円内に散漫に分布している。上層からの攪乱がブロック直上にまで及ぶが、ブロック自体には影響はなく、出土層位はⅥ層からⅦ層にかけてであり、Ⅶ層の上部に属すると考えられる。

定型的な石器は含まれず、黒曜石製の調整痕の認められる剥片1点の他は剥片、碎片である。石器の石材は黒曜石がほとんどを占め、他のチャート、珪質頁岩はそれぞれ1点出土するのみで極めて客体的である。

剥片はほとんどが部厚であり、形状も一定ではない。打面の位置を頻繁に換え剥片剥離を行っていたことが明確であるが、一部の剥片の打面には微細な打面再生痕が顕著にみられ、打面再生を行いながら剥片を作出していたことが窺える。

出土石器

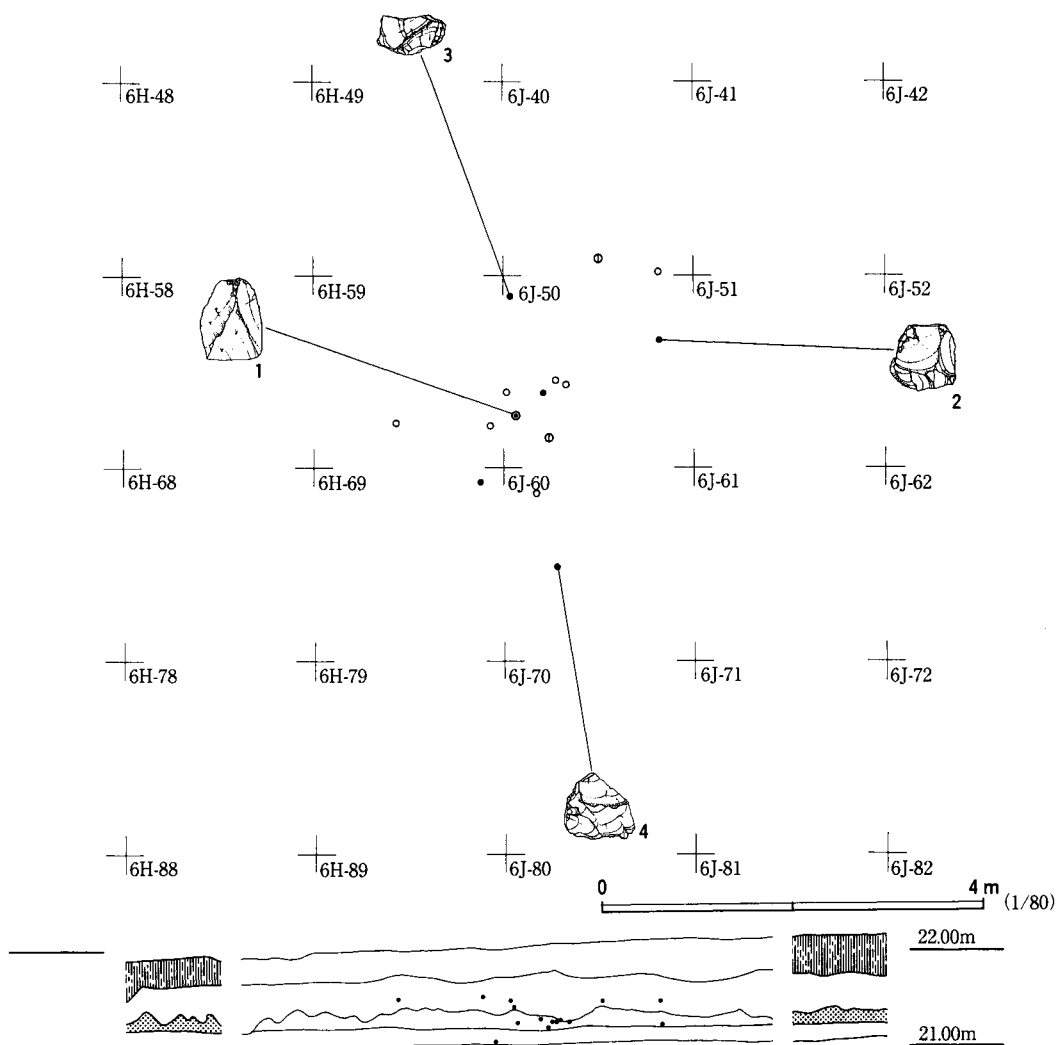
1は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。部厚な剥片であり、調整は打面付近の両側縁の主要剥離面側に施される。部分的でかつ簡単な調整であるが、刃部作出を目的とした調整であろう。打面には細かい打面再生痕を顕著にみることができ、剥片剥離の際には丁寧に打面再生が行われていたことが考えられる。また微細ながら頭部調整も確認でき、剥片表面の剥離の方向には企画性がみられないが、技術的に明確な基盤をもっているといえよう。

2は珪質頁岩製、3・4は黒曜石製の剥片である。

2の頁岩製の石材は第6ブロックのみならず、第3文化層においても極めて客体的であり、搬入品と考えられる。剥片の形状は縦横がほぼ同寸の部厚な作りであり、剥片の表面にみられる剥離のようすから、石質は異なるが黒曜石製の剥片と同じ技術基盤に基づいて作出された剥片と考えられる。

3は打面部が欠損しているが、主要剥離面に残る剥片末端部にまで及ぶバルパー・スカーから、剥片剥離の際に欠損したものと思われる。

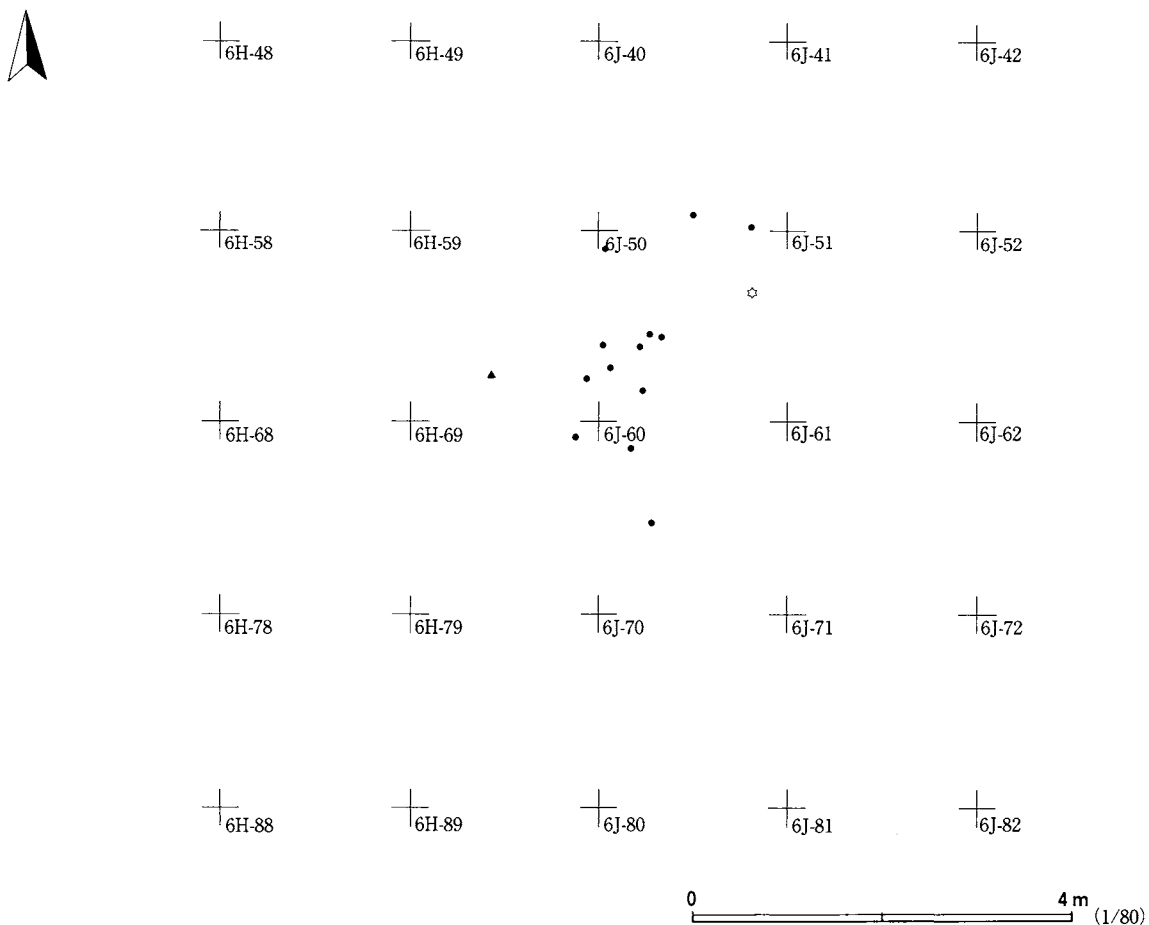
4は不定形の横長剥片で、やはり表面にみられる剥離の方向は一定していない。



第32図 第6ブロック器種別石器分布図

第10表 第6ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	挿 器	削 器	ビース ・ エース	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フリヤ	U・ フリヤ	剥 片	碎 片	剥 利 石	片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	鏢	計
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 6.7%	-	-	5 33.3%	7 46.6%	-	-	-	-	-	-	13 86.6%
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 6.7%	-	-	-	-	-	-	-	1 6.7%
珪質頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 6.7%	-	-	-	-	-	-	-	-	1 6.7%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 6.7%	-	-	6 40.0%	8 53.3%	-	-	-	-	-	-	15 100.0%



第33図 第6ブロック石材別石器分布図

第7ブロック (第35～37図 第12・13表 図版7・24)

調査区の南側、台地平坦部から緩斜面部に移行する地点に位置する。同一文化層の第4ブロックが20mほど南側に所在する。

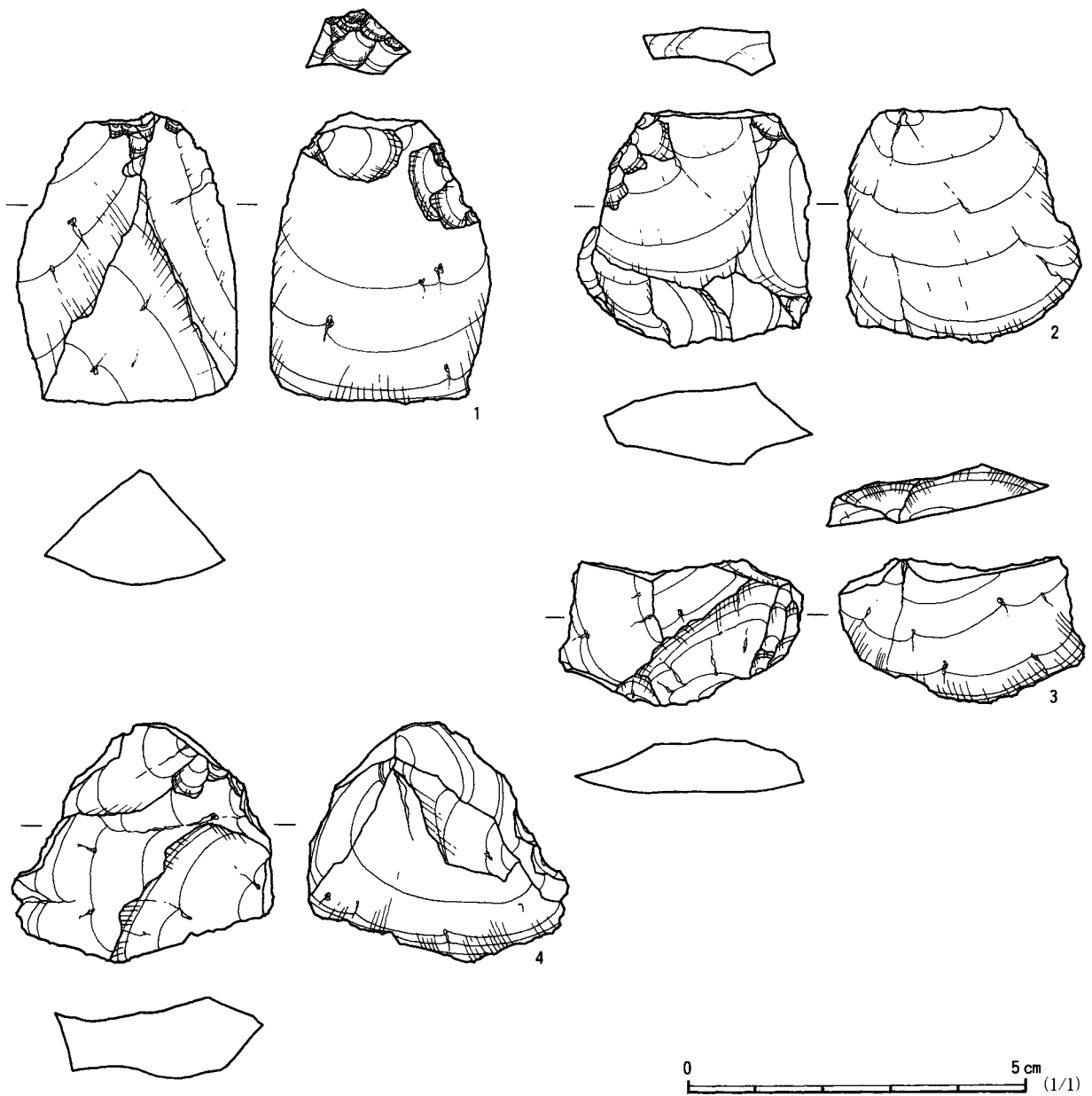
ブロックは小規模で、総計10点の石器が直径4mの円形の範囲内に散漫に出土する。出土層位はⅦ層の範囲内に収まり、Ⅶ層の上部に属するブロックと考えられる。

文化層を特徴づける定型的な石器は出土しておらず、剥片、碎片で占められる。石器石材は黒色の頁岩1点の他はすべてチャートである。

出土遺物

1はチャート製の剥片である。表面には原石面が残り、また両側縁にはこの剥片が作出された打面とは異なる位置、石核を中心とした場合、裏側の90°傾けた位置に設定された打面からの剥離が顕著にみられる。剥片剥離工程の初期段階に作出された石核整形剥片と考えられるが、少なくとも最初に剥片剥離を行った2回目以降の石核整形剥片である。

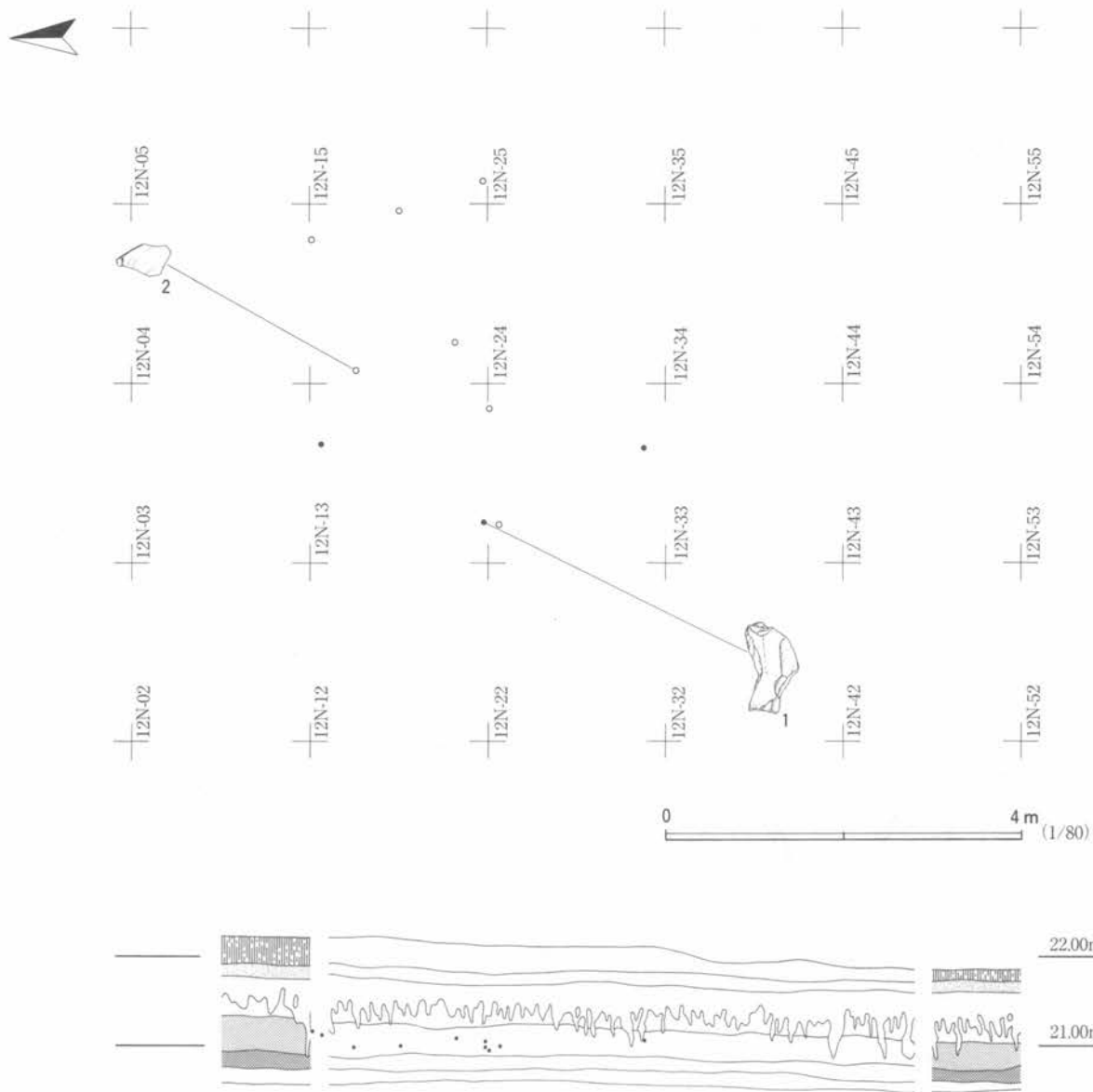
2は頁岩製の小型の剥片である。第7ブロックでは頁岩製の石器はこの1点のみで、搬入品と考えられる。定型的な石器が共伴していないため、定型的な石器の素材剥片の形状、大きさはわからないが、それとして活用するには小型すぎる感があり、素材剥片の搬入とはまた異なるものと思われる。



第34図 第6ブロック出土遺物

第11表 第6ブロック石器観察表

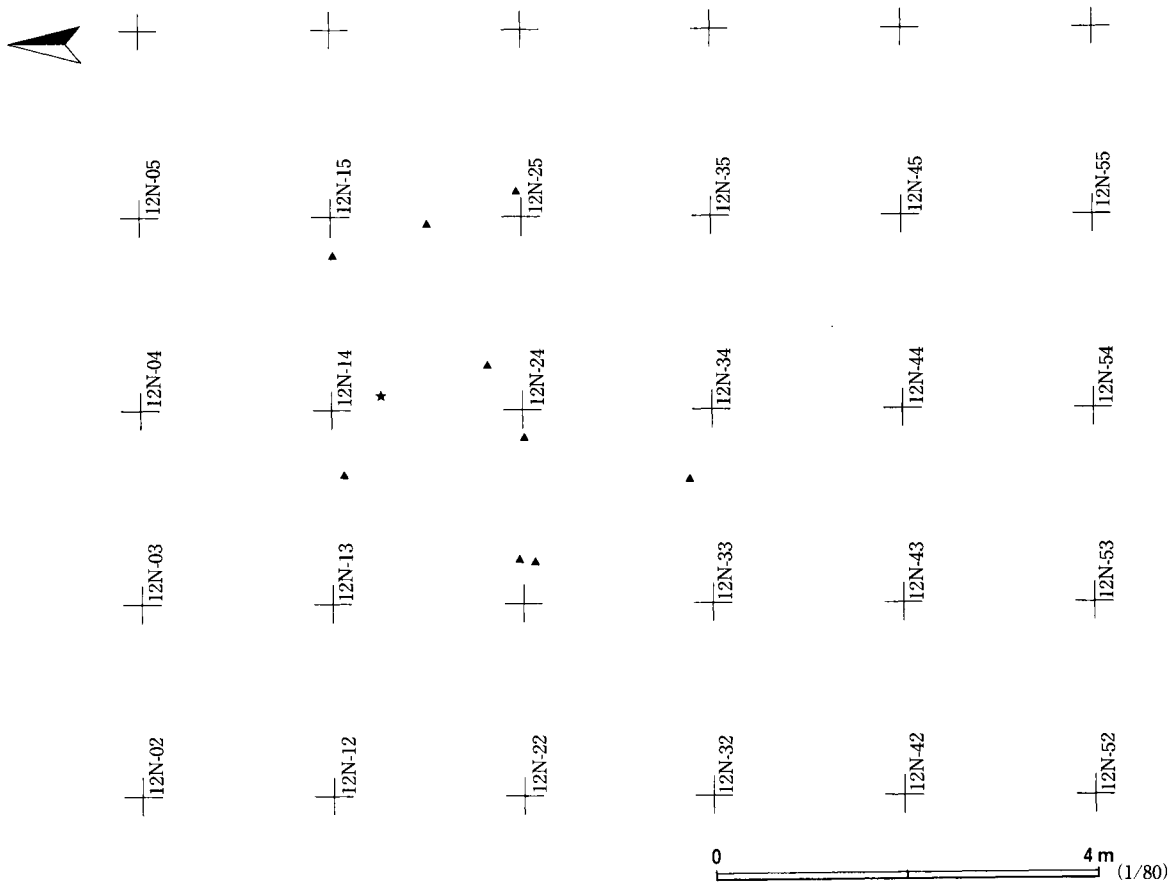
挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第34図 1	6J-50, 8	調整痕ある剥片	黒曜石	4.30	3.27	1.66	19.69	
2	6J-50, 6	剥片	珪質頁岩	3.45	3.55	1.33	15.77	
3	6J-50, 2	剥片	黒曜石	3.49	3.88	1.25	16.46	
4	6J-60, 2	剥片	黒曜石	3.35	3.99	1.33	17.09	



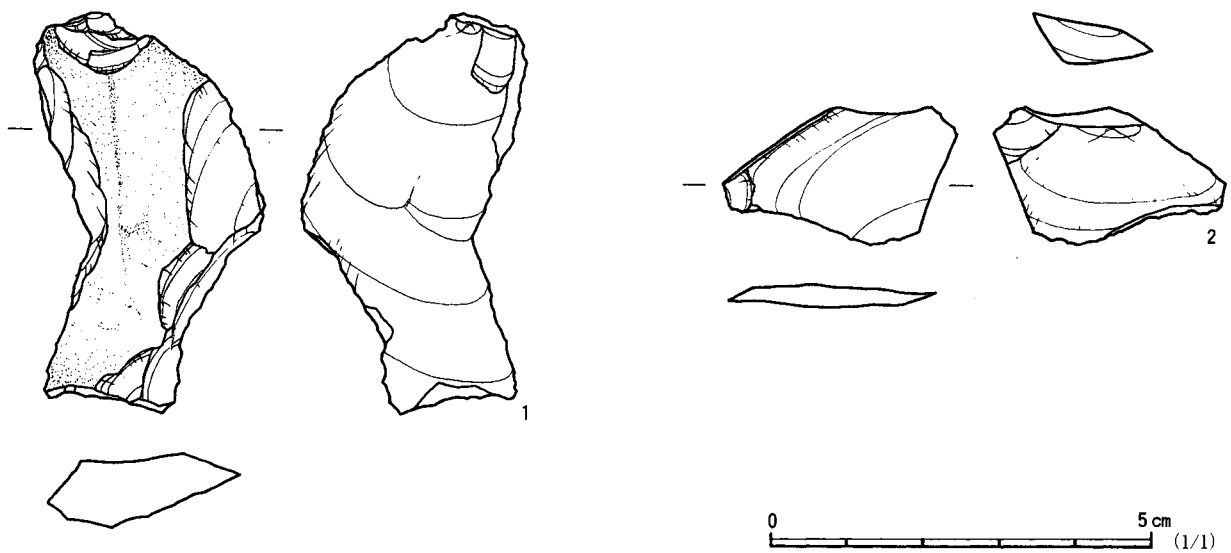
第35図 第7ブロック器種別石器分布図

第12表 第7ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	礫石核	礫石刃	台石 形器	角錐状 石器	挿器	削器	ビリス エッジ	彫削刀 形石器	削片	R・ フルイ	U・ フルイ	剥片	砕片	剥片 用核	石核	石斧	敲石	礫	計
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	6	-	-	-	-	-	9
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	30.0%	60.0%	-	-	-	-	-	90.0%
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10.0%	-	-	-	-	-	10.0%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	8	-	-	-	-	-	10
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	30.0%	70.0%	-	-	-	-	-	100.0%



第36図 第7ブロック石材別石器分布図



第37図 第7ブロック出土遺物

第13表 第7ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第37図 1	12N-13, 2	剥片	チャート	5.23	3.38	1.17	17.96	
2	12N-14, 3	碎片	頁岩	1.75	3.10	0.54	2.40	

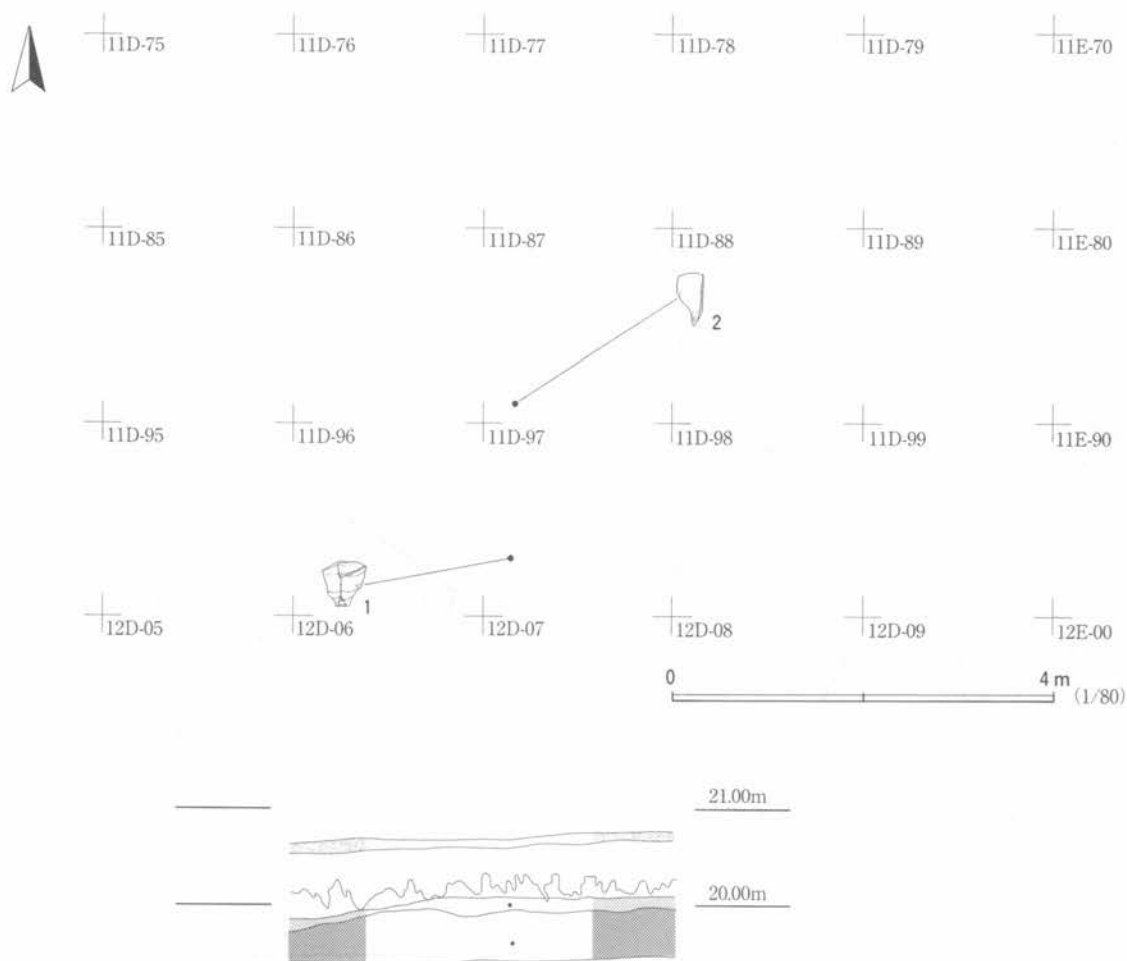
第8ブロック (第38～40図 第14・15表 図版7・24)

調査区の西側、標高21mの緩斜面部に位置し、わずか2点のみの小規模なブロックである。安山岩製の小型の剥片の他は定型的な石器の出土はみられなかった。出土層位はⅦ層とⅧ層であるが、土層断面にみられるようにⅦ層はかなり薄く分層されている。近接するブロックの土層断面ではⅦ層の厚みが20cmほどあるため、おそらく両者ともⅦ層に属すると考えられる。

出土遺物

1の剥片の形状は、長さ、幅ともにほぼ同じであり、部厚な感がある。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、末端部に小さく残る剥離を除いて同一方向であり、同一打面から連続的に作出された痕跡が窺える。この剥片の打面はかなり広く設定されており、また微細な打面再生痕が明瞭にみられる。剥片剥離工程の何回目かの打面再生の後に、最初に作出されたものであり、部厚な作りで稜が明瞭に残ることから、稜整形を目的とした石核整形剥片と考えられる。

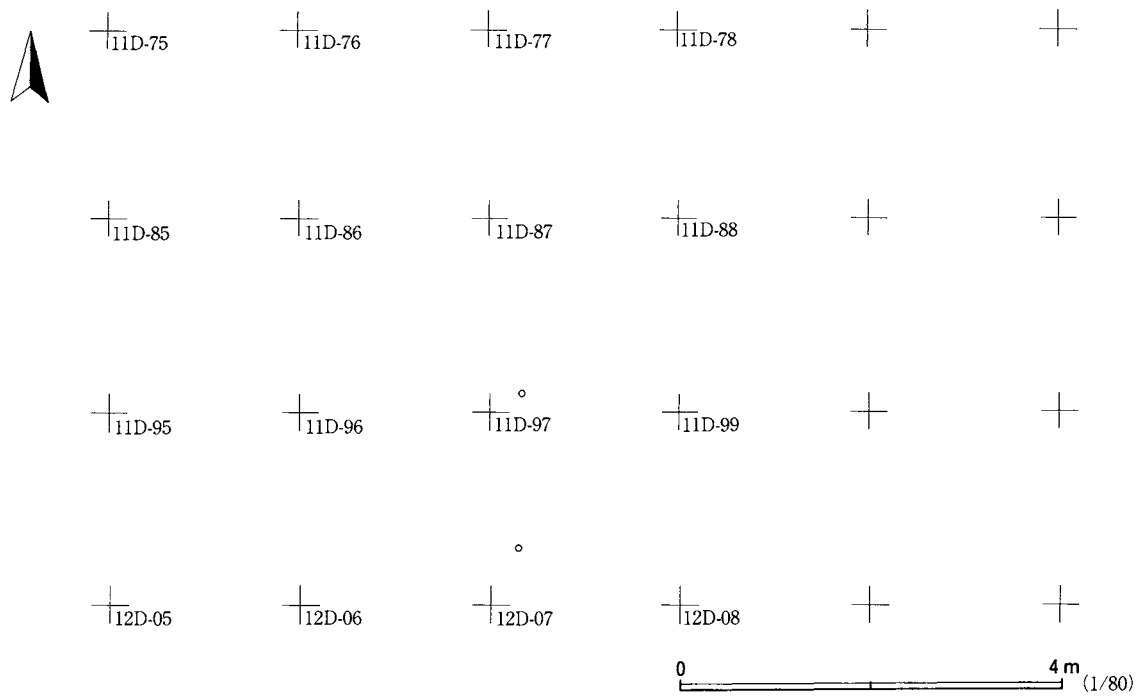
2の剥片の表面は全面原石面であり、剥片剥離工程の最初の段階に作出された剥片であることが窺える。



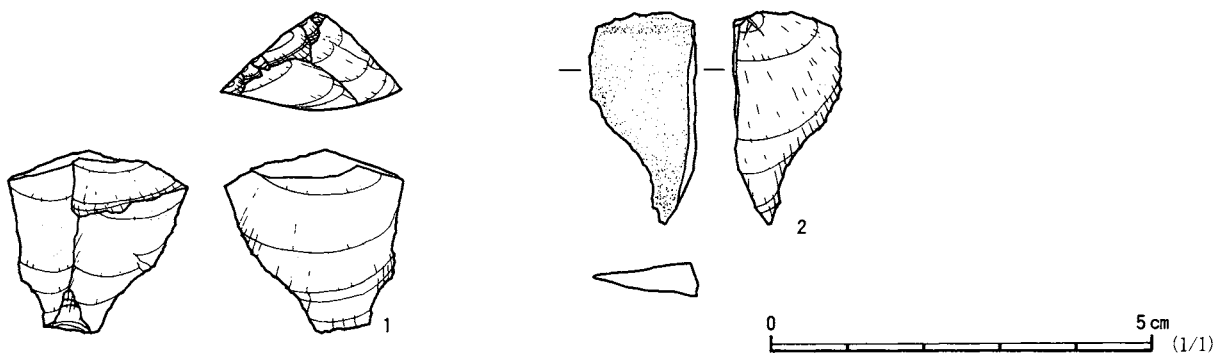
第38図 第8ブロック器種別石器分布図

第14表 第8ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角 錐 状 石 器	挿 器	削 器	ヒ ス タ ス ト	彫 刻 刀 形 石 器	削 片	R ・ フ レ イ	U ・ フ レ イ	剥 片	砕 片	剥 片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計	
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	2
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50.0%	50.0%	-	-	-	-	-	-	100.0%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	2
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	50.0%	50.0%	-	-	-	-	-	-	100.0%



第39図 第8ブロック石材別石器分布図



第40図 第8ブロック出土遺物

第15表 第8ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第40図 1	11D-97, 1	剥片	安山岩	2.36	2.37	1.28	5.09	
2	11D-87, 1	剥片	安山岩	2.72	1.47	0.49	1.55	

(4) 第4文化層

第4文化層に属するブロックは、第9・第10ブロックの2ブロックであり、VI層に属する文化層である。

2ブロックのため立地的な共通点は明確ではないが、調査範囲の西側の緩斜面が終わり、谷にむかって急激に角度を増す直前に所在する。

両ブロックともに、形状の違いはあるが縦長剥片素材のナイフ形石器が出土し、このナイフ形石器が文化層を特徴づける石器として挙げる事ができる。

第9ブロックは総計8点、第10ブロックは総計5点と、両者とも小規模なブロックであるが、石器に使用される石材は出土点数の割には多種であり、安山岩、凝灰岩、黒曜石、珪質頁岩、流紋岩が使用されてい

る。各石材の特徴は以下のとおりである。

安山岩：器表面は、原石面、剥離面ともに水和層が発達しているため黄土色を呈し、欠損面は黒色を呈する。風化面、欠損面ともにきめは細かく、風化面はざらざらした感があるが、欠損面は光沢がある。

凝灰岩：色調は黒色または暗灰色を呈する。きめは細かく原石面はすべすべしている。剥離面は若干光沢があるが、前述した安山岩の欠損面の光沢ほどではない。

黒曜石：色調は黒色で、0.3mmほどの黄土色の夾雑物を多く含む。黒色のガラス質部分は光沢があるが透明感はない。

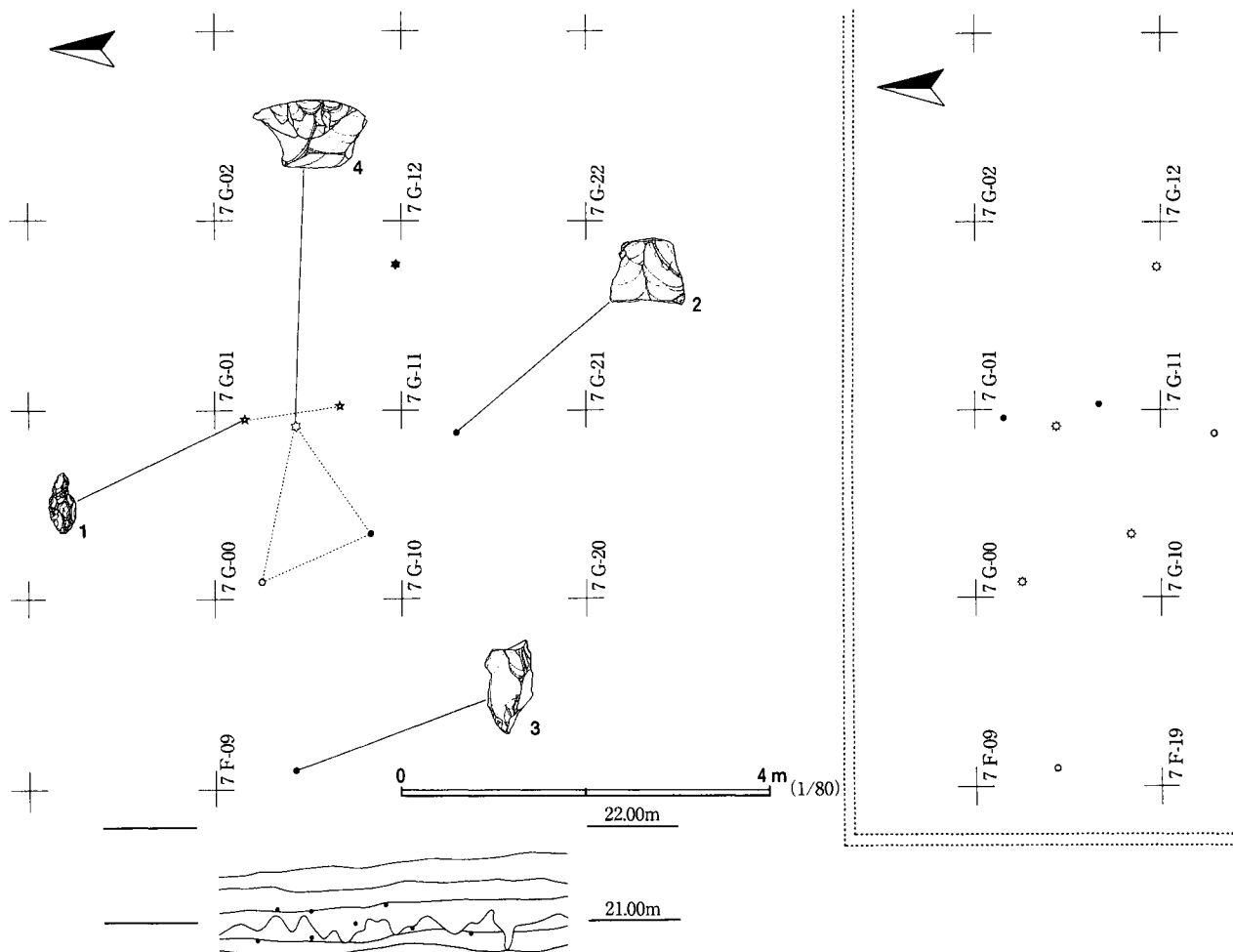
珪質頁岩：色調は淡黄褐色もしくは黄色がかった褐色を呈する。きめは細かく夾雑物は含まない。器表面はすべすべしている割には光沢はあまりない。

流紋岩：色調は暗灰色を呈する。極めて部分的で少量であるが、カンラン石、石英粒を含む。きめは細かいが光沢はなく、質感に反し持った感じが軽い。

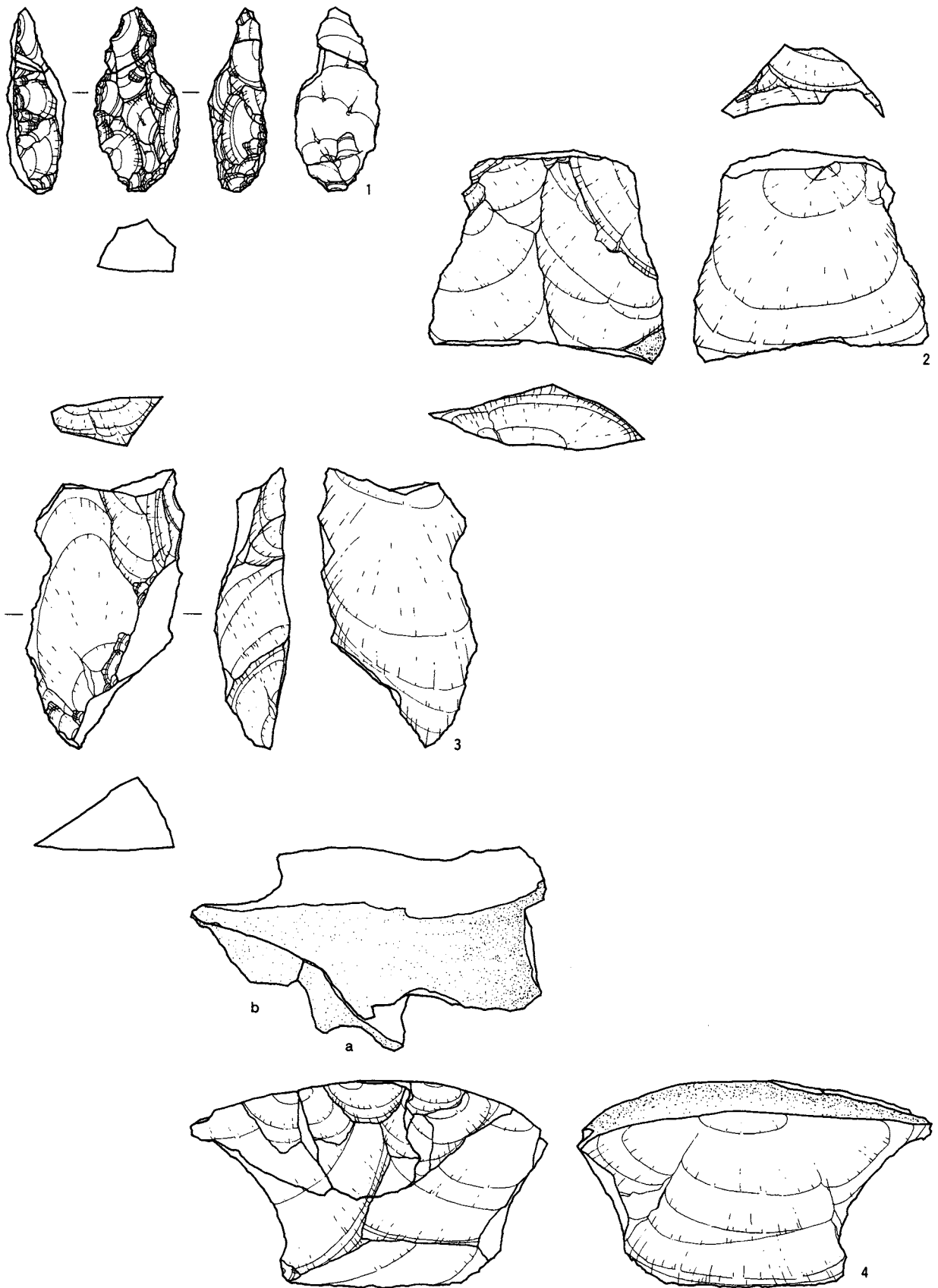
第9ブロック（第41・42図 第16・17表 図版8・24・25）

調査区の北寄り、台地が浅い谷に開析された縁辺部に位置する。この付近の標高は22mほどである。

石器の出土総点数は8点で長径6m、短径3mの長楕円形状の範囲に散漫に分布している。定型的な石器は、黒曜石製のナイフ形石器が1点のみで、他は剥片、碎片、石核である。



第41図 第9ブロック器種別・石材別石器分布図



第42図 第9ブロック出土遺物

第16表 第9ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 石 形 器	角錐状 石 器	掻 器	削 器	ヒリス エサ-3	彫刻刀 形石器	削 片	R- フリヤ	U- フリヤ	剥 片	碎 片	剥 片 利 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計	
黒曜石	1 14.3%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 14.3%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 28.5%	-	-	-	-	-	-	-	2 28.5%
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 14.3%	1 14.3%	1 14.3%	1 14.3%	-	-	-	-	4 57.2%
計	1 14.3%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3 42.8%	1 14.3%	1 14.3%	1 14.3%	-	-	-	-	7 100.0%

第17表 第9ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第42図	1	7 G-00, 4 7 G-01, 2	ナイフ形石器	黒曜石	3.31	1.50	0.99	3.86	
	2	7 G-10, 1	剥片	安山岩	3.70	4.10	1.44	20.93	
	3	7 F-09, 1	剥片	安山岩	4.50	3.10	1.39	14.58	
	4	7 G-00, 3	剥片利用石核	凝灰岩	4.60	6.10	1.80	49.29	
	a	7 G-00, 5	剥片	凝灰岩	2.10	2.40	0.53		
	b	7 G-00, 1	剥片	凝灰岩	2.40	2.50	0.54		

石器に使用される石材は安山岩、凝灰岩で、凝灰岩については接合関係がみられたが、剥片剥離技術を明確にできるまでには至らない資料である。安山岩は剥片2点が出土するのみで、素材剥片としての搬入が考えられる。また黒曜石についても製品としての搬入品であると考えられる。

出土遺物

1は黒曜石製のナイフ形石器である。小型で部厚な作りである。調整は素材剥片の末端部の一部を除くほぼ全周にわたって施され、すべて主要剥離面からの急角度のブランティングで行われている。表面は調整痕が顕著にみられ、素材剥片が作出された時の剥片剥離の痕跡がごく一部の剥離でしか読みとることができない。実測図正面図の上方からの剥離、素材剥片としては末端部の方向からの剥離がわずかに残る程度である。主要剥離面の状況と、調整が施される以前の素材剥片の形状を考えると、上下両端に打面を設定した石核から連続的に剥片を作出していることが窺える。結果として縦長剥片の作出と、縦長剥片を素材としたナイフ形石器の製作を目的としていることが理解できる。

2・3は安山岩製の剥片である。2は剥片の末端部を、3は剥片の打面側をそれぞれ折断しており、折断した後に搬入されたものである。両者とも折断される以前は縦長剥片と思われ、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は同一方向あるいは上下からであり、連続的に作出された縦長剥片と考えられる。いずれも部厚な剥片であるが、1のナイフ形石器とほぼ厚みは同じであり、ナイフ形石器の製作を目的として搬入された素材剥片と考えられる。

4は凝灰岩製の接合資料である。大型の剥片に小型の剥片が接合している。表面には剥片剥離時の細かい剥離がみられるが、同ブロック内には碎片等は存在しない。このため大型の剥片を搬入しそれより剥片を作出したのと考えられる。

第10ブロック（第43～45図 第18・19表 図版8・25）

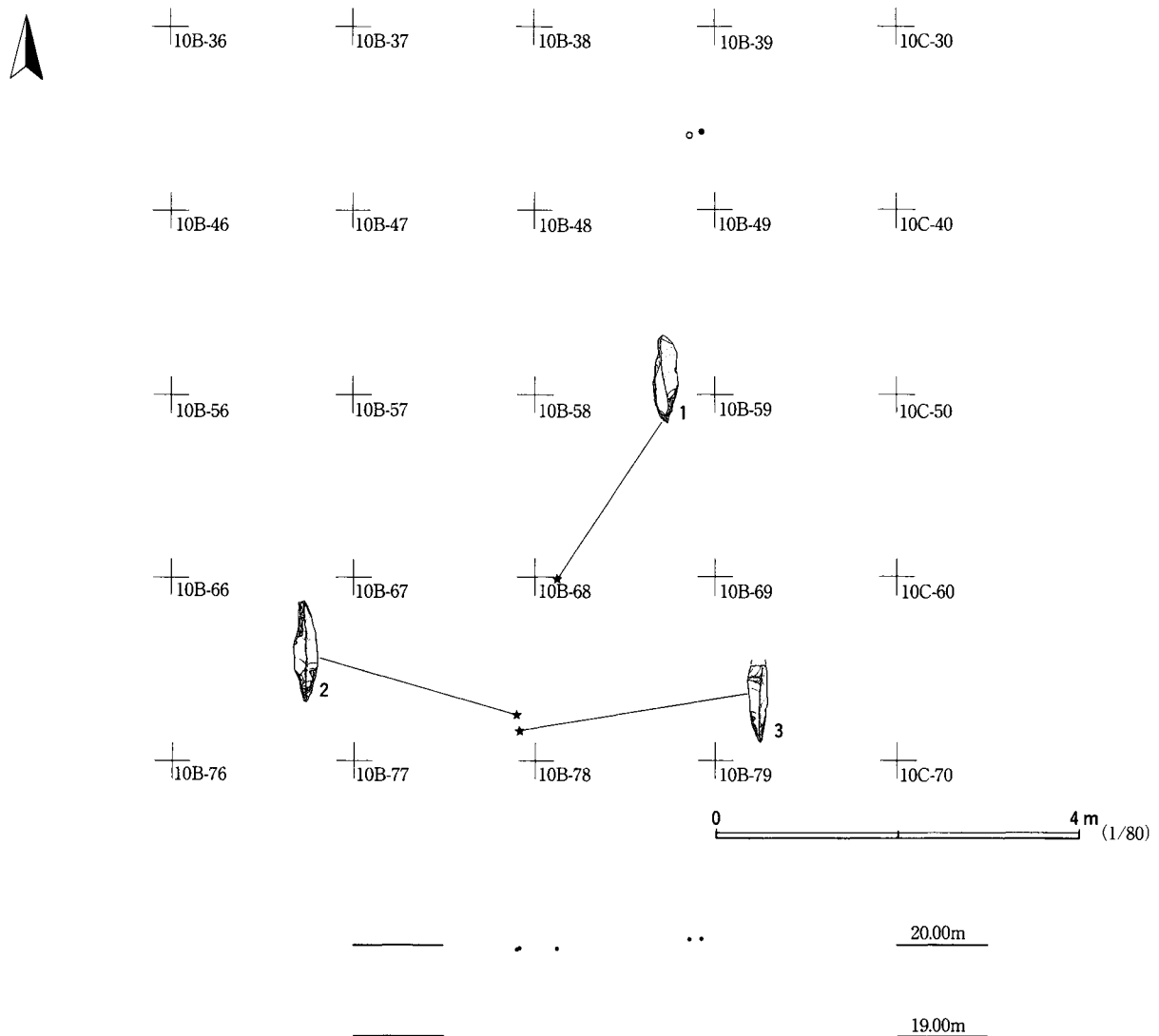
調査区の西側、台地縁辺部に所在し、標高は20mほどである。今回の調査で検出した石器集中地点のうち、

最も西側に位置するブロックである。

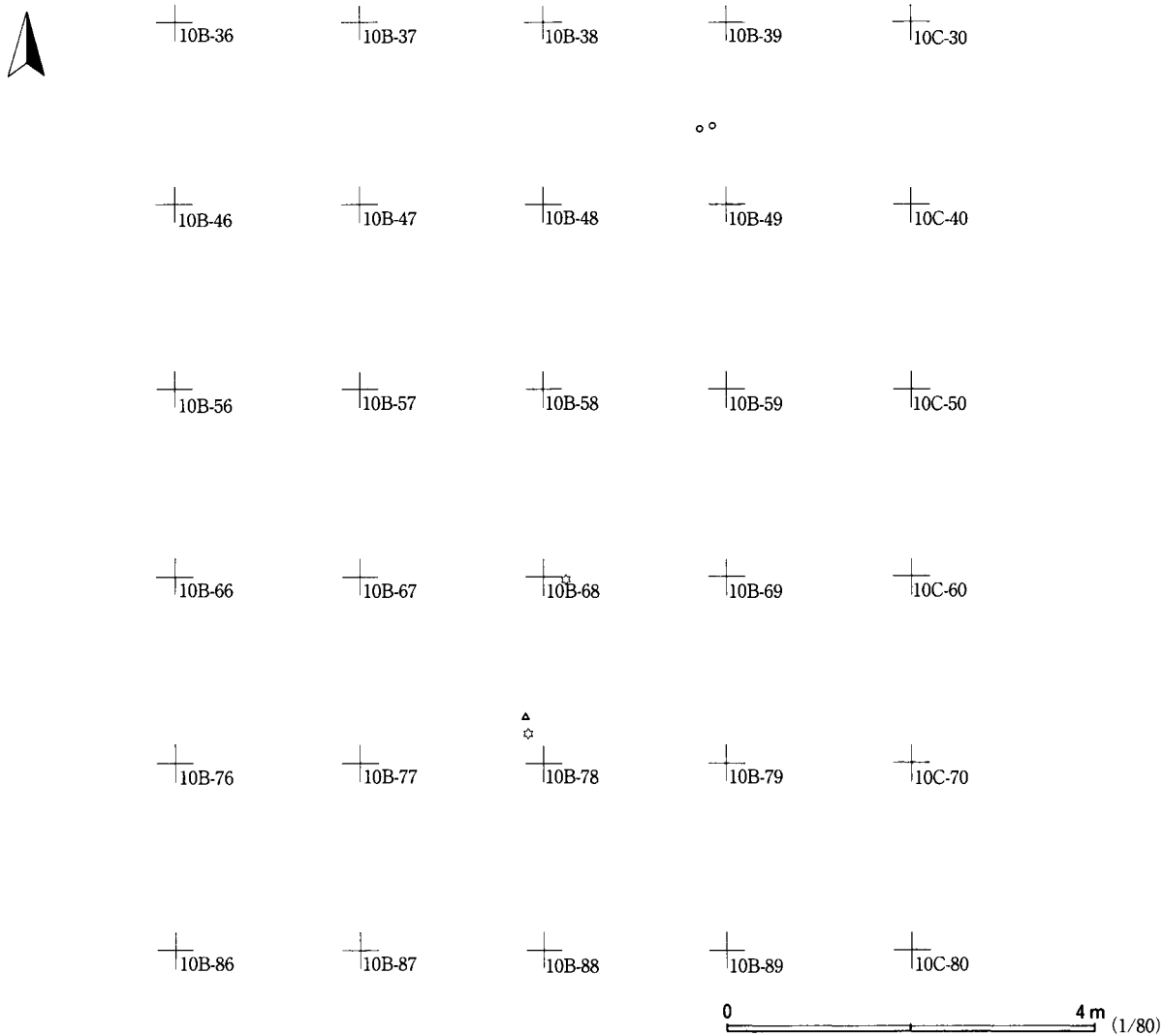
総計5点の石器のうちナイフ形石器が3点を占め、他は剥片、碎片であり、明確な剥片剥離が行われた痕跡はない。石器に使用される石材は、ナイフ形石器2点が珪質頁岩製、1点が流紋岩製であり、他の剥片、碎片は安山岩製である。

出土遺物

1・2は珪質頁岩製、3は流紋岩製のナイフ形石器である。3のナイフ形石器は先端部が欠損している。3点ともに素材剥片の打面側を基部とし、1は左側縁のほぼ全部と右側縁の基部、2・3は基部側の両側縁および先端部の片側縁に調整が施される。1・2の素材は同一母岩から作出された剥片であり、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、すべて主要剥離面の打面の方向と一致し、単一打面から連続的に作出された剥片であることがわかる。これに対し3は上下両端に打面を設定した石核から作出された剥片であることが先端部側に残る剥離から窺える。いずれも小型石刃状剥片の作出を目的としており、剥片剥離技術においては大きな差はない。



第43図 第10ブロック器種別石器分布図



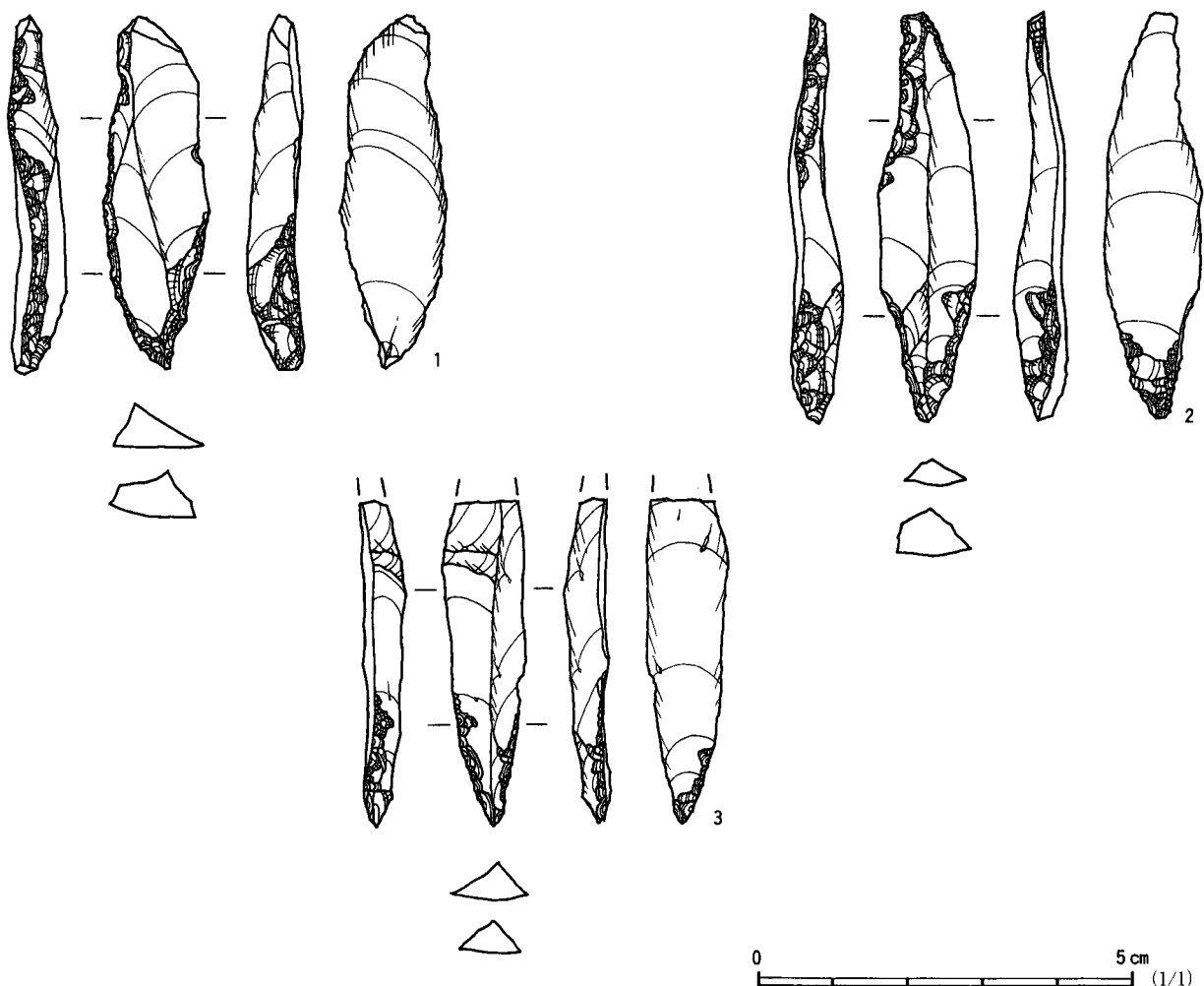
第44図 第10ブロック石材別石器分布図

第18表 第10ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	挿 器	削 器	ビース・ スリヤ	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フリヤ	U・ フリヤ	剥 片	砕 片	剥 利 石	片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
	安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%	1 20.0%	-	-	-	-	-	-
珪質頁岩	2 40.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 40.0%
流紋岩	1 20.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%
計	3 60.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%	1 20.0%	-	-	-	-	-	-	5 100.0%

第19表 第10ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第45図	1	10B-68, 1	ナイフ形石器	珪質頁岩	4.75	1.97	0.62	3.76	二側縁加工。
	2	10B-67, 1	ナイフ形石器	珪質頁岩	5.47	1.33	0.61	3.17	裏面基部調整。
	3	10B-67, 2	ナイフ形石器	流紋岩	4.27	1.15	0.50	2.08	裏面基部調整。



第45図 第10ブロック出土遺物

(5) 第5文化層

第5文化層に属するブロックは、第11ブロックと第12ブロックの2ブロックが近接して検出している。出土層位は、ソフトロームの直下からVI層の上面までと幅広いが、V層付近に帰属する文化層と考えられる。

出土した石器のなかで、定型的な石器はナイフ形石器が挙げられ、各ブロック内で素材剥片を作出し調整を加え製品化していることが明確である。また第11ブロックからは、石材と素材剥片の作出の両面から、明らかに搬入品とわかるナイフ形石器が出土している。これは横長剥片の打面部に調整を加えたもので、西日本を中心とした瀬戸内技法に基づく国府型ナイフ形石器に酷似している。石器に使用される石材は多種であり、珪質頁岩、黒曜石、変成岩、メノウなどがあり、特に珪質頁岩製の石器の比率が高くなる傾向がみられる。以下、各石質の特徴を記す。

チャート：第11ブロックで出土したものは青灰色を呈し、節理はほとんどみられない。きめは細かく光沢がある。第12ブロックのものは青灰色を基本とし、青色、深緑色の部位がみられる。節理が混入し、一部の節理面は淡黄褐色を呈する。

珪質頁岩A：原石面は淡黄褐色、剥離面は褐色を基本とし暗褐色、淡黄褐色の部位が層状にみられる。きめは細かく光沢があり、夾雑物はほとんど含まない。

珪質頁岩B：色調は白色もしくは明灰色であり、ごく少量であるが黒色の微粒子を含む。きめは細かく光沢がある。

頁岩：色調は暗褐色を呈する。碎片のみのため観察しづらいが、きめが細かい割には光沢がさほどみられない。

黒曜石：色調は黒色であるが、透明感がなくやや濁る感がある。0.3mmほどの夾雑物を多く含む。

変成岩：礫と剥片石器の両者が出土するが、双方ともに石質の違いはみられない。色調は黒色もしくは暗灰色を呈し、原石面には無数の細かい凹凸がみられる。きめは細かく均一であるが光沢はなく、むしろざらつく感がある。

メノウ：色調は乳白色もしくは半透明であり、オレンジ色の部分が所々に混入する。きめは細かく光沢がある。

凝灰岩：色調は器表面は青みがかった乳白色、欠損面は青みがかった暗灰色を呈する。水和層が発達し器表面はざらざらしている。質感に反し持った感じが重い。

砂岩：礫のみの出土で、表面は被熱し赤化しているため本来の色調はわからない。岩石を構成する粒子は細かく0.3mmほどである。

第11ブロック（第46～51図 第20・21表 図版25～27）

調査区の西側、台地の緩斜面部に位置し、北側には小規模な浅い谷が入り込む。同一文化層に属する第12ブロックに近接する。出土層位はソフトローム層直下からVI層にかけてであり、V層に属すると考えられる。

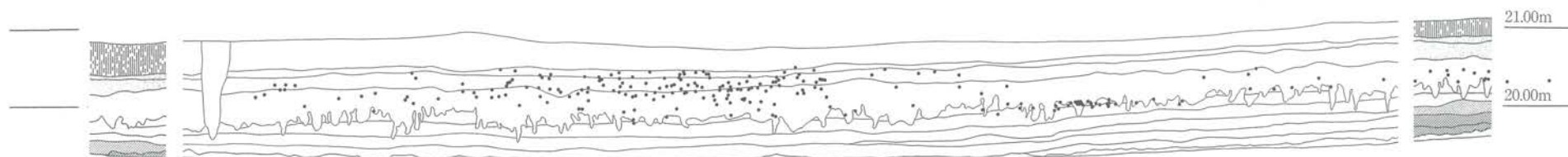
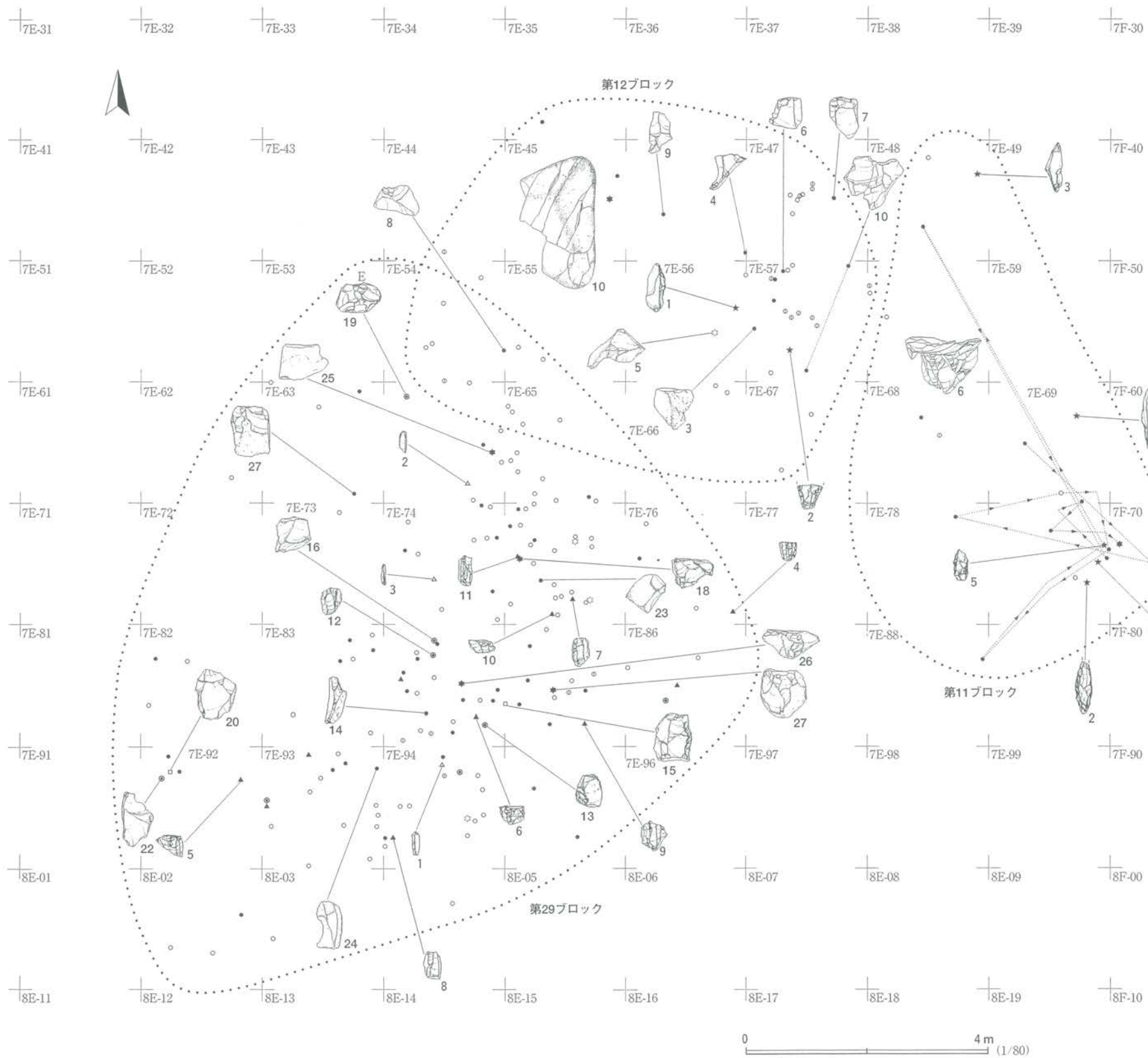
石器は長径8m、短径4mほどのいびつな長楕円形状に分布しており、特に南側に集中する箇所がみられる。その他の範囲内では散漫であり、谷にむかって流れ出たような感がある。

定型的な石器はナイフ形石器が挙げられ、計5点出土している。このうちチャート製の2点は他に同石質の剥片、碎片等は見られず、製品としての搬入品と考えられる。他の3点のナイフ形石器は珪質頁岩製で、第11ブロックで確認された珪質頁岩製の接合資料と同一母岩であり、同ブロック内で剥片剥離の段階から製作されたものである。

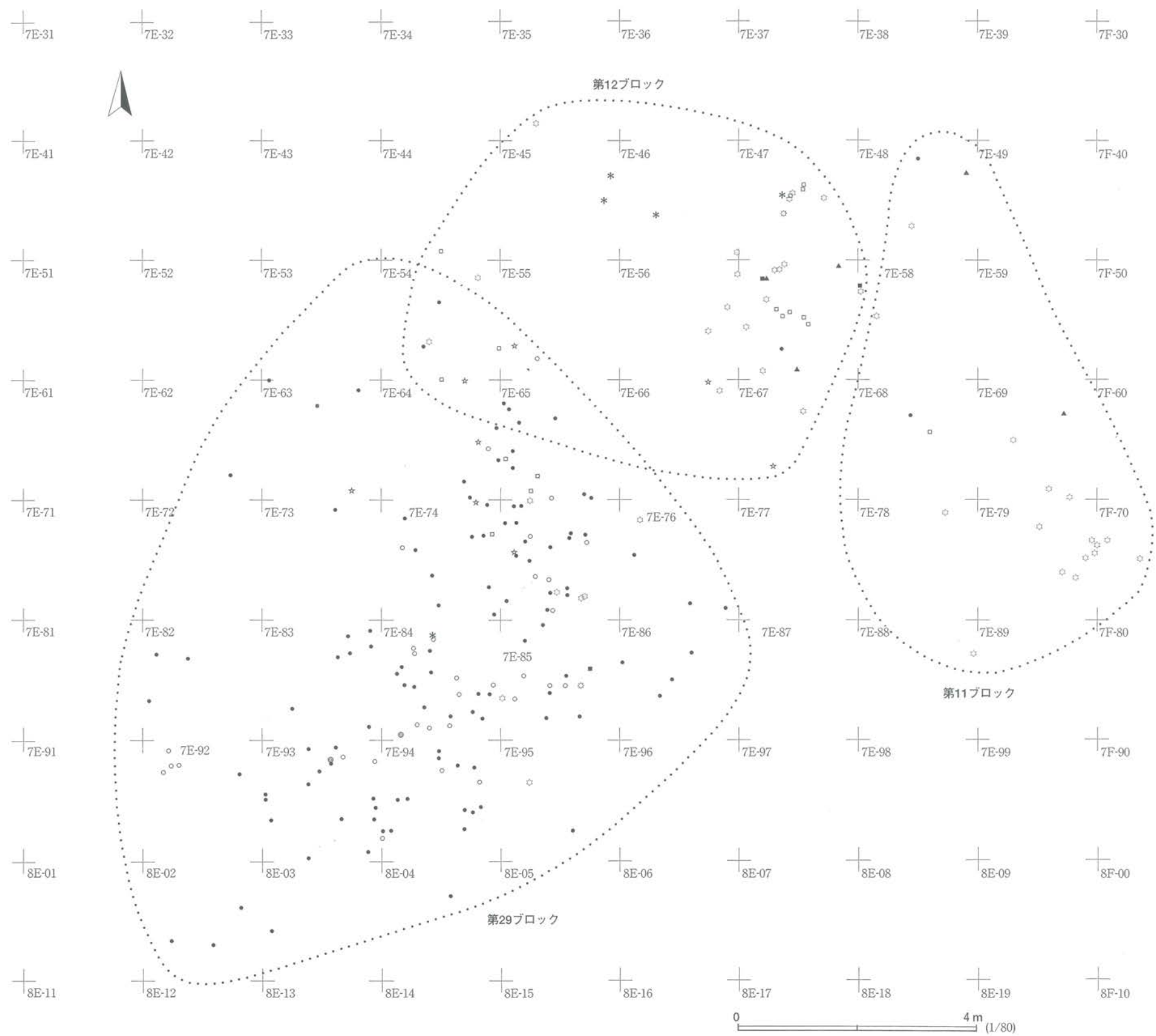
出土遺物

1～5はナイフ形石器である。

1はチャート製で、横長剥片を素材としている。打面方向から観察すると主要剥離面が極端に湾曲して見える。素材剥片の表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、素材剥片の打面の方向とすべて一致しており、また各々の打面の位置もほとんどこの素材剥片の打面の位置とはほぼ同一と考えられる。この形状とはほぼ同様の素材剥片を連続的に作出する意図が明確であり、いわゆる『翼状剥片』として考えて良いであろう。調整部位はこの素材剥片の打面および打面側の側縁全部に施され、打面を除去するように急角度のブランディングが施される。また基部調整として剥片末端部の一部にも調整を施し製品とし、横長剥片の末端部を無調整部位の刃部としている。その形状から瀬戸内技法による剥片剥離が行われ、製品を作出した『国府型ナイフ形石器』であると判断できる。ただし、第11ブロックからは1のナイフ形石器以外は、瀬戸内技法に基づき作出されたと考えられるナイフ形石器はなく、3の同石材のナイフ形石器も翼状剥片を素材として作出されたものではない。



第46図 第11・12・29ブロック器種別石器分布図



第47図 第11・12・29ブロック石材別石器分布図

第20表 第11ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台形 石器	角錐状 石器	掻器	削器	ビュス・ ヌス	彫刻刀 形石器	削片	R・ フルク	U・ フルク	剥片	砕片	剥片 石核	片錐 核	石核	石斧	敲石	礫	計
チャート	2 10.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 10.0%
珪質頁岩	3 15.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9 45.0%	2 10.0%	-	1 5.0%	-	-	-	-	15 75.0%
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 5.0%	1 5.0%	-	-	-	-	-	-	2 10.0%
菱成岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 5.0%	1 5.0%
計	5 20.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10 50.0%	3 15.0%	-	1 5.0%	-	-	-	1 5.0%	20 100.0%

3のナイフ形石器は不定形の縦長剥片を素材としており、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、素材剥片の作出された打面の方向と異なり、一定ではない。調整は縦長剥片の打面に施されるが、その他に剥片の末端部の一部を折断、除去し、その折断面の一部に表面側、主要剥離面側の両面から調整が施されている。このため最終的な石器としての形態も1のナイフ形石器と異なり、同石材であっても同じような剥片剥離、製品加工の段階を経て作出された石器とは考えられない。おそらく瀬戸内技法を意識していたであろうが、その技術は定着していなかったためと考えられる。しかしこの点はチャート製の石材を使用した石器は、このナイフ形石器2点のみであり、他の素材剥片や調整剥片等もまったくみられないため、製品としての搬入品と考えられ、剥片剥離技術について断言するには早計すぎる。

2のナイフ形石器は、その色調などから、後に記述する珪質頁岩製の接合資料と同一母岩と考えられる。横長剥片を素材とし、素材剥片の打面側と末端部のほぼ全周に調整が施され、製品としての形状は1の国府型ナイフ形石器と類似する。しかし瀬戸内技法に基づく剥片剥離が行われた形跡は、接合資料や2のナイフ形石器の素材剥片の形状からは窺えず、2の素材剥片は横長剥片ではあるが、その末端部は鋭利な断面形状とはならず、やや厚みのある形状と考えられる。このため形状を整えるために折断、または図にみられるような急角度の調整を施さざるを得なかったものと思われる。また表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は素材剥片の打面の方向とは異なり、このことから珪質頁岩製の資料については、瀬戸内技法に基づく剥片剥離が行われていたとは考えられない。

4は小型の不定形剥片を素材とし、素材剥片の打面を除去するように調整が施される。また末端部にも調整が施されるため、素材剥片の鋭利な縁辺部はまったく残されていない。ナイフ形石器よりも小型の尖頭器様石器といった感がある。この石器の素材剥片からも定型的な横長剥片の作出を意図するようすは窺えない。

5は小型の部厚な縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面を2回程度の調整により除去し、さらに片側縁に調整を施し製品としている。素材剥片の末端部と片側縁は無調整である。6の接合資料の一部である。

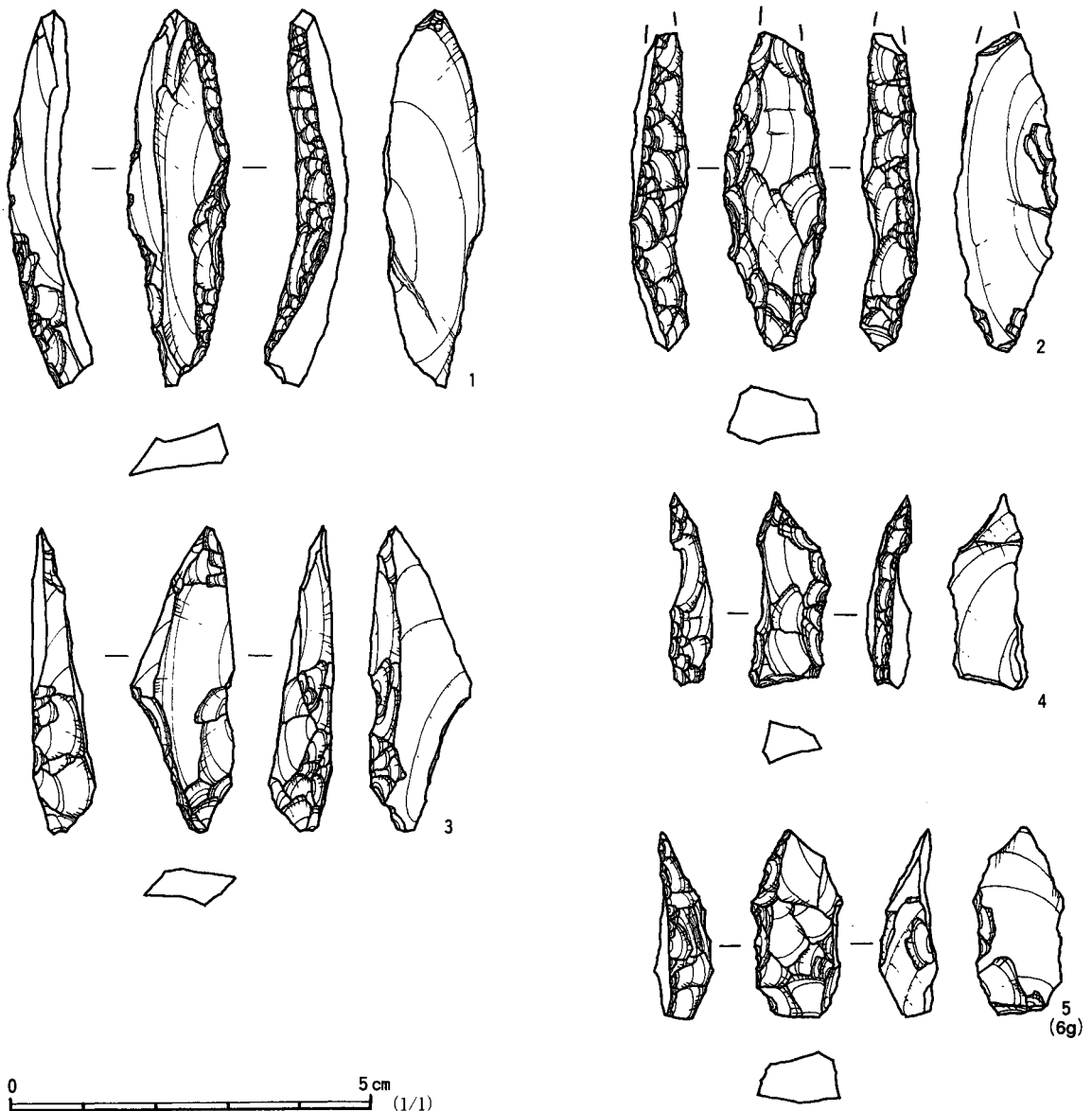
6は珪質頁岩製の接合資料である。原石面が広い範囲にみられ、それにより原石は長径20cm、短径10cm内外の棒状礫を使用していると考えられる。剥片剥離は不定形剥片の作出を意図しており、特に横長剥片、縦長剥片にこだわらない。原石面の一部を1回の剥離で除去し、その剥離面を打面として設定し、実測図上面にみられるような大型の不定形剥片を作出している。6a、6c、6f、6iがそれであり、打面部が広いやや厚みのある剥片である。2のナイフ形石器はこれらに類似した形状の剥片を素材としていると考えられ、おそらく作出された剥片剥離工程の段階も同じであろうと考えられる。打面再生剥片のようにも見受けられるが、この接合資料の石核を観察すると打撃は多方向から加えられ、その打面はランダムに剥片を作出し

た後の主要剥離面のネガティブ面を活用している。つまりそれぞれの剥片が素材剥片となると同時に、打面再生剥片にもなりうることを示している。5の小型のナイフ形石器はこの工程で作出された剥片を素材としており、接合関係はみられなかったが、4の素材剥片もこの工程に作出されたものであろう。この小型不定形剥片を作出する段階は、小型不定形のナイフ形石器の作出を目的とし、これより以前の剥片剥離工程における大型不定形剥片の作出は、2のようなナイフ形石器の素材剥片を得るためのものと考えられる。

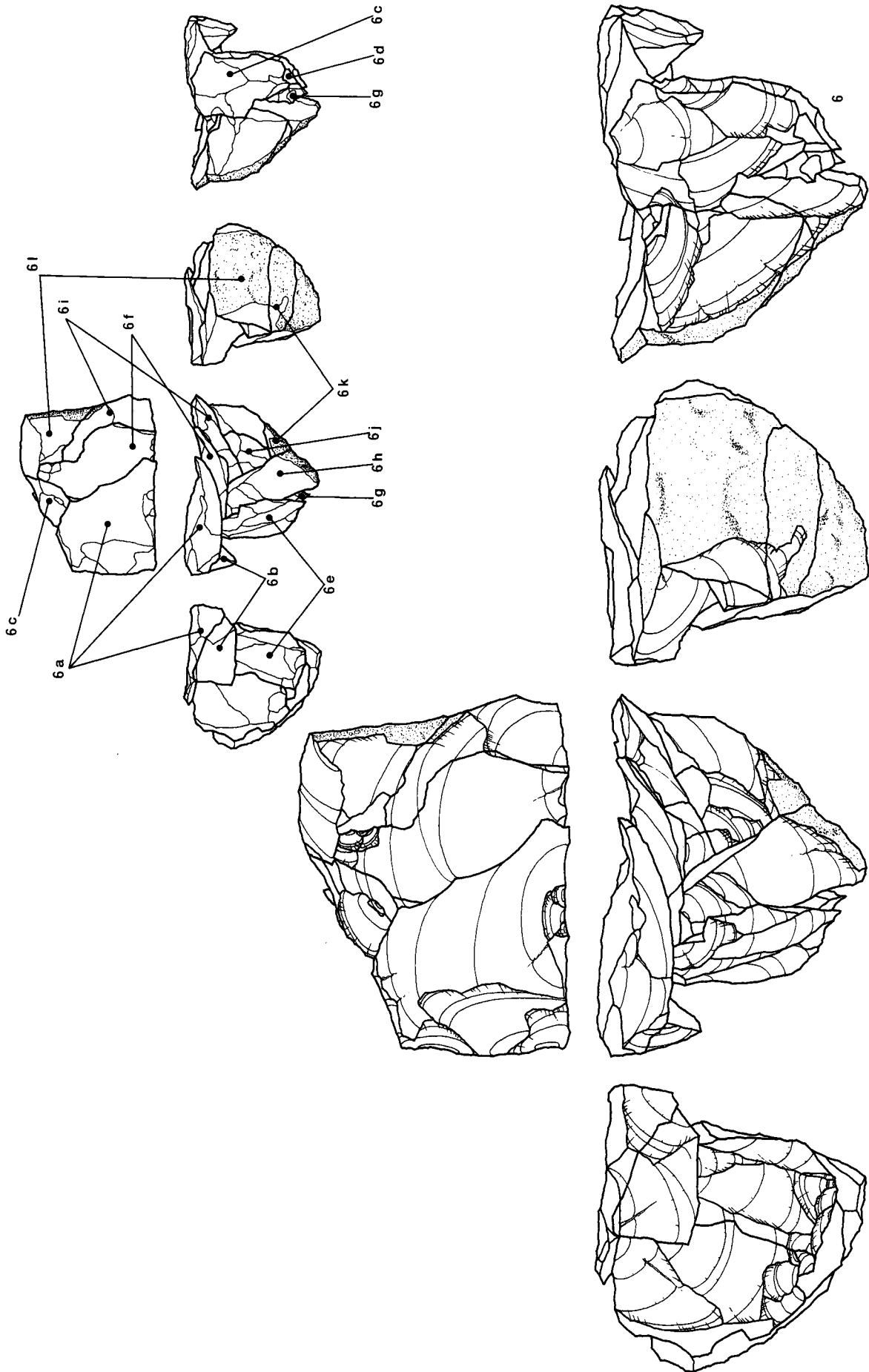
第12ブロック (第46・47・52・53図 第22・23表 図版8・27・28)

調査区の西側、台地の緩斜面部に位置し、北側には小規模な浅い谷が入り込む。標高は21mほどである。前述した第11ブロックに隣接する。出土層位はソフトローム層下部からVI層にかけてであり、第1黒色帯であるV層に帰属すると考えられる。

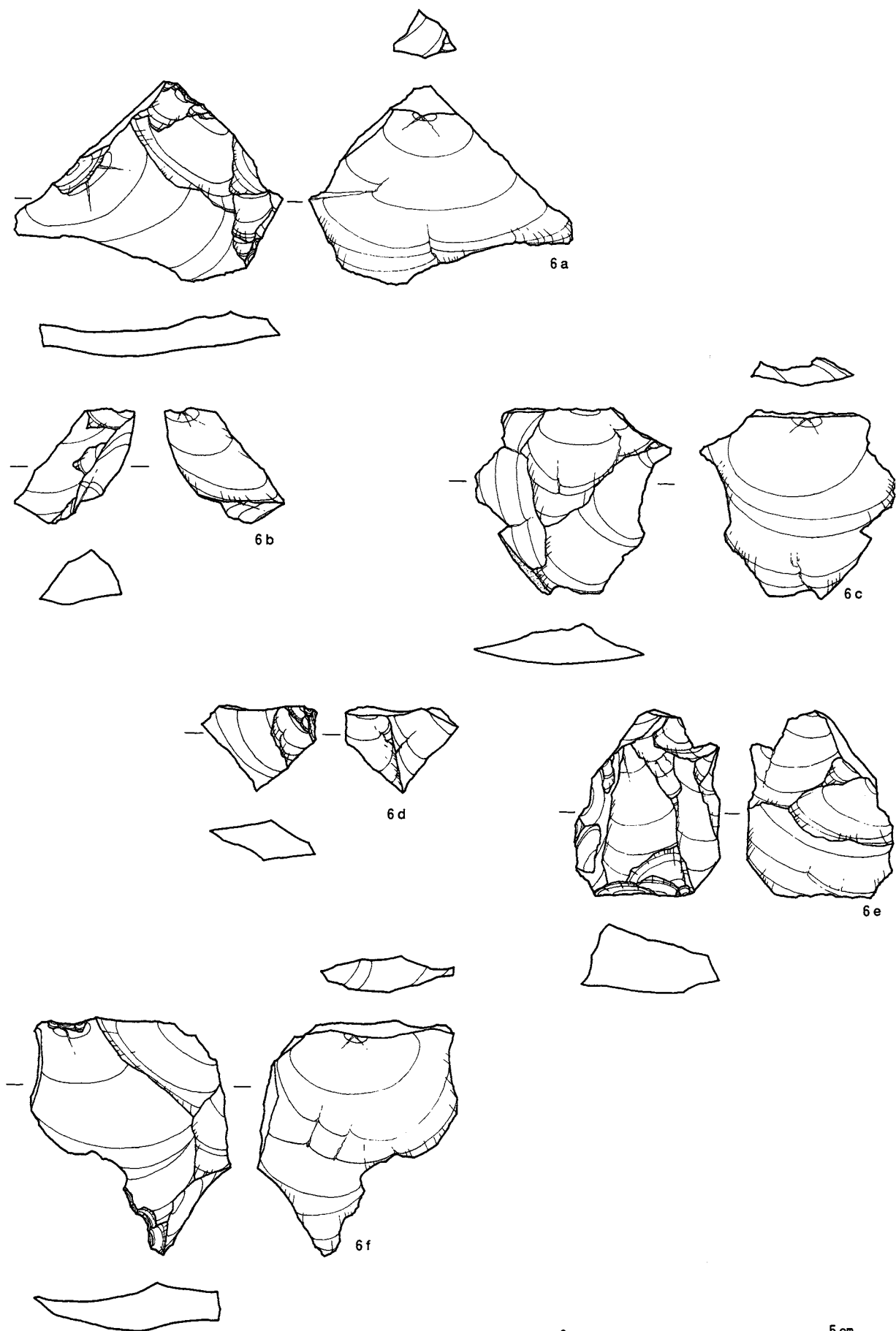
石器は長径8m、短径軸4mほどの楕円形状の分布状況を呈し、特に分布範囲の東側、第11ブロックに近接した地点に集中する感がある。



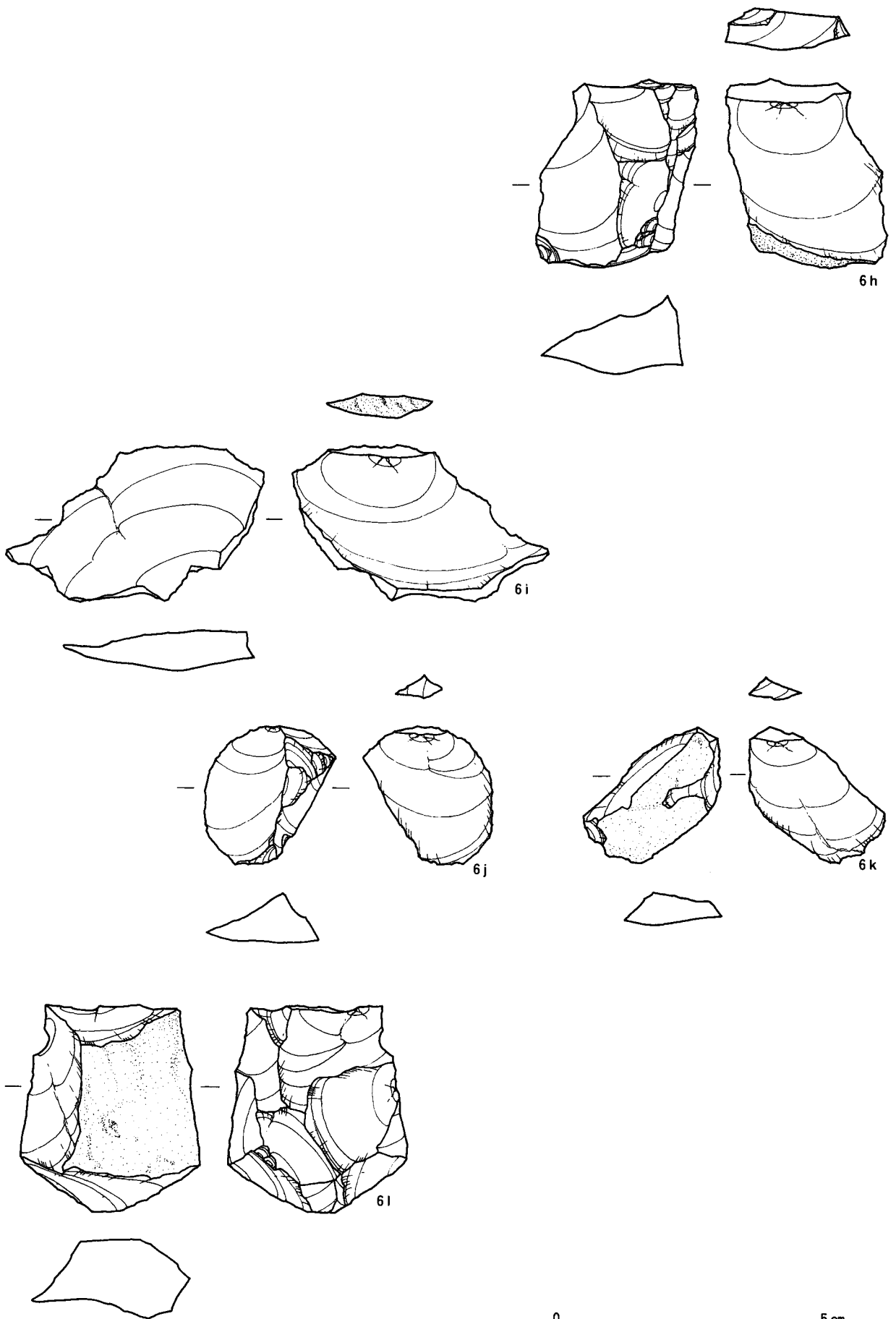
第48図 第11ブロック出土遺物(1)



第49図 第11プロック出土遺物(2)



第50図 第11ブロック出土遺物(3)



0 5 cm (1/1)

第51図 第11ブロック出土遺物(4)

第21表 第11ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第48図	1	7 E-69, 3	ナイフ形石器	チャート	5.03	1.43	0.55	4.48	横長剥片素材、打面部を調整
	2	7 E-79, 3	ナイフ形石器	珪質頁岩	4.40	1.45	0.78	5.01	横長剥片素材、打面部を調整
	3	7 E-48, 2	ナイフ形石器	チャート	4.17	1.45	0.79	3.98	
	4	7 E-79, 4	ナイフ形石器	珪質頁岩	2.65	1.13	0.60	1.71	
	5	7 E-79, 6	ナイフ形石器	珪質頁岩	2.59	1.30	0.73	6.00	6の接合資料と接合(6g)
第49図	6	接合資料					109.58		
第50図	a	7 E-69, 2	剥片	珪質頁岩	3.53	4.28	1.20		
	b	7 F-70, 2	剥片	珪質頁岩	2.70	1.51	1.06		
	c	7 E-78, 1	剥片	珪質頁岩	3.30	3.60	0.80		
	d	7 E-69, 4	碎片	珪質頁岩	1.50	2.12	0.82		
	e	7 E-79, 7	剥片	珪質頁岩	3.45	2.70	1.17		
	f	7 E-88, 1	剥片	珪質頁岩	4.15	3.70	0.87		
第51図	h	7 E-48, 3	剥片	珪質頁岩	3.50	2.96	1.56		
	i	7 E-79, 5	剥片	珪質頁岩	2.84	4.70	0.75		
	j	7 E-69, 5	剥片	珪質頁岩	2.70	2.18	0.95		
	k	7 E-79, 1	剥片	珪質頁岩	2.50	2.50	0.72		
	l	7 F-70, 1	石核	珪質頁岩	3.20	3.95	2.21		

出土した石器は総計45点で、そのうち定型的な石器は、珪質頁岩A製と黒曜石製のナイフ形石器2点が挙げられ、その他は剥片、碎片である。このうち珪質頁岩A製のナイフ形石器については、同ブロックから同石材の剥片、碎片、剥片利用石核が出土しており、剥片剥離から石器製作までの形跡がみられる。これに対し黒曜石製のナイフ形石器は、同石材の碎片が1点出土するのみで、剥片剥離の痕跡や製品加工のための調整の痕跡もみられず、点数的にも極めて客体的である。他の地域からの製品としての搬入品であろう。

石器として使用される石材は多種であり、上記の珪質頁岩Aの他はメノウ、珪質頁岩B、頁岩、チャート、凝灰岩、変成岩、砂岩であり、このうちメノウについては点数的には少数ではあるが剥片剥離が行われた形跡がある。剥片剥離が行われた後、石器の素材となりうる剥片はブロック外へ搬出されたと考えられ、剥片2点、碎片1点、石核1点が出土している。他の石材についてはブロック内での製品加工あるいは再調整により作出されたものと考えられる。

出土遺物

1・2はナイフ形石器である。

1は珪質頁岩A製で、横長剥片の打面部を除去するように、また側縁部の一部に調整を施し、他の部位は無調整である。表面にみられる剥片剥離時の剥離は2方向のものがみられ、この剥片が作出された打面と同一方向の剥離と、90°横位置に設定された打面からの剥離が存在する。両者の関係は後者の剥離が後に行われており、このことから頻りに打面の位置を換え剥片剥離を行っていたことが窺える。

2は黒曜石製の縦長剥片を素材としていると考えられ、素材剥片の打面側を基部としている。調整により素材剥片の打面は除去されている。基部のみ遺存しているため全体の形状、調整部位は定かではない。基部は両側縁に対し調整が施されている。

3～6は珪質頁岩A製の剥片である。

3の表面には原石面がみられ、剥片剥離工程の初期の段階に、打面作出と石核整形を目的として作出され

た剥片であろう。

4・5は稜整形のための石核整形剥片と考えられるが、1のナイフ形石器の素材剥片の形状を考えると、素材剥片としても活用が可能である。

6は剥片剥離工程の末期に近い段階で作出された剥片と考えられる。結果として縦横の長さがほとんど同一の剥片となっているが、打面を広く設定しているため横長剥片の作出を意図したものと思われる。主要剥離面の末端部は若干ヒンジ・フラクチュア気味となる。

7は珪質頁岩B製の剥片である。打面付近は広く末端部が先細りとなる形状である。表面には剥片剥離工程の初期段階の古い剥離がみられる。石器素材としての搬入品であろう。

8は変成岩製の横長剥片で、形状は台形を呈する。表面には原石面が残り、剥片剥離工程の初期の段階の石核整形剥片とも考えられるが、全体に薄い作りであり、表面上部にみられる一連の剥片剥離の際に作出された素材剥片である。やはり石器素材としての搬入品であろう。

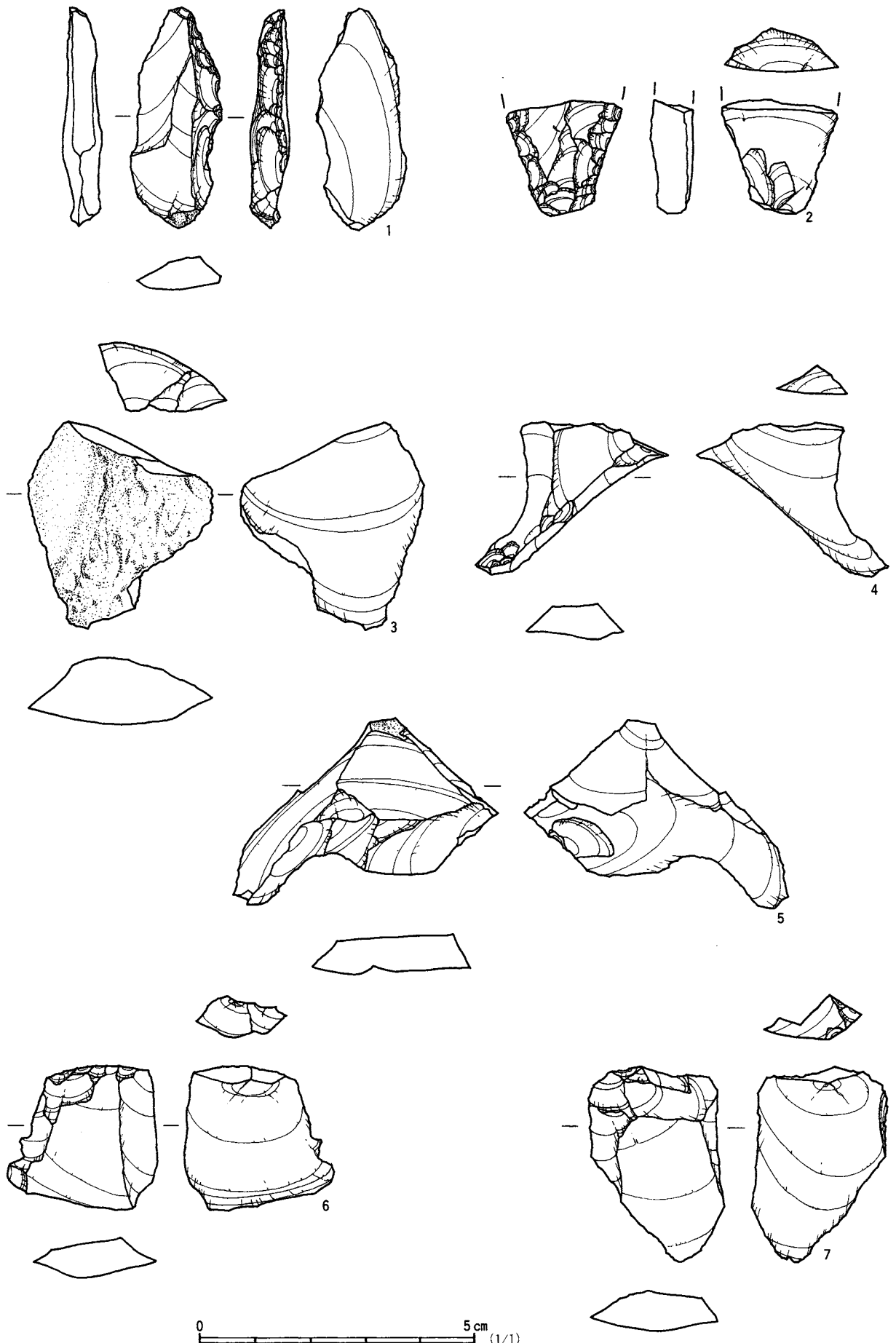
9はメノウ製の小型の縦長剥片で、同石材の石核が出土しているが極めて小さく、石核というよりも残核とした表現が適切である。同ブロック内においてメノウ製の石材に対する剥片剥離が行われていたことは明確であるが、それにより作出された石器素材となりうる剥片は、ブロック外に搬出されたものと考えられる。

10はチャート製の剥片である。2点の剥片が接合している。チャート製の石器はこの他に剥片が1点出土しているが、剥片剥離の際の碎片や、石器製作の際の調整剥片などはまったくみられない。このため石器製作を目的としてこのブロックに搬入されたものと考えられるが、結局は調整は施されずにこの状態のまま残されたものと考えられる。

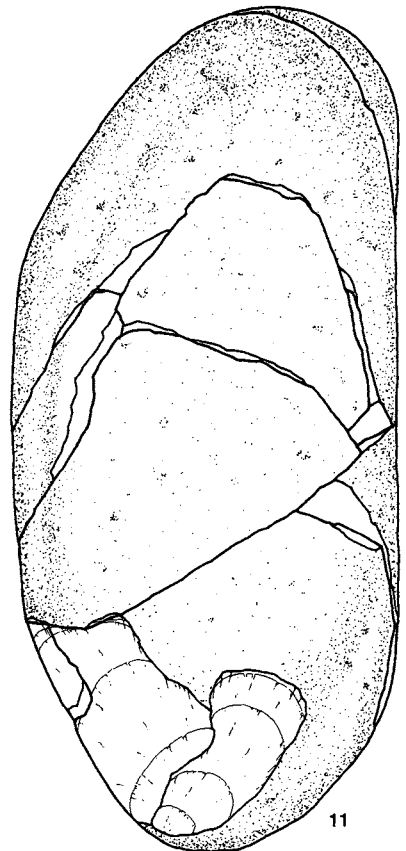
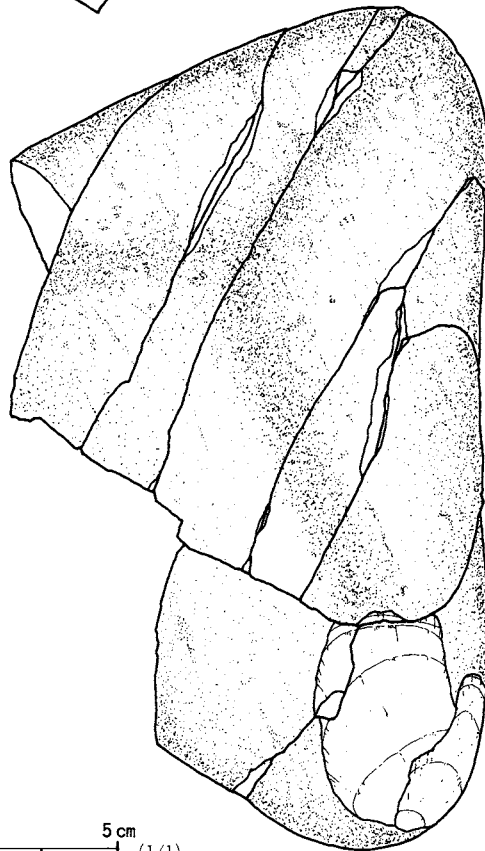
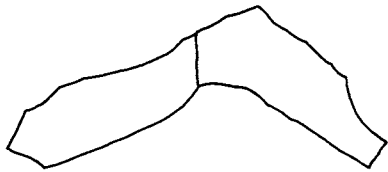
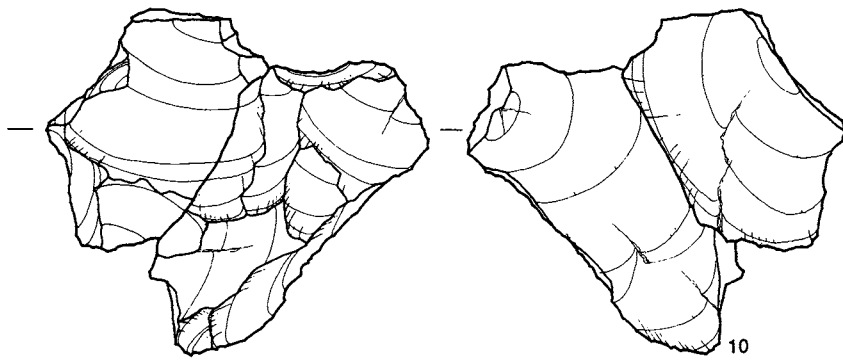
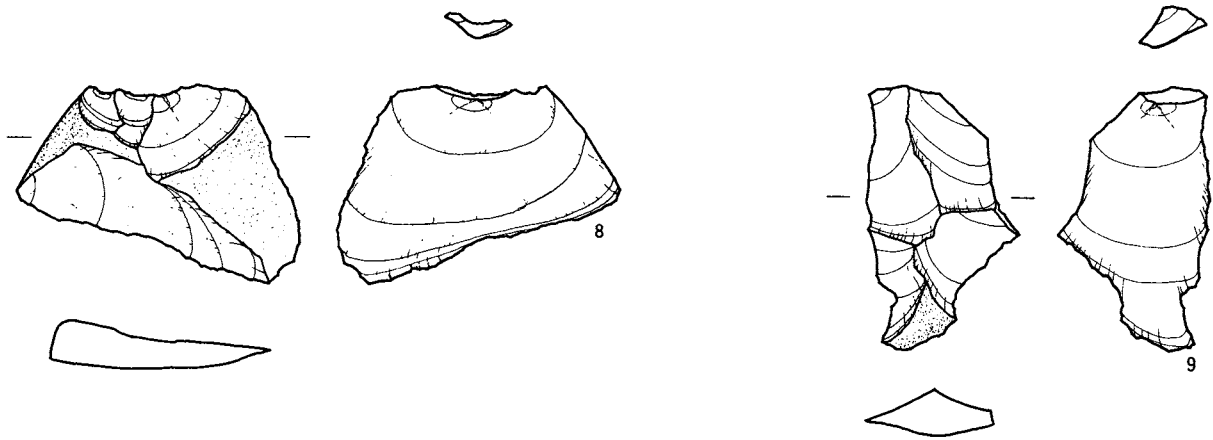
11は変成岩製の礫である。欠損しているため定かではないが、平面形は三角形を呈するものと考えられる。被熱したようすは窺えないが、節理面から細かく分割している。下方には剥離がみられるが、剥離の周辺にはつぶれたような敲打痕はみられず、敲石のように活用したとは考え難い。

第22表 第12ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	掻 器	削 器	ビリス・ エクス	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フルイ	U・ フルイ	剥 片	碎 片	剥 利 石 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
珪質頁岩A	1 2.2%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4 8.9%	12 26.7%	1 2.2%	-	-	-	-	18 40.0%
珪質頁岩B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 4.4%	-	-	-	-	-	-	2 4.4%
頁 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 4.4%	-	-	-	-	-	-	2 4.4%
黒 曜 石	1 2.2%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.2%	-	-	-	-	1 5.0%	2 4.4%
メ ノ ウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 4.4%	1 2.2%	-	1 2.2%	-	-	1 5.0%	4 8.9%
チャ ー ト	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3 6.8%	-	-	-	-	-	-	3 6.8%
凝 灰 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.2%	-	-	-	-	-	1 2.2%
変 成 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 2.2%	-	-	-	-	-	10 22.4%	11 24.5%
砂 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 4.4%	2 4.4%
計	2 4.4%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	12 26.7%	17 37.8%	1 2.2%	-	-	-	12 26.7%	45 100.0%



第52図 第12ブロック出土遺物(1)



0 5 cm (1/1)

第53図 第12ブロック出土遺物(2)

第23表 第12ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第52図	1	7E-56, 1	ナイフ形石器	珪質頁岩A	3.96	1.70	0.71	4.24	
	2	7E-57, 2	ナイフ形石器	黒曜石	2.07	2.10	0.78	3.06	基部のみ遺存。
	3	7E-57, 3	剥片	珪質頁岩A	3.40	3.30	1.26	13.17	
	4	7E-46, 2	剥片	珪質頁岩A	2.60	3.78	0.70	3.46	
	5	7E-56, 2	剥片利用石核	珪質頁岩A	2.80	4.55	1.15	11.45	
	6	7E-57, 12	剥片	珪質頁岩A	2.55	2.68	0.80	5.48	
	7	7E-47, 9	剥片	珪質頁岩B	3.31	2.73	1.03	6.34	
第53図	8	7E-54, 3	剥片	変成岩	2.60	3.77	0.66	5.33	
	9	7E-46, 1	剥片	メノウ	3.50	2.10	0.62	3.28	
	10	7E-57, 1 7E-57, 14	剥片	チャート	4.23	5.40	0.28	27.15	
11	7E-44, 1 7E-47, 5 7E-47, 7 7E-47, 8 7E-54, 5 7E-57, 4 7E-57, 5 7E-57, 6 7E-57, 7	碟	変成岩	10.82	6.35	5.22	451.8		

(6) 第6文化層

一本桜南遺跡で検出した石器集中地点31か所のうち、第6文化層に属するブロックは8か所と、細分された10文化層のなかで最もブロック数が多い。出土層位はいずれもソフトローム層のクラック付近からV層にかけてであり、IV層の下部に帰属すると考えられる。

これらのブロックは調査区の全域に分布しているが、その中でも特に調査区の中央部、台地の平坦部が緩斜面部に移行する直前の位置に4ブロックが検出している。他の4ブロックは地点は離れるが、台地緩斜面部が急激に谷に落ち込む直前、台地の縁の標高21mほどの位置に所在する。

文化層を特徴づけるような定型的な石器は、各ブロックとも1・2点、あるいはまったく定型的な石器を共伴しないブロックもあり、定型的な石器を基準とした石器組成から文化層の様相を定義づけることはできない。ナイフ形石器を定型的な石器として挙げることはできるが、むしろ剥片剥離技術を中心とした石器製作技術、また石器の石材という観点から明らかにすることが良いと考えられる。

各ブロックで出土している剥片は、概して部厚で剥片の形状も一定していない。これは剥片剥離の際に打面の位置を一か所に限定せず、頻繁に打面を転移して剥片を作出するためであり、このことが先ず剥片剥離技術の特徴とすることができる。さらに剥片剥離により作出された不定形剥片を折り取ることで形状を整え、さらに細かい調整を施し製品化を行っていることが窺える。

各ブロックで使用される石材は、一本桜南遺跡の古い段階の文化層で使用されている石材とは様相が異なり、黒曜石製の石器の割合が急増する傾向が認められる。その他の珪質頁岩、頁岩、チャートの使用もみられるが、あくまでも黒曜石が主体的であり、一部のブロックを除いて他の石材の石器は極めて客体的であるといえる。以下に各々の石材の種類と特徴を記す。

黒曜石：色調は黒色を呈し透明感はあるが、0.5mmほどの黄土色の夾雑物が多く混入する。風化した面を想像させる節理面が連続するものも見受けられる。一部乳白色に濁る部位や透明な部分と黒色な部分が層を成す部位もみられる。

- 頁 岩：色調は原石面が明るい黄土色、内面はやや褐色がかった淡黄褐色を呈する。原石面はなめらかで光沢があるが、剥離面はきめが細かい割にはざらつく感があり光沢もない。極めて部分的ではあるが1mmほどの黒色斑がみられる。
- 珪質頁岩：色調は青みがかった緑色もしくは明褐色を呈する。原石面、剥離面ともになめらかで光沢がある。
- 砂 岩：色調は灰色もしくは暗灰色を呈する。剥片石器としてではなく礫として使用されたものはすべて被熱し、表面は赤化しているが、内面はほぼ同一である。岩石を構成する粒子の大きさはおおむね0.5mm内外である。
- 凝 灰 岩：色調は表面は緑がかった灰色、欠損面は暗灰色を呈する。水和層が発達し、原石面、剥離面ともに粉っぽく傷が付きやすい。きめは細かいが光沢はなく、質感に反し持った感じが重い。
- メノウ：色調は半透明もしくは乳白色で、オレンジ色の部位が所々にみられる。ごくまれであるが小さな空洞部分があり、なかには六方柱の石英の結晶が無数にみられる。
- 安 山 岩：水和層が発達し、色調は原石面、内面ともに淡黄褐色、欠損面は黒色を呈する。原石面は無数の細かい傷が付いたようにざらざらしている。風化面はざらつき光沢はないが、欠損面はきめが細かく光沢も若干ある。礫は一樣に被熱しているため表面は薄い緑色を基準に所々赤化する。原石面、欠損面ともにざらつき光沢はみられない。
- 石英斑岩：剥片石器はなく、礫のみ出土している。原石面は一樣に被熱し暗い赤褐色を呈するが、欠損面は褐色がかった淡黄褐色を呈する。0.5mm～2mmほどの直方体の石英粒を多く含む。原石面はすべすべしている。
- 変 成 岩：色調は黒色もしくは暗い灰色を呈する。原石面には細かい無数の凹凸が一面にみられる。きめは細かいが光沢はない。剥片石器、礫ともに色調、質感は同じである。

第13ブロック（第54～56図 第24・25表 図版9・28）

調査区の中央部、標高22mほどの台地平坦部に位置する。一本桜南遺跡で検出した旧石器時代ブロックのうち、最も標高の高い位置に所在するブロックである。

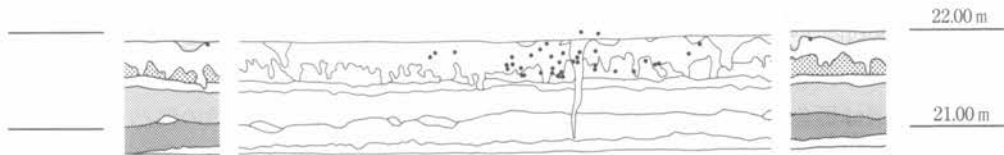
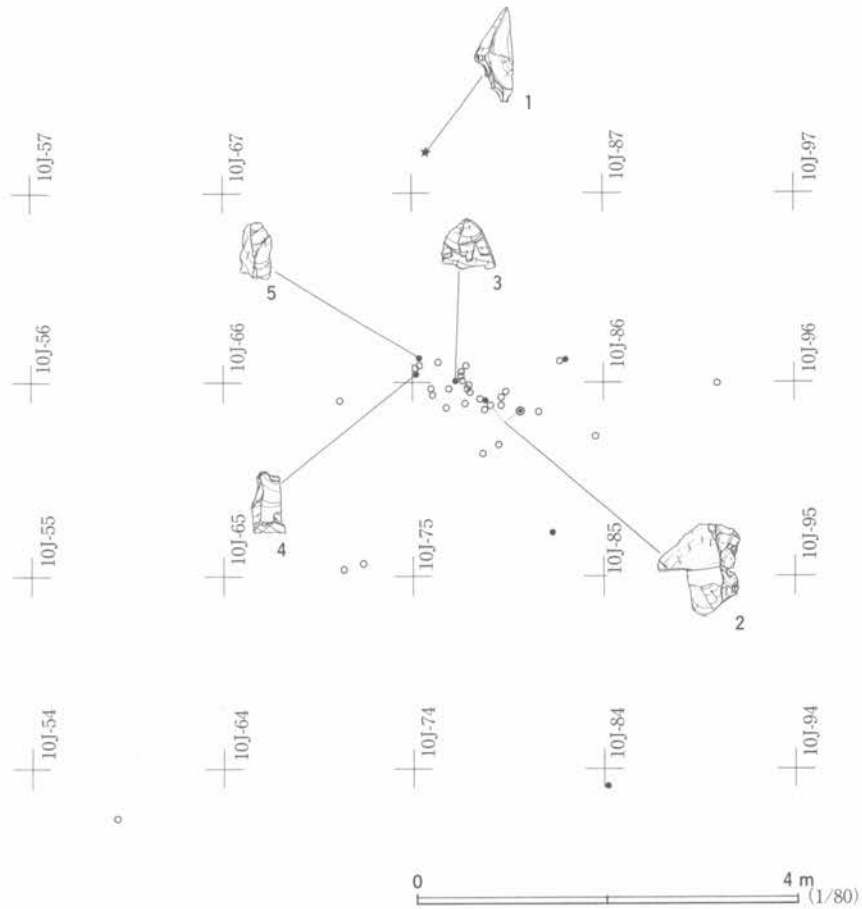
石器は直径8mの円形状に分布し、その範囲のなかでも南東側の直径4mの範囲に、特に石器が集中する傾向が認められる。

出土した石器は総計40点を数え、すべて黒曜石製である。石器組成は、定型的な石器としてナイフ形石器が挙げられるが、1点出土するのみである。その他には、石器製作を目的とした調整痕の認められる剥片が2点出土するが、他は剥片6点、碎片31点であり、石核は出土していない。

石器の素材剥片を作出するための剥片剥離と、石器作出のための調整剥離の両方で形成されたブロックと考えられ、剥片剥離の際の石核はブロック外に搬出されたと考えられる。またナイフ形石器の素材剥片の形状、大きさを基準とした場合、それと同等、あるいは近い形状の大型の剥片がほとんどなく、石核とともに素材剥片の搬出も考えられる。

出土遺物

1は部厚なナイフ形石器である。大型の不定形剥片を素材とし、最初に末端部の鋭い縁を残すように打面側を折断・除去することで石器の形状に近づけている。折断面はほとんど無調整で、素材剥片の側縁に該



第54図 第13ブロック器種別石器分布図

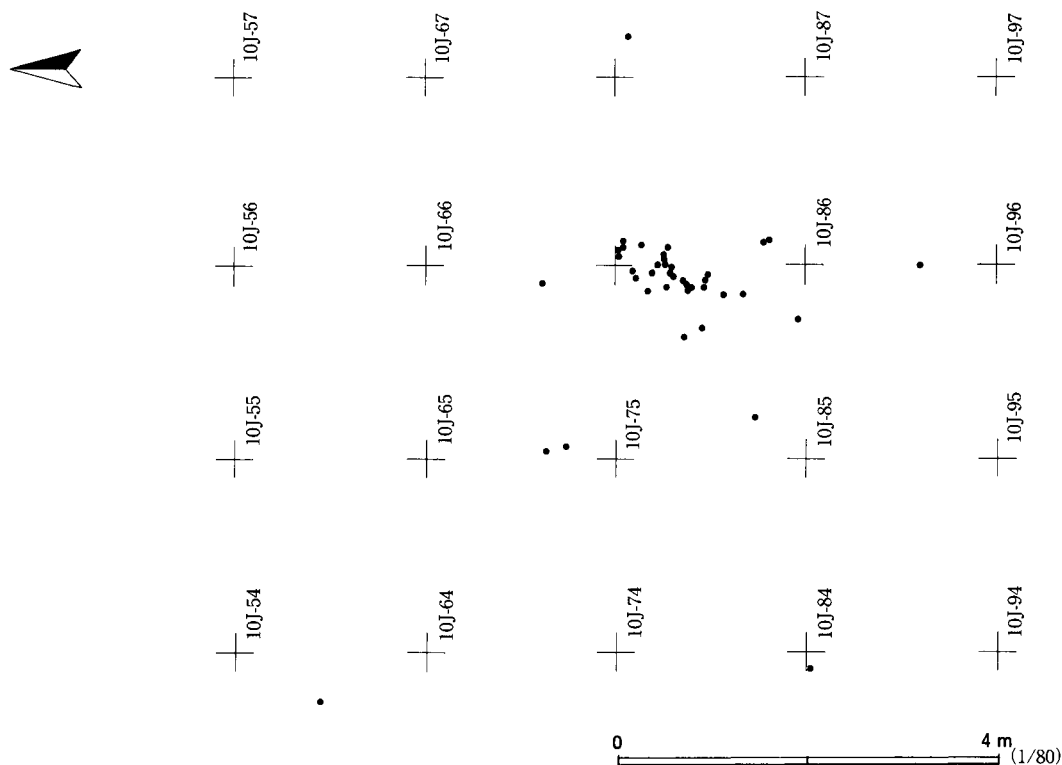
第24表 第13ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	掻 器	削 器	ピ ス ・ ス ト - 1	彫 刻 刀 形 石 器	削 片	R ・ フ イ	U ・ フ イ	剥 片	砕 片	剥 利 石 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計	
黒曜石	1 2.5%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 5.0%	-	6 15.0%	31 77.5%	-	-	-	-	-	-	40 100.0%
計	1 2.5%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 5.0%	-	6 15.0%	31 77.5%	-	-	-	-	-	-	40 100.0%

当する部位に、急角度のブランディングを施し製品としている。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は多方向からであるが、大きな剥離であり、このことから均一に厚みのある大型の剥片を作出していることが窺える。

2は調整痕の認められる剥片である。均一に厚みのある大型の剥片で、1のナイフ形石器の素材剥片もこの剥片と同様のものではあったと考えられる。折断することにより2分している。調整は片側縁に対して施され、調整の施された打撃面は主要剥離面側であるが、折断の方向は表面側からであり、調整途中で欠損したものではなく、調整が行われた後に意識的に折断していることがわかる。

3～5は剥片である。第13ブロックで出土した剥片は、2の調整痕の認められる剥片以外はほとんどがこれらの大きさと同等であり、ナイフ形石器の素材剥片の大きさと比較すると小型である。素材剥片を得る目的の、剥片剥離の段階で作出された、素材剥片として活用できない、いわば碎片的な剥片と考えられる。



第55図 第13ブロック石材別石器分布図

第25表 第13ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第56図 1	10J-77, 1	ナイフ形石器	黒曜石	5.06	2.10	1.33	9.85	
2	10J-75, 16 10J-75, 9	調整痕ある剥片	黒曜石	5.78	4.05	1.15	19.68	
3	10J-76, 5	剥片	黒曜石	2.72	2.92	0.50	3.42	
4	10J-76, 1	剥片	黒曜石	3.20	1.80	0.69	3.74	
5	10J-76, 3	剥片	黒曜石	3.00	1.82	0.90	3.41	

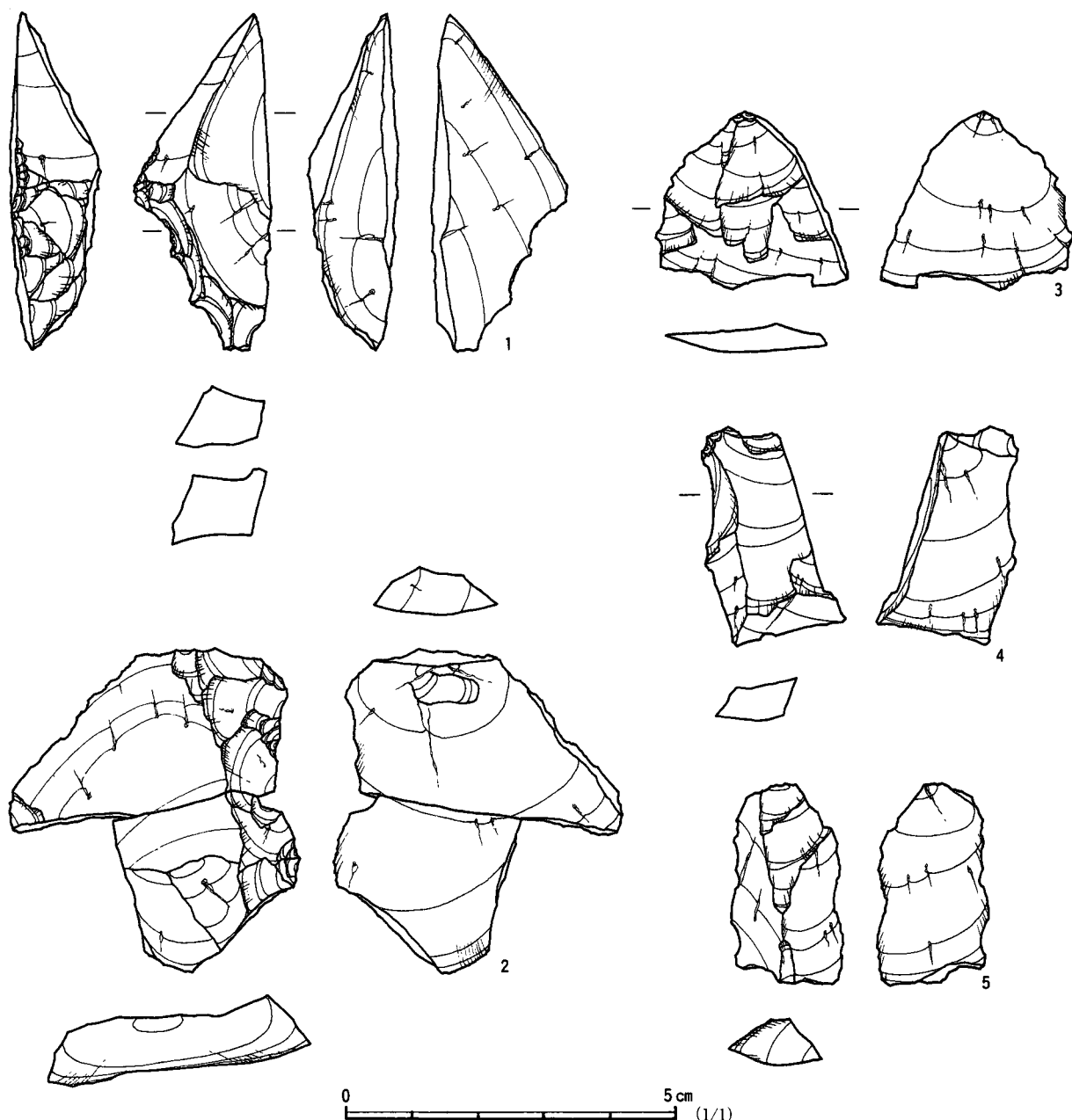
第14ブロック (第57～59図 第26・27表 図版9・10・29)

調査区の中央部、台地のほぼ平坦部に位置し、標高22mほどを測る。同一文化層に属する第15ブロック、第16ブロックに近接しており、接合関係は認められなかったが、石器組成、使用される石材で共通点のみられることから、3ブロックをまとめて1ユニットとして考えることも可能である。

石器は長径8m、短径6mほどの楕円形状に分布し、総計184点出土している。この中でその大半が範囲北側の4mほどの範囲で分布する。出土層位はソフトローム層の上部からVI層にまでおよび、上面と下面の標高の差が70cmとかなり幅がある。この幅のなかでも特にソフトローム層の下部に集中する感があり、IV層下部に属するブロックとして考えて良いであろう。

定型的な石器として、素材剥片の全周に対して調整を施した削器が1点挙げられるが、他にはナイフ形石器などの石器の出土はみられず、調整痕の認められる剥片1点が含まれるのみで、他はすべて剥片、碎片である。

これらの石器の大半は黒曜石製であり、頁岩製の石器が3点出土するが、出土点数の割合では極めて少なく客体的であるといえる。



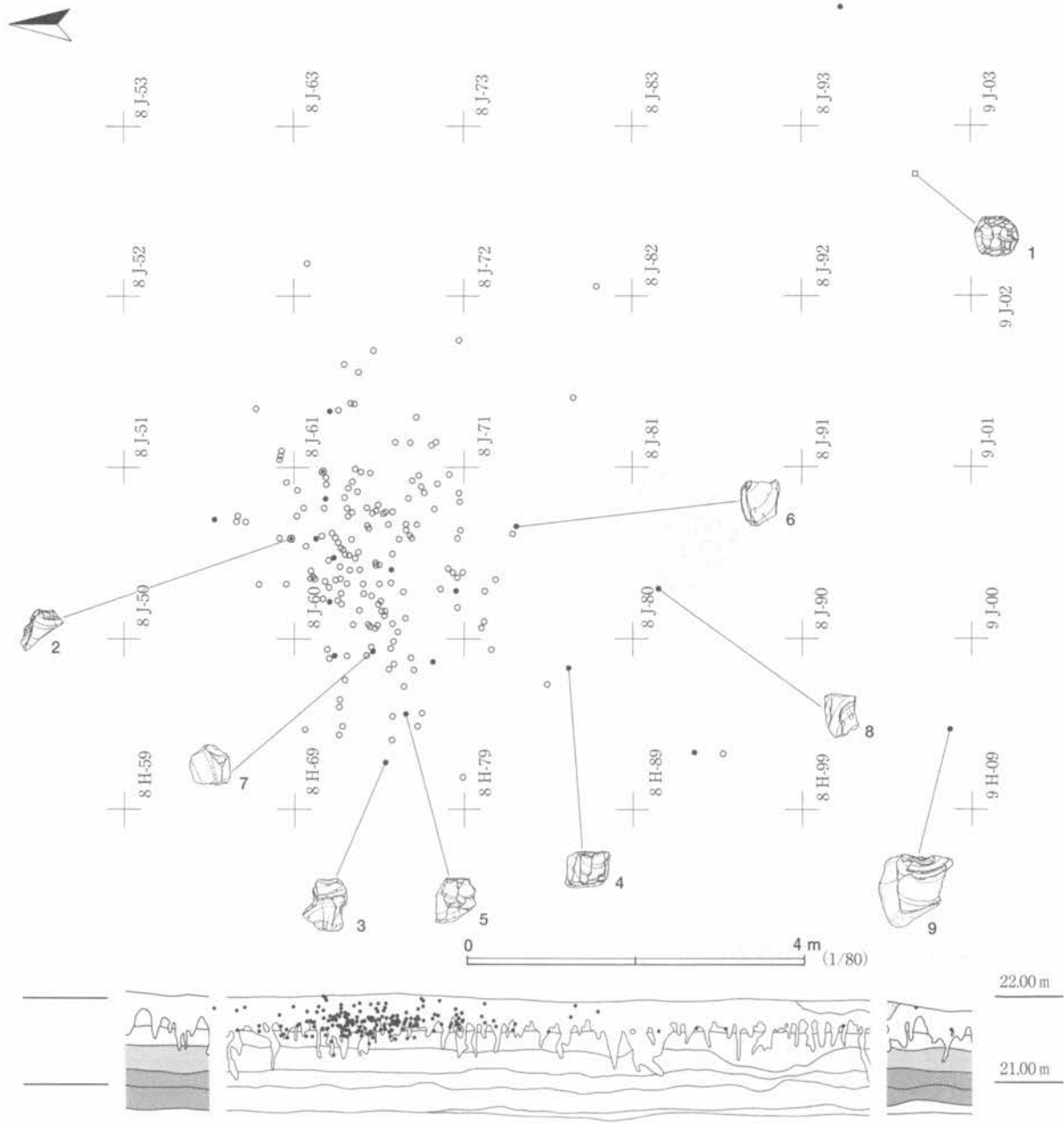
第56図 第13ブロック出土遺物

出土遺物

1は黒曜石製の削器である。小型の不定形剥片を素材としている。表面には剥片剥離時の同一方向からの細かい剥離が確認でき、剥片の形状は4や5の剥片に近いものと思われる。調整はほぼ全周に渡り施され、主要剥離面からの刃部作出のための細調整が、正面左側縁を除く部位に顕著にみられる。左側縁の調整は他の部位の調整と比較すると簡素であり、主要剥離面側にむかい数回の剥離で終了している。

2は調整痕の認められる剥片である。小型であるが部厚な剥片の片側縁に、主要剥離面側から急角度の調整が施される。さらに調整を加えた後に主要剥離面側から折断し、現在の形状となっている。

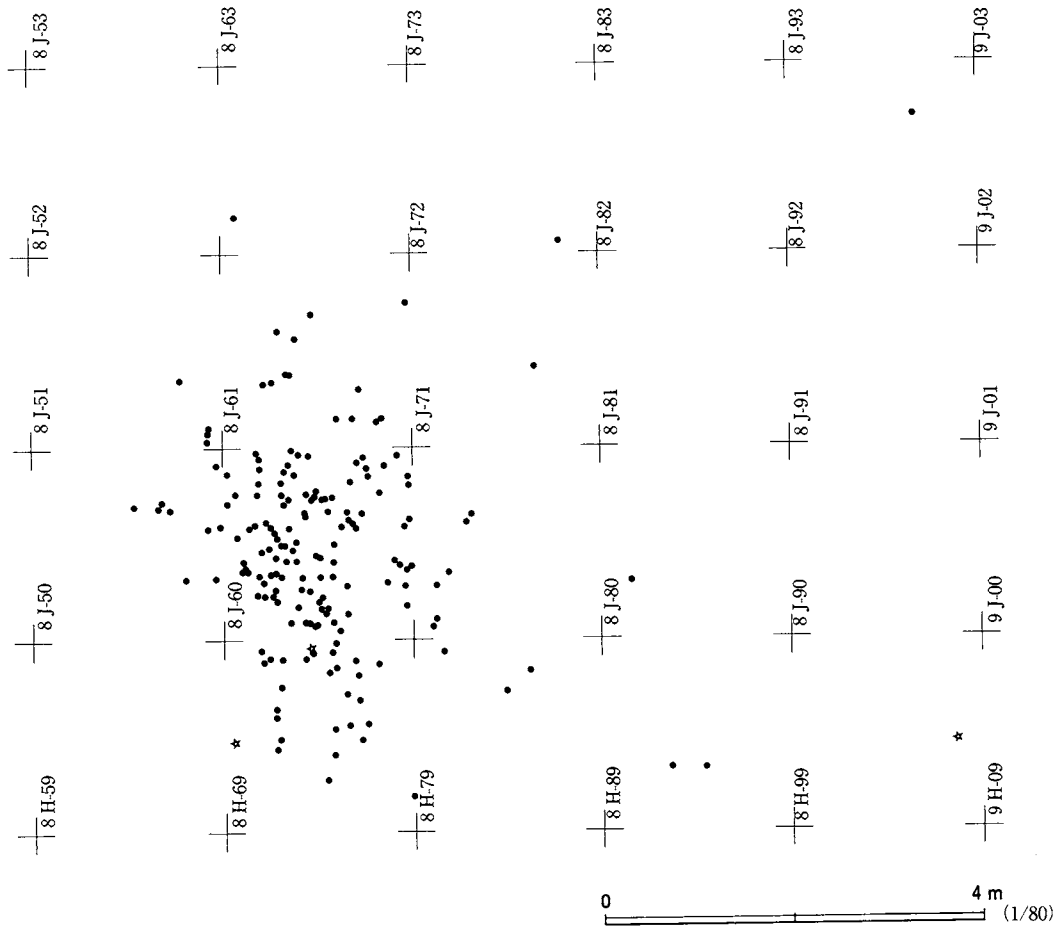
3～8は黒曜石製の剥片である。1の削器の素材剥片としては形状、大きさともに該当すると考えられる



第57図 第14ブロック器種別石器分布図

第26表 第14ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	掻 器	削 器	ヒース・ スチ-3 形石器	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フルツ	U・ フルツ	剥 片	砕 片	剥 利 石	片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	18	160	-	-	-	-	-	-	-	181
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	0.5%	-	-	-	1.0%	-	9.8%	87.2%	-	-	-	-	-	-	98.5%
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	3
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.5%	1.0%	-	-	-	-	-	-	-	1.5%
計	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	19	162	-	-	-	-	-	-	-	184
	-	-	-	-	-	-	-	0.5%	-	-	1.0%	-	10.3%	88.2%	-	-	-	-	-	-	-	100.0%



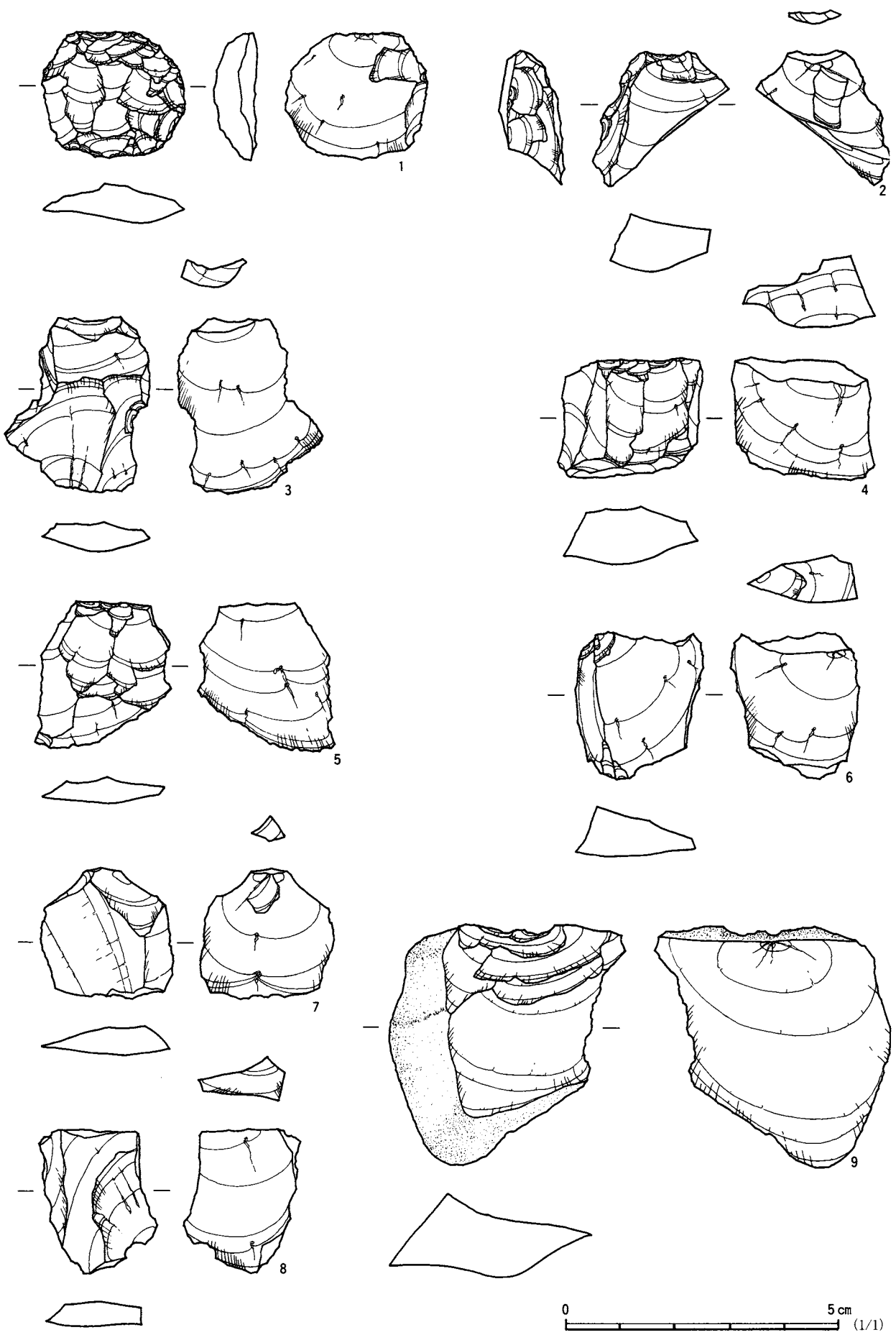
第58図 第14ブロック石材別石器分布図

第27表 第14ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第59図 1	8J-92, 1	削器	黒曜石	2.33	2.68	0.79	4.78	
2	8J-50, 3	調整痕ある剥片	黒曜石	2.30	2.56	1.12	4.19	
3	8H-69, 16	剥片	黒曜石	3.18	2.69	0.50	4.01	
4	8H-79, 3	剥片	黒曜石	2.16	2.74	1.23	7.93	
5	8H-69, 18	剥片	黒曜石	2.70	2.40	0.69	3.54	
6	8J-70, 3	剥片	黒曜石	2.70	2.41	0.88	5.26	
7	8H-69, 25	剥片	黒曜石	2.37	2.45	0.67	3.77	
8	8J-80, 1	剥片	黒曜石	2.60	2.16	0.79	3.39	
9	8H-99, 1	剥片	頁岩	4.47	4.30	1.67	21.87	

が、前述した同文化層に属する第13ブロックで出土しているナイフ形石器を考えた場合、どれも小型であり、ナイフ形石器の製作は不可能である。あるいは素材剥片のブロック外への搬出も考えられる。いずれも不定形の剥片であり、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向には画一性がなく、打面の位置を頻繁に転移し剥片を作出していたことが窺える。器厚の薄く明確な稜を持たない剥片が圧倒的に多いが、4・6のように部厚な剥片もみられ、部厚な剥片は一様に明確な稜を残している。

9は頁岩製の剥片である。他の黒曜石製の剥片と比較すると大型であり、頁岩製の石器は点数的に客体的



第59図 第14ブロック出土遺物

であるため、素材剥片としての搬入品と考えられる。剥片の周縁部に沿うように原石面が残り、表面に残る剥片剥離時の剥離の方向はすべて同方向であり、打面も原石面の一部に設定しているため、同一打面からの剥片剥離が行われたことがわかる。剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片である。

第15ブロック（第60～64図 第28・29表 図版10・29・30）

調査範囲の中央部に位置し、同文化層に属する第14ブロック、第16ブロックに近接して検出された。出土層位はソフトローム層上面からⅥ層に至り、かなりの幅があるが、垂直分布の中心はⅣ層下部に相当すると考えられる。

石器は直径8mほどの円形状に分布し、分布の中心部に石器が集中する感があるが、特に密度の濃い分布状態とはいえない。

出土した石器は総計127点を数え、黒曜石製の石器が総数の96%を占める。定型的な石器は第14ブロックで出土した削器に類似した石器が1点出土しているのみで、他には調整痕の認められる剥片が3点みられる程度である。凝灰岩製、砂岩製の石核が1点ずつ出土するが同石材の剥片は出土していない。

出土遺物

1は黒曜石製の削器である。第14ブロックで出土した削器と形状が酷似する。素材剥片の形状は原形とほとんど変わらないものと考えられ、素材剥片の打面は無調整で、剥片が作出された時点の形状を留めている。調整は打面を除くほぼ全周に対して施され、すべて主要剥離面側から行われている。調整部位の断面形状は鋭く、刃部作出を目的とした調整であることがよく理解できる。

2～4は調整痕の認められる剥片である。

2は小型の剥片の片側縁の一部に、4は末端部にそれぞれ調整が施される。両者とも主要剥離面側からの微細な調整であり、調整部位の断面形状は鋭く尖り、刃部作出を目的とした調整であることが理解できる。

3は大型の剥片の主要剥離面側に主に調整が施される。調整は面的に施されるものと、周縁部に対して施される微細な調整の両方がみられ、素材剥片の形状を変えようとしている意図が窺われる。

5～10は黒曜石製の剥片である。

5は比較的大型の剥片であるが器厚は薄い。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定せず、頻繁に打面転移を行い作出された剥片であることが窺える。表面打面付近にみられる小さな連続した剥離は頭部調整痕と考えられ、打面転移は頻繁であるが、頭部調整により剥片の形状をある程度整えようとしていることが窺える。

6の剥片の主要剥離面には打面からの一条の剥離がみられるが、これは剥片が作出された後の調整による剥離ではなく、剥片剥離の打撃の際に打面とともに欠落したものと考えられる。

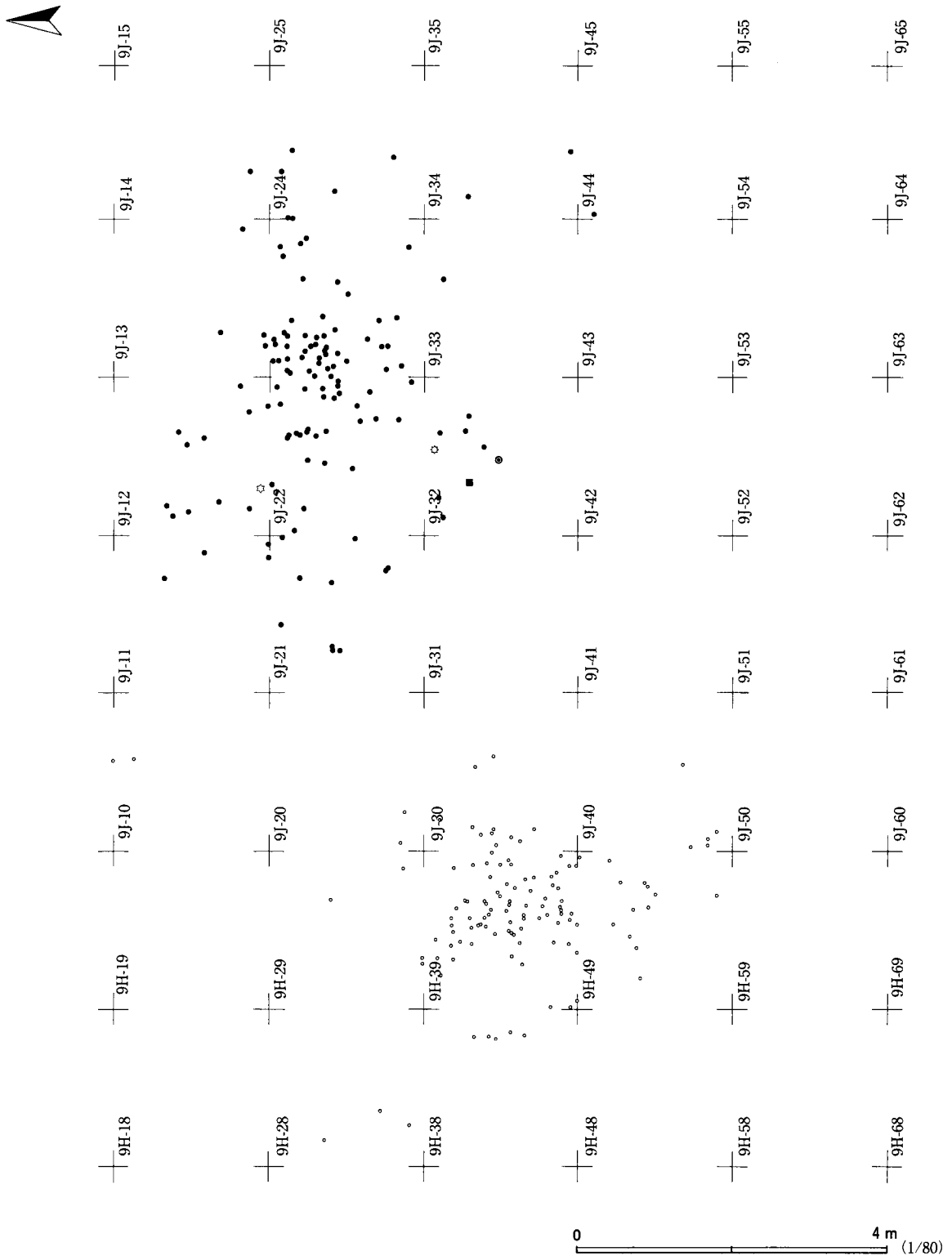
7の表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、この剥片が作出された打面の方向と異なり、打面を転移した後に最初に作出された剥片であることが理解できる。

8～10は小型の剥片で、10の剥片の表面には剥片剥離時の頭部調整痕が顕著にみられる。いずれも不定形剥片ではあるが薄い作りとなっている。

11は凝灰岩、12は砂岩製の石核である。両者とも原石の状態に近く、剥片剥離は数回で終了している。またこれらの石質の剥片類は凝灰岩製の碎片が1点出土するのみで、図にみられる剥離の形状を呈する剥片



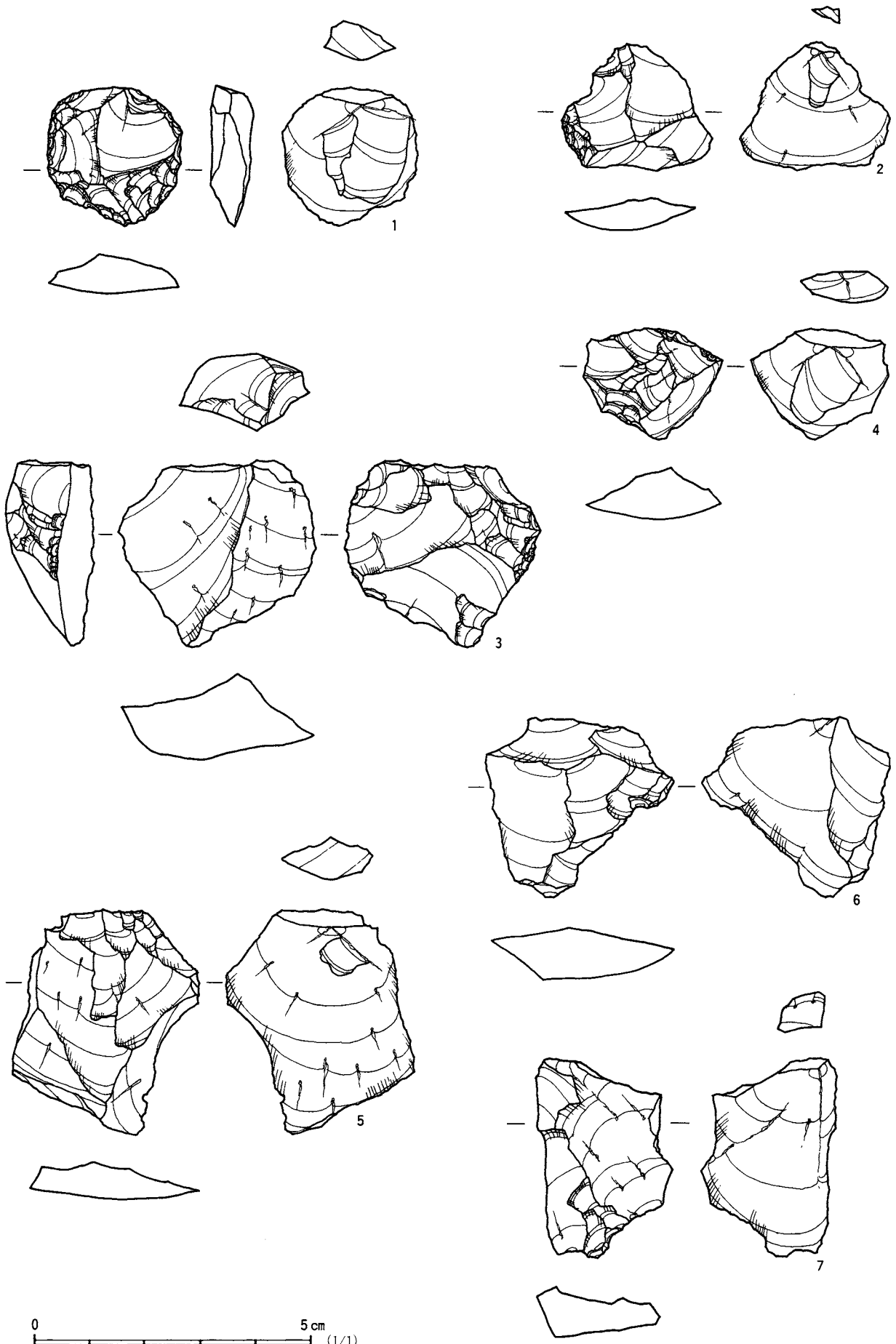
第60図 第15ブロック器種別石器分布図



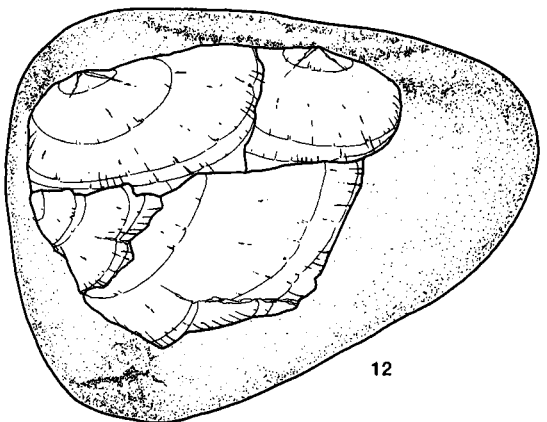
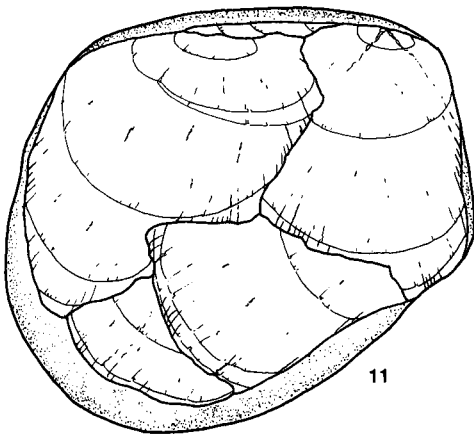
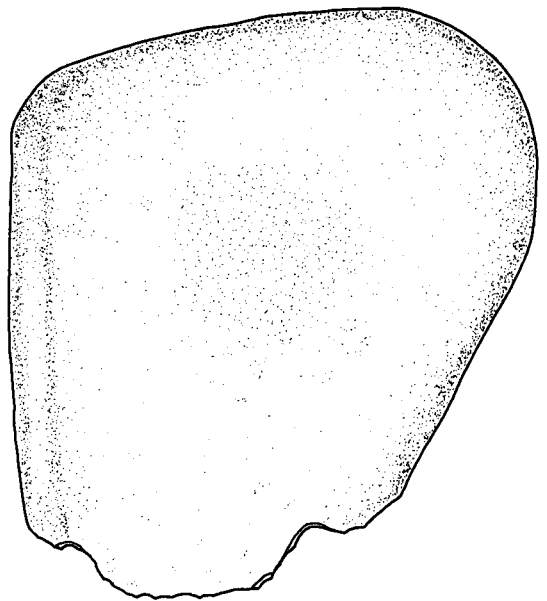
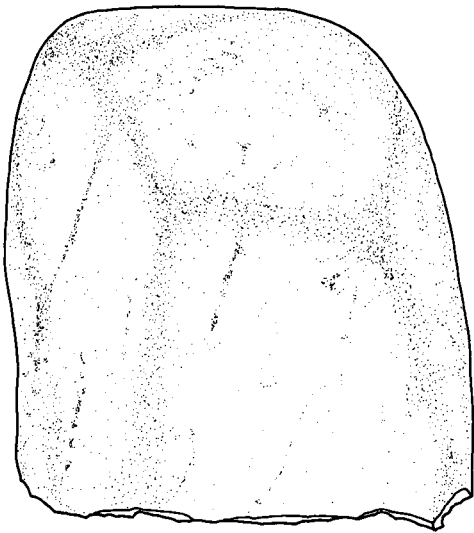
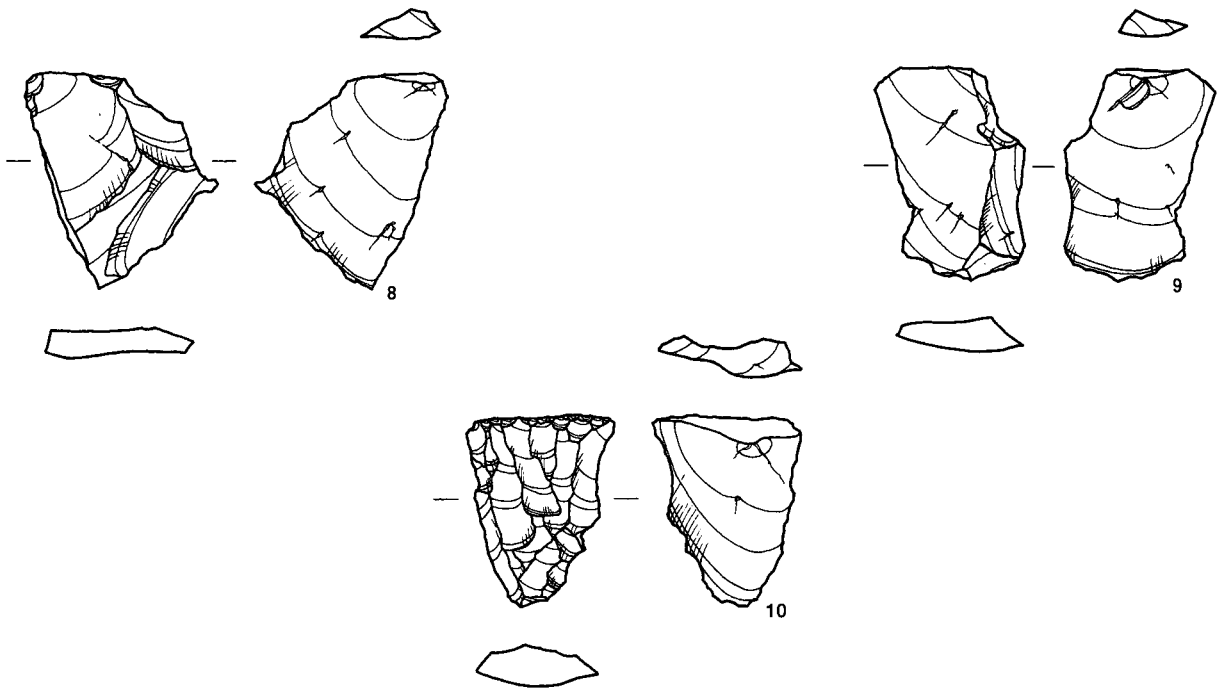
第61図 第15ブロック石材別石器分布図

は出土していないため、ブロック外への搬出が考えられる。いずれも原石の平坦面を打面とし、剥離による打面の作出は行わずに、終始原石面を打面として剥片剥離を終了している。

13は砂岩製の敲石である。長さ5 cmほどの棒状礫を使用し上下両端を作用部としている。敲打痕は顕著であるが、特に敲打による形状の変化はみられない。

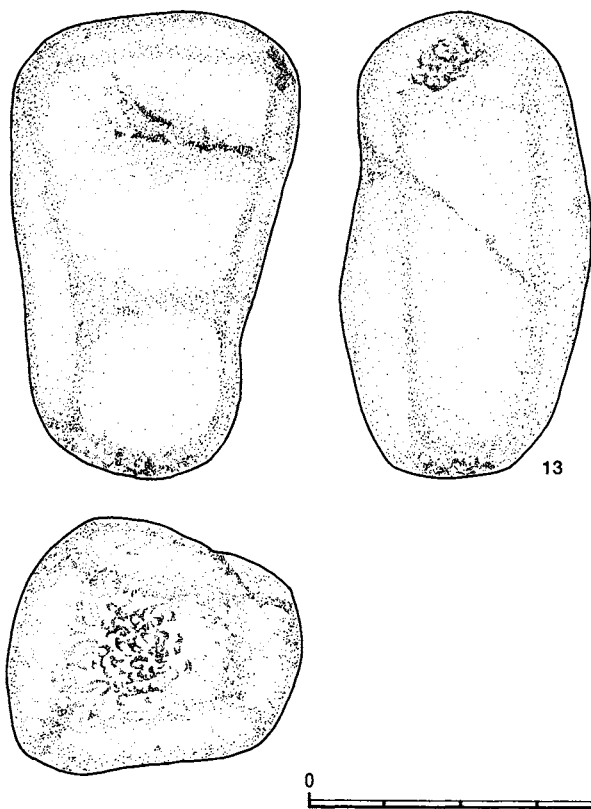


第62図 第15ブロック出土遺物(1)



0 5 cm (1/1)

第63図 第15ブロック出土遺物(2)



第64図 第15ブロック出土遺物(3)

第28表 第15ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石	角錐状 石 器	種 器	削 器	ビニ ス ス ト ー	彫刻 刀 形 石 器	削 片	R・ フル イ	U・ フル イ	剥 片	砕 片	剥 利 石 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	3	-	13	104	-	1	-	-	-	122
	-	-	-	-	-	-	-	0.8%	-	-	-	2.4%	-	10.2%	81.8%	-	0.8%	-	-	-	96.0%
珪質頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.8%	-	-	-	-	-	0.8%
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.6%	1.6%
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	2
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.8%	-	-	-	-	0.8%	1.6%
計	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	3	-	13	106	-	1	-	-	3	127
	-	-	-	-	-	-	-	0.8%	-	-	-	2.4%	-	10.2%	83.4%	-	0.8%	-	-	2.4%	100.0%

第29表 第15ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第62図	1	9 J-11, 1	削器	黒曜石	2.62	2.47	0.75	5.05	
	2	9 J-22, 11	調整痕ある剥片	黒曜石	2.37	2.68	0.62	3.41	
	3	9 J-13, 4	調整痕ある剥片	黒曜石	3.18	3.45	1.53	15.22	
	4	9 J-22, 2	調整痕ある剥片	黒曜石	2.00	2.55	0.98	4.33	
	5	9 J-22, 24	剥片	黒曜石	1.13	0.87	0.18	9.75	
	6	9 J-22, 1	剥片	黒曜石	2.17	1.76	0.32	8.76	
	7	9 J-22, 15	剥片	黒曜石	3.60	2.68	1.05	6.95	
第63図	8	9 J-22, 8	剥片	黒曜石	2.90	2.08	0.53	2.87	
	9	9 J-21, 2	剥片	黒曜石	2.32	2.70	0.57	3.21	
	10	9 J-23, 1	剥片	黒曜石	2.40	2.00	0.62	2.74	
	11	9 J-32, 4	石核	凝灰岩	6.76	6.22	5.44	337.70	
	12	9 J-32, 3	石核	砂岩	7.70	7.25	5.18	344.60	
第64図	13	9 J-32, 8	敲石	砂岩	6.10	4.05	3.05	108.05	

第16ブロック（第65～67図 第30・31表 図版10・31）

調査区の中央部、台地の平坦部に位置し、同文化層に属する第14ブロック、第15ブロックと隣接する。石器は直径4mの集中区を中心に長径10m、短径6mの範囲で分布しており、遺物の集中区はブロックの範囲の南側に偏る。

出土した石器、総計123点のうち、黒曜石製の石器が全体の93%を占め、点数は115点にも及ぶ。黒曜石の他メノウ製のナイフ形石器1点、珪質頁岩製の剥片、碎片が7点出土するが極めて客体的であり、メノウ製のナイフ形石器については製品としての搬入品と考えられる。定型的な石器はこのメノウ製のナイフ形石器の他、黒曜石製の搔器が出土している。第14ブロック、第15ブロックで出土している削器と形状が酷似するが、刃部角が他のブロックで出土したものと比較して鈍角なため、ここでは搔器として扱った。

出土遺物

1はメノウ製のナイフ形石器である。素材剥片の形状は縦長剥片と考えられるが、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、主要剥離面の打面の方向に対して90°方向が異なり、縦長剥片の作出を意識して作出された素材剥片とは考えられない。結果として縦長剥片となったものと考えられる。調整は素材剥片の打面付近の両側縁、製品の基部に該当する部位に施され、微細な調整が主要剥離面側から施される。打面は調整により除去されている。

2は珪質頁岩製の搔器である。素材剥片はやや部厚な、縦横の比がほぼ同一の剥片であり、素材剥片の末端部から片側縁にかけてフルーティングがみられる。主要剥離面側から施されるフルーティングは、主要剥離面に対してほぼ直角に打撃が加えられたものであり、この点ではナイフ形石器に施されるブランディングと共通するが、この調整による剥離の形状は、縦長の微細な調整剥片が作出されたことを思わせ、この点でもナイフ形石器に施される調整との相違が指摘できる。

3は黒曜石製の剥片利用石核である。素材となる剥片の形状は不定形の部厚な大型剥片であり、両側縁および末端部側に、主要剥離面側から剥片を作出した痕跡がみられる。また剥片を作出した後に施された微細な調整状の剥離が確認できるが、形状を変えようとして施された剥離、または刃部作成のための調整とは異なり、頭部調整によるものと考えられる。

4は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。小型の不定形剥片の片側縁に微細な調整が施される。調整は主要剥離面側からほぼ90°の直角方向に打撃を加え施されたもので、ナイフ形石器に施されるブランディングに酷似する。

5～9は剥片である。

5は黒曜石製の小型の縦長剥片である。主要剥離面の打面付近にみられる微細な剥離は調整によるものではなく、調査時に欠損した痕跡である。打面は剥片剥離時に剥落したのであろうか確認できない。

6は黒曜石製の大型剥片であり、打面をかなり広く設定して作出されている。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定ではなく、主要剥離面の剥離の方向とは90°左右に振った位置から打撃を加えている。

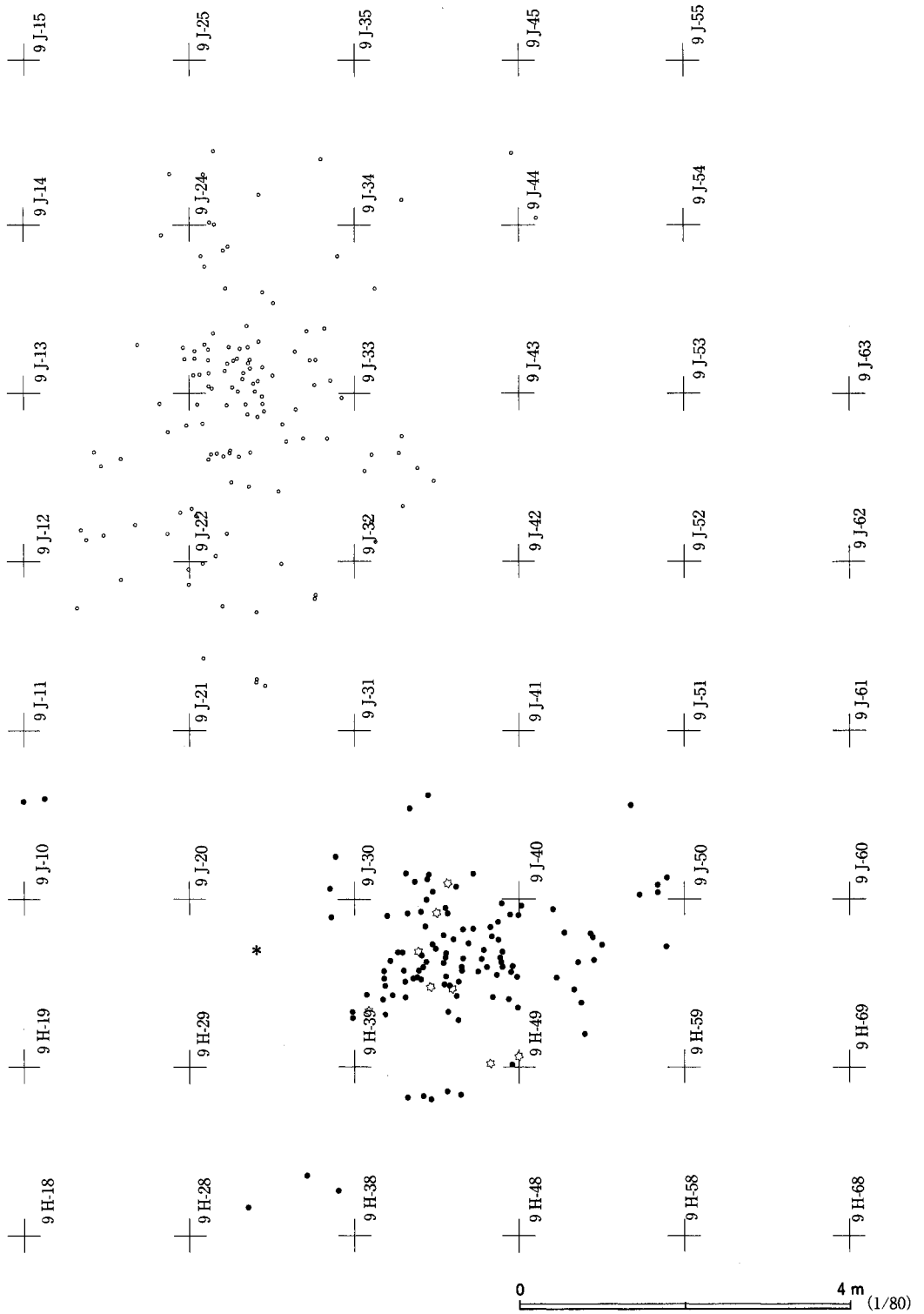
7は珪質頁岩製の剥片である。表面側の打面付近にみられる微細な剥離は、剥片剥離時の頭部調整痕と考えられる。頭部調整が施される以前にこの剥片と同一の打面から数回剥離が施されていることが窺える。

8は黒曜石製の剥片である。部厚な不定形剥片であり、打面部に当たる部位は剥片が作出された後に折断、除去されている。

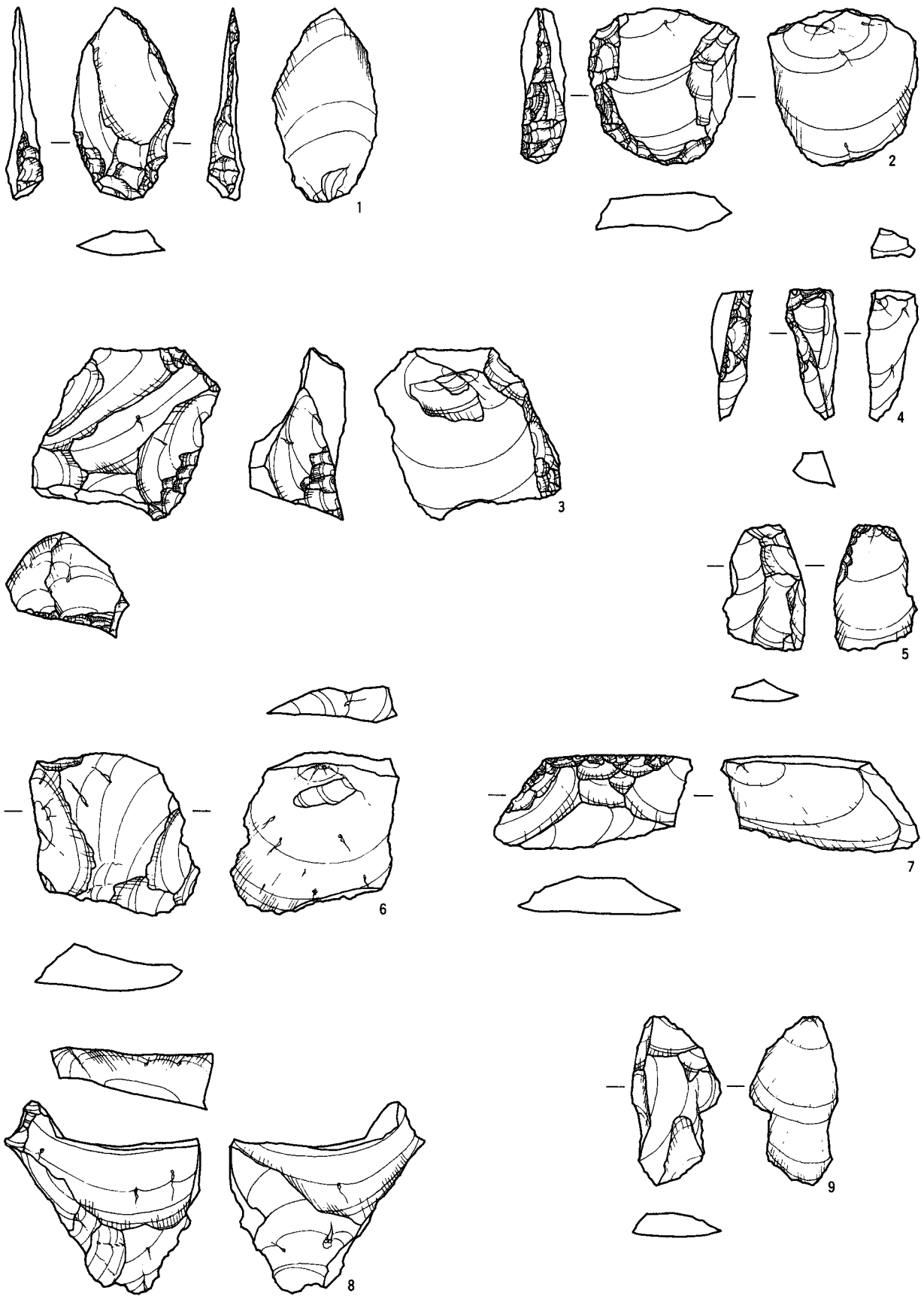
9は珪質頁岩製の小型不定形剥片である。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定ではなく、頻繁に打面を換えて剥片剥離を行っていることが窺える。



第65図 第16ブロック器種別石器分布図



第66図 第16ブロック石材別石器分布図



0 5 cm (1/1)

第67図 第16ブロック出土遺物

第30表 第16ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台形 石器	角錐状 石器	掻器	削器	ビリス・ エスター	彫刻刀 形石器	削片	R・ フルイ	U・ フルイ	剥片	砕片	剥利石	片用核	石核	石斧	敲石	礫	計	
																							1
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	115
メノウ	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
珪質頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7
計	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1.6% <td>18</td> <td>14.6% <td>100</td> <td>81.4% <td>1</td> <td>0.8% <td>123</td> </td></td></td>	18	14.6% <td>100</td> <td>81.4% <td>1</td> <td>0.8% <td>123</td> </td></td>	100	81.4% <td>1</td> <td>0.8% <td>123</td> </td>	1	0.8% <td>123</td>	123	

第31表 第16ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第67図 1	9H-29, 1	ナイフ形石器	メノウ	3.40	1.84	0.60	2.78	
2	9H-39, 4	削器	珪質頁岩	1.90	1.75	0.55	5.37	
3	9H-39, 12	剥片利用石核	黒曜石	2.93	3.31	1.50	12.51	
4	9H-38, 5	調整痕ある剥片	黒曜石	1.85	1.95	0.65	1.18	
5	9H-39, 42	剥片	黒曜石	1.00	1.15	0.26	1.35	
6	9H-39, 52	剥片	黒曜石	2.81	2.90	0.83	6.76	
7	9H-39, 54	剥片	珪質頁岩	1.60	3.43	0.63	3.89	
8	9H-39, 1	剥片	黒曜石	2.80	3.55	1.38	11.18	
9	9H-39, 44	剥片	珪質頁岩	2.92	1.57	0.45	1.71	

第17ブロック (第68~70図 第32・33表 図版11・31)

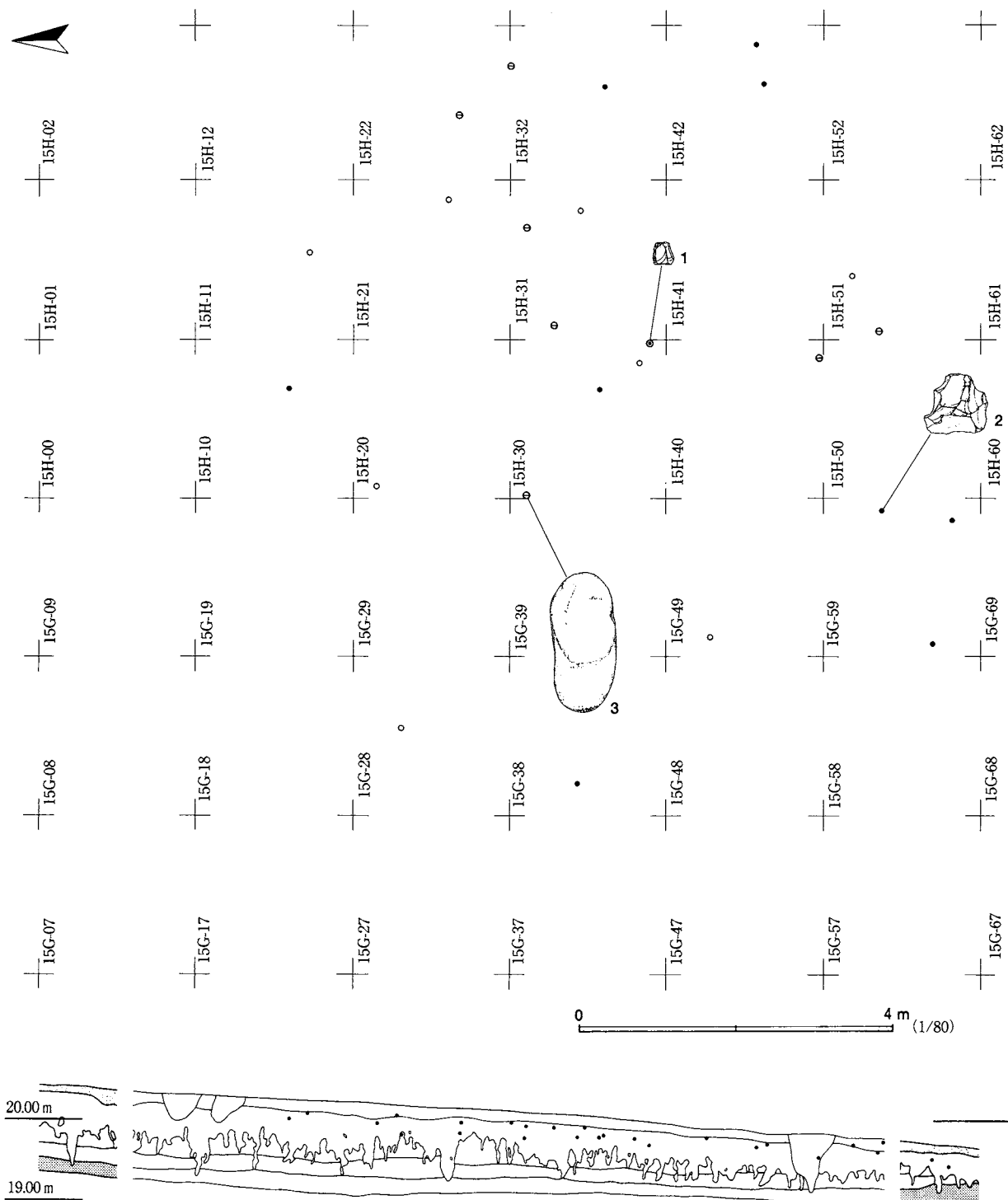
調査区の南側、台地縁辺部の標高20m付近に位置する。第6文化層に属するブロックのなかで最も標高の低い位置に属する。

ブロックの規模は長径10m、短径8mほどであり、長軸方向は台地の傾斜の方向とほぼ同一である。石器の分布する範囲としては規模は大きい、遺物の出土状況は散漫であり、総計24点の石器がこの範囲のなかに広く間隔を開け出土している。

出土した石器には定型的な石器は含まれず、黒曜石製の調整痕の認められる剥片が1点出土している他は剥片、砕片である。黒曜石製の石器はこの調整痕の認められる剥片のみであり、調整が施された後に搬入されたものと考えられる。他の石器に使用される石材は頁岩、安山岩、凝灰岩、チャートであり、また砂石、安山岩の礫も共伴する。

第32表 第17ブロック石器組成表

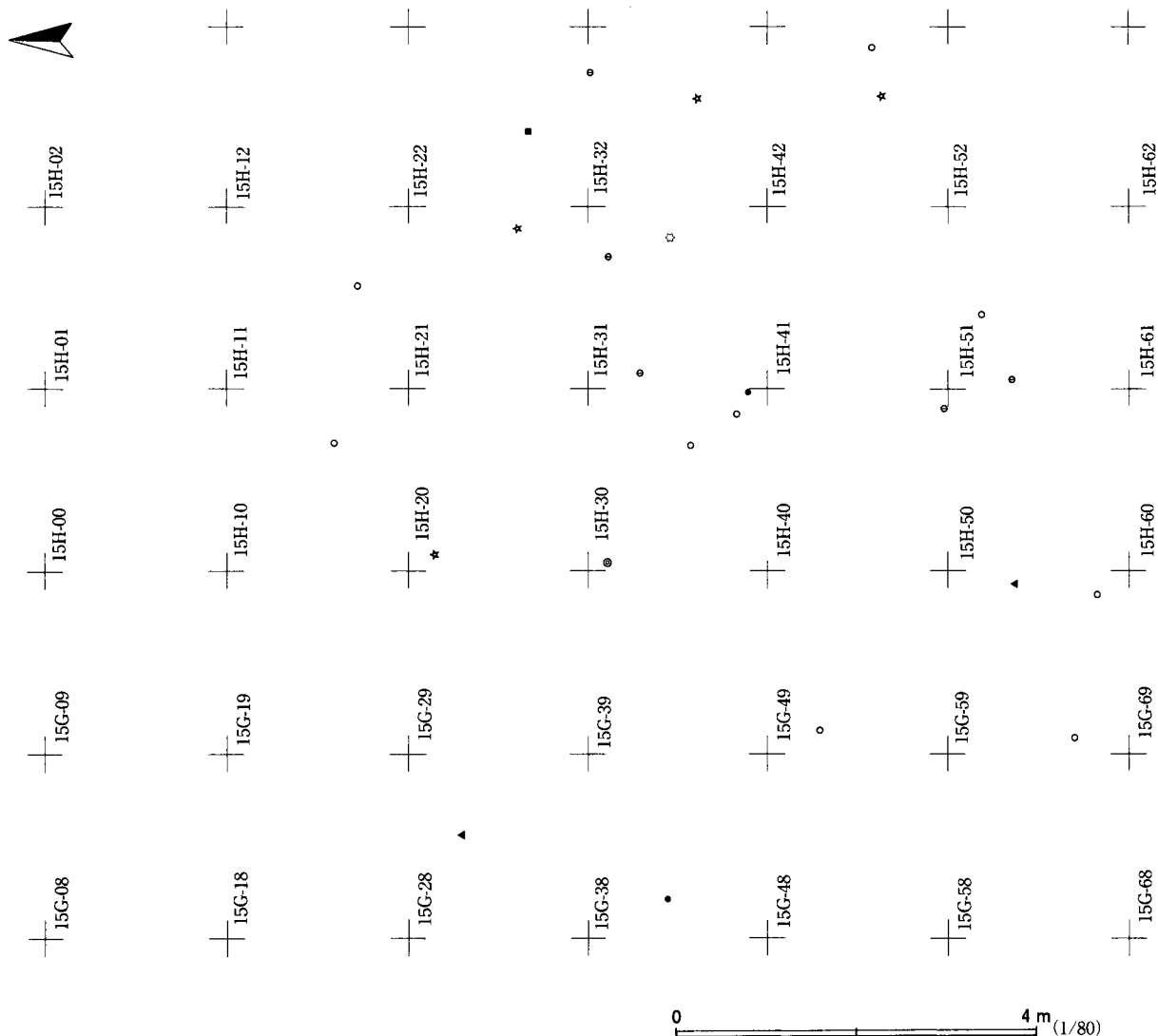
器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台形 石器	角錐状 石器	掻器	削器	ビリス・ エスター	彫刻刀 形石器	削片	R・ フルイ	U・ フルイ	剥片	砕片	剥利石	片用核	石核	石斧	敲石	礫	計		
																							2	3
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	
石英頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4.2% <td>7</td> <td>29.1% <td>8</td> <td>33.4% <td>1</td> <td>4.2% <td>7</td> <td>29.1% <td>24</td> </td></td></td></td>	7	29.1% <td>8</td> <td>33.4% <td>1</td> <td>4.2% <td>7</td> <td>29.1% <td>24</td> </td></td></td>	8	33.4% <td>1</td> <td>4.2% <td>7</td> <td>29.1% <td>24</td> </td></td>	1	4.2% <td>7</td> <td>29.1% <td>24</td> </td>	7	29.1% <td>24</td>	24



第68図 第17ブロック器種別石器分布図

出土遺物

1は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。小型の縦長剥片を素材とし、末端部は折断により除去される。調整は片側縁に対して施され、主要剥離面側から微細な調整が連続して施される。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向はすべて同一方向からであり、意図的に縦長剥片を作出した感がある。第17ブロックで出土した石器には、このような同一方向の打面から連続的に剥片を作出した痕跡の認められるも



第69図 第17ブロック石材別石器分布図

第33表 第17ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第70図	1	15H-30, 35	調整痕ある剥片	黒曜石	1.40	1.37	0.42	1.02	
	2	13G-59, 1	剥片	チャート	3.97	4.01	0.82	15.53	
	3	15H-30, 1	敲石	石英斑岩	8.78	4.23	2.81	155.65	

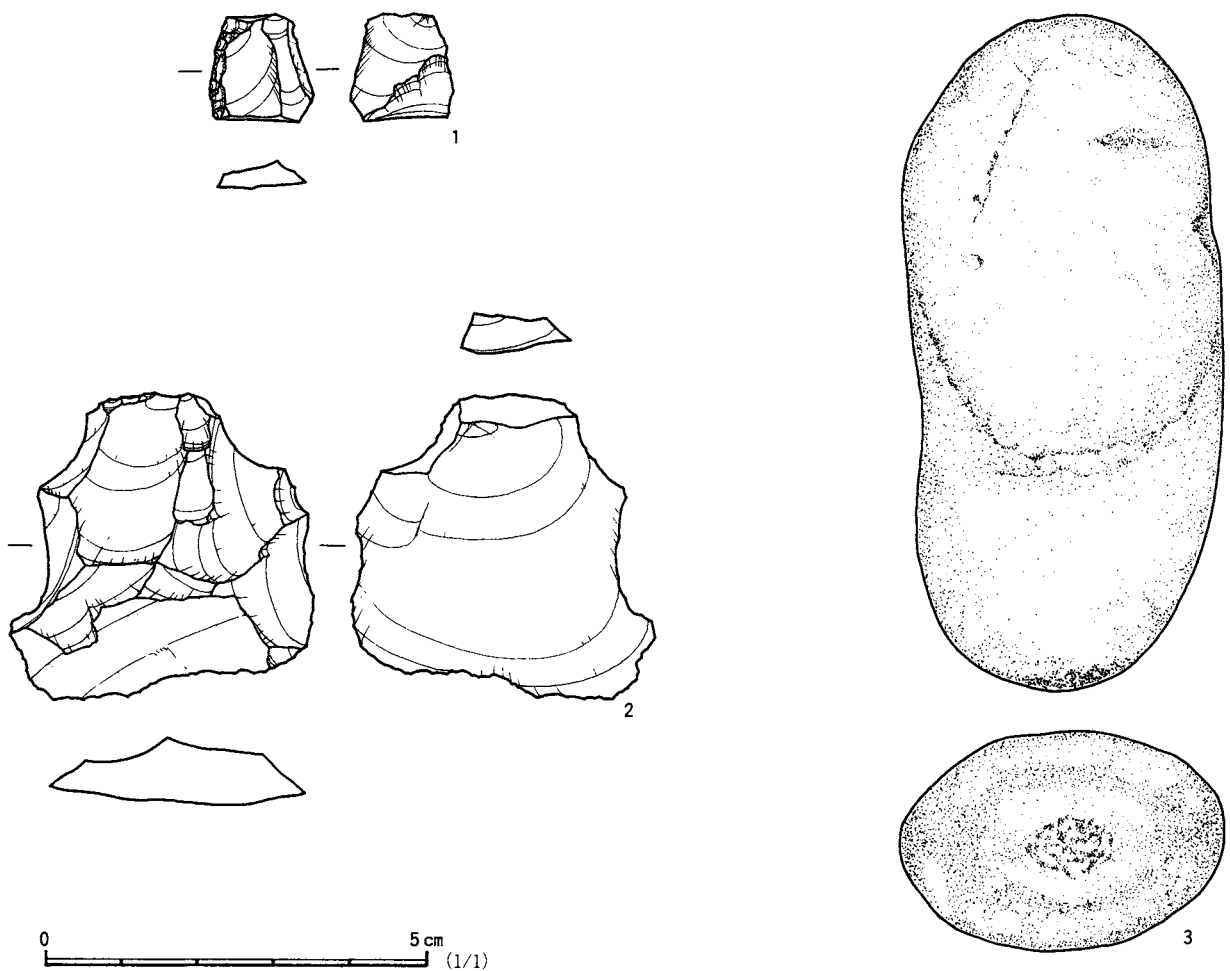
のではなく、点数的な見地以外の剥片剥離技術の面からも搬入品であることがわかる。

2はチャート製の大型の不定型剥片である。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定せず、多方向から剥片を作出している痕跡が明瞭に窺える。剥片剥離工程の比較的初期の段階に作出された剥片であろう。

3は石英斑岩製の棒状礫の一端を作用部とした敲石である。微細な敲打痕が確認できる。特に被熱したようすはない。

第18ブロック (第71～73図 第34・35表 図版11・31)

調査区の南側、台地縁辺部の標高21m付近に位置し、同一の文化層に属する第17ブロックに近接する。



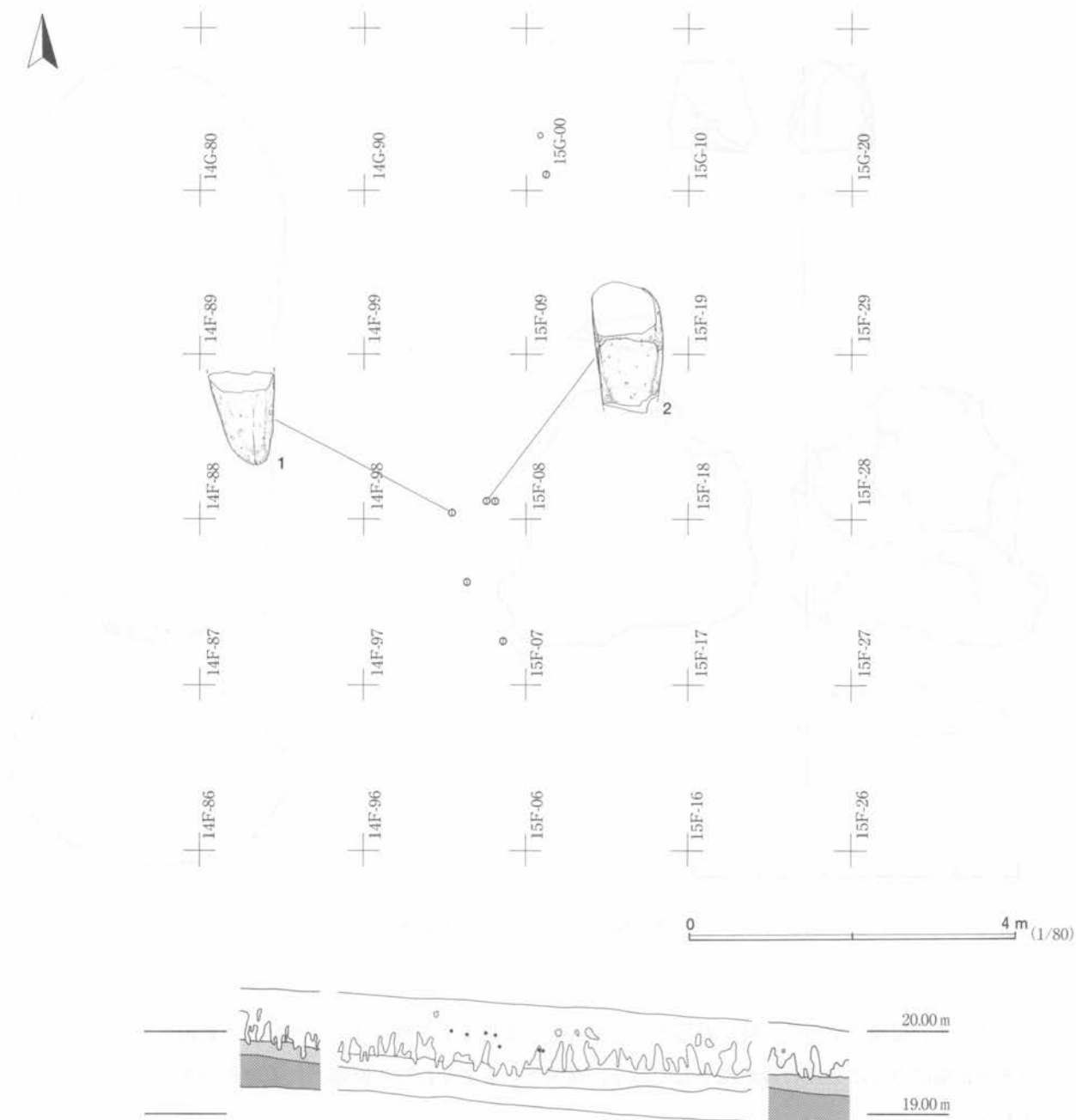
第70図 第17ブロック出土遺物

ブロックの規模は小さく、特に石器どうしが近接して出土する地点は径2mほどの範囲である。この集中区の北側にさらに2点石器が出土しており、範囲というよりむしろ直線上に遺物が分布している様相を呈する。

出土した石器は計7点であり、珪質頁岩製の碎片1点の他はすべて礫または礫片である。礫は石英斑岩が主体であり、そのほとんどが被熱し表面は赤色を呈する。混入する石英粒の形状、大きさからこれらはすべて同一母岩と考えられる。このほかに砂岩製の小礫がみられる。

第34表 第18ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石片	台 形 石 器	角錐状 石 器	擡器	削器	ど い ま し た ま	彫刻刀 形石器	削片	R- フルク	U- フルク	刺片	碎片	剥 利 石	片 用 核	石核	石斧	敲石	礫	計	
珪質頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	14.3%
石英斑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	5	71.4%
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	14.3%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	6	7	100.0%



第71図 第18ブロック器種別石器分布図

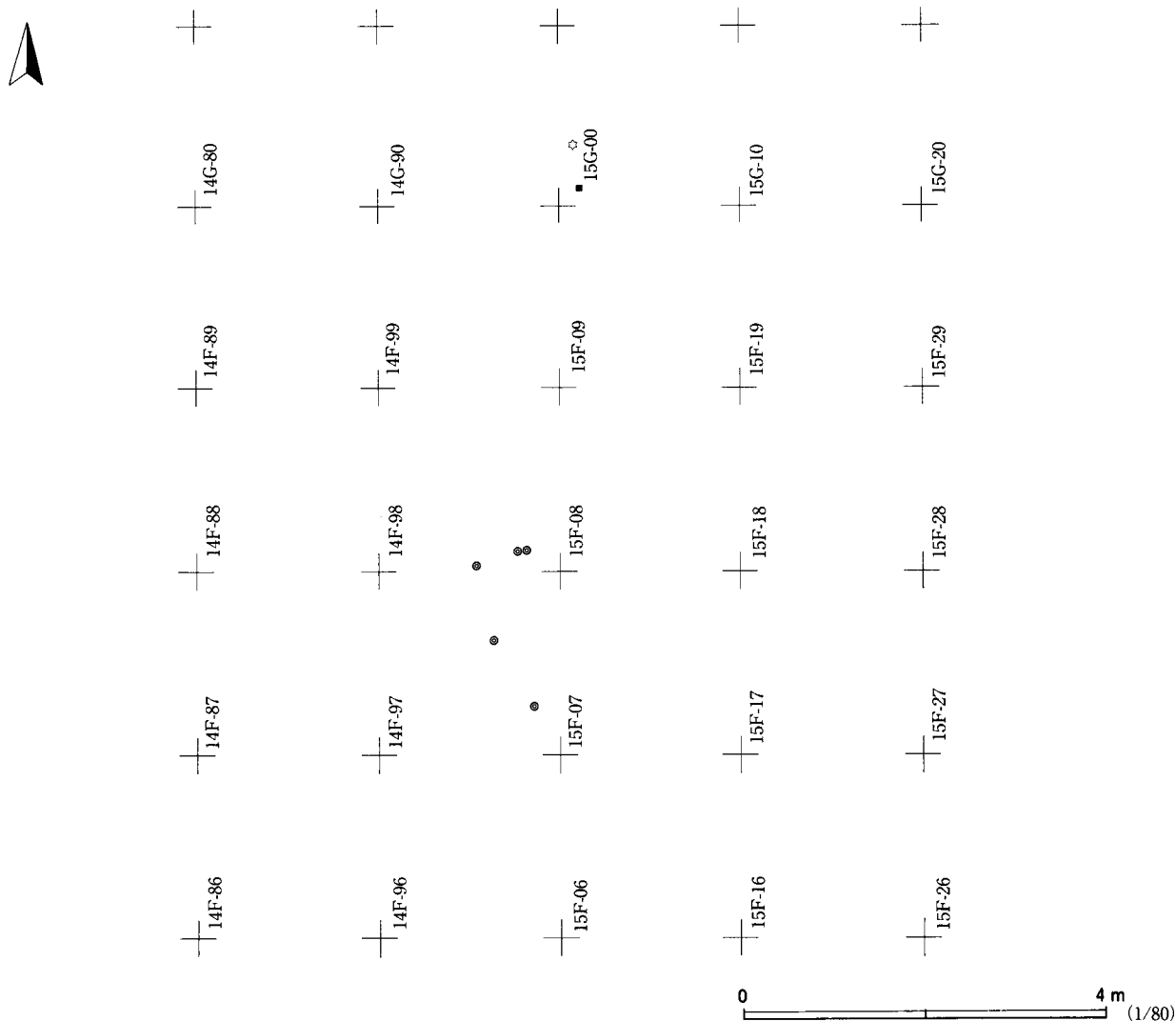
出土遺物

1・2は石英斑岩製の礫であり、同一母岩と考えられる。接合関係は確認できなかったが、全長15cm、幅4cmほどの、断面が台形を呈する棒状礫とみられ、1には先端部からの亀裂がみられる。被熱した際に亀裂が入ったものと思われるが、被熱する以前に何らかの打撃が加えられたためであろう。敲石である可能性も考えられるが、先端部には敲打痕のような明瞭な痕跡が確認できない。

第19ブロック（第74～76図 第36・37表 図版12・32）

調査の西側、標高21mほどの台地縁辺部に位置する。

ブロックの規模は直径8mほどの円形状を呈し、その範囲のなかでも特に4mほどの集中区がみられる。



第72図 第18ブロック石材別石器分布図

第35表 第18ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第73図	1	14F-98, 1	礫	石英斑岩	5.78	4.09	3.34	87.78	
	2	14F-98, 1	礫	石英斑岩	7.90	4.41	2.39	144.25	

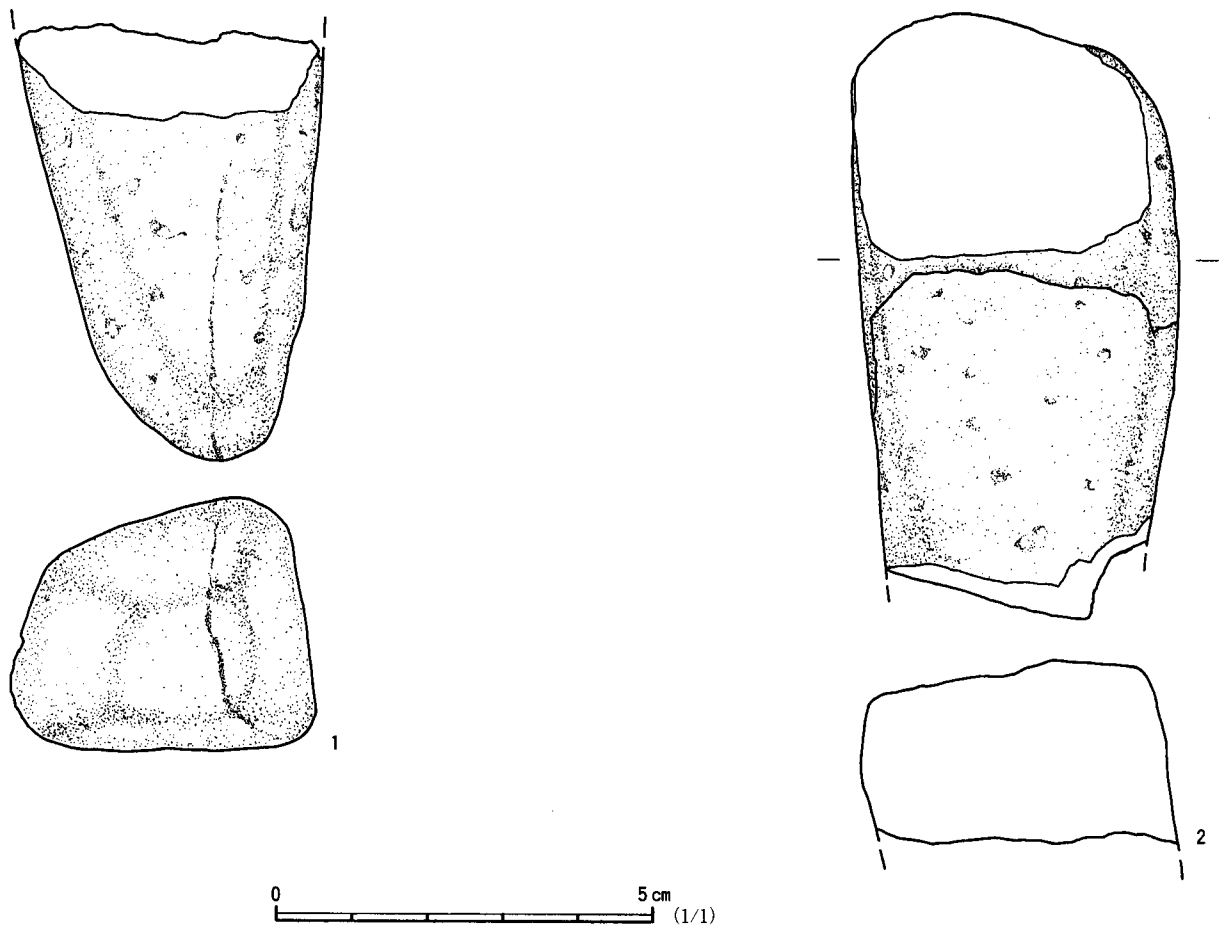
石器の出土点数は総計13点であり、範囲からするとかなり散漫に出土していることがわかる。

ブロックを構成する石器の組成は、そのほとんどが剥片、碎片であり、定型的な石器はなく、調整痕の認められる剥片が1点出土したのみである。

第19ブロックから出土した石器の石材は多様であり、チャート、黒曜石、凝灰岩、珪質頁岩、変成岩、砂岩が使用される。いずれも点数的に少数で、多いものでも砂岩製の石器4点であり、明確な剥片剥離の痕跡はみられない。

出土遺物

1は砂岩製の剥片である。表面には原石面を有し、この剥片が作出された打面と同一の打面からの剥離痕がみられる。剥片剥離工程の初期段階に作出された剥片と考えられる。打面を広く設定し打撃を加えているためやや部厚で、剥片の末端部は若干ヒンジ・フラクチュア気味となる。原石面には横方向の原石の



第73図 第18ブロック出土遺物

稜がみられ、この稜を除去する目的で作出された石核整形剥片と考えられる。

2・3は凝灰岩製の剥片である。

2は小型の不定型剥片で、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定であり、同一方向に設定された打面から、連続的に作出された剥片の一つであることが理解できる。剥片剥離工程の比較的后期の段階に作出された剥片であろう。

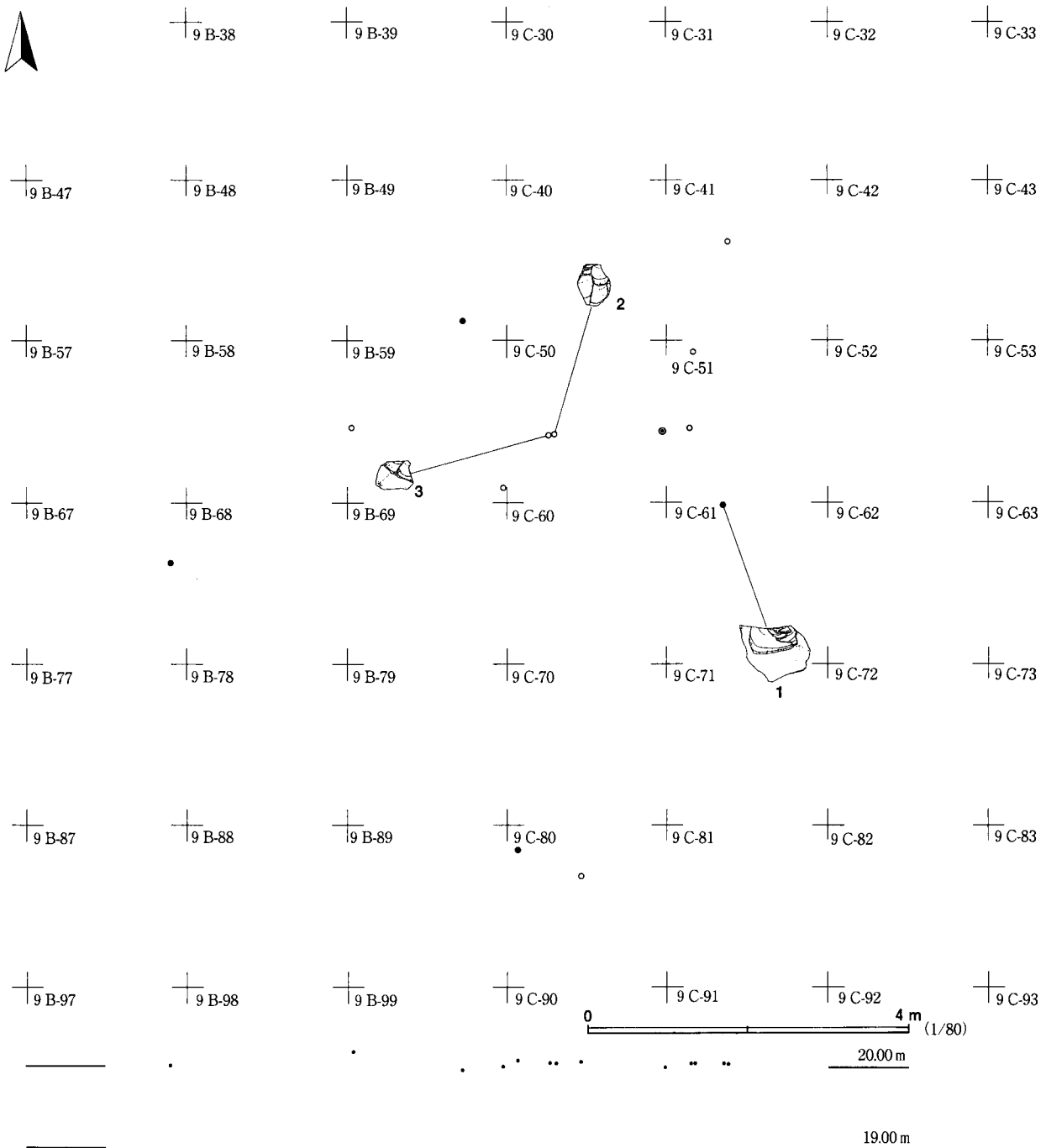
3の表面には原石面が残り、また表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、主要剥離面の打点の方向と同一である。しかし表面の剥離の打点は、この剥片の打面とは異なり、打面再生が施された後に最初に作出された剥片であることが理解できる。

第20ブロック (第77～79図 第38・39表 図版12・32)

調査区の南東側、北にむかって延びる小支谷の開口部付近に、標高21mほどの平坦部が存在する。この緩斜面部と平坦部の境界部に第20ブロックは位置する。

出土層位はソフトローム層上部であるが、この付近はソフトローム層直下がほぼ第2黒色帯であるⅦ層となるため、Ⅳ層下部に属するブロックと考えられる。

石器は総計26点出土しており、直径4mほどの範囲で散漫に分布している。これらの石器のなかには定型的な石器は認められず、石器組成は剥片、碎片、礫となっている。剥片は概して大型のものが多く、その大半が縦長剥片である。



第74図 第19ブロック器種別石器分布図

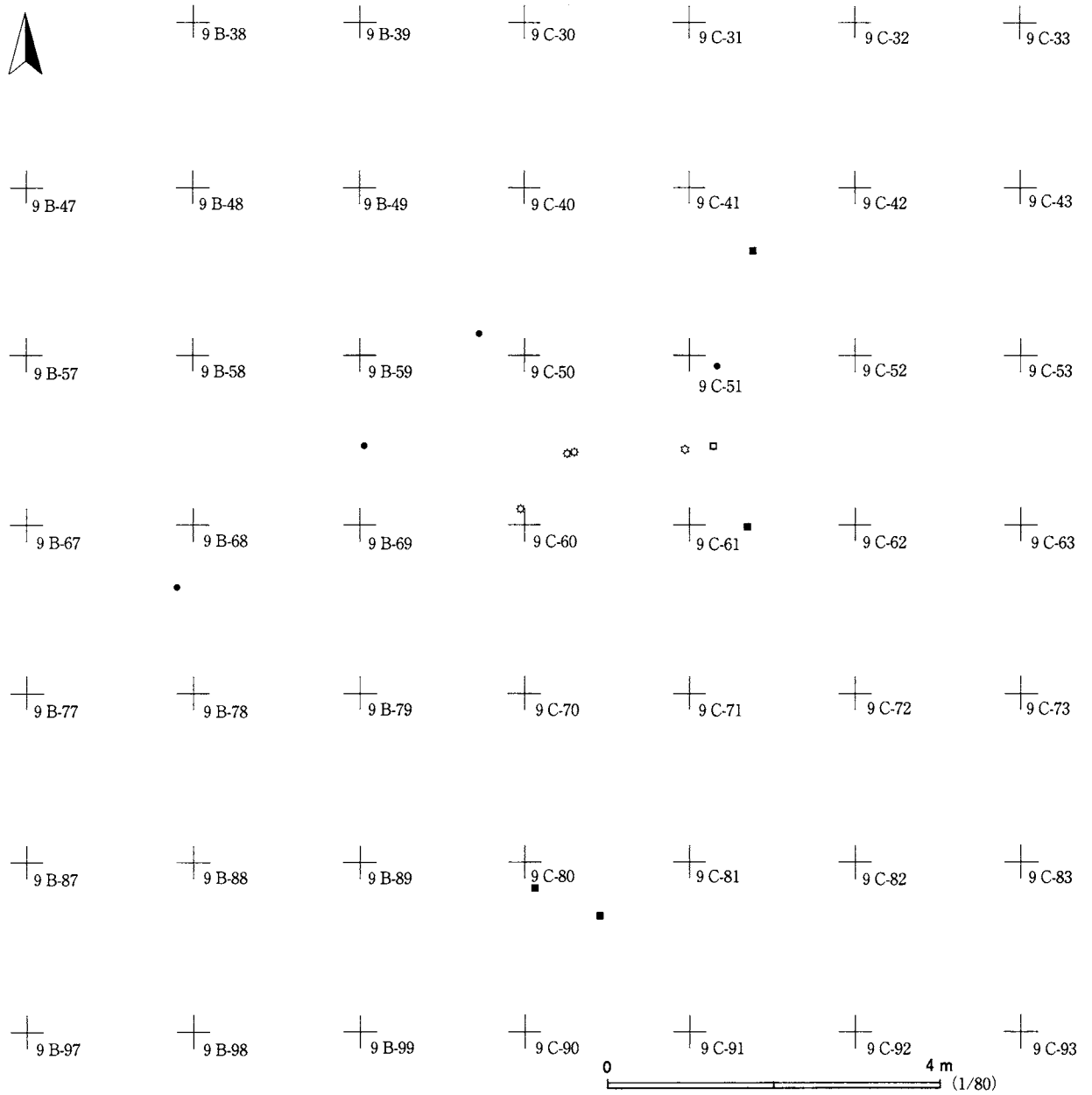
石器に使用される石材は珪質頁岩が最も多く、全体数の半数を占めている。他には安山岩、凝灰岩が使用されるが、剥片石器としてはそれぞれ2点出土するのみで客体的といえる。

出土石器

1～3は珪質頁岩製の剥片である。

1の表面には原石面がみられ、側面からの形状は搔器のそれを思わせるようなかなり部厚な剥片である。剥片剥離工程の初期の段階に、石核整形を目的として作出された剥片と考えられる。

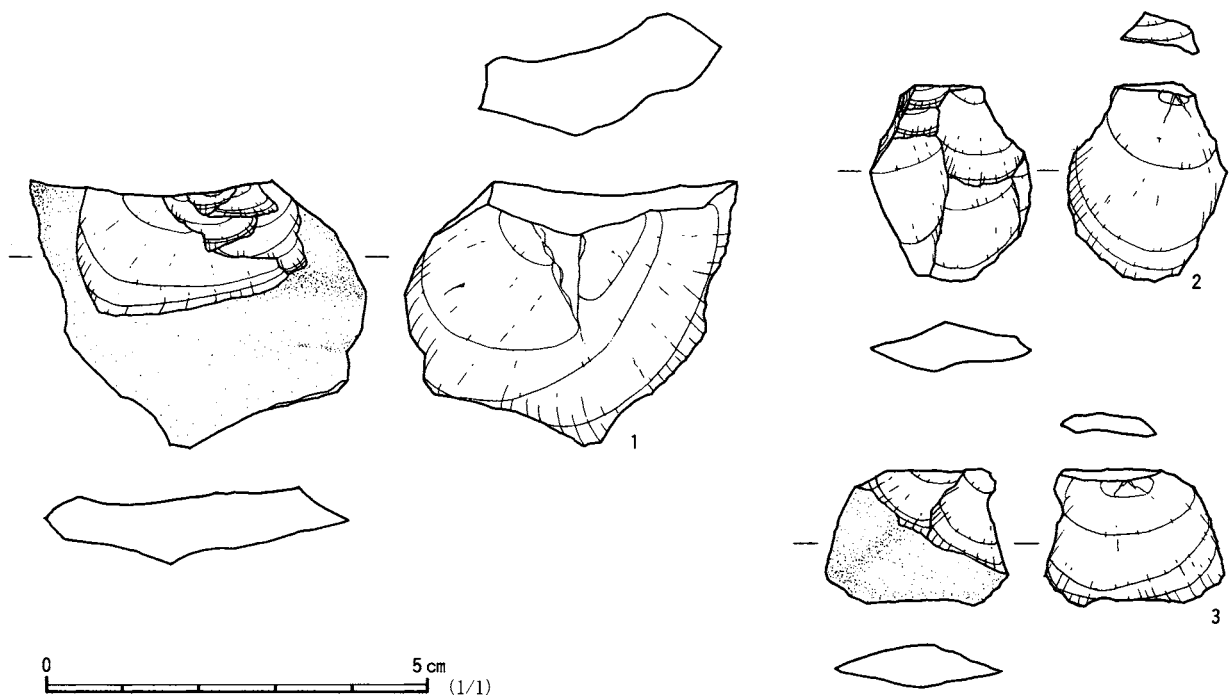
2は縦長剥片であるが、表面の剥離は一枚の大きな剥離痕である。これは剥片剥離工程の初期段階の剥離痕であり、おそらく石核整形剥片が作出された後のネガティブ面であろう。またこの剥片の主要剥離面



第75図 第19ブロック石材別石器分布図

第36表 第19ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台形 石器	角錐状 石器	擡器	削器	ビース・ スタ-1	彫刻刀 形石器	削片	R・ フリク	U・ フリク	剥片	砕片	剥利石 片用核	石核	石斧	敲石	礫	計	
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	7.7%
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	3	23.1%
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	3	23.1%
珪質頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	7.7%
変成岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	7.7%
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	4	30.7%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	4	8	-	-	-	-	-	13	100.0%



第76図 第19ブロック出土遺物

第37表 第19ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第76図 1	9C-61, 3	剥片	砂岩	3.40	4.50	1.12	12.87	
2	9C-50, 7	剥片	凝灰岩	2.66	2.10	0.75	3.26	
3	9C-50, 3	碎片	凝灰岩	1.80	2.30	0.57	2.19	

は平滑ではなく、前の打撃による亀裂が残るため、縦長剥片の作出を意図して得られた剥片ではなく、結果として縦長剥片となったものと考えられる。

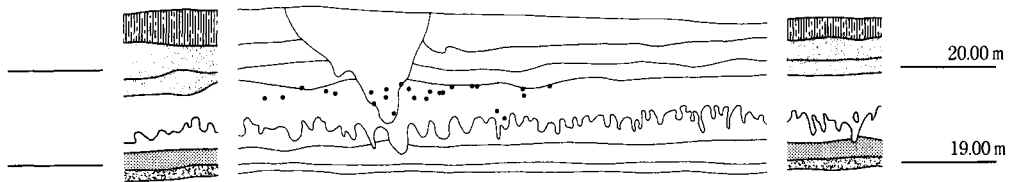
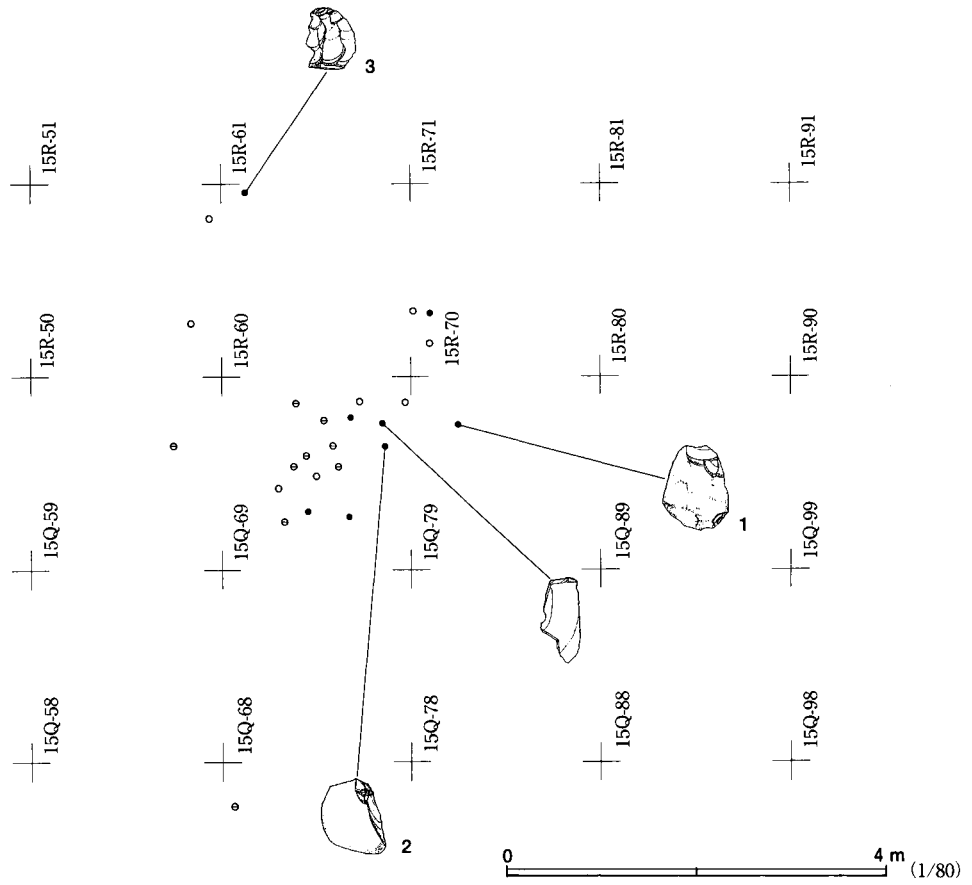
3の剥片の表面には剥片剥離時の同方向からの剥離痕がみられ、主要剥離面の打点の方向と一致する。また表面の打面付近には頭部調整によるものと考えられる微細な剥離がみられ、薄い作りの縦長剥片の作出を意図して剥片剥離を行っていた痕跡が明瞭に窺える。

4は凝灰岩製の大型の不定型剥片である。表面の片側縁にみられる剥離痕の他は原石面である。剥片剥離時の剥離の打面の方向は、主要剥離面の打面と同一、または同一方向であり、素材剥片の作出と石核整形の両者を意識して得られた剥片と考えられる。

(7) 第7文化層

第7文化層に属するブロックは、第21ブロックの1地点のみが該当する。出土層位はソフトローム層の上部であるが、その石器組成、剥片剥離技術からIV層上部に属する文化層と考えられる。

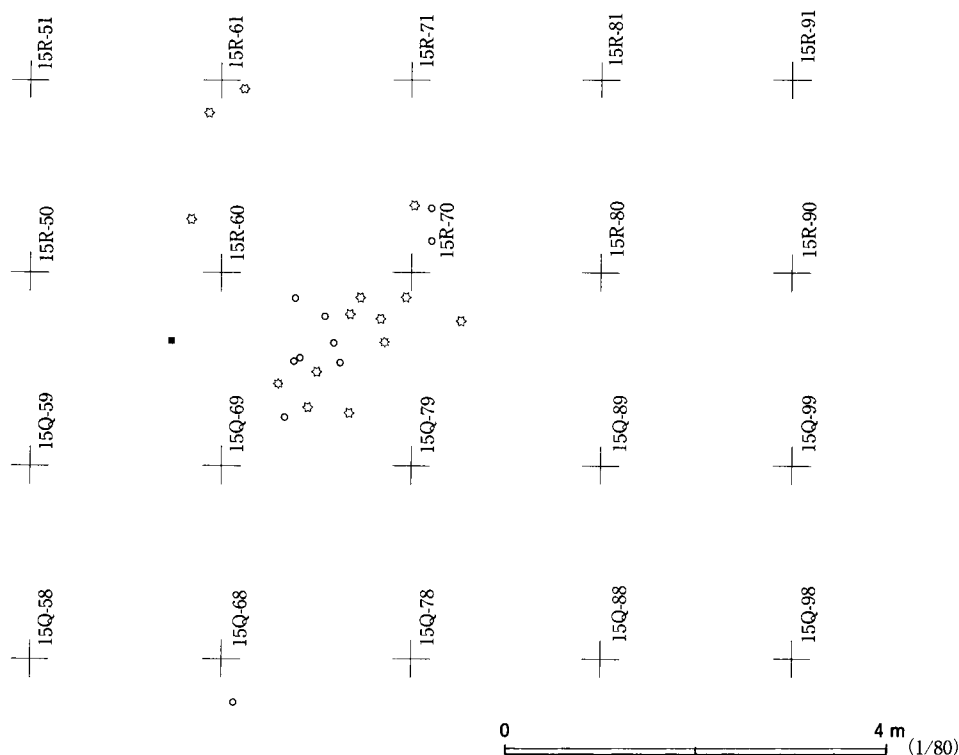
石器組成の点で文化層を特徴づける定型的な石器として、石刃状の縦長剥片を素材としたナイフ形石器が挙げられ、第21ブロックからは欠損品を含めて3点出土している。また不定型剥片を素材とした形態の異なるナイフ形石器も確認されている。その他の石器として小型の削器、彫刻刀形石器を石器組成のなかに含む。削器はいずれも黒曜石製であり、調整はほぼ全周にわたり施されるものと考えられる。一見するとナイフ形石器の基部のようにも感じられるが、刃部の断面形状はやや鈍角な感があり、ナイフ形石器の



第77図 第20ブロック器種別石器分布図

第38表 第20ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	掻 器	削 器	ヒース・ エストロ	彫刻刀 形石器	削 片	R・ ルイ	U・ ルイ	剥 片	砕 片	剥 利 石	片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
砂 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
																					3.8%	3.8%
安 山 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	8	10
														3.8%	3.8%						30.8%	38.5%
凝 灰 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	2	2
														3.8%	3.8%						7.7%	7.7%
珪 質 頁 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	7	-	-	-	-	-	13	13
														23.2%	26.8%						50.0%	50.0%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	8	9	-	-	-	-	-	9	26
														30.8%	34.6%						34.6%	100.0%



第78図 第20ブロック石材別石器分布図

第39表 第20ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第79図 1	15Q-79, 1	剥片	珪質頁岩	3.53	4.46	1.97	29.26	
2	15Q-69, 12	剥片	珪質頁岩	4.49	2.27	0.96	5.47	
3	15R-60, 1	剥片	珪質頁岩	3.49	3.05	0.49	3.51	
4	15Q-69, 11	剥片	凝灰岩	3.91	3.40	1.04	12.96	

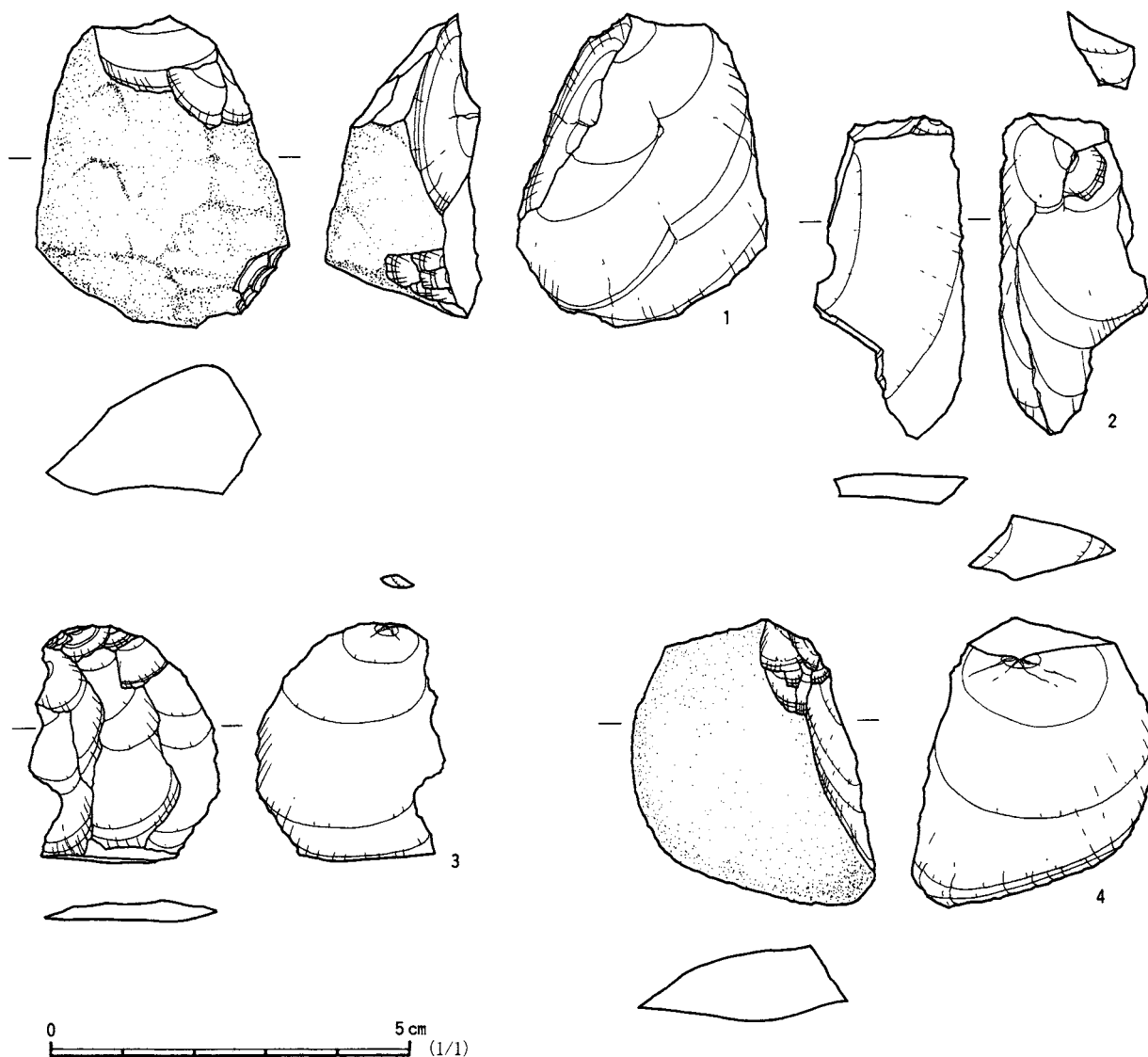
ブランディングとは明らかに異なる。彫刻刀形石器については点数的に2点と少数ではあるが、彫刻刀面を作出した際の削片が同ブロック内に共伴して出土しているため、この文化層において彫刻刀形石器もまた重要な石器組成の一部を構成するものと考えられる。

石器に使用される石材の種類は出土点数の割に少なく、頁岩を主体とし、他に黒曜石、流紋岩、チャート、砂岩が挙げられるが、黒曜石以外は点数的に少数であり、明確な剥片剥離が行われた痕跡はみられず、極めて客体的である。以下にそれぞれの石材について記す。

頁岩：色調は暗褐色もしくは黒褐色を呈する。極めて希であるが、白色を基調とし青灰色の節理が縞状になるものもみられる。一部の石器の剥離面には径2mmほどの環状の夾雑物がみられ、有孔虫の化石とみられる。きめは細かいが光沢はない。

黒曜石：色調は黒色で透明感がある。径0.5mmほどの淡黄褐色の夾雑物を多く含むが、器表面はそれほど荒れた感じはない。

流紋岩：色調は薄い肌色で、所々黄色みがかかる。夾雑物は含まず、きめは細かいが器表面は粉っぽく



第79図 第20ブロック出土遺物

光沢はない。質感に反し持った感じが軽い。

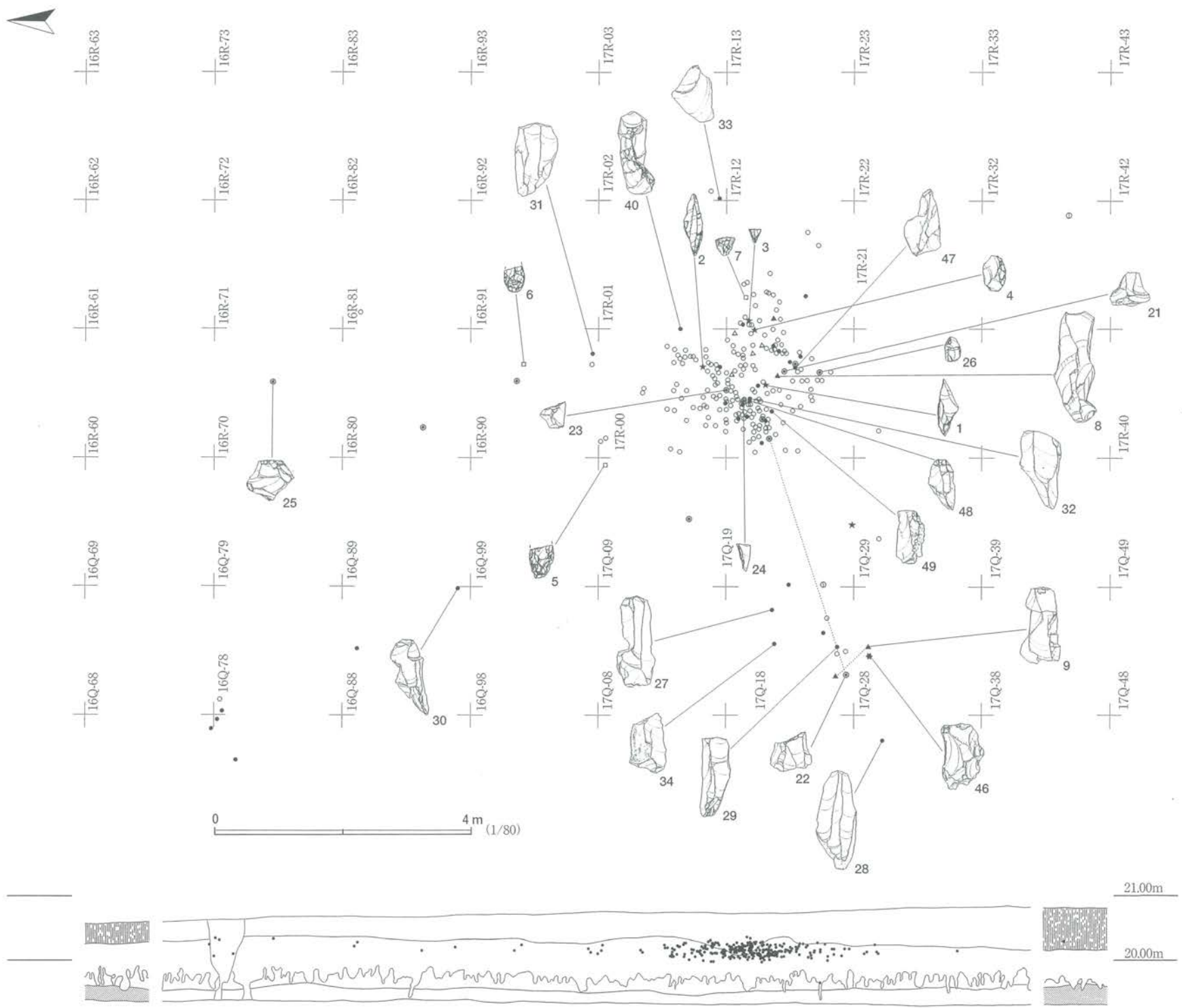
チャート：色調は青灰色を基調とし、部分的に緑がかかる。節理はほとんどみられない。きめは細かく光沢がある。

砂 岩：第21ブロックからは礫片のみの出土である。色調は青みかかった暗灰色を呈し、岩石を構成する粒子は均一に細かく堅緻である。

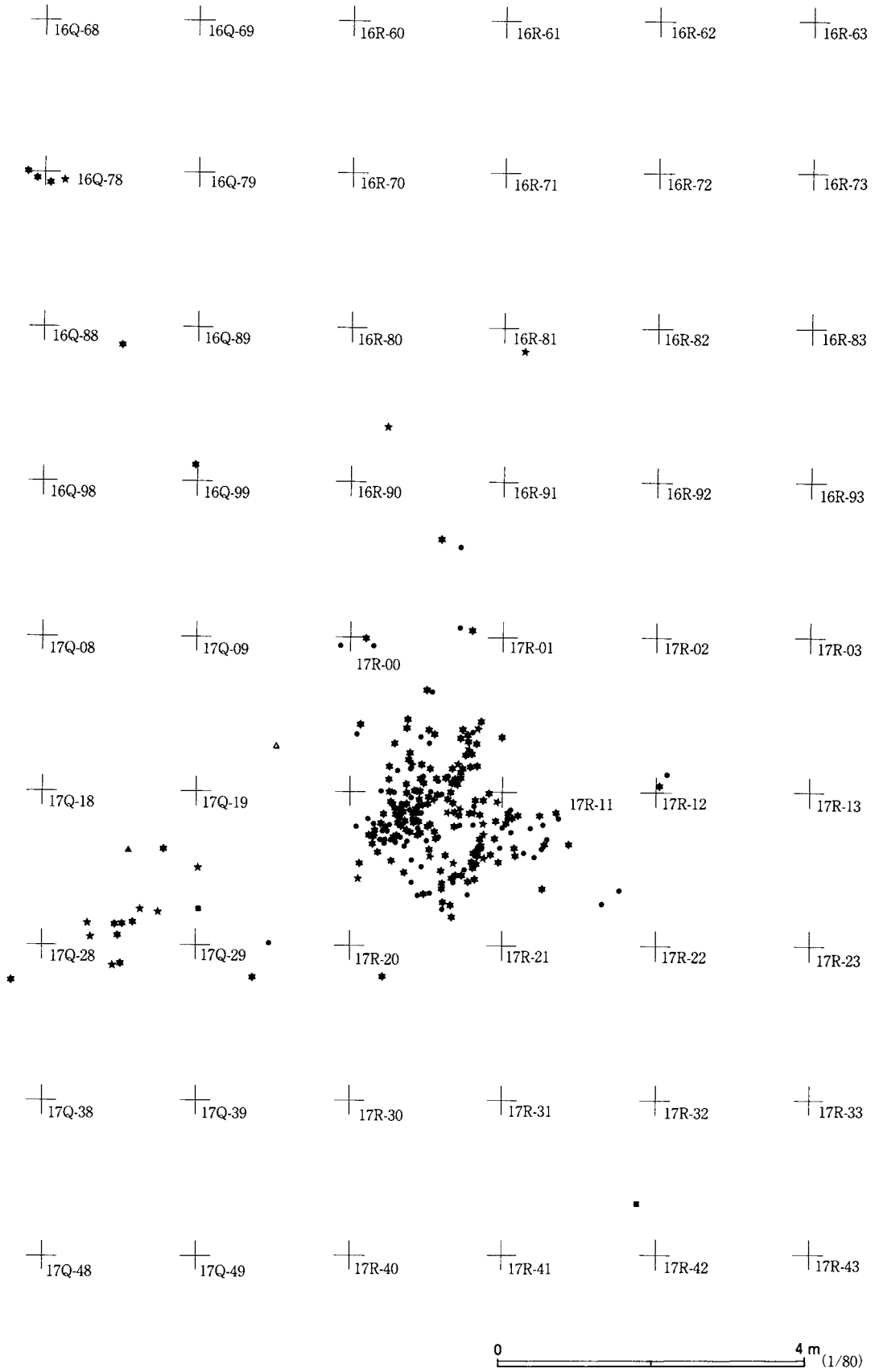
第21ブロック（第80～87図 第40・41表 図版12・13・32～36）

調査区の南端、北にむかって延びる小支谷の開口部付近に標高21mほどの平坦部が存在するが、第21ブロックはこの平坦部に位置し、標高21m前後を測る。今回の調査で検出した旧石器時代石器集中地点のなかでも、最も南に位置するブロックである。

出土層位はソフトローム層の上部にその分布が集中するが、この付近の土層の堆積状況は、ソフトローム層直下に第2黒色帯上部がみられるため、他の地点と比較すると土層の堆積、特に第2黒色帯より上部に存在する土層の堆積が薄いことが窺える。石刃素材のナイフ形石器を石器組成に含む、また剥片剥離技



第80図 第21ブロック器種別石器分布図



第81図 第21ブロック石材別石器分布図

術の観点から、Ⅳ層上部に属するブロックと考えられる。

ブロックの平面形状は径4mの集中地点を中心とし、長径14m、短径8mの楕円形状となり、規模としては広い範囲に石器が分布するブロックといえる。径4mの集中地点以外は散漫な分布であるが、集中地点の西側に径2mほどの小規模な集中がみられ、ここより出土する石器は石刃状剥片が大半を占める。素材剥片の集中という点で特筆できる。

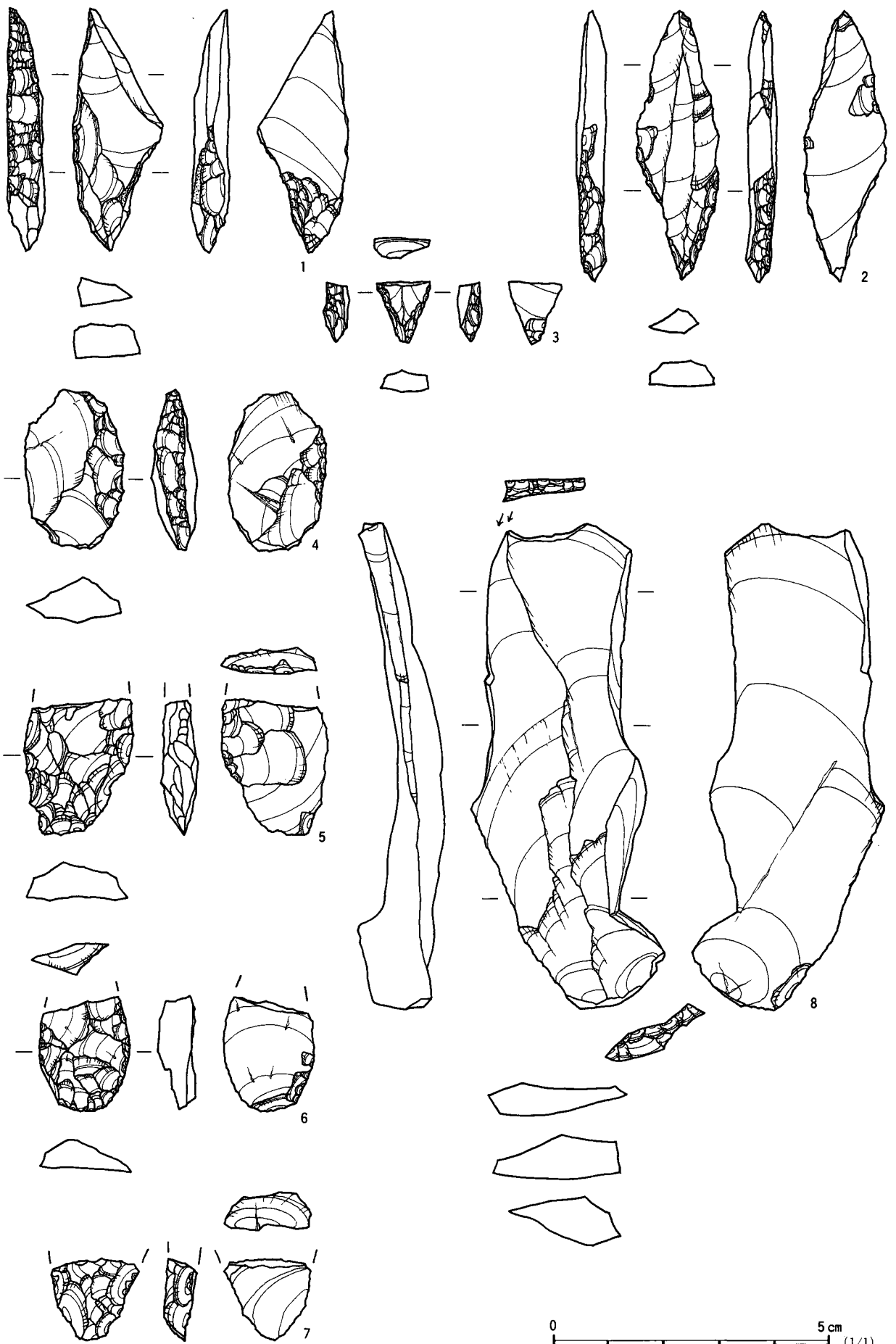
出土した石器は総計252点を数える。このうち定型的な石器としてナイフ形石器、槍先形尖頭器、彫刻刀形石器が数点出土している。ナイフ形石器は頁岩製と黒曜石製のもので、このうち頁岩製のナイフ形石器は、小型石刃状剥片を素材とし調整を加えたものである。槍先形尖頭器についてはすべて黒曜石製であり、素材剥片の形状は不定形と考えられる。概して小型であり一部を除き片面に調整が施される。彫刻刀形石器は2点出土しておりいずれも頁岩製である。これらは調整あるいは折断により彫刻刀面を作出し、その面から数回のファシットにより製品化している。また黒曜石製の削片もみられることから、黒曜石製の彫刻刀形石器も製作されていたと考えられる。これらの彫刻刀形石器は、彫刻刀面の作出方法等から小坂型彫刻刀形石器の範疇に入るものと考えられる。出土した彫刻刀形石器は2点のみであるが、同じ頁岩製の削片が10点、同ブロックから出土しているため、彫刻刀形石器として製品化したものをブロック外へ搬出した可能性が考えられ、石器組成における彫刻刀形石器の点数的な割合は、かなり高いものと考えられる。

製品以外に調整痕の認められる剥片が数点出土している。これらの形状は一定しないが、調整は常に密に細かい剥離で行われており、形状という点を除外して観察すると、彫刻刀形石器に施される彫刻刀面の調整に酷似する。また石器の素材となりうる剥片が多く出土している。そのほとんどは長さが5cm以上であり、ナイフ形石器、彫刻刀形石器の素材として十分活用可能な形状である。素材剥片以外にも、剥片剥離作業の際に作出された小型の剥片、碎片類、また石器製作により作出された調整剥片も伴う。よって第21ブロック内において剥片剥離から製品加工までの一貫した作業が行われていたことが考えられる。しかしこれら剥片類の接合関係は確認できず、また石核は共伴せずに頁岩製の剥片利用石核が1点出土するのみであり、剥片剥離のようすを明確に裏付けることはできない。

石器に使用される石材は頁岩が主体となる。特徴は前述したとおりであるが、後の第8文化層に属するブロックにおいても多用される石材である。第21ブロックで使用される頁岩は、第8文化層の頁岩と比較するときめが粗く褐色ではあるが、白色部分が混入するものがほとんどである。石材の原産地の違いであろうか、関連資料の比較と石材原産地の特定が今後の重要課題となろう。

第40表 第21ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	挿 器	削 器	ヒックス・ ミスナー	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フルイ	U・ フルイ	剥 片	碎 片	剥 片 利 用 石 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
頁 岩	3 1.2%	-	-	-	-	-	-	-	-	2 0.8%	8 3.1%	6 2.4%	-	35 13.9%	122 48.4%	-	1 0.4%	-	-	-	177 70.2%
流 紋 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.4%	-	-	-	-	-	-	1 0.4%
黒 曜 石	1 0.4%	-	3 1.2%	-	-	-	-	-	-	2 0.8%	1 0.4%	-	-	3 1.2%	61 24.2%	-	-	-	-	-	71 28.2%
チャ ート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.4%	-	-	-	-	-	-	1 0.4%
砂 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 0.8%	2 0.8%
計	4 1.6%	-	-	-	-	-	-	3 1.2%	-	2 0.8%	10 3.9%	7 2.8%	-	40 15.9%	183 72.6%	-	1 0.4%	-	-	2 0.8%	252 100.0%



第82図 第21ブロック出土遺物(1)



第83図 第21ブロック出土遺物(2)

出土遺物

1～4はナイフ形石器である。このうち1～3は頁岩製で、形状に若干の違いはあるものの同じ技術基盤により製作されたものである。

1の表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、主要剥離面の打面の方向と180°異なる。表面の剥離は同方向からのものであり、上下両端に打面を設定した石核から連続的に作出された石刃状剥片を素材としていることが窺える。素材剥片の末端部側を先端部とし、調整は両側縁に対し施される。主要剥離面側からの調整が主であるが、左側縁にみられるような素材剥片の表面側からの調整も確認できる。調整部位の断面形状はほぼ90°となる。また主要剥離面側の基部にも調整がみられ、剥離に切り合い関係から、この部分の調整が最後に行われたことが窺える。

2の表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、すべて同一方向からの打撃によるものであり、連続的に作出された石刃状剥片の一つを素材として製作されたことが窺える。素材剥片の打面側を先端部として設定し、先端部は素材剥片の打面を除去して作出されている。左側縁にみられる縦方向の剥離痕は、2の素材剥片が作出される以前の剥離痕である。調整は基部側の両側縁に施されるが、1のナイフ形石器のように表面側からの調整は行われていない。

3は基部のみ遺存しているため全体の形状は不明であるが、おそらく1・2に近い形状となろう。調整は両側縁に対して施され、主要剥離面側からの微細な調整が確認できる。また主要剥離面にも、1のナイフ形石器と同様に面的な調整が施されている。

4のナイフ形石器は黒曜石製である。頁岩製のナイフ形石器と形状が異なり、幅の広い形状を呈する。素材剥片は部厚な横長剥片を活用し、素材剥片の末端部に調整を加え製品としている。また主要剥離面右側縁にみられるように、素材剥片の打面を除去するように、面的な調整を加えている。調整は概して密に細かく施されるが、調整部位の断面形状は90°より鋭角となる。

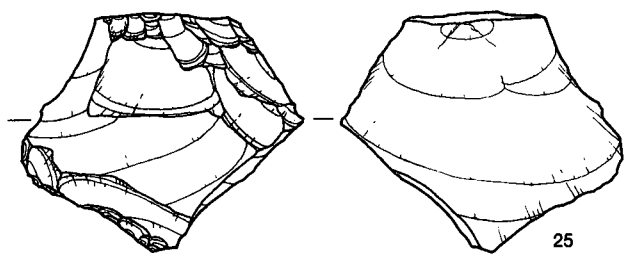
5～7は黒曜石製の槍先形尖頭器である。すべて欠損品であるため全体の形状は不明である。

5は縦長の不定形剥片を素材とし、全周に調整が施される。表面の調整は面的に施された後、細調整により形状を整えている。また主要剥離面側にも面的な調整が施され、表面に施された調整の後に主要剥離面の調整が施されていることが窺える。欠損面には数回の細かい調整がみられるが、欠損品を再生目的で施された調整であろう。

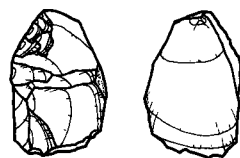
6は小型の縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面は1回の剥離で除去されている。表面側の調整は面的に施され、5の槍先形尖頭器と同様にさらに細調整で周縁の調整を行っている。主要剥離面側には面的ではないが、一部に細かい調整が施されている。

7は小型の部厚な不定形剥片を素材とし、表面のほぼ全面に調整が施される。調整は5・6と比較して粗く、ナイフ形石器のブランディングに類似する。主要剥離面側には調整はみられない。

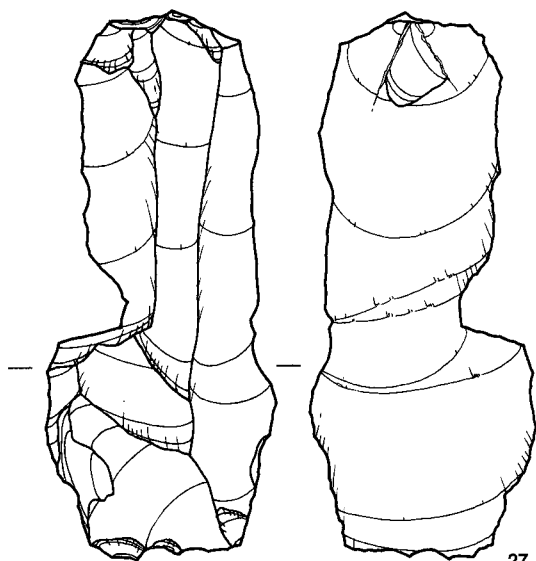
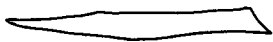
8・9は頁岩製の彫刻刀形石器である。いずれも石刃状剥片を素材としている。8は大型の石刃状剥片を素材とし、素材剥片の末端部とファシット以外の部位は無調整である。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向はほとんどが同一方向であり、同一方向に設定された打面から連続的に剥片を作出していたことが窺える。また打面には打面調整の細かい剥離が明瞭に観察でき、同形状の剥片の作出をかなり意識していたと考えられる。石器製作の過程は、素材剥片の末端部に微細な調整を加え彫刻刀面を作出し、彫刻刀面からグレイバー・ファシットを施すのみで終了している。



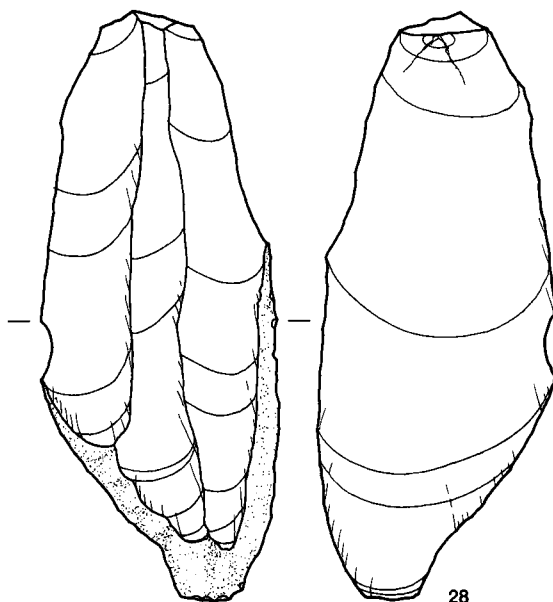
25



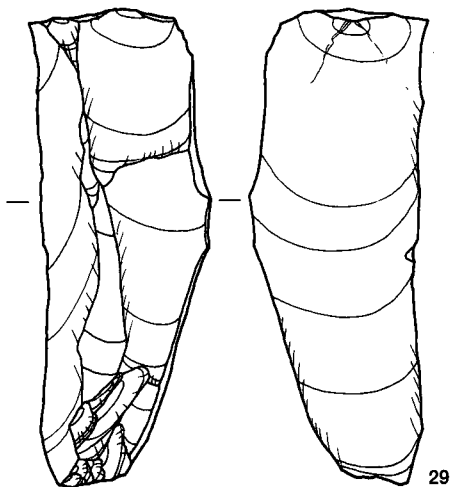
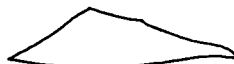
26



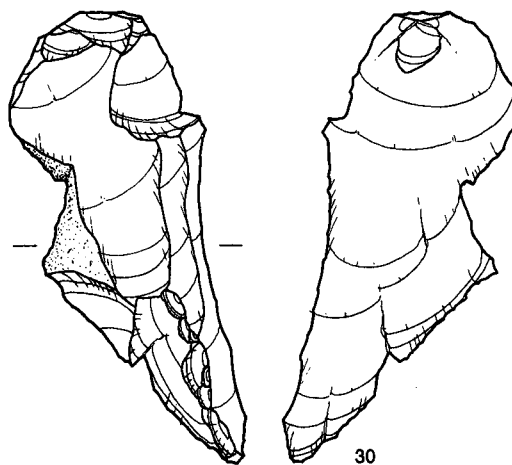
27



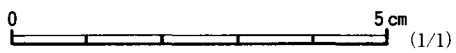
28



29



30



第84図 第21ブロック出土遺物(3)

9も8と同様に、連続的に作出された石刃状剥片を素材としているが、彫刻刀面の作出は8のように調整により作出されるのではなく、素材剥片の打面側を折断することにより行われている。ファシットはその折断面から施され、1条のグレイバー・ファシットが確認できる。

10～19はグレイバー・スポールである。12・18の黒曜石製の他は全て頁岩製である。

10の形状は他のものに比べ幅があり、彫刻刀面に施される調整と極めて類似した痕跡がみられる。彫刻刀面を作出した直後に剥ぎ取られたスポールか、あるいは彫刻刀面の再生を目的として作出された剥片と考えられる。

11～13は幅が狭く、表面の左側縁に彫刻刀形石器の主要剥離面がみられる。第21ブロックで出土した彫刻刀形石器は2点と資料的に少ないが、いずれも彫刻刀面を上にした場合、ファシットは左側縁に施されている。グレイバー・スポールからみた表面の剥離のようすからも、上記のように左側縁に施す傾向が認められるため、このブロック内で製作される彫刻刀形石器は左側縁にファシットを有するものと考えられる。

14～19は前述したものに比べて幅の広いスポールである。断面形状は台形を呈するものが多く、連続してファシットを施している痕跡が認められる。第21ブロックから出土した彫刻刀形石器は頁岩製の製品のみであるが、12・18のように黒曜石製のスポールも出土しているため、黒曜石製の彫刻刀形石器も製作されていたと推測され、製作された彫刻刀形石器はブロック外に搬出されたものと考えられる。

20～26は調整痕の認められる剥片である。23の黒曜石製のものを除いてすべて頁岩製である。

20は縦長の不定形剥片の打面を除去し、両側縁に微細な調整を施している。素材剥片は薄く、調整もほぼ周縁のみに止められ、調整の施される部位の断面形状も鋭角なことから、削器などの刃器的な石器の製作を意識して作出されたものと考えられる。

21は部厚な剥片の左側縁に調整を施したものである。調整は主要剥離面側からほぼ垂直に施されるため、調整部位の断面形状は90°に近くなっている。ナイフ形石器に施されるブランディングまたは彫刻刀形石器の彫刻面作出の調整に類似する。

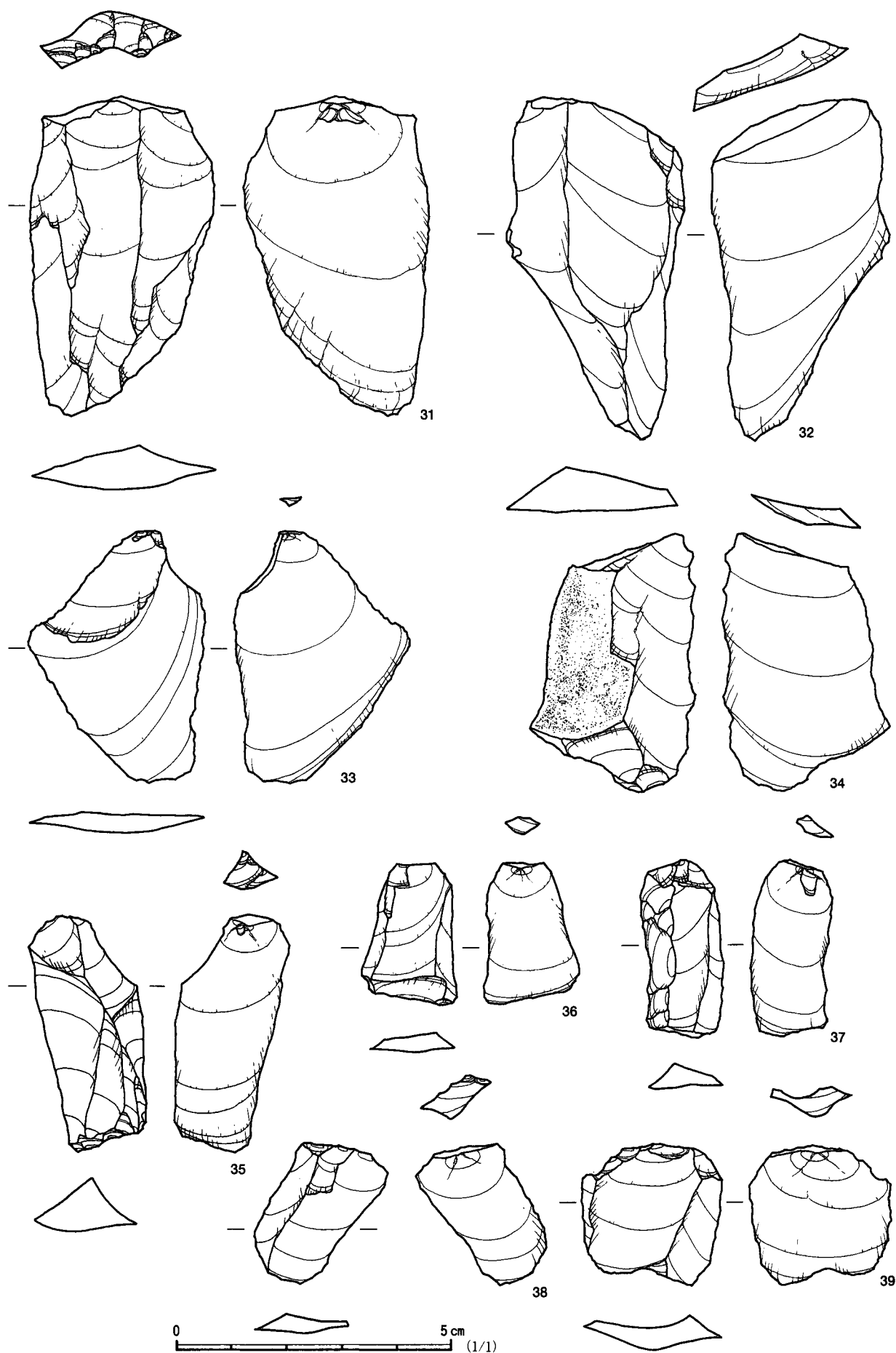
22・23に施される調整もこれに類似し、主要剥離面側からの微細な調整が施される。これらは縦横の長さの比がほとんど変わらない形状であり、第21ブロックで出土したナイフ形石器、彫刻刀形石器の製作途中の石器とは考えられず、どのような石器の製作を意図したものか不明である。

24は薄い縦長剥片の末端部に調整を施したもので、他の部位は折断により除去される。素材剥片の片側縁に微細な調整がみられる。調整部位の断面形状は鋭角であり、器厚、形状は小型であるが、刃器的な使用を目的として調整を施したものと考えられる。

25は不定形剥片の末端部に粗い調整を施したものである。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定せず、素材剥片自体も薄く断面形状は平らであるため、打面再生剥片を素材剥片としていていると考えられる。

26は小型の不定形剥片の末端部に微細な調整を施したものである。どのような形状の石器を意図して調整を施したものは不明である。

27～35は大型の縦長剥片である。すべて頁岩製である。表面にみられる剥片剥離時の方向から、いずれも同一方向もしくは上下両端に打面を設定した石核から連続的に作出されたことが窺える。打面が遺存するものが多く、それらの観察から、剥片剥離時に打面をかなり広く設定して打撃を加えていることが窺え、また微細な剥離がみられることから、打面再生を大きな剥離で行った後に、細かい剥離によりていねいに



第85図 第21ブロック出土遺物(4)

打面の形状を調整していることが窺える。

27の表面にみられる同方向からの剥離は、この剥片の打面の位置より上に位置する打面から剥片を作出したものであり、打面再生の後に最初に作出された剥片であることが窺える。剥片の縦方向の間には石材の節理が存在するため、この部分でくびれた形状となっている。第21ブロックで出土した石器のうち数点に有孔虫の化石がみられるが、この剥片の剥離面には特に顕著にみられ、部分的に径3mmほどの有孔虫の化石がみられる。

28は表面に原石面を有し、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向はすべて同一方向からである。これらの打点の位置は、この剥片が作出された打面より上方にあることがわかる。27と同様に、打面再生が行われた後に最初に作出された剥片であることが理解できる。

29の表面末端部付近には、表面左側にみられる剥離面を打面とし、右側縁にむかって施された稜整形の痕跡が明瞭に観察できる。

30についても同様であり、やはり剥片末端部付近に剥片剥離を行った痕跡がみられる。また表面には原石面が残り、剥片剥離工程の比較的初期の段階に作出された剥片であると考えられる。

31はやや横幅のある形状であるが、やはり表面にみられる剥離から、同一方向に設定された打面から連続的に作出された剥片であることが理解できる。

32もやや幅のある形状であるが打面部付近を折断・除去している。

33は不定形の大型剥片であり、表面にみられる剥離は剥離面のポジティブ面のようにふくらみをもつ。大型の剥片利用石核から作出された剥片と考えられる。

34は薄い作りであり打面付近が折断・除去される。表面には原石面が残り、剥片剥離工程の初期段階に作出された剥片と考えられる。35はやや小型の縦長剥片である。表面には上下両方向からの剥離痕がみられ、上下両端に打面を設定した石核より連続的に削出された剥片であることが理解できる。打面を移転した後に最初に削出された剥片と考えられる。

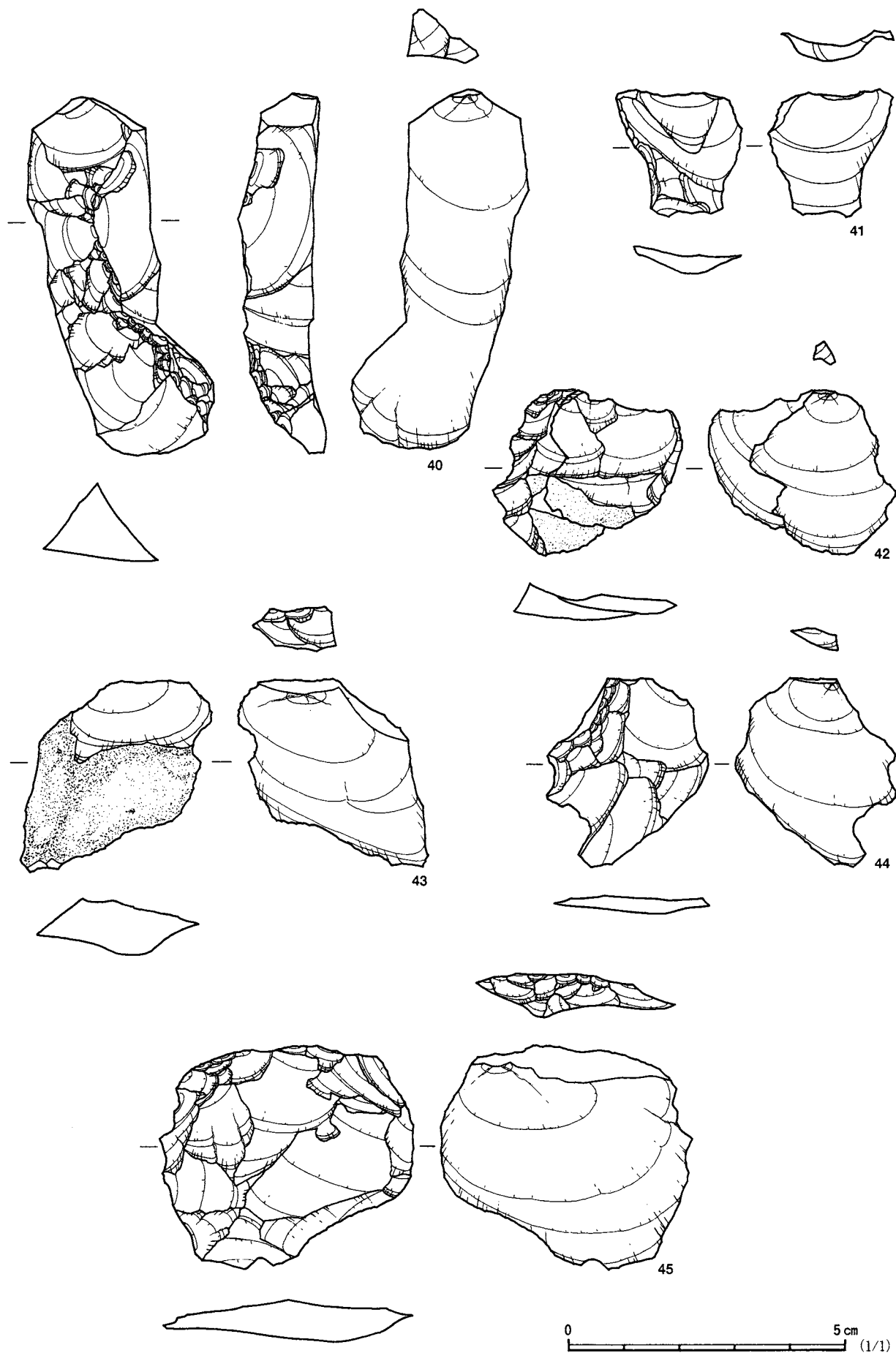
36～39は、剥片剥離工程において、連続的に縦長剥片を作出している際の打ち損じである。表面にみられる剥離の方向から、連続的に縦長剥片を作出していることが窺えるが、これらは概して小型で石器素材としては活用できない形状である。しかしそれぞれに残る打面は、剥片剥離時に打面を広く設定して打撃を加えていることが窺え、素材剥片のそれと類似するものである。

40は流紋岩製の縦長剥片であるが、表面には明瞭な稜がみられ、横断面の形状は正三角形となる。29と同様に稜整形がなされるが、29のように部分的な調整ではなく稜全体に施され、剥離の方向も稜の左右両側に向かい行われている。

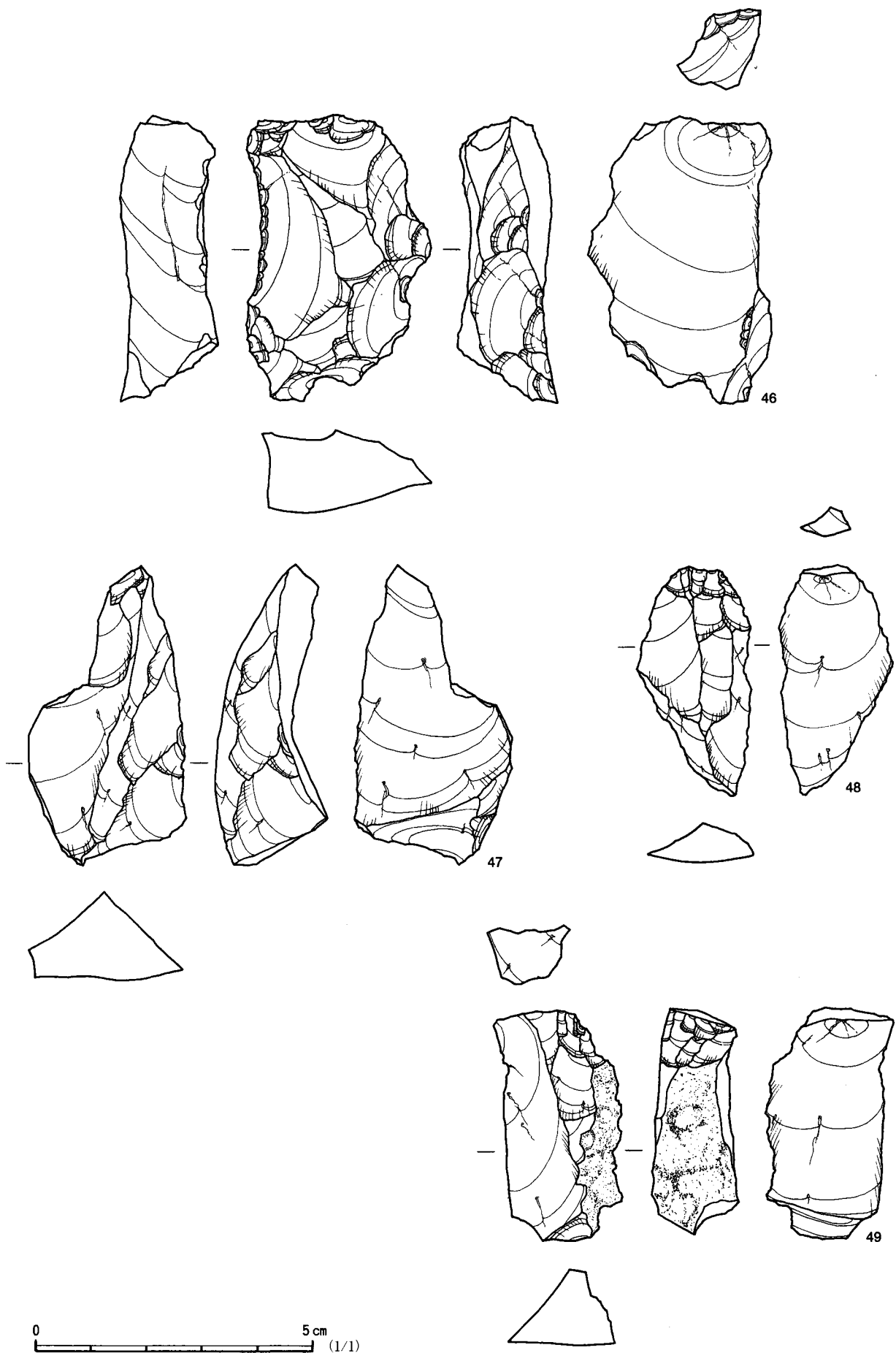
41～44は剥片剥離工程の比較的初期段階の剥片であり、かつ石核整形剥片と考えられる。いずれも表面にみられる剥離の痕跡からは、縦長剥片の作出が行われた形跡はみられず、それぞれの形状も不定形である。45も剥片剥離工程の初期段階ではないが、石核整形剥片もしくは打面再生剥片と考えられる。

46は頁岩製の大型剥片であり、剥片として作出された後にさらに剥片を作出した痕跡がみられ、剥片利用石核と考えられる。左側縁にみられる剥離痕は大きな一枚の剥離であり、この剥片も剥片剥離工程の初期段階に作出されたものと考えられる。剥片の作出は主要剥離面を打面として設定し、周縁を巡るように打撃を加え剥片を作出している。これより作出された剥片は縦長剥片ではなく、小型の不定形剥片である。

47～49は黒曜石製の剥片である。



第86図 第21ブロック出土遺物(5)



第87図 第21ブロック出土遺物(6)

第41表 第21ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考		
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)			
第82図	1	17R-10, 29	ナイフ形石器	頁岩	4.40	1.66	0.66	4.20		
	2	17R-00, 38	ナイフ形石器	頁岩	4.90	1.53	0.49	3.66		
	3	17R-11, 1	ナイフ形石器	頁岩	1.02	1.00	0.40	0.39		
	4	17R-10, 61	ナイフ形石器	黒曜石	2.90	1.82	0.73	3.57		
	5	17Q-09, 5	槍先形尖頭器	黒曜石	2.40	1.92	0.69	3.00		
	6	16R-90, 2	槍先形尖頭器	黒曜石	2.02	1.67	0.59	2.11		
	7	17Q-11, 4	槍先形尖頭器	黒曜石	1.46	1.65	0.62	1.17		
	8	17R-10, 45	彫刻刀形石器	頁岩	8.72	3.77	0.85	25.20		
第83図	9	17Q-18, 6 17Q-28, 1	彫刻刀形石器	頁岩	6.29	3.13	0.52	8.27		
	10	17R-10, 46	調整痕ある剥片	頁岩	0.70	1.85	0.34	0.38		
	11	17R-10, 71	削片	頁岩	1.70	0.30	0.28	0.12		
	12	17R-10, 65	削片	黒曜石	1.47	0.58	0.15	0.06		
	13	17R-10, 59	削片	頁岩	1.90	0.36	0.30	0.16		
	14	17R-10, 4	削片	頁岩	2.30	0.72	0.40	0.63		
	15	17R-00, 61	削片	頁岩	1.55	0.54	0.29	0.27		
	16	17R-10, 62	削片	頁岩	1.50	0.89	0.12	0.18		
	17	17R-00, 57	削片	頁岩	1.47	0.75	0.18	0.18		
	18	17R-10, 13	削片	黒曜石	0.92	1.10	0.35	0.28		
	19	17R-00, 37	削片	頁岩	0.80	0.60	0.10	0.09		
	20	16P-04, 36	調整痕ある剥片	頁岩	3.87	2.53	0.46	2.90		
	21	17R-10, 128	調整痕ある剥片	頁岩	2.70	3.15	0.87	5.67		
	22	17R-10, 79 17Q-18, 5	調整痕ある剥片	頁岩	4.95	2.45	0.65	5.21		
	23	17R-10, 125	調整痕ある剥片	黒曜石	2.26	1.97	0.88	1.79		
	24	17R-10, 14	調整痕ある剥片	頁岩	2.03	1.20	0.30	0.74		
	第84図	25	16R-70, 1	調整痕ある剥片	頁岩	3.22	3.75	0.78	6.08	
		26	17R-10, 41	調整痕ある剥片	頁岩	1.87	1.44	0.35	0.99	
		27	17Q-18, 9	剥片	頁岩	7.18	3.01	0.78	15.28	
		28	17Q-27, 1	剥片	頁岩	7.64	3.11	0.80	20.38	
		29	17Q-18, 3	剥片	頁岩	6.13	2.40	0.77	11.32	
		30	16Q-88, 3	剥片	頁岩	5.83	3.09	1.05	9.84	
第85図	31	16R-90, 5	剥片	頁岩	5.77	3.41	0.93	17.10		
	32	17R-10, 25	剥片	頁岩	5.45	4.17	1.13	15.45		
	33	17R-02, 4	剥片	頁岩	4.48	3.22	0.32	4.52		
	34	17Q-18, 8	剥片	頁岩	4.62	2.87	0.63	7.33		
	35	17Q-17, 5	剥片	頁岩	4.22	2.19	0.96	7.03		
	36	17R-10, 21	剥片	頁岩	2.48	1.80	0.34	1.61		
	37	16Q-67, 1	剥片	頁岩	3.02	1.80	0.61	2.65		
	38	17Q-18, 11	剥片	頁岩	2.52	2.12	0.41	1.60		
	39	17Q-18, 4	剥片	頁岩	2.53	2.55	0.49	3.53		
	第86図	40	17R-00, 48	剥片	頁岩	6.53	2.80	1.13	17.86	
41		16Q-78, 1	剥片	頁岩	2.20	2.19	0.32	1.65		
42		16P-15, 58	剥片	頁岩	2.50	2.61	0.41	1.90		
43		16Q-77, 1	剥片	頁岩	2.53	4.33	0.78	8.06		
44		17R-00, 30	剥片	頁岩	3.35	2.96	0.43	2.75		
45		17R-18, 117	剥片	頁岩	3.88	4.62	0.84	13.12		
第87図	46	17Q-28, 2	剥片利用石核	頁岩	5.10	3.20	1.73	29.68		
	47	17R-10, 51	剥片	黒曜石	5.20	2.90	1.86	16.74		
	48	17R-10, 94	剥片	黒曜石	3.90	2.21	0.82	5.39		
	49	17R-10, 16	剥片	黒曜石	4.10	2.30	1.52	12.06		

47は部厚な剥片であり、打面部は欠損している。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は、この剥片の末端部にむかって延びており、このことから円錐または四角錐に近い形状の石核から作出された剥片と考えられる。また剥片剥離の際の打撃は、石核の表面に抜けずに石核の裏面に抜けてしまったため、石核の底部がそのまま剥片の末端部となり、このような形状になったと考えられる。

48の剥片の末端部は尖った形状となるが、表面にみられる剥離のようすから、同一方向に位置する打面から連続的に作出された剥片の一つであることが窺える。打面には微細な打面再生痕はみられず一枚の剥離である。

49は部厚な剥片であり、原石面が残る。打面をかなり広く設定し打撃を加えているため、剥片の末端部はヒンジ・フラクチュア気味になる。48と同様に打面には細かい打面再生痕はみられない。

(8) 第8文化層

第8文化層に属するブロックは、第22ブロックから第25ブロックの4ブロックである。各ブロックともに近接して検出され、遺跡の所在する台地の南東側に位置する半島状の平坦部に位置する。標高は21mほどである。石器の出土層位は各ブロックともソフトローム層中であるが、この地点の立川ローム層の堆積状態は、ソフトローム層の直下に第2黒色帯が位置するため土層の堆積は薄く良好とはいえ、現時点ではソフトローム層中の出土とのみ記述しておく。

各ブロックの石器の出土点数は、多いブロックで第24ブロックの873点、最低でも第25ブロックの311点であり、点数的には他の文化層に属するブロックと比較にならない程多数の石器が出土している。しかし石器組成の点では、出土点数の大半が直径3cm内外の礫または礫片であり、第25ブロック以外のブロックでは出土点数全体の90%以上を占める。これらの礫は一様に被熱しており、礫そのものの大きさは小型であるが、礫群を伴うブロックとして考えられる。これらの礫群と剥片石器は同一平面上に分布し、礫群に剥片石器が混在するような出土状況をみせる。

礫群の分布範囲内に点在する剥片石器の石材は、どのブロックもほぼ頁岩で占められ、他に使用される石材は、黒曜石が数点混在する程度である。頁岩製の石器のうち定型的な石器は各ブロックとも異なり、第22ブロックでは小型の彫刻刀形石器、第23ブロックでは、先端部にファシットのみられる槍先形尖頭器および大型の搔器、第24ブロックでは小型の搔器がそれぞれ出土する。

このように定型的な石器からの観点では各ブロックとも点数的に少ないため、文化層の様相を明確にすることは困難であるが、定型的な石器以外に石器製作時に面的に調整を行っていた形跡がみられ、それは調整剥片が多数出土していることで理解できる。調整剥片からこの文化層に属するブロックで作出されていた石器を想定することはかなり難があるが、槍先形尖頭器を製作し、それをブランクとして活用する細石器文化の様相を窺うことができる。調整剥片のみならず第25ブロックにて削片が出土しており、石質こそ異なるが、印旛郡本埜村に所在する角田台遺跡で検出された、当時期に属する石器群の様相と非常に類似するものである。

以下に各石材の特徴を記す。

頁岩：色調は褐色もしくは暗褐色を呈する。良質な頁岩で色調はほぼどの部位も同じであり、夾雑物はみられない。きめは細かく緻密であり剥離面には光沢がみられる。

- 黒曜石：色調は黒色であり透明感があるが、透明な部位が縞状に混入するようすはまったく見られない。換言すれば墨汁を固め表面に透明なニスを塗したような感がある。夾雑物はまったく含まず、剥離面には剥片剥離時の放射状裂痕が明瞭に観察できる。
- 安山岩：礫または礫片のみである。色調は表面は青灰色で、被熱しているため部分的に赤色を呈する。剥片石器に使用される黒色の緻密な安山岩ではなく、縄文時代の礫石器に使用される石質である。
- 砂岩：礫または礫片のみである。色調は表面は灰色を呈し、被熱しているため部分的に赤色を帯びる。岩石を構成する鉱物は均一で細かい。
- チャート：礫または礫片のみである。被熱しているため表面は赤褐色を呈するが、欠損面は緑がかった青色を呈する。剥片石器に多用される青色の節理が縦横に混入するものではない。
- 凝灰岩：礫または礫片のみである。表面は被熱し、かつ水和層が発達するため脆く傷が付きやすい。色調は青灰色であり、剥片石器に使用される石材と同一である。
- 流紋岩：礫または礫片のみである。表面は被熱しているため部分的に赤色を呈するが、基調はクリーム色である。表面には微小な石英粒がみられるが、それ以外はきめは細かく光沢がある。質感に反し持った感じが軽い。
- 石英斑岩：礫または礫片のみである。表面は暗褐色または暗いクリーム色を呈し、暗褐色の部位は被熱しているためこのような色調を呈するものと考えられる。表面は滑らかで直方体の石英粒が点在する。
- 変成岩：礫または礫片のみである。色調は黒色を呈し、表面には無数の細かい凹凸がみられる。きめは細かいが光沢はない。
- メノウ：礫または礫片のみである。表面はクリーム色を呈し光沢がある。点数的に少数であるが、概していびつな形状である。剥片石器に使用される石材と同一である。

第22ブロック（第88～90図 第42・43表 図版13・36）

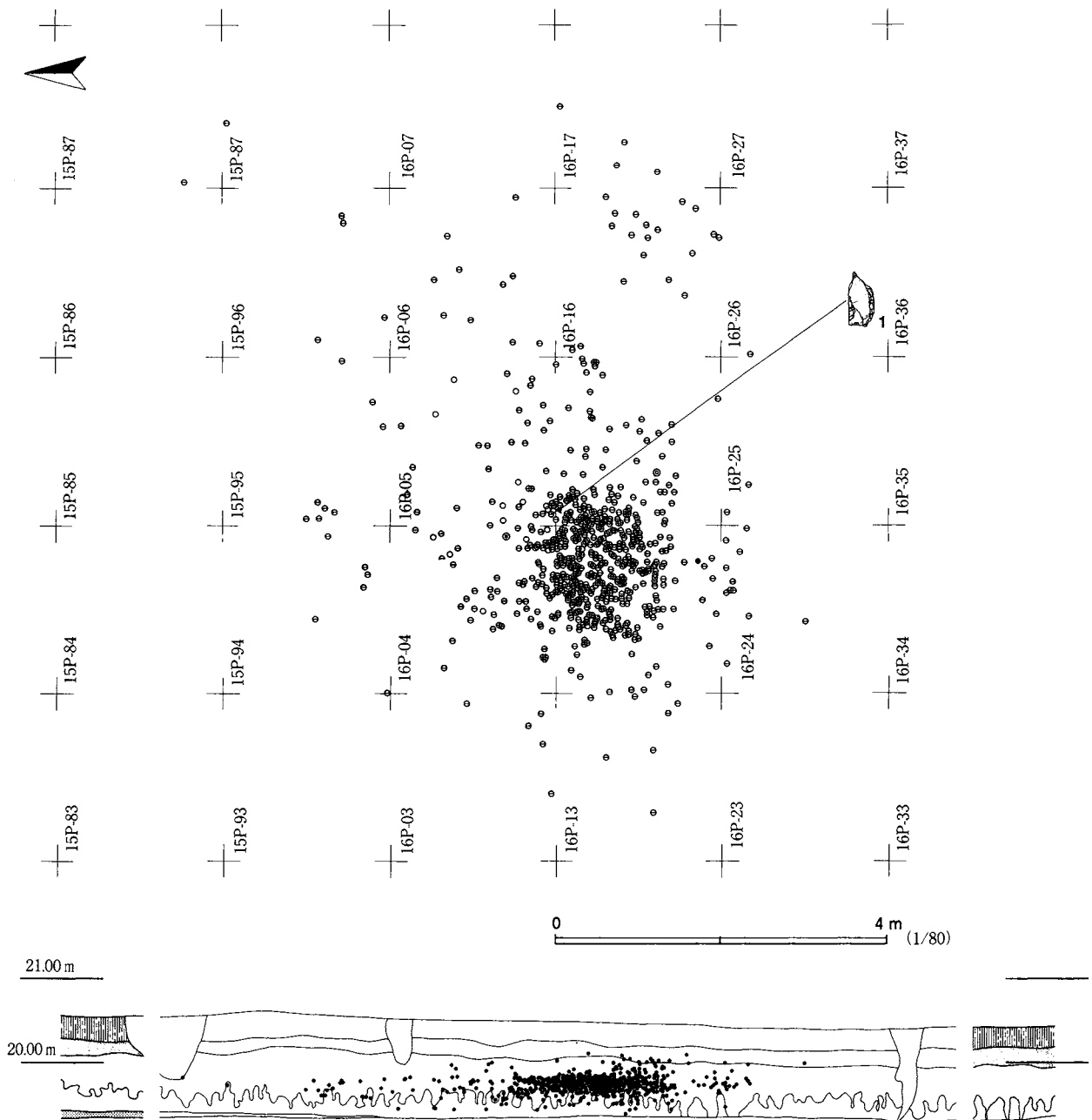
第22ブロックは、調査区の南側、半島状に突き出た台地のくびれ部の、標高21mほどの小規模な平坦部に位置する。

石器の分布範囲は径8mほどで、そのなかでも西側に偏った2mの範囲に密に分布する。この2mの分布範囲は、遺物の垂直分布についても他の分布範囲と様相が異なり、上面はⅡc層から下面はⅥ層中位までと、幅の広い出土状態であるといえる。

出土した石器は総計816点を数える。このうち直径4cmほどの偏平礫が761点と全体の93%を占める。小礫はすべて被熱しており、そのためか原形を留めるものは少なく大半が破碎礫である。大型の礫となる可能性のある破碎礫はまったく含まれず、石材を厳選して採集し持ち込まれたものと考えられる。礫の石質は多種に渡り、安山岩を中心にチャート、砂岩が多く含まれる。

剥片石器については頁岩、黒曜石を原石とした石器が出土するが、両者とも第22ブロック内で剥片剥離作業の行われた痕跡はみられず、碎片がほとんどを占めることから、素材剥片の搬入と石器製作のための調整が行われたことにより形成されたブロックと考えられる。

定型的な石器は頁岩製の彫刻刀形石器1点のみであり、他は調整痕の認められる剥片と、使用痕の認め



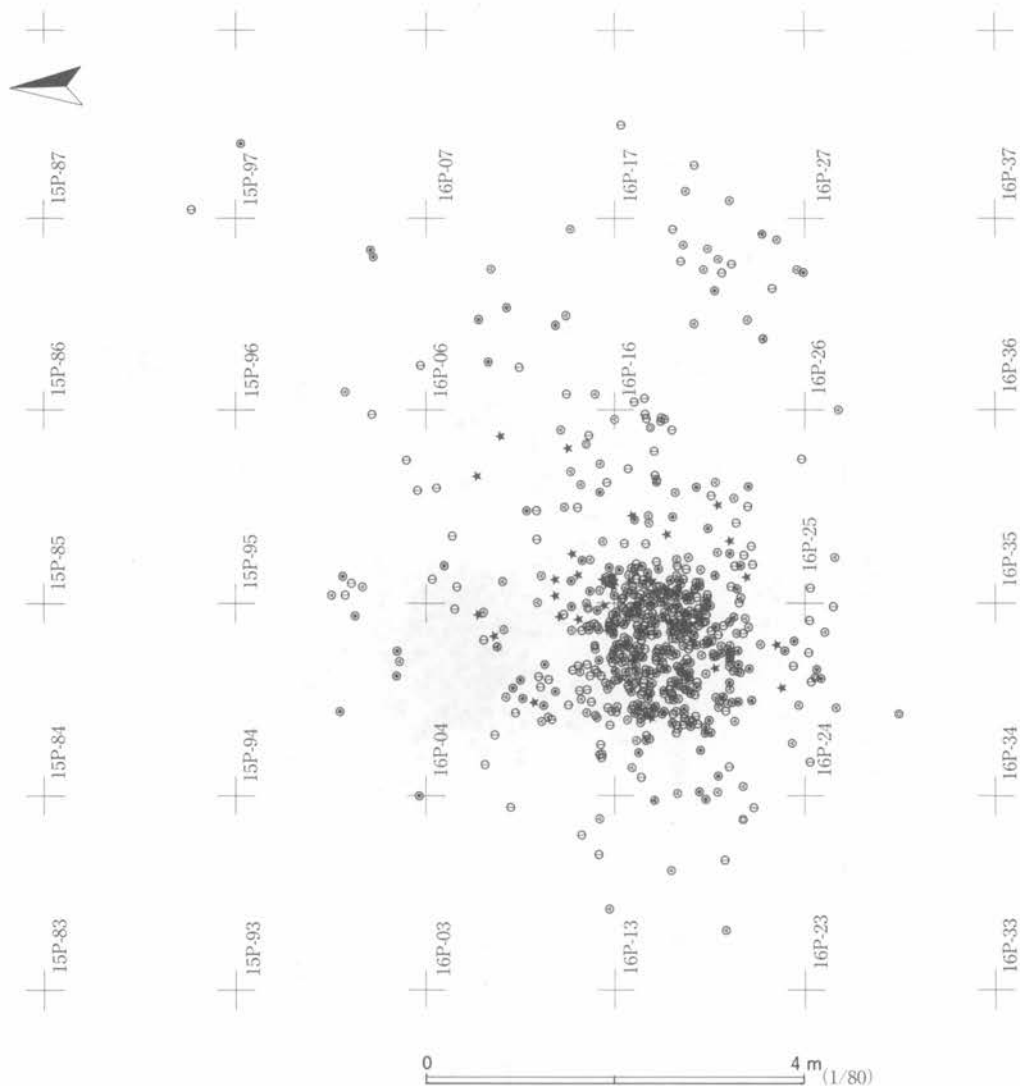
第88図 第22ブロック器種別石器分布図

られる剥片が1点ずつ出土するがいずれもかなり小型である。

出土遺物

1は彫刻刀形石器である。厚みの均一な縦長剥片を素材とし、素材剥片の打面は調整により、剥片末端部は折断によりそれぞれ除去される。

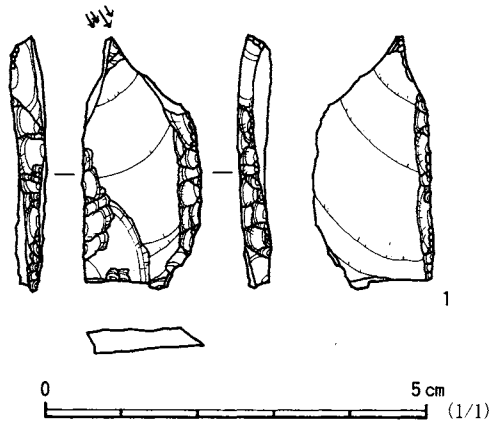
石器整形の調整は素材剥片の両側縁に対し施され、右側縁の調整は主要剥離面側から、左側縁の調整は表面側から施される。右側縁の調整は削器の刃部作出の調整に酷似し、断面形状は鋭角であるが、左側縁の調整は急角度で施されるため、右側縁と比較すると鈍角となる。ナイフ形石器に施されるブランディング状であるといえる。



第89図 第22ブロック石材別石器分布図

第42表 第22ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台形 石器	角錐状 石器	掻器	削器	ビリス・ スリ	彫刻刀 形石器	削片	R・ 7分	U・ 7分	剥片	砕片	剥利石 片用核	石核	石斧	敲石	礫	計
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	49	-	-	-	-	3	56
黒曜石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.1%	-	0.1%	0.1%	0.1%	6.1%	-	-	-	-	0.4%	6.9%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	2
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	305	305
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	194	194
流紋岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	22	22
石英斑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15	15
変成岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3
メノウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	7
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	209	209
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	1	1	51	-	-	-	-	761	816
										0.1%		0.1%	0.1%	0.9%	6.3%					93.3%	100.0%



第90図 第22ブロック出土遺物

第43表 第22ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第90図	1	16P-15, 1	彫刻刀形石器	真岩	3.31	1.58	0.41	2.37	

彫刻刀面は右側縁に設けられるが、彫刻刀面作出の調整は表面側からではなく、主要剥離面側からの1回の剥離により施される。ファシットはこの彫刻刀面から右側縁にむかって施される。彫刻刀面から鋭角にファシットが施されるため刃部の角度は43°となる。

第23ブロック (第91~94図 第44・45表 図版13・14・36・37)

調査区の南端に所在する半島状に突出する台地の付け根に位置し、標高21m前後を測る。

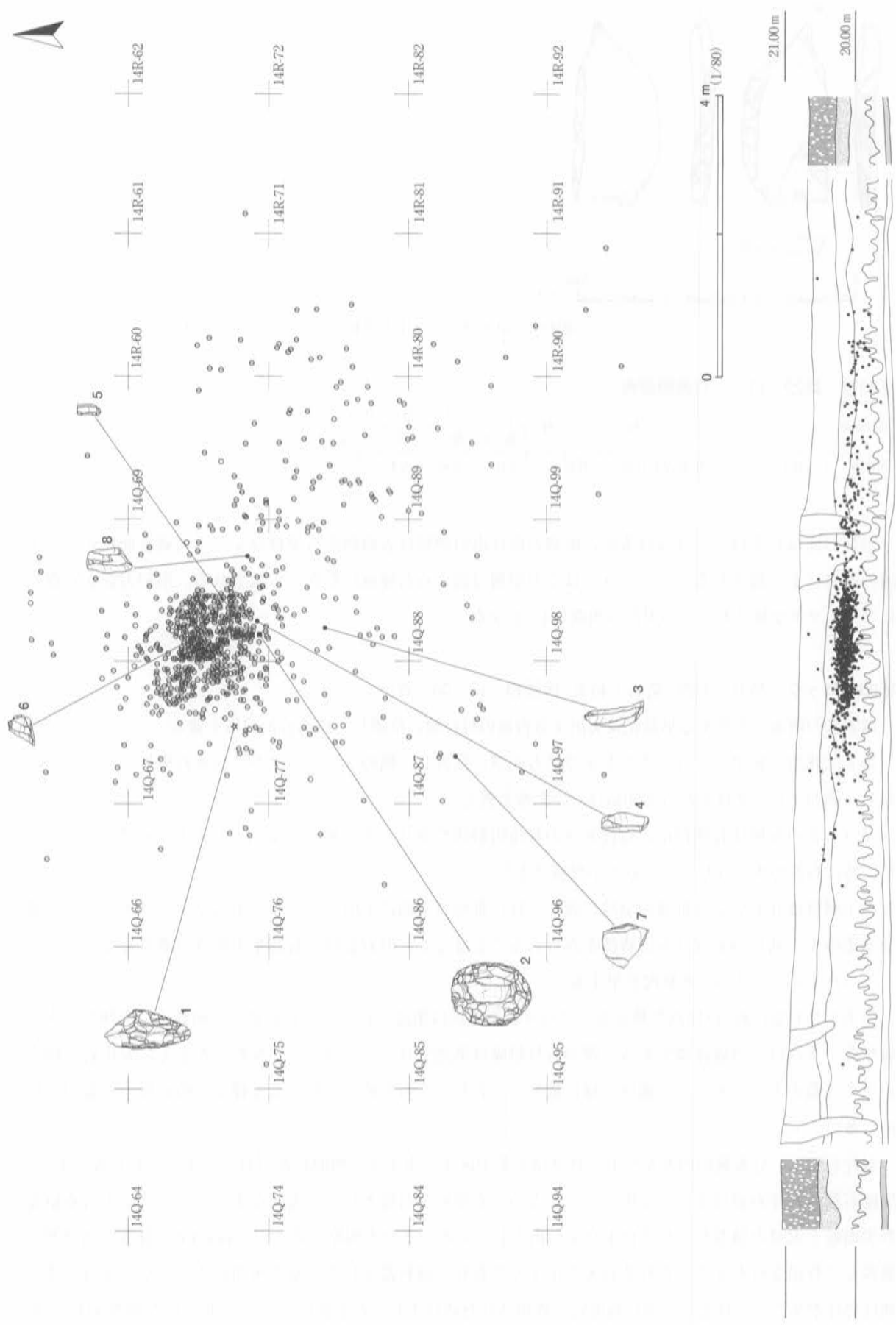
第8文化層に属するブロックのなかで最も北側に位置し、他の3ブロックがそれぞれ隣接しているのに対し、第23ブロックはそれらと50mほどの距離を置く。

ブロックの規模は長径12m、短径8mの長楕円形状であり、その範囲のなかでも北よりの径2mのか所に、特に石器が密に分布しているのが理解できる。

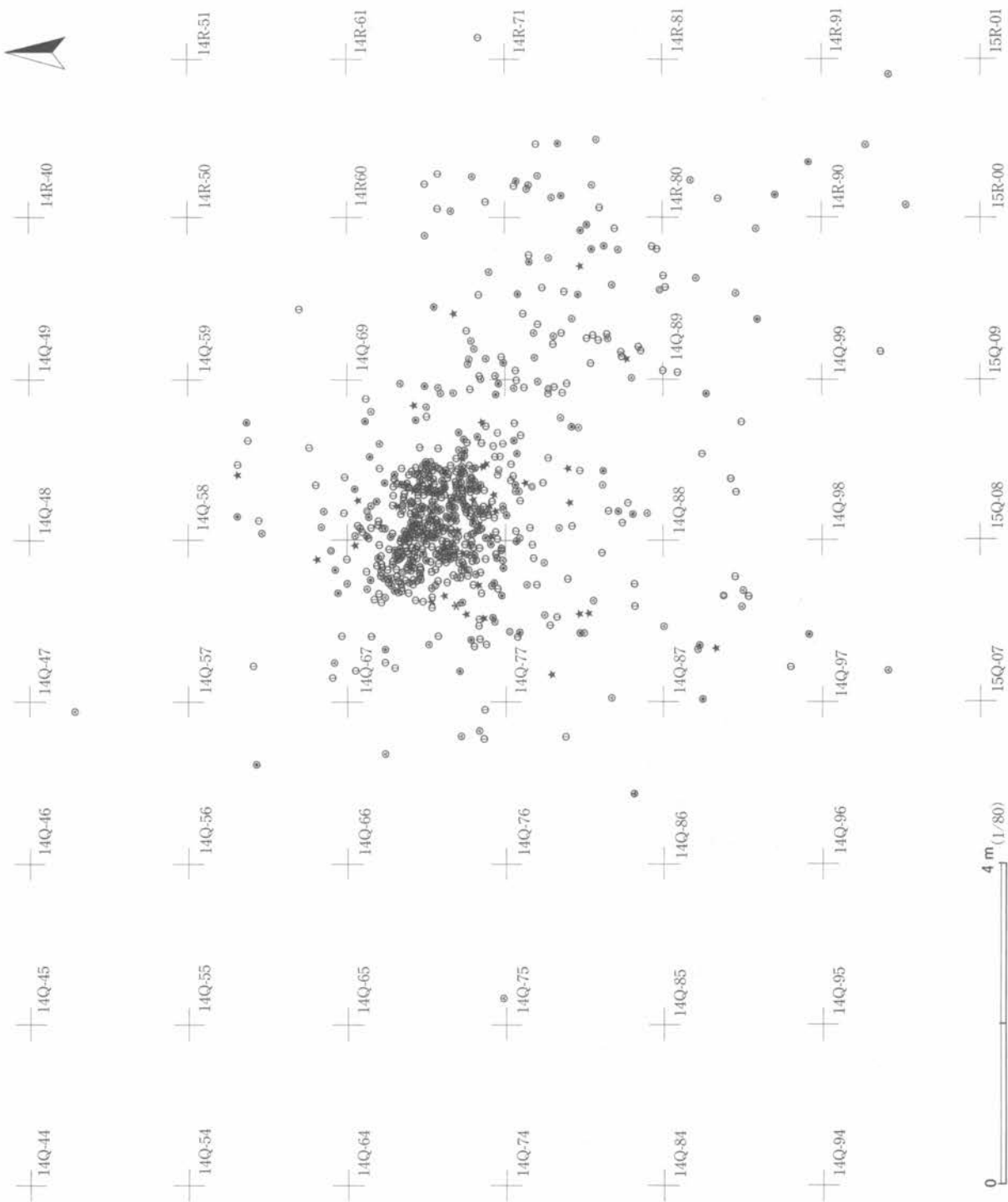
出土層位はⅡc層からⅢ層の全域に渡り、特にⅢ層の上部に集中している。第22ブロックのように、遺物が集中する地点の垂直分布に特徴がみられることはなく、旧石器時代石器集中地点の垂直分布に、普通にみられるレンズ状の分布状況を呈する。

出土した石器は総計819点を数える。このうちの95%は第22ブロックの石器組成と同様に、直径5cm内の扁平礫、またはその破碎礫である。礫の石材組成は第22ブロックとほとんど変わりがなく、安山岩、砂岩が出土点数の大半を占める。礫は一様に被熱しており、そのためか完形となる礫より破碎礫の点数が圧倒的に多い。

剥片石器は、分布範囲のなかでも、径2mの集中区から出土する傾向がみられる。すべて真岩製であり、黒曜石製の剥片石器はまったく出土していない。定型的な石器として、先端部よりファシットの入る槍先形尖頭器と大型の搔器がそれぞれ1点ずつ出土している。また不明瞭であるが、幅1.3cm、長さ5cmほどの連続して作出されたと考えられる石刃が出土しており、細石器文化の一端を垣間みることができる。その他は碎片が多くみられるが、剥片剥離時に作出された碎片より、石器製作の際に作出された調整剥片が多



第91図 第23ブロック器種別石器分布図



第92図 第23ブロック石材別石器分布図

くみられ、第23ブロックでは素材剥片の作出より石器製作が行われていた可能性が高い。

出土遺物

1は先端部にファシットのみられる槍先形尖頭器である。やや片側縁が張り出すような形状である。調整は表裏面全面に渡って施されるため、素材剥片の形状は不明である。裏面の一部に素材剥片の主要剥離面がみられるが、剥片が作出された当時の打点からはかなり遠いため、大型の剥片を素材としていることが窺える。調整は3工程に分けて施された痕跡がみられ、まず第1工程で素材剥片の形状を変える面的な調整が施された後、第2工程として先端部よりファシットを施している。これは表面にみられる形状を整

第44表 第23ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石片	台 形 石 器	角錐状 石 器	搔 器	削 器	ピンス ・ ヌ ・ ヌ	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フリ ク	U・ フリ ク	剥 片	砕 片	剥 利 石	片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
頁 岩	-	1 0.1%	-	1 0.1%	-	-	1 0.1%	-	-	-	-	-	-	4 0.5%	36 4.4%	-	-	-	-	-	2 0.2%	45 5.4%
安 山 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	418 51.1%	418 51.1%
チャ ート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	156 19.1%	156 19.1%
砂 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	176 21.6%	176 21.6%
石 英 斑 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11 1.3%	11 1.3%
メ ノ ウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.1%	1 0.1%
凝 灰 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9 1.1%	9 1.1%
流 紋 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 0.2%	2 0.2%
変 成 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.1%	1 0.1%
計	-	1 0.1%	-	1 0.1%	-	-	1 0.1%	-	-	-	-	-	-	4 0.5%	36 4.4%	-	-	-	-	-	776 94.8%	819 100.0%

える調整の剥離を、ファシットが切っていることで理解できる。そして第3工程として最終的に周縁部より細調整が施される。細調整は表面側に特に顕著にみられる。やや肩の張る形状や石質、またファシットの施されることから東内野型尖頭器の範疇に入るものと考えられるが、第23ブロックの石器組成等の点では断定はできない。

2は大型の搔器である。被熱していると思われ、器表面の色調は茶色を基調に一部赤斑がみられる。大型の部厚な剥片を素材としており、素材剥片の打面は表面側から調整により除去されている。調整はすべて主要剥離面側から施されるが、面的な調整ではなく、素材剥片の周縁部に対して微細な調整が施される程度であり、表面には剥片剥離時の剥離の痕跡が明瞭にみられる。素材剥片の末端部には急角度の調整が施されるが、搔器に普遍的にみられるフルーティングより幅が広く、石器製作の際の整形を目的とした調整のようにみえる。

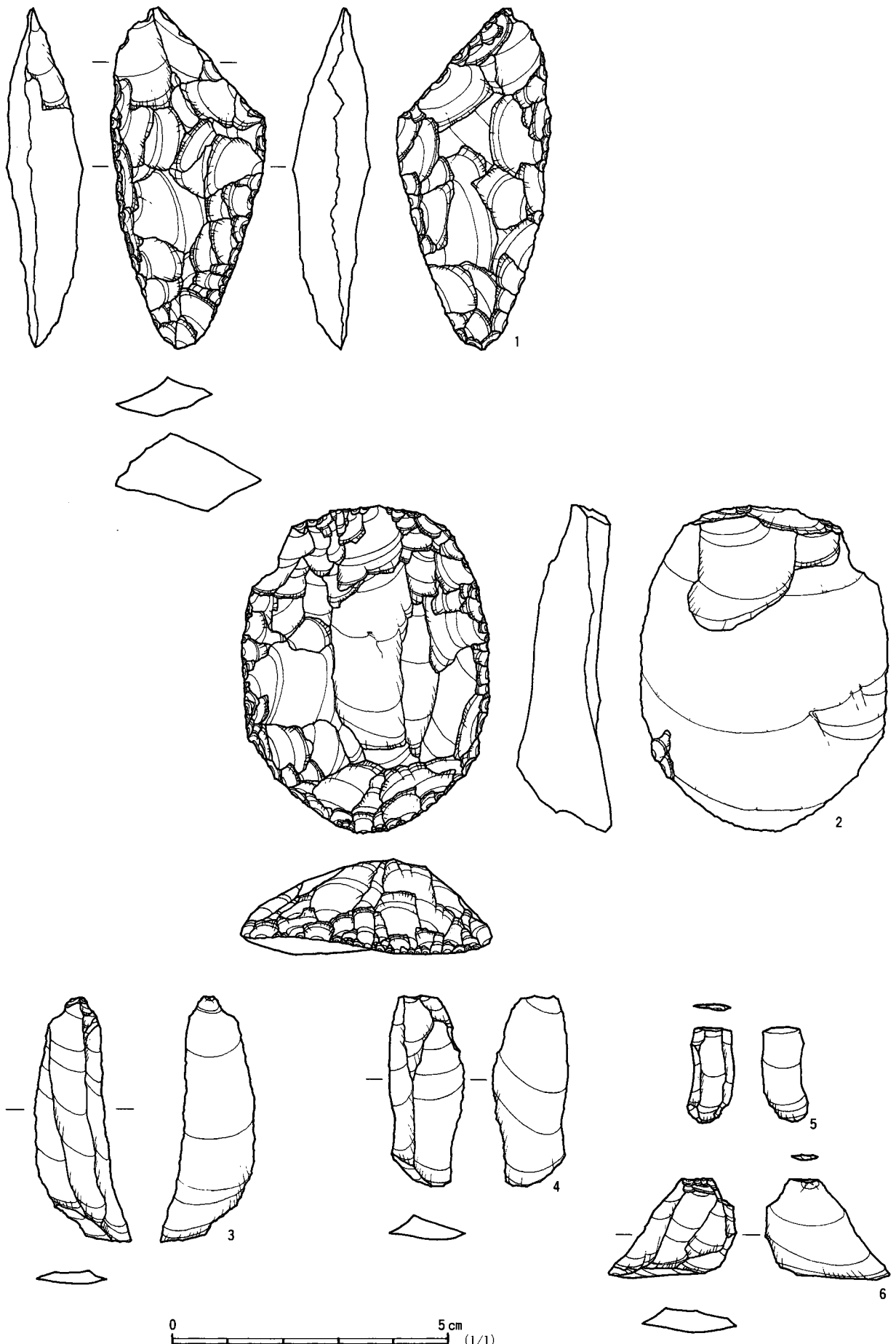
3は石刃状の剥片である。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定であり、同方向あるいは同一打面から連続して作出された剥片であることが理解できる。剥片の側面からの形状はゆるく弧を描き、このことから打面に対して角度が45°ほどに設定された石核から作出されたものと考えられる。

4・5は石刃状の縦長剥片であるが、3のように側面の形状は弧を描かず直線的である。3の剥片とは若干の剥片剥離作業の違いが感じられる。おそらく異なる形状の石核から作出されたものと思われる。

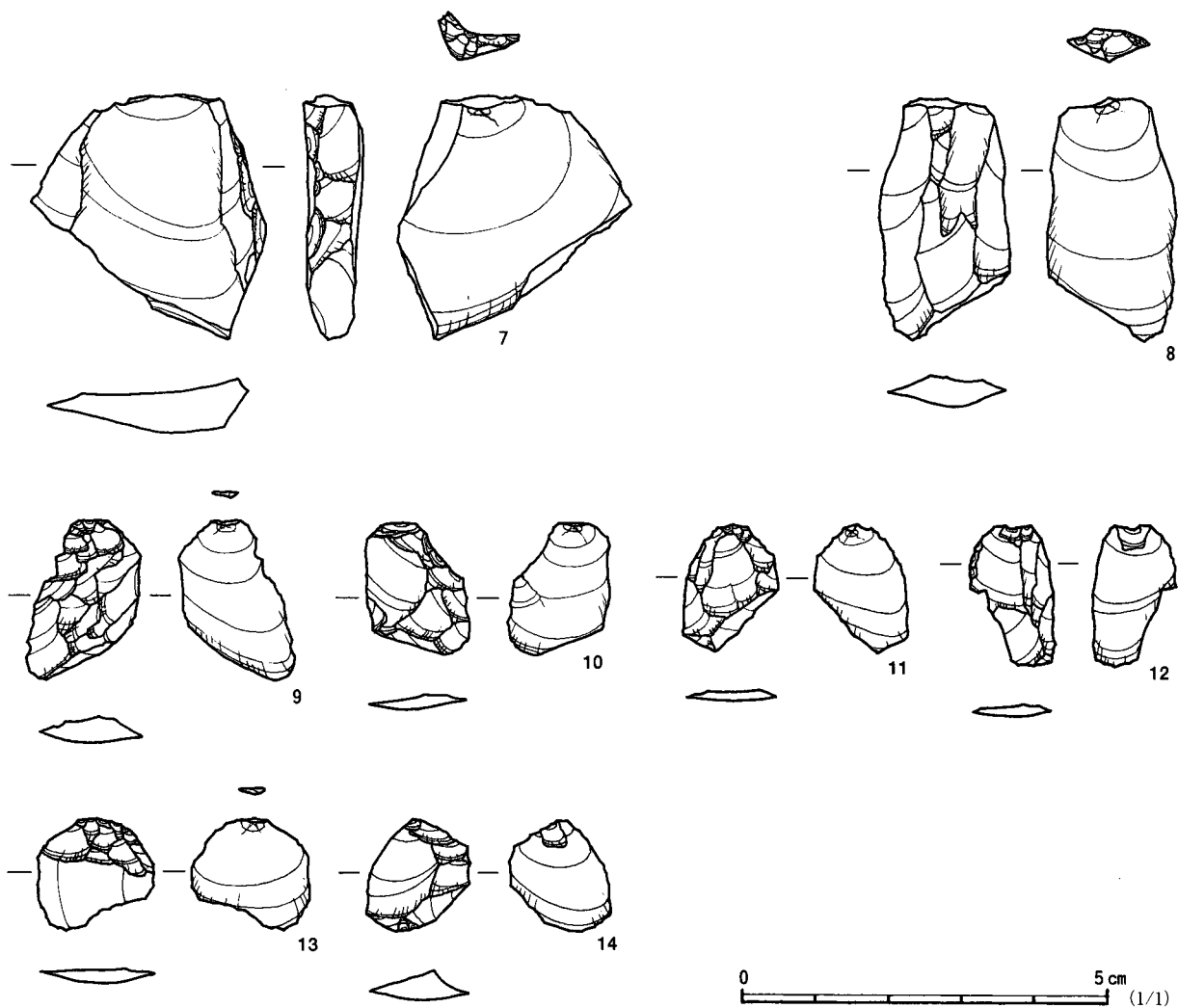
6の剥片の表面には同方向から連続して剥片を作出した痕跡がみられ、側面からの形状は弧を描く形状を呈する。縦長剥片とはならないため、この剥片が作出された石核が、ほぼこの剥片の長さに対応する厚みと考えられる。素材剥片ではなく、搔器のフルーティング調整の際に作出されたものと考えられる。

7・8は形状の異なる剥片である。第23ブロックでは、素材剥片作出を目的とした剥片剥離の痕跡は明瞭にはみられず、主に製品加工が行われたことにより形成されたブロックであると考えられるが、これらの剥片の打面には微細な打面再生痕が明瞭にみられる。このことから剥片剥離工程のなかで作出された剥片であり、少なからず剥片剥離が行われていたことが窺える。これらは石器の素材剥片とは考えられず、剥片剥離の後ブロック外に搬出されなかった剥片と考えられる。

9～14は製品加工の段階で作出された調整剥片である。これらの形状から面的な調整が施される際



第93図 第23ブロック出土遺物(1)

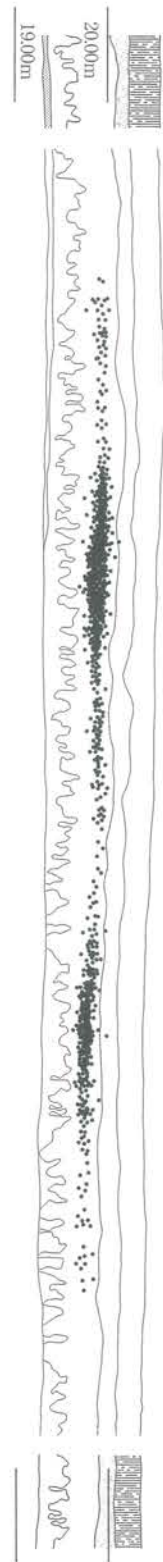


第94図 第23ブロック出土遺物(2)

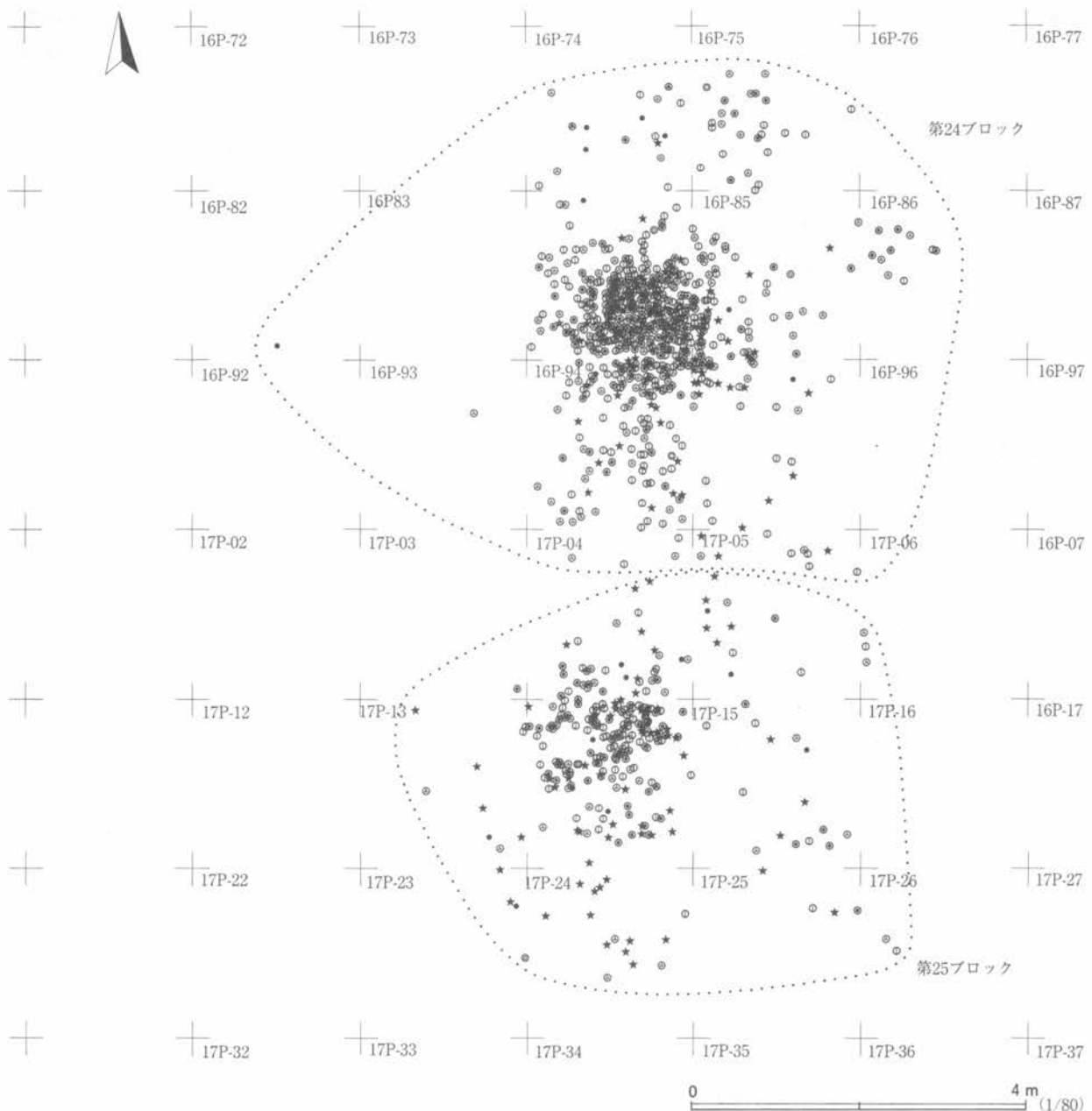
第45表 第23ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第93図	1	14Q-67, 76	槍先形尖頭器	頁岩	6.16	2.83	1.18	17.55	
	2	14Q-68, 109	搔器	頁岩	5.82	4.56	1.52	38.44	
	3	14Q-78, 35	剥片	頁岩	4.34	1.70	0.30	1.85	
	4	14Q-68, 26	剥片	頁岩	3.37	1.40	0.42	2.04	
	5	14Q-78, 17	碎片	頁岩	1.70	0.88	0.10	0.28	
	6	14Q-68, 463	碎片	頁岩	1.78	2.30	0.47	1.81	
第94図	7	14Q-87, 4	剥片	頁岩	3.36	3.28	0.73	7.22	
	8	14Q-68, 93	剥片	頁岩	3.32	1.82	0.50	2.65	
	9	14Q-68, 374	碎片	頁岩	2.14	1.63	0.44	1.25	
	10	14Q-77, 28	碎片	頁岩	1.77	1.43	0.17	0.43	
	11	14Q-68, 144	碎片	頁岩	1.70	1.28	0.17	0.33	
	12	14Q-77, 16	碎片	頁岩	1.90	1.21	0.19	0.35	
	13	14Q-67, 165	碎片	頁岩	1.50	1.60	0.27	0.57	
	14	14Q-57, 2	碎片	頁岩	1.51	1.35	0.46	0.71	

に作出されたものであり、また13の表面には、調整が施される素材剥片の主要剥離面がみられることから、表裏面の両面に調整を施した際に作出された調整剥片と考えられ、1の槍先形尖頭器のような石器製作が行われていたことが窺える。



第95図 第24・25ブロック器種別石器分布図



第96図 第24・25ブロック石材別石器分布図

第24ブロック（第95～98図 第46・47表 図版14・37）

第24ブロックは、調査区の南側、半島状に突出した小規模な台地の平坦部に位置し、標高は21m前後を測る。同一文化層に属する第25ブロックに隣接する。

石器の出土する範囲は、径2mほどの集中地点を中心に、径6mの不定円形状の平面形状を呈する。第25ブロックとの境界は明確ではなく、いずれも同時期に形成されたブロックと考えられるため、形成要因としては、あるいは同一ブロックとして考えるのが妥当かもしれない。

石器の出土点数は総計873点を数え、第8文化層に属するブロックのなかで最も出土点数が多い。出土した石器のうち、点数的に大半を占めるのが礫または破碎礫であり、他のブロックと酷似した性格といえる。礫は安山岩製の小礫が総点数の半数近くを占め、チャート製、砂岩製の小礫も点数的には多くみられるが、

安山岩の比ではない。これらの礫または破碎礫はいずれも一様に被熱しており、器表面が赤化するものが大半である。しかし器表面はさほど荒れていないため、被熱の度合いは多いとは感じられず、一度程度の被熱により赤化したものと考えられる。

剥片石器は、頁岩製と黒曜石製の両者が出土している。黒曜石製の石器は、小型の剥片が4点と点数的には少数であるが、頁岩製の石器については74点の出土をみた。

定型的な石器は、頁岩製の搔器と削器が1点ずつ出土している。搔器は小型であり、刃部調整の際に作出された調整剥片が2点接合している。削器については、縦断面の上下端の形状が尖る形状となり、上端には連続して作出された、彫刻刀に施されるファシットに類似した剥離がみられる。あるいは削器よりも彫刻刀形石器の性格が強いととも考えられる。また搔器の刃部再生剥片がみられ、図示した搔器とは別の搔器の製作が行われていたことが窺える。

出土石器

1は頁岩製の削器、または彫刻刀形石器である。素材剥片の主要剥離面は残存しないため、素材剥片の形状は不明であるが、大型の部厚な剥片を素材としているものと考えられる。調整は片側縁および末端部にみられるが、側縁の調整は裏面から施されるのに対し、末端部の調整は表面から施される。また側縁部の調整は密にしていねいに施されているが、末端部は微細な調整が施されるのみである。削器とした場合、その刃部は側縁部の調整部位に比定される。ただし、この石器には表面の上部にみられるように、数条の剥離が施される。これは彫刻刀形石器に施されるグレイバー・ファシットに類似するものであるが、グレイバー・ファシットは素材剥片の側縁部に対して施されることが多く、この点では1の石器に施される調整がグレイバー・ファシットであるとは断定できない。ここでは彫刻刀形石器としての可能性、とのみ記述して留めておきたい。

2は頁岩製の小型の搔器である。部厚な剥片を素材とし、素材剥片の形状は現形状とさほど変わらないものと考えられる。調整は全面ではないものの、素材剥片の全周に渡って主要剥離面側から施され、素材剥片の打面も調整により除去されている。主要剥離面側には調整はまったくみられない。素材剥片の末端部にみられるフルーティングは、素材剥片の厚み分をほぼ1回の剥離でカバーしており、さらに刃部形状を整える目的で施されたと考えられる微細な調整が施される。この部分の調整剥片が2点接合し、これらは素材剥片の主要剥離面から表面まで1回の剥離で作出されており、このことから前述したとおりのフルーティングのようすが窺える。

3・4は搔器の調整剥片と考えられる。

3の表面には片側縁からの微細な剥離痕がみられるが、頭部調整痕等の剥片剥離時に施されたものとは考えられず、素材剥片として作出された後に施されたものと考えられる。おそらく搔器作出を意図して調整を施している過程での、素材剥片の形状を整えるために剥ぎ取られた剥片であろう。

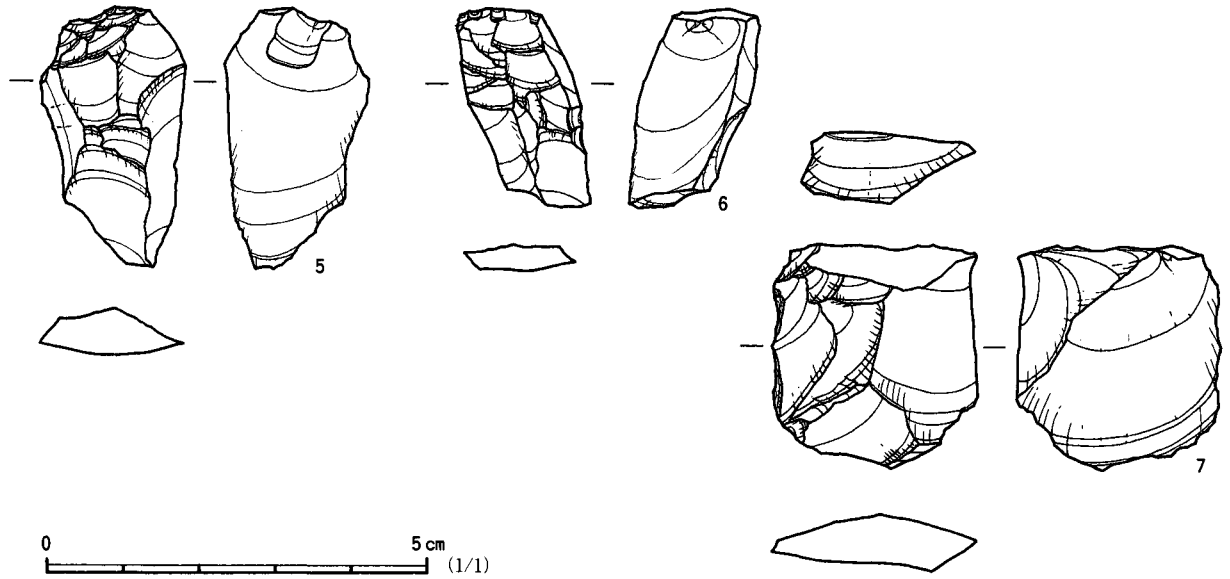
4の表面にはフルーティングと考えられる数条の縦縞状剥離がみられ、これらはすべてこの剥片の裏面にみられる、素材剥片の主要剥離面と考えられる面から施されている。搔器製作途中でフルーティングの際に欠損したのと考えられる。

5～7は頁岩製の剥片である。いずれも素材剥片作出を目的とした、剥片剥離の段階で作出された剥片である。

5の表面には剥片剥離時の剥離が明瞭に観察でき、剥片の打面側と末端部側からの、両方向から剥片を作



第97図 第24ブロック出土遺物(1)



第98図 第24ブロック出土遺物(2)

第46表 第24ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台石 形器	角錐状 石器	搔器	削器	ヒリス エリト	彫刻刀 形石器	削片	R・ フリヤ	U・ フリヤ	剥片	砕片	剥利石 片用核	石核	石斧	燧石	礫	計
頁岩	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	4	-	-	3	63	-	-	-	-	1	74
	-	-	-	-	-	-	0.1%	0.1%	-	0.1%	0.5%	-	-	0.1%	7.3%	-	-	-	-	0.1%	8.5%
黒曜岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	1	5
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.5%	-	-	-	-	-	0.1%	0.6%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	382	382
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	43.8%	43.8%
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	161	161
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	18.5%	18.5%
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.3%	0.3%
流紋岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.3%	0.3%
石英斑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	10
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1.1%	1.1%
變成岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	6
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.7%	0.7%
メノウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.2%	0.2%
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	227	227
	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	26.0%	26.0%
計	-	-	-	-	-	-	1	1	-	1	4	-	-	7	63	-	-	-	-	796	873
	-	-	-	-	-	-	0.1%	0.1%	-	0.1%	0.5%	-	-	0.8%	7.3%	-	-	-	-	91.1%	100.0%

第47表 第24ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第97図 1	16P-84, 214	削器	頁岩	5.34	3.58	1.54	23.76	
2	16P-84, 492	搔器	頁岩	4.17	2.64	1.39	12.20	
a	16P-95, 3	搔器調整剥片	頁岩	1.60	0.55	0.10	0.80	
b	16P-94, 83	搔器調整剥片	頁岩	1.53	0.98	0.21	0.30	
3	16P-94, 63	削片	頁岩	4.22	1.97	0.98	5.65	
4	16P-94, 72	削片	頁岩	1.50	2.64	0.95	1.81	
第98図 5	16P-94, 38	削片	頁岩	3.42	1.98	0.64	3.17	
6	16P-94, 27	削片	頁岩	2.60	1.77	0.41	2.09	
7	16P-85, 20	剥片	頁岩	2.88	2.80	1.05	7.71	

出していたことが窺える。縦長剥片であり、打面付近には頭部調整痕と考えられる微細な剥離がみられる。打面は剥片剥離時に欠損したと考えられ、このことは主要剥離面の打面付近にみられる一枚の剥離で確認できる。

6の剥片の両側縁には、この剥片が作出された石核の剥離面が面的に存在するため、偏平な形状の石核から作出された剥片と考えられる。あるいは石核ではなく、剥片利用石核から作出された可能性も考えられる。打面をかなり広く設定され作出されており、表面には同方向に位置する打面から作出された剥片の痕跡が明瞭に観察できる。

7は、第24ブロック内で出土した剥片のなかでも比較的大型の剥片である。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定であるが、この剥片が作出された打面の方向とは若干異なる。数回の剥片剥離の後に打面を転移し、作出された剥片であろう。

第25ブロック (第95・96・99・100図 第48・49表 図版38・39)

第25ブロックは、同一文化層に属する第24ブロックの南側に隣接し、地形的な要因のため第24ブロックよりやや標高が低い位置に所在する。

石器の分布は、径2mの集中を中心に、6mほどのいびつな円形状に広がり、総計311点の石器が出土している。

ブロックを構成する石器は、他の同一文化層に属するブロックと同様に、小礫が全点数の73%を占め、安山岩製の小礫を主体とし228点出土している。剥片石器については頁岩製のものが主体であり、削器、調整痕の認められる剥片がみられる。また頁岩製の剥片石器のなかには、調整により石器の形状を整えた後に作出されたと考えられる、側縁部に微細な調整痕がみられる削片が6点出土している。第25ブロックでは、削片が剥ぎ取られた痕跡の認められる石器は出土していないが、同ブロック内でファシットを施す作業が行われていたことが窺える資料である。

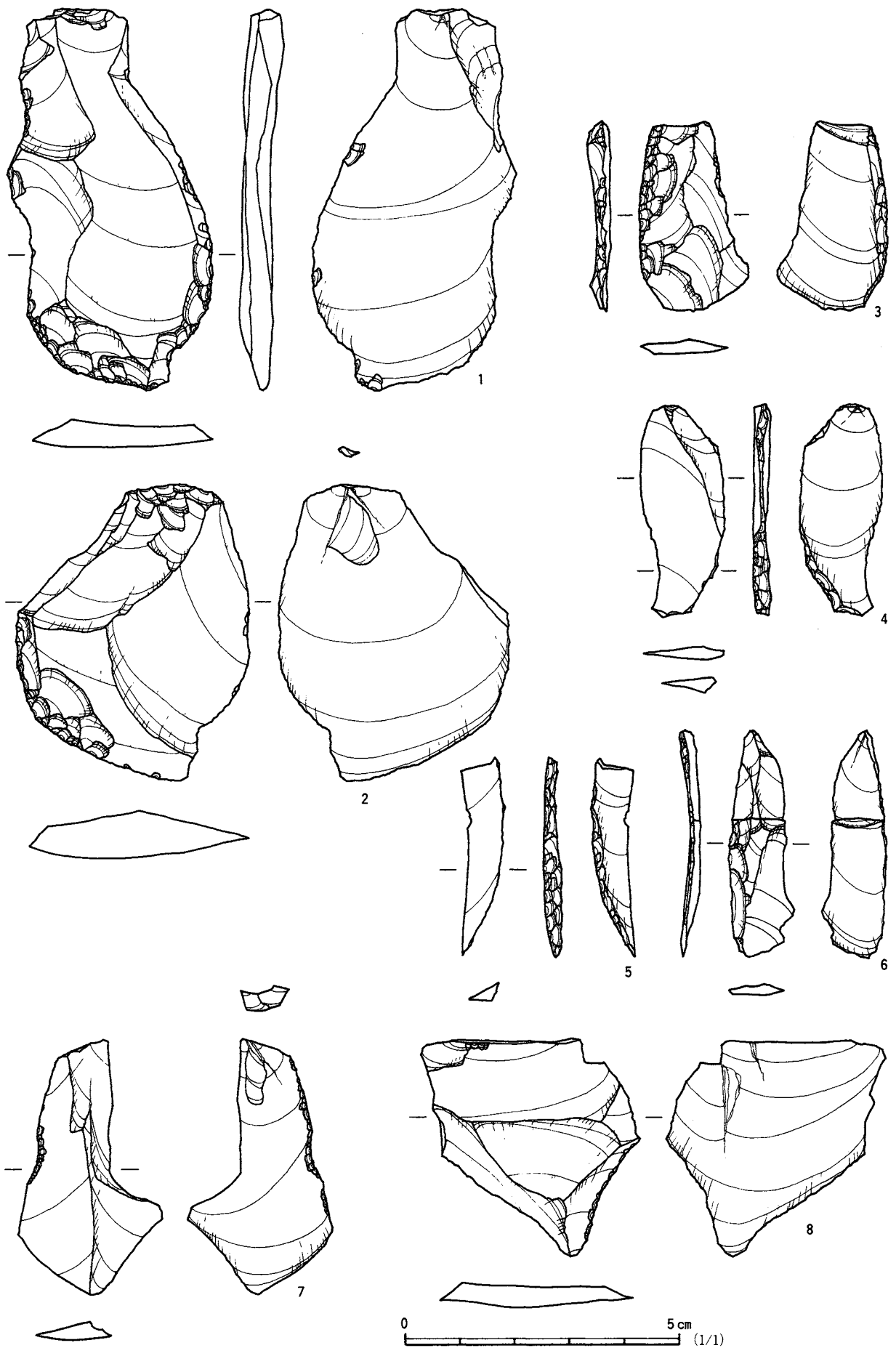
頁岩製の剥片石器の他に、黒曜石製の剥片石器も出土している。これらのなかには定型的な石器や、調整痕の認められる剥片はみられないが、他の同一文化層に属するブロックで出土した、同石材の剥片と比較すると、第25ブロックで出土したものは大型であるといえる。

出土遺物

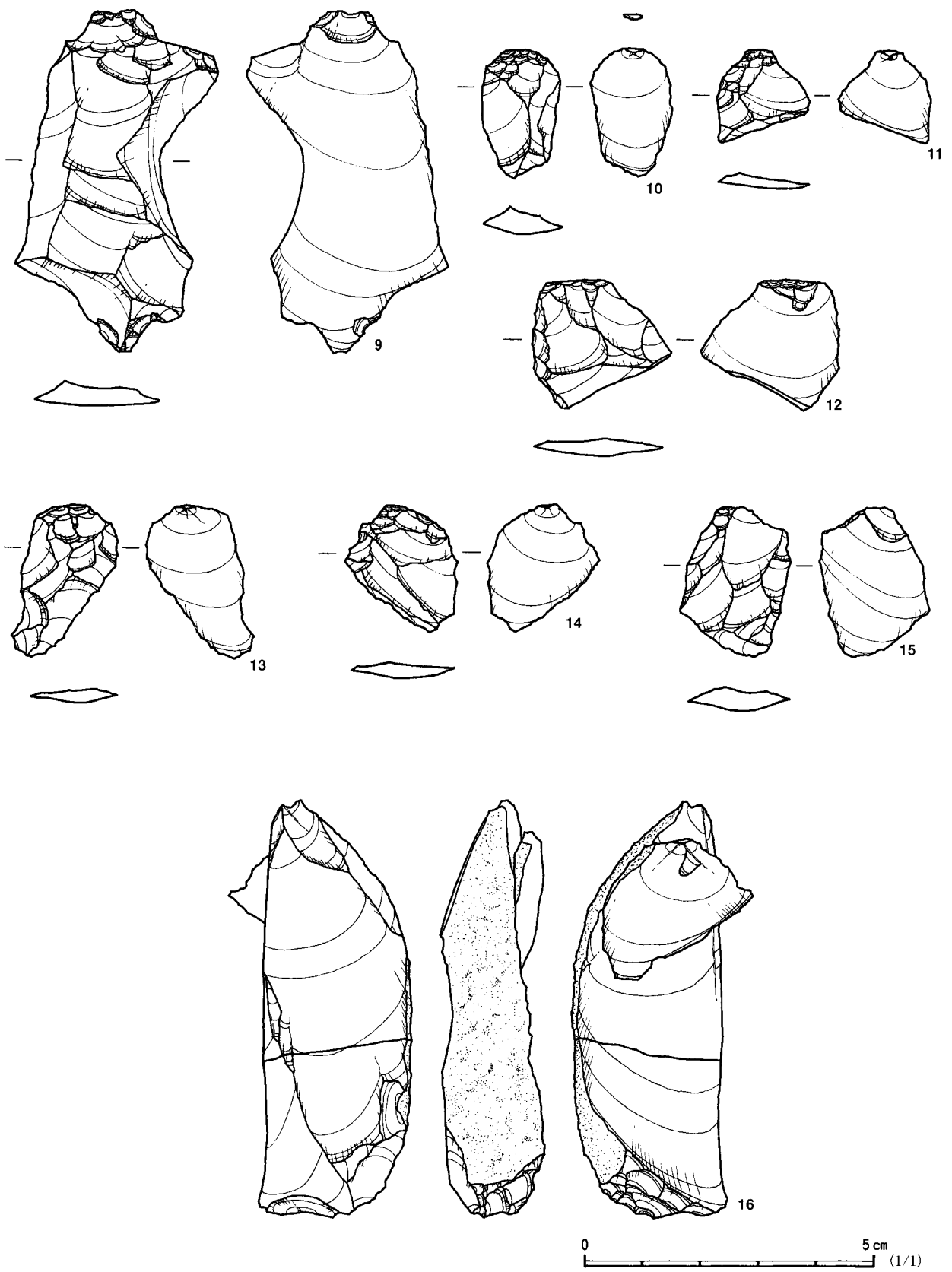
1は頁岩製の削器である。大型の縦長剥片を素材とし、調整は片側縁から末端部にかけて施され、特に末端部の調整は密に丁寧に施されている。正面右側縁は素材剥片の鋭い縁辺を留めているが、表面側、主

第48表 第25ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	搔 器	削 器	ドリル・ リスト	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フリヤ	J・ フリヤ	剥 片	砕 片	剥 利 石	片 用 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計	
頁 岩	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	6	1	1	9	56	-	-	-	-	-	61	135	
								0.3%			1.9%	0.3%	0.3%	2.9%	18.1%						19.6%	43.4%	
黒 曜 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	6	-	-	-	-	-	-	9	2.9%
安 山 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	102	102	
																						32.8%	32.8%
砂 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	60	60	
																						19.3%	19.3%
流 紋 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	3	
																						1.0%	1.0%
珪 質 頁 岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	2	
																						0.6%	0.6%
計	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	6	1	1	12	62	-	-	-	-	-	228	311	
								0.3%			1.9%	0.3%	0.3%	3.9%	20.0%						73.3%	100.0%	



第99図 第25ブロック出土遺物(1)



第100図 第25ブロック出土遺物(2)

第49表 第25ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第99図	1	17P-04, 19	削器	頁岩	7.02	3.57	0.61	15.68	
	2	17P-04, 52	調整痕ある剥片	頁岩	5.20	4.28	0.91	16.99	
	3	17P-25, 3	削片	頁岩	3.41	1.97	0.42	2.23	
	4	17P-05, 16	削片	頁岩	3.75	1.53	0.31	1.65	
	5	17P-24, 13	削片	頁岩	3.56	0.81	0.32	0.69	
	6	17P-24, 4 17P-14, 75	剥片	頁岩	4.13	1.19	0.24	0.91	
	7	17P-15, 16	使用痕ある剥片	頁岩	4.20	2.81	0.40	3.38	
	8	17P-14, 84	剥片	頁岩	3.87	3.97	0.49	5.65	
第100図	9	17P-25, 1	剥片	頁岩	5.83	3.10	0.59	10.08	
	10	17P-15, 13	剥片	頁岩	2.21	1.38	0.46	1.12	
	11	17P-14, 46	剥片	頁岩	1.60	1.62	0.29	0.55	
	12	17P-14, 17	剥片	頁岩	2.20	2.43	0.36	1.70	
	13	17P-14,	剥片	頁岩	2.71	1.64	0.32	0.96	
	14	17P-14, 52	剥片	頁岩	2.28	1.95	0.32	0.99	
	15	17P-14, 202	剥片	頁岩	2.56	1.97	0.40	1.30	
	16	16P-85, 7 17P-13, 10 17P-14, 27	剥片	黒曜石	1.96 4.50 2.90	2.90 2.73 3.17	0.38 1.20 0.54	1.95 15.55 13.01	

要剥離面側の両面に、使用による微細な剥落痕がみられ、無調整部位も刃部として活用していることが窺える。

2は頁岩製の調整痕の認められる剥片である。縦横の長さがほぼ同一の大型の剥片を素材とし、剥片の末端部に調整が施される。1の削器と類似するが、調整は部分的であり、1と比較すると粗雑な感があるため、ここでは調整痕の認められる剥片として扱った。ただし調整は素材剥片の形状を著しく変えるものではなく、削器等の刃部作出を目的として施されたものと考えられ、この点では1の削器と同様である。

3～6は頁岩製の削片である。いずれも片側縁に微細な調整痕がみられる。各々の削片の主要剥離面はこの側縁部からの調整より新しく、換言すれば、調整が施された後に削片が作出されたことがわかる。特に3については、表面に面的な調整が施されたと考えられる調整がみられ、側縁部の調整は裏面側にむかって施されるため、表裏面ともに面的な調整が施された石器から作出されたものであることが理解できる。6についても同様であり、不明瞭ではあるが、表面には粗い面的な調整がみられる。

4・5については、表面は一枚の剥離であり、これは削片が作出された石器に残る、素材剥片の主要剥離面に該当するものと考えられる。削器あるいは搔器のように、片面のみに調整を施した石器から作出された削片であろう。また4の表面には、この削片が作出された以前の剥離痕がみられ、この剥離も削片を作出した痕跡と考えられることから、ファシットは1回のみではなく、数回施されたものも存在すると考えられる。

7は頁岩製の使用痕の認められる剥片である。縦長の不定形剥片の片側縁を使用したものであり、使用による微細な剥落痕がみられる。特に主要剥離面側に剥落痕が顕著に確認できる。

8・9は頁岩製の剥片である。第25ブロックで出土した剥片のなかでも大型のものである。1・2の石器と比較すると、石器素材としては小型であり作りも薄いため、石器素材として活用されなかった剥片であろう。両者の表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定せず、特に同様の形状の素材剥片の作出を意識して剥片剥離を行っていたようすは窺えない。

10～15の表面には微細な剥離痕がみられる。これらの剥離痕は、剥片剥離時に施された頭部調整等の剥離とは異なり、プレッシャー・フレイキングによる剥離痕と考えられる。加えてそのほとんどの側面の形状が主要剥離面を内側として湾曲しているため、石器製作の過程での、面的な調整を施す際に作出された調整剥片と考えられる。どのような定型的な石器を作出していたのかは不明であるが、表面の剥離痕はすべて面的な調整によるものであり、おそらく槍先形尖頭器のような石器を製作していたことが想像される。調整剥片の打面はほとんどが小さく、打面の状況を観察することは困難であるが、12のみ打面のようすが観察でき、これには微細な剥離痕が明瞭に観察できる。この剥離は表面側から施されているため、両面加工の石器の製作も行われていたことが窺える。

16は黒曜石製の剥片である。厚みのある大型の剥片で中央部より2分する。片側面はほぼ原石面で占められ、剥片の末端部には、剥片剥離時の頭部調整痕が明瞭に観察できる。大型の剥片の主要剥離面には剥片が接合する。両者の剥片の打面は同方向ではあるが同一打面ではなく、大型の剥片が作出された後に、剥片を作出した打面に対して打面再生を行い、剥片剥離を行ったものであり、小型の剥片は打面再生が行われた後に、最初に作出された剥片であることが理解できる。

(9) 第9文化層

第9文化層に属するブロックは、第26ブロック、第27ブロック、第28ブロックの3ブロックである。遺物の出土層位は、Ⅱ層の黒色土層からソフトローム層にかけてであり、特にローム層の漸移層から出土している。

文化層を特徴づける定型的な石器として、槍先形尖頭器が挙げられるが、各ブロックともに石器の出土点数は少なく、石器組成の点では、槍先形尖頭器の他に定型的な石器が含まれるか否かは明確ではない。

石器に使用される石材は、第8文化層と比較して多種であり、安山岩、チャート、凝灰岩、頁岩等が使用される。各ブロックとも石器の出土点数は少なく、また明確な剥片剥離作業が行われた痕跡は確認できないため断定はできないが、各石材とも点数的には均一であり、特に特定の石材を多用する傾向はみられない。以下に各石材の特徴を記す。

安山岩：色調は表面は黄土色、欠損面は黒色を呈する。表面は水和層が発達し、ざらついているが、欠損面はきめが細かくむしろ光沢がある。

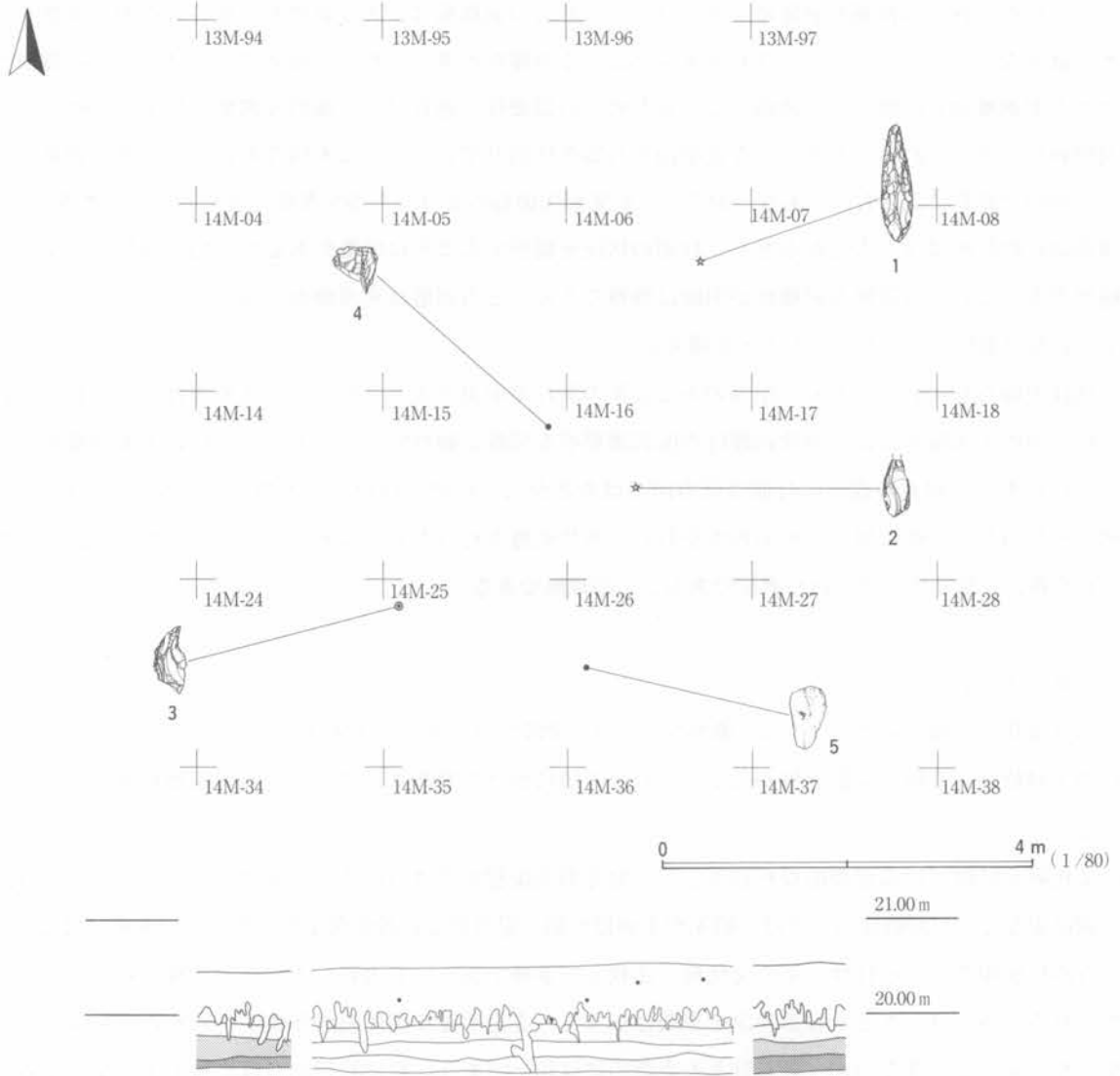
チャート：色調は緑がかった青灰色を呈する。青色の線状の節理が縦横に混入する。きめは細かく光沢があるが剥落しやすい。

凝灰岩：色調は表面は緑色を帯びた青灰色、欠損面は暗い青灰色を呈する。水和層が発達し、器表面は粉をふいたような感があり、脆く傷が付きやすい。緻密ではあるが光沢はなく、質感に反し持った感じが重い。

流紋岩：器表面の色調は白色もしくはクリーム色である。きめは細かいが光沢はみられない。極めて微量であるが0.5mmほどの石英の結晶を含む。質感に反し持った感じが軽い。

頁岩：色調は原石面は淡黄褐色、剥離面も原石面と同様の色調であるが色調は薄い。きめは細かく原石面には光沢があるが剥離面にはない。

変成岩：色調は黒色が基調であるが、部分的に灰色の節理が混入する。緻密であり、光に当てるときらきらと光る微粒子がみられる。



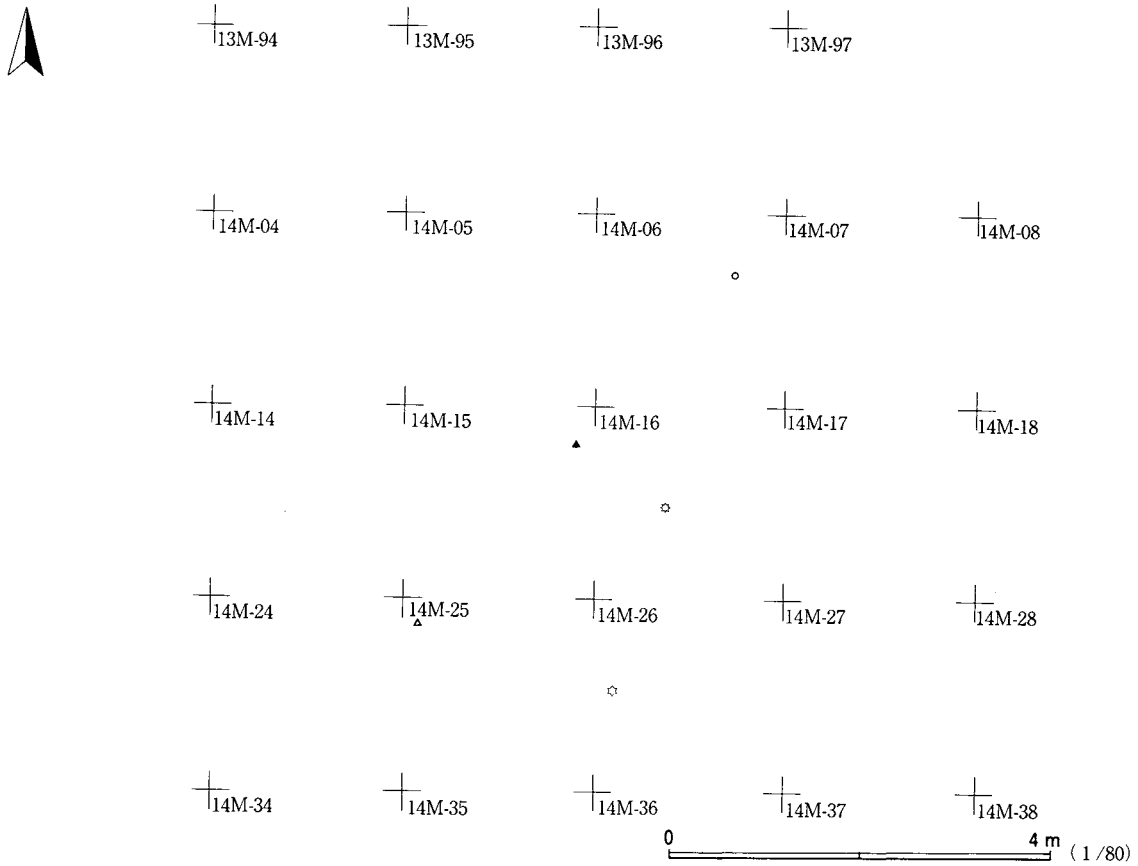
第101図 第26ブロック器種別石器分布図

第50表 第26ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台石 形器	角錐状 石器	掻器	削器	ビュ ス キ ス	彫刻刀 形石器	削片	R・ フル	U・ フル	剥片	砕片	剥片 片用核	石核	石筴	巖石	礫	計
安山岩	-	1 20.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.4%	-	-	-	-	-	-	1 20.0%
凝灰岩	-	1 20.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%
流紋岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%
計	-	1 20.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 20.0%	2 40.0%	-	-	-	-	-	-	-	5 100.0%

第26ブロック (第101~103図 第50・51表 図版14・39)

第26ブロックは、調査区の南側、緩斜面から小規模な台地へ移行する直前の、標高21m付近に位置する。石器の出土点数は総計5点を数え、点数的に小規模なブロックであるが、石器組成に槍先形尖頭器2点、調整痕の認められる剥片1点を含む。他には比較的大型の、定型的な石器の作出が可能な形状の剥片が出



第102図 第26ブロック石材別石器分布図

土している。剥片剥離の行われた痕跡がみられないことから、定型的な石器と素材剥片の搬入により形成されたブロックと考えられる。

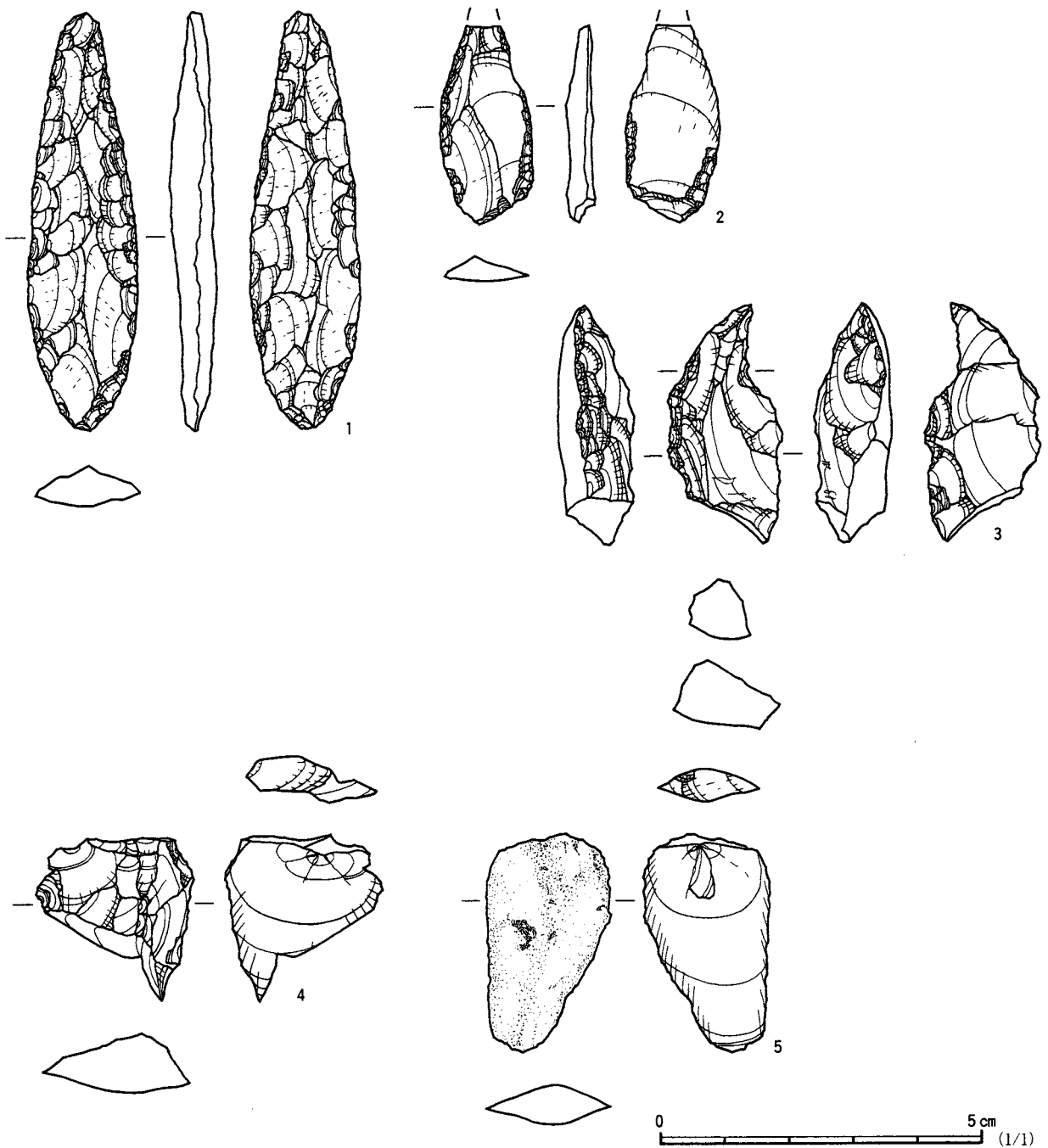
石器に使用される石材は5点とも異なる石質であり、安山岩、チャート、凝灰岩、流紋岩、頁岩で構成される。このうち槍先形尖頭器は安山岩、凝灰岩を使用して作出される。

出土遺物

1は安山岩製の槍先形尖頭器である。表裏面ともに面的な調整が施されるため、素材剥片の形状は不明である。平面形状は基部付近に最大幅がくる形状を呈し、先端部は欠損後に再生されたためか鋭さに欠ける。調整はほぼ全面に施されるが、それほど密に丁寧な施される感はなく、特に周縁部の再調整については部分的である。簡素な調整のわりには正面、側面の形状は長軸を中心にシンメトリーであり、素材剥片の形状が原形状にかなり近かったものと考えられる。

2は凝灰岩製の槍先形尖頭器である。先端部は欠損している。小型の縦長剥片を素材とし、素材剥片の末端部を先端部としている。素材剥片の打面は、表面側からの調整により除去される。調整は周縁部のみには施され、表面側のほぼ全周と、主要剥離面側の基部付近の両側縁に微細な調整を施し製品化している。

3は流紋岩製の調整痕の認められる剥片である。部厚な剥片を素材とし、急角度の調整により形状を整えられる。刃部作出を目的とした調整ではなく、明らかに形状を整える目的で施された調整であるが、尖頭部以外には定型的な石器として定義付けできる部位はみられず、どのような石器の製作を意図して調整を施したものは不明である。

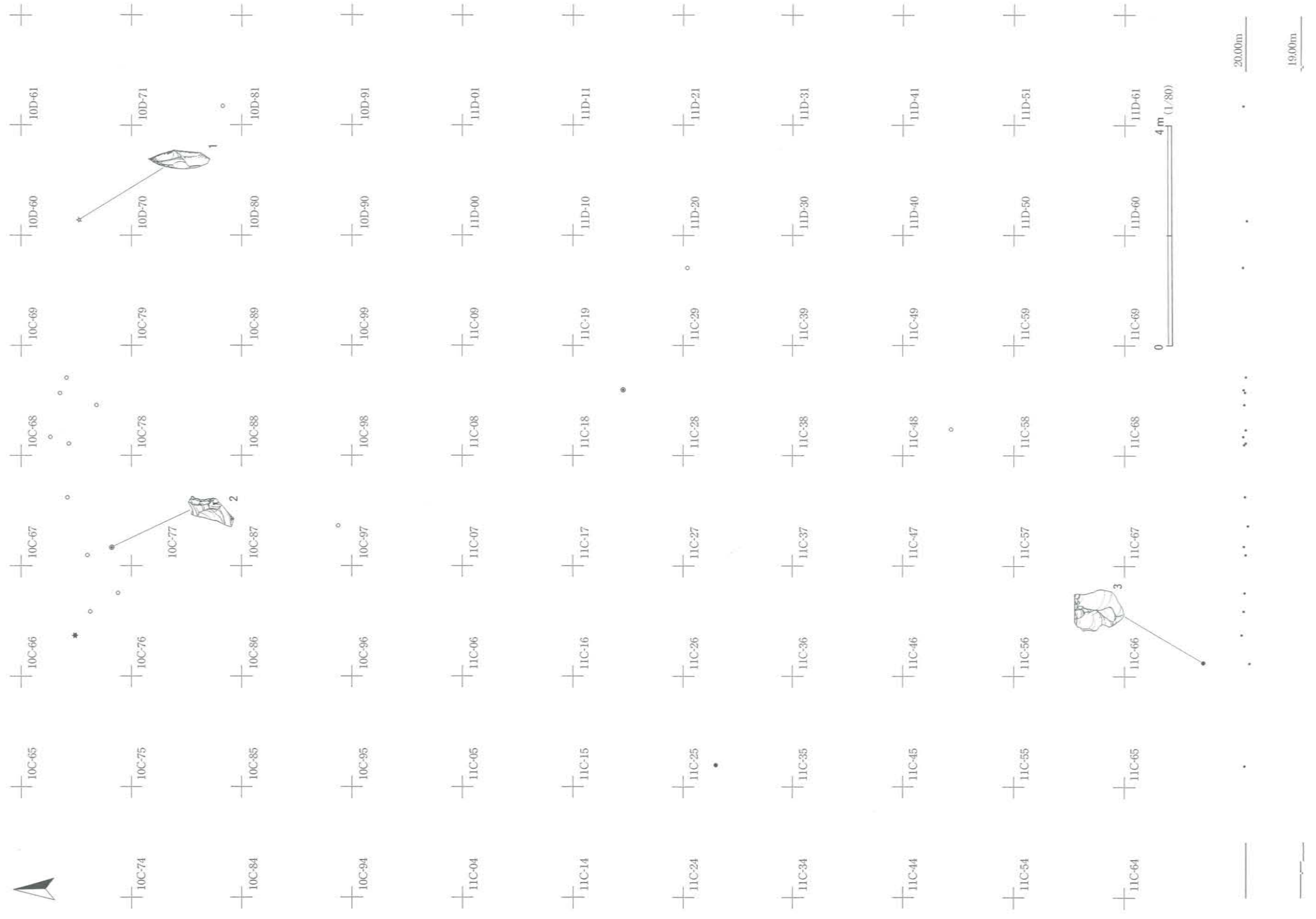


第103図 第26ブロック出土遺物

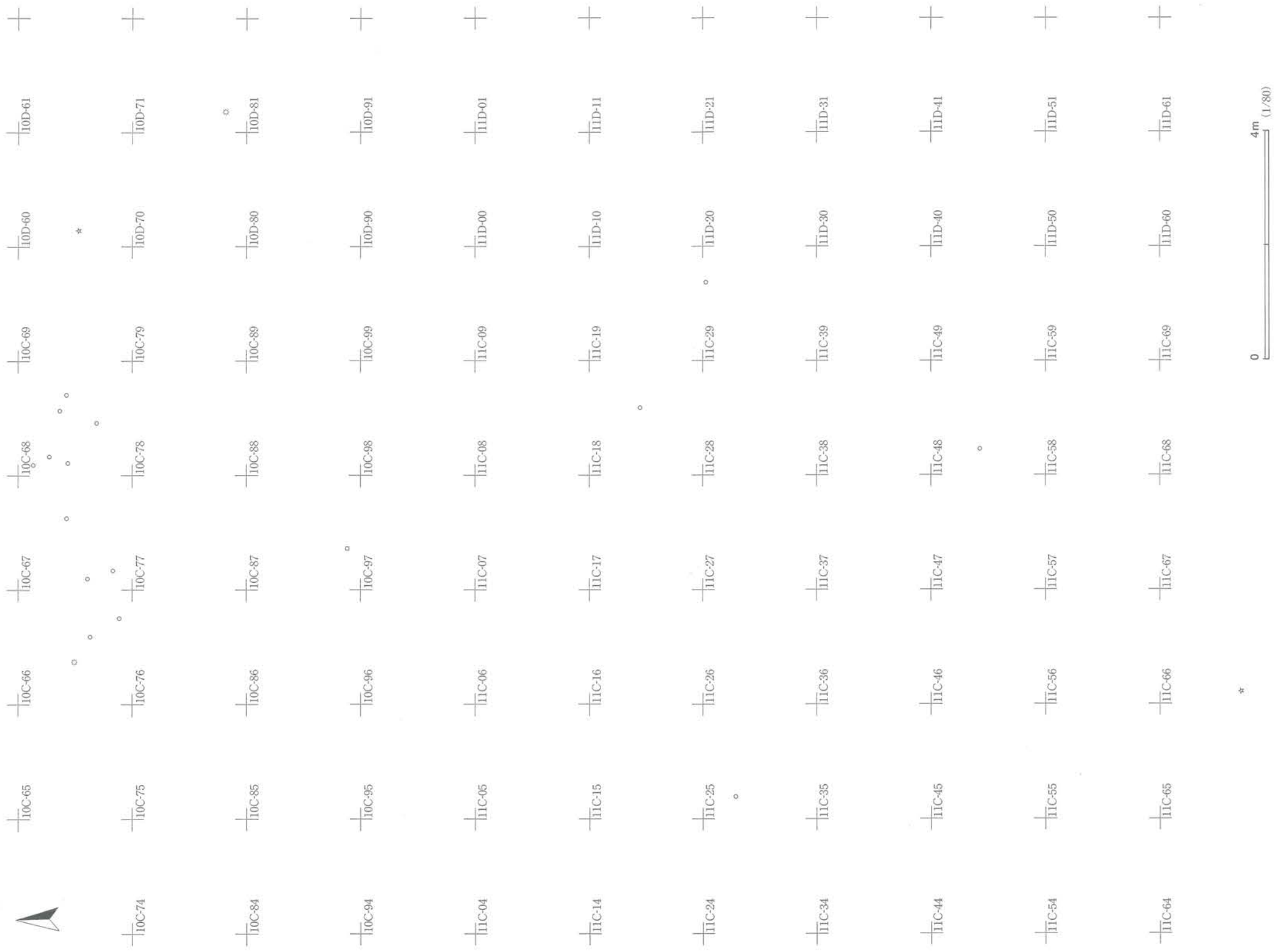
第51表 第26ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第103図 1	14M-06, 1	槍先形尖頭器	安山岩	6.44	1.76	0.64	7.86	
2	14M-16, 1	槍先形尖頭器	凝灰岩	3.10	1.49	0.39	1.71	
3	14M-25, 1	調整痕ある剥片	流紋岩	3.65	1.90	1.20	6.53	
4	14M-15, 1	剥片	チャート	2.50	2.44	0.96	4.80	
5	14M-26, 1	剥片	頁岩	3.38	2.12	0.69	4.42	

4はチャート製の剥片である。部厚な不定形剥片であり、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定せず、頻繁に打面を転移して作出された剥片と考えられる。機種は特定できないが、形状から考えると3のような石器の製作を意図して作出された剥片と考えられる。



第104図 第27ブロック器種別石器分布図



第105図 第27ブロック石材別石器分布図

5は頁岩製の剥片である。表面は原石面で占められ、剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片であることが理解できる。末端部がやや尖る感のある縦長剥片であり、2の槍先形尖頭器の素材剥片に近い形状である。5の剥片も槍先形尖頭器の作出を目的として搬入されたものと考えられる。

第27ブロック（第104～106図 第52・53 図版39）

第27ブロックは調査区の西側、緩斜面が急激に角度を増し谷に落ち込む直前に位置し、標高は20.5m前後を測る。

石器は総計19点を数え、分布範囲は長径8m、短径2mの長楕円形状の集中区を北側に配し、南にむかって点在する。点在する範囲を括った場合、長軸20mほどの分布範囲となるが、石材に共通点がみられることから一つのブロックとして考えて良いだろう。

出土した石器のうち、定型的な石器は槍先形尖頭器が挙げられ、他には調整痕の認められる剥片が出土する。碎片が点数的に多く、なかでも安山岩製のものが多い。素材剥片作出のための剥片剥離の形跡がみられないことから、石器製作を目的とした調整の段階で作出された碎片であると考えられる。また碎片以外の剥片、あるいは定型的な石器や、調整痕の認められる剥片は概して大型であるため、搬入品として考えて良いであろう。このことから第27ブロックは、製品と石器素材としての剥片の搬入、そして石器製作のための調整により形成されたブロックと考えられる。

出土遺物

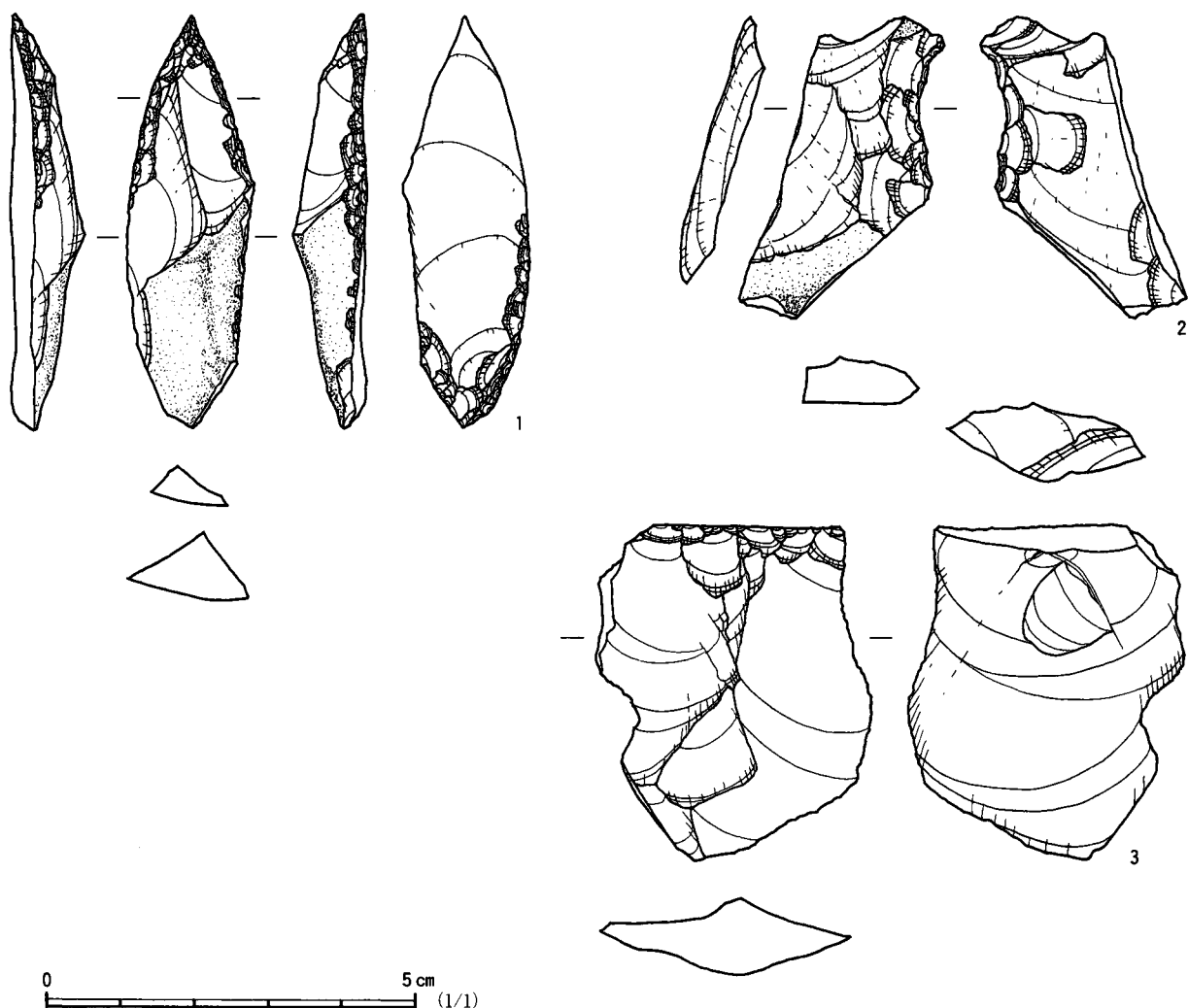
1は頁岩製の槍先形尖頭器である。縦長剥片を素材とし、表面には原石面がみられる。原石面には原石の稜が明瞭に残り、剥片剥離時の剥離もこの稜に従って稜を形成している。よってこの槍先形尖頭器の横断面は、どの部位でも三角形を呈する。主要剥離面の剥離の方向もこの稜の方向と一致しているため、断定はできないが、母岩の稜を意識して活用しているようにも窺える。調整は面的ではなく、周縁部のみに留められ、先端部に近い両側縁は表面側に、基部に近い両側縁には、主要剥離面側に細かい調整が施されている。

2は安山岩製の調整痕の認められる剥片である。表面の一部に原石面を有する。薄い作りの横長剥片を素材としているものと考えられ、調整はその片側縁に施される。調整の施される側縁に対する側縁は、折断により除去される。調整は表面、裏面の両面に対して施され、表面側に施される調整は密で細かいものであるが、主要剥離面側に施される調整は粗雑で、数回の剥離で終了している。刃部作出を目的とした調整ではなく、形状を整える目的で施されたものと考えられるが、現形状からはどのような石器の作出を意図しているのかは解釈できない。

3は頁岩製の剥片である。打面を広く設定して作出しているためか、剥片の末端部はややヒンジ・フラ

第52表 第27ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台石	形石器	角錐状 石器	挿器	削器	ヒス・ エース	彫刻刀 形石器	削片	R・ フルク	U・ フルク	剥片	砕片	剥片 用核	石核	石斧	燧石	礫	計
変成岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1
																5.3%						5.3%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	1	12	-	-	-	-	-	15
													10.5%		5.3%	63.1%						78.9%
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	2
																5.3%		5.3%				10.5%
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1
															5.3%							5.3%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	14	-	1	-	-	-	19
													10.5%		10.5%	73.7%		5.3%				100.0%



第106図 第27ブロック出土遺物

第53表 第27ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第106図 1	10D-60, 1	槍先形尖頭器	頁岩	5.61	1.76	0.86	6.05	裏面基部調整。
2	10D-67, 3	調整痕ある剥片	安山岩	4.23	2.81	0.67	8.24	折断。打面と片側縁に調整痕。
3	11C-66, 2	剥片	頁岩	4.48	3.75	1.11	14.48	

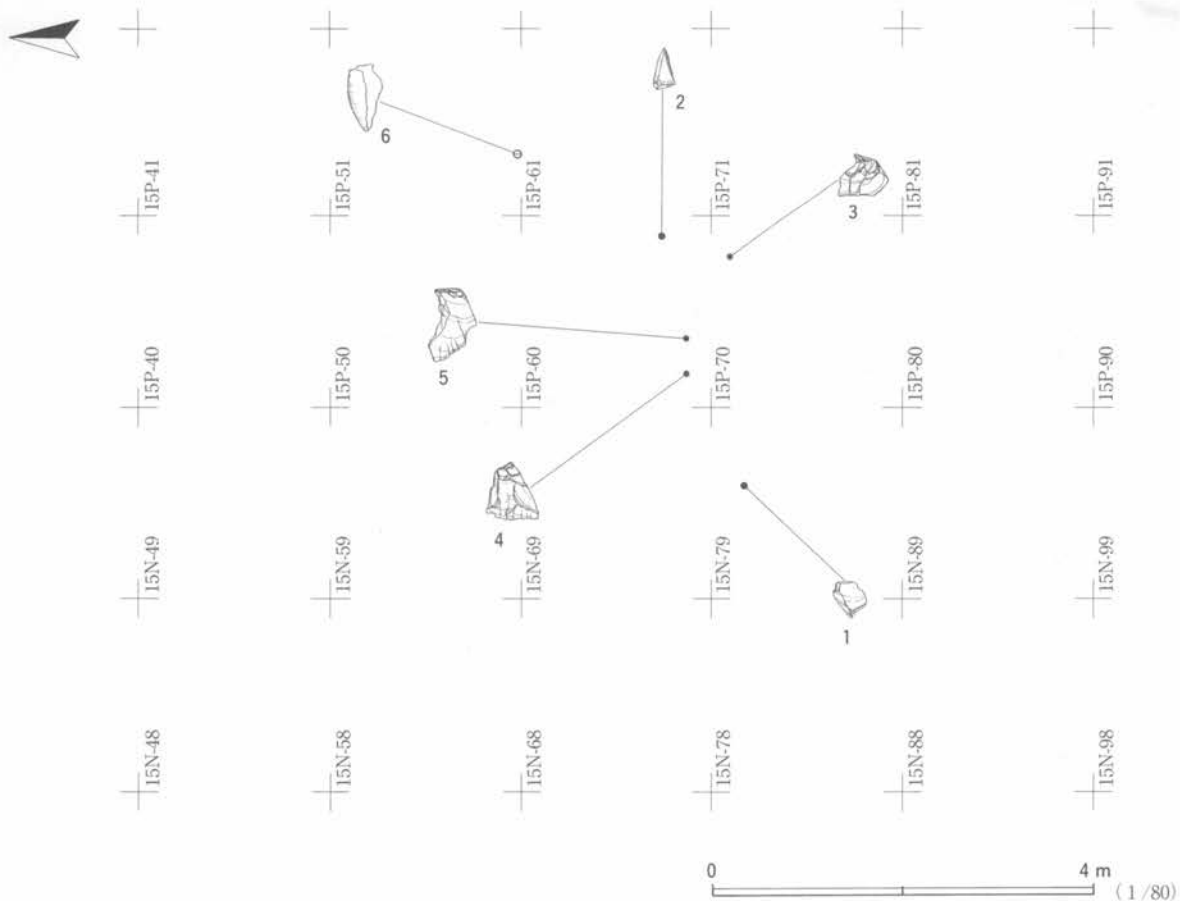
クチュア気味となる。表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向はほぼ同一方向からであり、打面再生を行いながら、同一方向に設定された打面から作出された剥片と考えられる。表面の打面付近には頭部調整痕が明瞭に観察できる。

第28ブロック (第107～109図 第54・55表 図版15・40)

第28ブロックは、調査区南側に存在する小規模な台地の付け根付近、平坦部と緩斜面部の境界に位置し、標高は20mを測る。

石器は総計6点出土し、これらは4mほどの範囲内に散漫に分布する。範囲的、点数的にも小規模なブロックといえる。出土層位はソフトローム層中である。

定型的な石器は含まず、剥片、碎片で占められ、チャート製の剥片が主体となる。頁岩製の碎片が1点



第107図 第28ブロック器種別石器分布図

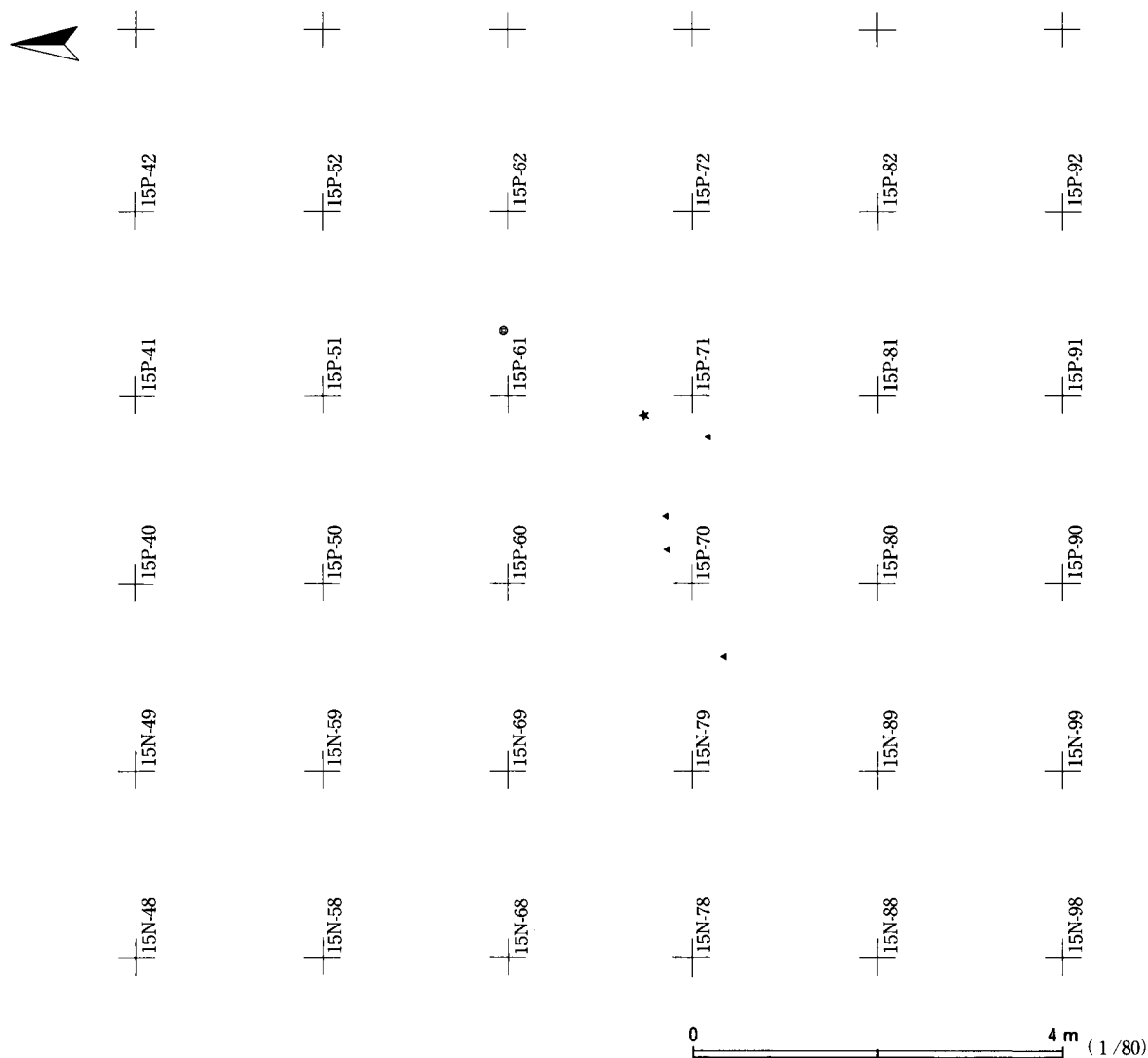
第54表 第28ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 石 器	角錐状 石 器	種器	削器	ビース・ スリ-1	彫刻刀 形石器	削片	R・ フルツ	U・ フルツ	剥片	砕片	剥片 剥離石	片用核	石核	石斧	敲石	礫	計
チャート	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3 49.9%	1 16.7%	-	-	-	-	-	-	4 66.6%
変成岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 16.7%	1 16.7%
頁岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 16.7%	-	-	-	-	-	-	-	1 16.7%
計	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3 49.9%	2 33.4%	-	-	-	-	-	1 16.7%	6 100.0%

出土するが、極めて客体的である。

出土遺物

1はチャート製の碎片である。打面部が欠損するが、折断によるものではなく、剥片剥離時に欠損したものと考えられる。ただしチャート製の碎片はこの1点のみであり、明確な剥片剥離作業の行われた形跡はみられないため、想像の域を脱し得ない。



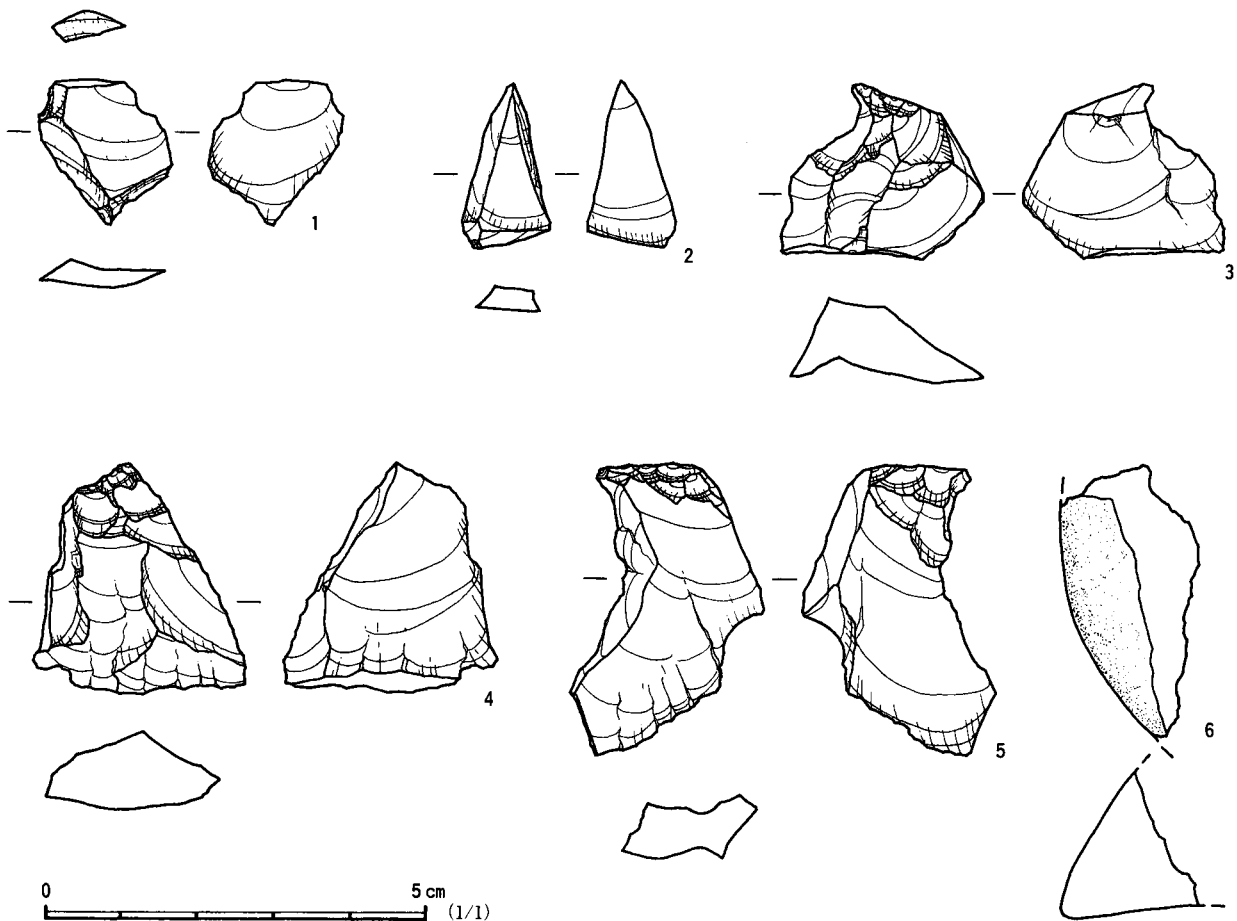
第108図 第28ブロック石材別石器分布図

第55表 第28ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第109図 1	15N-79, 1	剥片	チャート	1.93	1.80	0.37	1.36	
2	15P-60, 3	剥片	頁岩	2.23	1.18	0.38	0.87	
3	15P-70, 1	剥片	チャート	2.46	2.52	1.14	7.05	
4	15P-60, 1	剥片	チャート	2.58	3.33	1.13	8.77	
5	15P-60, 2	剥片	チャート	2.90	3.57	0.85	6.71	
6	15P-51, 1	礫	変成岩	3.53	1.85	1.81	12.05	

2は頁岩製の碎片である。片側縁から打面にかけて欠損しているが、人為的な折断によるものではなく、剥片剥離時に欠損したものと考えられる。頁岩製の石器はこの1点のみであり、第28ブロック内で頁岩製の石材に対して剥片剥離の行われた形跡はまったくみられない。定型的な石器が同ブロックから出土していないため、どのような形状の石器の作出を意図していたかは不明であるが、この碎片の形状からは石器素材としての活用は不可能であり、石器素材としての搬入品とも考えがたい。

3～5はチャート製の剥片である。1の碎片を含め、チャート製の剥片類は同一母岩と考えられる。節理が縦横に混入しているため、剥離のようすが明確に把握しがたい。これらの形状からは定型的な素材剥



第109図 第28ブロック出土遺物

片の作出を意図していたことは窺えず、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向も一定でないことから、打面を頻繁に轉移し、部厚な不定形剥片の作出を目的としていたことが考えられる。

6は変成岩製の礫片である。断面形状が三角形を呈する礫の一部であることが窺える。特に被熱したようすはみられない。

(10) 第10文化層

第10文化層は、今回の一本桜南遺跡で検出したブロック群のなかでも、最も新しい段階の文化層であり、第29ブロック、第30ブロック、第31ブロックの3ブロックがこの時期に該当する。

この文化層に属する各々のブロックは、遺跡の所在する台地上に距離を置いて所在するため、立地条件の点では共通点はみられない。

各ブロックを構成する石器の出土層位はソフトローム層中であり、第9文化層に属するブロックで出土している石器の出土層位とほぼ同一であり、層位的な違いは認められない。

第10文化層に属するブロックから出土する石器は、代表的なものとして細石刃が挙げられ、細石刃そのものの出土点数は少ないが、細石刃を作出した痕跡の認められる細石核が各ブロックともに多くみられる。細石核および細石刃の他に、削器等の石器を共伴するブロックもみられるが、主たる石器は細石刃であると断言できる。

石器に使用される石材は多種であり、第9文化層の剥片石器で使用される石材は、ほぼ頁岩、安山岩で

占められるのに対し、第10文化層に属するブロックでは黒曜石を主体とし、安山岩、珪質頁岩、頁岩、メノウ等が含まれる。各石材の特徴は以下のとおりである。

黒 曜 石：色調は黒色を基調とし、黒色と透明な部位が層状に観察できるものや、白濁した部位がみられるものも含まれる。微粒子状の夾雑物が多く含まれるが、特に剥離面は荒れた感はない。

安 山 岩：剥片石器と礫が出土している。剥片石器の器表面は、原石面、剥離面ともに水和層が発達しているため淡黄褐色を呈するが、欠損面は黒色を呈する。風化面、欠損面ともにきめは細かく、風化面はざらざらした感があるが、欠損面は光沢がある。礫は被熱しているため表面は脆く青みがかった灰色を呈し、部分的に赤化している。剥片石器に使用される石材と比較すると、粒子は粗く斑状の夾雑物がみられる。

珪 質 頁 岩：色調は乳白色を呈する。部分的であるが、チャートにみられるような青色の線状の節理がみられる。器表面はきめが細かく光沢がある。

頁 岩 A：原石面は淡黄褐色、剥離面は原石面よりやや灰色がかかる淡黄褐色を呈する。原石面は細かい亀裂状の傷が無数にみられるが、全体的に光沢がありすべすべしている。剥離面は滑らかであるが、原石面と比較すると光沢に欠ける。

頁 岩 B：色調は、原石面は赤みを帯びた暗褐色、内面は原石面よりも若干色調が薄い同色を呈する。きめは細かく光沢があり、質感に反し持った感じが重い。

変 成 岩：色調は黒に近い灰色を呈する。粒子は均一で緻密であり、光に当てるときらきらと光る微粒子がみられる。

凝 灰 岩：色調は、器表面は青みがかった乳白色、欠損面は青みがかった灰色を呈する。水和層が発達し器表面はざらざらしている。質感に反し持った感じが重い。

メ ノ ウ：色調は乳白色もしくは半透明であり、部分的にオレンジ色の箇所がみられる。小さな空洞がみられ、空洞のなかには六方柱の石英の結晶が無数に存在する。

石 英 斑 岩：剥片石器はなく、礫のみ出土している。原石面は一律に被熱し暗い赤褐色を呈するが、欠損面は褐色がかった黄土色を呈する。0.5mm～2mmほどの立方体の石英粒を多く含む。被熱しているが、原石面は光沢がありすべすべしている。

砂 岩：剥片石器はなく、礫のみ出土している。原石面の色調は青みがかった暗灰色を呈し、被熱しているため部分的に赤化している。岩石を構成する粒子は均一に細かく堅緻である。

第29ブロック（第46・47・110～114図 第56・57表 図版15・40～42）

調査区の西側、台地の緩斜面部に位置し、ブロックの北側には小規模な浅い谷が入り込む。第5文化層に属する第11ブロック、第12ブロックに隣接する。

石器の出土する範囲は、径12mほどの不定円形状を呈する。石器の出土する範囲に比べ出土点数は総計172点と少なく、ブロックの範囲内には、特に集中した箇所はみられず、石器が均等に分布している感がある。出土層位はソフトローム層中であり、第9文化層に属するブロックと出土層位的には違いがみられない。

出土した石器172点のうち、定型的な石器として細石刃が挙げられ、計3点出土している。細石刃自体の出土点数は少ないが、細石刃を作出した痕跡のみられる細石核が計10点出土し、主として細石刃の作出を技術基盤に持つ集団により形成されたブロックであることが理解できる。

細石刃の他には削器が2点出土するが、いずれも素材剥片の片側縁に粗い急角度の刃部を作出したものであり、文化層の様相を明確に表す定型的な石器として挙げるができる。その他の石器として調整痕の認められる剥片、剥片、碎片、剥片利用石核、石核が出土する。

石器に使用される石材は多種であり、黒曜石、安山岩、珪質頁岩、頁岩A、頁岩B、変成岩、凝灰岩、メノウが使用される。また剥片石器ではないが、礫として石英斑岩、砂岩もみられる。そのなかでも黒曜石製の石器については細石刃、細石核を含む総計118点が出土しており、黒曜石が使用される石材の主体となることがわかる。細石刃、細石核のみならず、細石核の素材となる部厚な剥片と、その素材から細石核を作出するまでの工程で作出された成形剥片、碎片がみられ、黒曜石については細石刃の作出までの一貫した工程が把握できる。

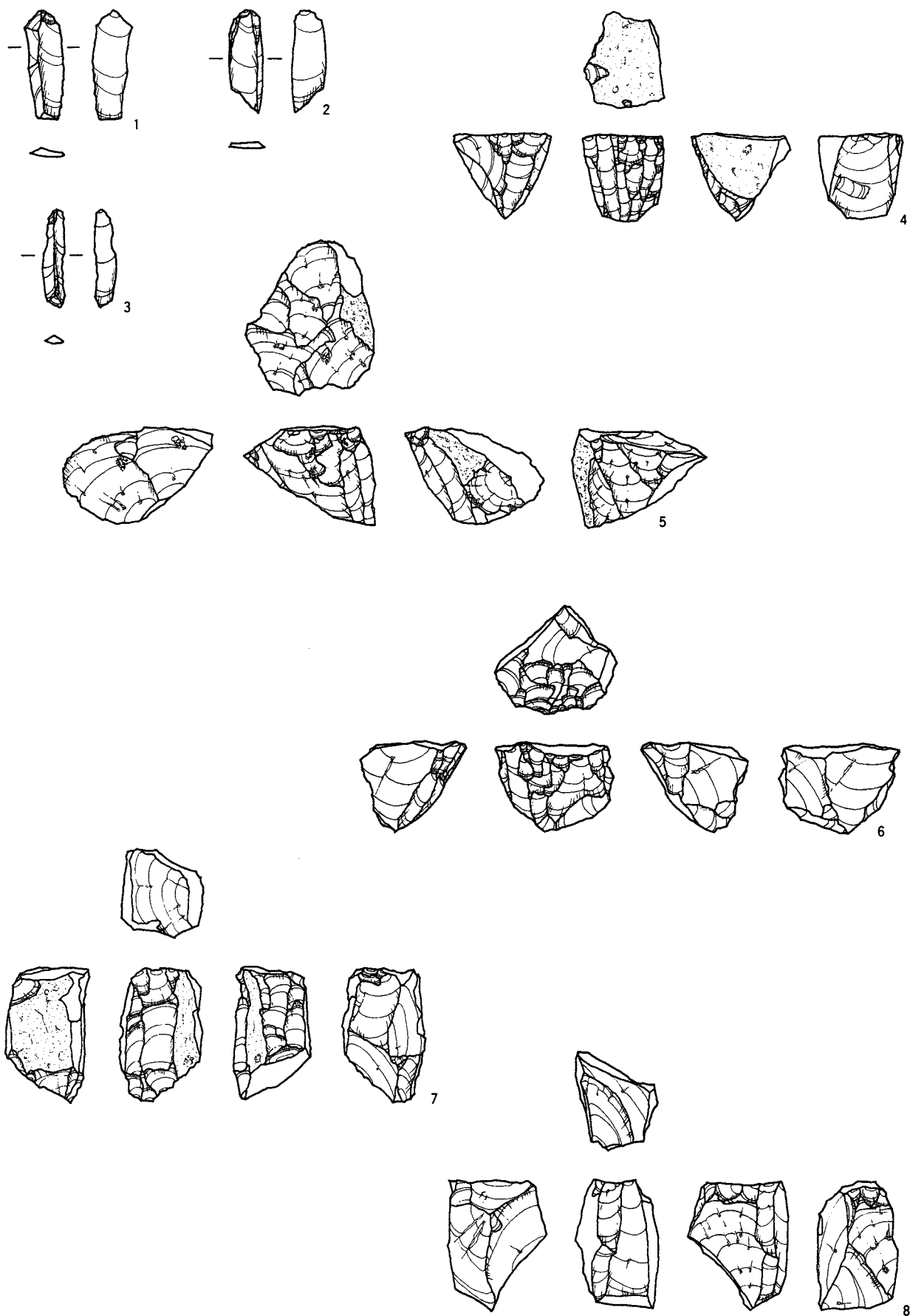
黒曜石の他に剥片剥離の形跡のみられる石材は、安山岩、珪質頁岩が挙げられるが、このうち安山岩については、細石刃の作出に不向きな石質のためか細石核、細石刃ともに出土していない。比較的大型の剥片と石核、大型剥片を素材とした調整痕の認められる剥片が出土するのみである。珪質頁岩については、細石核が1点出土しているが、同石材の細石刃はみられない。また剥片、碎片、石核が出土するが、点数的に少数なため、黒曜石のように細石核を作出するまでの工程を明確にすることはできない。黒曜石、安山岩、珪質頁岩以外の石質の石器については、明確な剥片剥離作業の形跡がみられず、第29ブロックを構成する石器石材のなかでは客体的であるといえる。

出土遺物

1～3は細石刃である。すべて黒曜石製である。欠損しているものはなく、作出された時点の形状を留めている。他の遺跡で出土している細石刃と比較するとやや寸足らずな感があるが、長さとしては第29ブロックから出土している細石核の作業面とほぼ同一の寸法である。1の表面左側縁の末端部側にみられる剥離を除くその他の剥離は、すべて細石刃が作出された打点の方向と一致している。

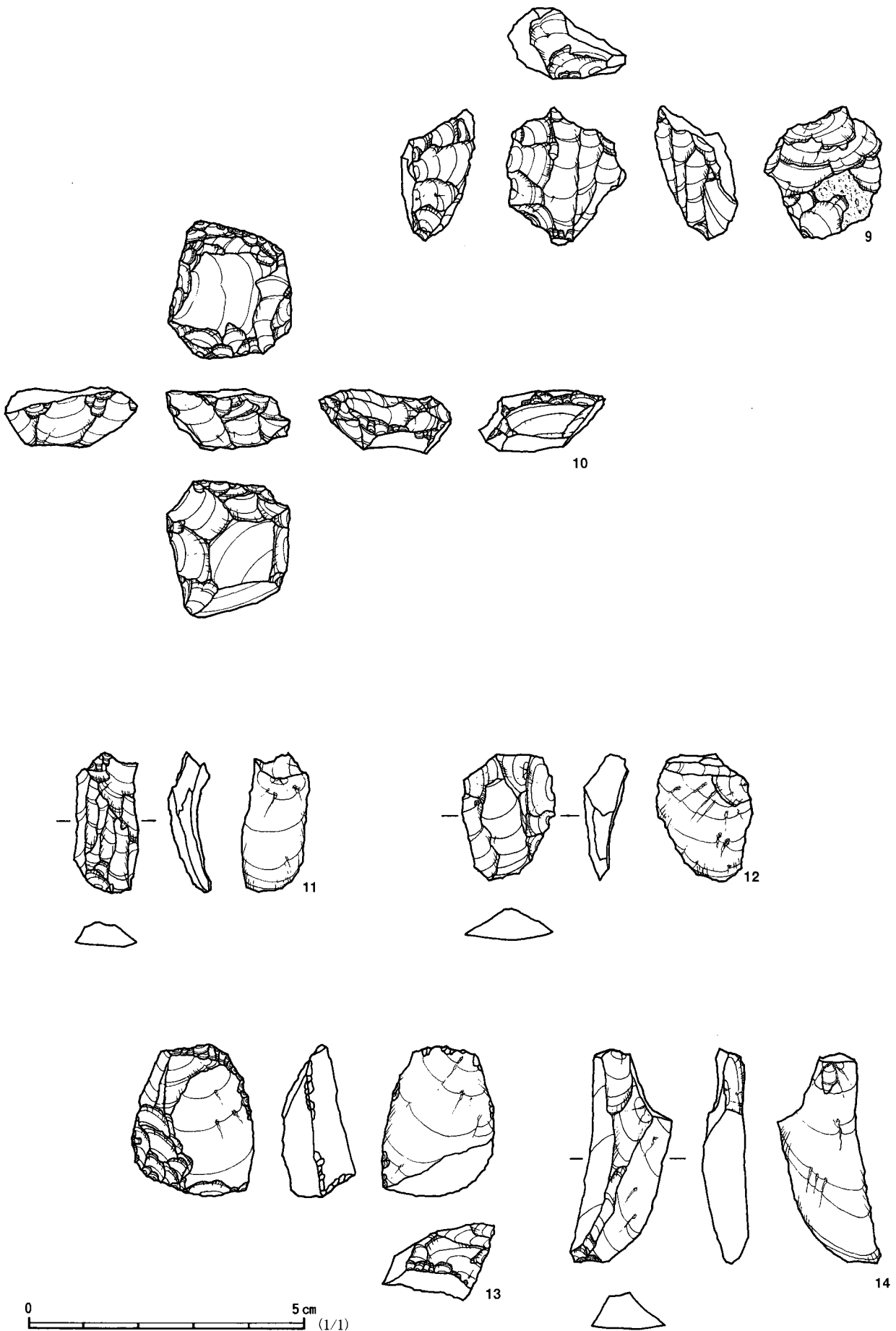
第56表 第29ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角 錐 状 石 器	搔 器	削 器	ピ ス ト ル	彫 刻 刀 形 石 器	削 片	R・ フルイ	U・ フルイ	剥 片	碎 片	剥 片 利 用 石 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
黒曜石	-	-	9 5.2%	3 1.7%	-	-	-	-	-	-	-	3 1.7%	-	25 14.5%	75 43.6%	2 1.2%	1 0.6%	-	-	-	118 68.6%
安山岩	-	-	-	-	-	-	-	1 0.6%	-	-	-	2 1.2%	-	15 8.7%	9 5.2%	-	1 0.6%	-	-	3 1.7%	31 18.0%
珪質頁岩	-	-	1 0.6%	-	-	-	-	1 0.6%	-	-	-	-	-	1 0.6%	4 2.3%	1 0.6%	1 0.6%	-	-	-	9 5.2%
頁岩A	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3 1.7%	1 0.6%	-	-	-	-	-	4 2.3%
頁岩B	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.6%	-	-	-	-	-	1 0.6%
変成岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.6%	3 1.7%	-	-	-	-	-	4 2.3%
凝灰岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.6%	-	-	-	-	-	-	1 0.6%
メノウ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.6%	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.6%
石英斑岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2 1.2%	2 1.2%
砂岩	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 0.6%	1 0.6%
計	-	-	10 5.8%	3 1.7%	-	-	-	2 1.2%	-	-	-	6 3.5%	-	46 26.8%	93 54.1%	3 1.7%	3 1.7%	-	-	6 3.5%	172 100.0%

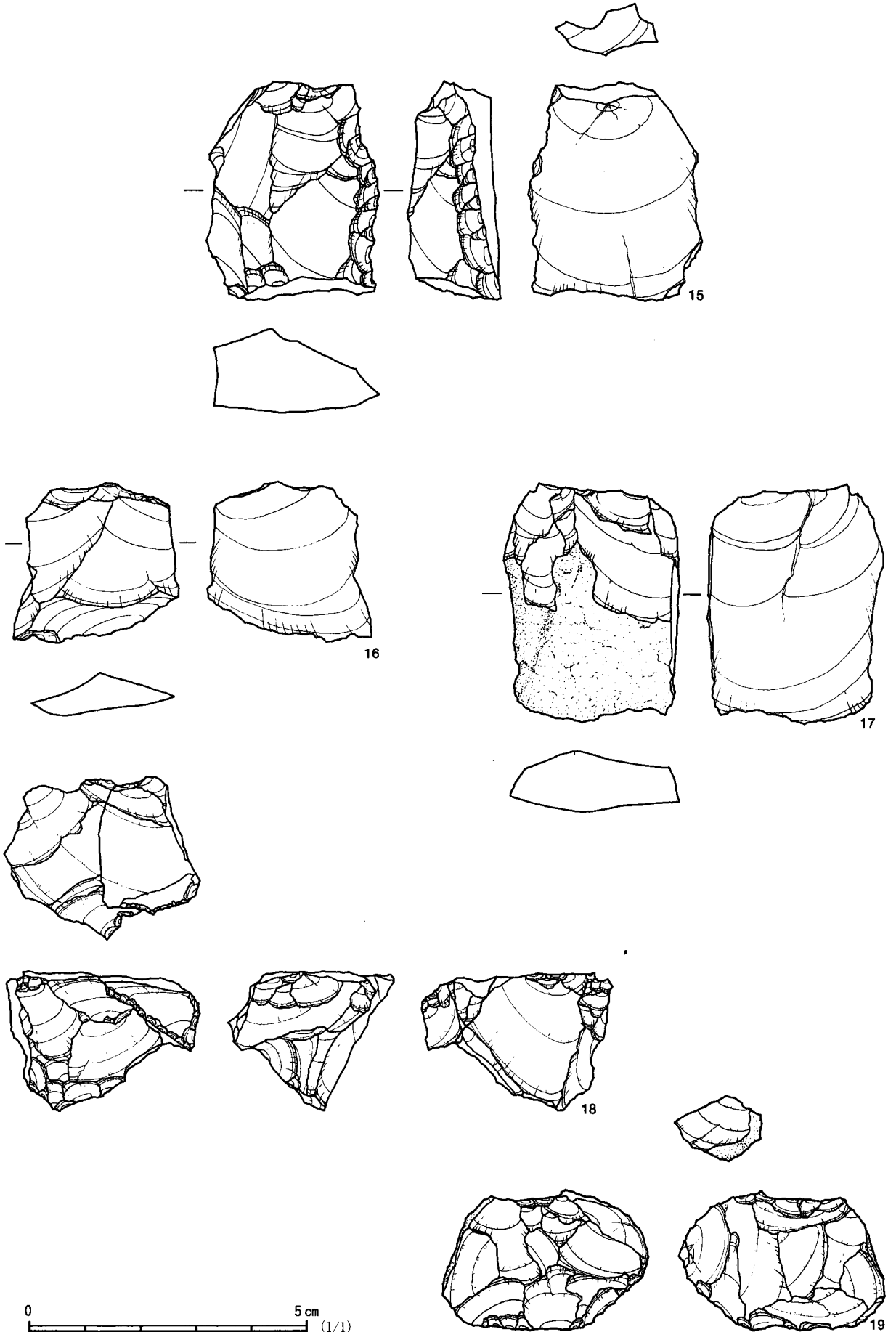


0 5 cm (1/1)

第110図 第29ブロック出土遺物(1)



第111図 第29ブロック出土遺物(2)



第112図 第29ブロック出土遺物(3)

4～10は細石核である。4～9は黒曜石製、10は珪質頁岩製である。

4は側面の形状が末端部にかけてすばまり、打面を水平にした場合、作業面は約60°ほどの角度をもって傾斜する。石核の打面は節理面を活用しているものと考えられる。表面にみられる作業面には、この打面から連続的に細石刃を作出した痕跡が明瞭に観察でき、剥離の方向はすべて同一方向である。裏面にみられる一枚の剥離のネガティブ面は、細石刃が作出された打面から打撃を加えているが、石核整形を目的として施された剥離であろう。

5は比較的大型の細石核であるが、厚みはない。細石刃を作出した痕跡は側縁の一部にみられ、わずか2回ほどの細石刃の作出で終了している。細石刃作出の打面には打面再生痕が顕著にみられ、打面再生を行いながら細石刃を作出していることが窺える。左側面にみられるように2枚の大きな剥離が存在するが、この剥離はネガティブ面であり、石核整形を意図して施された剥離によるものであることが窺える。作業面の変更を目的として行われたものと考えられるが、石核整形のみにとどまり、この後に細石刃を作出した痕跡はみられない。

6の細石核の表面には、極めて初期の段階の石核整形痕がみられる。部厚な剥片を素材とし、多面体の石核の作出を意図して多方向から剥離が加えられている。細石刃作出の打面は、細かい打面調整により平滑化されている。細石刃の作出はわずかであり、確認できるもので2条の剥離痕がみられるのみである。

7は横断面が四角形状を呈し、縦に長いため全体の形状は立方体となる。細石刃作出の打面にあたる石核の上下面は、いずれも一枚の剥離により作出されたもので、両極に打面をもつ石核であることがわかる。細石刃の作出はおもに下面に位置する打面から作出されており、打面再生後に上方の打面に移行し数回の剥離を行っている。下面の打面再生後に細石刃が作出されないのは、打面再生の結果、打面と作業面の角度が鋭角となったため、上面の打面に移行したのと考えられる。

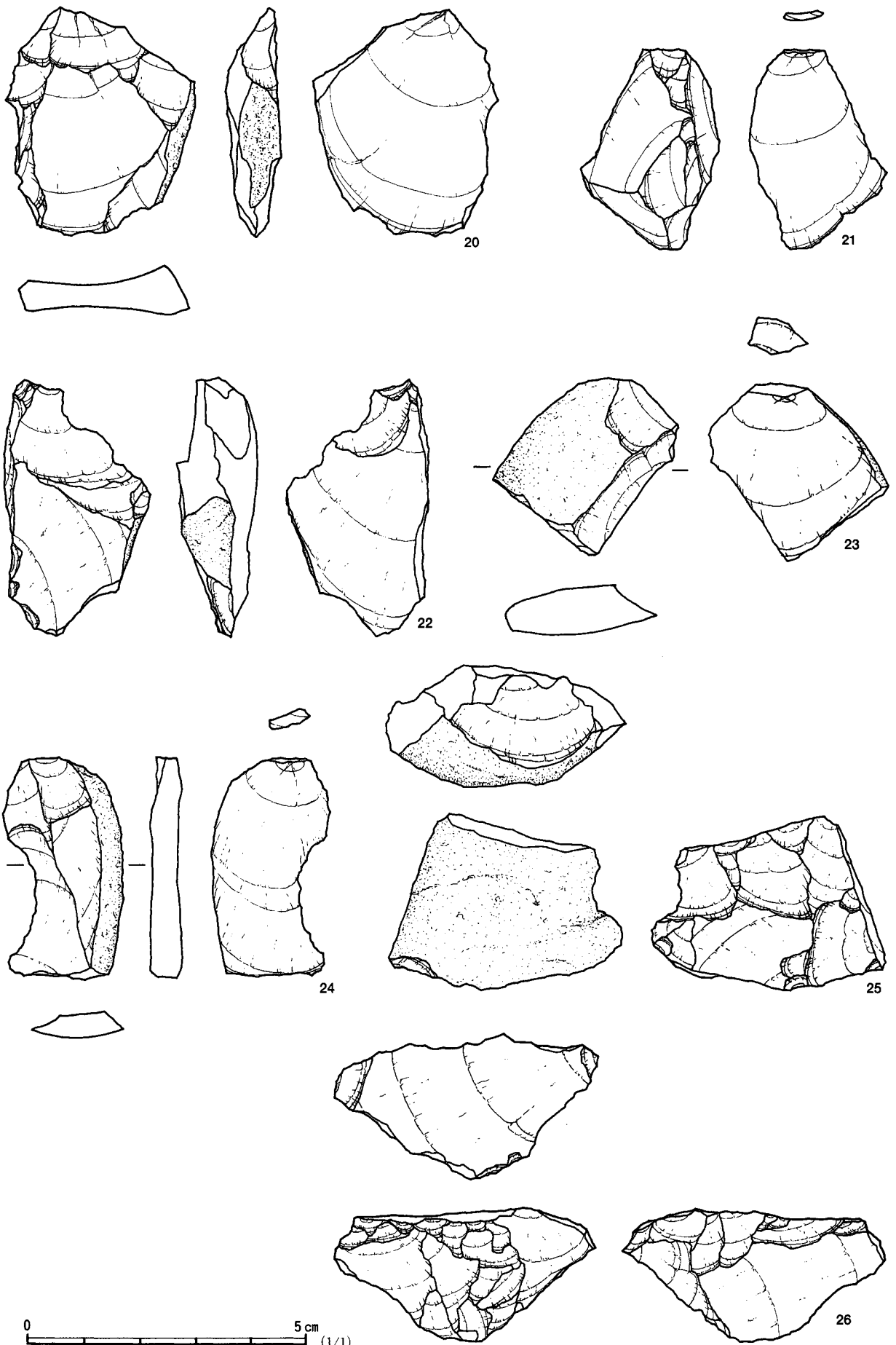
8は6と同様に、極めて初期段階の石核整形痕がみられる。部厚な剥片を素材とし、立方体を意識して石核整形を行っている。細石刃の作出は数回にとどまり、上面を打面とする2条の剥離痕が確認できるのみである。

9は扁平な形状を呈する細石核である。表面にみられる細石刃を作出した剥離痕は古い段階に作出されたものであり、新しい段階の剥離痕は正面左側縁に施された剥離である。しかしこの剥離は石核の形状によるものか寸足らずであり、細石刃としての形状を感じさせないものである。古い段階の剥離は、上面に施された打面再生を最後に終了している。再生された打面と作業面は鋭角となり、このため細石刃の作出を断念し、表面左側縁に作業面を移行したのと考えられる。

10の珪質頁岩製の細石核は、9と同様に扁平な形状を呈する。作業面は周縁部であるが、細石刃の作出よりも石核整形による剥離である感が強い。上面の周縁部にみられるように、微細な調整による打面再生が施される。古い段階の作業面の一部が左側面の上方に確認でき、2条の細石刃作出の痕跡がみられる。

11は黒曜石製の剥片である。表面には細石刃を作出した痕跡が明瞭に残る。細石刃作出時の剥離の方向は、この剥片の打面と同一方向のもの他に、末端部からの剥離が施されたものもみられ、石核は上下両端に打面をもつ細石核であることが窺える。この剥片の断面は台形状を呈し、細石核の作業面の再生を目的として作出された剥片と考えられる。

12は黒曜石製の調整痕の認められる剥片である。剥片の作出後に打面および片側縁に調整を施し、打面部は右側縁からの調整により除去される。右側縁の調整はすべて主要剥離面側から施されており、調整は比



第113図 第29ブロック出土遺物(4)

較的粗い調整である。調整部位の断面は鋭角となるが、刃部作出を目的としたものではなく、素材剥片の整形を目的として施された調整と考えられる。

13は部厚な剥片を素材とし、末端部を調整により除去した後に微細な調整を施している。さらに末端部の調整面から打面にむかい微細な調整を施す。その形状と、打面となる平坦な部位を作出していることから、細石核の作出を意図しているものと考えられる。打面および縁辺部には、剥落痕状の微細な調整が顕著に確認できる。

14は黒曜石製の剥片である。調整により作出された剥片ではなく、素材剥片作出を目的とした剥片剥離の段階に剥ぎ取られた剥片である。縦長剥片であるが、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定ではなく、頻繁に打面を転移してはいないが企画性はみられない。結果として縦長の形状となったものであろう。

15は珪質頁岩製の削器である。大型の部厚な剥片を素材とし、打面を広く設定して打撃を加え剥片を作出していることから、意図的に部厚な剥片を得ようとしていることが窺える。刃部は片側縁に作出されており、粗い剥離が主要剥離面側から施される。

16はメノウ製の調整痕の認められる剥片である。調整は打面部に対してのみ施され、微細な調整により打面を除去している。素材剥片の形状はやや縦長の剥片と考えられるが、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定ではなく、定型的な剥片を作出している感はない。

17は頁岩A製の剥片である。部厚な大型剥片であり、表面には原石面と剥片剥離時の剥離がみられる。この剥離の方向と剥片が作出された剥離の方向は同一であるため、剥片剥離の初期段階に作出された剥片であることが理解できる。打面は残存しないが、調整などにより除去されたものではなく、剥片剥離時に欠落したと考えられる。

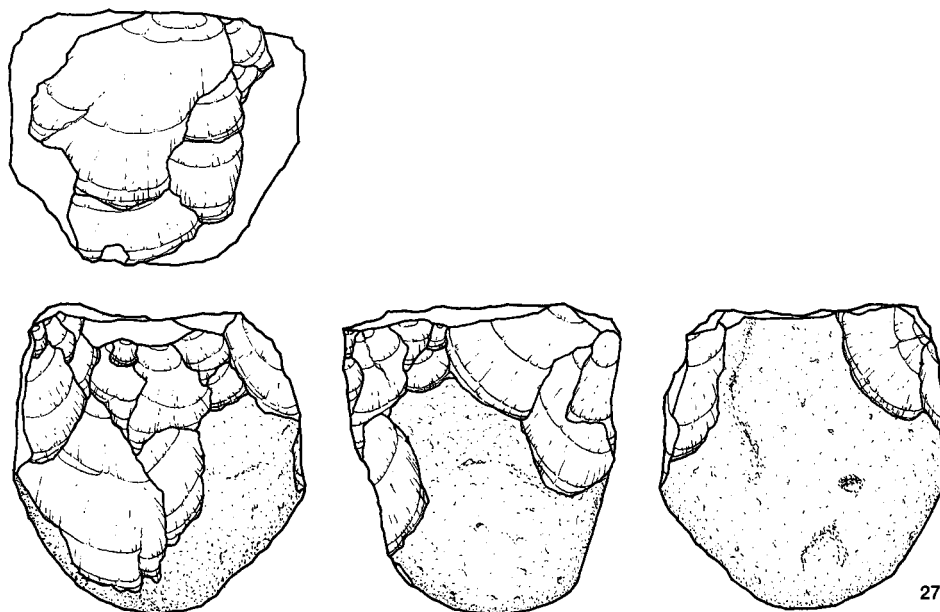
18は、頁岩A製の石核に打面再生剥片が接合したものである。石核はいびつではあるが円錐形状を呈し、上面の平坦面を打面として剥片を作出している。この打面以外からの剥離の痕跡もみられるが、石核整形を目的として施された剥離であると考えられ、素材剥片作出の際の打面は上面の平坦面のみであるといえる。接合した打面再生剥片は裏面側から打撃を加えられているが、他にも打面再生がなされた痕跡がみられ、この接合した打面再生剥片が作出された後も打面再生を行い、素材剥片を作出していることが窺える。

19は安山岩製の調整痕の認められる剥片である。素材剥片の打面付近と末端部に原石面がみられるため、原石の大きさはさほど大きくないものと考えられる。素材剥片の形状はやや縦長の剥片であり、調整は両側縁の表裏面に対して施されている。一見すると楔形石器にも類似する石器であるが、両側縁の調整は潰れたような剥離ではなく、整形を目的とした調整であると考えられる。

20～24は安山岩製の剥片である。安山岩製の剥片は、第29ブロックで出土する他の石材の剥片と比較すると全体に大型であるといえる。原石面を有するものが大半を占め、剥片が作出された母岩の形状は、拳大を越えない円礫もしくは楕円礫であり、点数的に2個体ほどであると考えられる。剥片は概して縦長剥片であるが、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は一定せず、定型的な剥片の作出を意図しているとは考えられない。

25～27は安山岩製の石核である。27を除く2点は、大型の剥片から剥片を作出した剥片利用石核と考えられる。

25の表面はほぼ原石面で占められ、裏面の一部に素材剥片の主要剥離面がみられる。剥片剥離の初期段階



0 5 cm (1/1)

第114図 第29ブロック出土遺物(5)

第57表 第29ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第110図	1	7 E-83, 7	細石刃	黒曜石	2.00	0.67	0.20	0.18	
	2	7 E-64, 4	細石刃	黒曜石	1.84	0.65	0.11	0.17	
	3	7 E-74, 3	細石刃	黒曜石	1.73	0.42	0.60	0.09	
	4	7 E-76, 3	細石核	黒曜石	1.70	1.30	1.41	3.35	単設打面
	5	7 E-92, 1	細石核	黒曜石	2.04	2.64	1.37	6.10	単設打面
	6	7 E-84, 22	細石核	黒曜石	1.60	2.00	1.61	5.35	単設打面、打面再生顕著
	7	7 E-75, 25	細石核	黒曜石	2.30	1.50	1.35	5.47	両設打面
	8	7 E-94, 13	細石核	黒曜石	2.24	1.60	1.24	4.96	単設打面
第111図	9	7 E-85, 2	細石核	黒曜石	2.60	2.10	1.20	5.20	頻繁に打面転移
	10	7 E-75, 19	細石核	珪質頁岩	2.30	2.80	2.60	5.63	打面再生顕著
	11	7 E-75, 22	細石核	黒曜石	2.50	1.26	0.51	1.40	両設打面
	12	7 E-84, 10	調整痕ある剥片	黒曜石	2.25	1.74	0.68	1.98	主要剥離両側から調整
	13	7 E-84, 13	調整痕ある剥片	黒曜石	2.65	2.18	1.10	5.52	折断面から微細な調整
	14	7 E-84, 5	剥片	黒曜石	3.00	1.35	0.58	3.27	
第112図	15	7 E-85, 11	削器	珪質頁岩	4.05	3.17	1.61	23.60	片側縁に刃部作出
	16	7 E-84, 24	調整痕ある剥片	メノウ	2.97	3.02	0.91	7.28	打面除去
	17	7 E-63, 4	剥片	頁岩A	4.35	3.40	1.35	18.54	
	18	7 E-75, 19	石核	頁岩A	2.30	2.80	2.60	16.12	
	19	7 E-64, 7	調整痕ある剥片	安山岩	2.43	3.77	1.16	10.24	剥片両側縁から調整
第113図	20	7 E-92, 4	削器	安山岩	3.70	3.75	0.95	13.72	片側縁に刃部作出
	21	7 E-72, 2	剥片	安山岩	3.64	2.45	0.78	5.25	
	22	7 E-92, 2	調整痕ある剥片	安山岩	4.10	2.60	1.40	14.05	打面除去
	23	7 E-75, 7	剥片	安山岩	3.10	3.40	1.66	16.90	
	24	7 E-93, 1	剥片	安山岩	3.88	2.17	0.52	5.23	
	25	7 E-64, 5	石核	安山岩	2.96	4.10	2.10	28.78	
	26	7 E-84, 20	石核	安山岩	4.70	2.60	2.25	19.43	
第114図	27	7 E-85, 4	石核	安山岩	3.90	3.90	3.37	70.15	

に、母岩を打割るように作出された部厚な剥片から、さらに剥片を作出したものである。剥片剥離は主要剥離面側のみに対して行われ、末端部と側縁の平坦面を打面として剥片を作出している。

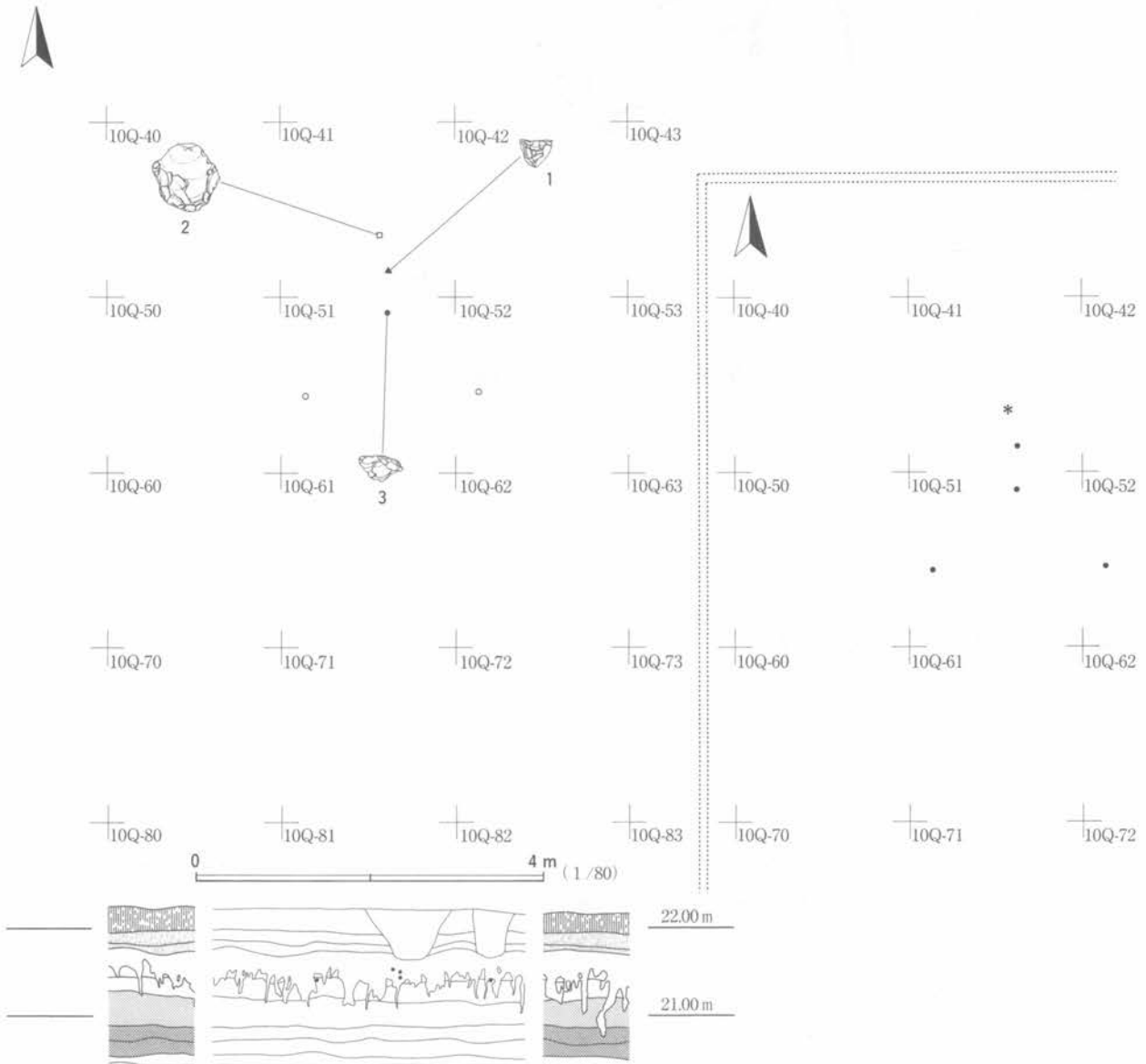
26は部厚な剥片の主要剥離面を打面とし、表面側にむかって剥片剥離を行ったものである。黒曜石製の細石刃の作出と類似した剥片剥離であるが、作出された剥片は小型の不定形剥片である。

27は円礫の一部を打割し、打割面を打面として、原石面を削ぐように剥片剥離を行った痕跡がみられる。石核整形、打面再生が行われた痕跡はなく、打面作出から剥片剥離の1工程で終了している。

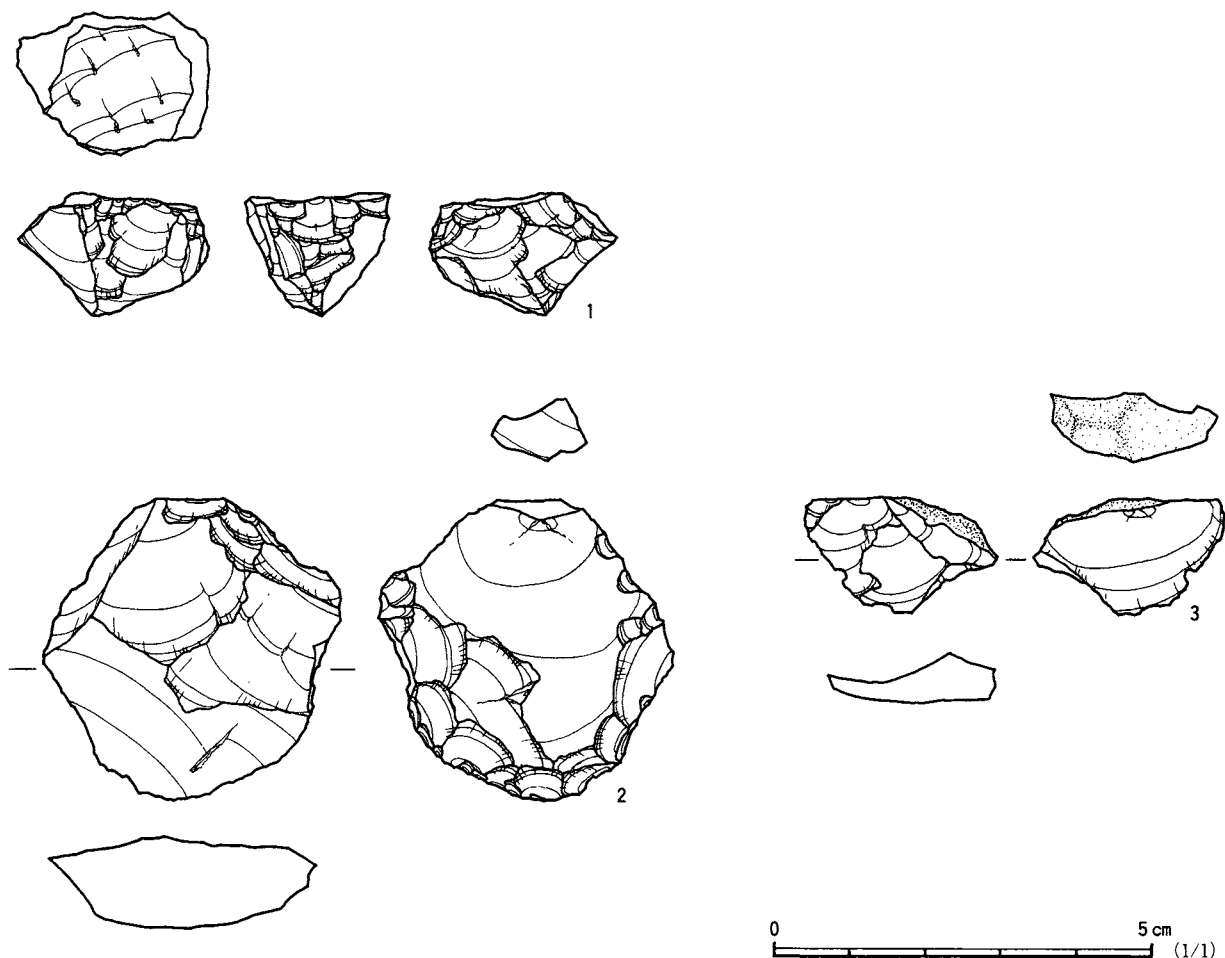
第30ブロック（第115・116図 第58・59表 図版15・43）

第30ブロックは、調査区東側、台地平坦部が緩斜面に移行する直前の、標高22m付近に位置する。

遺跡の所在する台地は、南の谷にむかい徐々に標高を下げるが、台地の西側と東側には小支谷が台地に深く入り込むため、台地は南に延びる舌状台地となる。一本桜南遺跡で検出したそれぞれのブロックは、西側の小支谷、または南側の支谷を臨む位置に所在する傾向がみられるが、第30ブロックは東側の小支谷を臨む位置に所在する。同一文化層に属する他の2ブロックとは距離を置くため、立地条件という観点か



第115図 第30ブロック器種別・石材別石器分布図



第116図 第30ブロック出土遺物

第58表 第30ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 器	角錐状 形器	擡 器	削 器	ピリス・ ヌキ	彫刻刀 形石器	削片	R・ フリヤ	U・ フリヤ	剥片	砕片	剥 利 石	片 用 核	石核	石斧	敲石	礫	計
黒曜石	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	4
	-	-	20.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20.0%	40.0%	-	-	-	-	-	-	80.0%
メノウ	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
	-	-	-	-	-	-	-	20.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	20.0%
計	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	5
	-	-	20.0%	-	-	-	-	20.0%	-	-	-	-	-	20.0%	40.0%	-	-	-	-	-	-	100.0%

第59表 第30ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第116図 1	10Q-41, 2	細石核	黒曜石	1.65	2.55	1.81	6.32	
2	10Q-41, 1	削器	メノウ	3.60	3.88	1.26	21.43	主要剥離面側の全周に刃部作出
3	10Q-51, 1	剥片	黒曜石	1.52	2.60	0.90	2.45	

らは異なる様相を呈している感がある。第30ブロックの北側には台地平坦部が続き、調査対象地外であるが、同様の細石刃を作出するブロックが連続する可能性も考えられる。

ブロックの規模は小さく、計5点の石器が2mの範囲に分布している。石器の出土層位はⅡc層の直下からⅢ層にかけてである。

出土した石器5点のうち4点が黒曜石製であり、メノウ製の石器が1点のみ出土している。黒曜石製の

石器は点数的に少数なため剥片剥離の形跡は明確ではないが、細石核1点を含む。細石刃の出土はみられなかった。メノウ製の石器は、大型の剥片の側縁に調整を施した削器であり、製品としての搬入品と考えられる。

出土遺物

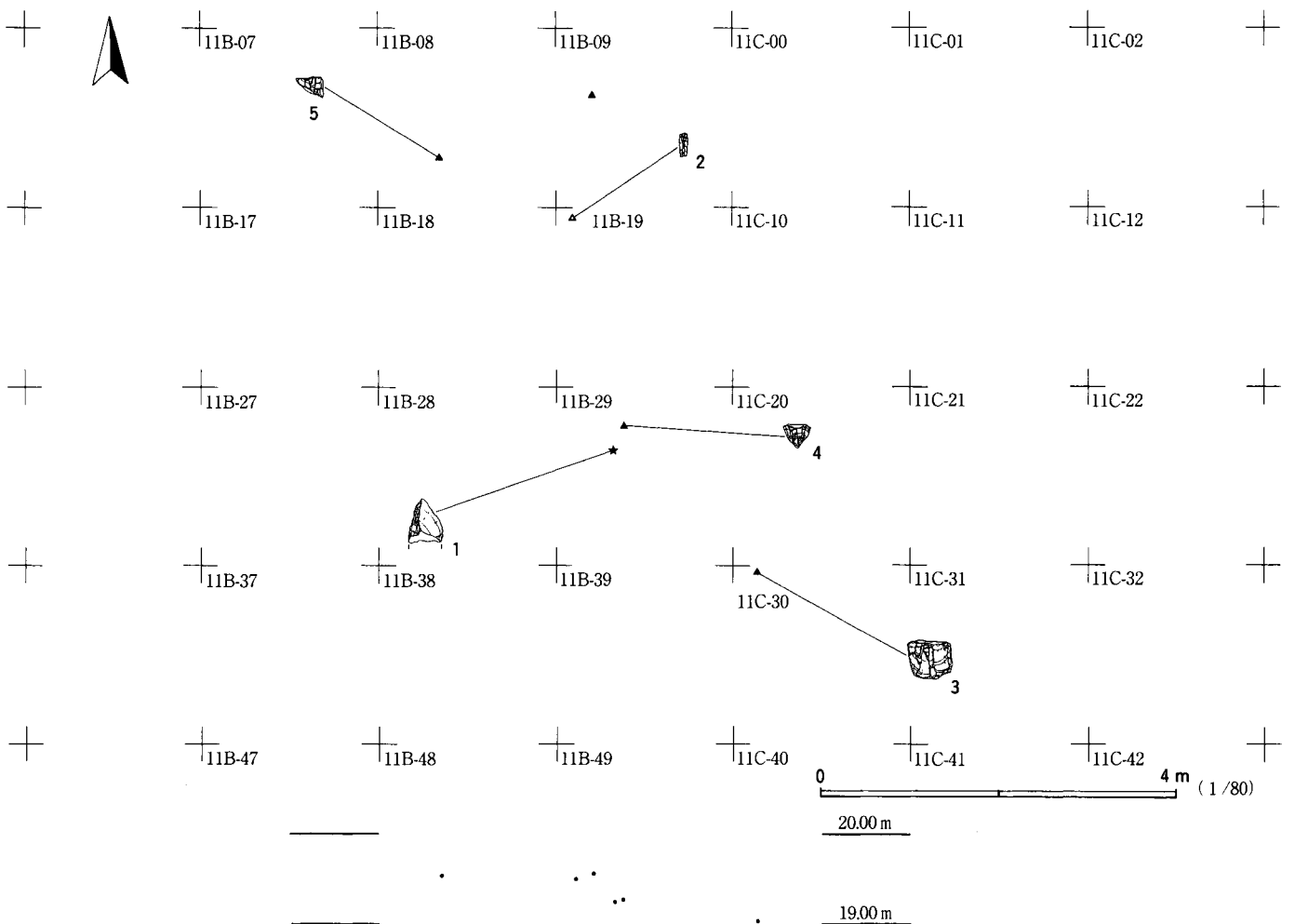
1は黒曜石製の細石核である。大型の部厚な剥片を素材とし、調整を施し細石核としたものである。いびつではあるが円錐形に近い形状であり、素材剥片の主要剥離面を打面とし細石刃を作出している。打面再生が行われた痕跡はまったくみられない。

2はメノウ製の削器である。大型の部厚な不定形剥片を素材とし、刃部作出の調整は正面側から主要剥離面側にむかって施される。調整は大きな剥離である程度の刃部整形を行い、さらに細調整により仕上げられ、密に丁寧に行われている。表面側には調整はまったくみられず、打面付近にみられる微細な剥離は素材剥片作出の際の剥片剥離によるものである。

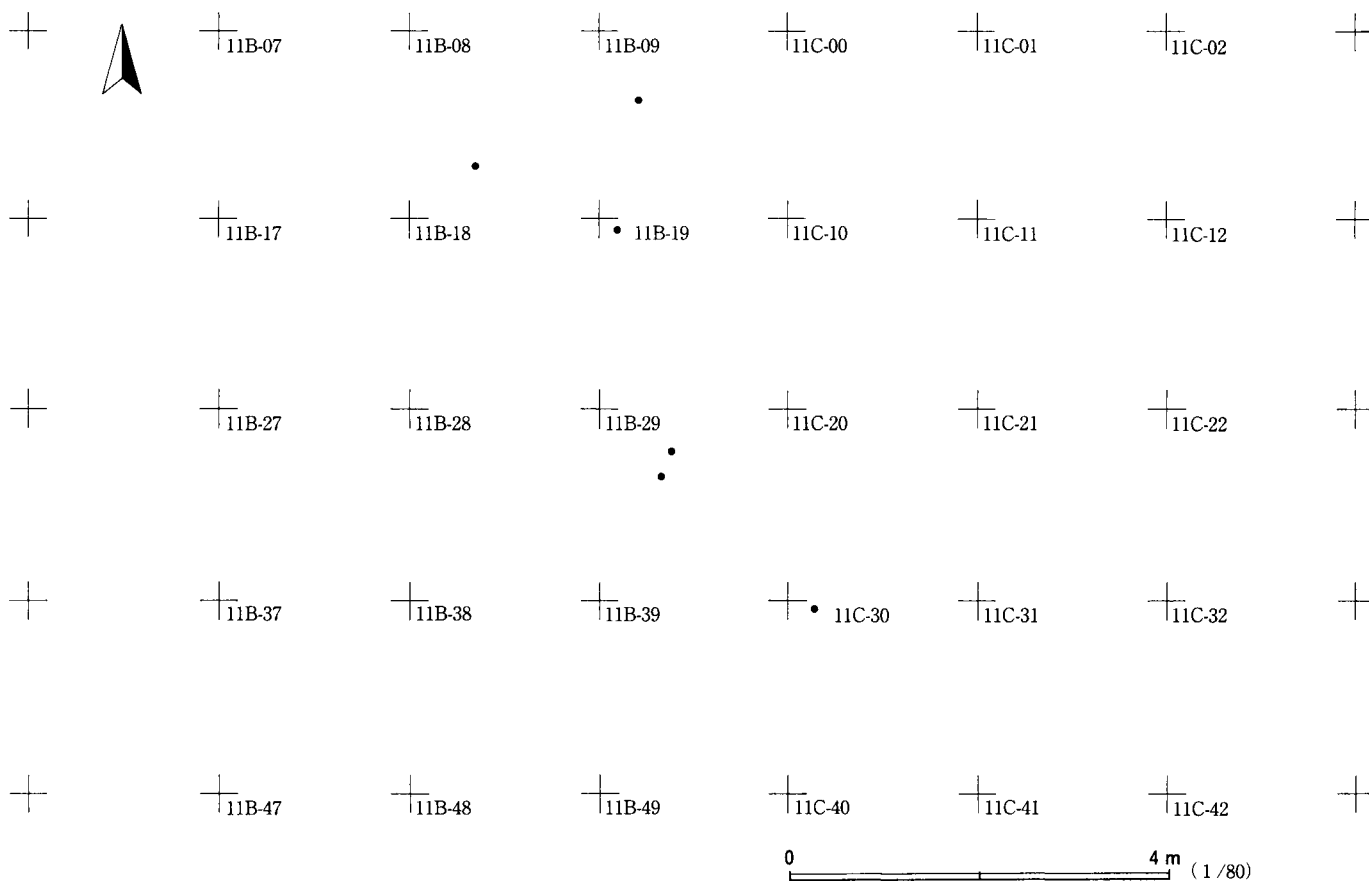
3は黒曜石製の剥片である。原石面を打面とし作出された剥片である。その形状から素材剥片とは考え難く、明確な剥片剥離の形跡はみられないものの、剥片剥離の際に作出され遺棄されたものと考えられる。

第31ブロック (第117~119図 第60・61表 図版43)

第31ブロックは、調査区の西側、緩斜面部が谷にむかい急激に傾斜を増す直前に位置し、検出した旧石器



第117図 第31ブロック器種別石器分布図



第118図 第31ブロック石材別石器分布図

第60表 第31ブロック石器組成表

器種 石材	ナイフ 形石器	尖頭器	細石核	細石刃	台 形 石 器	角錐状 石 器	撞 器	削 器	ビニ ス・ エト コ	彫刻刀 形石器	削 片	R・ フリ ク	U・ フリ ク	剥 片	碎 片	剥 利 石 核	石 核	石 斧	敲 石	礫	計
黒曜石	1 25.0%	-	2 50.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 25.0%	-	-	-	-	-	4 100.0%
計	1 25.0%	-	2 50.0%	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1 25.0%	-	-	-	-	-	4 100.0%

時代ブロック31地点のうち最も標高の低い位置に所在する。標高は20mほどを測る。遺物の出土層位はソフトローム層の上部である。

遺物は長径6m、短径3mの長楕円形状に分布するが、出土点数は総計6点と少なく、分布密度は極めて低くまばらであるといえる。

出土した石器の石質はすべて黒曜石であり、細石核3点と細石刃1点、細石核の打面再生あるいは石核整形の際に作出されたと考えられる碎片が1点出土する。また片側縁に調整を施したナイフ形石器の先端部が1点伴う。細石刃の作出を技術基盤にもつブロックにナイフ形石器が伴うかどうか疑問は残るが、使用される黒曜石の、直視的な観察による差異は認められず、同一母岩から作出された石器である可能性が高い。ナイフ形石器は先端部のみ残存するため、全体の形状は不明であり、あるいはナイフ形石器以外の器種である可能性も考えられる。

第31ブロックからは細石刃作出に伴う石器のみ出土しており、石器素材剥片の作出に伴う剥片、碎片などは皆無である。よって第31ブロックは完成した細石核の搬入と、細石核からの細石刃作出により形成されたブロックであると考えられる。

出土遺物

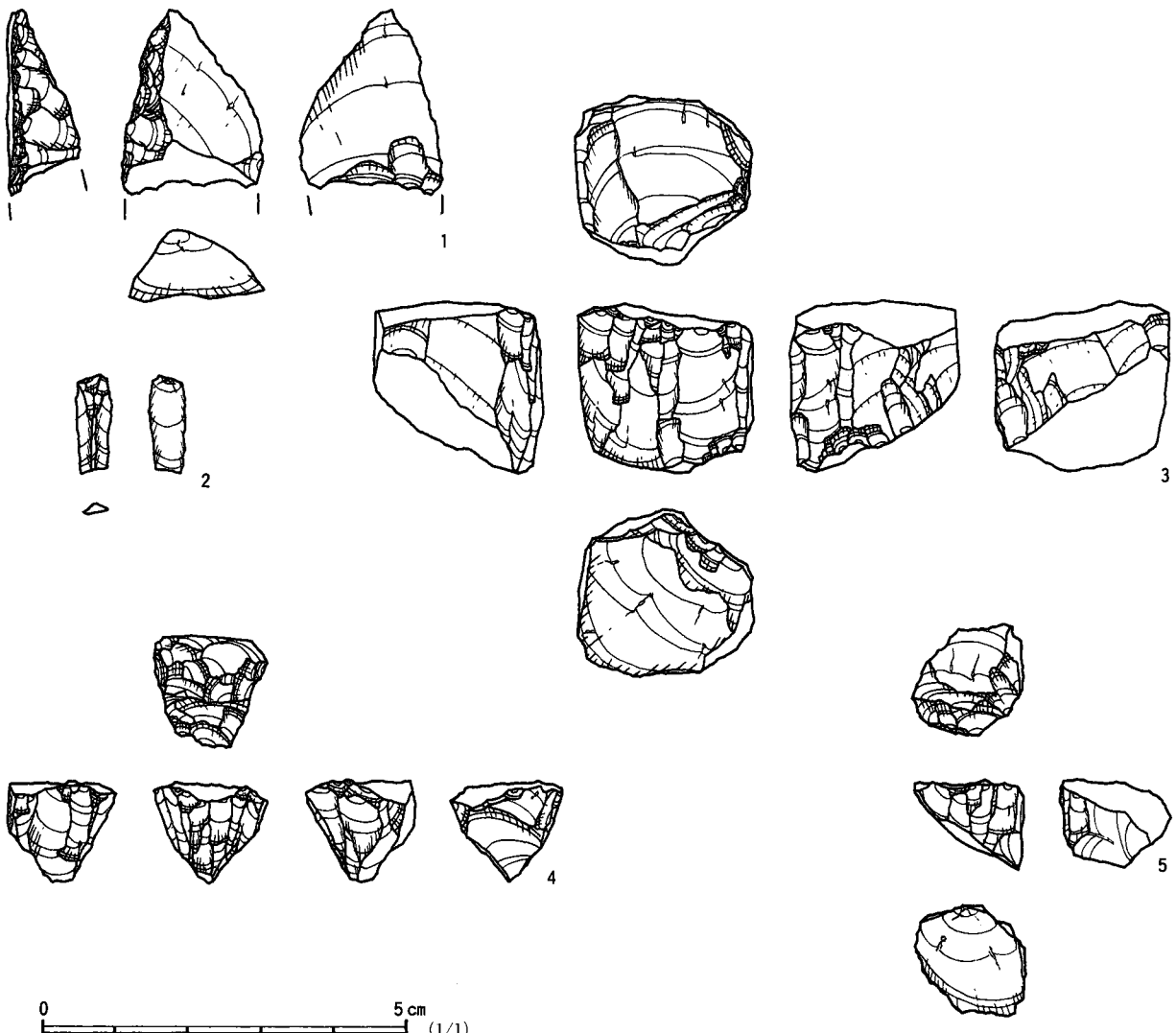
1はナイフ形石器である。先端部のみが残存であり、全体の形状は不明である。部厚な縦長剥片を素材として考えられ、素材剥片の末端部側を先端部として設定し、片側縁に主要剥離面側から調整を施したものである。

前述したとおり、細石刃にナイフ形石器が伴うかどうか疑問であるが、この石器に施される調整は、ナイフ形石器に施されるブランディングとは若干異なり、調整部位の断面は90°ではなく57°ほどの角度であり、ブランディングと比較すると鋭角となる感がある。ここではナイフ形石器として扱ったが、削器等の他の石器となる可能性もある。

2は細石刃である。末端部が欠損しているため現存する長さは13mmであるが、作出された当時は20mmほどの長さであったものと考えられる。表面にみられる細石刃の痕跡はすべて同一方向からであり、同一打面から連続的に作出された細石刃の一つであることが理解できる。

3～5は細石核である。

3は大型の細石核であり、表面には上下両端から細石刃を作出した痕跡が明瞭に窺える。下面からの細石刃の作出が後に行われているため、上面から細石刃を作出した後に下面の打面再生を行い、細石刃を作出



第119図 第31ブロック出土遺物

第61表 第31ブロック石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第119図 1	11B-29, 2	ナイフ形石器	黒曜石	2.50	1.96	0.92	2.86	基部欠損。
2	10D-40, 1	細石刃	黒曜石	1.30	0.50	0.15	0.11	
3	11C-30, 1	細石核	黒曜石	2.35	2.50	2.23	14.68	
4	11B-29, 1	細石核	黒曜石	1.30	1.60	1.43	2.70	
5	10C-08, 1	細石核	黒曜石	1.60	1.70	1.00	2.09	

したものと考えられる。下面の打面には一枚の大きな打面再生痕の他に微細な打面再生痕もみられ、打面再生を丁寧に行っていることが理解できる。

4は四角錐を呈する形状である。細石刃の作出は上面に位置する打面からすべて行われており、裏面にみられる下方からの剥離は、細石刃の作出を意図したものではなく、石核整形を目的とした剥離であろう。打面は微細な剥離により打面再生が施され、1と同様に密に丁寧に打面再生を行っていることが理解できる。

5は下面にみられるように、剥離のポジティブ面が残ることから、細石核から細石刃を作出する過程で行われた打面再生の剥片と考えられる。この打面再生剥片が作出される以前の細石核の形状は、大きさに違いはあるが、3の細石核と同様の形状と考えられる。3・4の細石核と同様に、打面再生は微細な剥離により丁寧に行われている。

(11) その他の遺物 (第120・121図 第62表 図版44・45)

一本桜遺跡の調査では、合計31地点の石器集中地点が検出されたが、このほかにブロックを形成せず、単独で出土した石器も数多くみられた。

これらのなかには、前述した各文化層の石器群で使用される石材と類似するものもみられるが、出土位置や各文化層を特徴づける主要な石器とは異なるなどの問題から、各ブロックに帰属させずにあくまで単独出土として扱いたい。

1は安山岩製の有舌尖頭器である。色調は表面は茶色がかった淡黄褐色を呈し、基部の欠損面は黒色を呈する。基部の一部が欠損している。部厚な剥片を素材とし、調整は全面にわたる。

2・3は槍先形尖頭器である。

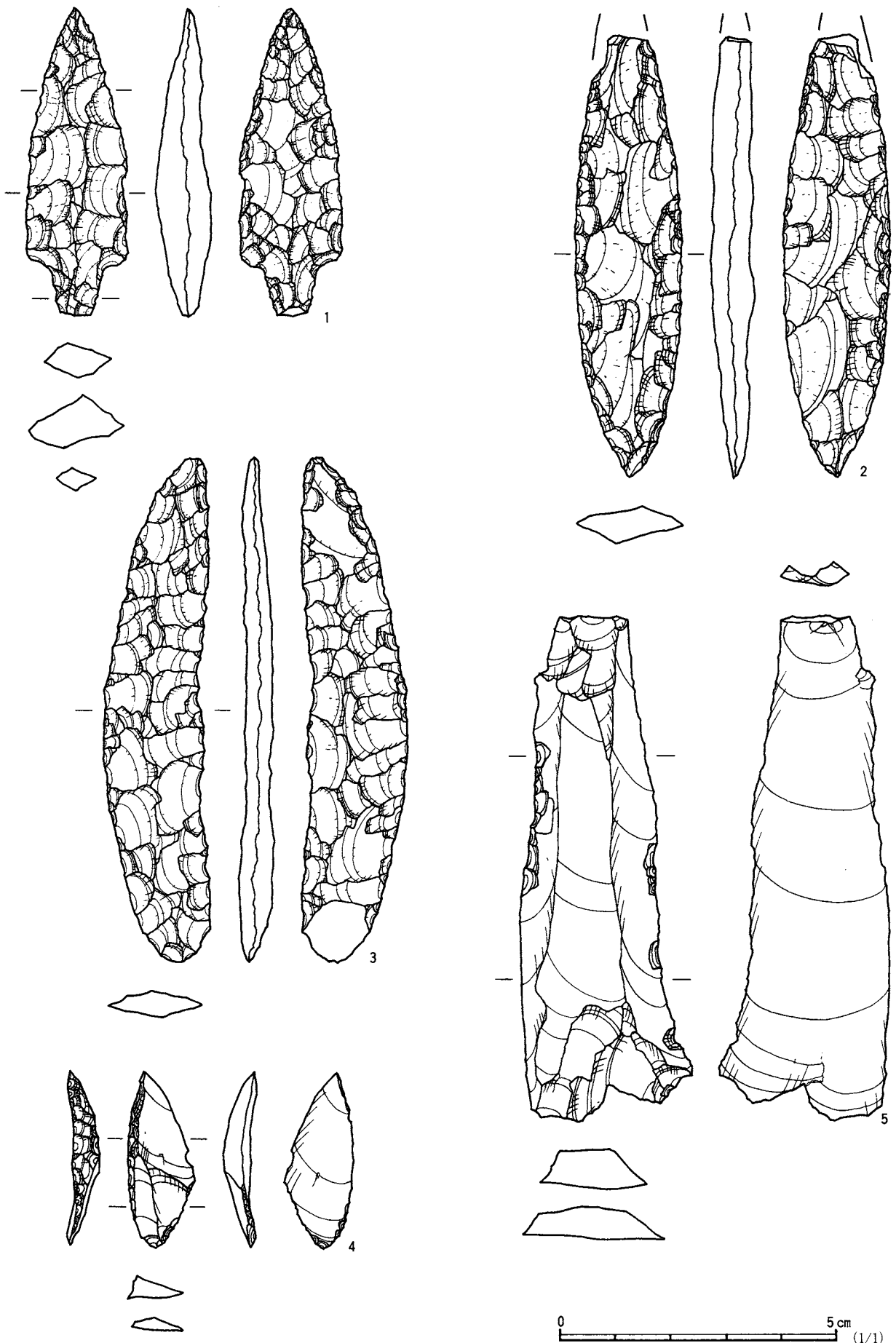
2は変成岩製で色調は暗灰色。全面に調整を施し製品としている。先端部が欠損する。

3は凝灰岩製で、全体に湾曲した形状である。表面は粉をふいたような白色を呈する。薄い作りで、裏面に残る主要剥離面の状況から縦長の大型剥片を素材としていることが窺える。Ⅶ層に属する第7ブロックと出土位置および出土層位は同じであるが、石材がまったく異なり、なおかつⅦ層に属するブロックを特徴づける石器とは考えられないため、第7ブロックとは別とし単独出土として扱った。

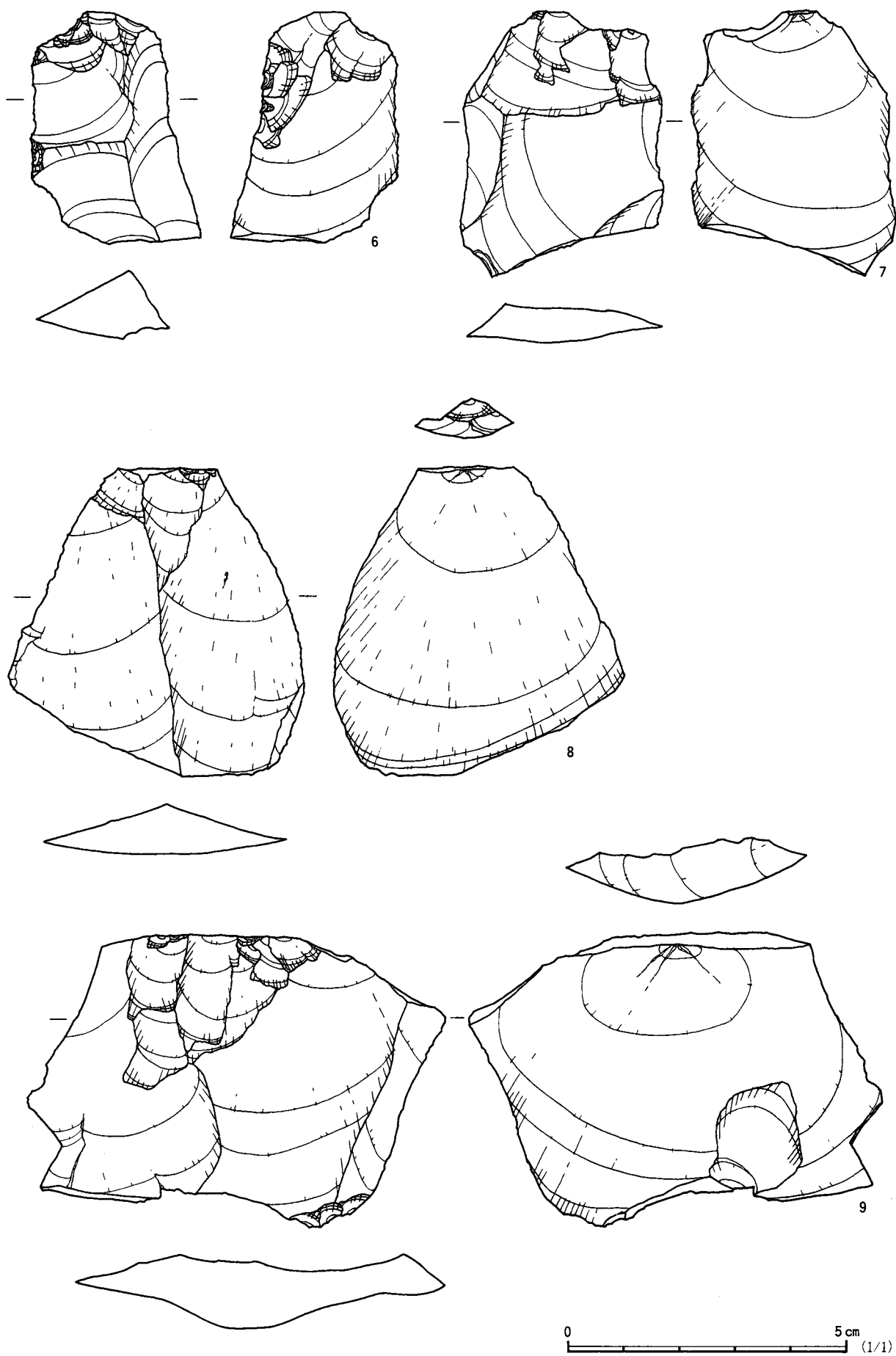
4は頁岩製のナイフ形石器である。明褐色を呈する。小型の縦長剥片を素材とし、調整は両側縁に施される。

5・6は調整痕の認められる剥片である。

5はメノウ製の剥片の両側縁に微細な調整が認められる。表面にみられる剥片剥離時の剥離のようすから、同一方向の打面から連続的に作出されたものである。色調はおおむね半透明で、所々にオレンジ色の節理状のか所がみられる。



第120図 ブロック外出土遺物(1)



第121図 ブロック外出土遺物(2)

第62表 ブロック外石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第120図	1	16P-83, 1	有舌尖頭器	安山岩	5.61	1.75	0.95	8.48	基部の一部欠損。
	2	15K-07,	槍先形尖頭器	変成岩	7.92	1.96	0.75	13.21	先端部欠損。
	3	12N-15, 1	槍先形尖頭器	凝灰岩	9.00	2.23	0.54	9.21	基部の一部欠損。
	4	10J-09, 1	ナイフ形石器	頁岩	3.20	1.22	0.48	1.30	二側縁加工。
	5	8L-00, 1	調整痕ある剥片	メノウ	10.06	3.13	0.81	22.81	両側縁に調整痕。
第121図	6	14K-57, 1	調整痕ある剥片	頁岩	3.90	4.10	1.61	14.35	片側縁主要剥離面側に調整痕。
	7	9C-1	剥片	頁岩	4.82	3.74	0.75	12.83	
	8	9F-2	剥片	安山岩	5.49	5.32	0.91	25.21	
	9	10K-2	剥片	頁岩	5.27	7.51	1.33	39.44	

6は淡褐色を呈する頁岩製であり、部厚な剥片の主要剥離面に調整を加えたものである。調整箇所断面はもとの剥離の形状を大きく変えようとする意図が窺われ、刃部作出のための調整ではない。

7～9は剥片である。

7・9は褐色を呈する頁岩製で、時期的に差のないものと思われる。9の剥片は大型であり、表面にみられる剥片剥離時の剥離の方向が主要剥離面と同一の方向である。剥片剥離工程の初期の段階に作出された剥片と思われる。頭部調整痕が顕著にみられる。

8は安山岩製の剥片であり、器表面の色調は灰色を呈する。

2 縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡3軒、炉穴16基、陥穴6基である。竪穴住居跡と炉穴は舌状台地の縁辺部に検出され、陥穴は舌状台地の中央部付近に検出された。

(1) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、調査区南東部の舌状台地縁辺部に位置し、浅い谷を挟んで3軒検出された。

099号住居跡（第123図 図版46・47）

遺構 調査区南東端部、南側に台地斜面、西側に浅い谷を望む平坦面に位置する。1軒単独で検出された。平面形は円形である。規模は径3.32mで、検出面からの深さは0.09mである。柱穴は4か所と思われる。平面形は円形で、径0.3m～0.34m、床面からの深さは0.2m～0.25mである。床面は平坦で、西側2柱穴の間に焼土の散布が検出された。径0.2mの円形の範囲である。床面の焼土化が確認されなかったため、炉跡ではないと考えられる。西側及び北側2柱穴間にピットが検出された。平面形は円形で、径0.2m～0.25mである。住居跡中央部に貼床部分があり、やや堅く踏み固められている。

遺物 遺物の出土は少量である。縄文時代早期燃糸文土器が出土している。

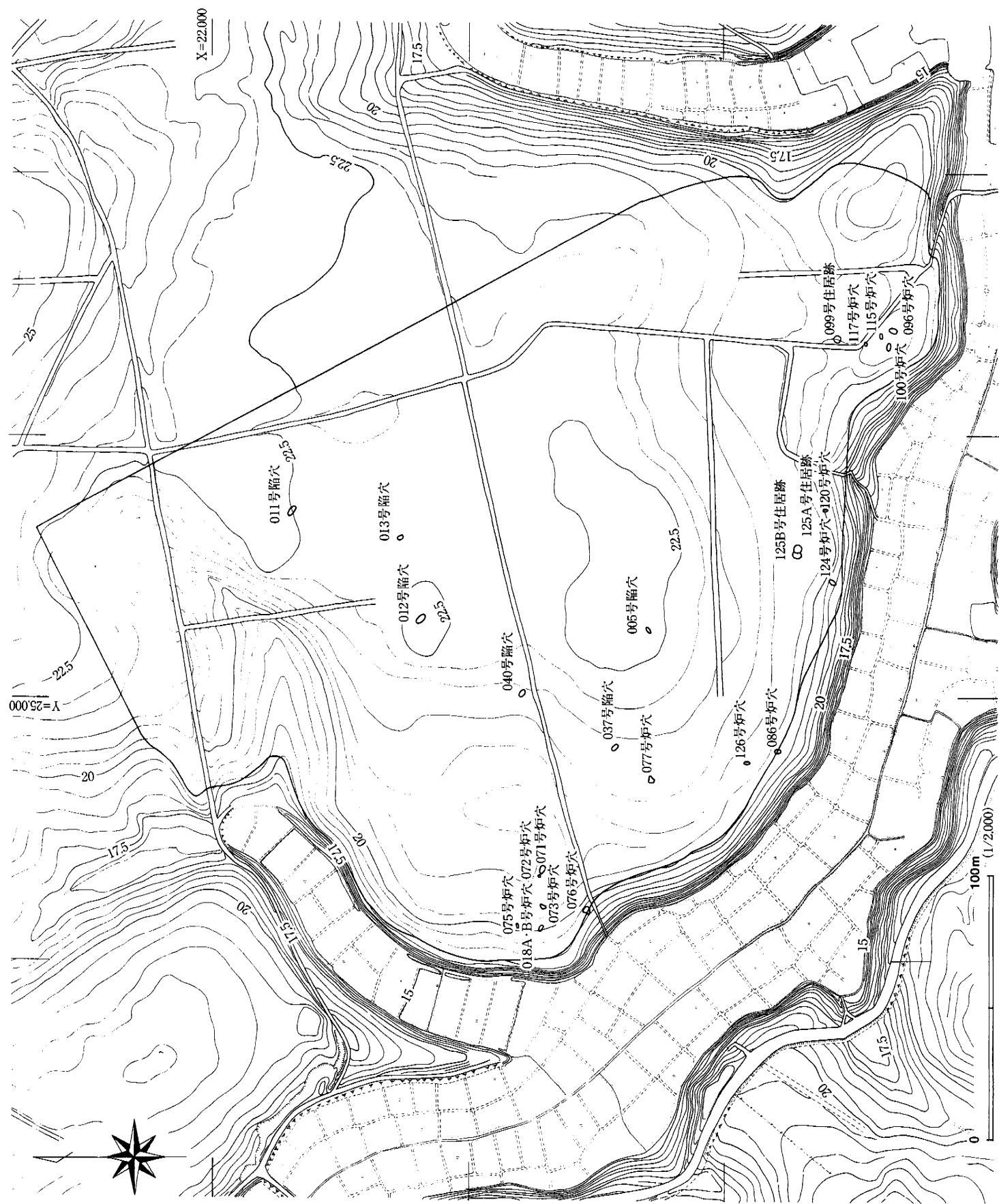
1は深鉢形土器のやや丸く肥厚した口縁部片である。器面に間隔が開いた縦位のL燃糸文が施される。色調は明褐色で、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良い。2は深鉢形土器の胴部片である。器面にやや間隔が開いた縦位のL燃糸文が施される。色調は暗赤褐色で、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良い。3は深鉢形土器の底部付近の破片である。無文で、尖底になると思われる。色調は褐色で、胎土は砂粒を多く含み、繊維を含む。焼成は良い。これらは稲荷台式に属すると考えられる。

125A号住居跡（第124・125図 図版46・47）

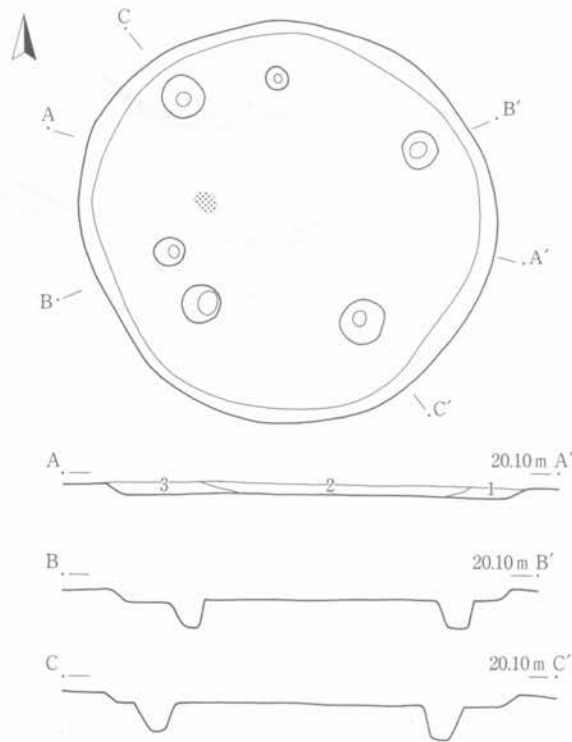
遺構 調査区南端部、南側に台地斜面を望む平坦面に位置する。125B号住居跡との重複で、土層断面から本住居跡が新しい。平面形は円形である。規模は径3.33mで、検出面からの深さは0.13mである。柱穴は8か所と思われる。壁に沿ってほぼ円形に配置される。掘り込みは浅いが配置から柱穴とした。平面形は円形で、径は、径0.25m～0.4m、床面からの深さは0.1m～0.2mである。床面は平坦で、炉跡、ピットは検出されなかった。柱穴は間隔から、図のような所属になると考えられる。

遺物 縄文時代早期の土器が出土している。

1～3は深鉢形土器の口縁部である。1・2は口縁がやや内弯し、刻み目が施される。器面に貝殻腹縁圧痕文が施され、内面にはヘラミガキが施される。色調は淡明褐色で、胎土は細砂粒を少量含む。焼成は良い。3は口縁が丸く、器面に貝殻腹縁圧痕文が施される。色調は褐色で、胎土は砂粒を多く含み、繊維を含む。焼成は良い。4は器面に沈線及び貝殻腹縁圧痕文が施される。内面は平滑である。色調は明橙褐色で、胎土は細砂粒を多く含み、繊維を含む。焼成は良い。5は器面に沈線文が施される。内面は平滑である。色調は灰褐色で、胎土は細砂粒を多く含み、繊維を微量含む。焼成は良い。6・7は口縁部付近の破片である。器面に山形沈線文が施される。内面にはヘラミガキが施される。8・9は器面に山形沈線文が施され、内面は平滑である。6～9の色調は明橙褐色で、胎土は細砂粒を多く含み、繊維を微量含む。焼成は良い。10・12～14は内外面に条痕文が施される。11は外面に条痕文が施され、内面には無い。色調は10・11が淡明



第122図 縄文時代遺構分布図



- 099
 1 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
 2 黒褐色土層
 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)



099号住居跡実測図



099号住居跡出土遺物

第123図 099号住居跡実測図及び出土遺物

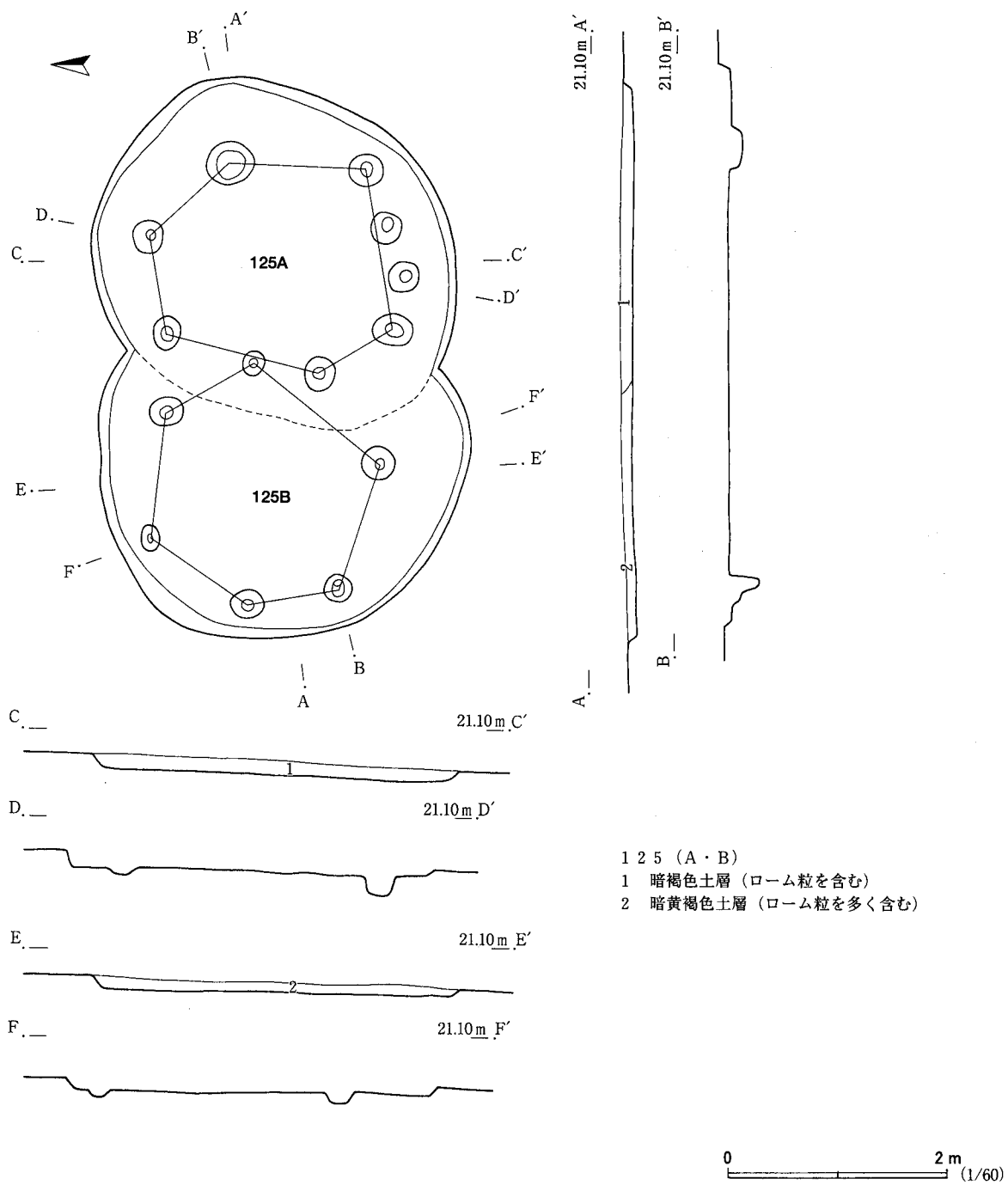
褐色、12・14が暗灰褐色、13が淡褐色である。胎土に繊維を含む。

1～9は田戸上層式、10～14は茅山式に属すると考えられる。

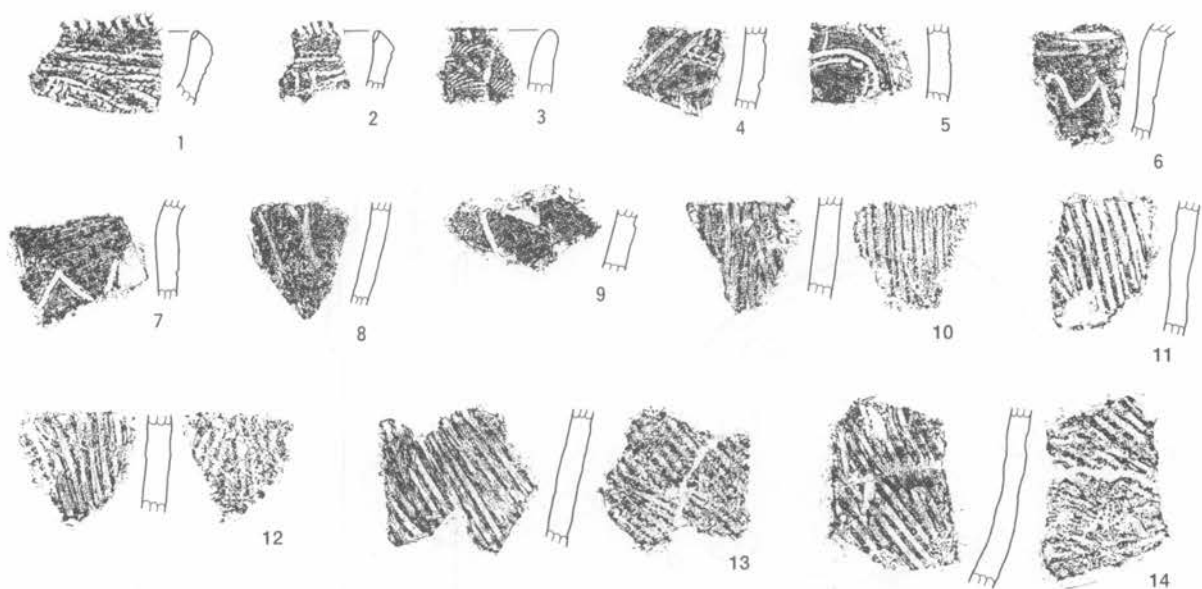
125B号住居跡 (第124・125図 図版46・47)

遺構 調査区南端部、南側に台地斜面を望む平坦面に位置する。125A号住居跡との重複で、土層断面から本住居跡が古い。平面形は円形である。規模は径3.46mで、検出面からの深さは0.13mである。柱穴は6か所と思われる。壁に沿ってほぼ等間隔に配置される。掘り込みは浅いが、配置から柱穴とした。平面形はほぼ円形で、径は、径0.2m～0.3m、床面からの深さは約0.1mである。床面は平坦で、炉跡、ピットは検出されなかった。柱穴は間隔から、図のような所属になるとと思われる。

遺物 縄文時代早期の土器が出土している。



第124図 125A・125B号住居跡実測図



125A号住居跡出土遺物



125B号住居出土遺物

第125図 125A・125B号住居跡出土遺物

1～5は深鉢形土器の胴部片である。1・2は器面にやや間隔が開いた縦位のR捺糸文が施される。内面にはナデが施される。色調は1が淡明褐色、2が淡橙褐色である。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良い。3～5は器面に貝殻圧痕文が施される。内面はナデが施され、滑らかである。色調は明橙褐色で、胎土は砂粒を多く含み、繊維を含む。焼成は良い。

1・2は稲荷台式、3～5は田戸上層式に属すると考えられる。

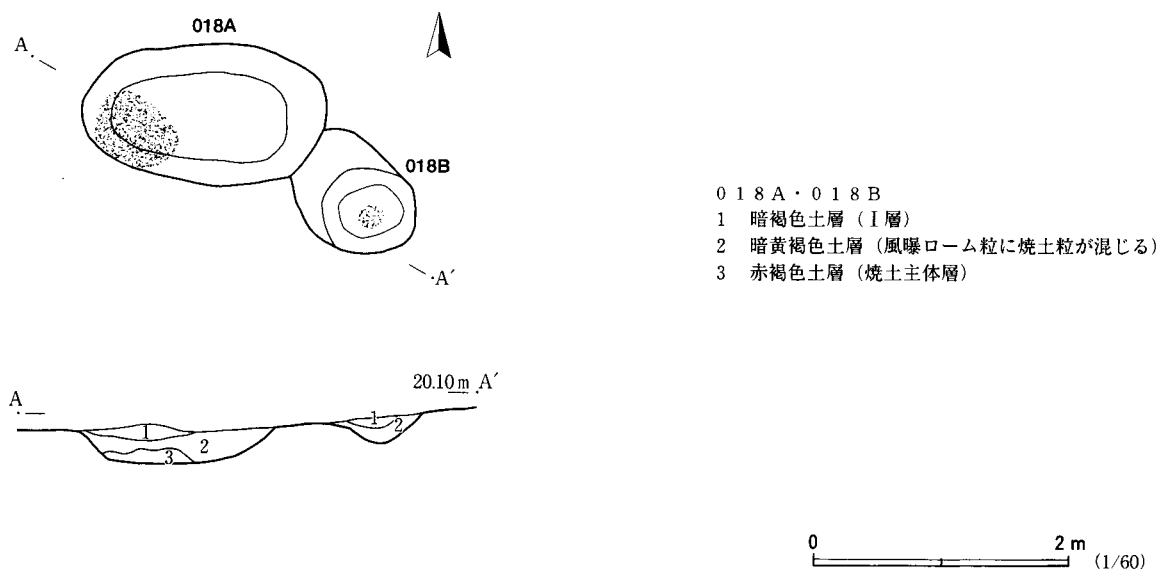
(2) 炉 穴

炉跡は16基検出され、舌状台地西部から南部の縁辺部に分布する。

018A号炉穴（第126図 図版48）

遺構 調査区西端部に位置している。018B号炉穴と重複しているが、重複部分がわずかであるので、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は1.9m×1.13m、検出面からの深さは0.3mである。火床部は長軸の西端部に検出された。楕円形で、規模は0.7m×0.53mである。縄文時代早期条痕文系土器が少量出土している。

遺物 遺物は細片のため図示できなかった。



第126図 018A・018B号炉穴実測図

018B号炉穴 (第126図 図版48)

遺構 調査区西端部に位置している。018A号炉穴と重複しているが、重複部分がわずかであるので、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、規模は1.1m×0.85m、検出面からの深さは0.2mである。火床部は長軸の東端部に検出された。楕円形で、規模は0.3m×0.27mである。土器は検出されなかったが、形状、覆土の状態から、他の炉穴と同様に縄文時代早期と考えられる。

071号炉穴 (第127図 図版48)

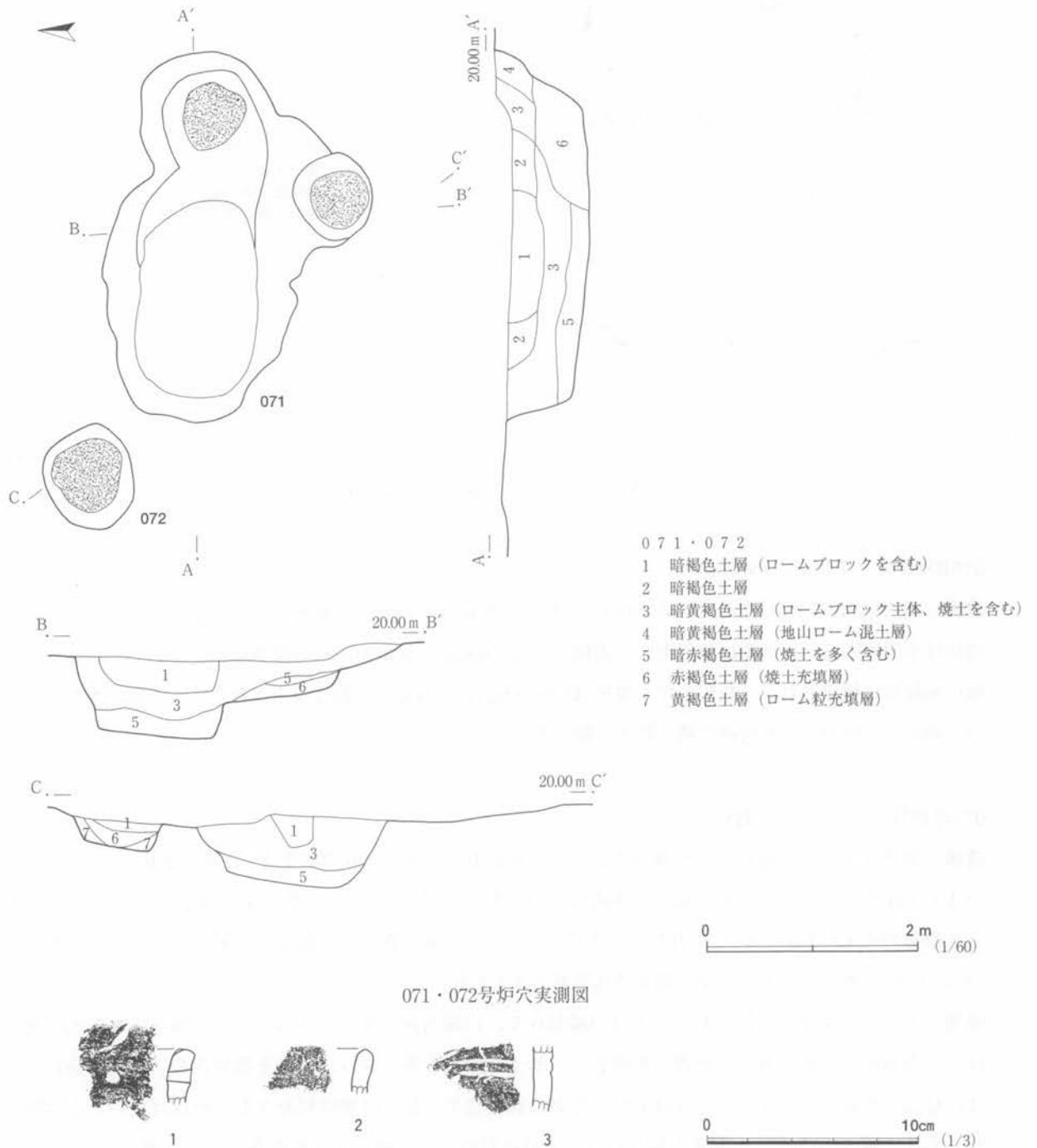
遺構 調査区西部の斜面からやや離れたところに位置している。火床部の数から2基の重複と考えられる。全体の平面形はやや不整な楕円形で、規模は3.5m×2.35m、検出面からの深さは0.74mである。土層断面から東端部の火床部が新しい。楕円形で、規模は0.84m×0.7mである。南端部の火床部は楕円形で、規模は0.6m×0.4mである。出土土器から縄文時代早期と考えられる。

遺物 1～3は深鉢形土器である。1は口縁部片で、口縁内面に刻み目が施され、口縁下に小孔列が施される。内外面は平滑である。色調は灰黒色で、胎土は砂粒を多く含み、繊維を微量含む。焼成は良い。2は口縁部片である。無文で、口縁は丸い。色調は淡褐色で、胎土は細砂粒を含む。焼成は良い。3は胴部片である。横走る平行沈線文が施される。色調は橙褐色で、胎土は砂粒を多く含み、繊維を少量含む。焼成は良い。

1は子母口式の可能性がある。2・3は田戸上層式と思われる。

072号炉穴 (第127図 図版48)

遺構 調査区西部の斜面からやや離れたところに位置し、071号炉穴の西隣である。平面形は楕円形で、規模は1.0m×0.84m、検出面からの深さは0.27mである。火床部はほぼ中央に検出された。ほぼ円形で、径0.65mである。土器は検出されなかったが、形状、覆土の状態から、他の炉穴と同様に縄文時代早期と考えられる。



071・072号炉穴実測図

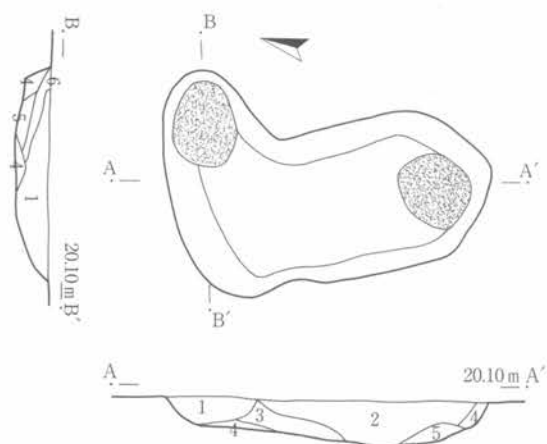


071号炉穴出土遺物

第127図 071・072号炉穴実測図及び071号炉穴出土遺物

073号炉穴 (第128図 図版48)

遺構 調査区西端部、018A・B号炉穴の東隣に位置している。火床部の数から2基の重複と考えられる。平面形はL字形で、規模は2.35m×1.37m、検出面からの深さは0.39mである。土層断面から北端部の火床部が新しい。楕円形で、規模は0.7m×0.5mである。南端部の火床部は楕円形で、規模は0.6m×0.5mである。出土土器から縄文時代早期と考えられる。



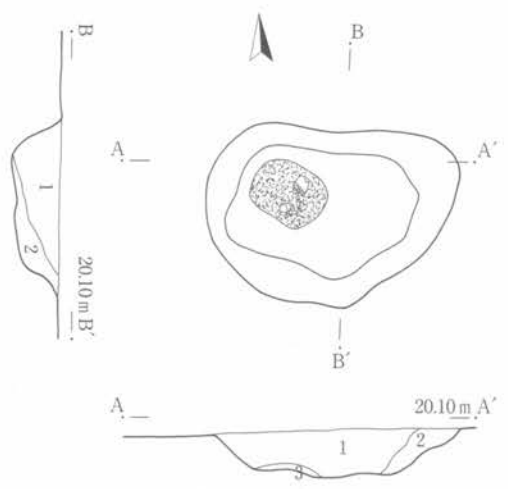
- 073
- 1 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
 - 2 暗褐色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (ロームブロックを含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
 - 5 赤褐色土層 (焼土充填層)
 - 6 暗赤褐色土層 (焼土を多く含む)



073号炉穴実測図



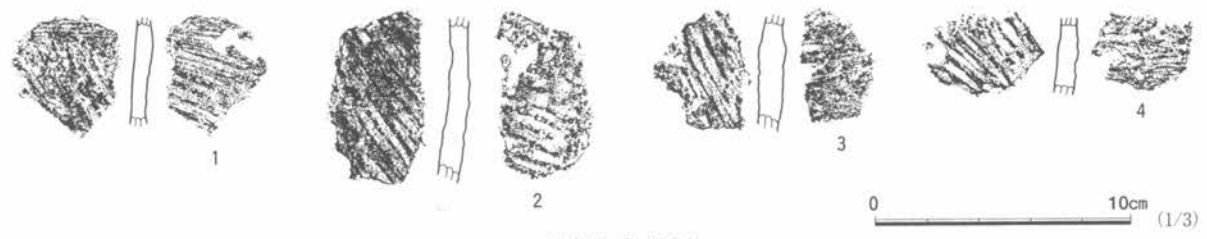
073号炉穴出土遺物



- 075
- 1 暗褐色土層
 - 2 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
 - 3 赤褐色土層 (焼土充填層)



075号炉穴実測図



075号炉穴出土遺物

第128図 073・075号炉穴実測図及び出土遺物

遺物 1～3は深鉢形土器の胴部片である。1・2は表裏に条痕文が施される。色調は黒褐色で、胎土は砂粒、繊維を多く含む。焼成は良いが、全体にもろい。3は表面に条痕文が施される。内面は無文である。底部付近と考えられる。色調は淡褐色で、胎土は砂粒、繊維を多く含む。焼成は良いが、全体にもろい。茅山式と考えられる。

075号炉穴（第128図 図版48）

遺構 調査区西端部、018A・B号炉穴の北隣に位置している。平面形はやや不整な楕円形で、規模は1.99m×1.37m、検出面からの深さは0.39mである。火床部は長軸の西端部に位置している。楕円形で、規模は0.6m×0.46mである。出土土器から縄文時代早期と考えられる。

遺物 1～4は深鉢形土器の胴部片である。表裏に条痕文が施される。色調は1・4が明褐色、2・3が黒褐色である。胎土は砂粒を多く含み、繊維を含む。焼成は良いが、全体にもろい。茅山式と考えられる。

076号炉穴（第129図 図版49）

遺構 調査区西端部、073号炉穴の南側に位置している。火床部の分布及び土層断面から4基の重複と考えられる。平面形はやや歪んだT字形である。規模は3.72m×2.09m、検出面からの深さは0.28mである。それぞれの長軸は北西方向と北東方向である。土層断面から北東方向の炉穴が新しい。火床部は大きく、北東端から炉穴の3/4を占める。楕円形で、規模は1.58m×0.75mである。北西方向の部分は火床部が3基検出された。北西端、中央、南東端の3か所である。楕円形で、規模は各々0.45m×0.35m、0.66m×0.5m、0.5m×0.4mである。土層断面から南東端の火床部は中央の火床部よりも新しい。北西端の火床部と他の2火床部の新旧関係は不明である。土器は検出されなかったが、形状、覆土の状態から、他の炉穴と同様に縄文時代早期と考えられる。

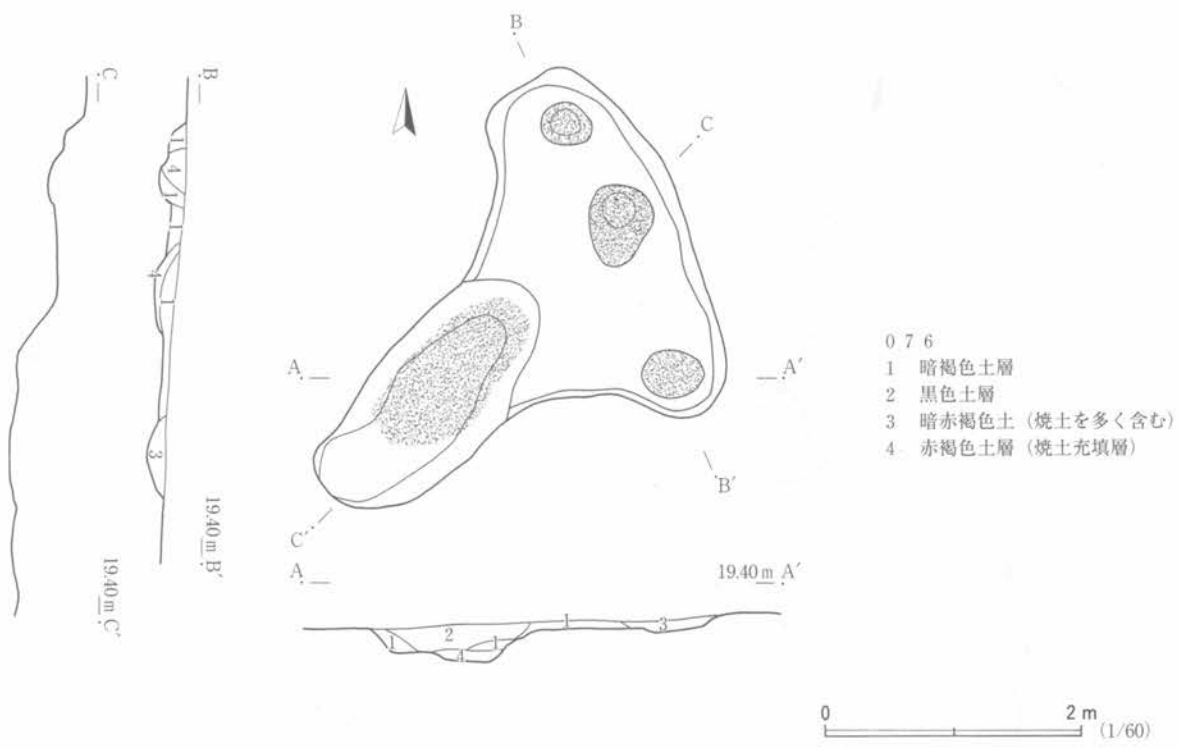
077号炉穴（第129図 図版49）

遺構 調査区西部やや南に位置し、単独で検出された。火床部の分布及び土層断面から3基の重複と考えられる。平面形はやや不整な隅丸の三角形である。規模は2.5m×2.09m、検出面からの深さは0.33mである。各々の頂点部分に火床部が位置している。土層断面及び検出状況から火床部の新旧関係は次のように考えられる。東端部が最も旧く、次が南端部で、北端部が最も新しい。ほぼ円形で、規模は径0.43m～0.7mである。出土土器から縄文時代早期と考えられる。

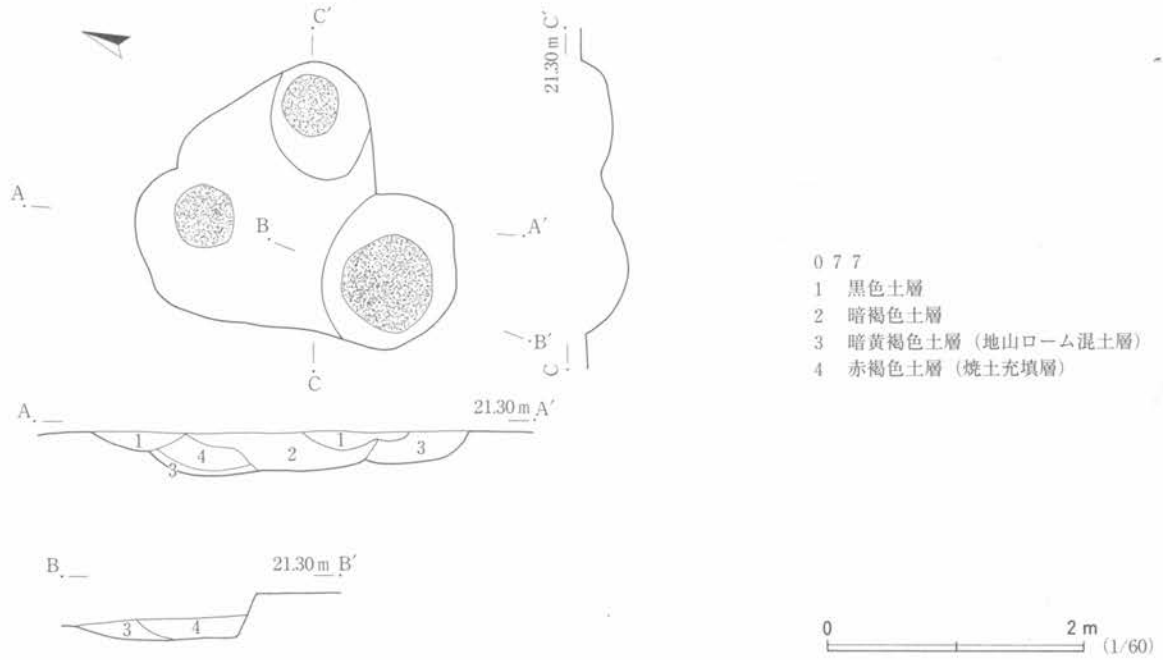
遺物 1～3は深鉢形土器の破片である。1は口縁部片で、表裏に条痕文が施され、口縁に刻み目が施される。色調は明褐色で、胎土は細砂粒を多く含み、繊維を含む。焼成は良い。2・3は胴部片である。色調は、2が淡橙褐色、3が赤褐色である。胎土は細砂粒を多く含み、繊維を含む。焼成は良い。茅山式と考えられる。

086号炉穴（第130図 図版49）

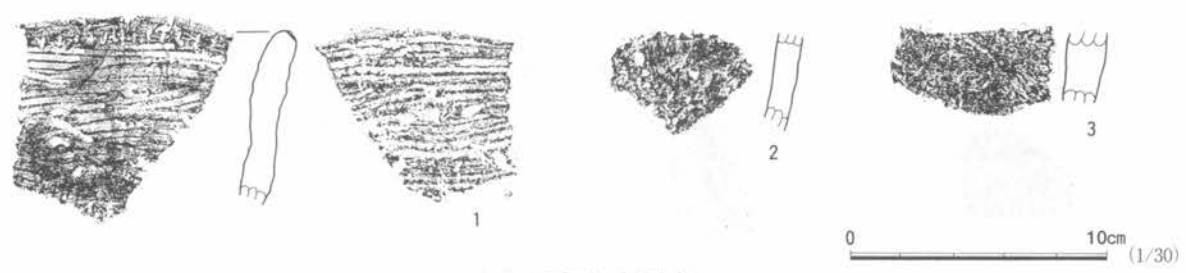
遺構 調査区南西端部の斜面際に位置し、北隣は126号炉穴である。火床部の分布から、5基以上の重複と思われる。全体に楕円形の炉穴が連続する形である。規模は6.47m×2.14m、検出面からの深さは0.38mである。火床部は6か所で、北側4か所の部分と南側2か所の部分に分かれるが、両者の新旧関係は不明であ



076号炉穴実測図

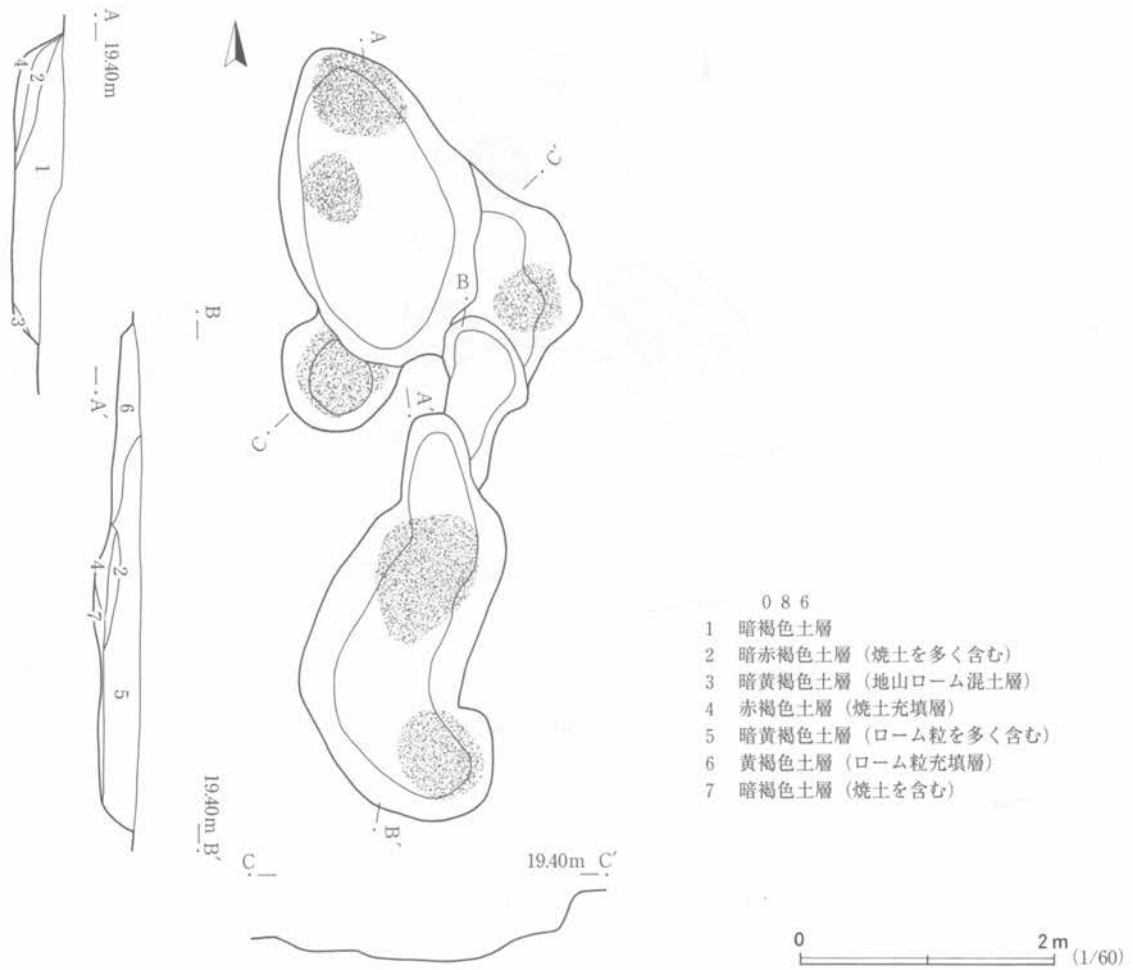


077号炉穴実測図

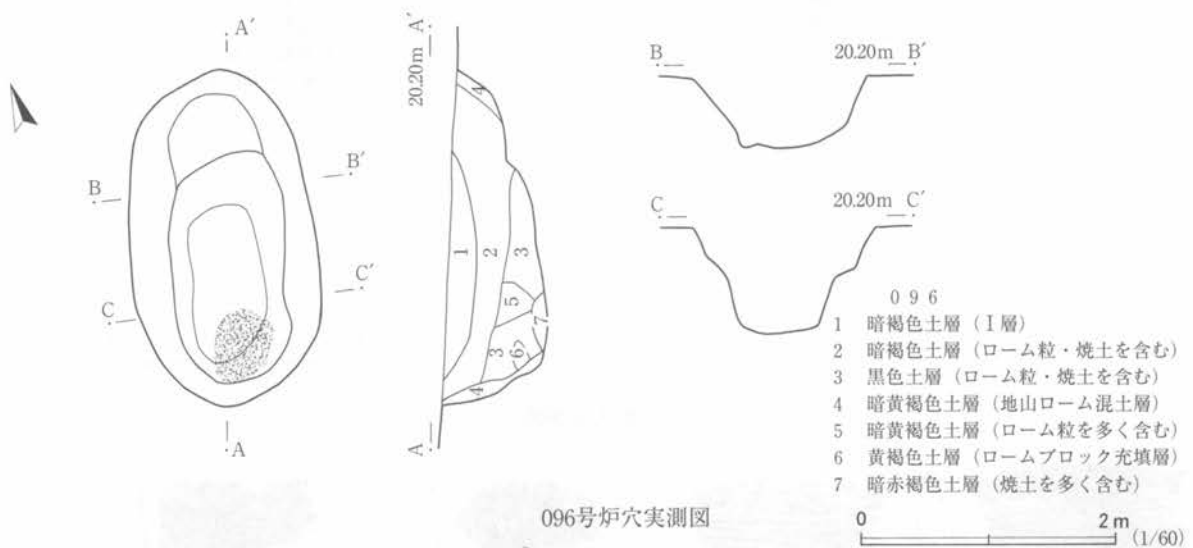


077号炉穴出土遺物

第129図 076・077号炉穴実測図及び077号炉穴出土遺物



086号炉穴実測図



096号炉穴実測図



096号炉穴出土遺物



第130図 086・096号炉穴実測図及び096号炉穴出土遺物

る。北側4か所の新旧関係は、土層断面から東西両端の火床部が中央及び北端よりも古い。また、東西両端間及び中央・北端間の新旧関係は不明である。南側2か所は土層断面から、北の火床部が新しく、南が古い。火床部は楕円形で、規模は0.54m～1.11m×0.45m～0.82mである。土器は検出されなかったが、形状、覆土の状態から、他の炉穴と同様に縄文時代早期と考えられる。

096号炉穴（第130図 図版50）

遺構 調査区南東端部に位置し、北隣は115号炉穴である。平面形は楕円形で、規模は2.17m×1.48m、検出面からの深さは0.8mである。火床部は長軸の南端部に位置している。楕円形で、規模は0.58m×0.45mである。出土土器から縄文時代早期と考えられる。

遺物 1・2は深鉢形土器の胴部片である。表面に縦位のL燃糸文が施される。色調は黒褐色で、胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良い。稲荷台式に属すると考えられる。

100号炉穴（第131図 図版50）

遺構 調査区南東端部に位置し、096号炉穴の西隣である。平面形は楕円形で、規模は2.53m×1.29m、検出面からの深さは0.62mである。火床部は長軸の西端部に位置している。ほぼ円形で、規模は径0.48mである。出土土器から縄文時代早期と考えられる。

遺物 1・2は深鉢形土器の胴部片である。1は表面に縦位のR燃糸文が施され、2は表面に縦位のLR縄文が施される。色調は、1が淡灰褐色、2が淡褐色である。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良い。1は稲荷台式、2は井草式に属すると考えられる。

115号炉穴（第131図 図版50）

遺構 調査区南東端部に位置し、096号炉穴の北隣である。平面形は楕円形で、規模は1.8m×0.84m、検出面からの深さは0.31mである。火床部は長軸の西端部に位置している。ほぼ円形で、規模は径0.27mである。出土土器から縄文時代早期と考えられる。

遺物 1は深鉢形土器の口縁部片である。口縁は外反して丸く肥厚し、RL縄文が施される。また、表面に横位のRL縄文が施される。色調は黒褐色で、胎土は砂粒を多く含む。焼成は良い。井草式に属すると考えられる。

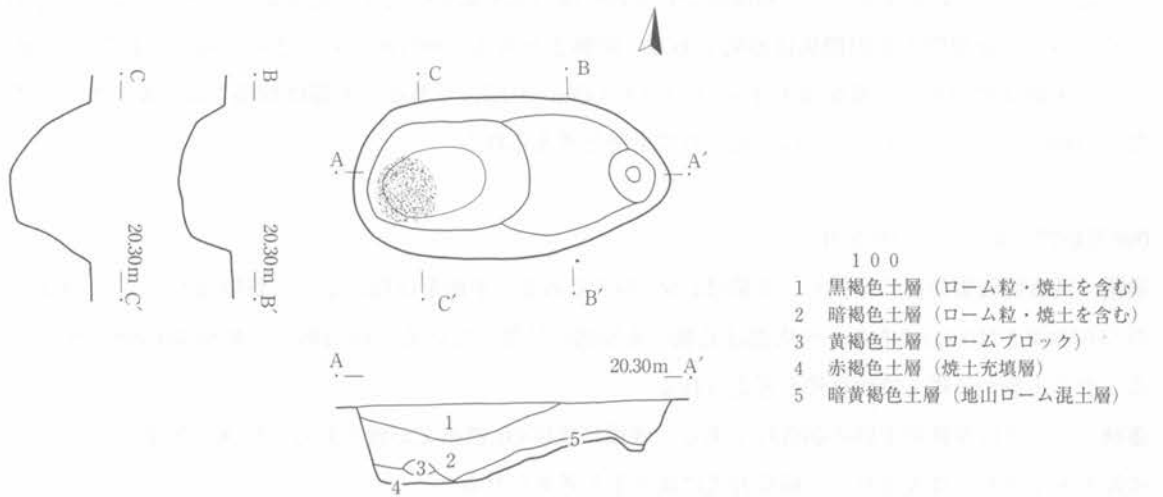
117号炉穴（第132図 図版51）

遺構 調査区南東端部に位置し、115号炉穴の北西隣である。平面形は楕円形で、規模は1.52m×0.7m、検出面からの深さは0.25mである。火床部は長軸の東端部に位置している。楕円形で、規模は0.3m×0.22mである。出土土器から縄文時代早期と考えられる。

遺物 1・2は深鉢形土器の胴部片である。1は沈線文が施される。色調は淡黄褐色で、胎土は砂粒を多く含み、繊維を少量含む。焼成は良い。2は無文である。色調は暗赤褐色で、胎土は細砂粒、繊維を含む。焼成は良い。田戸上層式と思われる。

120号炉穴（第132図 図版51）

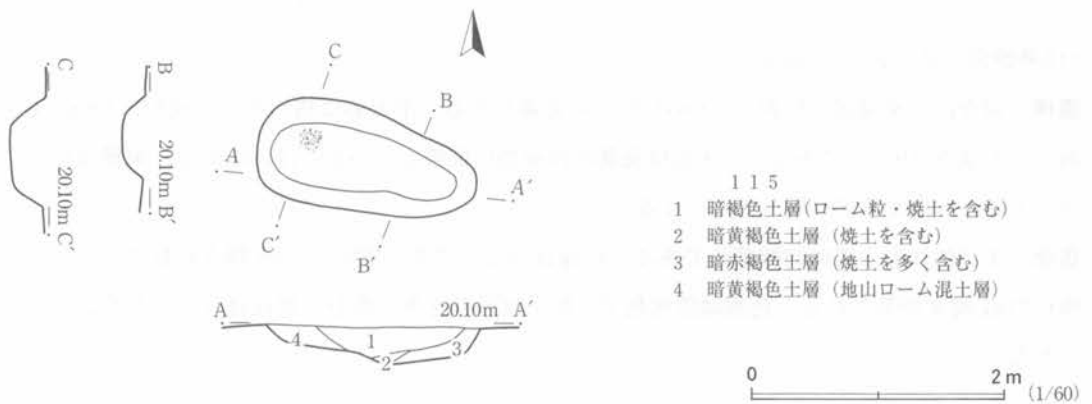
遺構 調査区南端部、斜面際に位置している。西側約27mに124号炉穴が位置する。平面形は楕円形で、規



100号炉穴実測図



100号炉穴出土遺物

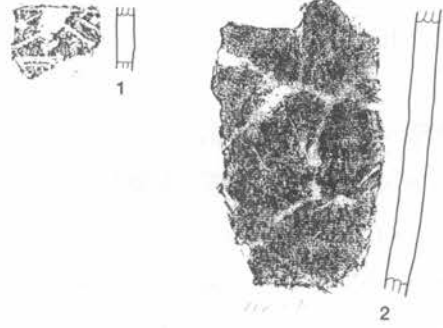
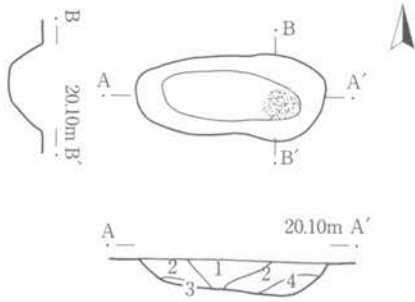


115号炉穴実測図



115号炉穴出土遺物

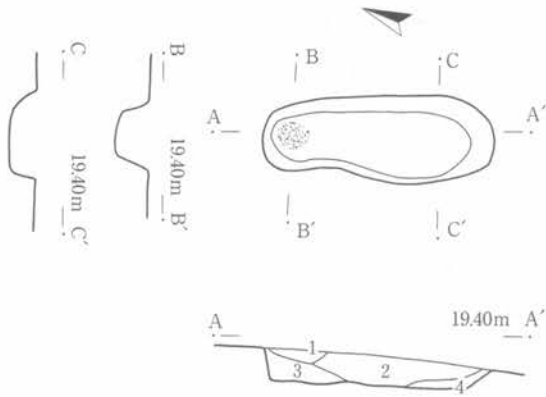
第131図 100・115号炉穴実測図及び出土遺物



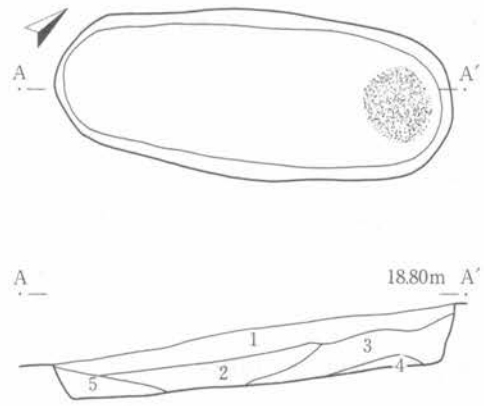
- 117
- 1 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 2 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
 - 3 暗褐色土層 (焼土を含む)
 - 4 黄褐色土層 (地山ローム混土層)
- 0 2m (1/60)

117号炉穴実測図及び出土遺物

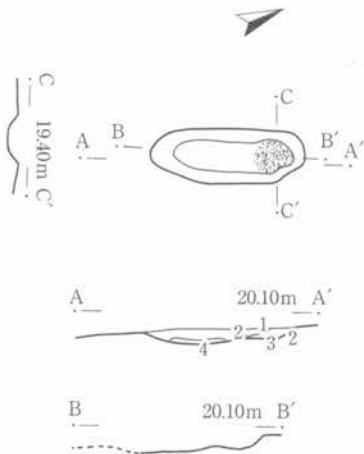
0 10cm (1/3)



- 120
- 1 赤褐色土層 (焼土充填層)
 - 2 暗褐色土層
 - 3 暗赤褐色土層 (焼土を多く含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
- 120号炉穴実測図



- 124
- 1 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 2 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
 - 3 暗赤褐色土層 (ローム粒・焼土を多く含む)
 - 4 赤褐色土層 (焼土充填層)
 - 5 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
- 124号炉穴実測図



- 126
- 1 暗赤褐色土層 (焼土を多く含む)
 - 2 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 3 暗褐色土層 (焼土を含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
- 126号炉穴実測図

0 2m (1/60)

第132図 117・120・124・126号炉穴実測図及び117号炉穴出土遺物

模は1.84m×0.7m、検出面からの深さは0.25mである。火床部は長軸の西端部に位置している。ほぼ円形で、規模は径0.24mである。土器は検出されなかったが、形状、覆土の状態から、他の炉穴と同様に縄文時代早期と考えられる。

124号炉穴（第132図 図版51）

遺構 調査区南端部、斜面際に位置している。東側約27mに120号炉穴が位置する。平面形は楕円形で、規模は3.16m×1.35m、検出面からの深さは0.48mである。火床部は長軸の西端部に位置している。楕円形で、規模は0.6m×0.5mである。縄文時代早期条痕文系土器が少量出土している。

遺物 遺物は細片のため図示できなかった。

126号炉穴（第132図 図版51）

遺構 調査区南西端部、斜面際に位置している。086号炉穴の北隣である。平面形は楕円形で、規模は1.22m×0.41m、検出面からの深さは0.12mである。火床部は長軸の東端部に位置している。ほぼ円形で、規模は径0.2mである。土器は検出されなかったが、形状、覆土の状態から、他の炉穴と同様に縄文時代早期と考えられる。

(3) 陥 穴

陥穴は6基検出された。調査区の北東部から南西部にかけて並ぶように位置している。どの陥穴からも遺物は検出されなかったが、形から縄文時代早期と考えられる。

005号陥穴（第133図 図版52）

遺構 調査区の中央部やや南に位置している。西側約45mに037号陥穴が位置する。平面形は楕円形で、規模は2.21m×1.17m、検出面からの深さは2.0mである。深さ約0.5mから幅が極端に狭くなり、底面の幅は0.16mである。

011号陥穴（第133図 図版52）

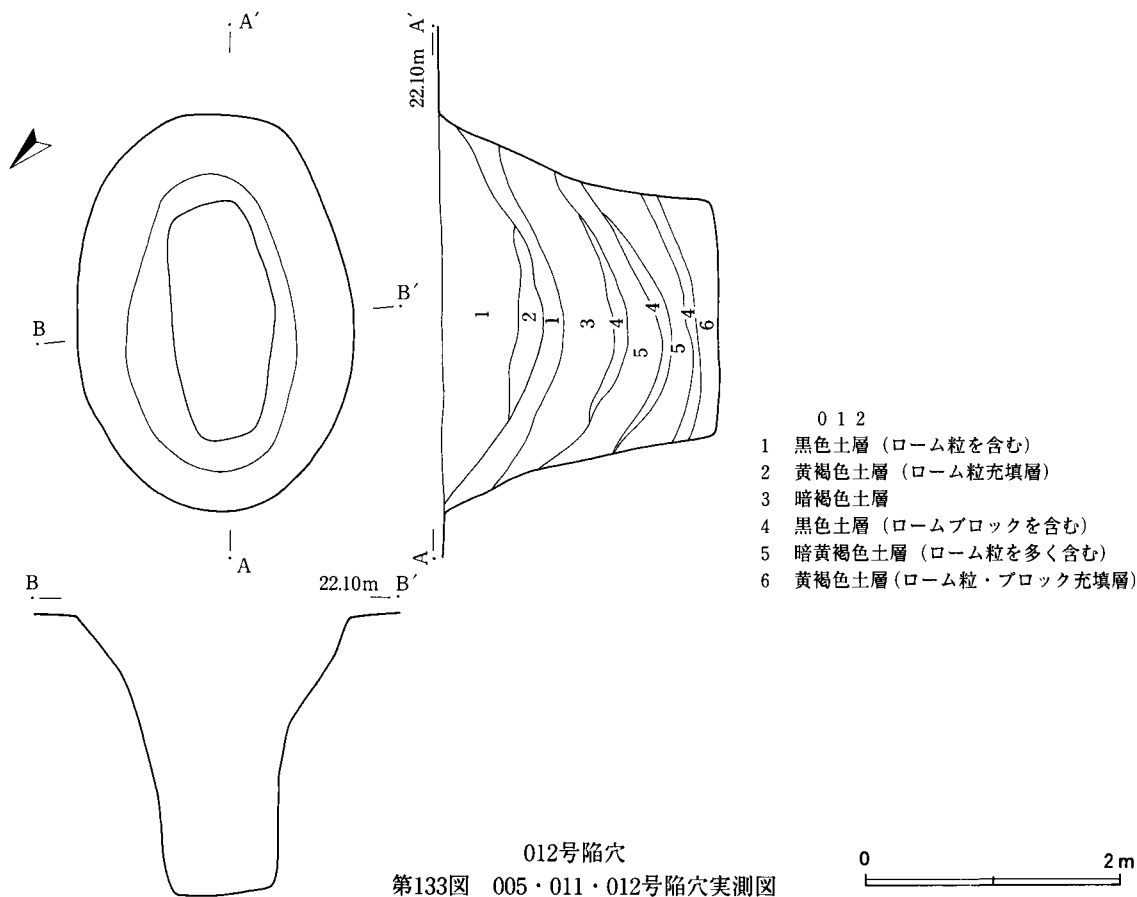
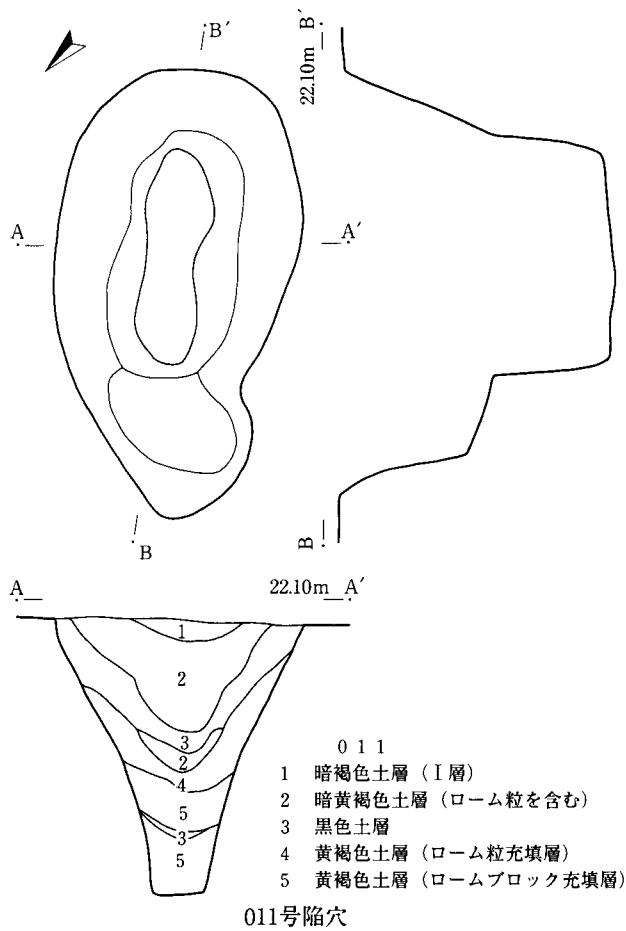
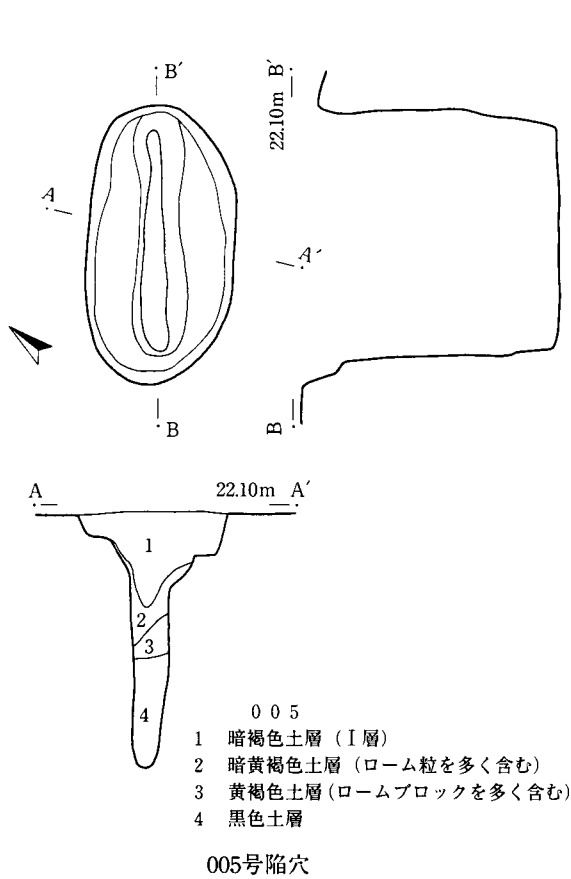
遺構 調査区の北東部に位置している。南側約43mに013号陥穴が位置する。平面形は楕円形で、規模は3.53m×1.92m、検出面からの深さは2.13mである。深さ約1.2mから幅が急に狭くなり、底面の幅は0.3mである。

012号陥穴（第133図 図版52）

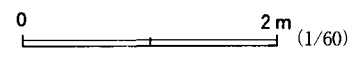
遺構 調査区の中央部やや北に位置している。南西側約48mに040号陥穴が位置する。平面形は楕円形で、規模は3.09m×2.17m、検出面からの深さは2.18mである。深さ約1.2mから幅が狭くなり、底面の幅は0.6mである。

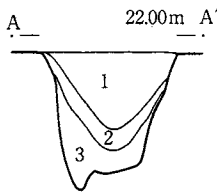
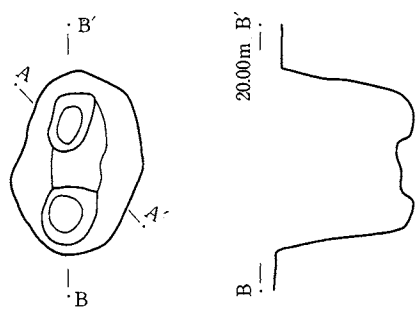
013号陥穴（第134図 図版52）

遺構 調査区の中央部やや北に位置している。西側約32mに012号陥穴が位置する。平面形は楕円形で、規



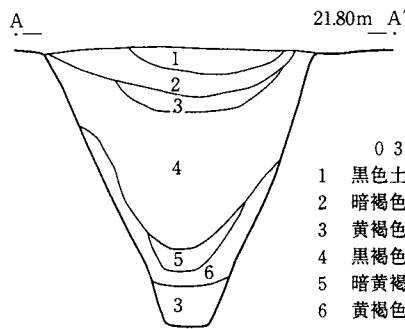
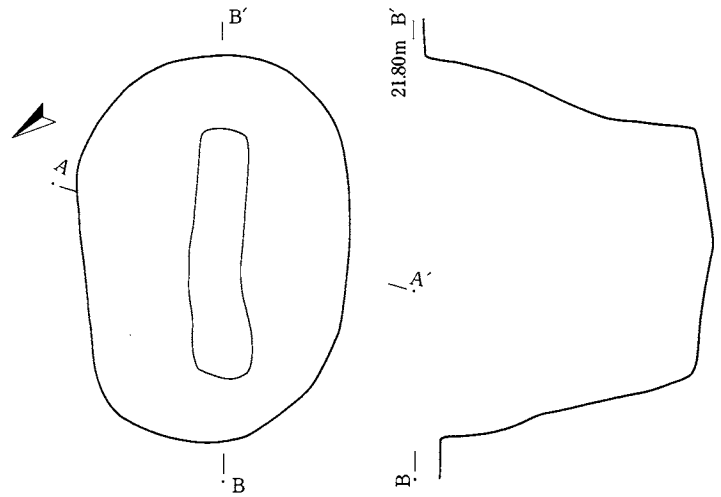
第133図 005・011・012号陥穴実測図





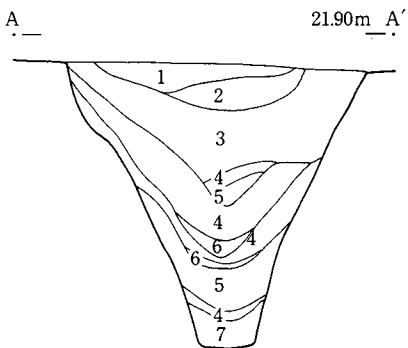
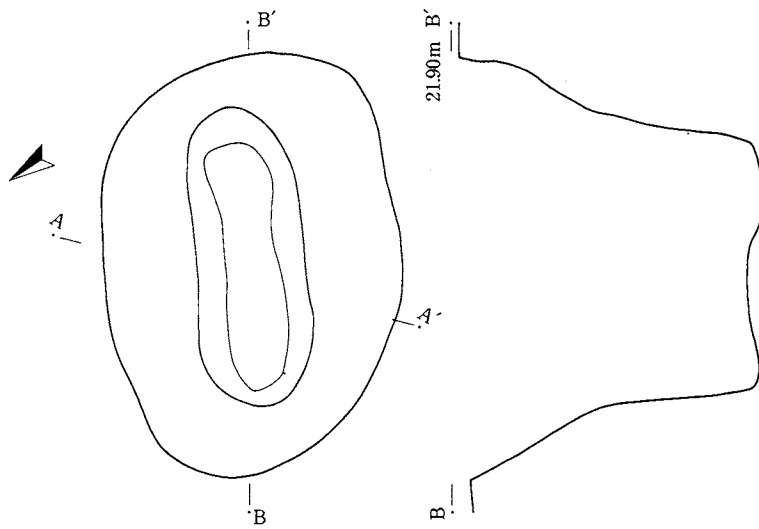
- 013
- 1 黒色土層
 - 2 暗褐色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (ローム粒を含む)

013号陥穴実測図



- 037
- 1 黒色土層
 - 2 暗褐色土層
 - 3 黄褐色土層 (ローム粒充填層)
 - 4 黒褐色土層 (ロームブロックを含む)
 - 5 暗黄褐色土層 (ロームブロック主体層)
 - 6 黄褐色土層 (ローム粒・ブロック充填層)

037号陥穴実測図



- 040
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (ローム粗粒を含む)
 - 4 黒色土層
 - 5 黄褐色土層 (ローム粒充填層)
 - 6 黒褐色土層 (ローム粒・ブロックを含む)
 - 7 黄褐色土層 (ローム粒・ブロック充填層)

040号陥穴実測図



第134図 013・037・040号陥穴実測図

模は2.9m×1.89m、検出面からの深さは2.14mである。底面の幅は1.14mである。底面の両端にピットが検出された。平面形は楕円形で、規模は0.9m×0.6m～0.83m、底面からの深さは0.27mである。

037号陥穴（第134図 図版52）

遺構 調査区の南西部に位置している。北東側約41mに040号陥穴が位置する。平面形は楕円形で、規模は3.09m×2.15m、検出面からの深さは2.15mである。底面の幅は0.6mである。

040号陥穴（第134図 図版52）

遺構 調査区のほぼ中央部に位置している。南西側約41mに037号陥穴が位置する。平面形は楕円形で、規模は3.32m×2.35m、検出面からの深さは2.14mである。深さ約1.8mから幅が狭くなり、底面の幅は0.43mである。

(4) 石鏃製作跡

今回の一本桜南遺跡の調査では、遺構に伴わない石器製作の行われた形跡が明瞭にみられる地点が計11か所検出された。

出土した石器のほとんどが石鏃であり、また、調整痕の認められる剥片が多数共伴している。これら調整痕の認められる剥片は、剥片に対する調整部位、および形状から、石鏃の作出を意図したものであることは明瞭であり、調整痕の認められる剥片とするより、ここでは石鏃未製品として扱いたい。

石鏃の他にみられる定型的な石器は、石匙、磨製石斧があげられるが、点数的に少数であり、また、これらの石器の未製品と考えられる石器の出土はみられない。よって、石器製作跡では石鏃の製作が主として行われていたと考えられる。

石器の石材はチャートが多用され、石器全体数の94%がこの石材にあたる。他には凝灰岩、変成岩、黒曜石、頁岩が含まれるが、これらの石質の調整剥片は認められない。

石器製作跡は、とくに調査区の西側の緩斜面部から台地傾斜部直前に集中して所在しており、この付近には条痕文系土器を伴う炉穴が集中している。しかし、石器製作跡は、一部で石器組成に石匙を含むものや石鏃の形態から考えると、縄文時代早期よりも前期に近い特徴が認められ、この点からも両者には関連性が見いだせず、単に平面分布上で重複するのみであるといえる。

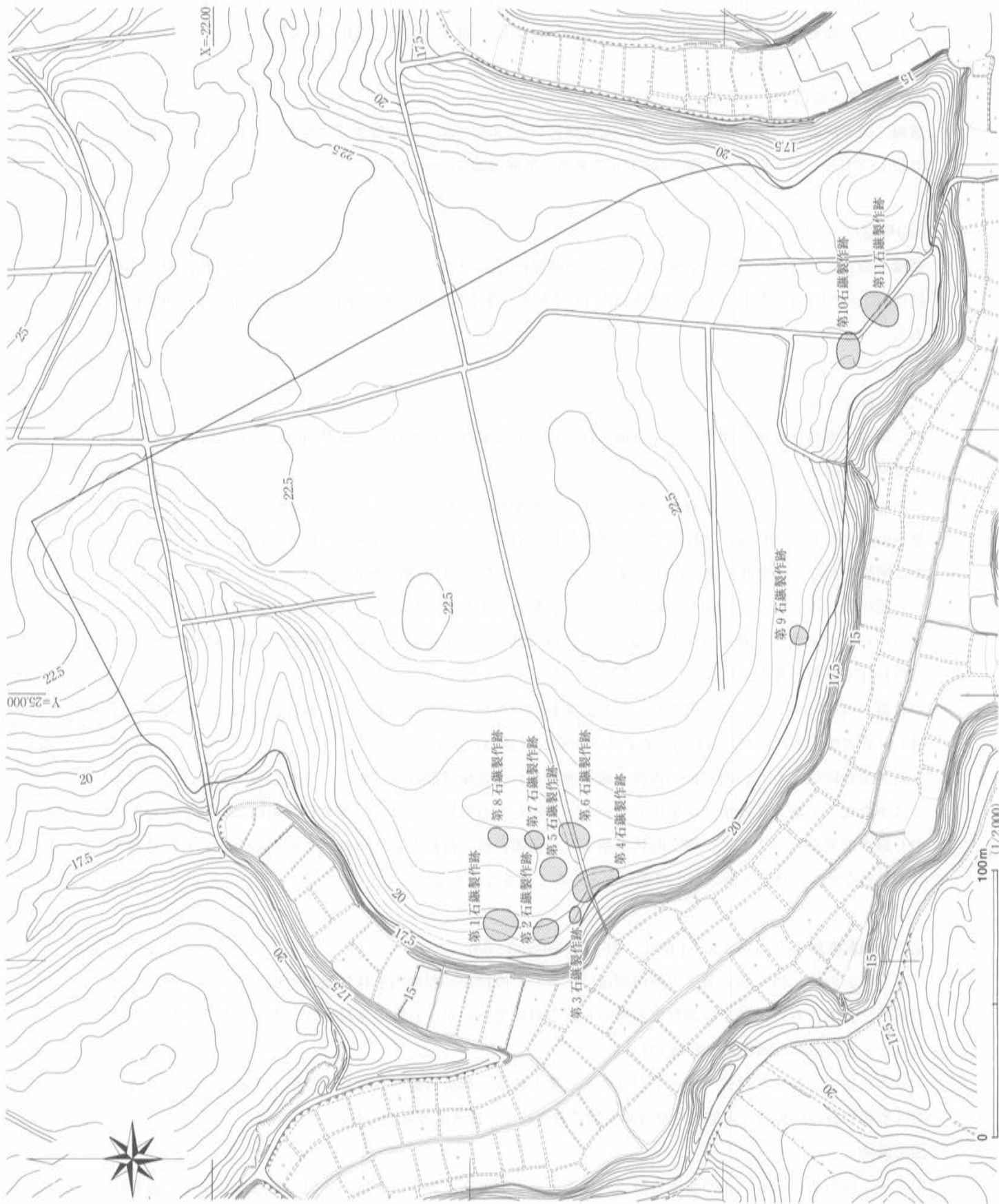
第1石鏃製作跡（第135・136・137図 第63表 図版53・55）

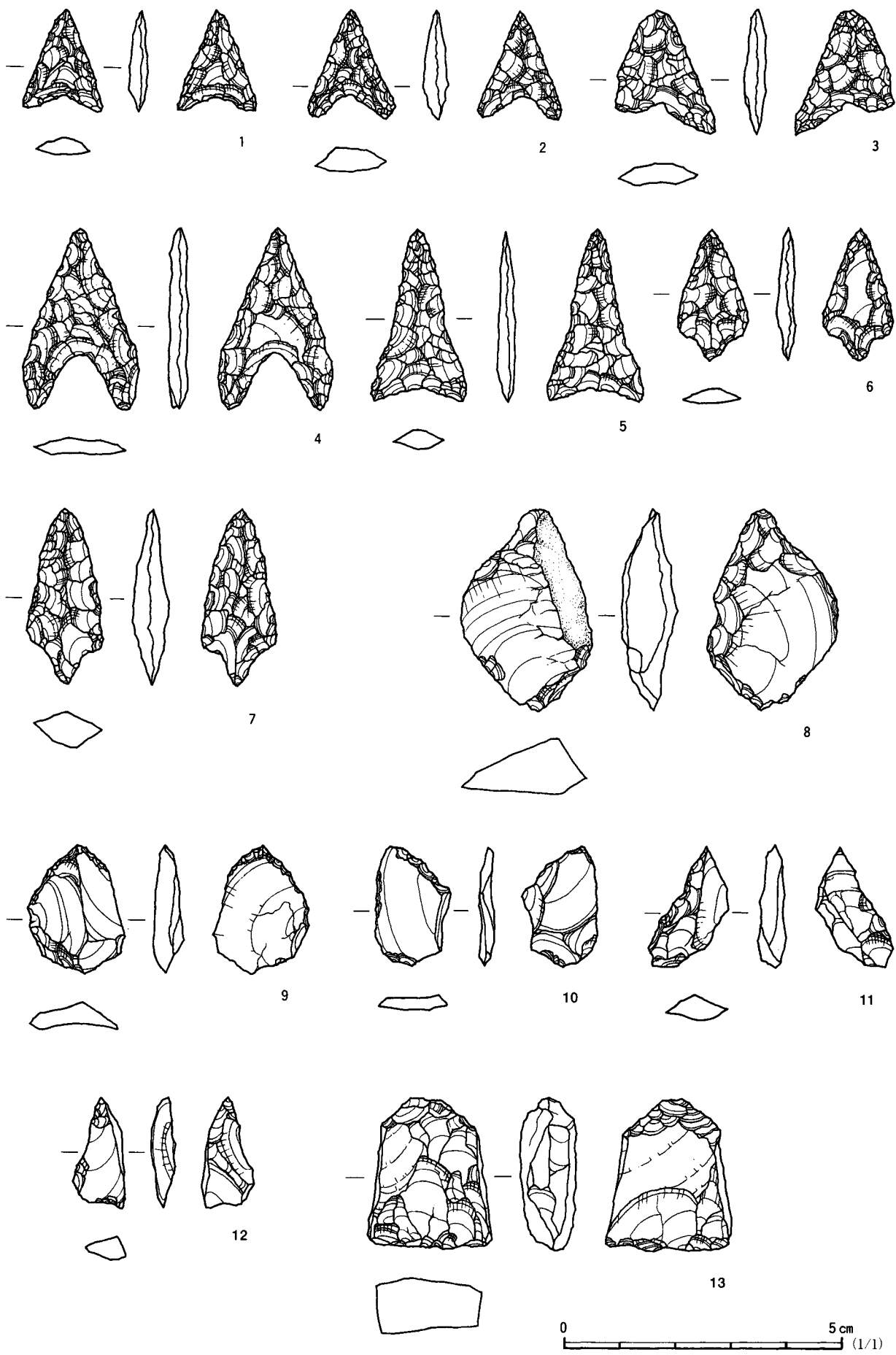
調査区の西側、標高20m前後の緩斜面部に位置し、直径10m程の円形状に遺物の出土をみる。出土した石器は、石鏃、石鏃未製品、調整痕の認められる剥片であるが、石鏃の素材剥片と考えられる剥片はみられない。また微細な調整剥片が出土する。

石器に使用される石材はチャートがほとんどを占める。凝灰岩製の石鏃が1点出土するが、これ以外の凝灰岩製の石器は製品、調整剥片を含めて他にみられず、搬入品と考えられる。

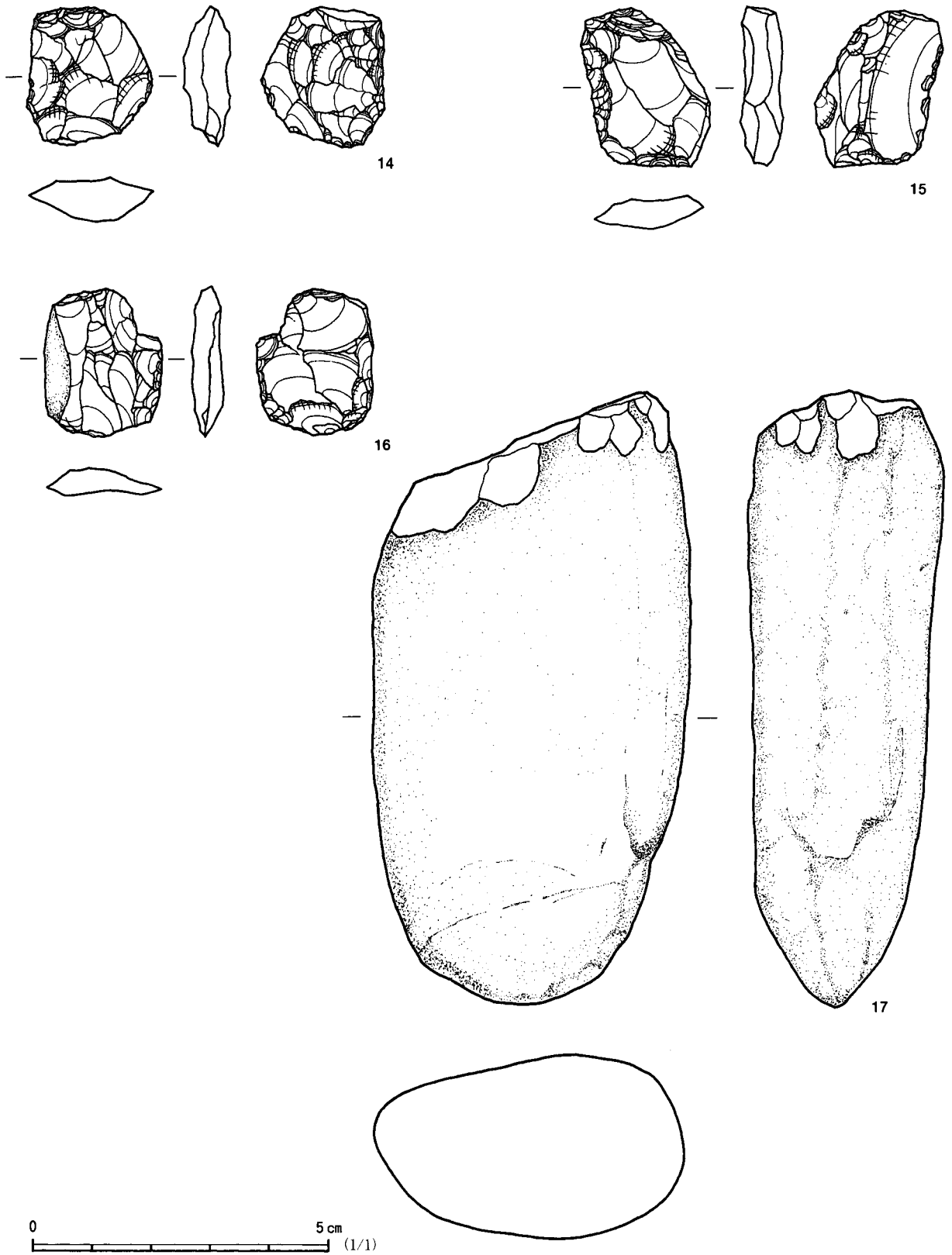
出土遺物

1～7は石鏃である。4の凝灰岩製以外はチャート製である。1・2は二等辺三角形を呈する平面形状で、装着部は緻密な調整により深く抉るように作出される。鏃先は鋭く尖り、鏃先から装着部にかけては直





第136図 第1石鏃製作跡出土遺物(1)



第137図 第1石鏃製作跡出土遺物(2)

第63表 第1石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第136図	1	9B-59, 16	石鏃	チャート	1.80	1.40	0.33	0.60	
	2	9C-61, 8	石鏃	チャート	1.90	1.50	0.45	0.86	
	3	9C-80, 5	石鏃	チャート	2.20	1.75	0.40	1.17	
	4	9C-94, 1	石鏃	凝灰岩	3.29	2.02	0.39	1.70	
	5	9B-76, 1	石鏃	チャート	3.00	1.70	0.38	1.27	
	6	9B-79, 2	石鏃	チャート	2.26	1.23	0.32	0.81	
	7	9B-79, 3	石鏃	チャート	2.00	1.47	0.37	1.80	
	8	9C-60, 4	石鏃未製品	チャート	2.23	3.50	0.80	5.96	
	9	9C-91, 1	石鏃未製品	チャート	1.64	2.15	0.45	1.65	
	10	9B-79, 4	石鏃未製品	チャート	2.10	1.47	0.25	0.91	
	11	9B-88, 1	石鏃未製品	チャート	0.90	2.13	0.50	0.96	
	12	9C-51, 7	石鏃未製品	チャート	0.90	1.95	0.46	0.65	
	13	9B-58, 3	石鏃未製品	チャート	2.67	2.23	1.03	7.96	
第137図	14	9B-59, 9	調整痕ある剥片	チャート	2.03	2.30	0.83	4.23	
	15	9B-69, 3	調整痕ある剥片	チャート	2.74	2.04	0.69	4.36	
	16	9B-47, 1	調整痕ある剥片	チャート	2.36	2.10	0.52	2.87	
	17	9B-94, 1	磨製石斧	変成岩	106.5	5.62	33.8	278.53	

線的に形状が整えられる。表裏面全面に調整が施され、素材剥片の形状を大きく変えている。3は鏃先が丸みを帯びる形状であり、大きさも1・2と比較すると大型である。4は大型の石鏃であり、鏃先から基部付近は直線的であるが、装着部にかけて丸みを帯びる。装着部は深く抉られる。裏面には素材剥片の主要剥離面が残存する。大型の割には器厚は薄い。5は鏃先から基部にかけて直線的であるが、装着部付近から外に広がり、装着部の抉りはほとんど作出されない。6・7は有茎石鏃である。先端部はともに鋭く、鏃先から装着部までは直線的である。

8～13は石鏃未製品と考えられる。すべてチャート製である。8・13は部厚な大型剥片を素材とするが、他の9～12は薄い大型剥片を素材として調整を施し石鏃を作出する意図が窺われる。8は原石面を有する大型の横長剥片を素材とし、調整は素材剥片の打面部および両側縁に対して行われる。調整方向は主に表面側から主要剥離面側に向かう。9は小型の横長剥片を素材とし、素材剥片の打面が残る。調整は主に鏃先に該当する部位に対して施され、微細な調整のみに止められる。調整以外に素材剥片の形状を整える折断等を行われず、素材剥片の形状をほぼ維持している。10は素材剥片の打面側を折断しているが、現状では折断面には調整は施されていない。調整は部分的であるが、石鏃の鏃先から基部にかけての部位に主に施される。11は折断により素材剥片の形状を大きく変えている。素材剥片の末端部を鏃先に想定し、調整を施す。12は微細な調整が施され、片側縁には一枚の大きな剥離痕がみられる。折断により形成された剥離痕に類似するが、現存する大きさからは目的とする大きさの石鏃を作出するのは不可能であり、石器制作時に欠損し遺棄されたものと考えられる。13は大型剥片を折断し調整を施したもので、鏃先と基部に該当する部位に調整を密に施す。側縁部には調整はみられず、側縁部に対する調整を施す前に製品化を中止している。

14～16は調整痕の認められる剥片である。すべてチャート製である。石鏃未製品との見方も可能であるが、前述した明らかに石鏃未製品と考えられるものとは調整部位、全体の形状が異なることから特に石鏃未製品と異なるものとして扱った。14は部厚な剥片のほぼ全面に調整がみられ、特に裏面右側縁からの調整

は密に施される。15の調整は素材剥片の周縁のみに止められ、素材剥片の形状を大きく変化させることなく微細な調整が施される。16の表面には原石面がみられ、また表裏面にみられる剥片剥離時の剥離の方向は上下両端からであり、楔形石器状の剥離痕となっている。これはチャート製の円礫を母岩とし、下に台石をあてがい剥片剥離を行ったものと考えられる。上下端には剥片剥離時の潰れたような微細な剥離痕がみられるが、調整痕は側縁のものに該当する。

17は変成岩製の磨製石斧である。やや扁平な棒状礫を素材とし、全体的に研磨され製品化されるがいびつである。刃部には使用による剥落の痕跡がみられるが、研磨により刃部の再生がなされる。基部には欠損面がみられ、欠損面から形状を整える目的による剥離痕がみられる。

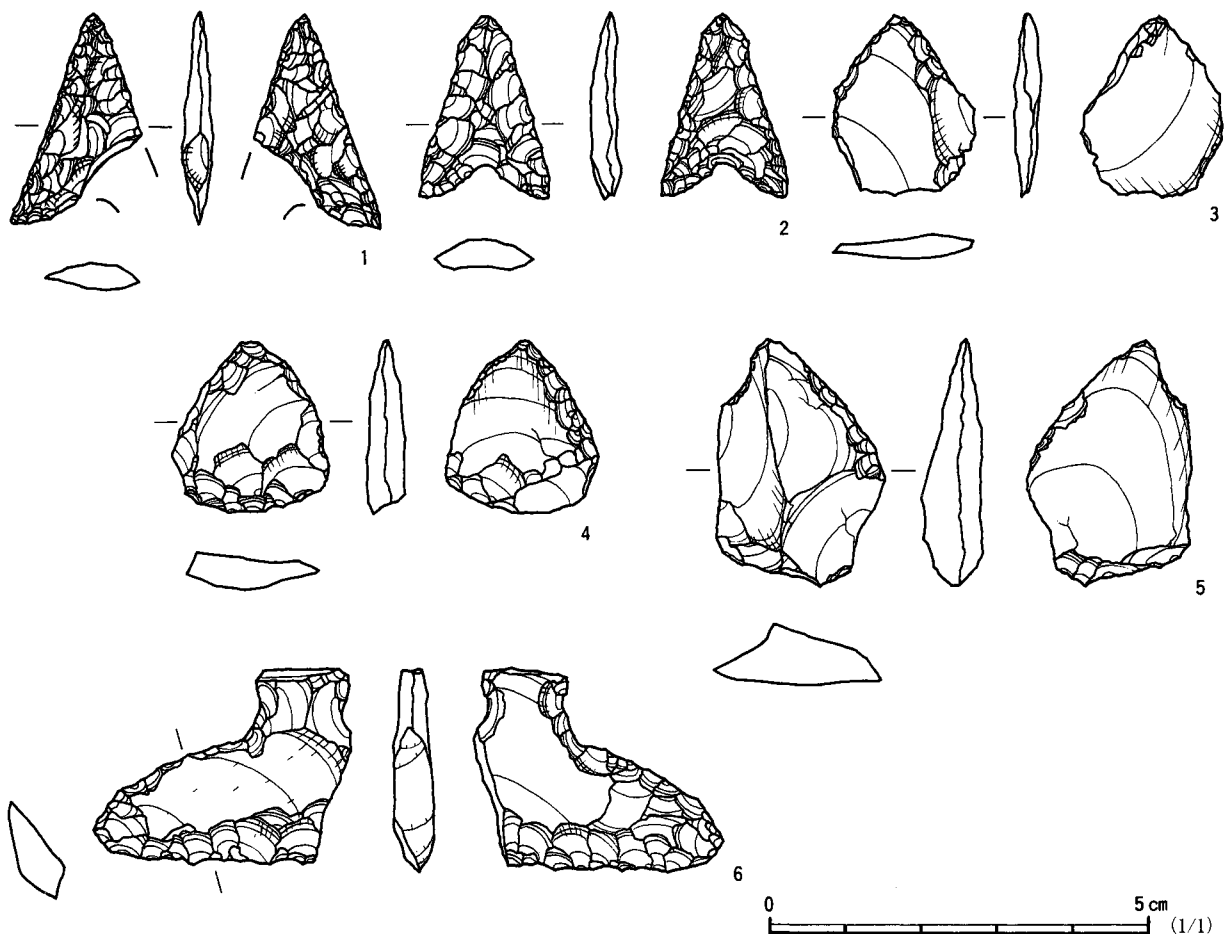
第2石鏃製作跡 (第135・138図 第64表 図版53・56)

調査区の西側、台地緩斜面部に位置し、標高19mを測る。一本桜南遺跡で検出された石器製作跡のなかでもっとも標高の低い位置に所在する。遺物は径8m程の円形状に分布する。

出土した石器は石鏃、石鏃未製品であり、石鏃の素材剥片となりうる形状の剥片は出土していない。また凝灰岩製の石匙が1点出土するが、凝灰岩製の石器は剥片、碎片を含めてこの1点のみであり、搬入品と考えられる。凝灰岩製の石匙以外はすべてチャート製である。

出土遺物

1・2は石鏃である。両者ともチャート製である。1は全面に調整を施し製品としているため素材剥片の形状は不明である。二等辺三角形に近い形状を呈し、鏃先は鋭く、鏃先から基部にかけて直線的に側縁部



第138図 第2石鏃製作跡出土遺物

第64表 第2石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第138図 1	10B-49, 1	石鏃	チャート	2.70	1.65	0.40	1.02	片基部欠損
2	10B-55, 1	石鏃	チャート	2.30	1.65	0.37	1.10	
3	10B-27, 1	石鏃未製品	チャート	2.25	1.87	0.38	1.39	
4	10B-45, 2	石鏃未製品	チャート	2.15	1.92	0.50	2.21	
5	10B-35, 2	石鏃未製品	チャート	2.90	2.20	0.76	4.10	
6	10B-69, 1	石匙	凝灰岩	2.50	3.34	0.62	4.73	

を形成する。片基部が欠損するが、石器製作過程の細調整の段階で欠損したものである。2は鏃先がやや鈍角となり、鏃先から基部にかけては1の石鏃と同様の角度となる。調整は全面にわたり、鏃先がやや鈍角となる以外は精緻な作りである。

3～5は石鏃未製品である。すべてチャート製である。3はやや横長の剥片を素材とし、剥片の打面部を表裏面からの調整により除去している。剥片右側縁を装着部に設定して調整を施し、調整部位は鏃先にあたる除去された打面と左側縁のみである。4は素材剥片の打面部を調整により除去し、その部位を石鏃の装着部に設定し調整を施している。調整は素材剥片の全周に及ぶが、面的な調整ではなく縁辺のみに止められる。5は4と同様に素材剥片の打面部を調整により除去し、装着部に設定している。調整は鏃先と鏃先から基部にかけての一部に止められる。

6は凝灰岩製の石匙である。薄い作りの大型剥片を素材とし、調整は全周にわたる。完成品であるが、一部欠損している。欠損面は抉り部からの作用による剥離痕がみられるが、第2石鏃製作跡では凝灰岩製の調整剥片はみられず、石器製作途中に欠損したものと考へがたい。おそらく完成品として搬入され、使用の際に欠損したものと考へられる。

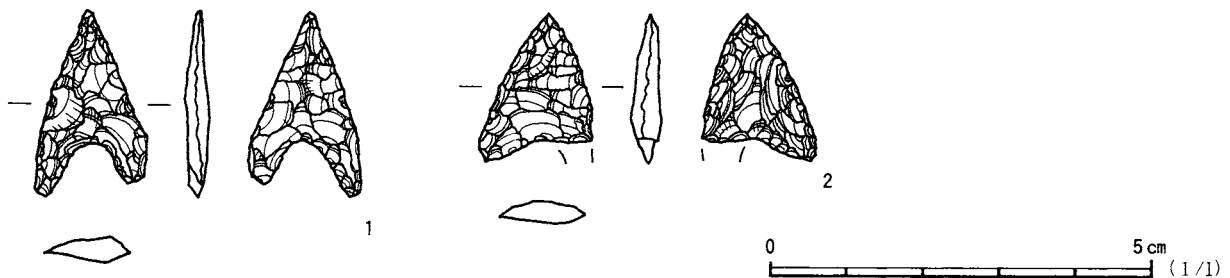
第3石鏃製作跡（第135・139図 第65表 図版53・56）

調査区の西側、標高19mの台地緩斜面部と斜面部の境界付近に位置する。遺物の分布範囲は直径4m程であり、周辺の石鏃製作跡の規模と比較するときわめて小規模である。

第3石鏃製作跡では石鏃未製品と考へられる石器は出土せず、微細な調整剥片の他は完形の石鏃2点が出土するのみである。

出土遺物

1・2は石鏃である。1は二等辺三角形を呈する形状で、装着部が発達する。鏃先は鋭く、ほぼ直線的に基部に達する。調整は全面に及び、素材剥片の剥離痕はまったくみられない。2は正三角形に近い形状であり、装着部の抉りはわずかに形成される。鏃先は鋭いが、鏃先から基部にむかってやや湾曲する。1・2いずれもチャート製である。



第139図 第3石鏃製作跡出土遺物

第4石鏃製作跡（第135・140図 第66表 図版53・56・57）

調査区西側の台地緩斜面部と斜面部の境界部分に位置し、標高20mの等高線に沿って所在する。遺物の分布は長径15m、短径8m程の範囲で集中し、地形に沿うようにくびれたような平面形状を呈する。出土する石器はすべてチャート製である。

出土遺物

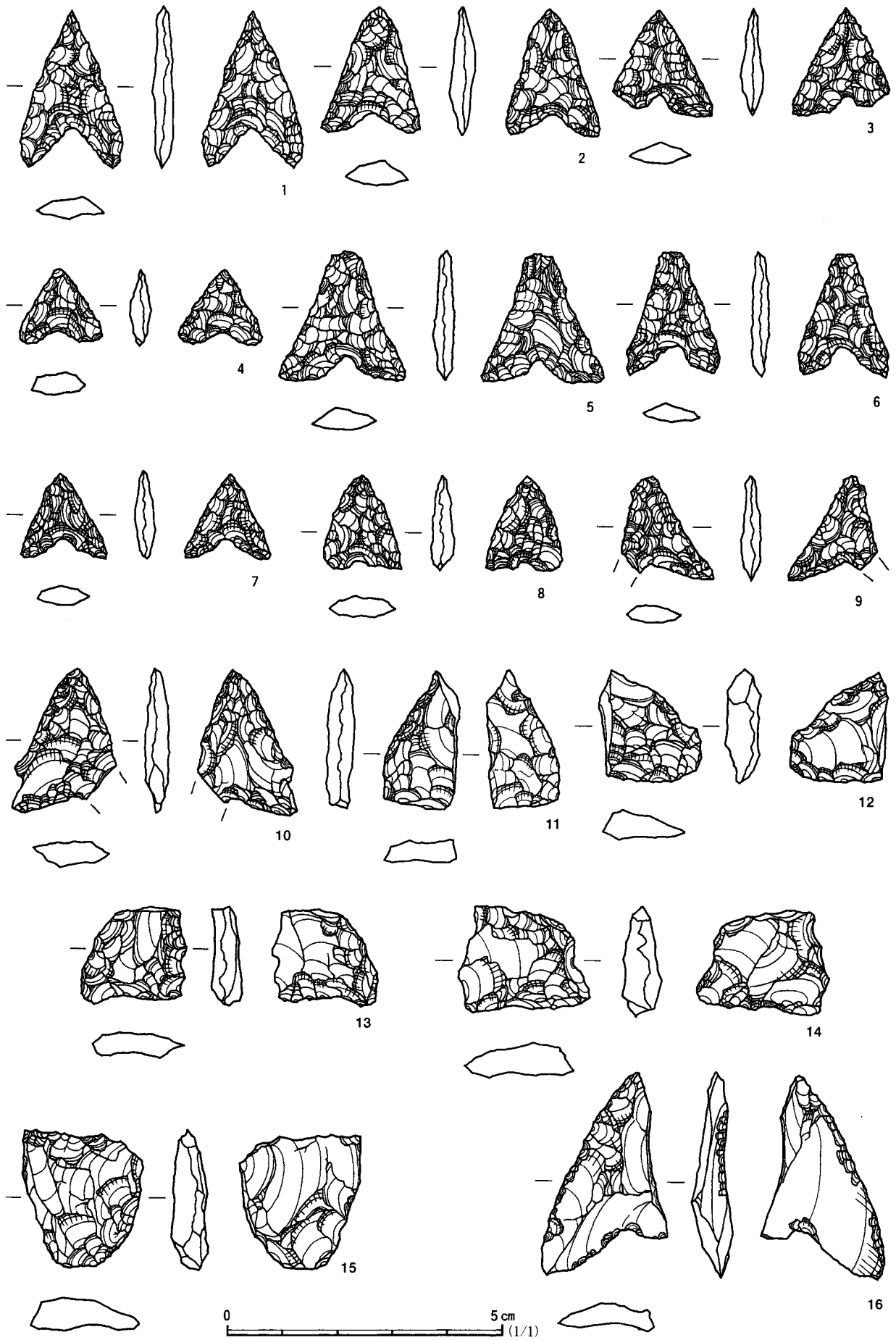
1～11は石鏃である。1は二等辺三角形形状を呈し、鏃先は鋭く尖る。鏃先から基部までは直線的であり、装着部の挟りは内側にむかって深く作出している。第4石鏃製作跡において、基部が外に広がる形状の多い石鏃のなかで唯一基部が内側に向く感が強い製品である。2は鏃先がやや鈍角となるが、途中で角度を狭め、基部に直線的につながる形状である。3・4・7・8は平面形状が正三角形に近く、鏃先から基部にかけての側縁も直線的である。装着部の挟りも3・7のように部分的に深く挟るものもみられるが、概して強調して作出されている感はない。5・6は二等辺三角形形状を呈し、鏃先は尖らず平らとなる。これは形態的なものではなく、特に5の裏面にみられるように鏃先から基部に向かい調整痕がみられることから、製作途中もしくは使用中に鏃先部分が欠損したため再調整を施したものと考えられる。9は片基部が欠損し、全体の形状は明確ではないが、基部が細く突出したものと考えられる。鏃先は調整されるものの鋭さはない。10・11は形状はいびつであるが、ほぼ全面に調整がなされ、特に先端部は細調整により鋭く作出されるため、未製品と区別してほぼ完成品として扱った。

12～14は石鏃未製品である。全周にわたり調整が施されるが、形状は一定せず、僅かに基部の作出を意図した部位がみられる他は、石鏃の未製品としての性格が窺える部位はない。12は部厚な剥片を素材とし、剥片の全周に調整を施す。正面右側縁に折断状の剥離痕がみられるが、調整段階で欠損したものと考えられる。13は裏面左側縁を除く周縁に調整が施され、特に表面には面的な調整が施される。下部は緩く挟り状に調整されるが、基部作出を目的としているものと考えられる。鏃先に該当すると考えられる部位は欠損しており、調整途中で欠損したため製品化を断念し、廃棄されたものと考えられる。14についても同様であり、先端部に該当する部位が欠落している。

15・16は調整痕の認められる剥片である。15は素材剥片の打面から右側縁にかけて調整がみられるが、形状的には石鏃などの定型的な石器には該当せず、刃器の作出を目的として調整された感がある。16は薄い作りの剥片の打面部を折断・除去し、特に左側縁に集中して調整を施す。形状は石鏃に類似するが、正面左側縁以外は周縁のみの調整にとどまり、成形を目的とした調整とは判断できないため調整痕の認められる剥片として扱った。

第65表 第3石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考	
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)		
第139図	1	11B-09, 2	石鏃	チャート	2.33	1.45	0.31	0.63	
	2	11B-07, 1	石鏃	チャート	1.93	1.43	0.40	0.88	片基部欠損



第140图 第4石鏃製作跡出土遺物

第66表 第4 石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第140図 1	11C-03, 2	石鏃	チャート	2.89	1.90	0.42	1.36	
2	11C-18, 2	石鏃	チャート	2.33	1.87	0.46	1.19	
3	11C-29, 4	石鏃	チャート	1.95	1.85	0.45	0.90	
4	11C-29, 5	石鏃	チャート	1.37	1.58	0.43	0.50	
5	11D-41, 2	石鏃	チャート	2.41	2.32	0.41	1.43	先端部欠損後再調整
6	11D-10, 1	石鏃	チャート	2.26	1.75	0.36	0.86	先端部欠損
7	11D-30, 2	石鏃	チャート	1.56	1.60	0.38	0.50	
8	11D-20, 1	石鏃	チャート	1.60	1.40	0.42	0.80	
9	11D-11, 3	石鏃	チャート	1.84	1.57	0.41	0.70	片基部欠損
10	11D-42, 1	石鏃	チャート	2.55	1.79	0.45	1.75	片基部欠損
11	11D-40, 1	石鏃	チャート	2.32	1.32	0.48	1.61	
12	11C-38, 1	石鏃未製品	チャート	1.74	2.02	0.62	1.88	
13	11C-08, 3	石鏃未製品	チャート	1.65	1.90	0.57	2.11	
14	11C-27, 1	石鏃未製品	チャート	1.93	2.30	0.84	3.40	
15	11C-16, 2	調整痕ある剥片	チャート	2.20	2.40	0.68	3.71	
16	11C-08, 2	調整痕ある剥片	チャート	2.30	3.27	0.51	2.97	

第5 石鏃製作跡 (第135・141図 第67表 図版53・57)

第5 石鏃製作跡は調査区西側の台地緩斜面部に位置し、一連の石鏃製作跡群の中心部に所在する。

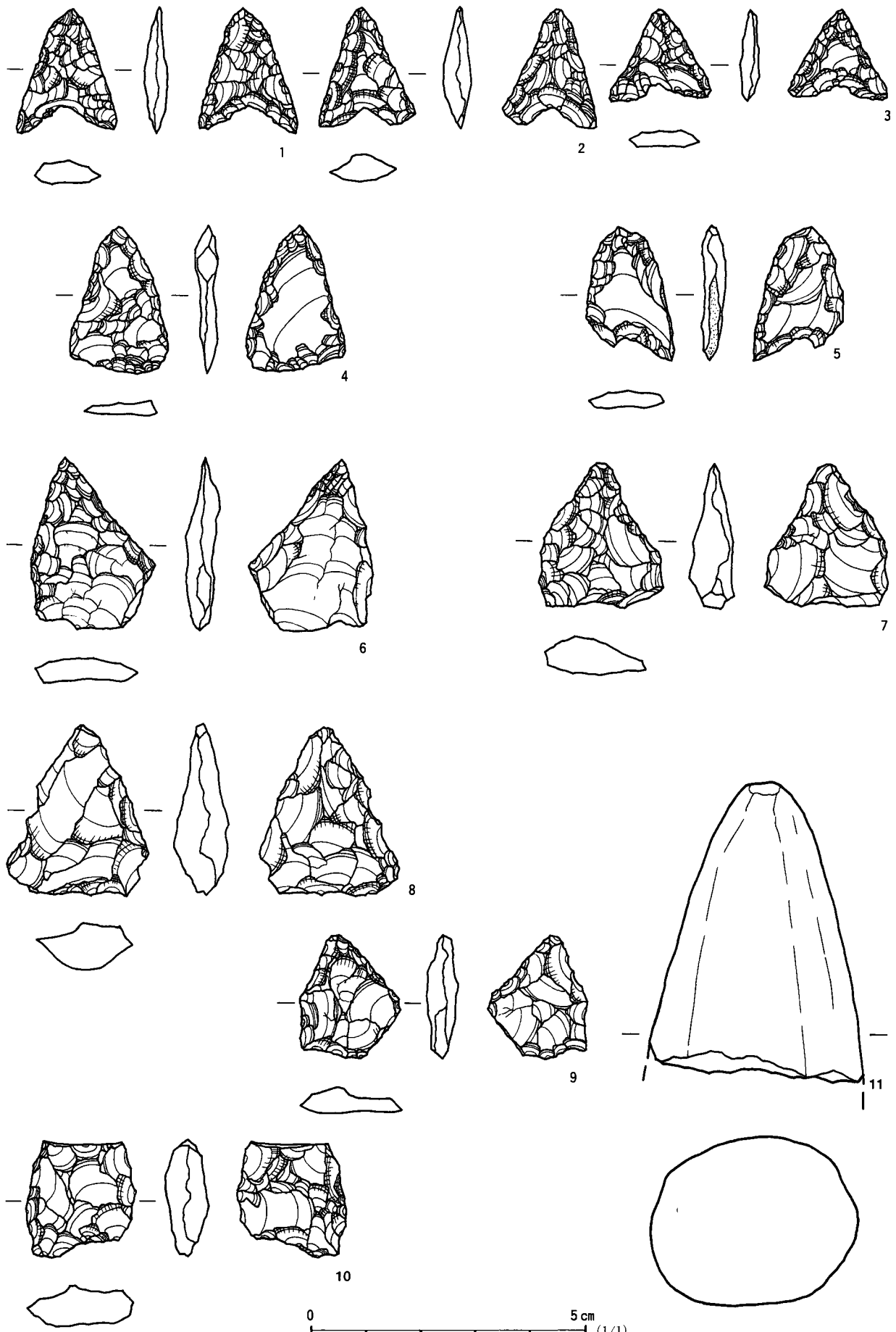
遺物は径8 m程の円形状に分布し、分布範囲内では特に集中する箇所はみられず、全体に散漫な出土状態である。出土した石器は石鏃5点、石鏃未製品5点であり、他は微細な調整剥片で占められる。また基部のみの残存であるが、砂岩製の磨製石斧が範囲内から出土している。

石器に使用される石材はほぼチャートで占められ、上記の砂岩以外の剥片石器では、変成岩製の石鏃が出土しているが、変成岩製の石器はこの1点のみであり、完成品としての搬入品と考えられる。

出土遺物

1～5は石鏃である。3の変成岩以外はすべてチャート製である。1は鏃先がやや鈍角となり、鏃先直下で傾きを変え直線的に基部に至る形状である。2も1と同様の形状を呈するが、装着部の挟りが浅く、このため基部はシャープさがなくずんぐりとした感がある。3は正三角形を呈する形状であり、装着部の挟りも表面側一方向からの調整により僅かに作出される。4の裏面には素材剥片の主要剥離面が残存し、薄い作りの縦長剥片を素材としているのが窺える。表面側の調整はほぼ全面に施されるが、主要剥離面側の調整は周縁部のみに止められる。装着部は特に作出されず、微細な調整により成形されるのみである。

6～10は石鏃未製品である。すべてチャート製である。6はやや大型の部厚な剥片を素材とし、鏃先に該当すると考えられる部位は微細な調整により鋭く作出される。石鏃の形態を表す部位はこの先端部のみであり、基部にかけては特に成形を意識して調整されることはなく、表面の側縁部に若干の微細な調整がみられる他は、明瞭な調整はみられない。特に主要剥離面側の基部に該当する部位は未調整となり、剥片が作出された当時のままである。7はほぼ全面に調整が施されるが、形状もいびつであり、特に鏃先は鋭さに欠ける。素材剥片の主要剥離面が一部にみられ、素材剥片の打面の方向は先端部に該当する方向と一致する。製品化はまず素材剥片の末端部を折断・除去することから始めたと考えられる。8は大型の部厚な剥片を素材とし、調整は主に主要剥離面側に対して行われている。表面側の調整は粗い調整が施されるのみであり、一部に剥片剥離時の剥離痕も見受けられる。9は表裏面に調整が施されるが、鏃先、装着部の



第141图 第5石鏃製作跡出土遺物

作出はなされていない。10は部厚な剥片を素材とし、表裏面共に調整が施される。装着部に該当すると考えられる部位は実測図下部であり、抉りを意識して粗い調整が施されている。欠損面がみられ、製品化の調整段階で欠損したものと考えられる。欠損したために製品化を断念したものか、欠損以後に調整が施された形跡はみられない。

11は砂岩製の磨製石斧である。基部のみの残存である。全体によく研磨されるが、断面の形状は楕円形状を呈し、特に平面を意識して研磨している意図は窺えない。

第67表 第5石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第141図 1	10C-62, 1	石鏃	チャート	2.26	1.86	0.45	1.21	
2	10C-52, 1	石鏃	チャート	2.18	1.80	0.49	1.15	
3	10C-63, 4	石鏃	変成岩	2.40	1.79	0.43	0.73	
4	10C-97, 11	石鏃	チャート	2.62	1.73	0.38	1.51	
5	10C-63, 1	石鏃	チャート	2.41	1.50	0.42	1.61	
6	10C-86, 12	石鏃未製品	チャート	3.20	2.20	0.52	3.27	
7	10C-78, 1	石鏃未製品	チャート	2.56	2.29	0.74	3.82	
8	10C-85, 1	石鏃未製品	チャート	3.02	2.53	0.94	5.79	
9	10C-56, 1	石鏃未製品	チャート	2.20	1.83	0.58	1.91	
10	10C-86, 5	石鏃未製品	チャート	2.03	1.96	0.86	3.67	
11	10C-98, 1	磨製石斧	砂岩	5.20	3.83	3.11	78.42	基部のみ遺存

第6石鏃製作跡 (第135・142図 第68表 図版53・57)

第6石鏃製作跡は調査区西側の台地緩斜面部に位置し、一本桜南遺跡で検出した石鏃製作跡のなかでも標高の高い22m付近に位置する。

遺物の出土範囲は長径10m、短径7m程の楕円形状を呈し、出土した石器はすべてチャート製である。石鏃4点の他は石匙が1点出土している。また調整痕の認められる剥片が1点出土するが、それ以外は微細な調整剥片であり、石鏃の素材剥片と考えられる大型の剥片は出土していない。

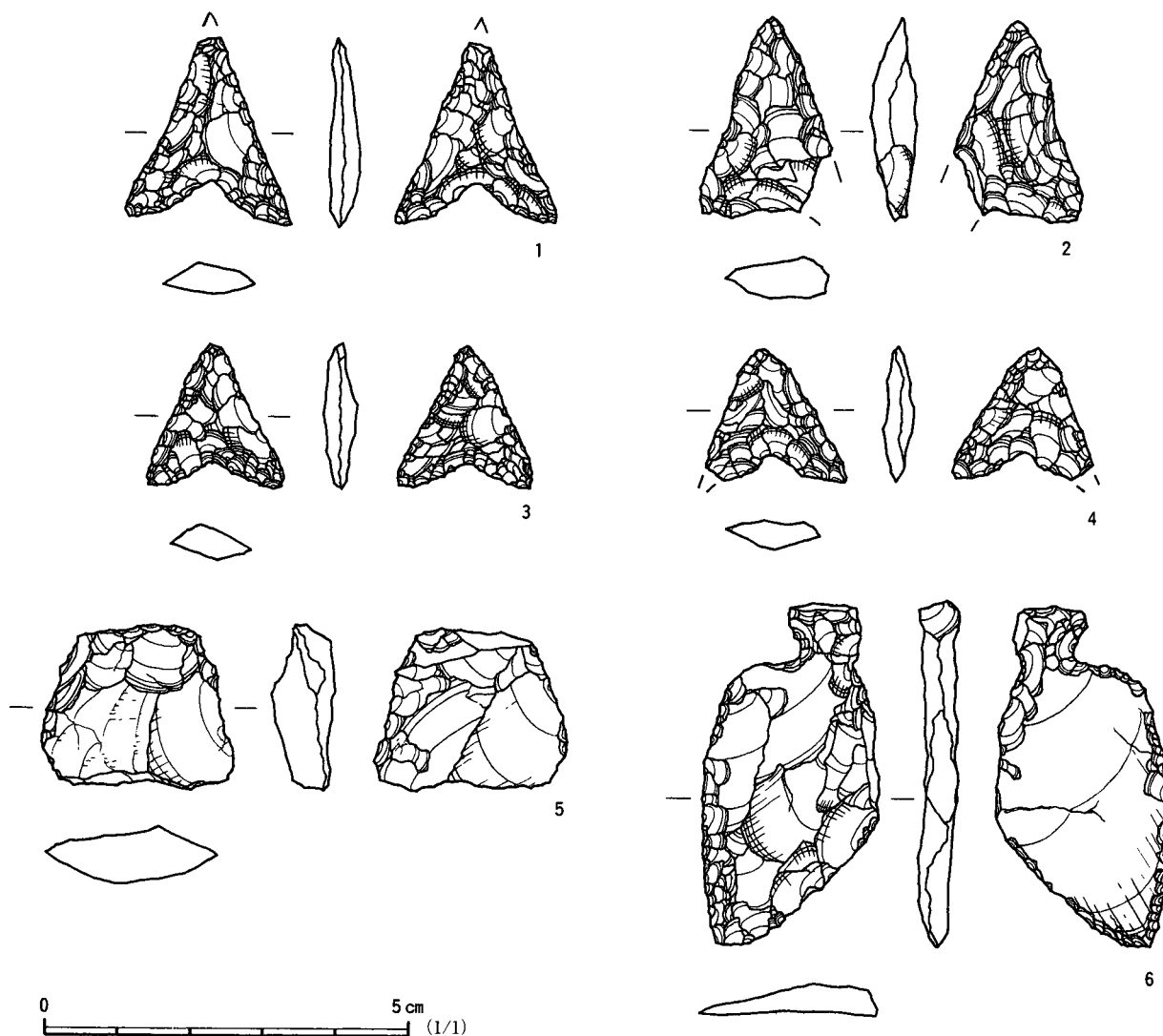
出土遺物

1～4は石鏃である。鏃先が欠損している。平面形状は正三角形に近い形状であるが、装着部の抉りが丁寧に調整されるため、基部がやや外反するような感がある。調整は全面にわたり密に行われ、素材剥片の形状を察し得ない。2は片基部が欠損する。調整は概して粗いが全面に施される。二等辺三角形を呈する形状であり、装着部は特に意識して作出される感はなく、直線的である。3は正三角形に近い形状を呈し、鏃先から基部にかけて直線的な縁辺となる。装着部の抉りは細かい調整により密に行われる。全面に調整が施されるため素材剥片の形状は不明である。4は鏃先がやや鈍角となり鏃先直下から急に鈍角となる。平面形状は正三角形に近い。調整は全面に及び、特に縁辺は微細な剥離により密に調整される。装着部は部分的に深く抉りが作出される。

5は調整痕の認められる剥片である。一部ではあるが、裏面に素材剥片の主要剥離面がみられ、不厚なやや大型の横長剥片を素材としていることが窺える。調整は剥片の形状を大きく変化させるように施され、素材剥片の周縁から求心的に調整される。素材剥片の形状を整えると同時に厚みの調整を目的としたものと考えられる。さらに部分的に細調整が施されるが刃部作出を目的とした調整とは異なり、現段階の形状で

は作出目的の器種を窺い知ることはできない。

6は石匙である。大型の縦長剥片を素材とし、表面には剥片剥離時の剥離痕、裏面には素材剥片の主要剥離面がみられ、主に周縁部の細調整により製品化される。周縁部の刃部作出の調整は密に行われ、表裏面共に施される。素材剥片の形状を大きく変化させることはなく、ほぼ原形状が素材剥片の形状と考えられる。素材剥片の打面部に該当する部位には、両側縁からの調整により深く抉りが作出される。



第142図 第6石鏃製作跡出土遺物

第68表 第6石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第142図 1	11D-15, 1	石鏃	チャート	2.46	2.25	0.41	1.43	先端部欠損
2	10D-44, 1	石鏃	チャート	2.69	1.80	0.63	2.40	片基部欠損
3	11D-16, 1	石鏃	チャート	1.90	1.84	0.45	1.05	
4	10D-97, 2	石鏃	チャート	1.88	1.93	0.41	0.94	片基部欠損
5	11D-07, 2	調整痕ある剥片	チャート	2.30	2.60	0.85	5.27	
6	10D-96, 4	石匙	チャート	4.56	2.40	0.57	5.74	

第7石鏃製作跡（第135・143図 第69表 図版53・58）

調査区の西側、石鏃製作跡が集中する地点に位置し、標高21mを測る。

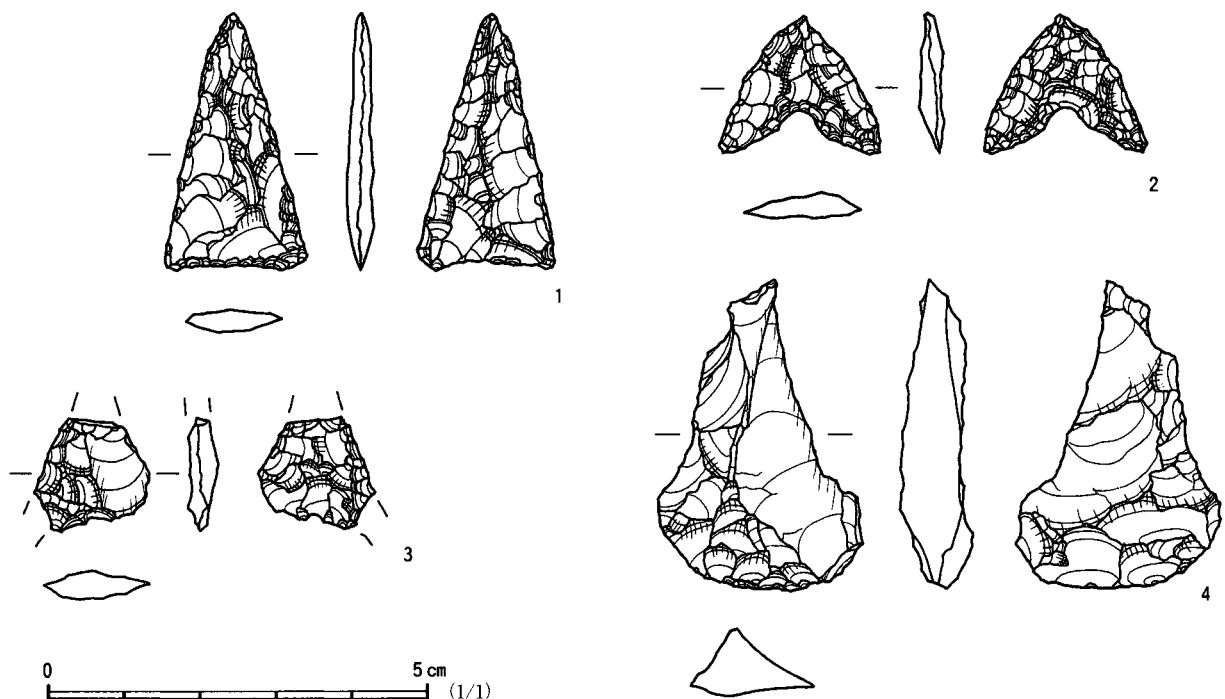
遺物は約5mの円形状の範囲内で散漫に出土する。石鏃が3点出土する以外は調整痕の認められる剥片、微細な調整剥片で占められ、石鏃未製品は出土していない。

出土した石器の石材は青灰色のチャートで占められる。

出土遺物

1～3は石鏃である。すべてチャート製である。1の形状は二辺の極端に長い二等辺三角形形状を呈する。装着部には抉りはみられず、直線的である。やや大型の薄い剥片を素材とし、調整は全面にわたり密に施される。2は二辺の短い二等辺三角形形状を呈し、基部が両側に張り出すような形状である。鏃先から基部にかけての側縁は緩くカーブを描き、装着部は部分的に抉りが深く作出される。調整は全面に及び、緻密な調整により製品化される。3は先端部および側縁部が欠損する。表裏面の調整は概して緻密であるが、表面に鏃先の方向から一枚の大きな剥離がみられる。他の剥離痕との新旧関係から鏃先欠損時に形成された剥離痕であることが理解できる。

4は調整痕の認められる剥片である。大型の剥片を素材とし、素材剥片の形状を大きく変化させるように調整されるため、素材剥片の形状を窺い知ることはできない。調整は全面に対し行われ、特に表面下部には微細な調整がみられるが、作出目的の石器器種は不明である。



第143図 第7石鏃製作跡出土遺物

第69表 第7石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第143図 1	10D-07, 1	石鏃	チャート	3.28	1.76	0.37	1.70	
2	10D-33, 3	石鏃	チャート	1.80	2.10	0.31	0.80	
3	10D-33, 8	石鏃	チャート	1.33	1.45	0.42	0.81	先端部、片基部欠損
4	10D-21, 14	調整痕ある剥片	チャート	3.97	2.68	0.91	6.30	

第8 石鏃製作跡（第135・144図 第70表 図版53・58）

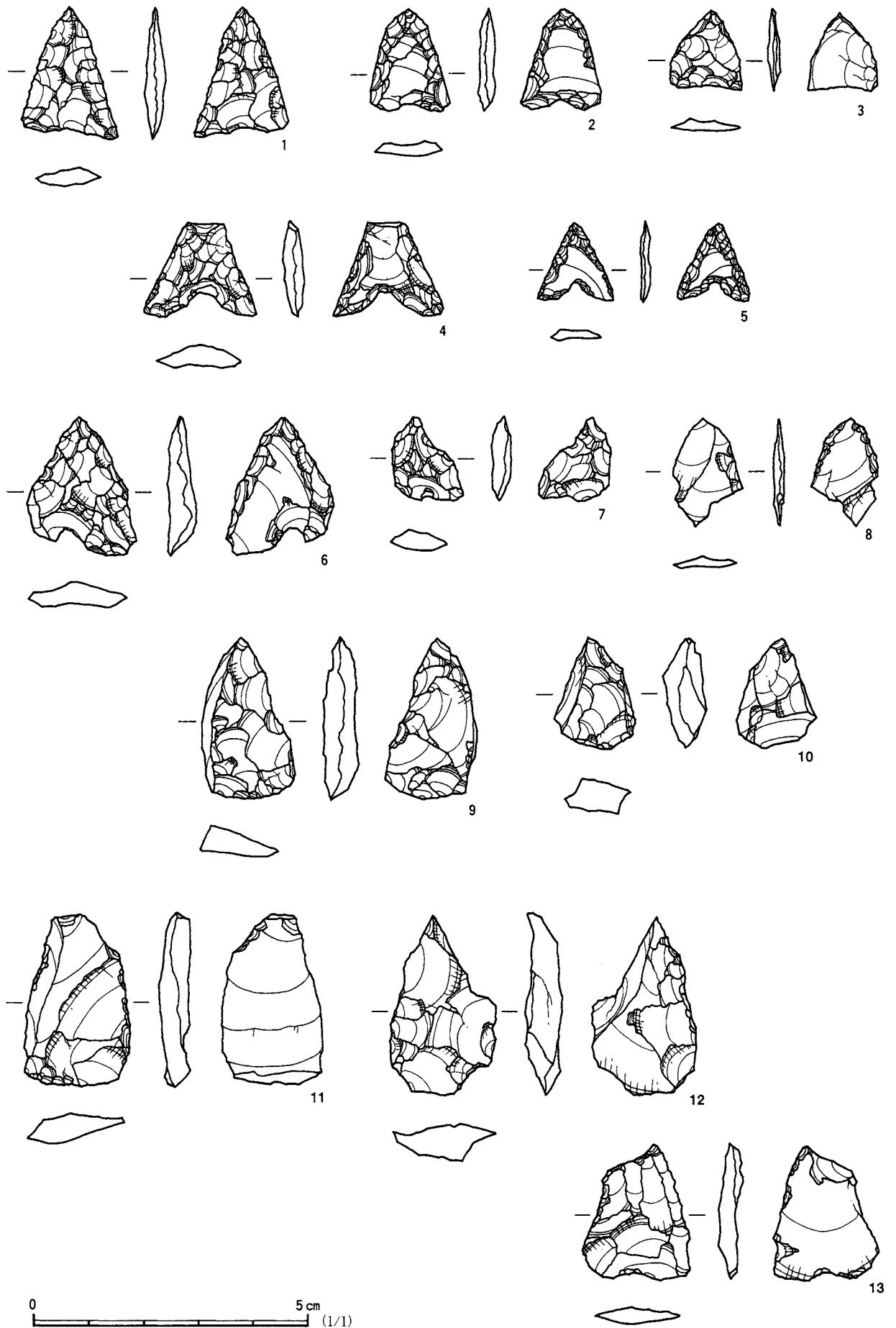
調査区の西側、石鏃製作跡が集中する台地緩斜面部に位置し、標高21mを測る。

石器は直径6mのほぼ円形に分布するが、極めて散漫な出土状況である。石鏃完成品が多く出土し、計11点出土する。他には石鏃未製品3点、調整痕の認められる剥片2点が含まれるが、石鏃の素材と考えられるような形状の剥片はみられない。石器に使用される石材はすべてチャートである。

出土遺物

1～5は石鏃である。平面形状は一定せず様々な形状の石鏃が見受けられる。1は二等辺三角形を呈する形状であり、鏃先直下がやや肩を張る。縁辺部は基部まで直線的となる。装着部は僅かに窪む感があるが、装着部の抉りを特に意識して調整された痕跡はみられない。形状はほぼ左右線対称となるが、全面に施される調整は緻密ではなく、特に縁辺部の細調整は部分的に行われる程度である。2の裏面には素材剥片の主要剥離面が明瞭に残る。素材剥片の末端部側を先端部に設定し、調整は周縁の形状を整えるように微細な調整が施される。鏃先直下がやや肩が張る五角形状を呈し、装着部にはやや抉りもみられるが鮮明ではない。3は小型の薄い剥片を素材とし、素材剥片の主要剥離面側は無調整である。平面形状は正三角形を呈し、装着部の抉りはほとんど形成されない。4は鏃先が欠損するが、二等辺三角形形状を呈すると考えられる。両側縁は直線的であり、装着部には深く抉りが作出される。調整は密に施され、特に周縁部は細調整により形状を整えている。5は小型の石鏃であり、表裏面共に素材剥片として作出された当時の剥離を明瞭に残している。平面形状は正三角形を呈し、装着部には深く抉りが作出される。鏃先は鋭く縁辺部は直線的である。調整は周縁部のみにとどまり、微細な調整により形状を整えている。

6～13は石鏃未製品である。6は薄い作りの大型剥片を素材とし、素材剥片の打面側を除去した後に調整を施したものである。先端部は表裏面からの調整により作出されるが、他の部位の調整は、主要剥離面側は側縁のみに止められる。この段階から装着部に該当すると考えられる部位には抉りが作出される。7は全面に粗い調整が施されるが、形状については明瞭な石鏃の形状を呈するものではなく、おそらく石鏃製作途中で欠損し遺棄されたものと考えられる。8は薄い小型剥片を素材とし、調整は鏃先および縁辺部のみにとどまる。素材剥片そのものが小型であるため、周縁の調整のみ施し遺棄されたものと考えられる。9は大型の部厚な剥片を素材としている。剥片作出時の剥離がみられないことから、素材剥片の形状を大きく変えていると考えられる。この段階ではまだ形状を整えるための調整が施されるのみであるが、僅かに鏃先を意識して尖頭部を作出していることで石鏃未製品として定義付けできる。10は部厚な剥片を折断により形状を整え、調整を施したものである。表面側には折断後の調整画面的に施されるが、裏面については折断面が面積的に大半を占める。11は縦長剥片の末端部側を折断・除去し、側縁に微細な調整を施したものである。素材剥片の打面を残し、打面の方向を鏃先に想定している。主要剥離面の打面付近に微細な調整がみられるが、現状では鏃先は明確に作出されていない。また装着部付近には折断面より数回調整を施し成形している痕跡がみられる。12は大型剥片を折断により成形し、さらに両側縁からの調整により製品化を行っている。現状では石鏃の形状に近づけるための調整のみであり、平面形状、断面形状共に粗雑である。13は薄いやや縦長の剥片を素材とし、素材剥離の打面側を鏃先の方向として調整を行っている。打面部は調整により除去されるが、明確な鏃先は未だ形成していない。表裏面共に剥片剥離時の剥離がそのほとんどを占め、剥片剥離後の調整は部分的に周縁部のみに止められる。



第144図 第8石鏃製作跡出土遺物

第70表 第8石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第144図 1	9D-73, 2	石鏃	チャート	2.40	1.68	0.38	1.12	
2	9D-72, 8	石鏃	チャート	1.82	1.43	0.31	0.83	
3	9D-52, 12	石鏃	チャート	1.39	1.45	0.20	0.32	
4	9D-50, 3	石鏃	チャート	1.70	2.00	0.35	1.00	先端部欠損
5	9C-49, 1	石鏃	チャート	1.44	1.42	0.21	0.27	
6	9D-71, 1	石鏃未製品	チャート	2.43	1.88	0.43	2.08	
7	9D-53, 15	石鏃未製品	チャート	1.55	1.10	0.40	0.69	
8	9D-53, 2	石鏃未製品	チャート	1.85	1.26	0.25	0.49	
9	9D-72, 10	石鏃未製品	チャート	2.85	1.60	0.59	2.67	
10	9D-51, 53	石鏃未製品	チャート	1.30	1.80	0.73	1.66	
11	9D-72, 2	石鏃未製品	チャート	3.05	1.90	0.49	3.41	
12	9D-51, 35	石鏃未製品	チャート	3.10	1.95	0.72	3.66	
13	9D-62, 4	石鏃未製品	チャート	2.40	1.92	0.38	1.47	

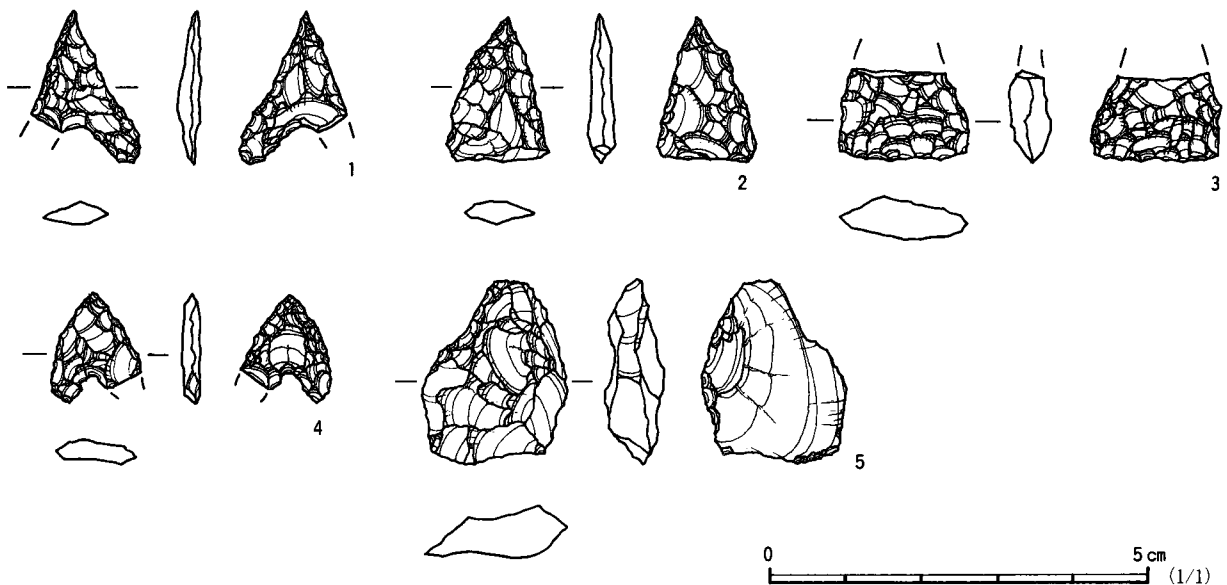
第9石鏃製作跡 (第135・145図 第71表 図版54・58)

調査区の南側、標高20mの緩斜面部に位置し、一本桜南遺跡で検出された他の石鏃製作跡の分布から離れて所在する。遺物は直径5m程の円形状に分布するが、きわめて散漫な出土状況である。

石鏃が5点出土する他は、石鏃未製品と考えられる石器が1点出土する。また他の石鏃製作跡ではほとんどみられない黒曜石製の石器を含み、石鏃1点、石鏃未製品1点がこれに該当する。一本桜南遺跡で検出した各石鏃製作跡内ではチャート製以外の石器はほとんどが搬入品と考えられるが、唯一第9石鏃製作跡で出土する黒曜石製の石器は、上記の石器以外に碎片、調整剥片が認められるため、第9石鏃製作跡内ではチャート以外の石材による石鏃製作の痕跡が明瞭に窺える。

出土遺物

1～4は石鏃である。4の黒曜石製の石鏃以外はチャート製である。1は敵部が欠損する。調整は全面にわたり、特に鏃先は鋭利に作出される。側縁部はやや内側に弧を描きながら基部に向かう。2は全面に調



第145図 第9石鏃製作跡出土遺物

調整が施されるが、ややいびつな感がある。両側縁は直線的であるが、線対称とはならない。装着部は側縁部に比べ調整が粗雑である。特に装着部については抉りは作出されない。3は大型の石鏃であるが先端部付近が欠損している。2と同様の形状を呈するものと考えられ、全体的に調整は密に施されるが、左右線対称にはならないものと考えられる。4は黒曜石製の小型の石鏃で、片基部が欠損している。小型であるが調整は密に全面に対して施され、特に鏃先は鋭利に作出される。装着部の抉りは深く作出される。

5は黒曜石製の石鏃未製品である。横長の部厚な剥片を素材とし、素材剥片の打面部は調整により除去される。主要剥離面および剥片剥離時の剥離痕が表裏面のほとんどの部位を占め、調整は鏃先に該当する部位と鏃先から側縁部にかけての一部のみに止められる。

第71表 第9石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第145図 1	15H-20, 6	石鏃	チャート	1.90	1.40	0.30	0.41	片基部欠損
2	15H-30, 8	石鏃	チャート	1.88	1.34	0.37	0.78	
3	15H-20, 28	石鏃	チャート	1.15	1.70	0.58	1.39	先端部欠損
4	15H-20, 10	石鏃	黒曜石	1.32	1.16	0.29	0.34	片基部欠損
5	15H-21, 6	石鏃未製品	黒曜石	1.80	2.43	0.71	2.42	

第10石鏃製作跡 (第135・146図 第72表 図版54・58)

調査区の南側、谷津に向かい半島状に突出した台地くびれ部に位置し、後述する第11石鏃製作跡に隣接する。標高21mを測る。

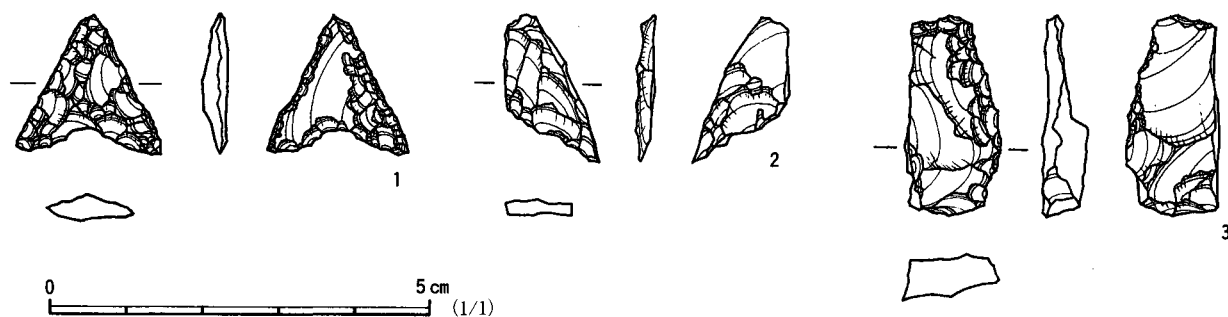
出土した石器の石材はすべてチャート製であり、石鏃1点、石鏃未製品1点、調整痕の認められる剥片1点以外はすべて微細な調整剥片で占められる。

出土遺物

1は石鏃である。平面形状は正三角形を呈する。表面の調整はほぼ全面にわたり、微細な調整により形状が整えられる。裏面は素材剥片の主要剥離面を残し、調整は両側縁および装着部に施される。装着部の抉りは深く抉られず、僅かに窪む程度である。

2は石鏃未製品である。薄い剥片を素材とし、素材剥片の打面側を調整により除去している。調整は表面および裏面の一部にみられるが、形状を整えるための調整であり、現時点では細調整の施された形跡はみられない。

3は調整痕の認められる剥片である。部厚な大型剥片を素材とし、折断により形状を整えた後、片側縁から微細な調整を施す。調整部位の断面形状は鋭角ではなく、むしろ直角に近い。成形のための調整より刃部作出のための調整と考えられる。



第146図 第10石鏃製作跡出土遺物

第72表 第10石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第146図 1	16N-28, 1	石鏃	チャート	1.75	1.82	0.35	0.74	
2	16N-12, 1	石鏃未製品	チャート	2.07	0.89	0.36	0.50	
3	16N-25, 2	調整痕ある剥片	チャート	2.53	1.32	0.51	1.73	

第11石鏃製作跡 (第135・147図 第73表 図版54・59)

調査区の南側、小支谷が合流する地点に形成された台地突出部に所在する。標高21 m程の段丘状の平坦部であり、第10石鏃製作跡に隣接する。

遺物は長径10 m、短径 8 mの楕円形状を呈し、範囲内に散漫に石器が出土する。石鏃 2点、石鏃未製品 2点の他は微細な調整剥片で占められる。剥片石器の石材はすべて青灰色のチャートであり、唯一石英斑岩製の被熱した礫が 1点出土する。

出土遺物

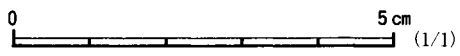
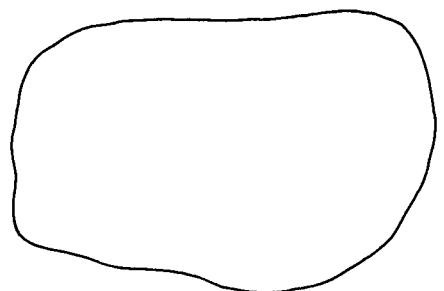
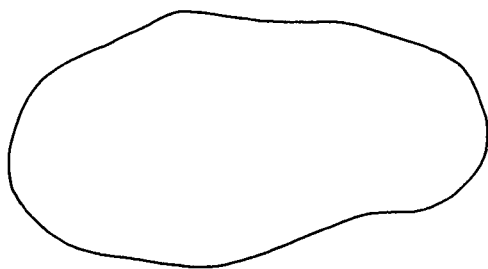
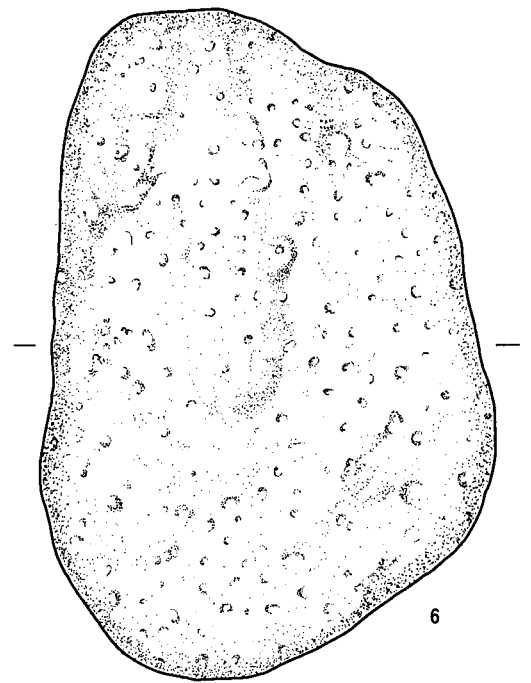
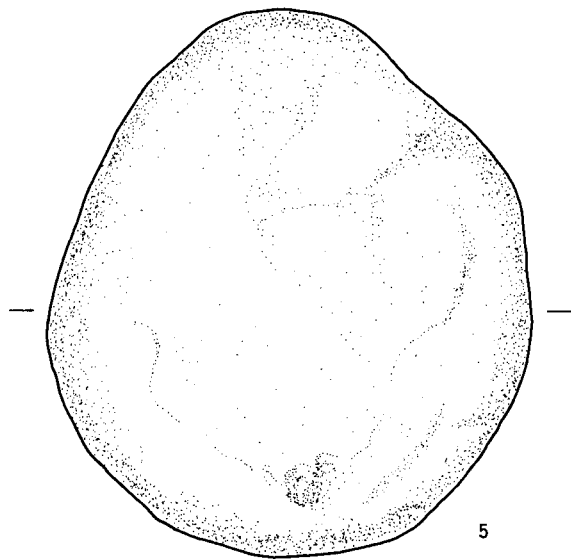
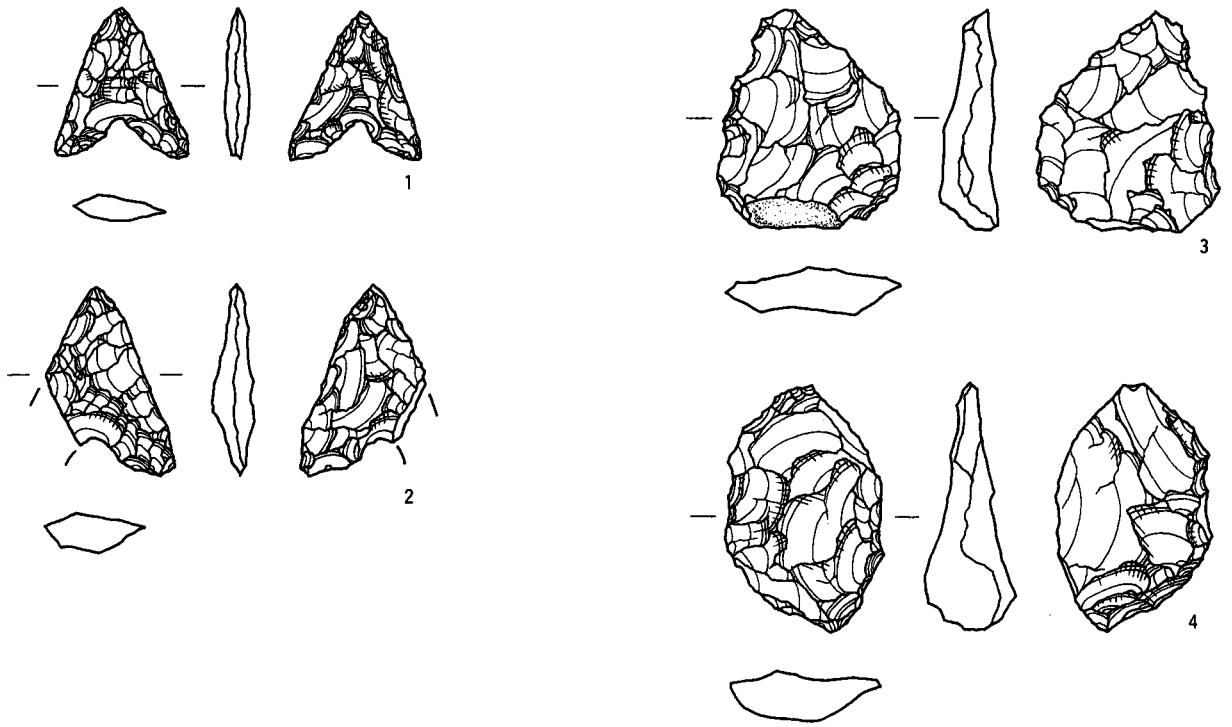
1・2は石鏃である。両者ともチャート製である。1は二等辺三角形形状を呈し、装着部の抉りは中心に向かって大きく抉るように作出される。調整は表裏面共に前面にわたり施され、素材剥片の作出された時点の剥離痕はまったくみられない。2は片基部が欠損するが、1の石鏃と同様の形状を呈するものと考えられる。大型の部厚な剥片を素材としていることが窺えるが、表裏面共に全面調整が施されるため、詳細は不明である。

3・4は石鏃未製品である。3は大型の部厚な剥片を素材とし、調整は全面に施される。このため素材剥片の形状は明確ではないが、正面図下端にみられるように原石面を有する。原石面の表面の様子から、直径 4 m内外の扁平礫を母岩としていることが窺え、母岩を打割るように作出した剥片を素材としているものと考えられる。全面に施される調整は概して粗いものであり、形状を整える調整途中で作業を終了している。4は部厚な剥片を素材とするが、3のように小型の扁平礫を母岩として作出されたものではない。調整はほぼ全面にわたり行われ、素材剥片の厚みを除去する目的の剥離痕がみられる。

5・6は礫である。5はチャート製、6は石英斑岩製である。両者とも被熱するが、被熱の度合いは著しいものではなく、表面の色調が赤みを帯びる程度であり、器表面の様子が変化するほどではない。5のチャート礫はいびつな円形を呈する平面形状であり、やや厚みがあるが扁平礫の範疇に含まれる。チャートは第11ブロックで剥片石器に多用される石材であるが、器表面には敲打痕等の痕跡はまったくみられない。母岩として搬入されたものの可能性が高いが、被熱していることも考慮すると断定はできない。6の石英斑岩製の礫はいびつな形状であり、表面には敲打痕、擦痕等はまったくみられない。

第73表 第11石鏃製作跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石材	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第147図 1	16P-75, 3	石鏃	チャート	1.90	1.75	0.31	0.96	
2	16P-66, 3	石鏃	チャート	2.40	1.55	0.55	1.45	片基部欠損
3	16P-66, 2	石鏃未製品	チャート	2.85	2.50	0.65	5.14	
4	16P-76, 2	石鏃未製品	チャート	2.80	2.50	1.10	5.84	
5	16P-76, 4	礫	チャート	7.13	6.42	3.32	196.55	
6	17P-23, 1	礫	石英斑岩	8.67	6.05	3.54	245.49	



第147図 第11石鏃製作跡出土遺物

(5) その他の遺物

グリッド出土遺物 (第148～151図 第74表 図版59～62)

一本桜南遺跡の調査では、前述した縄文時代石鏃製作跡以外から、該期の石器が多数出土している。石器の器種は石鏃が主であり、また石鏃製作跡から出土する石鏃未製品と同様の石器が含まれる。これらは11か所の石鏃製作跡に帰属するものと考えられるが、出土地点を明確に把握することができず、よってここではグリッド出土の石器として扱うこととした。

出土した石鏃の石質は大半がチャート製であり、これらの石鏃は、石鏃製作跡とほぼ同時期の縄文時代前期に属すると考えられる。石鏃の他には軽石、磨製石斧がみられるが、各1点出土するのみである。また、磨石、敲石、石皿などの礫石器はまったくみられず、極端に礫石器の出土例が少ない点が特徴である。

1～15は石鏃である。6・8・14の黒曜石製、9の頁岩製の他はチャート製である。すべて表裏面全面にわたり調整が施され、器厚も薄く作出される。一括資料のため形状は多様であるが、前述した各石器製作跡で出土する石鏃とそれぞれ対応しており、形状の点からは時期差は特に感じられない。1～7は装着部に大きく抉りが設けられる石鏃である。鏃先はすべて鋭く作出され、鏃先から基部にかけての側縁部は直線的なものが多い。基部の形状は外に張り出す感のあるもの(5・7)も若干みられる。8から15は前述した一群と比較して装着部の抉りはそれほど深く作出されていない。平面形状は概して二辺の長い二等辺三角形を呈し、特に11～13についてはその傾向が強く感じられる。鏃先は一様に鋭く作出されるが、鏃先から基部にかけての側縁部は緩く弧を描くものが多い。

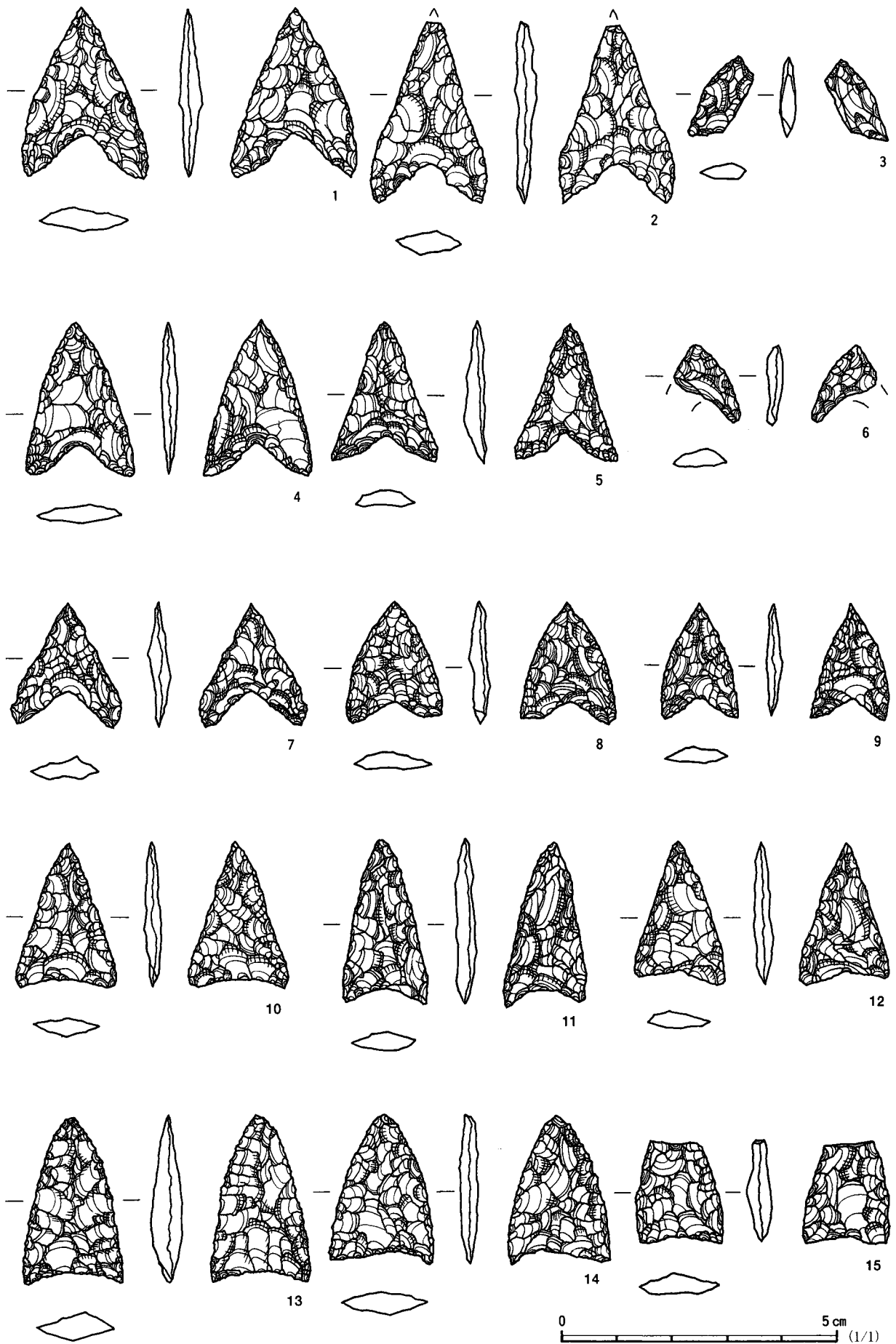
16～19は石鏃未製品である。すべてチャート製である。16は部厚な剥片を素材とし、剥片の打面側を基部に想定し調整を行っている。表面の調整は全面にわたり施されるが、主要剥離面側の調整は鏃先付近を集中的に調整するのみである。17は部厚な大型剥片を素材とし、16と同様に打面側を基部に設定する。調整は表裏面ほぼ全面に及ぶが、一部裏面には素材剥片の主要剥離面が残る。形状を整えるための調整が施されるのみであり、鏃先の作出はなされず全体にいびつな形状である。18は表裏面全面に調整が施され、形状も石鏃にほぼ調整される。表面右側の基部が欠落するが、調整段階で欠損したものと考えられ、このため製品化を断念した可能性が考えられる。19の一部には原石面が明瞭に観察され、石器製作跡で出土例があるように、小型の扁平礫を母岩とし、打割するように作出された剥片を素材としていることが窺える。上部の欠損面は原石の節理面であり、調整途中で欠損したものと考えられる。

20は成形痕の認められる軽石である。浮子などの製品と考えると縦横とも2.2mという大きさは小さく、別の用途が考えられるが詳細は不明である。全体に研磨により成形され、特に下面は面的に擦られるため、断面形状は正三角形に近い形状となる。

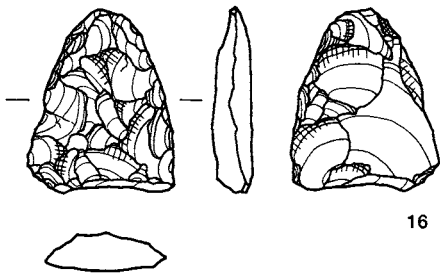
21は緑泥片岩製の磨製石斧である。基部側は欠損し、刃部付近のみ遺存する。全体によく研磨され製品化されるが、普遍的によく見られる成形時の擦痕はみられない。

グリッド出土土器

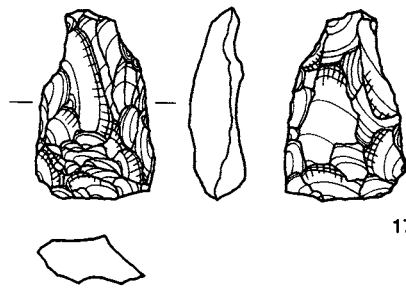
一本桜南遺跡から出土した縄文土器は、炉穴出土の早期条痕文系土器以外の時期に属するものは非常に少なく、各時期で1・2個体を確認できる程度である。早期条痕文系土器以外では前期浮島・興津期の個体数が比較的多いが、前述した石鏃製作跡が前期に形成されたと考えられるため、関連があるものと考えられる。



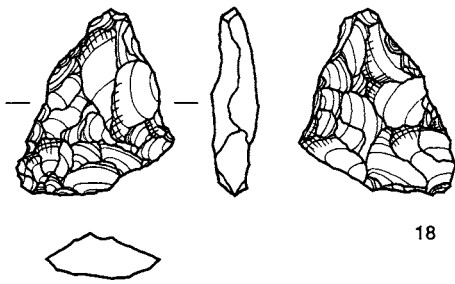
第148図 グリッド出土遺物(1)



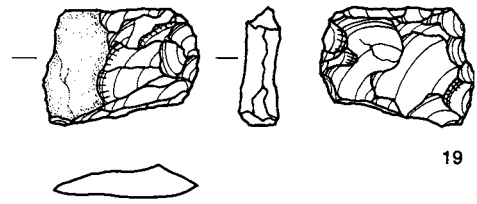
16



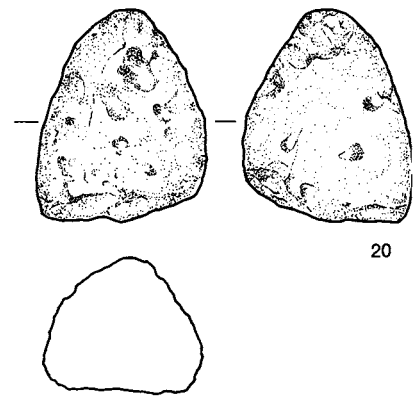
17



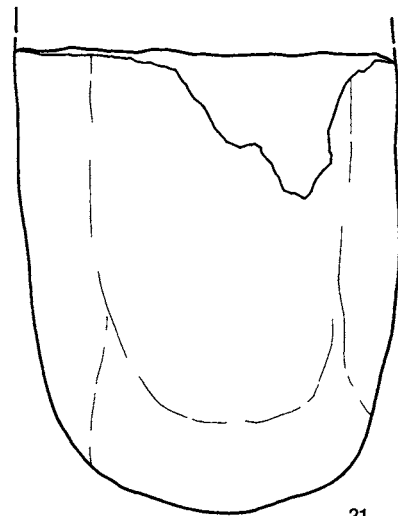
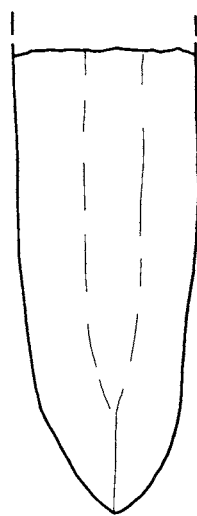
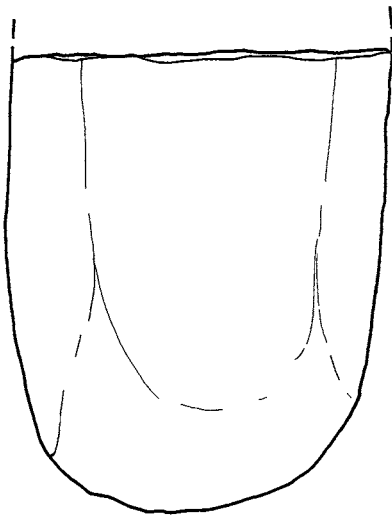
18



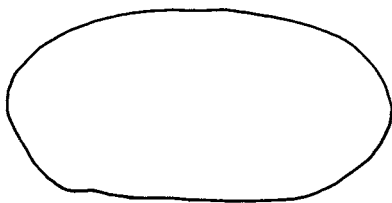
19



20



21



第149図 グリッド出土遺物(2)

第74表 グリッド出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	器種	石質	計測値				備考
				長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	
第148図 1	10E, 5	石鏃	チャート	3.17	2.31	0.45	1.95	
2	7E-83, 3	石鏃	チャート	3.32	2.13	0.43	1.97	先端部欠損
3	17Q-02, 13	石鏃	チャート	1.47	1.24	0.34	0.35	片基部欠損
4	7E, 2	石鏃	チャート	2.77	1.96	0.35	1.34	
5	16N, 3	石鏃	チャート	2.51	1.97	0.42	1.05	
6	表採	石鏃	黒曜石	1.32	1.29	0.32	0.28	片基部欠損
7	11G, 2	石鏃	チャート	2.23	2.03	0.36	0.85	
8	10D, 5	石鏃	黒曜石	2.18	1.79	0.35	1.02	
9	16P-68, 79	石鏃	頁岩	2.10	1.42	0.32	0.60	
10	8K, 1	石鏃	チャート	2.60	1.82	0.31	1.27	
11	15Q, 1	石鏃	チャート	2.91	1.57	0.43	1.41	
12	8J, 1	石鏃	チャート	2.56	1.70	0.36	1.18	
13	8J-92, 2	石鏃	チャート	2.98	1.83	0.59	2.54	
14	15P, 3	石鏃	黒曜石	2.72	1.95	0.35	1.85	
15	16P, 3	石鏃	チャート	1.87	1.61	0.50	1.22	先端部欠損
第149図 16	11C, 8	石鏃未製品	チャート	2.46	1.96	0.55	2.63	
17	14E-15, 1	石鏃未製品	チャート	2.46	2.00	0.61	3.10	
18	14E-15, 1	石鏃未製品	チャート	2.45	1.60	0.75	2.80	
19	14E-24, 1	石鏃未製品	チャート	2.00	1.60	0.51	1.65	
20	表採	軽石製品		2.29	2.26	1.82	2.54	
21	8G, 3	磨製石斧	緑泥片岩	6.15	5.02	2.50	127.47	

1・2は早期沈線文系土器であり、田戸上層式土器である。口縁部は波状となり単位は3単位である。胴部には沈線により文様区画が設けられ、区画内には貝殻腹縁の圧着による施文がなされる。胎土は密で1と同様の形状、文様構成と考えられる。

3の胎土中には石英粒が多く混入する。底部のみの遺存のため明確ではないが、早期条痕文系土器の子母口式土器と考えられる。

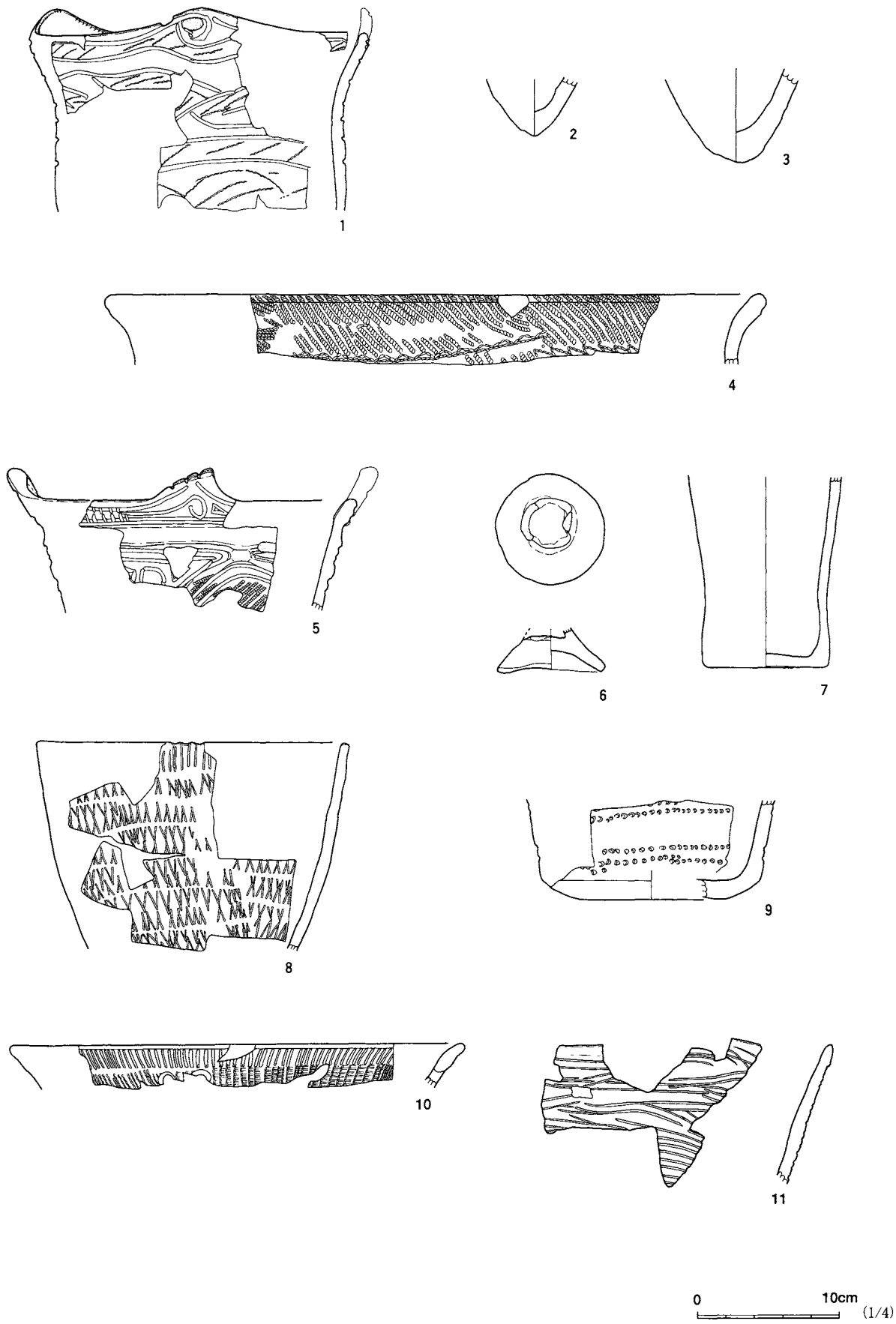
8・10・11は前期浮島・興津式土器である。8は胴部中位からやや内彎しながら立ち上がる器形であり、器厚はほぼ一定である。口縁部外面にはヘラ状工具による縦位の刻目が、胴部には貝殻腹縁のロッキング文が施される。10は口縁部のみの遺存であり、口縁直下にはヘラ状工具による刻目および貝殻腹縁の連続押し引きによる文様が施文される。11は胴部上位から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形であり、器厚はほぼ一定である。胴部外面にはヘラ状工具による横位の沈線が施されるが、特に文様区画を意識しているようすは窺えない。

9は前期諸磯式土器である。底部は平底であるが、胴部の立ち上がり直前でやや丸みをもつ器形である。胴部下位には円形竹管による押圧文が横位に施文される。

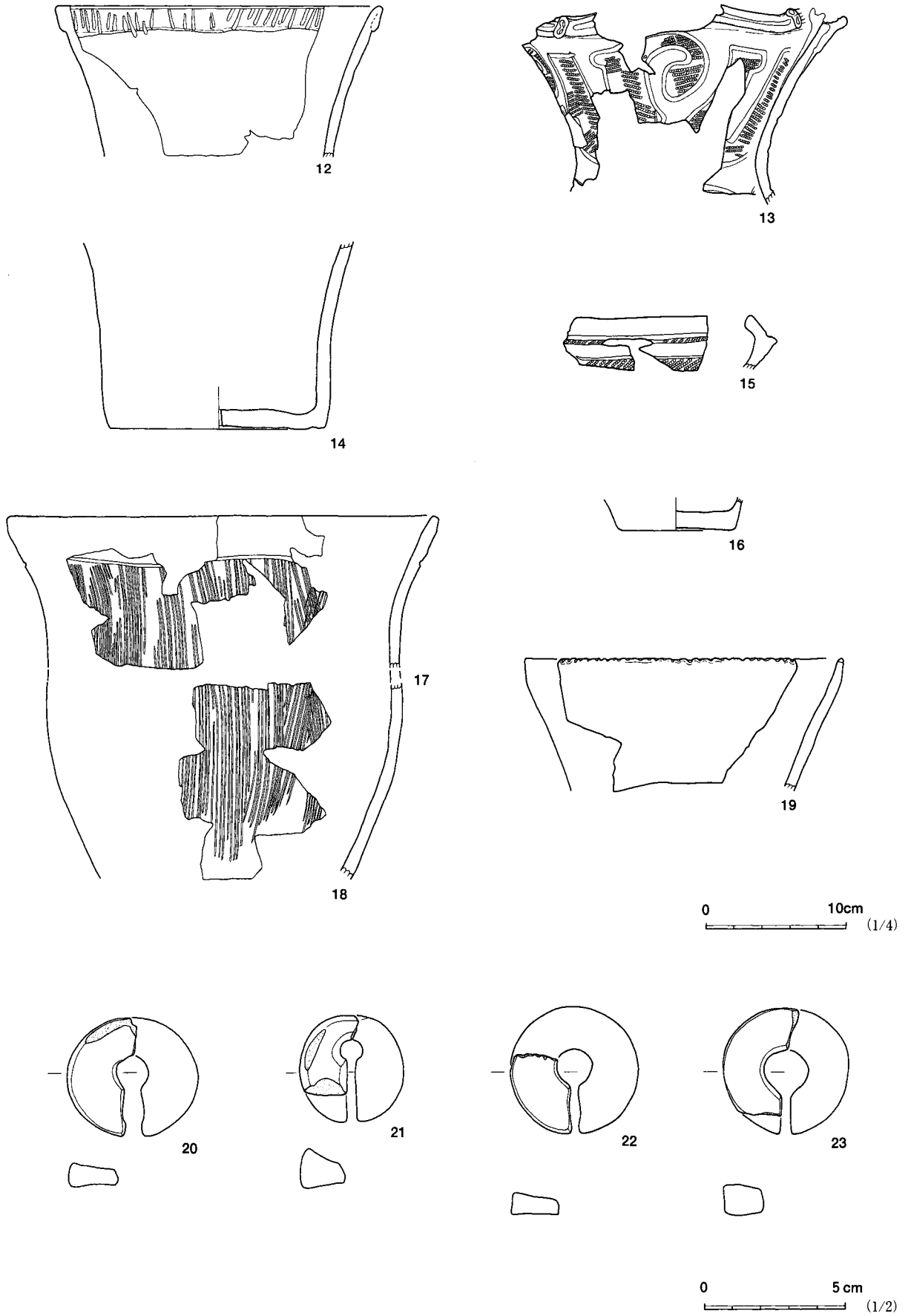
4は前期末から中期初期に属するものと考えられ、急激に外反する口縁部外面には縦位のRL単節縄文が施文される。胎土は密で焼成は良好である。

5は中期五領ヶ台式土器であり、口縁部には4単位の装飾突起が設けられる。文様は口縁部が沈線および刺突、胴部は沈線による文様区画内にRL単節縄文が施文される。口縁部文様帯と胴部文様帯の間には明確な無文帯が設けられる。胎土中に雲母粒を大量に含み焼成は良好である。

6・7および12～19は後期に属する土器の一群である。



第150図 グリッド出土遺物(3)



第151図 グリッド出土遺物(4)

6は蓋と考えられるが時期は断定できない。把手の部分は欠損している。7・14・16は無文の底部破片である。底部から胴部下位にかけては垂直に立ち上がり、胴部中位からは外反する器形であり、器厚は一定である。胎土は密で焼成は良好である。

12・17・18・19には細沈線による施文がみられる。口縁部付近が外反器形である。17・18は口縁部は無文であるが、12はヘラ状もしくは棒状工具による沈線、19はヘラ状工具による刻目が施される。17・18は口縁部直下に横位の沈線を巡らし、横位の沈線以下、胴部については縦位の細沈線が施される。焼成はいずれも良好である。

13・15は称名寺式土器である。胴部がかなり括れる器形であり、口縁部は急激に内彎する。文様は沈線による区画内にいずれもLR単節縄文を充填している。胎土は密で焼成は良好である。

20～23は土製の玦状耳飾である。完形品はなくいずれも欠損しており、遺存度は50%以下である。断面形状は台形を呈し、器表面はよく磨かれる。文様等はまったくみられない。

3 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居跡60軒である。他の遺構は確認されなかった。

(1) 竪穴住居跡

調査区の南半部に分布し、特に、西側から南側の斜面に沿って集中する。内部施設として、炉跡、柱穴、貯蔵穴などを持つ比較的大型の住居跡と、内部施設が検出されない、または、内部施設として炉跡か炉跡状で床面への掘り込みがほとんどない焼土遺構を持つ小型の住居跡に区別される。出土遺物からすべて古墳時代前期の住居跡と考えられる。

014号住居跡（第153図 第75表 図版63・96）

遺構 調査区西部に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.00m×1.84mで、検出面からの深さは0.44mである。床面は平坦である。柱穴などの内部施設は検出されなかった。古墳時代前期の土器が出土している。遺物は少量であるが、炉跡に甕が正位に置かれた状態で検出された。

遺物 1は土師器甕である。ややしまった頸部から口縁部が大きく広がって立ち上がる。折り返し口縁で、口縁部端下に折り返し部の接合痕がある。口縁部端に棒状工具による刻み目が施される。

第75表 014号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段－内面、下段－外面） 口縁－胴部（体部）－底部	胎土	色調	焼成
1	3	甕	口径 15.9 底径 10.4 高さ 10.4 最大径14.1	40%	ヘラナデー－ヘラナデー－ ヘラナデー－ナデー－ヘラナデー－	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色 黒斑あり	良好

015号住居跡（第153図 第76表 図版63・96）

遺構 調査区西部、014号住居跡の西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.39m×2.15mで、検出面からの深さは0.43mである。床面は平坦である。柱穴などの内部施設は検出されなかった。古墳時代前期の土器が少量出土している。

遺物 1は土師器甕の口縁部片と考えられる。表面に縄文が施される。

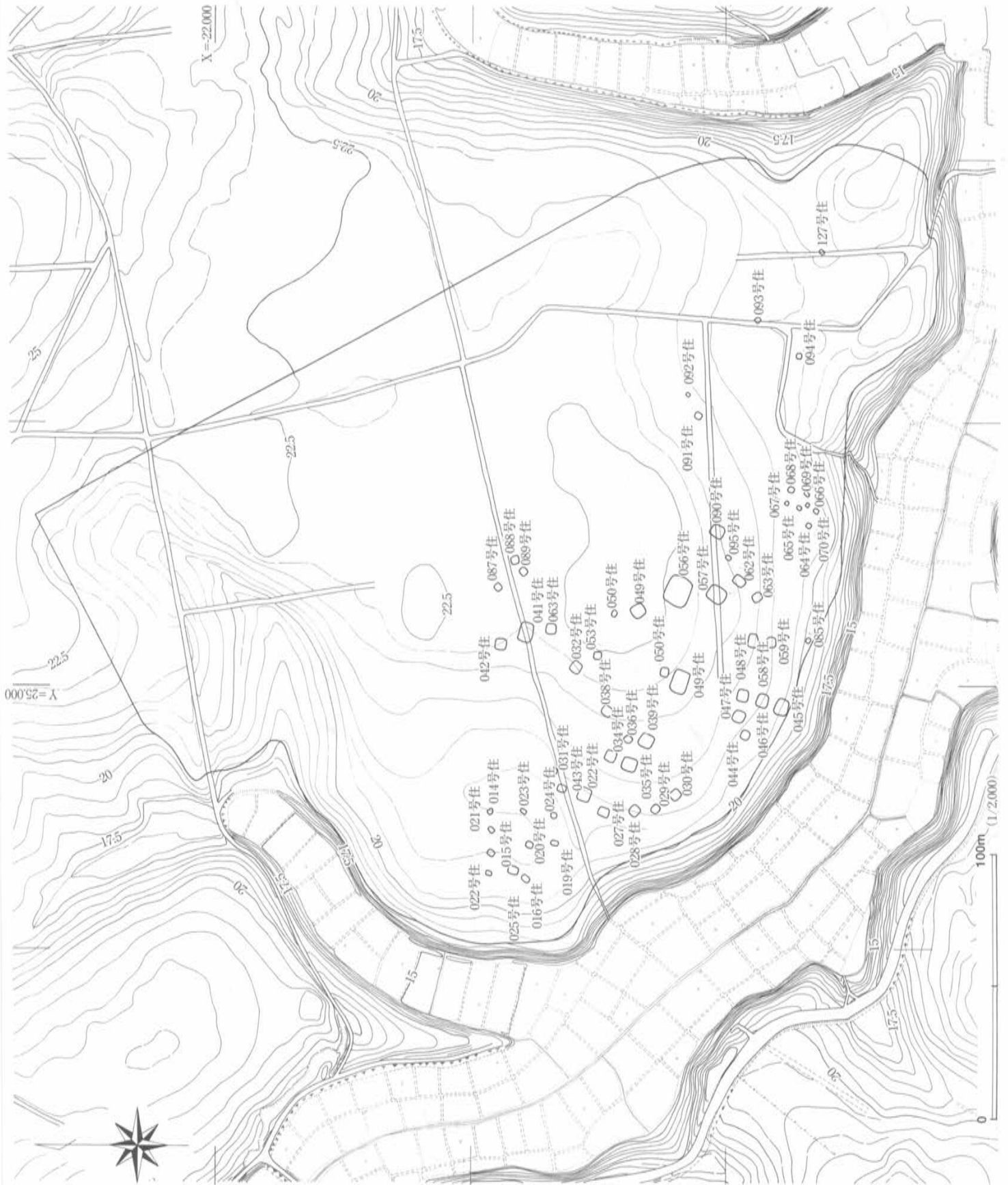
第76表 015号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段－内面、下段－外面） 口縁－胴部（体部）－底部	胎土	色調	焼成
1	1	甕	高さ 2.1	1%	ヘラナデー－ 縄文	砂粒 白色鉱物少量	暗褐色	良好

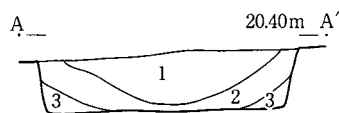
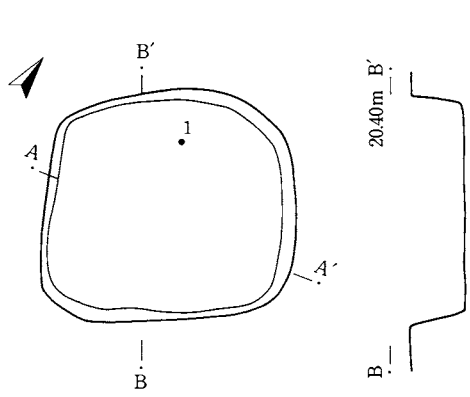
016号住居跡（第153図 図版64）

遺構 調査区西部、025号住居跡の南西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.50m×2.30mで、検出面からの深さは0.53mである。床面は平坦である。北西壁寄りの床面に焼土遺構が検出された。円形で、径0.25mである。古墳時代前期の土器が出土している。

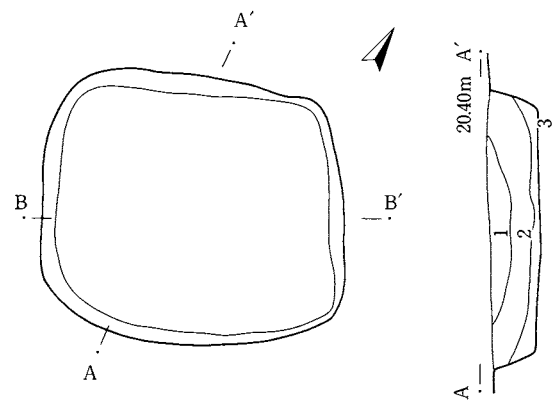
遺物 細片で図示できなかった。



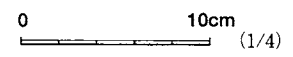
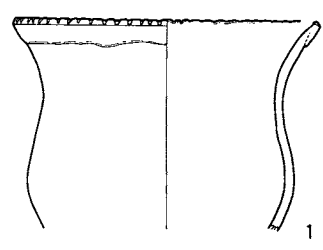
第152図 古墳時代遺構分布図



- 014
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

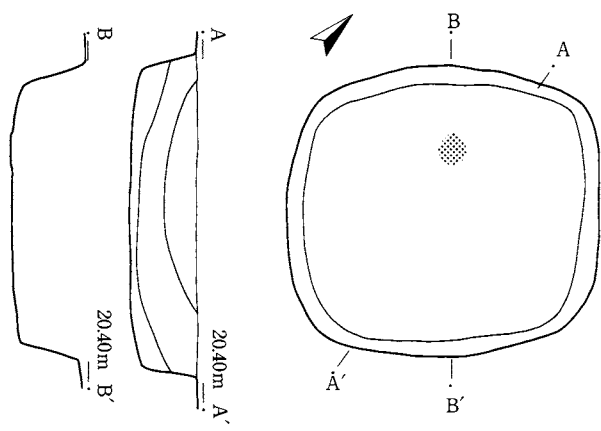


- 015
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)



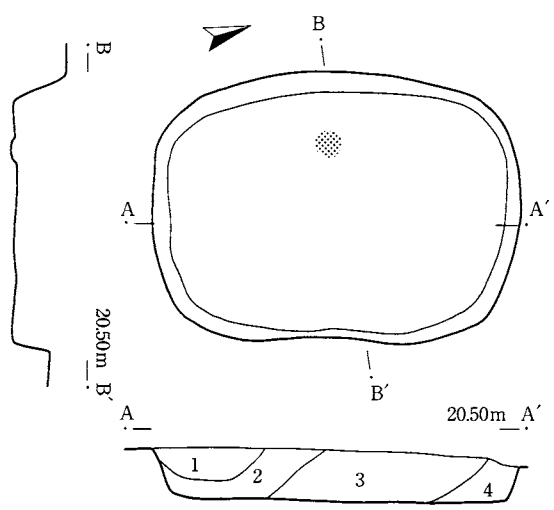
014号住居跡実測図及び出土遺物

015号住居跡実測図及び出土遺物



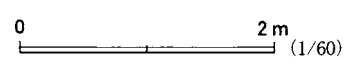
- 016
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

016号住居跡実測図



- 019
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

019号住居跡実測図



第153図 014・015・016・019号住居跡実測図及び014・015号住居跡出土遺物

019号住居跡（第153図 図版64）

遺構 調査区西部、020号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.94m×2.09mで、検出面からの深さは0.40mである。床面は平坦である。西壁寄りの床面に焼土遺構が検出された。円形で、径0.2mである。床面への掘り込みはない。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片で図示できなかった。

020号住居跡（第154図 図版65）

遺構 調査区西部、016号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.51m×2.38mで、検出面からの深さは0.50mである。床面は平坦である。床面中央及び南東壁下にピットが3基検出された。径0.1m～0.2m、床面からの深さは中央部のピットが0.45m、他が、0.05mである。やや北西壁寄りの床面に焼土遺構が検出された。円形で、径0.2mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片で図示できなかった。

021号住居跡（第154図 第77表 図版65・96）

遺構 調査区西部、015号住居跡の西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.10m×2.42mで、検出面からの深さは0.42mである。床面は平坦である。壁周溝が一部巡り、ピットが検出された。壁周溝は西隅壁下部分で、幅0.2m、床面からの深さは0.05m以下である。ピットは南西壁下の壁周溝内の1基及び南東壁下の2基である。径0.2m、床面からの深さは、周溝内ピットが0.3m、南東壁下のピットが0.05mである。北西壁下の床面に焼土遺構が検出された。円形で径0.25mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 1は土師器甕の口縁部片と考えられる。表面に縄文が施される。

第77表 021号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎土	色調	焼成
1	1	甕	高さ 2.1	3%	ヘラナデー - - 縄文 - - -	砂粒 白色鉱物・赤色 スコリア粒少量	暗褐色	良好

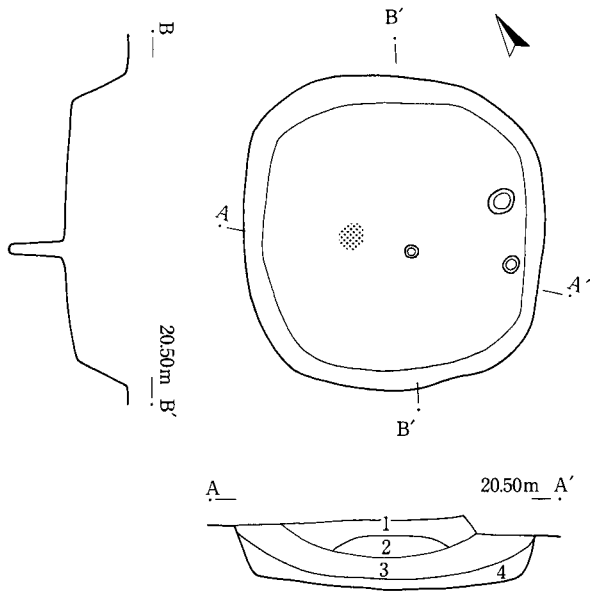
022号住居跡（第154図 図版65）

遺構 調査区西部、021号住居跡の西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.44m×2.48mで、検出面からの深さは0.40mである。床面は平坦である。床面中央やや西寄りにピットが1基検出された。径0.1m、床面からの深さは0.05mである。ピット西隣に焼土遺構が2基検出された。円形で、径0.1mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片で図示できなかった。

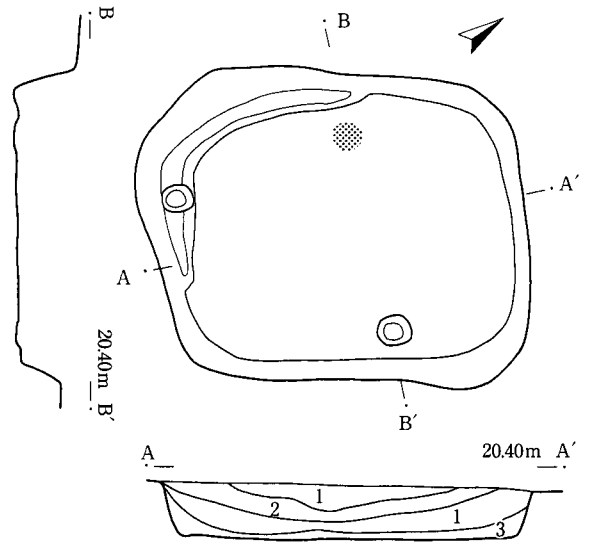
023号住居跡（第154図 図版66）

遺構 調査区西部、020号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.43m×2.30mで、検出面からの深さは0.48mである。床面は平坦である。壁周溝が一部巡り、ピットが3基検出された。壁周溝は北東隅壁下及び南壁下で、幅0.1m、床面からの深さは0.05mである。ピットは床面中央やや西寄りの1



- 0 2 0
- 1 暗黄褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 2 黄褐色土層 (ローム粒充填層)
 - 3 黒褐色土層
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

020号住居跡実測図



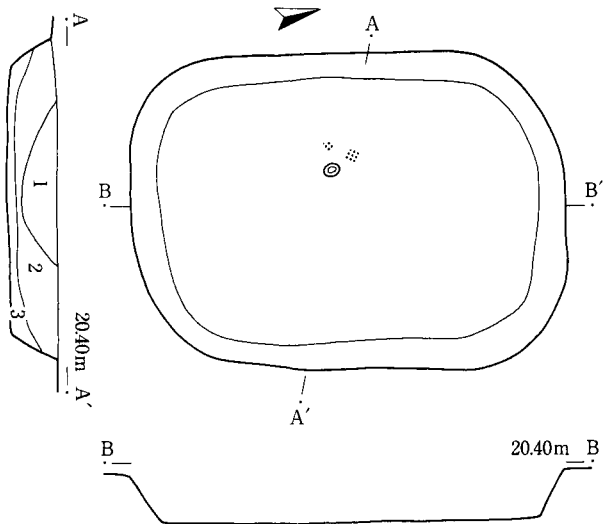
- 0 2 1
- 1 黒色土層
 - 2 暗黄褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

0 2 m (1/60)



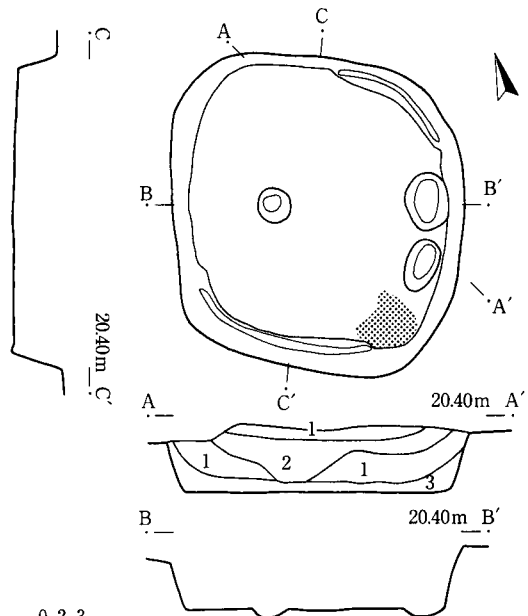
0 10cm (1/4)

021号住居跡実測図及び出土遺物



- 0 2 2
- 1 黒色土層
 - 2 暗褐色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

022号住居跡実測図

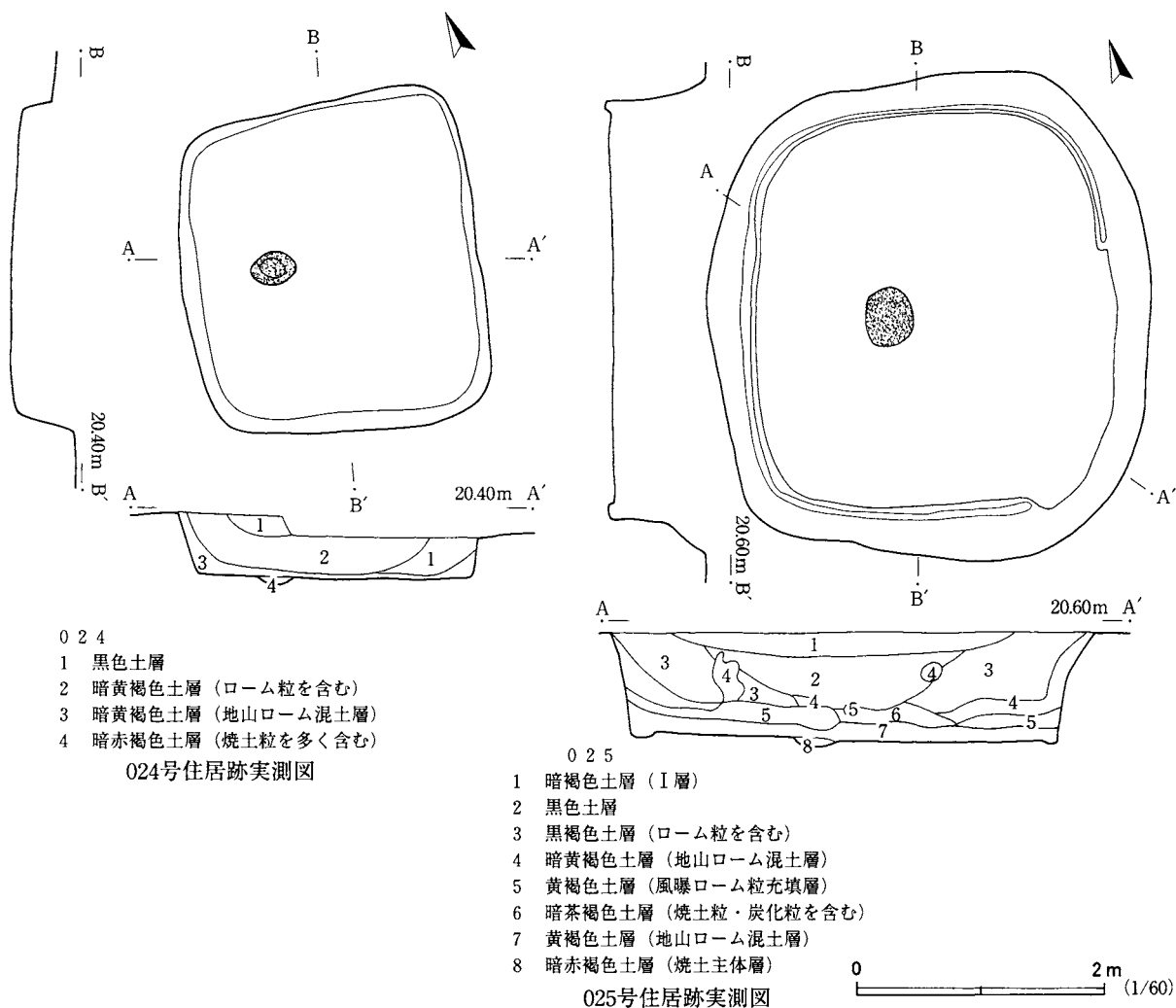


- 0 2 3
- 1 黒色土層
 - 2 暗黄褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

023号住居跡実測図

0 2 m (1/60)

第154図 020・021・022・023号住居跡実測図及び021号住居跡出土遺物



第155図 024・025号住居跡実測図

基及び東壁下の2基である。径0.25m～0.45m、床面からの深さは0.1mである。南東隅壁下の床面に焼土遺構が検出された。やや不整形で径0.5mである。なお、中央部分のピットの覆土には焼土粒が多く含まれていたため、炉跡の可能性はある。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片で図示できなかった。

024号住居跡（第155図 図版66）

遺構 調査区西部、019号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.77m×2.39mで、検出面からの深さは0.44mである。床面は平坦である。床面中央やや西寄りに炉跡が検出された。楕円形で、0.35m×0.25m、床面への掘り込みは0.1mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片で図示できなかった。

025号住居跡（第155図 図版66）

遺構 調査区西部、022号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.97m×3.67mで、検出面からの深さは0.87mである。床面は平坦である。壁周溝が東壁下の南半分を除いて全周する。幅0.1m

～0.2m、床面からの深さは0.05m～0.1mである。床面中央やや西寄りに炉跡が検出された。楕円形で、0.5m×0.4m、床面への掘り込みは0.1mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片で図示できなかった。

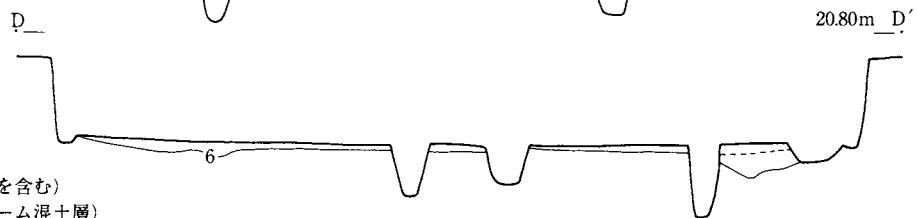
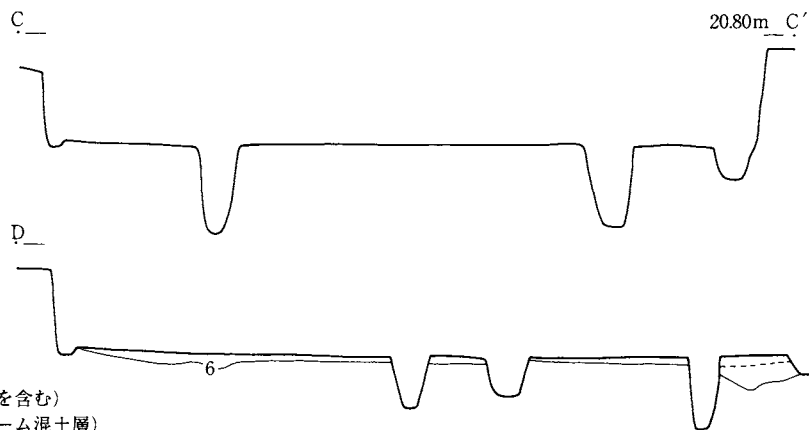
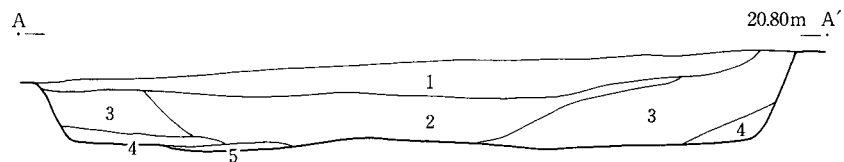
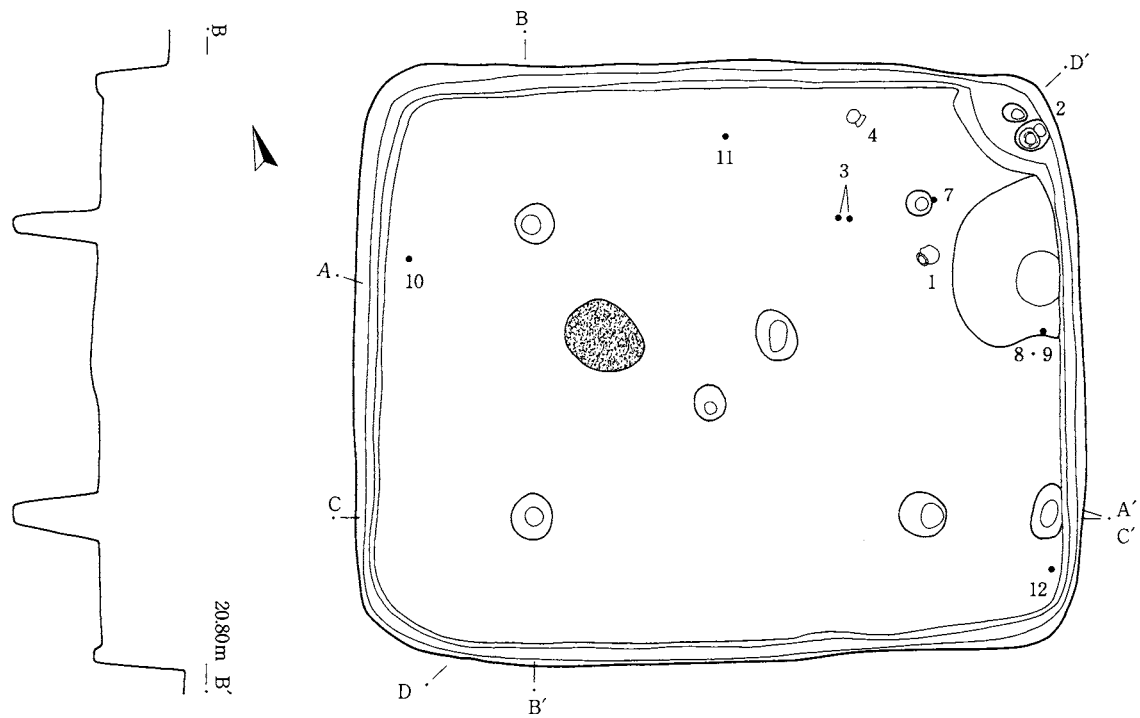
026号住居跡（第156～159図 第78表 図版67・96・97）

遺構 調査区西部、043号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は5.81m×4.73mで、検出面からの深さは0.65mである。床面は平坦である。壁周溝、柱穴、炉跡、貯蔵穴、ピットが検出された。壁周溝は全周し、幅0.1m～0.15m、床面からの深さは0.1mである。柱穴は4か所で、住居跡のほぼ対角線上に位置し、柱穴中心から壁までの距離は1.1m～1.4mである。柱穴は円形で、径0.2m～0.4m、床面からの深さは0.6m～0.7mである。炉跡は床面中央やや西寄りに位置している。楕円形で、0.65m×0.5m、床面への掘り込みは0.1mである。貯蔵穴は2基で、東壁下及び北東隅壁下に位置している。楕円形で、各々1.4m×0.9m、0.9m×0.6m、床面からの深さは0.7m、0.2mである。ピットは3基で、床面中央部に2基、東壁下南端部に1基である。径0.3m～0.4m、床面からの深さは0.25m～0.4mである。古墳時代前期の土器などが出土している。特に、床面及び貯蔵穴内から完形又は復元可能な土器が出土し、良好なセットを構成していると考えられる。

遺物 1は土師器壺である。底部は平底で、胴部はやや縦長の球形である。口縁部は外反し、口縁部端は平らである。外面は口縁部にヨコナデを施した後に、口縁部から胴下部にかけて縦方向のミガキが施される。2は土師器壺である。底部は平底で、胴部はほぼ球形である。胴部に縦方向のミガキが施される。3は土師器壺である。底部は小さくやや上げ底で、胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾し、口縁部端はほぼ直立する。4は土師器小型壺である。底部は平底で、胴部はやや縦長の球形である。口縁部はやや内弯して立ち上がり、口縁部端はわずかに外反する。5は土師器小型罎の口縁部である。外傾して、直線的に開く。6は土師器器台の脚部である。やや外反して開き、円形の透孔が施される。7は土玉である。全体にナデが施される。8・9は砥石片、10は磨石、11・12は叩き石である。

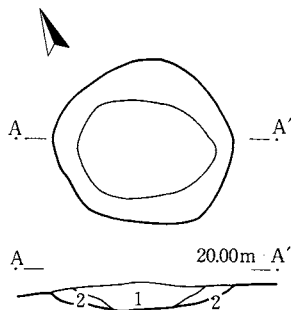
第78表 026号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎土	色調	焼成
1	9	壺	口径 10.8 底径 6.3 高さ 20.2 最大径17.4	100%	ハケ目-ヘラナデ - - ナデ-ミガキ- - 木葉痕	細礫 赤色スコリア粒	内面から 外面赤彩	良好
2	9	壺	口径 6.5 底径 6.5 高さ 14.5 最大径21.0	40%	-ナデ- - -ミガキ- -	砂粒 細礫少量	外面赤彩	良好
3	1.2, 6	壺	口径 10.0 底径 3.4 高さ 13.8 最大径14.9	100%	ナデ-ヘラナデ- - ナデ-ハケ目の後ヘラミガキ- -	砂粒含	橙褐色	良好
4	10	小型壺	口径 7.6 底径 4.0 高さ 8.6 最大径 7.9	100%	ナデ-ヘラナデ- - ナデ-ハケ目の後ナデ- -	砂粒少量	褐色	良好
5	5	小型罎	口径 10.0 底径 10.0 高さ 最大径	20%	ミガキ- - - ナデ（ハケ目）- - -	赤色スコリア粒	内外面 赤彩	良好



- 0 2 6
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒色土層 (II a層)
 - 3 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
 - 5 暗赤褐色土層 (焼土主体層)
 - 6 貼床 (ローム粒・暗褐色土混土層)

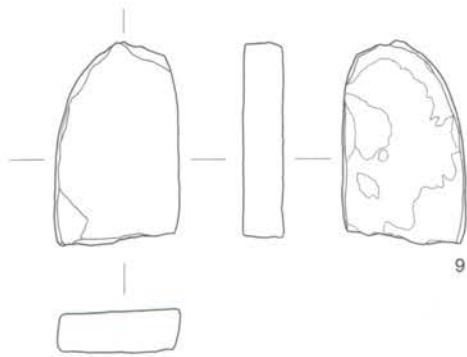
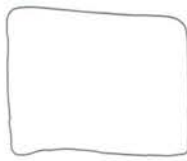
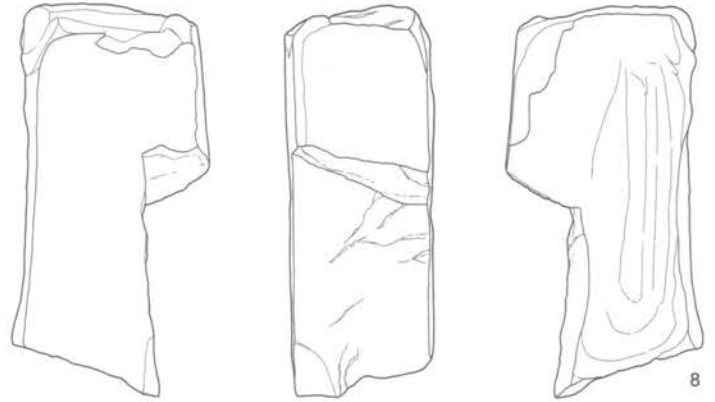
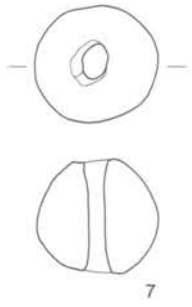
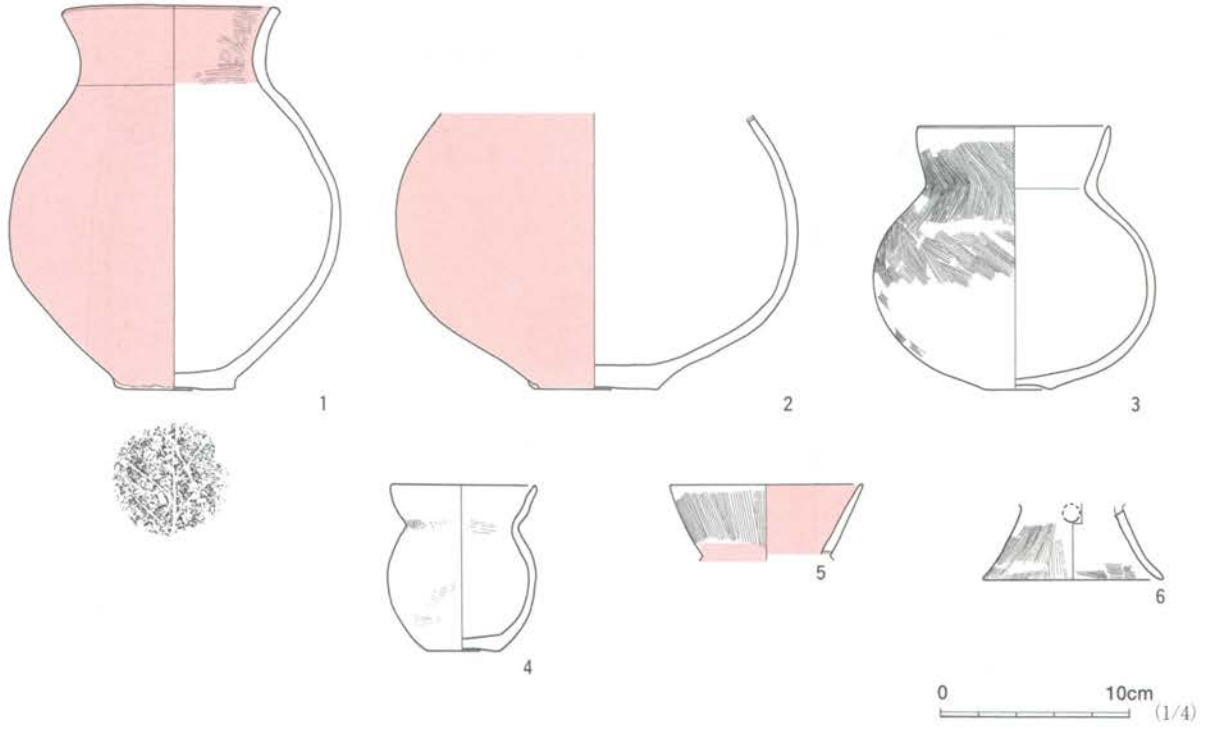
0 2m (1/60)



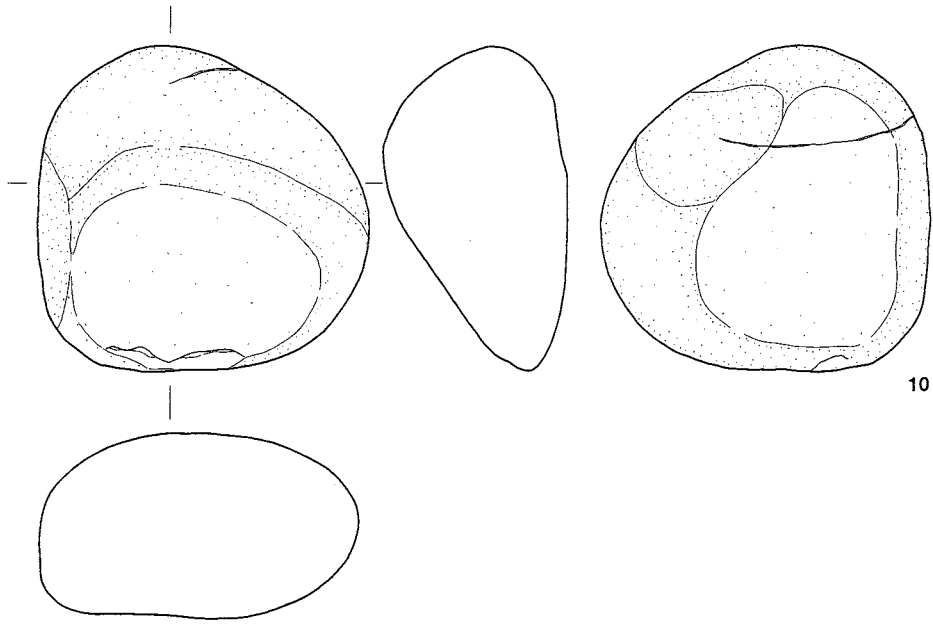
- 0 2 6
炉跡土層
- 1 黒色土層 (焼土・炭化物を少量含む)
 - 2 暗黄褐色土層

0 1m (1/30)

第156図 026号住居跡実測図

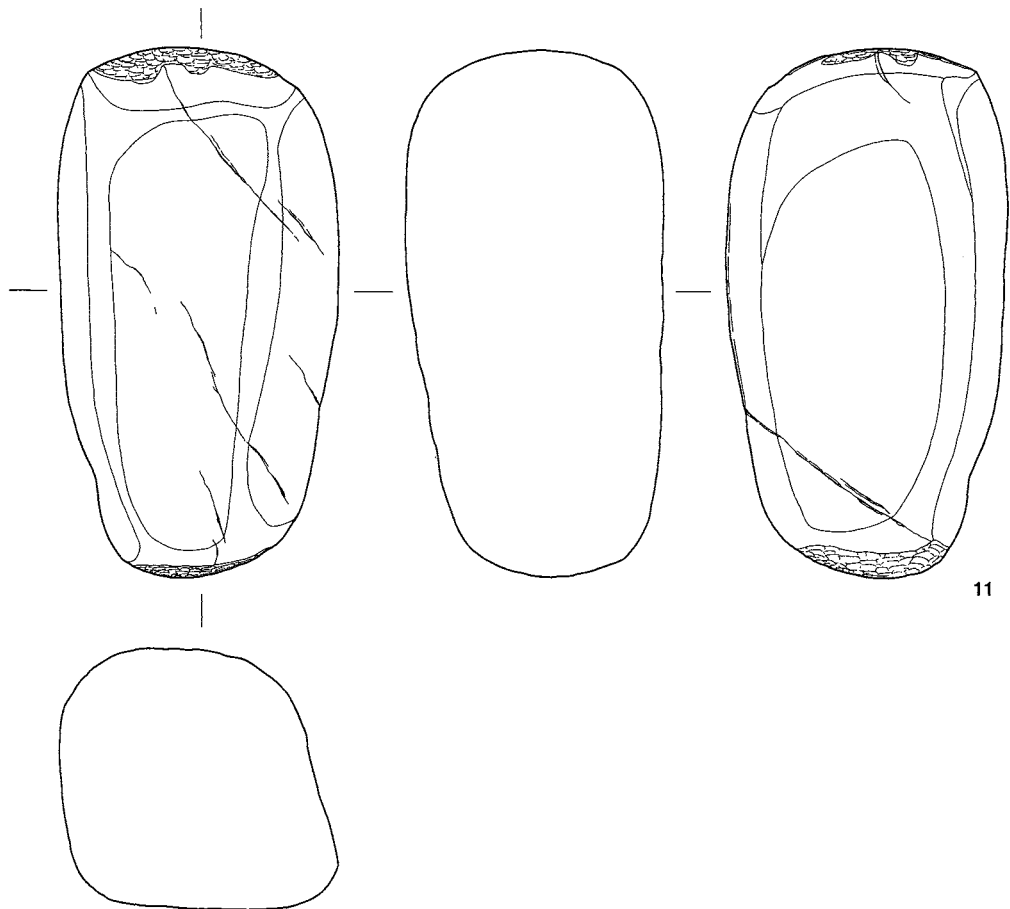


第157図 026号住居跡出土遺物(1)



10

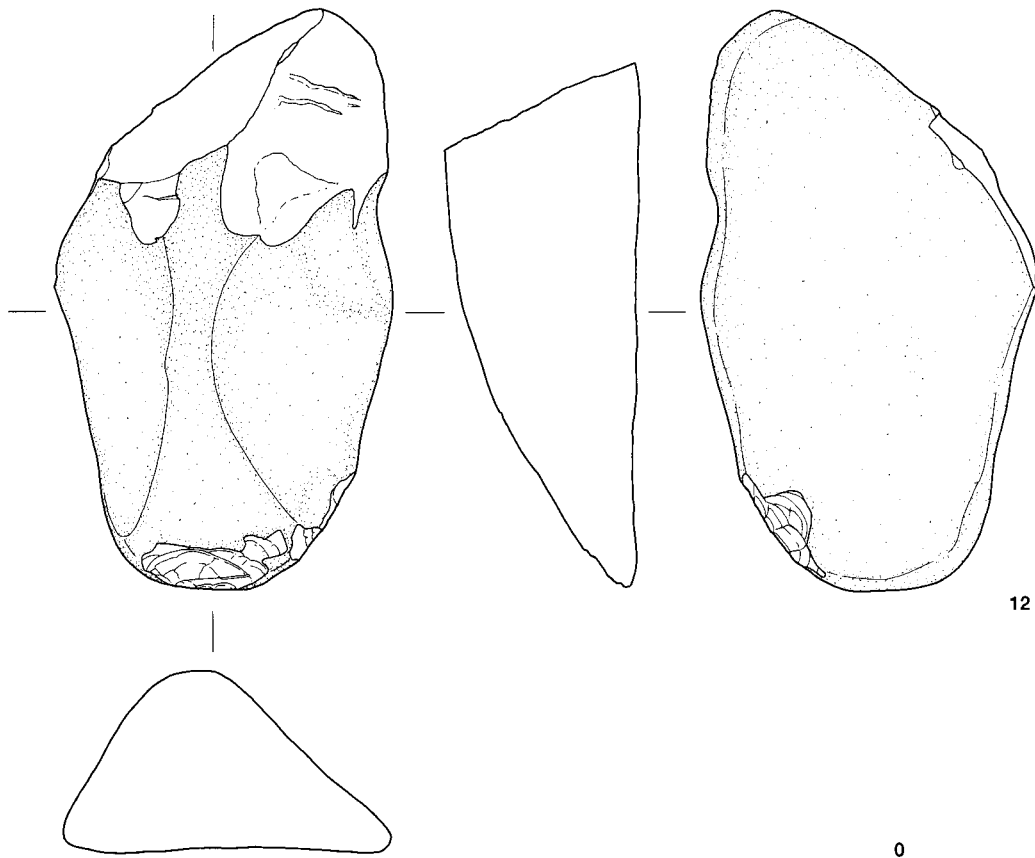
0 10cm (1/4)



11

0 5cm (1/2)

第158図 026号住居跡出土遺物(2)



12

0 5 cm (1/2)

第159図 026号住居跡出土遺物(3)

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎 土	色 調	焼 成
6	1.2	器 台	口径 底径 高さ 最大径	10% 以下	- - -ハケ目 - - -ハケ目		褐色	良好
7	7	土 玉	幅 高さ	100%	- - - ナデ	砂粒		良好
8	3	砥 石	長さ 10.3 幅 4.8 厚さ 3.9 重量 286.0g	30%	表面研磨	砂岩質	灰褐色	
9	3	砥 石	長さ 5.2 幅 3.3 厚さ 1.1 重量 33.0g	50%	表面研磨	砂岩質	灰色	
10	12	磨 石	長さ 17.6 幅 17.4 厚さ 9.5 重量 4.15kg	100%	全体に磨耗	安山岩質	暗灰色	
11	11	叩き石	長さ 13.4 幅 7.6 厚さ 6.8 重量 1.15kg	100%	上下両端に敲打痕ほかは磨耗	砂岩質	灰色	
12	13	叩き石	長さ 15.4 幅 8.7 厚さ 5.2 重量 755.0 g	100%	下端に敲打痕	砂岩質	灰色	

027号住居跡（第160図 第79表 図版68・98）

遺構 調査区西部、026号住居跡の南西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.13m×4.13mで、検出面からの深さは0.52mである。床面は平坦である。床面中央部西壁寄りに炉跡が検出された。楕円形で、0.65m×0.45m、床面への掘り込みは0.1mである。古墳時代前期の土器が出土し、東隅床面に高坏がつぶれた状態で検出されている。

遺物 1は土師器壺の口頸部である。口縁部上半が大きく開き、折り返し口縁である。折り返し部分に網目状燃糸文が施される。割れ口がきれいに磨滅しているため、口縁部を上にして器台に転用したと考えられる。2は土師器壺の胴部片である。無節縄文による羽状縄文が施される。3は土師器台付甕の胴下部である。ハケ目が施される。4は土師器高坏である。脚部との接合部から坏部が稜を持って立ち上がり、内弯しながら大きく開く。口縁部端はわずかに外反し、尖り気味である。脚部は外反して開き、円形の透孔が3か所に施される。

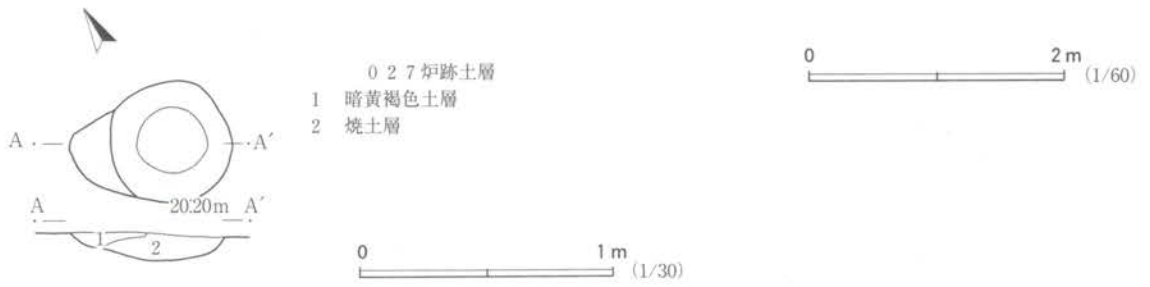
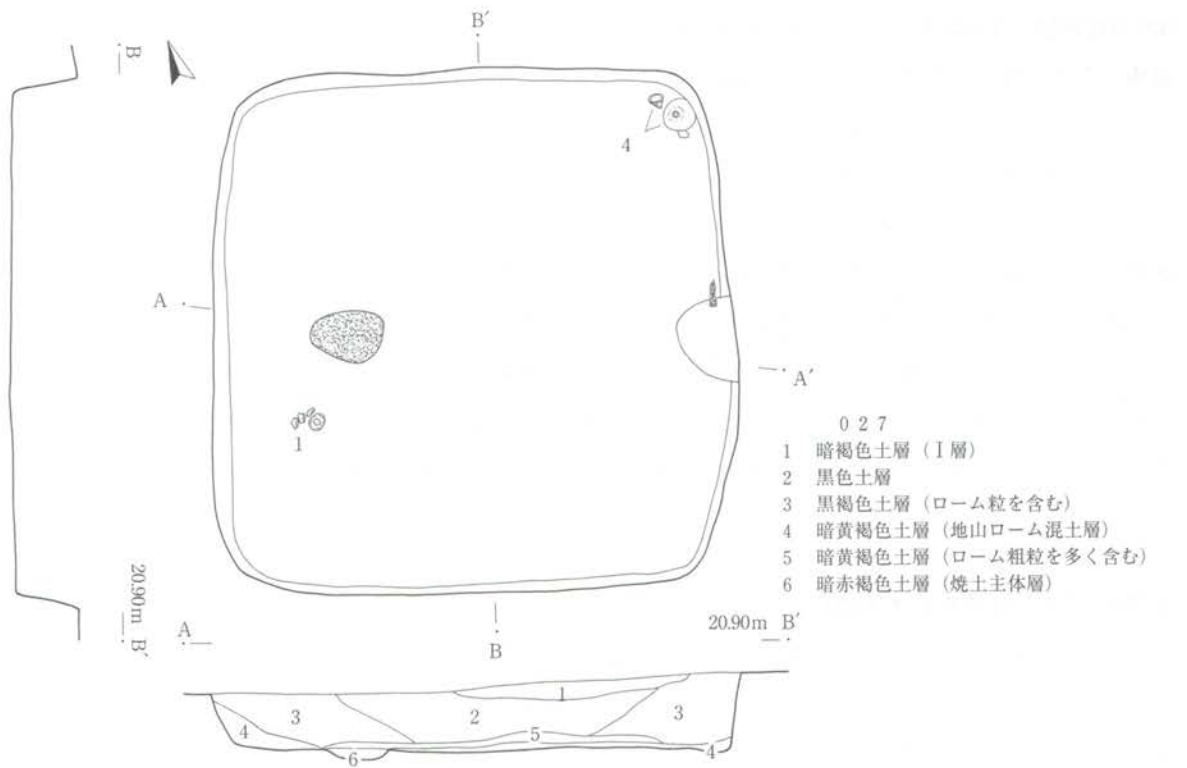
第79表 027号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段－内面、下段－外面） 口縁－胴部（体部）－底部	胎土	色調	焼成
1	3, 4	壺	口径 19.1 底径 高さ 8.85 最大径	20%	ヘラミガキ－ヘラナデ－ 網目状燃糸文－ヘラミガキ－網目状燃糸文－	砂粒 白色鉱物・赤色 スコリア粒少量	赤褐色 内・外面 赤彩	良好
2	1, 3	壺	口径 底径 高さ 最大径	10%	－無節縄文－ヘラミガキ－ －ヘラミガキ－ヘラナデ－	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 外面赤彩	良好
3	1	台付甕	口径 底径 高さ 最大径	10%	－ヘラミガキ－ －ハケ調整－	砂粒 白色鉱物少量	暗褐色	良好
4	6, 7	高坏	口径 25.4 底径 12.3 高さ 16.3 最大径	100%	ヨコナデ－ヘラミガキ－ヘラケズリ－ヨコナデ・ ナデ ヨコナデ－ヘラミガキ－ヘラミガキ－	白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色 黒斑あり	良好

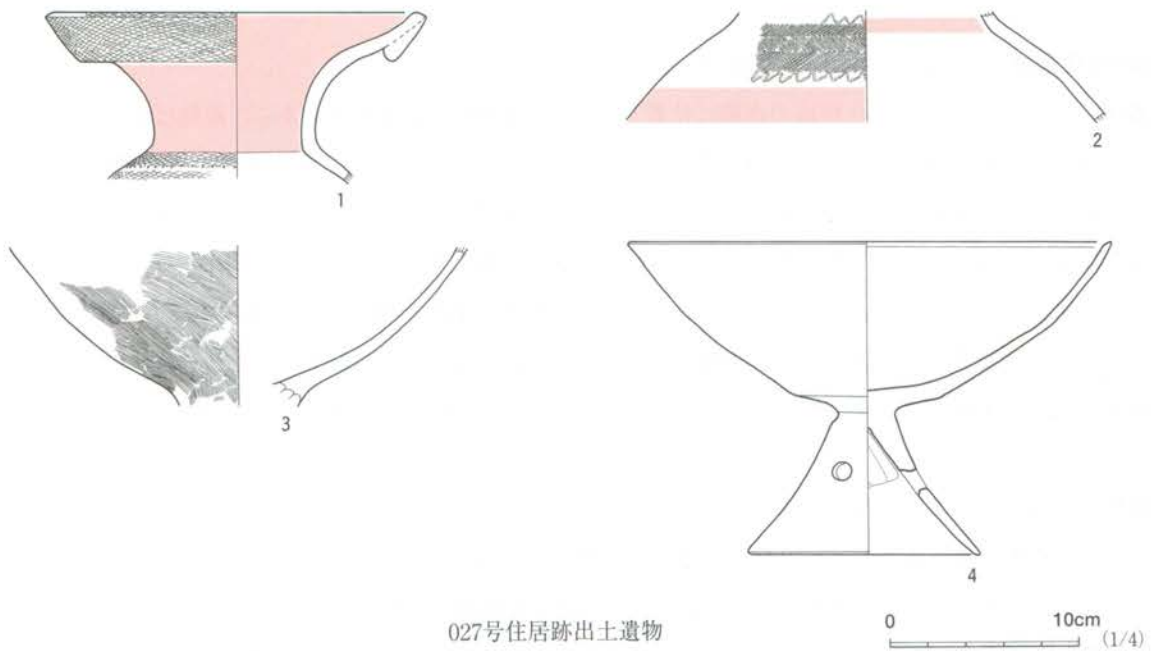
028号住居跡（第161図 第80表 図版68・98・99）

遺構 調査区西部、027号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.21m×3.87mで、検出面からの深さは0.81mである。床面は平坦で、炉跡周辺の中央部分が堅緻である。壁周溝は南東壁下中央部を除いて全周する。炉跡が床面中央部やや西寄りに検出された。ほぼ円形で、径0.2m、床面への掘り込みは0.1mである。ピットが南東壁下に1基検出された。楕円形で、0.4×0.3m、床面からの深さは0.3mである。床面から焼土、住居の部材と思われる炭化材が検出された。床面直上の覆土中にも焼土が多く含まれているが、遺物の出土状況から、住居廃棄後の焼却と考えられる。古墳時代前期の土器が出土している。南西壁付近の床面から、壺、甕が出土している。焼土、炭化材の下から検出されたので、住居廃棄時に捨てられたと考えられる。

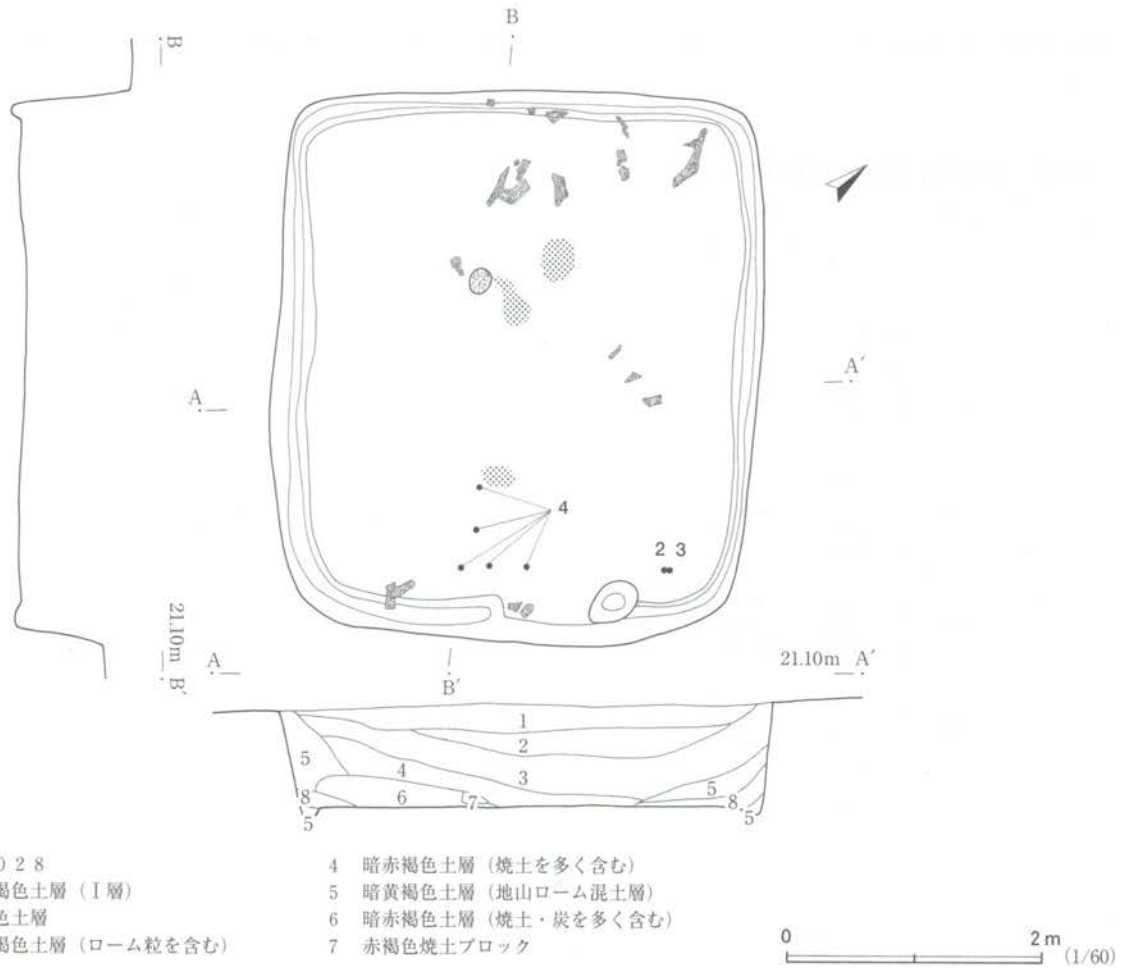
遺物 1は土師器壺の口頸部である。口縁部が外傾して立ち上がり、上半部で外反する。口縁部端は平らで、網目状燃糸文が施される。2は土師器壺の胴底部である。底部は平底で、胴部はやや扁平な球形である。3は台付甕である。台部が欠損している。やや扁平な鶏卵形の胴部から口縁部が外反して立ち上がる。口縁部端に刻み目が施される。4は土師器小型壺である。底部は平底で、やや下張れの球形の胴部から口縁



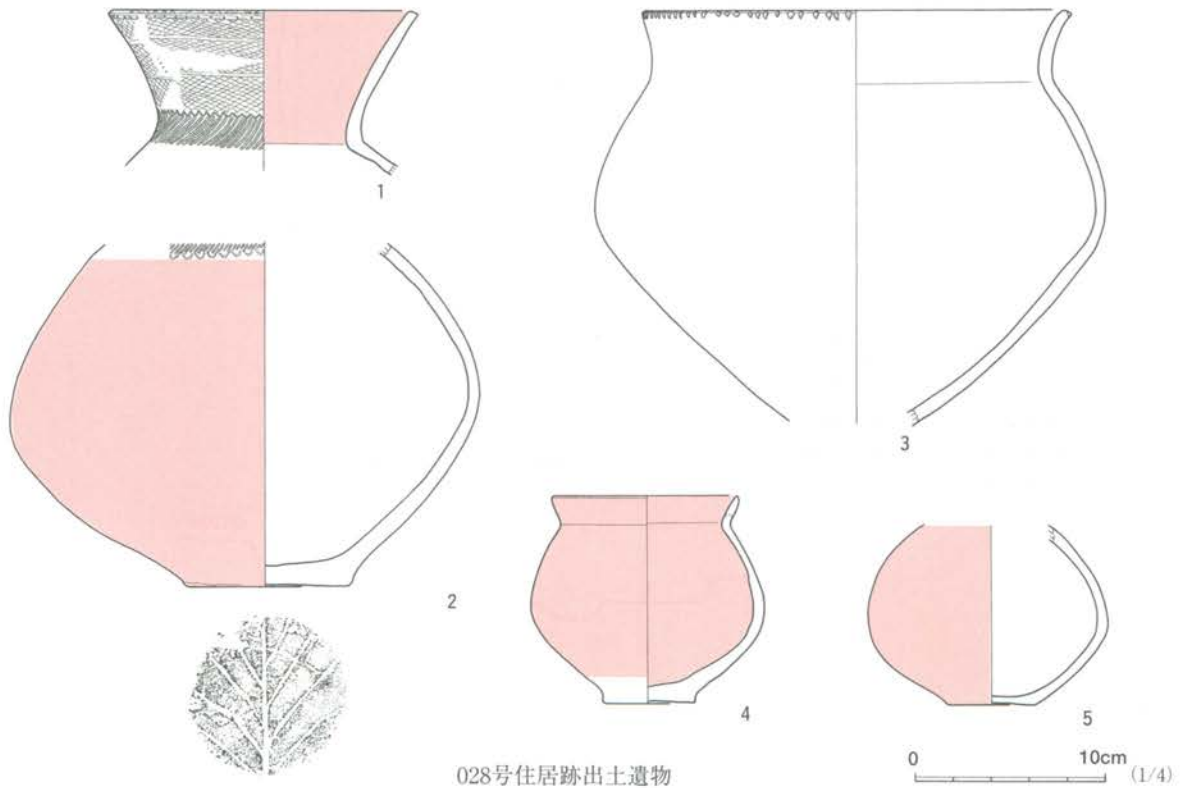
027号住居跡実測図



第160図 027号住居跡実測図及び出土遺物



028号住居跡実測図

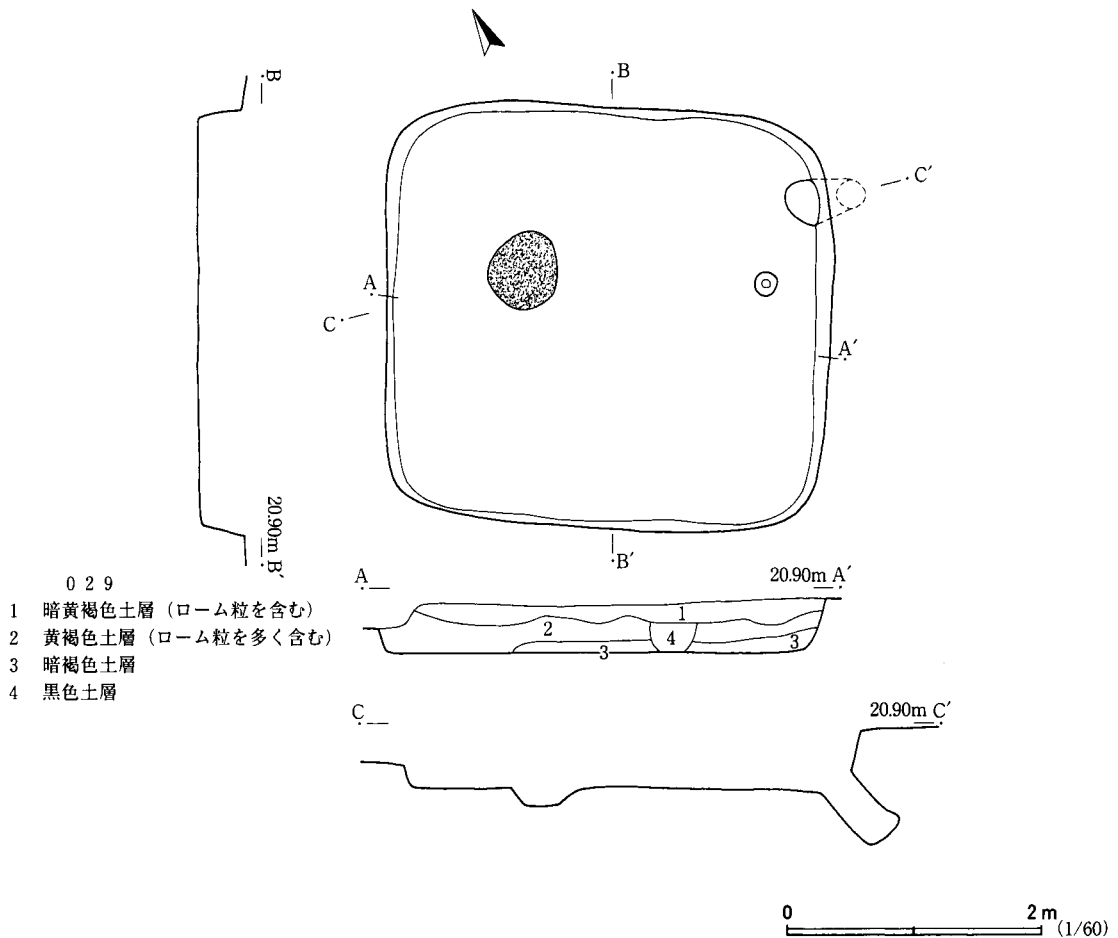


第161図 028号住居跡実測図及び出土遺物

部が外傾して短く立ち上がる。5は土師器小型壺の胴底部である。底部は平底で、胴部はやや扁平な球形である。

第80表 028号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	1.4 7	壺	口径 15.45 底径 高さ 最大径	20%	ヘラミガキ-ヘラナデ- 網目状捺糸文-結節縄文-ヘラミガキ-	砂粒 白色鈺物 赤色スコリア粒 少量	赤褐色 赤彩	良好
2	7	壺	口径 底径 8.7 高さ 12.9 最大径24.6	70%	-ナデ-ヘラナデ-ヘラナデ -結節縄文-ヘラミガキ・ナデ-木葉痕	砂粒 白色鈺物・赤色 スコリア粒少量	外面赤彩	良好
3	7	台付甕	口径 21.85 底径 高さ 21.6 最大径26.85	80%	ヘラミガキ-ヘラミガキ- ヨコナデ・刻み-ヨコナデ-ヘラミガキ-	砂粒 赤色スコリア粒 白色鈺物少量	赤褐色	良好
4	6.8 9.10 11	小型壺	口径 9.7 底径 4.9 高さ 10.8 最大径12.3	70% 口縁部 胴上部	ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ 粗いヘラナデ-ヘラミガキ-ヘラケズリ	砂粒 赤色スコリア粒	赤褐色 内・外面 赤彩	良好
5	3.5 7	小型壺	口径 底径 4.6 高さ 9.3 最大径12.65	70% 口縁部	-ヘラナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ -ヘラミガキ-ヘラケズリ	砂粒 赤色スコリア粒 白色鈺物微量	赤褐色 赤彩 内面黒褐色	良好



第162図 029号住居跡実測図

029号住居跡（第162図 図版69）

遺構 調査区西部、028号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.56m×3.29mで、検出面からの深さは0.39mである。床面は平坦で、炉跡周辺の中央部分が堅緻である。炉跡が床面中央部やや西寄りに検出された。楕円形で、0.6m×0.5m、床面への掘り込みは0.15mである。貯蔵穴が北東隅壁下に検出された。壁を掘り込んでつくられ、楕円形で、0.4m×0.35m、床面からの深さは0.4m、壁からの奥行きは0.5mである。ピットが床面東壁寄りに1基検出された。円形で、径0.2m、床面からの深さは0.25mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片で図示できなかった。

030号住居跡（第163図 第81表 図版69・99）

遺構 調査区西部、029号住居跡の南東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.46m×3.92mで、検出面からの深さは0.73mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央部やや北西寄りに検出された。楕円形で、0.6m×0.55m、床面への掘り込みは0.1mである。ピットが4基検出された。北西壁下中央に1基、南隅壁下に1基、南東壁下東隅寄りに2基である。3基が円形で、径0.3m～0.4m、1基が楕円形で、0.4m×0.3mである。床面からの深さは0.1m～0.5mである。円形のピットは位置及び大きさから貯蔵穴の可能性がある。古墳時代前期の土器が出土し、床面東部から壺、高杯が検出されている。

遺物 1は土師器壺の口縁部である。折り返し口縁である。2は土師器壺の胴底部である。底部は平底で、胴部はやや扁平な球形である。3は土師器高杯である。杯部は脚部との接合部から内弯して立ち上がり、半球形になる。口縁部端は平らである。脚部は直線的に開き、裾部でわずかに内弯する。

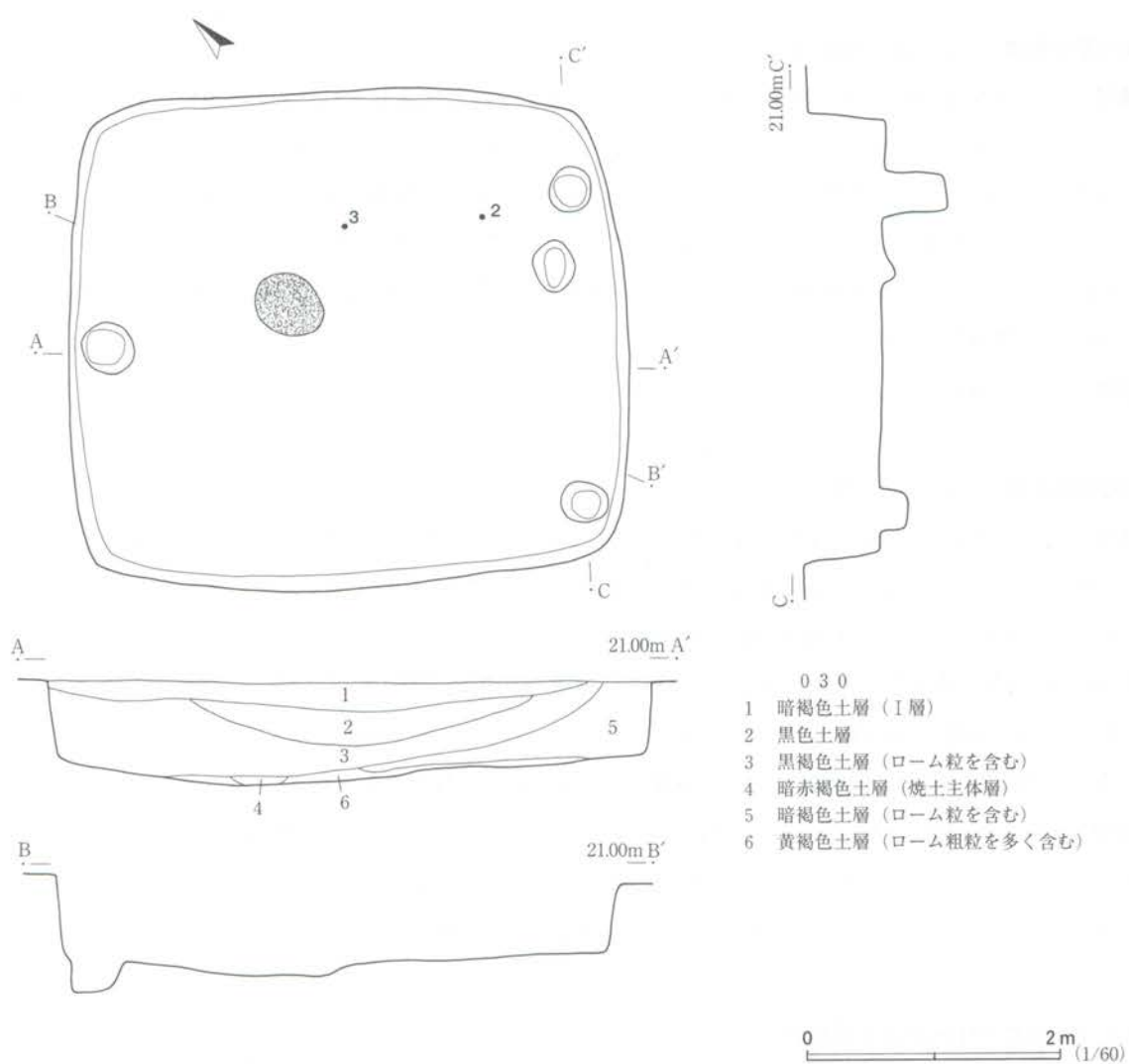
第81表 030号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎土	色調	焼成
1	5	壺	口径 24.1 底径 高さ 最大径	10%	ヘラミガキ - - ヨコナデ・ヘラミガキ-ヘラミガキ -	白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 赤彩	良好
2	1.7	壺	口径 9.3 底径 18.25 高さ 26.8 最大径	70% 口縁部 頸部	-ナデ- -ヘラナデ -ヘラミガキ-粗いヘラナデ-木葉痕	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	赤褐色 赤彩	良好
3	9	高杯	口径 19.35 底径 10.4 高さ 14.7 最大径	100%	ヘラミガキ -ヘラナデ-ナデ ヘラミガキ -ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物少量	赤褐色 赤彩	良好

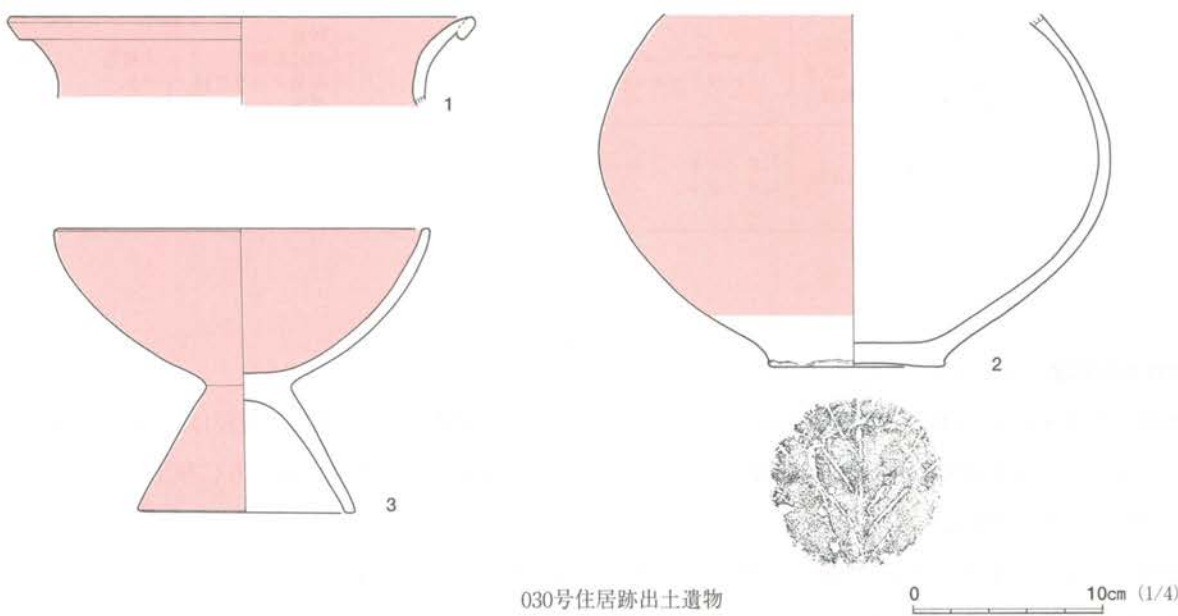
031号住居跡（第164図 第82表 図版70・100）

遺構 調査区西部、043号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.32m×3.20mで、検出面からの深さは0.44mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央部やや北西寄りに検出された。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 1は土師器甗である。底部は平底で、胴部はほぼ球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至ると思われる。

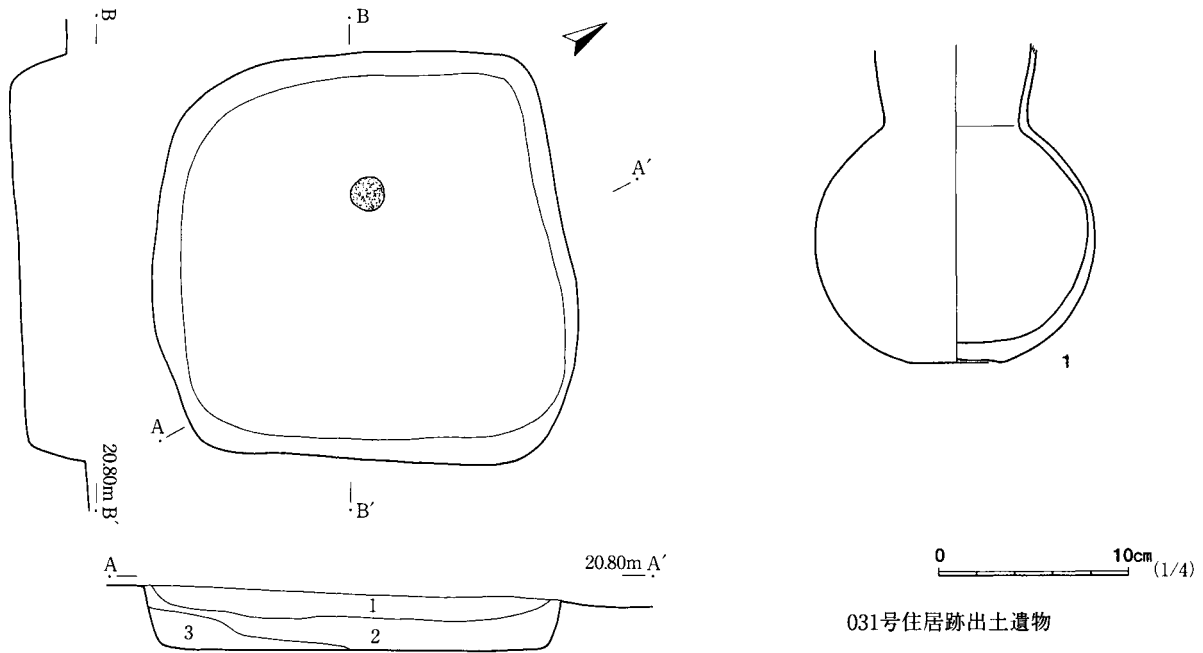


030号住居跡実測図

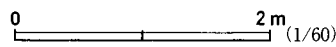


030号住居跡出土遺物

第163図 030号住居跡実測図及び出土遺物



- 031
 1 暗褐色土層 (I層)
 2 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)



031号住居跡実測図

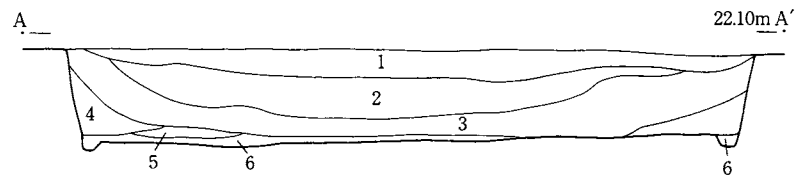
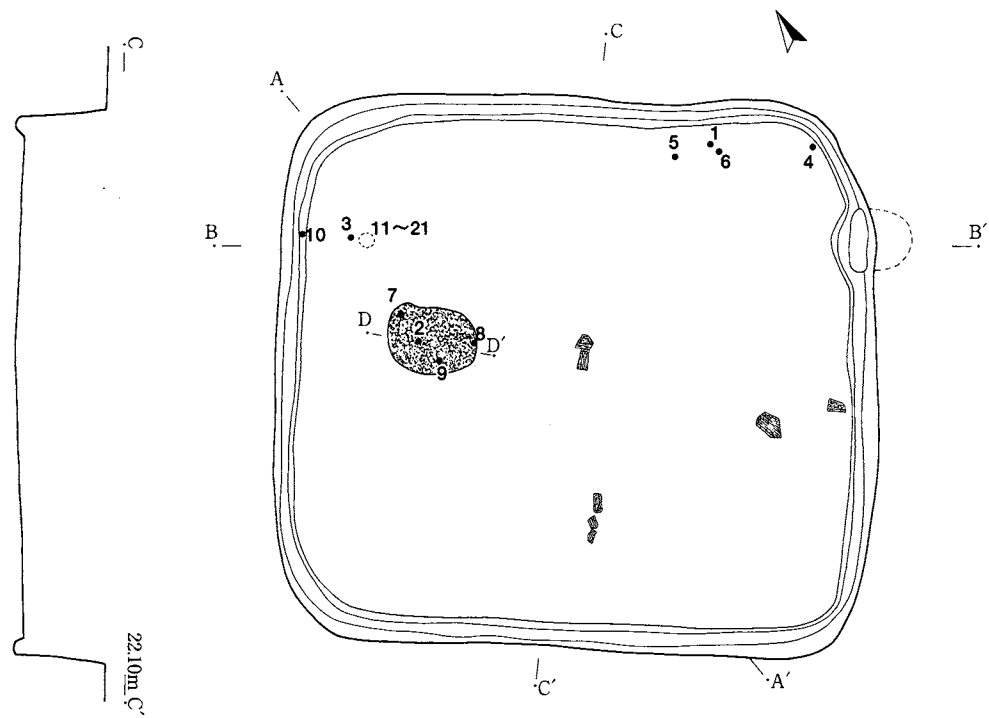
第164図 031号住居跡実測図及び出土遺物

第82表 031号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎土	色調	焼成
1	1	埴	口径 4.6 高さ 16.5 最大径 14.6	75% 口縁部 頸部 胴部	ハケ調整の後ヘラナデー -ヘラミガキ-ヘラミガキ ハケ調整の後粗いヘラミガキ -ヘラナデー-ヘラナデー	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	黄褐色	良好

032号住居跡 (第165・166図 第83表 図版70・71・100~102)

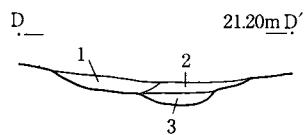
遺構 調査区中央部に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.82m×4.32mで、検出面からの深さは0.70mである。床面は平坦である。壁周溝、炉跡、貯蔵穴が検出された。壁周溝は全周し、幅0.1m～0.15m、床面からの深さは0.1m～0.15mである。炉跡は床面中央やや北西寄りに位置している。楕円形で、0.7m×0.5m、床面への掘り込みは0.15mである。貯蔵穴は南東壁下やや東よりの壁周溝内に位置している。壁に掘り込まれ、横穴状である。楕円形で0.5m×0.15m、床面からの深さは0.2m、壁からの奥行きは0.4mである。床面から住居の部材と思われる炭化材が検出され、覆土下層中にも焼土が多く含まれるので、住居が廃棄後に焼却されたと考えられる。古墳時代前期の土器が出土している。床面から多くの土器が検出されている。炉跡からは壺口縁部、高坏、器台が出土し、北西壁下には、壺口縁部、甕が置かれた状態で出土している。特に、壺口縁部が甕の台として使用された状態で検出されている。また、土玉が集中して出土し、小型の壺を伴っているので、壺内に収納されていたと考えられる。



- 032
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 3 暗褐色土層 (焼土粒・ローム粒を含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
 - 5 暗赤褐色土層 (焼土主体層)
 - 6 黄褐色土層 (ローム粗粒を多く含む)



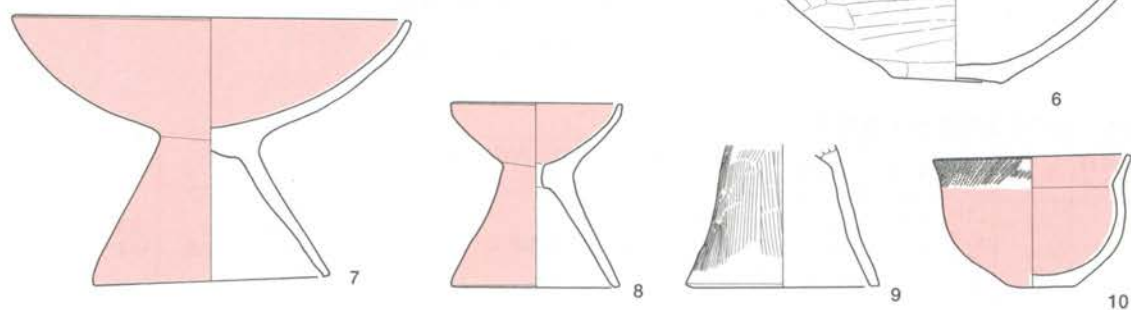
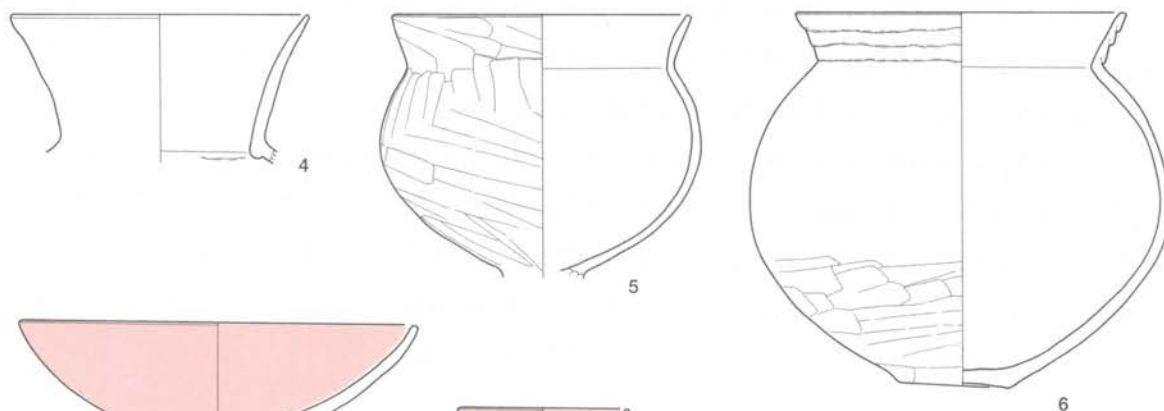
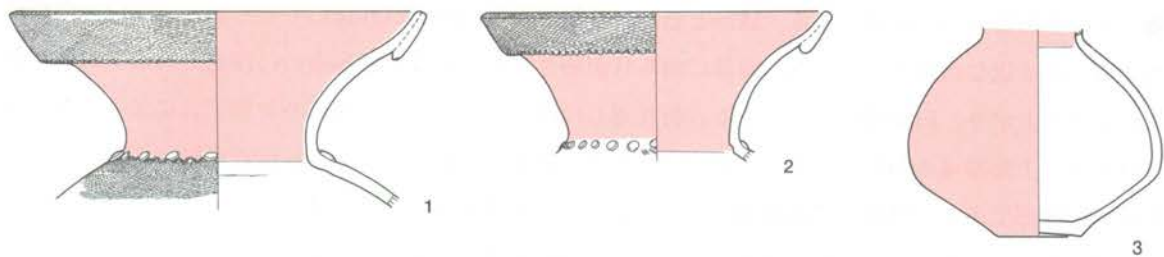
032号住居跡実測図



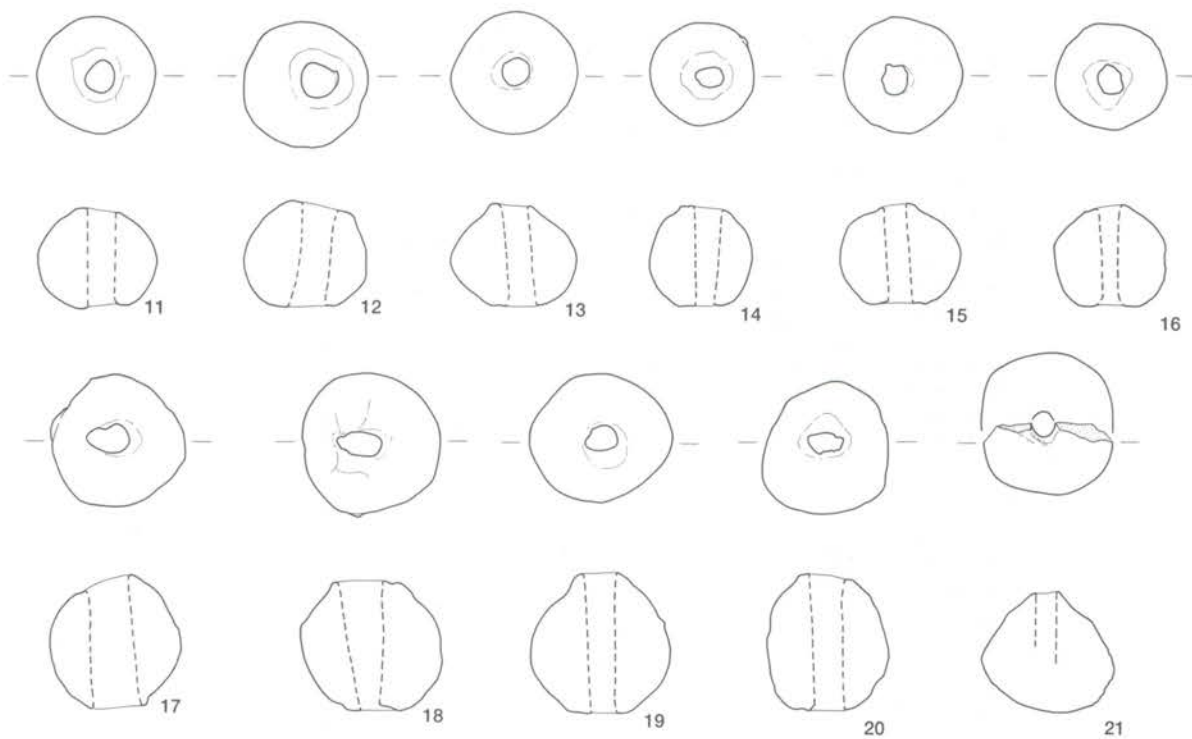
- 032
炉跡土層
- 1 暗褐色土層 (焼土粒を少量含む)
 - 2 暗褐色土層 (焼土粒を多く含む)
 - 3 焼土 (炉床)



第165図 032号住居跡実測図



0 10cm (1/4)



0 5cm (1/2)

第166图 032号住居跡出土遺物

遺物 1は土師器壺の口縁部である。球形と思われる胴部から口縁部が外反して立ち上がり、口縁部端は内弯する。折り返し口縁で、折り返し端部に刻み目が施される。2は土師器壺の口縁部である。口縁部が外反して立ち上がり、口縁部端は内弯する。折り返し口縁で、折り返し端部にハケ状工具による刻み目が施される。3は土師器壺の胴底部である。底部は平底で、胴部は下脹れで、やや扁平な球形である。4は土師器壺の口縁部である。外傾して直線的に立ち上がり、口縁部端はわずかに外反する。5は土師器小型甕の口胴部である。やや扁平な球形の胴部から口縁部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部の中央がやや厚くなる。6は土師器甕である。底部は平底で、胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部に3段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。7は土師器高盃坏である。脚部との接合部から坏部が内弯しながら大きく開き、口縁部端に至る。脚部は直線的に開き、裾部に至る。8は土師器器台である。高坏状で、器受部は坏状に小さく開き、端部は上向きである。脚部は外反して開き、裾部は直線的である。接合部が穿孔され、高坏と区別される。9は土師器台付甕の台部である。大型で、端部がやや外反する。10は土師器小型鉢である。底部は平底で、胴部は半球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部端はわずかに外反する。11～21は土玉である。球形で、片側から穿孔されている。

第83表 032号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法(上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	6	壺	口径 20.9 底径 5.6 高さ 5.6 最大径	20% 胴部 底部	ヘラミガキ-ヘラナデ- 刻み目・円形浮文・網目状燃糸文・ヘラミガキ- 網目状燃糸文-	砂粒 白色鉱物少量 赤色スコリア粒 微量	赤褐色 赤彩	良好
2	12	壺	口径 17.9 底径 7.95 高さ 7.95 最大径	20% 胴部 底部	ヘラミガキ-ヘラナデ- 刻み目・円形浮文・網目状燃糸文・ヘラミガキ- 縄文-	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	赤褐色 赤彩	良好
3	3	壺	口径 4.4 底径 11.1 高さ 11.1 最大径13.35	75% 口縁部	ヘラミガキ-ヘラナデ- -ヘラナデ ヘラミガキ-ヘラミガキ- -ヘラナデ	砂粒 白色鉱物・赤色 スコリア粒微量	赤褐色 赤彩	良好
4	4	壺	口径 15.5 底径 7.7 高さ 7.7 最大径	20% 胴部 底部	ヘラミガキ-ヘラナデ- ヘラナデ・ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	内面黒褐色 外面褐色	良好
5	7	小型甕	口径 15.5 底径 13.6 高さ 13.6 最大径17.0	80%	ていねいなヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ- ヘラナデ・ヘラケズリ-ヘラケズリ-ヘラケズ リ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	黒褐色 暗褐色	良好
6	5	甕	口径 16.9 底径 5.9 高さ 19.6 最大径22.15	100%	粗いヘラミガキ-ヘラナデ- -ヘラナデ ヘラナデ・ヨコナデ-ヘラナデ-粗いヘラケズ リ-粗いヘラミガキ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	内面黄褐色 黒褐色 外面黄褐色 暗褐色	良好
7	15	高坏	口径 20.7 底径 11.7 高さ 14.7 最大径	85%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ-ナデ 面取り・ヘラミガキ- -ヘラミガキ-	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	赤褐色 赤彩	良好
8	13	器台	口径 8.7 底径 8.4 高さ 9.6 最大径	75%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ-ナデ 粗いヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物少量 赤色スコリア粒 微量	赤褐色 赤彩	良好
9	11	台付甕	口径 9.2 底径 7.5 高さ 7.5 最大径	15% 胴部	- - -ヘラナデ - - -ハケ調整・ヨコナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	内面明褐色 外面褐色	良好
10	8	小型鉢	口径 9.95 底径 3.5 高さ 6.75 最大径	100%	ヘラミガキ-ヘラミガキ- -ヘラミガキ 縄文-ヘラミガキ- -ヘラナデ	砂粒 白色鉱物・赤色 スコリア粒少量	赤褐色 内・外面 赤彩	良好

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎 土	色 調	焼 成
11	16	土玉	重さ 22.7g 孔径 0.8 高さ 2.6 最大径 3.15	100%	- - - ナデ - - -	砂粒 白色鉱物・赤色 スコリア粒微量	暗褐色	良好
12	10	土玉	重さ 29.5g 孔径 0.9 高さ 2.75 最大径 3.2	100%	- - - ヘラナデ-ナデ-ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物	暗褐色	良好
13	10	土玉	重さ 25.3g 孔径 0.7 高さ 2.65 最大径 3.3	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物	褐色	良好
14	10	土玉	重さ 19.0g 孔径 0.75 高さ 2.6 最大径 2.7	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物	褐色	良好
15	10	土玉	重さ 23.9g 孔径 0.6 高さ 2.65 最大径 3.1	100%	- - - -ナデ-ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物・赤色 スコリア粒少量	暗褐色	良好
16	10	土玉	重さ 21.9g 孔径 0.8 高さ 2.6 最大径 2.9	100%	- - - -ナデ-ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物少量 赤色スコリア粒 微量	暗褐色	良好
17	10	土玉	重さ 38.0g 孔径 1.2 高さ 3.4 最大径 3.4	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物少量	暗褐色	良好
18	10	土玉	重さ 44.7g 孔径 1.15 高さ 3.35 最大径 3.6	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
19	10	土玉	重さ 41.9g 孔径 0.9 高さ 3.6 最大径 3.8	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物	暗褐色	良好
20	10	土玉	重さ 40.7g 孔径 0.9 高さ 3.55 最大径 3.6	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物	暗褐色	良好
21	12	土玉	重さ 13.3g 孔径 0.6 高さ 3.1 最大径 3.4	40%	- - - ナデ- - -	砂粒 白色鉱物・赤色 スコリア粒少量	暗褐色	良好

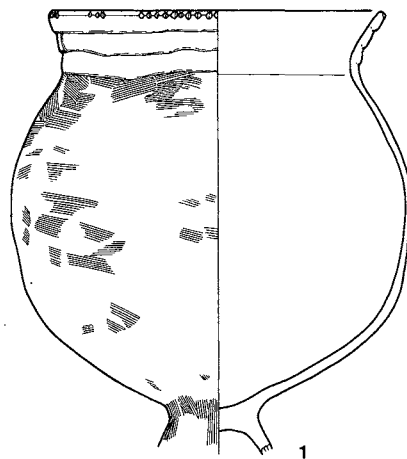
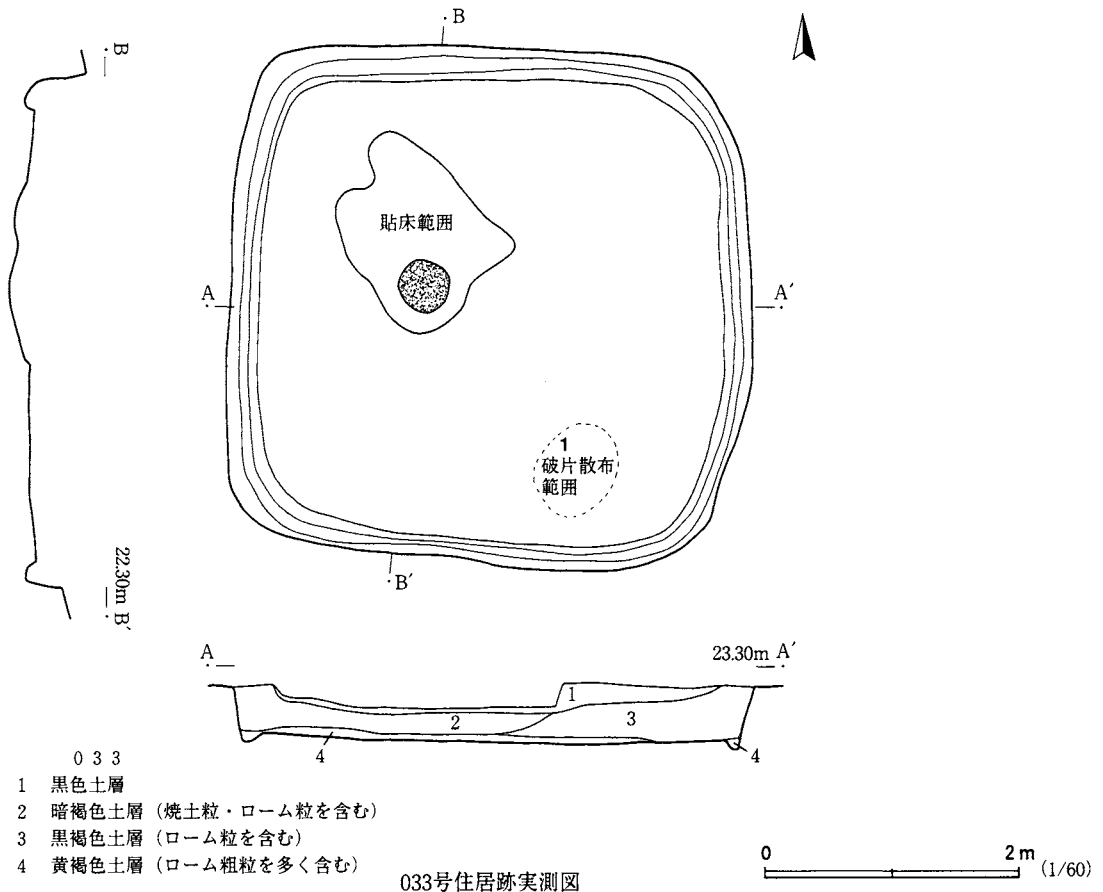
033号住居跡（第167図 第84表 図版72・102）

遺構 調査区中央部、032号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.20m×4.00mで、検出面からの深さは0.42mである。床面は平坦で、周辺に貼り床が施される。壁周溝が全周し、幅0.2m、床面からの深さは0.1m～0.15mである。炉跡が床面中央やや西寄りに検出された。円形で、径0.4m、床面への掘り込みは0.1mである。炉跡が床面中央部やや西寄りに検出された。古墳時代前期の土器が出土している。床面南東隅からは台付甕1個体分の破片が出土している。

遺物 1は土師器台付甕である。台部端が欠損している。胴部は球形で、口縁部は外反し、口縁部端に刻み目が施される。口縁部に3段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。

第84表 033号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎土	色調	焼成
1	1.2 5.6	台付甕	口径 17.5 底径 23.1 高さ 23.1 最大径21.35	70%	ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ 刻み・ヘラナデ-ハケ調整の後ヘラナデ-ハケ調整 の後ヘラナデ-ハケ調整	砂粒 白色鈺物 赤色スコリア粒	灰褐色	良好



033号住居跡出土遺物

0 10cm (1/4)

第167図 033号住居跡実測図及び出土遺物

034号住居跡 (第168図 第85表 図版72・103)

遺構 調査区西部、026号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.83m×4.57mで、検出面からの深さは0.37mである。床面は平坦である。炉跡、貯蔵穴、ピットが検出された。炉跡は床面中央やや西寄りに検出された。楕円形で、1.15m×0.9m、床面への掘り込みは0.15mである。貯蔵穴は東壁下中央部やや北に位置している。楕円形で、0.8m×0.7m、床面からの深さは0.7mである。ピットは床面南東隅に検出された。楕円形で、0.6m×0.45m、床面からの深さは0.2mである。古墳時代前期の土器が出土し、西壁付近の床面から大型壺が出土している。

遺物 1は土師器壺の胴底部である。底部中央を欠く。底部は平底で、胴部はやや下脹れの球形である。2は土師器壺の胴部である。胴部はやや下脹れの球形と思われる。3は器台の脚部と考えられる。裾部が外反する。

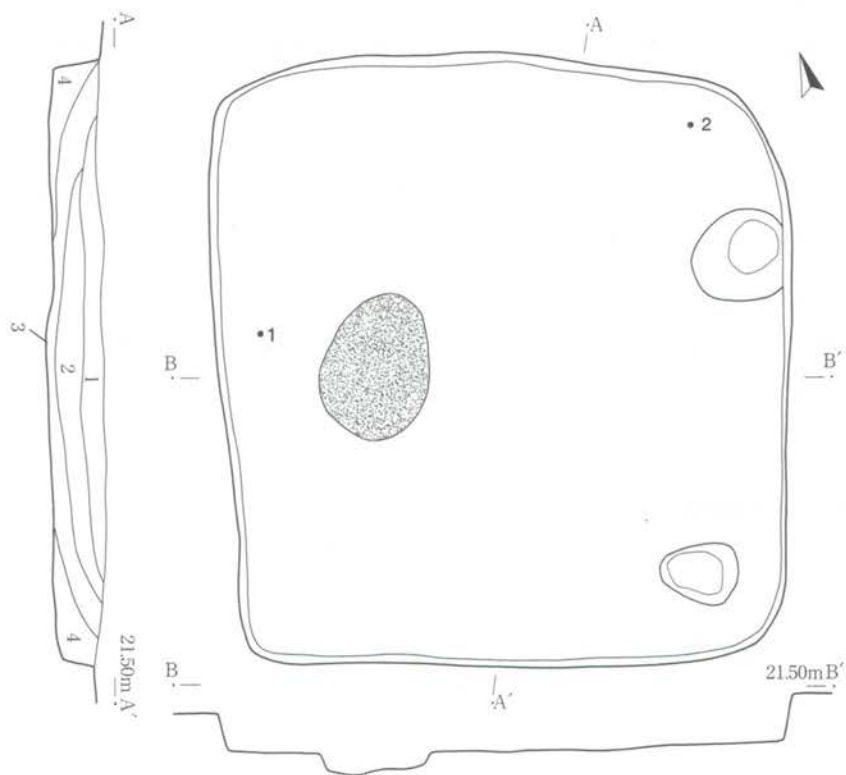
第85表 034号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法(上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	11	壺	口径 底径 9.6 高さ 26.3 最大径29.9	60%	-ヘラナデ-ヘラナデの後粗いミガキ- -網目状燃糸文-ヘラミガキ-ヘラナデ	砂粒・白色鉱物 少量 赤色スコリア粒	暗褐色、 赤褐色 赤彩	良好
2	3.8 10	壺	口径 底径 高さ 13.8 最大径28.9	25%	ヘラミガキ-ヘラナデ- -ヘラミガキ-	砂粒 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色 赤彩	良好
3	9.10	器台	口径 裾部径 8.0 高さ 4.0 最大径	35%	-ヘラケズリの後粗いヘラミガキ- -ヘラミガキ-ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	黒褐色 赤褐色 赤彩	良好

035号住居跡 (第169・170図 第86表 図版73・103・104)

遺構 調査区西部、034号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は6.28m×5.25mで、検出面からの深さは0.73mである。床面はほぼ平坦である。壁周溝、柱穴、炉跡、貯蔵穴、ピットが検出された。壁周溝は西壁及び東壁中央部で途切れるほかは全周し、幅0.15m~0.2m、床面からの深さは0.1mである。柱穴は4か所で、住居跡のほぼ対角線上に位置し、柱穴中心から壁までの距離は1.3m~1.6mである。柱穴はほぼ円形で、径0.4m~0.7m、床面からの深さは0.5m~0.55mである。炉跡は床面中央やや北西寄りに位置している。楕円形で、1.0m×0.75m、床面への掘り込みは0.15mである。貯蔵穴は東壁下中央やや北に位置し、壁に掘り込まれ、横穴状である。楕円形で、0.3m×0.1m、床面からの深さは0.15m、壁からの奥行きは0.55mである。ピットは1基で、床面東壁下中央に検出された。楕円形で、0.55m×0.4m、床面からの深さは0.15mである。古墳前期の土器が出土し、床面から完形土器、大形破片が出土している。特に、北東隅から、甕が2個体重なった状態で検出されている。

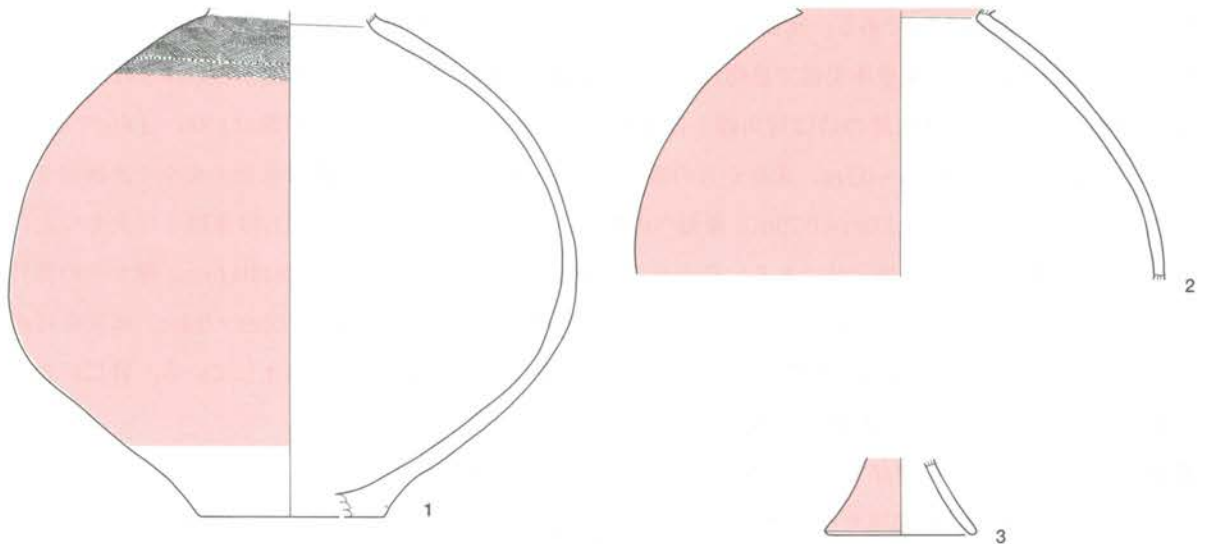
遺物 1は土師器壺の口縁部である。外反し、口縁部端はやや内弯する。折り返し口縁である。2は土師器壺の胴底部である。底部はやや上げ底で、胴部はやや扁平な球形と思われる。胴部に赤彩が施される。3は土師器甕である。底部はやや小さな平底で、胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。4は土師器台付甕である。台部を欠く。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部端に刻み目が施される。口縁部に2段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。5は土師器台付甕である。



- 0 3 4
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒色土層
 - 3 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

0 2m (1/60)

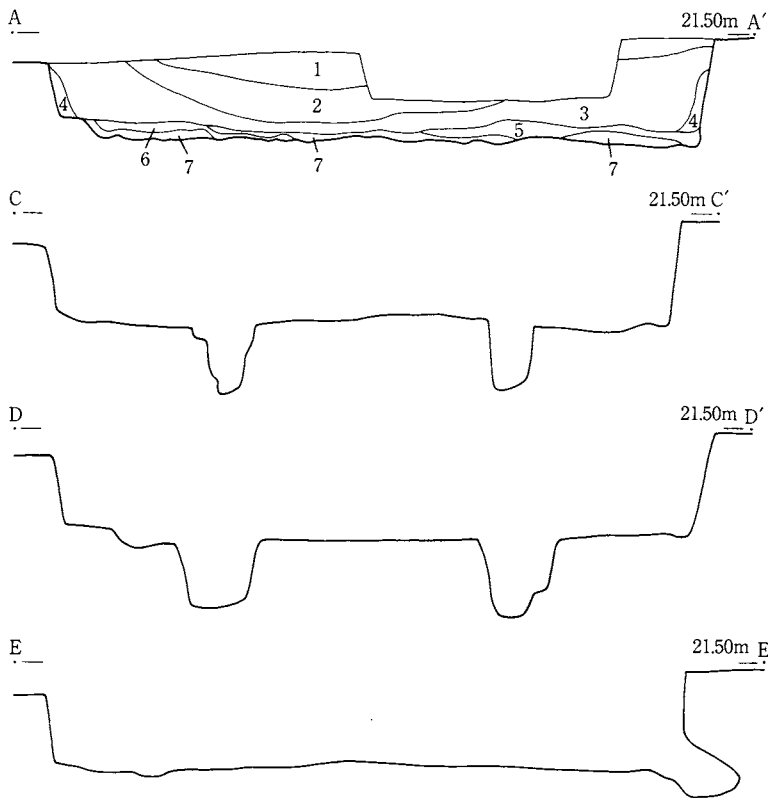
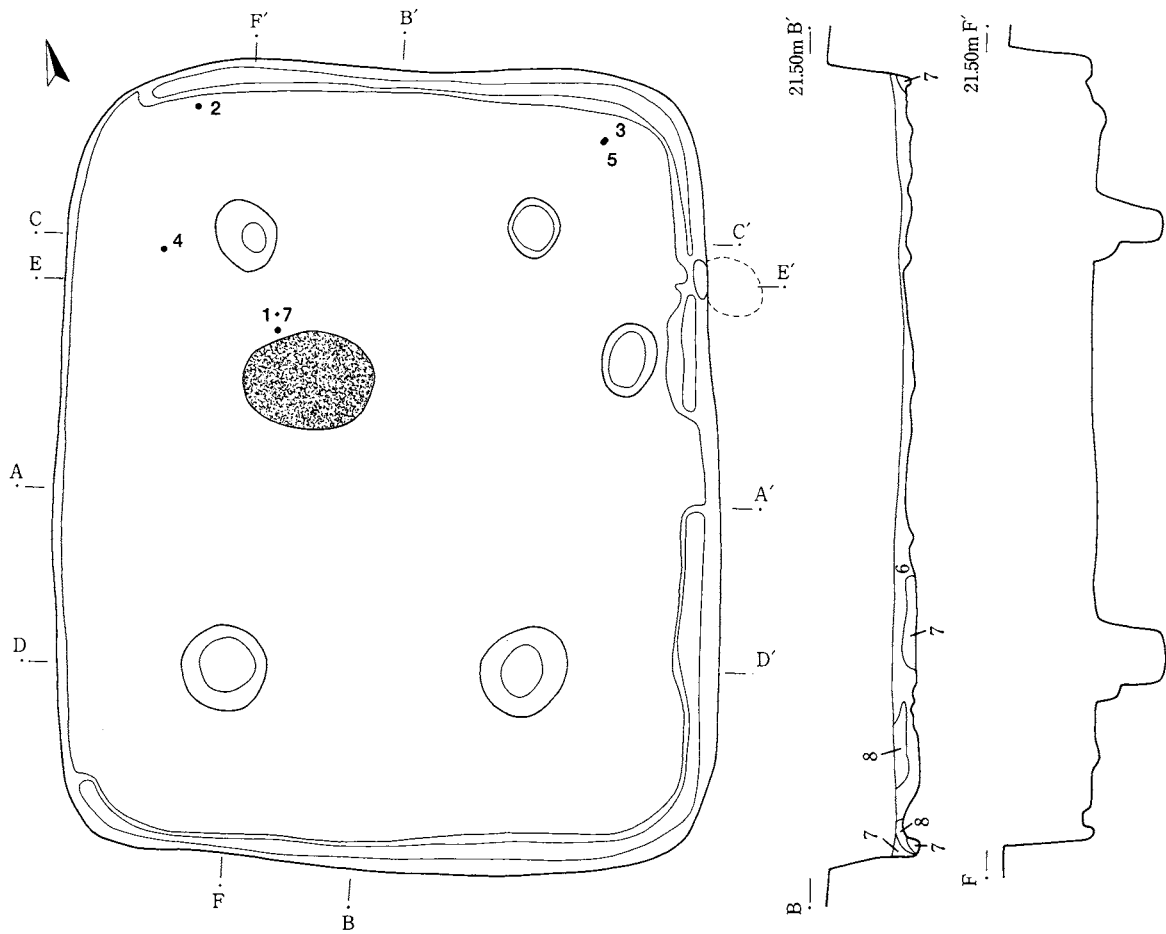
034号住居跡実測図



0 10cm (1/4)

034号住居跡出土遺物

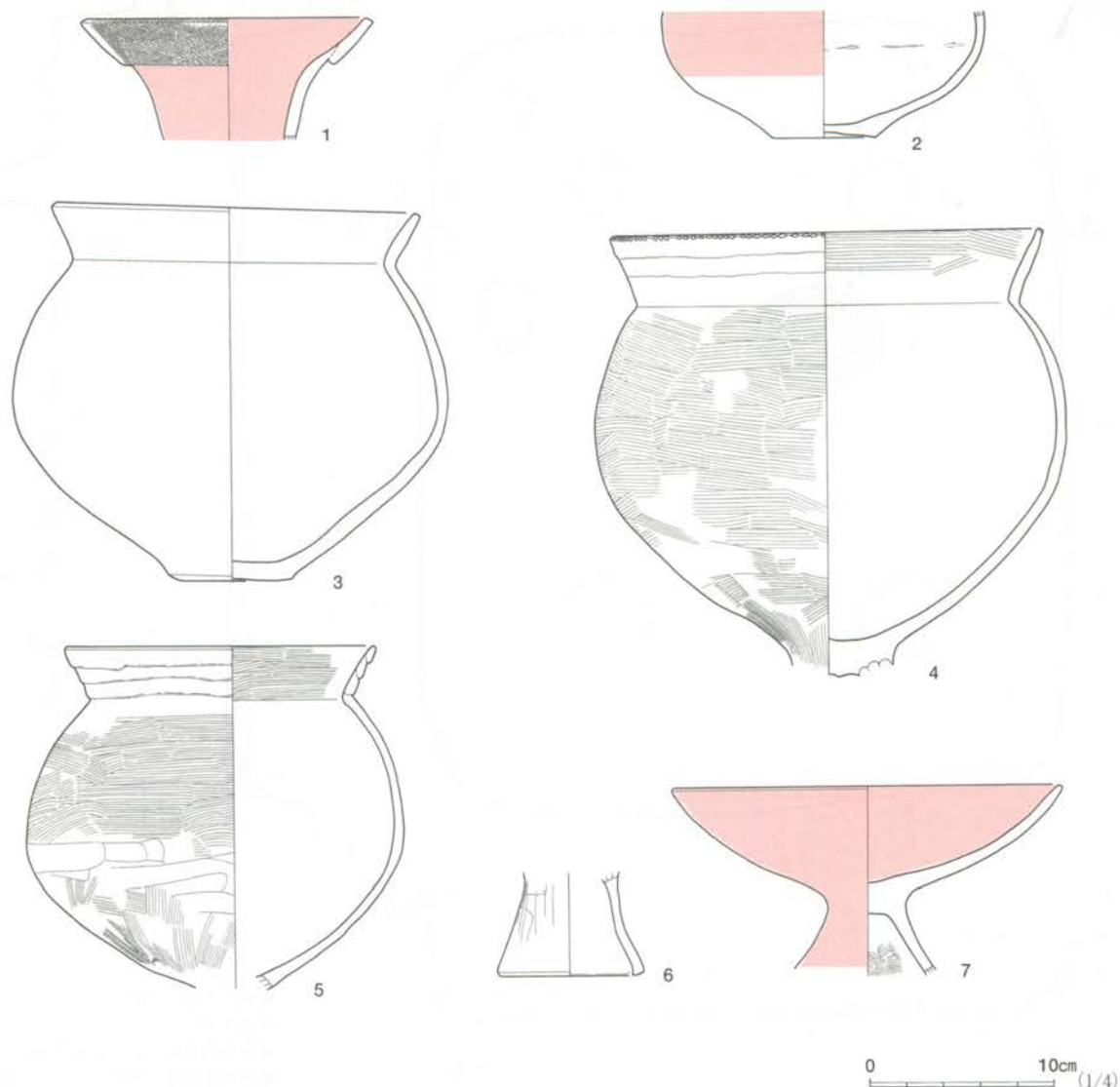
第168図 034号住居跡実測図及び出土遺物



- 0 3 5
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
 - 5 暗黄褐色土層 (ローム粗粒を含む)
 - 6 黄褐色土層 (ローム粗粒を多く含む)
 - 7 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 8 ロームブロック層

0 2m (1/60)

第169図 035号住居跡実測図



第170図 035号住居跡出土遺物

台部を欠く。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部に3段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。6は土師器台付甕の台部である。外反して広がり、端部がごく短く内弯する。7は土師器高坏である。脚部裾部を欠く。坏部は大きく広がって立ち上がり、緩やかに内弯して口縁部に至る。脚部は外反して広がる。

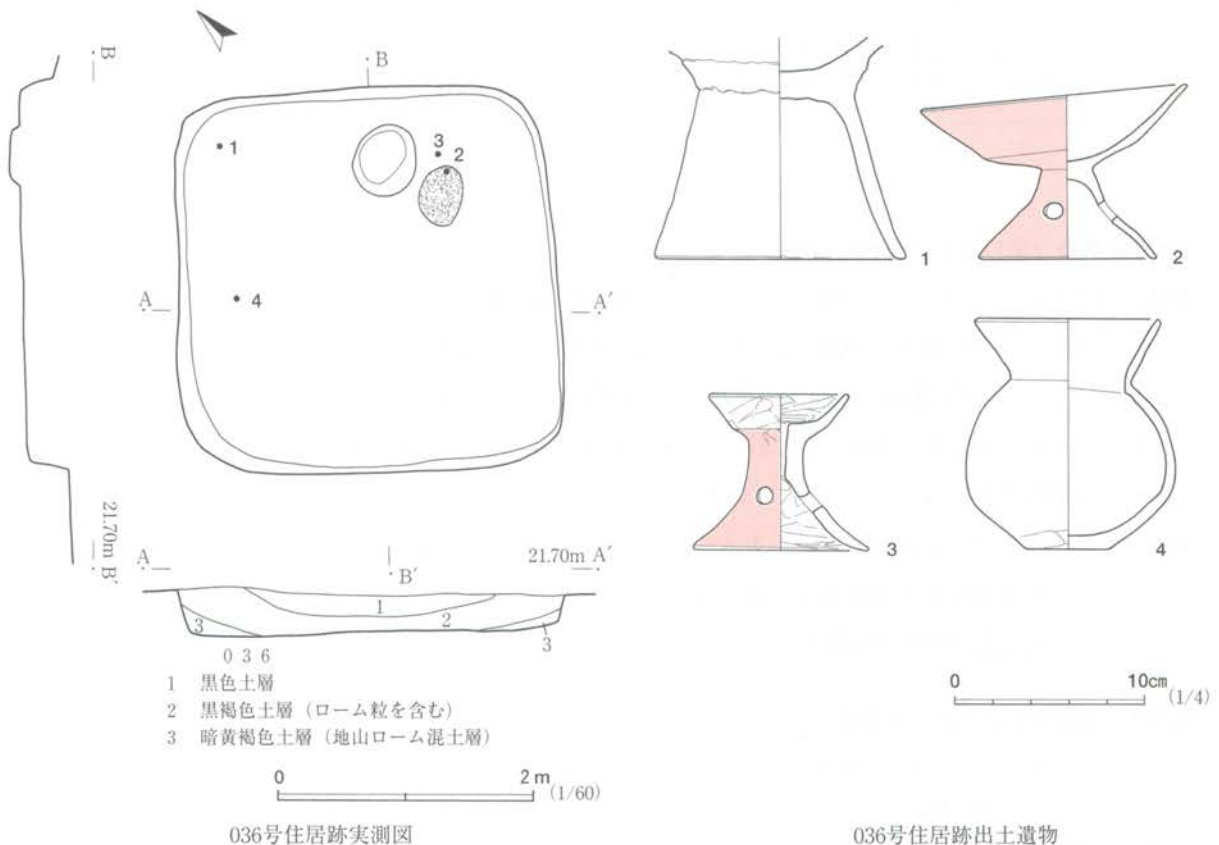
第86表 035号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面, 下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎土	色調	焼成
1	4	壺	口径 14.9 底径 5.6 高さ 5.6 最大径	4%	ヘラミガキ - - - 網目状燃糸文-ヘラミガキ - -	砂粒 白色銹物・赤色 スコリア粒少量	赤褐色 (赤彩)	良好
2	2	壺	口径 底径 5.4 高さ 6.9 最大径17.3	35%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラミガキ-ヘラミガキ	砂粒 白色銹物・赤色 スコリア粒少量	褐色 赤彩	良好

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
3	13	甕	口径 19.2 底径 6.8 高さ 19.8 最大径23.4	85%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデの後粗いヘラミガキ-ヘラナデの後粗いヘラミガキ ヘラナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 少量	褐色	良好
4	3	台付甕	口径 23.25 底径 25.4 高さ 25.4 最大径23.4	80%	ハケ調整の後ヘラミガキ-ヘラケズリの後粗いミガキ-ヘラケズリの後ミガキ-ヘラナデ ヘラナデの後刻み・ナデ- -ハケ調整-	砂粒 白色鈹物	暗褐色 黒褐色	良好
5	12	台付甕	口径 16.4 底径 18.2 高さ 20.3	70%	ハケ調整-ヘラナデ-ヘラケズリの後ヘラナデ- ヨコナデ-ハケ調整・ヘラケズリ-ハケ調整-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 少量	灰褐色 暗褐色	良好
6	10	台付甕	口径 7.95 底径 5.4 高さ 5.4 最大径	20%	- -ヘラナデ- - -ヘラナデの後粗いヘラケズリ-ヘラナデ	砂粒 白色鈹物	赤褐色	良好
7	4.9 10	高坏	口径 20.7 底径 9.9 高さ 9.9 最大径	70%	ヘラミガキ-ハケ調整の後ヘラミガキ-ヘラナ デ・ハケ調整- 面取り-ハケ調整の後ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物・赤色 スコリア粒少量	赤褐色 (赤彩) 暗褐色	良好

036号住居跡 (第171図 第87表 図版74・104)

遺構 調査区西部、035号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形で、規模は3.00m×3.00mで、検出面からの深さは0.28mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央東隅寄りに検出された。楕円形で、0.5m×0.35m、床面への掘り込みは0.1mである。ピットは床面中央北東壁隅寄りに検出された。楕円形で、



第171図 036号住居跡実測図及び出土遺物

0.55m×0.45m、床面からの深さは0.1mで、焼土混じりの覆土が堆積していた。古墳時代前期の土器が出土し、床面から高坏、器台、小型壺などが出土している。特に、高坏、器台は炉跡と付近に並んで出土している。

遺物 1は土師器台付甕の台部である。やや大型の甕で、台部が直線的に広がり、端部がわずかに外反する。2は土師器の高坏である。脚部との接合部から坏部が稜を持って立ち上がり、直線的に大きく開く。口縁部端はわずかに外反し、尖り気味である。脚部は外反して開き、裾部がわずかに内弯するが、端部はやや外反する。円形の透孔が3か所に施される。3は土師器器台である。器受部は小さな坏状で、器受部と脚部との接合部は円筒状で、脚部は外反して開き、裾部に至る。円形の透孔が3か所に施される。4は土師器小型壺である。底部は平底で、胴部はほぼ球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。

第87表 036号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	2	台付甕	口径 13.3 底径 11.5 高さ 最大径	20%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラナデ-ナデ・ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
2	4.8 9	高坏	口径 13.8 底径 9.4 高さ 8.6 最大径	95%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ- ヨコナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ 透孔3か所	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	灰褐色 赤彩	良好
3	7	器台	口径 7.1 底径 9.1 高さ 8.1 最大径	95%	-ヘラケズリ-ナデの後ヘラケズリ-ハケ調整 の後ヘラケズリ ナデ-ハケ調整の後ヘラケズリ-ヘラミガキ-ヘ ラナデ 透孔3か所	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色 脚外面 赤彩	良好
4	1.11	小型壺	口径 9.4 底径 4.3 高さ 11.95 最大径11.0	85%	ヘラナデ- -ヘラナデ-ヘラナデ ヨコナデ・ヘラナデ-ヘラナデの後ヘラミガキ- ヘラケズリの後粗いヘラナデ-ヘラケズリ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	灰褐色	良好

038号住居跡 (第172図 第88表 図版75・105)

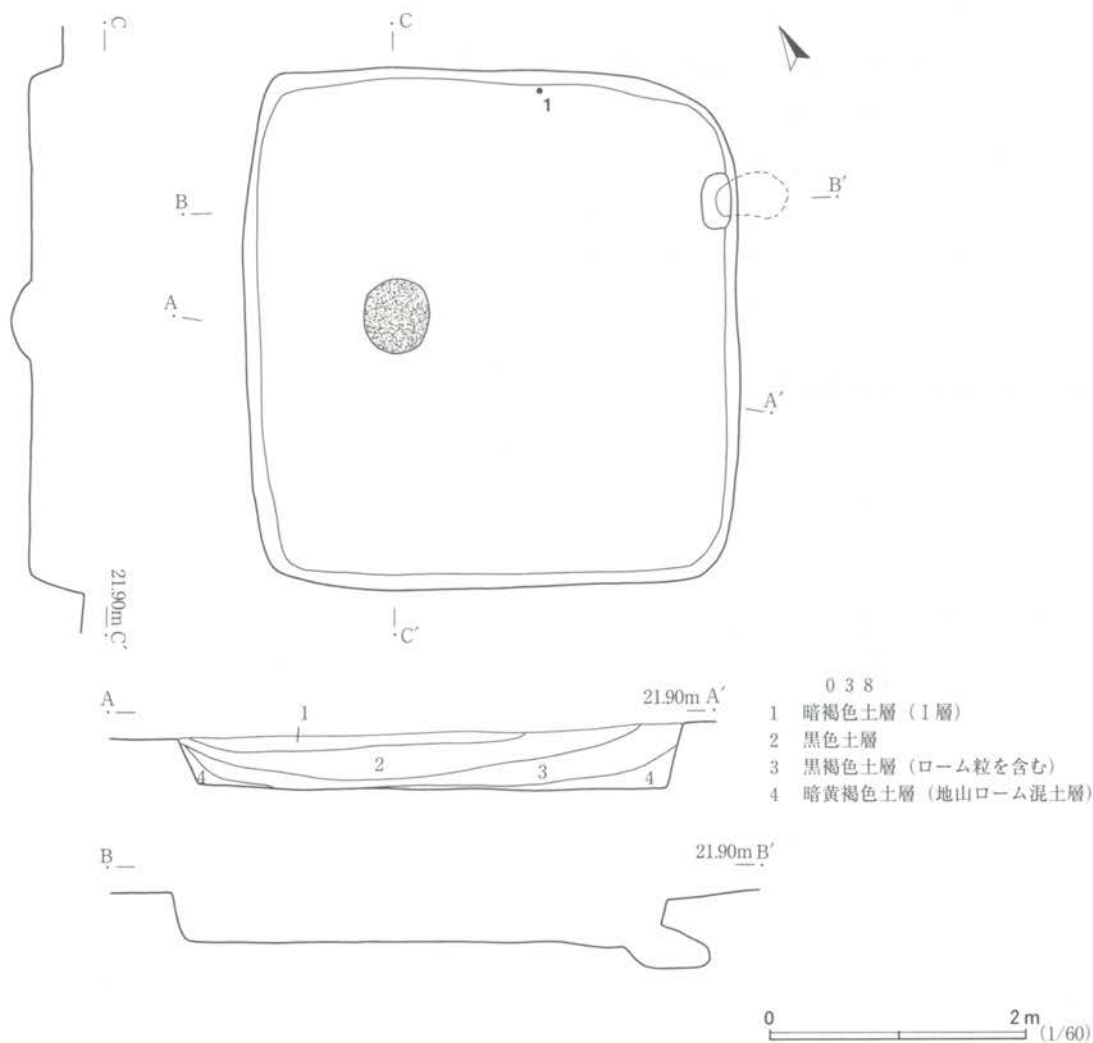
遺構 調査区西部中央寄り、036号住居跡の北東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.10m×3.19mで、検出面からの深さは0.42mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央北西寄りに検出された。ほぼ円形で、径0.55m、床面への掘り込みは0.15mである。貯蔵穴は南東壁下東隅寄りに検出された。壁に掘り込まれ、横穴状である。楕円形で、0.3m×0.1m、床面からの深さは0.5m、壁からの奥行きは0.45mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 1は土師器高坏の坏部である。大きく開いて立ち上がり、口縁部は緩やかに内弯する。2は土師器器台である。器受部は小さな坏状で、脚部は外反して広がり、裾部に至る。器受部と脚部の接合部は穿孔されないが、器受部の形状から器台とした。

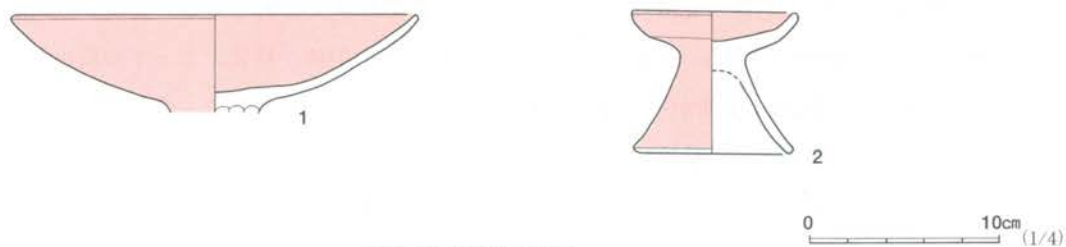
第88表 038号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	3, 4 5, 6 8	高坏	口径 21.15 底径 5.25 高さ 最大径	30%	-ヘラナデの後ヘラミガキ- - 面取り-ヘラケズリの後ヘラミガキ- -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色 赤褐色 赤彩	良好

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) - 底部	胎土	色調	焼成
2	1	器台	口径 8.45 底径 8.0 高さ 7.35 最大径	90%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラケズリの後粗いミ ガキ-ヘラナデ ヨコナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ	砂粒 白色鉾物 赤色スコリア粒 少量	赤褐色 赤彩 脚内 暗褐色	良好



038号住居跡実測図



038号住居跡出土遺物

第172図 038号住居跡実測図及び出土遺物

039号住居跡（第173図 第89表 図版75・105）

遺構 調査区西部、036号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は5.04m×4.93mで、検出面からの深さは0.40mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央やや北西寄りに検出された。楕円形で、0.75m×0.55m、床面への掘り込みは0.2mである。ピットが3基検出された。床面の南東壁下に重複して2基、南隅に1基である。南東壁下のピットは円形で、径0.4m、床面からの深さは0.3mである。南隅のピットは楕円形で、0.65m×0.4m、床面からの深さは0.25mである。古墳時代前期の土器が出土し、床面から異形器台、ガラス玉が出土している。

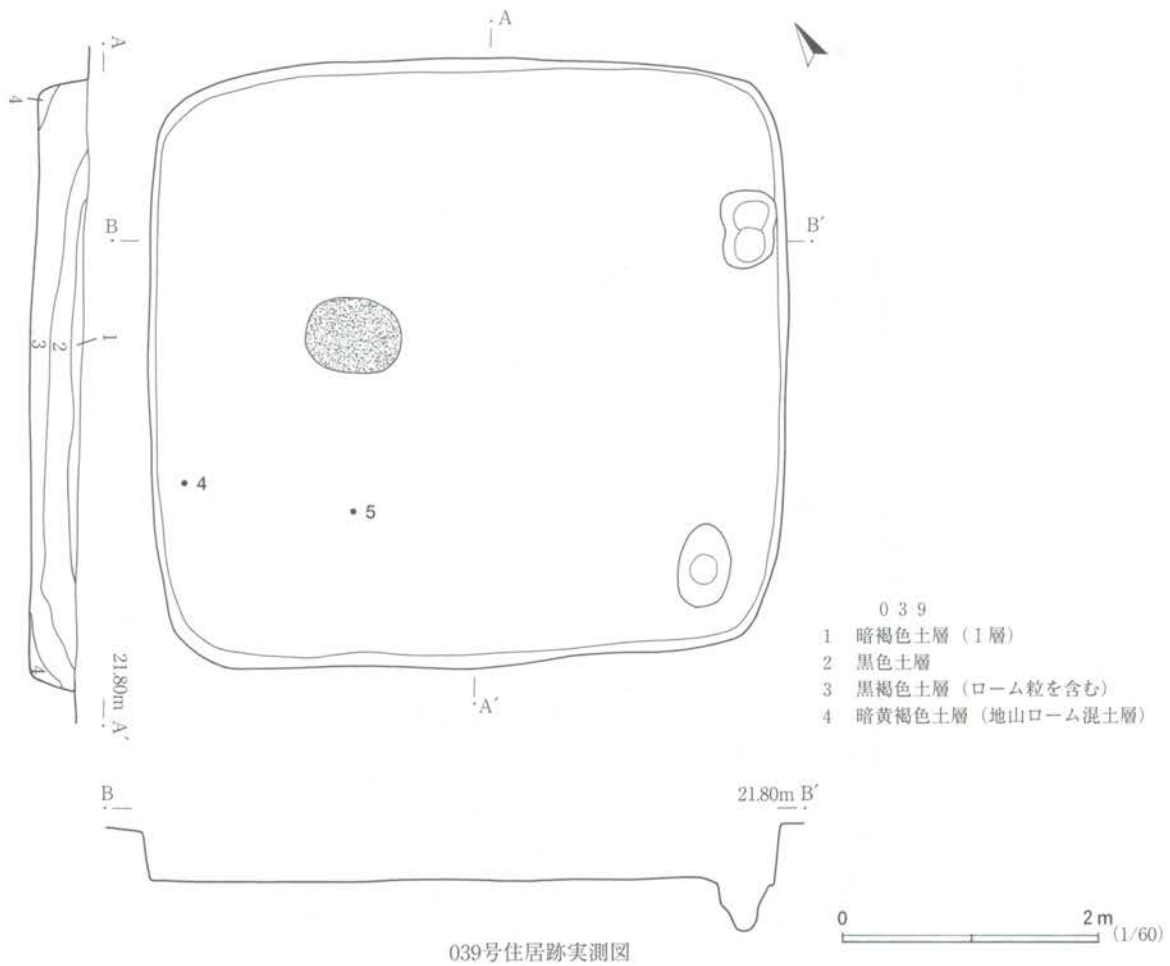
遺物 1は土師器壺である。口縁部上半を欠く。底部は平底で、胴部は下脹れで、やや扁平な球形である。口縁部は外反して立ち上がる。2は土師器器台付甕である。台部は直線的に広がり、端部に至る。胴部はやや扁平な球形で、口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部に3段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。3は土師器高坏の脚部である。外反し、裾部が大きく広がる。円形の透孔が3か所に施される。4は土師器器台形土器である。器受部が丸みのあるソロバン玉状で、中央に孔がある。脚部は外傾して広がり、わずかに内弯して裾部に至る。裾部はわずかに外反する。5はガラス小玉である。やや扁平な球形である。

第89表 039号住居跡出土遺物表

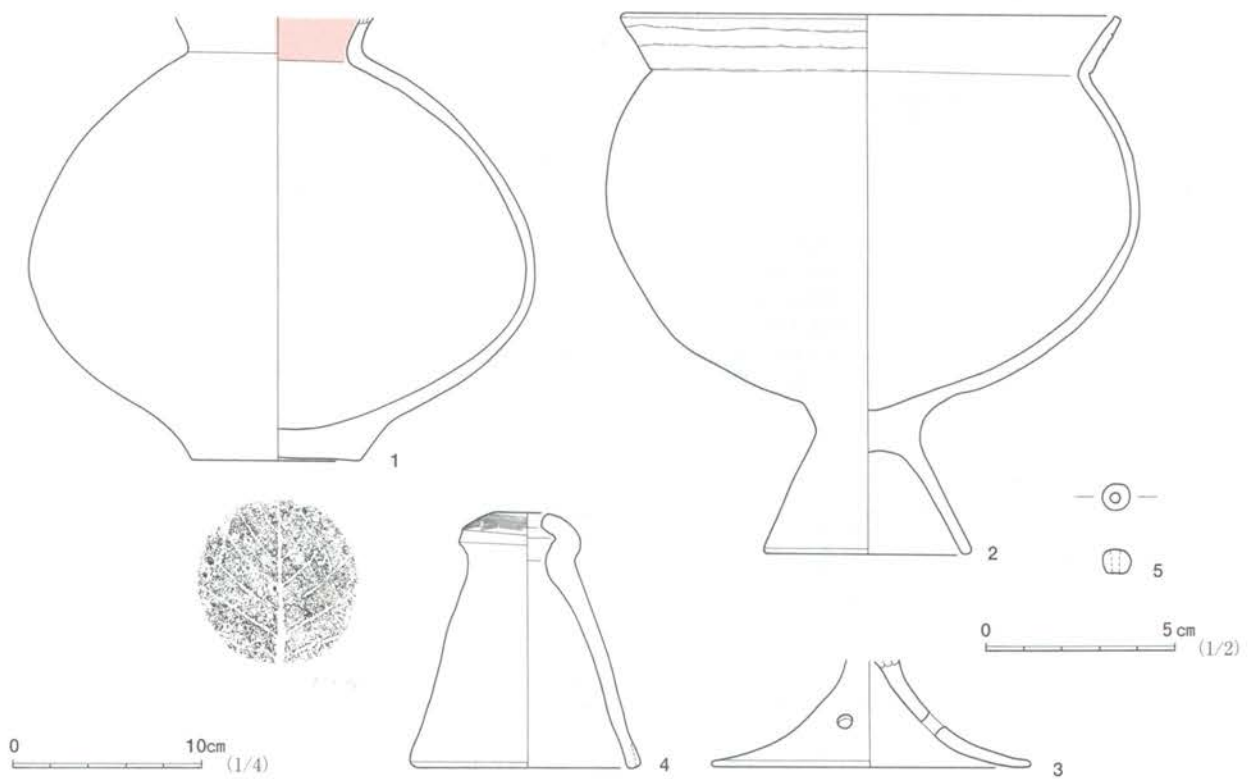
挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎土	色調	焼成
1	1, 2 4, 7 9, 10	壺	口径 8.8 底径 23.1 高さ 26.55 最大径	80%	-ヘラミガキ-ヘラナデ-ヘラナデ -ヘラミガキ-ヘラミガキ-木葉痕	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 微量	口縁内 赤彩 黄褐色	良好
2	1, 2 6, 7 9, 10 11, 12	台付甕	口径 25.7 底径 10.6 高さ 28.05 最大径28.1	85%	ヘラナデの後粗いヘラミガキ-ヘラナデ-ヘラナ デ-ヘラナデ 面取り・ナデの後軽いヘラナデ-ヘラナデ-ヘラ ナデ-ヘラナデ	砂粒 白色鈹物	暗褐色	良好
3	1, 7 10	高坏	口径 16.6 底径 5.5 高さ 最大径	40%	- -ヘラケズリの後粗いヘラナデ-ヘラケズ リの後粗いヘラミガキ - -ヘラミガキ-ヘラナデ	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色 褐色	良好
4	14	器台形土器	口径 6.4 底径 12.2 高さ 8.25 最大径	90%	ヘラナデ-ナデ・ヘラナデ-ヘラケズリ-ヘラナ デ ハケ調整-ヘラナデ-ヘラナデ-	砂粒 白色鈹物	暗赤褐色 暗褐色	良好
5	5	ガラス小玉	重さ 0.4g 孔径 0.25 高さ 0.6 最大径 0.75	100%	- - - - - -		藍色	

041号住居跡（第174～176図 第90表 図版76・77・106～108）

遺構 調査区中央部、033号住居跡の北隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は6.63m×5.00mで、検出面からの深さは0.40mである。床面は平坦である。壁周溝、炉跡、柱穴、ピットが検出された。壁周溝は全周し、幅0.15m～0.2m、床面からの深さは0.15mである。柱穴は4か所で、住居跡のほぼ対角線上に位置し、柱穴中心から壁までの距離は1.3m～1.6mである。柱穴は円形で、径0.3m、床面からの深さは0.7m～0.8mである。炉跡は床面中央やや西寄りに位置している。ほぼ円形で、0.6m、床面への掘り込みは0.15mである。ピットは4基で、床面西壁寄り中央部に1基、北西隅に1基、東壁下中央に1基、北東隅に1基である。ほぼ円形で、径0.3m、床面からの深さは0.15m～0.2mである。古墳時代前期の土器が出土し、

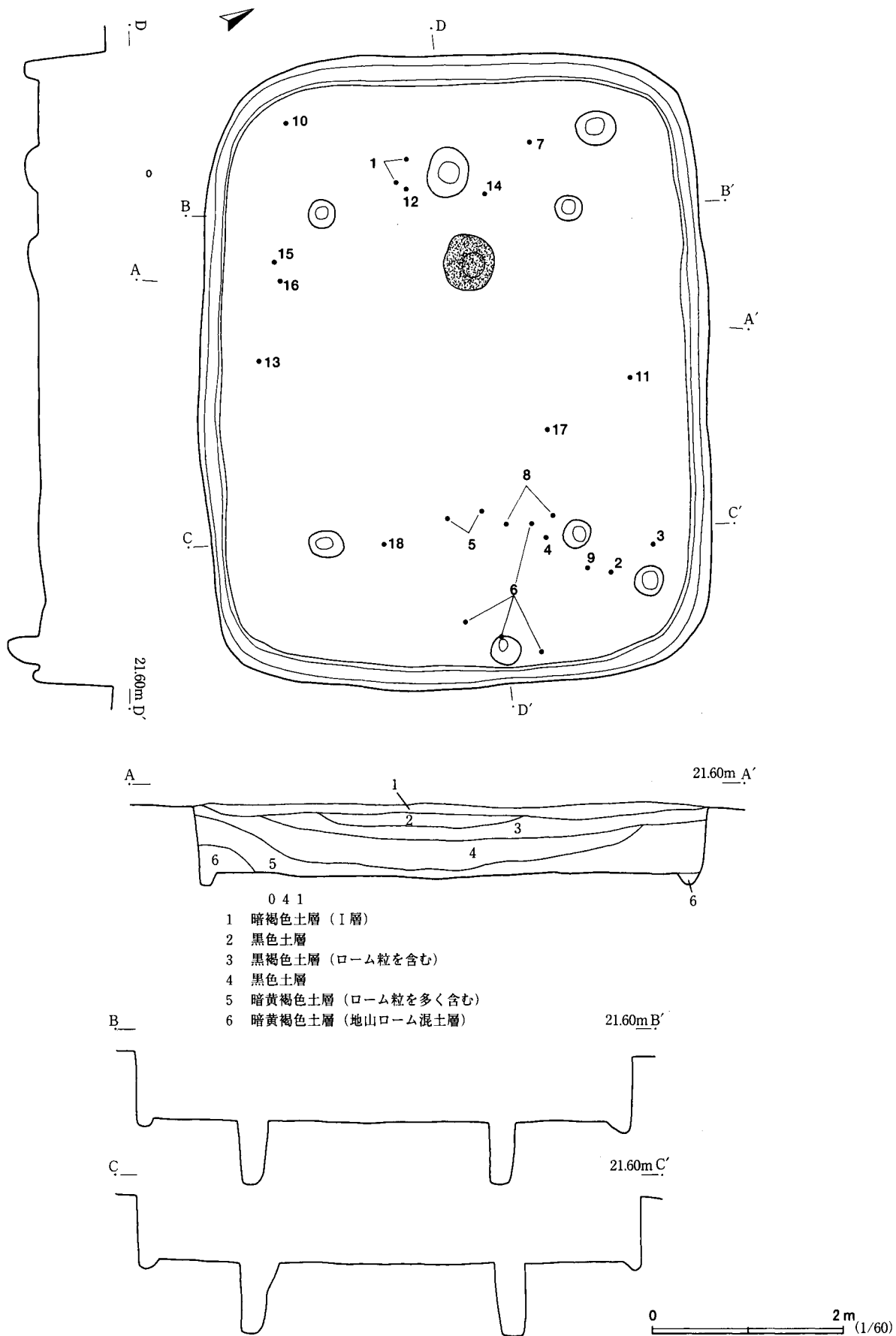


039号住居跡実測図



039号住居跡出土遺物

第173図 039号住居跡実測図及び出土遺物



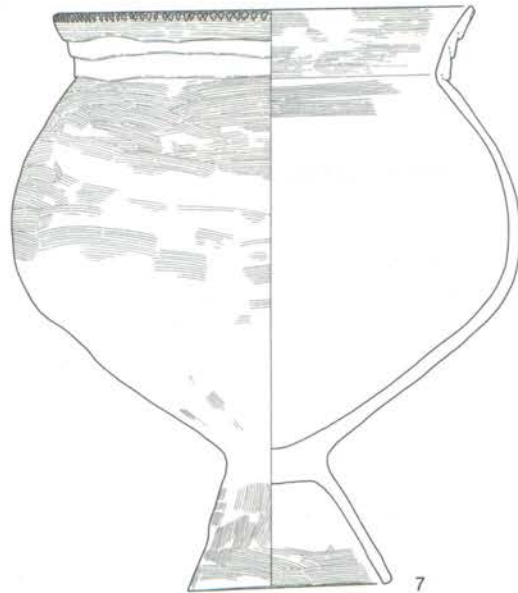
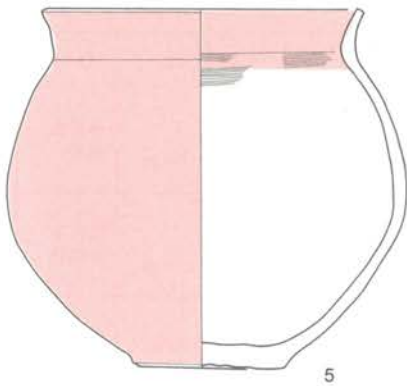
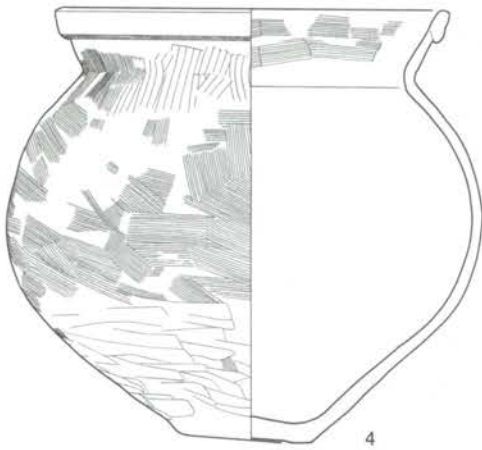
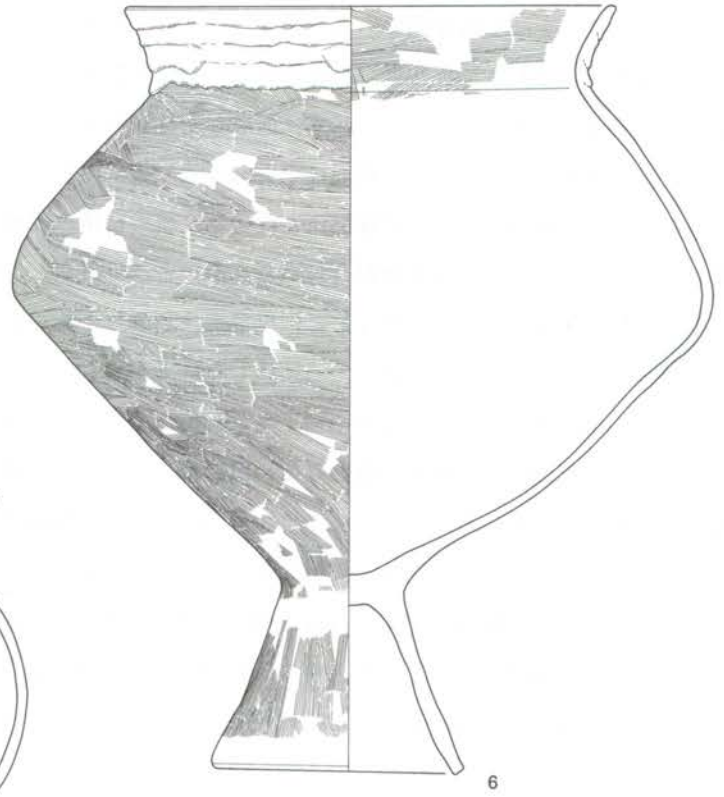
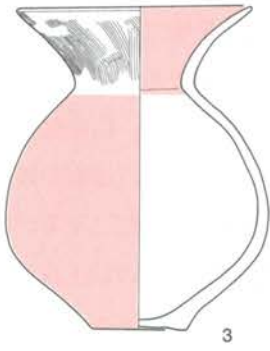
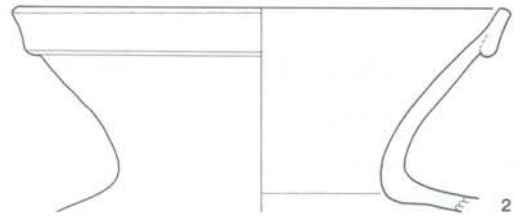
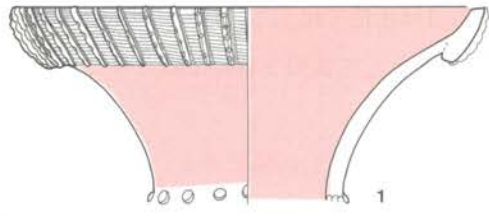
第174図 041号住居跡実測図

床面から多くの完形、または、復元可能な土器が検出されている。1は正位で出土し、ほかの土器も正位または、正位から倒れた状態で出土している。2は倒立であるが、器台として使用されたためと考えられる。また、土師器小型壺に納められた、砂鉄が検出されている。

遺物 1は土師器壺の口縁部である。外反し、口縁部端は内弯する。折り返し口縁である。2は土師器壺の口頸部である。頸部から口縁部が外反し、口縁部端はやや内弯する。折り返し口縁である。3は土師器小型壺である。底部は平底で、胴部はやや下脹れの球形である。口縁部は大きく外反する。中に砂鉄が納められていた。4は土師器甕である。底部は平底で、胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外反し、口縁部端は直線的である。折り返し口縁である。5は土師器甕である。底部は平底で、胴部はほぼ球形である。口縁部は短く外反する。口縁部端に面取りが施される。6は土師器台付甕である。台部は外傾して開き、端部はわずかに外反する。胴部は中央部が強く張り出し、ソロバン玉状である。口縁部は外反し、口縁部端はほぼ直線的である。口縁部に4段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。7は土師器台付甕である。台部は外傾して開き、直線的に端部に至る。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外反し、口縁部端に刻み目が施される。口縁部に3段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。8は土師器台付甕である。台部はやや内弯して開き、端部に至る。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部端には面取りが施される。口縁部に2段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。9は土師器台付甕の口胴部である。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外反し、口縁部端に至る。口縁部端にヨコナデが施される。10は土師器台付甕の台部である。わずかに内弯して開き、端部に至る。11は土師器小型甕である。底部は平底で、胴部はやや下脹れの扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部に2段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。12・13は土師器高坏の坏部である。坏部は緩やかに内弯して開き、口縁部に至る。14は土師器器台である。器受部は小さな坏状で、脚部は外反して開き、裾部に至る。器受部と脚部との接合部に穿孔が施され、高坏と区別される。脚部には円形の透孔が3か所に施される。15～17は土師器器台形土器である。器受部は丸みのあるソロバン玉状で、脚部はやや外反して開き、裾部は直線的である。器受部に孔がある。15・16は端部が折り返されている。18は土玉である。やや下脹れの球形で、片側から穿孔されている。

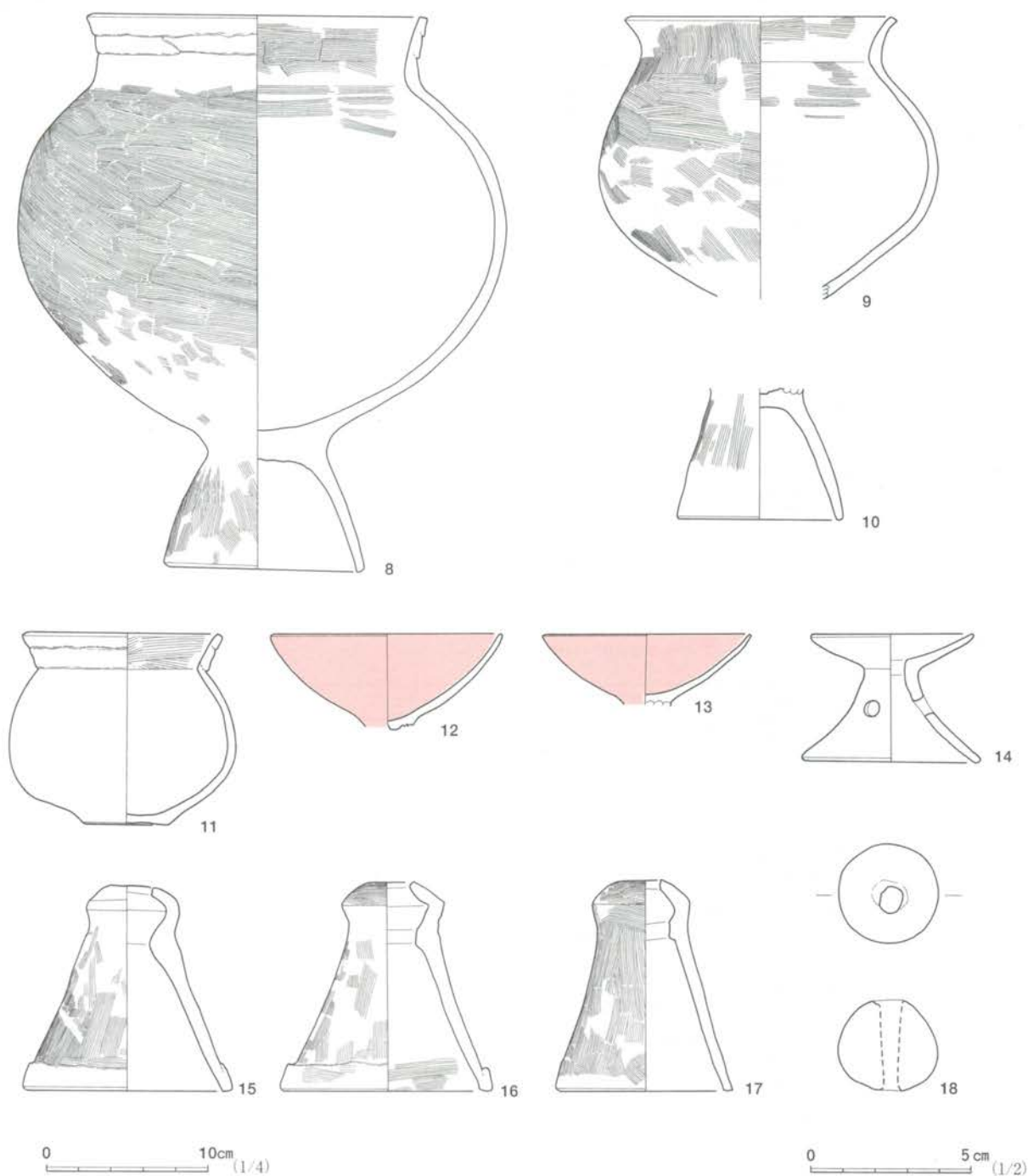
第90表 041号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎土	色調	焼成
1	1, 2 8, 24 26, 28	壺	口径 24.6 底径 高さ 10.4 最大径	20%	-ハケ調整の後ヘラミガキ- 一部LR単節縄文・ハケ調整の後ヘラナデ-ハケ調整の後棒状浮文-ヘラミガキ・円形浮文-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 赤彩	良好
2	7	壺	口径 25.3 底径 高さ 10.8 最大径	20%	ヘラナデの後ヘラミガキ-ヘラナデ- ヨコナデ・ヘラナデの後ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 黄褐色	良好
3	6	小型壺	口径 12.5 底径 4.9 高さ 16.8 最大径13.15	95%	ヘラミガキ-ヘラナデ-ヘラナデ ヨコナデ・ハケ調整の後軽いヘラナデ-ヘラミガキ-ヘラケズリ	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	赤褐色 赤彩	良好
4	9	甕	口径 19.8 底径 7.1 高さ 22.25 最大径24.45	95%	ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラケズリの後粗いヘラナデ ヨコナデ・ハケ調整-ハケ調整-ハケ調整の後ヘラケズリ-ナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色	良好



0 10cm (1/4)

第175図 041号住居跡出土遺物(1)



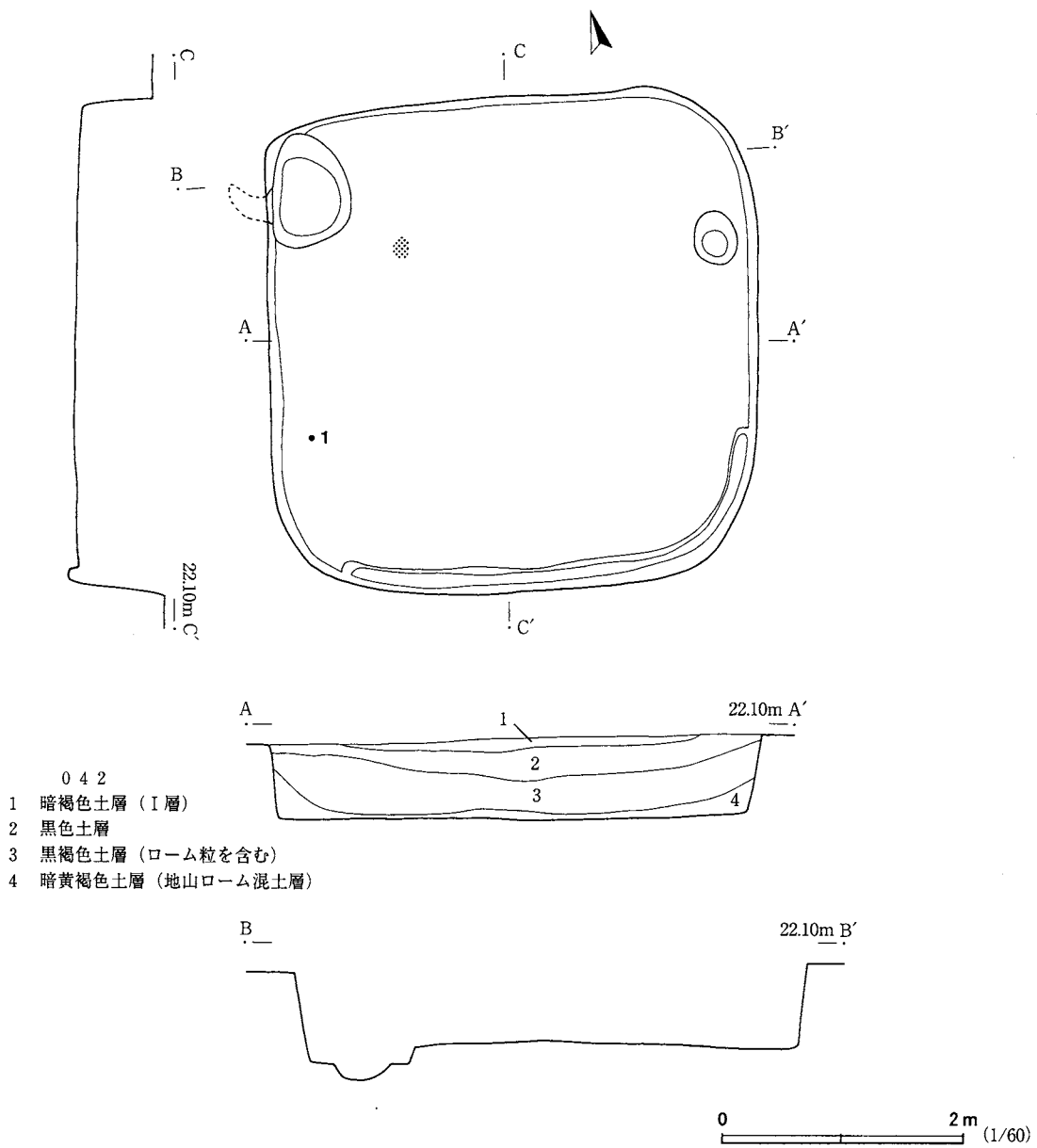
第176図 041号住居跡出土遺物(2)

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法(上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
5	1.13 14.19	甕	口径 16.1 底径 7.9 高さ 18.55 最大径20.9	95%	ヘラミガキ-ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラケズリ の後ヘラナデ-ヘラケズリの後ヘラナデ 面取り・ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラミガキ- ヘラケズリ	砂粒 白色鉾物 赤色スコリア粒 少量	褐色 赤褐色 赤彩	良好
6	14.9 11.16 17.18 19.28	台付甕	口径 25.2 底径 12.55 高さ 39.35 最大径37.0	70%	ハケ調整の後軽いヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナ デ-ヘラナデ 面取り・ナデの後ヨコナデ-ハケ調整-ハケ調 整-ヨコナデ	砂粒 白色鉾物 赤色スコリア粒 少量	黒褐色 黒褐色・ 黄褐色	良好

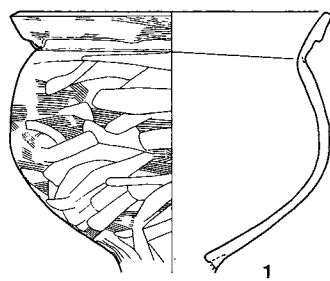
挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎 土	色 調	焼 成
7	28, 29	台付甕	口径 21.55 底径 10.2 高さ 30.0 最大径26.8	95%	ハケ調整の後粗いヘラミガキ-ヘラナデの後ヘラミガキ-ヘラナデの後丁寧なヘラミガキ-ヘラナデ・ハケ調整 ハケ調整の後刻み・ナデ-ハケ調整の後ヘラミガキ-ハケ調整の後丁寧なヘラミガキ-ヘラナデの後ハケ調整・ヘラナデ	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物微量	暗褐色 黒褐色	良好
8	1, 10 12, 19	台付甕	口径 20.2 底径 11.6 高さ 34.25 最大径31.15	95%	ハケ調整の後軽いヨコナデ-ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ 面取り・ナデの後ヨコナデ-ヘラナデ・ハケ調整-ハケ調整の後ヘラミガキ-ハケ調整の後ヘラミガキ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	暗褐色	良好
9	8	台付甕	口径 16.0 底径 高さ 17.45 最大径21.0	65%	ハケ調整の後粗いヘラミガキ-ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラケズリの後ヘラナデ- ヨコナデ・ハケ調整-ハケ調整-ハケ調整の後粗いヘラミガキ-	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	暗褐色	良好
10	23	台付甕	口径 底径 9.3 高さ 8.0 最大径	15%	-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ - -ハケ調整の後ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物	灰褐色	良好
11	3	小型壺	口径 11.7 底径 5.4 高さ 11.7 最大径14.05	85%	ハケ調整の後粗いヘラミガキ-ヘラミガキ- ヘラミガキ ヨコナデ・ナデ-ハケ調整の後ヘラミガキ- ヘラケズリ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色	良好
12	25	高 坏	口径 14.2 底径 高さ 5.7 最大径	50%	-ヘラミガキ- ヨコナデ-ハケ調整の後ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物	赤褐色 赤彩	良好
13	20, 31	高 坏	口径 12.8 底径 高さ 4.35 最大径	30%	-ヘラミガキ- ヨコナデ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 赤彩	良好
14	27	器 台	口径 10.0 底径 11.65 高さ 12.8 最大径	95%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ ヨコナデ・ハケ調整の後ヘラミガキ-ヘラケズリ-ヘラケズリの後粗いミガキ-ハケ調整の後粗いミガキ	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物微量	褐色	良好
15	22	器台形土器	口径 5.75 底径 12.95 高さ 12.6 最大径	100%	ヘラナデ-ナデ-ヘラナデ-ヨコナデ・ヘラナデ -ハケ調整の後ヘラミガキ-ハケ調整の後粗いヘラミガキ-ヨコナデ	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	暗褐色	良好
16	21	器台形土器	口径 6.3 底径 13.1 高さ 12.8 最大径	100%	ヘラナデ-ヘラナデの後一部ハケ調整-ヘラナデ ハケ調整-ヘラナデ-ハケ調整の後粗いナデ-ハケ調整の後粗いヘラミガキ	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	褐色	良好
17	5	器台形土器	口径 6.05 底径 11.0 高さ 12.95 最大径	85%	ヘラナデ-ナデ-ヘラナデ-ヨコナデ ハケ調整- -ハケ調整-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
18	19	土 玉	重さ 26.4 g 孔径 0.85 高さ 2.8 最大径 3.1	100%	- - - -ナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色	良好

042号住居跡（第177図 第91表 図版78・109）

遺構 調査区中央部、041号住居跡の北隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.15m×4.08mで、検出面からの深さは0.59mである。床面は平坦である。壁周溝、貯蔵穴、ピットが検出された。壁周溝は南壁下から南東隅に検出された。幅0.2m、床面からの深さは0.1mである。貯蔵穴は北西隅に位置している。楕円形で、0.9m×0.8m、床面からの深さは0.2mである。ピットは1基で、床面東壁下北寄りである。ほぼ円形で、径0.4m、床面からの深さは0.2mである。床面中央北西隅寄りに焼土が検出されたが、床面への掘り込みがないので、炉跡ではないと考えられる。古墳時代前期の土器が出土し、西壁付近の床面から台付甕がほぼ正位で出土している。



042号住居跡実測図



042号住居跡出土遺物

0 10cm (1/4)

第177図 042号住居跡実測図及び出土遺物

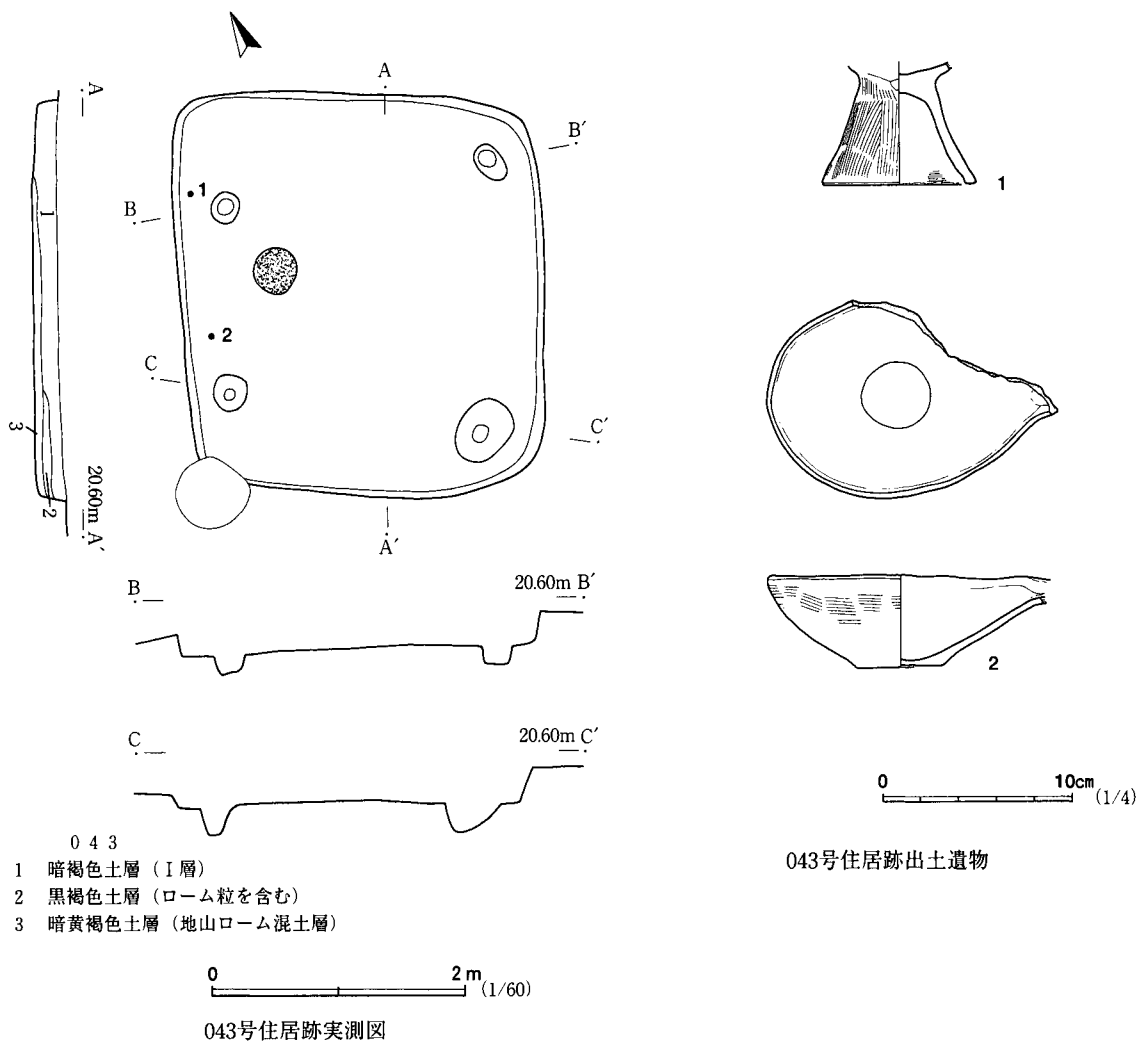
遺物 1は土師器台付甕の口胴部である。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部端に至る。口縁部に1段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。

第91表 042号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	6	台付甕	口径 16.4 底径 13.55 高さ 13.55 最大径16.95	80%	ヘラミガキーヘラナデーヘラミガキ ヘラナデーヘラミガキーハケ調整	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好

043号住居跡 (第178図 第92表 図版78・109)

遺構 調査区西部、026号住居跡の北隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.18m×2.88mで、検出面からの深さは0.19mである。床面は平坦である。柱穴、炉跡が検出された。柱穴は4か所で、住居跡のほぼ対角線上からはずれている。西壁側2か所は中央寄りに、東壁側2か所は隅寄りに位置している。ほぼ円形で、径0.25m~0.4m、床面からの深さは0.15m~0.2mである。炉跡は床面中央西壁寄りに検出された。ほぼ円形で、径0.35m、床面への掘り込みは0.05mである。古墳時代前期の土器が出土し、床面西壁付近から片口鉢が正位で出土している。



043号住居跡出土遺物

第178図 043号住居跡実測図及び出土遺物

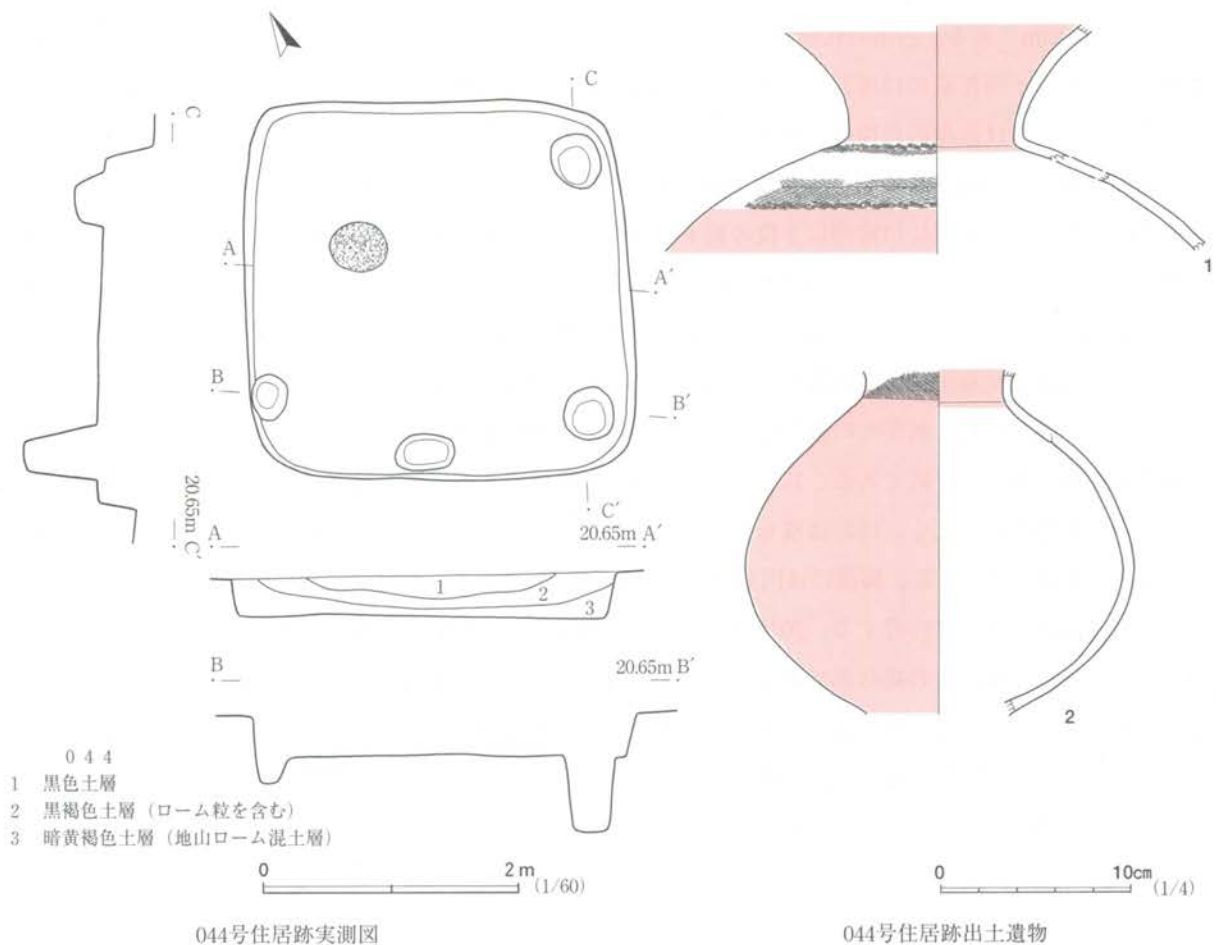
遺物 1は土師器台付甕の台部である。外傾して開き、裾部はやや外反する。2は土師器片口鉢である。底部は平底である。体部は外傾して大きく開き、口縁部は内弯する。上面からの形は鶏卵形で、尖っている方に注ぎ口がつくと思われる。

第92表 043号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	3	台付甕	口径 底径 7.2 高さ 6.4 最大径	20%	-粗いヘラミガキ-ヘラナデ・ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ -ヘラケズリ-ハケ調整-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色	良好
2	1	片口鉢	口径 底径 4.6 高さ 4.8 最大径	70%	-ハケ調整の後ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラミガキ ヘラナデ-ハケ調整の後ヘラミガキ-ヘラケズリ の後ヘラミガキ-ヘラミガキ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	褐色 暗褐色	良好

044号住居跡 (第179図 第93表 図版79・110)

遺構 調査区南部西端に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.04m×2.97mで、検出面からの深さは0.31mである。床面は平坦である。炉跡、貯蔵穴が2基、ピットが2基検出された。炉跡は床面中央やや北寄りに位置している。楕円形で、0.45m×0.4m、床面への掘り込みは深さは0.15mである。貯蔵穴は北東隅及び南東隅に位置している。ほぼ円形で、径0.4m、床面からの深さは0.3m~0.6mである。ピットは南



第179図 044号住居跡実測図及び出土遺物

壁下中央及び西壁下南寄りである。楕円形で、0.35m～0.45m×0.25m、床面からの深さは0.2mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 1は土師器壺の口胴部である。口縁部端を欠く。胴部はほぼ球形と考えられる。口縁部は外反して大きく開く。2は土師器壺の胴部である。やや扁平な球形である。

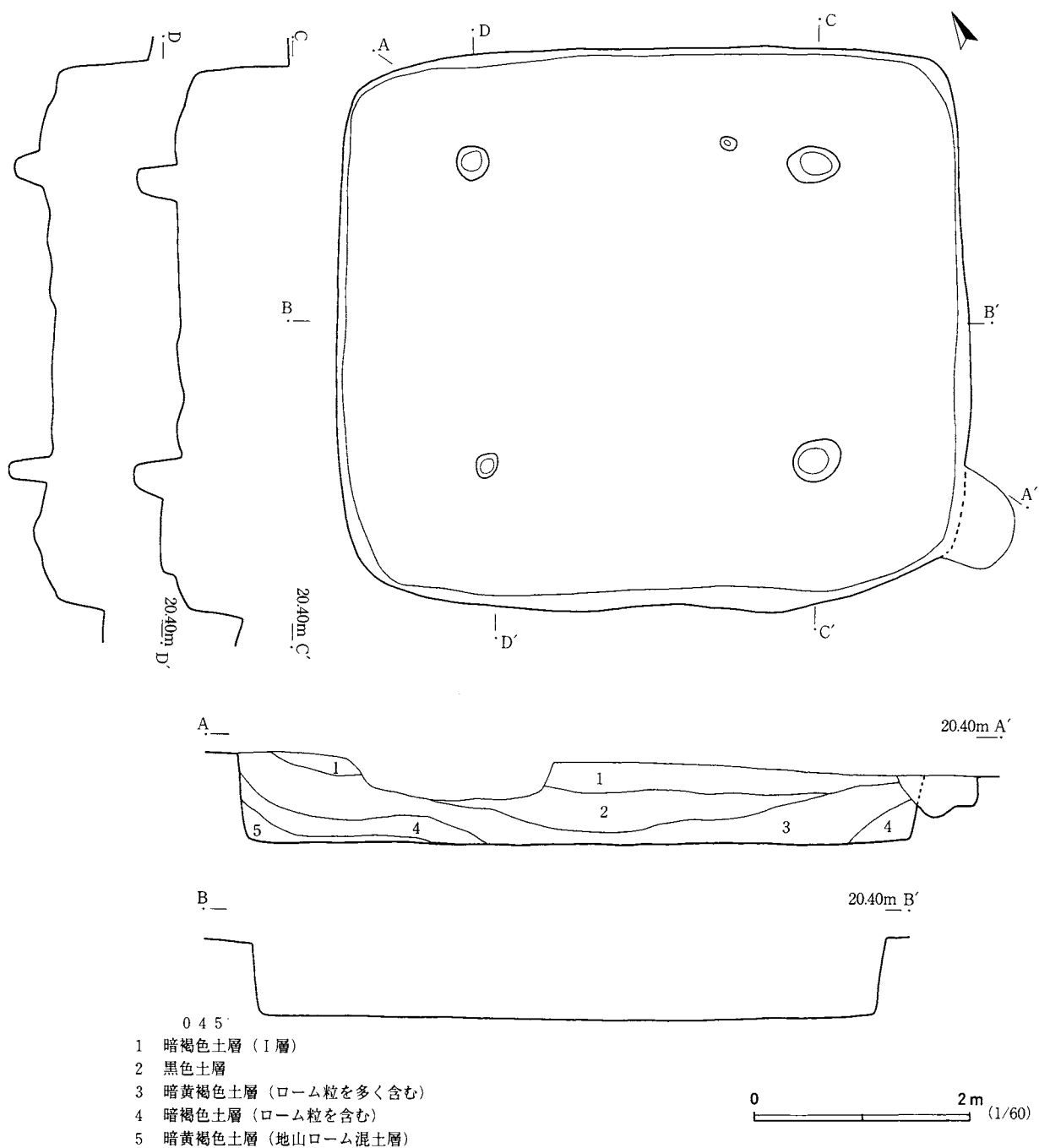
第93表 044号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法(上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	6	甕	口径 底径 11.65 高さ 最大径	5%	ヘラミガキ-ヘラナデー - ヘラミガキ-網目状撚糸文-ヘラミガキ-	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	黄褐色 赤褐色 赤彩	良好
2	1.2 3. 14F-2	甕	口径 底径 17.9 高さ 最大径20.4	30%	-ヘラミガキ-ヘラナデー -羽状縄文-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	黄褐色 赤褐色 赤彩	良好

045号住居跡 (第180・181図 第94表 図版79・110～112)

遺構 調査区南部、044号住居跡の南東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は5.94m×5.23mで、検出面からの深さは0.74mである。床面は平坦で、貼り床が施される。柱穴、ピットが検出された。柱穴はほぼ対角線上に位置し、柱穴中心から壁までの距離は1.1m～1.3mである。柱穴は楕円形で、0.25m～0.45m×0.2m～0.4m、床面からの深さは0.4mである。ピットは北東柱穴の西側に位置している。円形で、径0.15m、深さ0.3mである。古墳時代前期の土器が出土している。

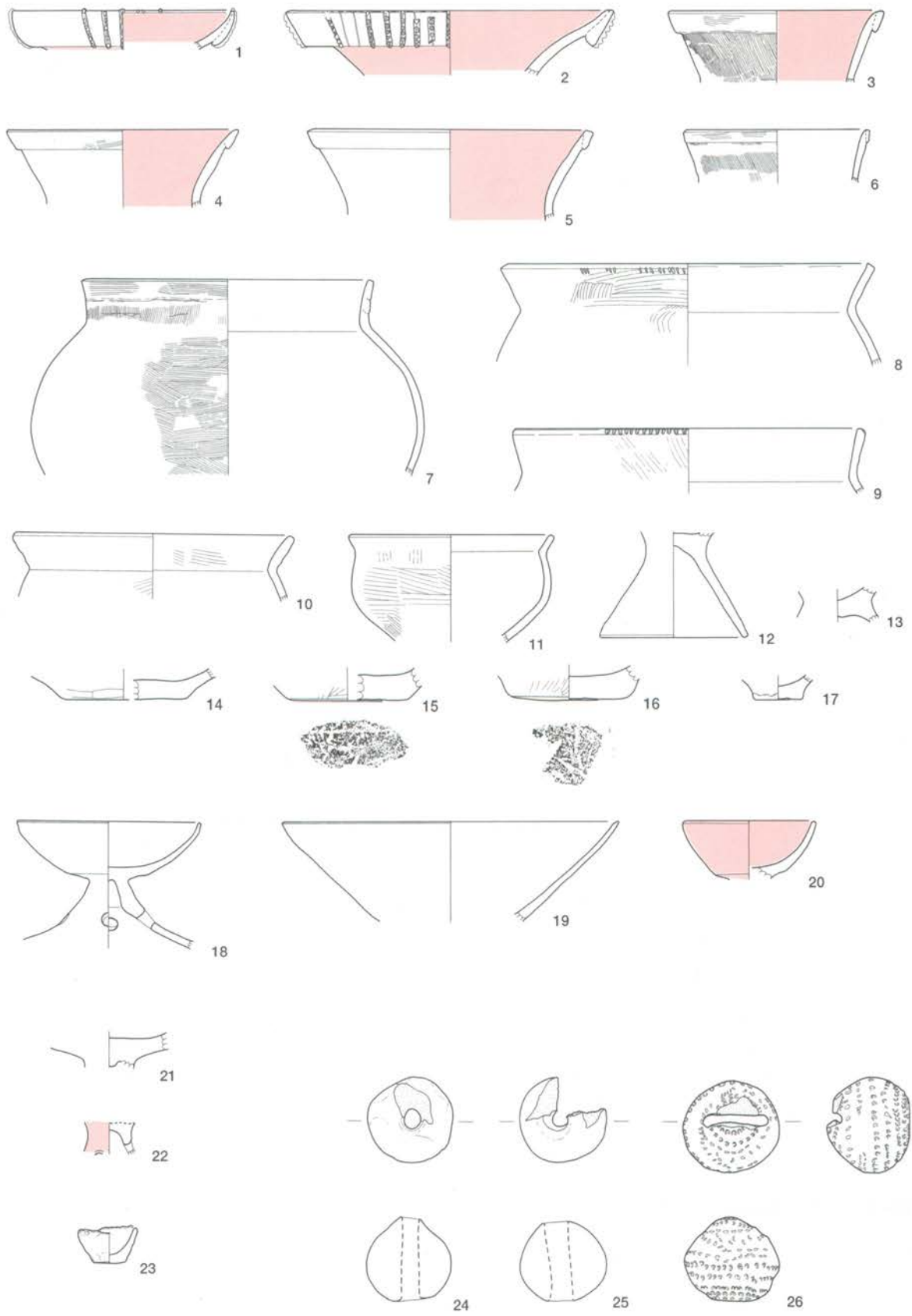
遺物 1～6は土師器壺の口縁部で、折り返し口縁である。1は内弯する。2は外反し、口縁部端はわずかに内弯する。3は直線的に開き、口縁部端はわずかに外反する。4・5は外反し、口縁部端に至る。6は直線的に開き、口縁部端に至る。7は土師器甕の口胴部である。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は直線的に開く。口縁部に口縁部に2段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。8～10は土師器甕の口縁部である。外傾して直線的に開き、口縁部端に至る。8・9は口縁部端に面取りと、刻み目が施される。11は小型台付甕の口胴部である。口縁部は外傾して直線的に開き、口縁部端に至る。12は土師器台付甕の台部である。外反して開き、直線的に裾部に至る。13は土師器台付甕の台部である。胴部との接合部分である。14は土師器壺の底部である。平底である。15・16は土師器甕の底部である。平底である。17は土師器小型甕の底部である。平底である。18～21は土師器高坏である。18は裾部端部を欠く。坏部は稜をもって外傾して開き、体部は内弯して口縁部に至る。脚部は外傾して開き、裾部は外反する。脚部には円形の透孔が4か所に施される。19は坏部の口体部である。直線的に開き、口縁部はわずかに内弯する。20は坏部である。稜をもって外傾して開き、体部は内弯して口縁部に至る。21は坏部と体部との接合部である。22は土師器器台である。脚部には円形の透孔が3か所に施される。23はミニチュア土器の鉢である。底部は平底である。体部が内弯して開き、口縁部に至る。24・25は土玉である。やや下脹れの球形で、片側から穿孔されている。26は土製品である。土玉状で、上端部に孔があげられ、細竹管による刺突が点線状に施される。



第180図 045号住居跡実測図

第94表 045号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎土	色調	焼成
1	8	壺	口径 15.0 底径 2.75 高さ 最大径	1%	ヘラミガキ - - - ヘラナデ・ヘラナデの後棒状浮文-ヘラミガキ -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 赤彩	良好
2	3	壺	口径 23.1 底径 4.4 高さ 最大径	3%	ヘラミガキ - - - 網目状燃糸文・ヘラナデの後棒状浮文-ハケ調整 の後ヘラミガキ -	砂粒 白色鉱物	赤褐色 赤彩	良好



0 10cm (1/4)

0 5cm (1/2)

第181图 045号住居跡出土遺物

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) - 底部	胎 土	色 調	焼 成
3	1.8	壺	口径 14.3 底径 高さ 4.9 最大径	6%	ヘラミガキ - - ハケ調整の後ヨコナデ・ハケ調整 - - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩) 黄褐色	良好
4	1.3	壺	口径 13.5 底径 高さ 5.4 最大径	4%	ヘラミガキ - - ヘラナデの後ヨコナデ・ハケ調整の後ヨコナデ ヘラナデ - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩) 黄褐色	良好
5	2.8	壺	口径 18.4 底径 高さ 6.15 最大径	3%	ヘラミガキ - - ヘラナデ・ヨコナデ-ヘラナデ- -	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	赤褐色 (赤彩) 褐色	良好
6	3	小型壺	口径 12.0 底径 高さ 3.55 最大径	5%	ヘラミガキ - - ヨコナデ・ハケ調整の後ヨコナデ-ハケ調整の後 ヘラナデ - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 多量	褐色	良好
7	1.2 6.8	甕	口径 18.9 底径 高さ 13.1 最大径26.6	10%	ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ- - ハケ調整の後ヨコナデ-ハケ調整 - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗赤褐色	良好
8	6 (1.36 未接合)	甕	口径 24.3 底径 高さ 6.8 最大径	5%	ヘラナデ-ヘラナデ- - ヘラ切り・ハケ調整の後ヘラナデ-ハケ調整の後 ヘラミガキ - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗赤褐色	良好
9	6	甕	口径 22.8 底径 高さ 4.3 最大径	3%	ヘラナデ-ヘラナデ- - ヘラ切りの後刻み・ハケ調整の後ヘラナデ-ハケ 調整の後ヘラナデ- -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	暗褐色 黒褐色	良好
10	8	甕	口径 19.0 底径 高さ 4.45 最大径	3%	ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ- - ヨコナデ・ヘラナデの後ヨコナデ-ハケ調整 - -	砂粒 白色鉱物	暗褐色	良好
11	1.3 8	台付甕	口径 14.0 底径 高さ 7.2 最大径13.5	30%	ヨコナデ-ヘラケズリの後ヘラナデ- - ヨコナデ・ハケ調整-ハケ調整の後粗いヘラナ デ- -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	褐色 暗褐色	良好
12	1.8	台付甕	口径 底径 10.0 高さ 7.1 最大径	5%	-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ- -ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色	良好
13	8	台付甕	口径 底径 10.0 高さ 7.1 最大径	5%	-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ- -ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色	良好
14	6	壺	口径 底径 8.6 高さ 2.0 最大径	4%	- - -ヘラナデ - -ヘラケズリの後ヘラミガキ・ヘラケズリ -ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 やや多い	暗褐色	良好
15	8	甕	口径 底径 8.3 高さ 2.1 最大径	3%	- - -ヘラナデ - -ヘラミガキ-木葉痕の後粗いヘラナデ	砂粒暗褐色 白色鉱物 赤色スコリア粒 多量	良好	良好
16	8	甕	口径 底径 8.0 高さ 2.3 最大径	3%	- - -ヘラナデ - -ヘラミガキ-木葉痕	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 多量	黒褐色 暗褐色	良好
17	8	小型甕	口径 底径 3.3 高さ 1.6 最大径	3%	- - -ヘラナデ - -ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 多量	暗褐色 黒褐色	良好
18	6.8	高坏	口径 12.2 底径 高さ 3.9 最大径	55%	-ヘラミガキ-ヘラナデ- ヨコナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	灰褐色	良好
19	1.3	高坏	口径 22.8 底径 高さ 6.6 最大径	40%	ヨコナデ-ヘラミガキ- - ヨコナデ-ヘラミガキ- -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 褐色	良好

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎 土	色 調	焼 成
20	6,8	高坏	口径 13.55 底径 3.9 高さ 3.9 最大径	40%	-ヘラミガキ- ヨコナデ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 少量	灰褐色	良好
21	3	高坏	口径 底径 高さ 2.4 最大径	5%	-ヘラミガキ- -ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	褐色	良好
22	8	器台	口径 底径 高さ 2.0 最大径	5%	-ヘラナデ- -ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色 赤彩	良好
23	4	ミニチュア土器	口径 3.8 底径 2.2 高さ 2.4 最大径	100%	ヨコナデ- ナデの後ヘラナデ- ヨコナデ- ナデの後ヘラミガキ-ヘラナデ	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
24	3	土玉	重さ 19.76g 孔径 0.6 高さ 2.8 最大径 2.9	80%	- - - -ナデ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
25	1	土玉	重さ 13.74g 孔径 0.8 高さ 2.7 最大径 2.9	75%	- - - -ナデ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
26	10	土製品	重さ 22.71g 底径 1.3 高さ 2.8 最大径 3.15	85%	- - - -ナデの後刺突-	砂粒 白色鈹物	褐色	良好

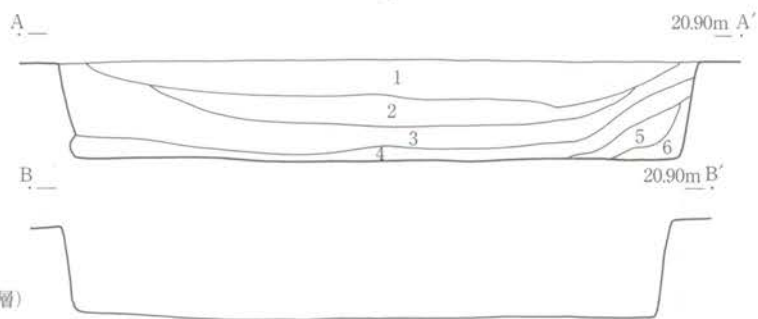
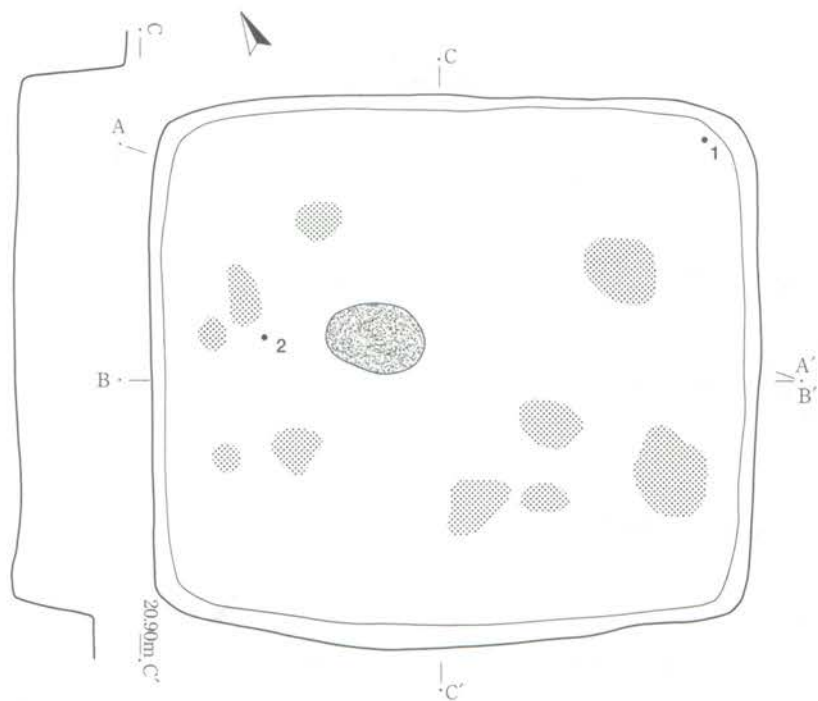
046号住居跡 (第182図 第95表 図版80・112・113)

遺構 調査区南部、045号住居跡の北隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.80m×4.32mで、検出面からの深さは0.81mである。床面は平坦である。床面中央やや西寄りに炉跡が検出された。楕円形で、0.8m×0.5m、床面への掘り込みは0.1mである。床面に焼土が検出され、直上の覆土中にも焼土が多く含まれているが、炭化材は検出されなかった。古墳時代前期の土器が出土し、床面から甕が正位で検出されている。また、床面東隅の壺口縁部は器台として使用されたと考えられる。

遺物 1は土師器壺の口胴部である。胴部はほぼ球形である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端は内弯する。折り返し口縁で、折り返し部下端に刻み目が施される。2は土師器甕である。底部は平底である。胴部はやや扁平な球形で、下部の接合部が段違いになる。口縁部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部端に至る。折り返し口縁で、折り返し部下端に刻み目が施される。3は土師器高坏の脚部である。円筒状で、裾部が大きく外反する。4は土師器埴である。底部はやや丸底である。胴部は上部がやや張り出した球形で、口縁部は外傾して立ち上がり、わずかに内弯して口縁部端に至る。

第95表 046号住居跡出土遺物表

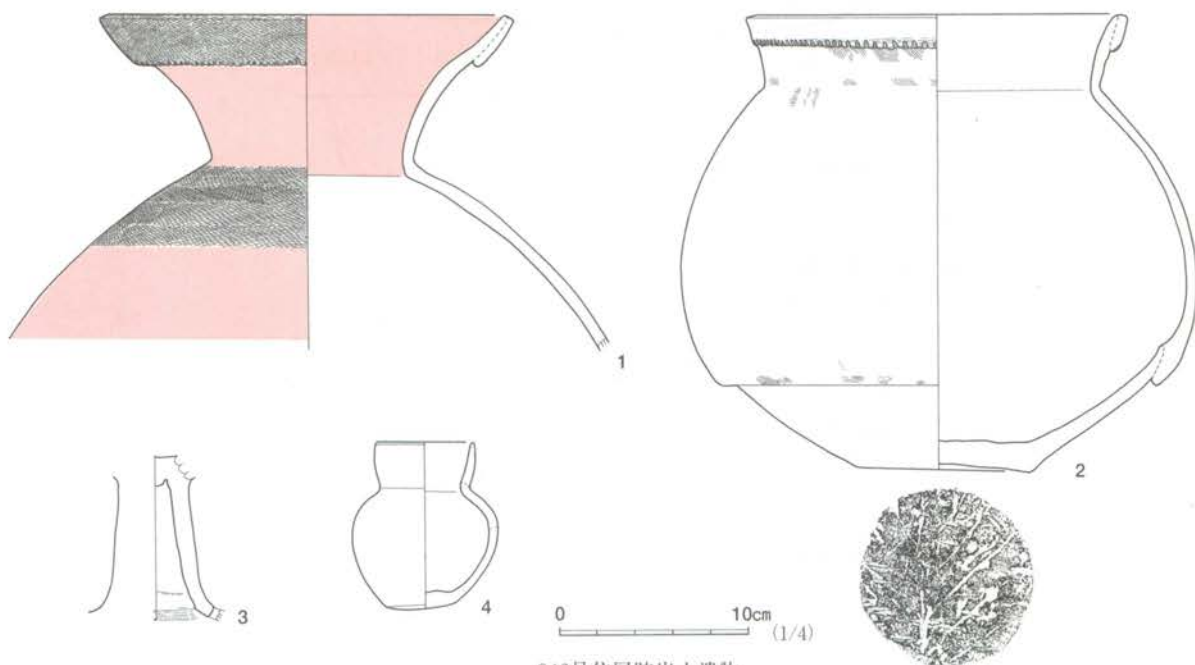
挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎 土	色 調	焼 成
1	7,8	壺	口径 20.7 底径 17.3 高さ 最大径	30%	ヘラミガキ-ヘラナデ- 網目状燃糸文・ヘラミガキ-網目状燃糸文・ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 多量	褐色 赤褐色 赤彩	良好



- 046
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (焼土・ローム粒を含む)
 - 5 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 6 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

046号住居跡実測図

0 2m (1/60)

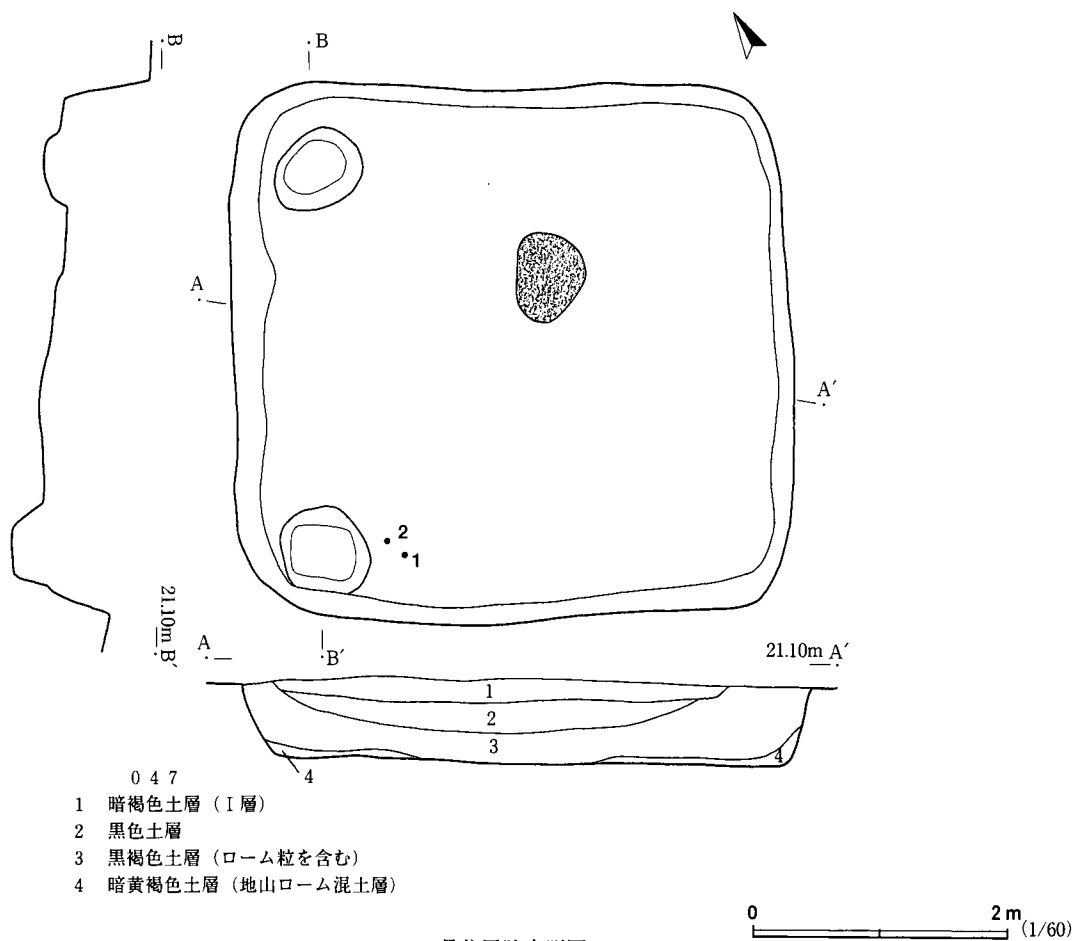


046号住居跡出土遺物

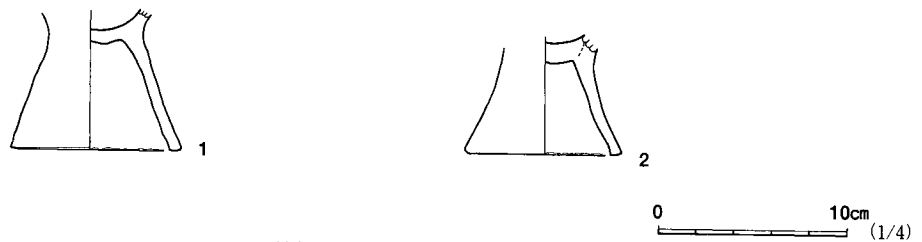
第182図 046号住居跡実測図及び出土遺物

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎土	色調	焼成
2	4	甕	口径 18.9 底径 9.0 高さ 23.6 最大径27.1	95%	ヘラナデの後粗いヘラミガキー -ヘラナデ-ヘラナデ ヘラナデの後ヨコナデ・ハケ調整の後ヘラナデ- ハケ調整の後ヘラミガキー-ヘラケズリの後ヘラナ デ-木葉痕の後ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
3	8	高坏	口径 底径 8.3 高さ 最大径	30%	-ヘラミガキー-ヘラナデ・ハケ調整- -ヘラミガキー-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	褐色	良好
4	10	埴	口径 5.0 底径 3.65 高さ 8.55 最大径 7.6	70%	ヘラナデー -ヘラナデ-ヘラナデ ヨコナデ・ヘラミガキー -ヘラミガキー-ヘラナ デ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	赤褐色 褐色	良好

047号住居跡 (第184図 第96表 図版80・113)



047号住居跡実測図



047号住居跡出土遺物

第183図 047号住居跡実測図及び出土遺物

遺構 調査区南部、044号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.49m×4.16mで、検出面からの深さは0.64mである。床面は平坦で、貼り床が施される。炉跡、貯蔵穴が検出された。炉跡は床面中央やや北寄りに位置している。楕円形で、0.75m×0.5m、床面への掘り込みは0.05mである。貯蔵穴は2基で、南西隅及び北西隅に位置している。南西隅の貯蔵穴は長方形と思われる。0.7m×0.6m、床面からの深さは0.3mである。北西隅の貯蔵穴は楕円形で、0.75m×0.6m、床面からの深さは0.3mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 1・2は土師器台付甕の台部である。1は直線的に開き、端部に至る。2はやや外反して開き、端部に至る。

第96表 047号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	11	台付甕	口径 8.4 底径 7.25 高さ 7.25 最大径	15%	-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラナデ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色 褐色	良好
2	10	台付甕	口径 7.4 底径 6.2 高さ 20.3 最大径	70%	-ヘラケズリの後ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナ デ - -ヘラケズリの後ヘラナデ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	灰褐色 褐色	良好

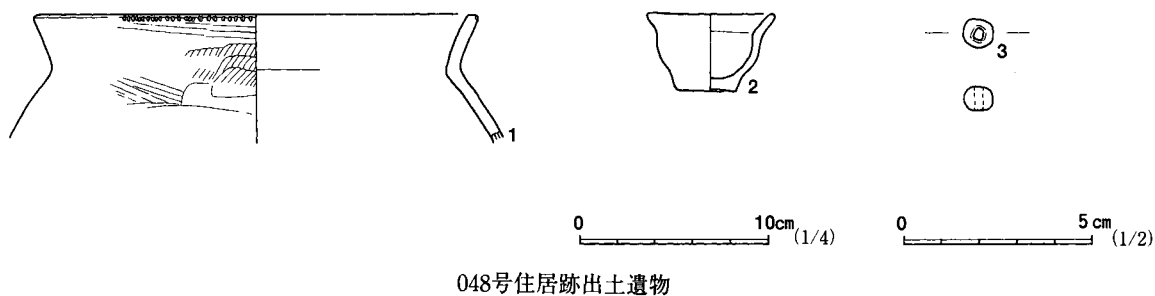
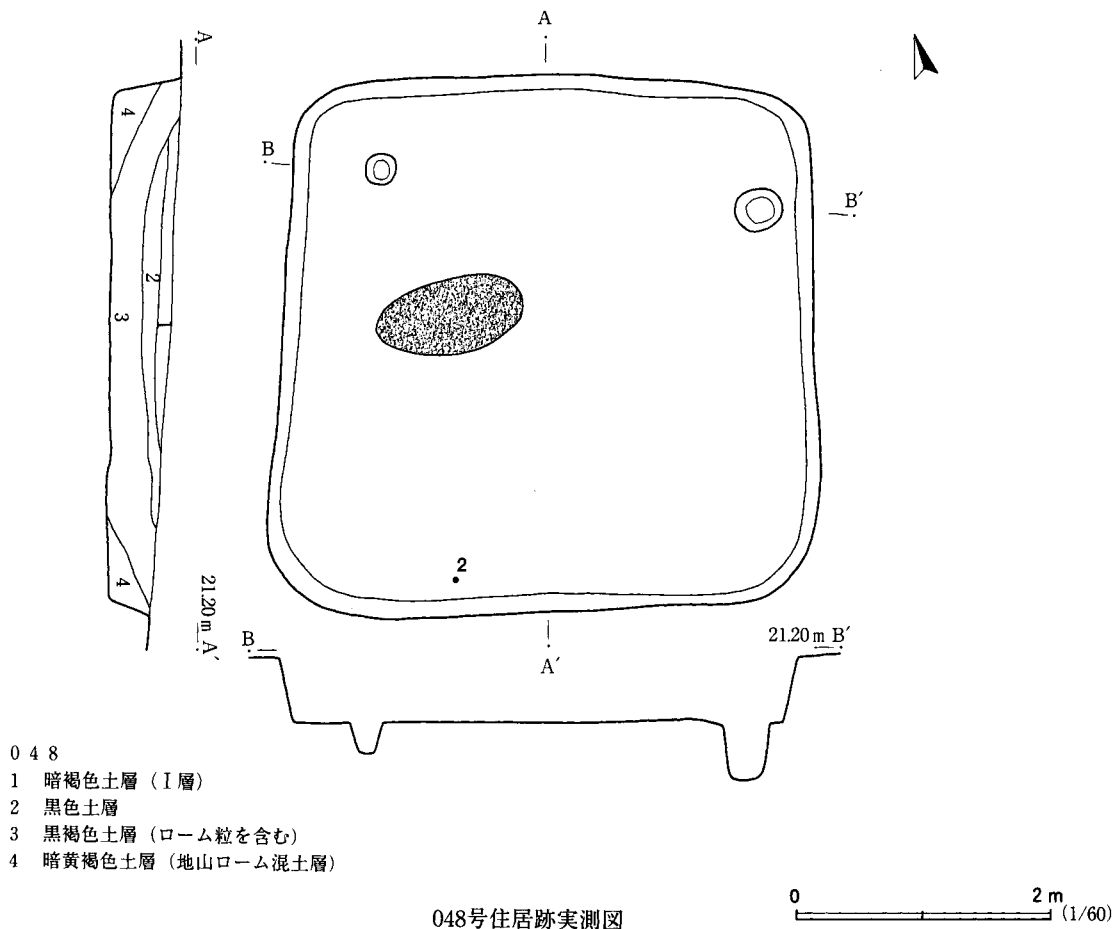
048号住居跡 (第184図 第97表 図版81・113)

遺構 調査区南部、047号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.22m×4.22mで、検出面からの深さは0.46mである。床面は平坦である。炉跡、ピットが検出された。炉跡は床面中央西寄りに位置している。楕円形で、1.2m×0.6m、床面への掘り込みは0.1mである。ピットは2基で、東壁下北寄り及び北西隅に位置している。円形で、径0.25m~0.4m、床面からの深さは0.2m~0.5mである。古墳時代前期の土器が出土し、南壁付近の床面からやや離れた状態でミニチュア土器の鉢が出土している。

遺物 1は土師器甕の口胴部である。胴部はほぼ球形と思われる。口縁部は直線的に開き、口縁部端に至る。口縁部端に刻み目が施される。2はミニチュア土器の鉢である。底部は平底である。胴部は半球形で、口縁部が外反する。3はガラス小玉である。やや扁平な球形である。

第97表 048号住居跡出土遺物表

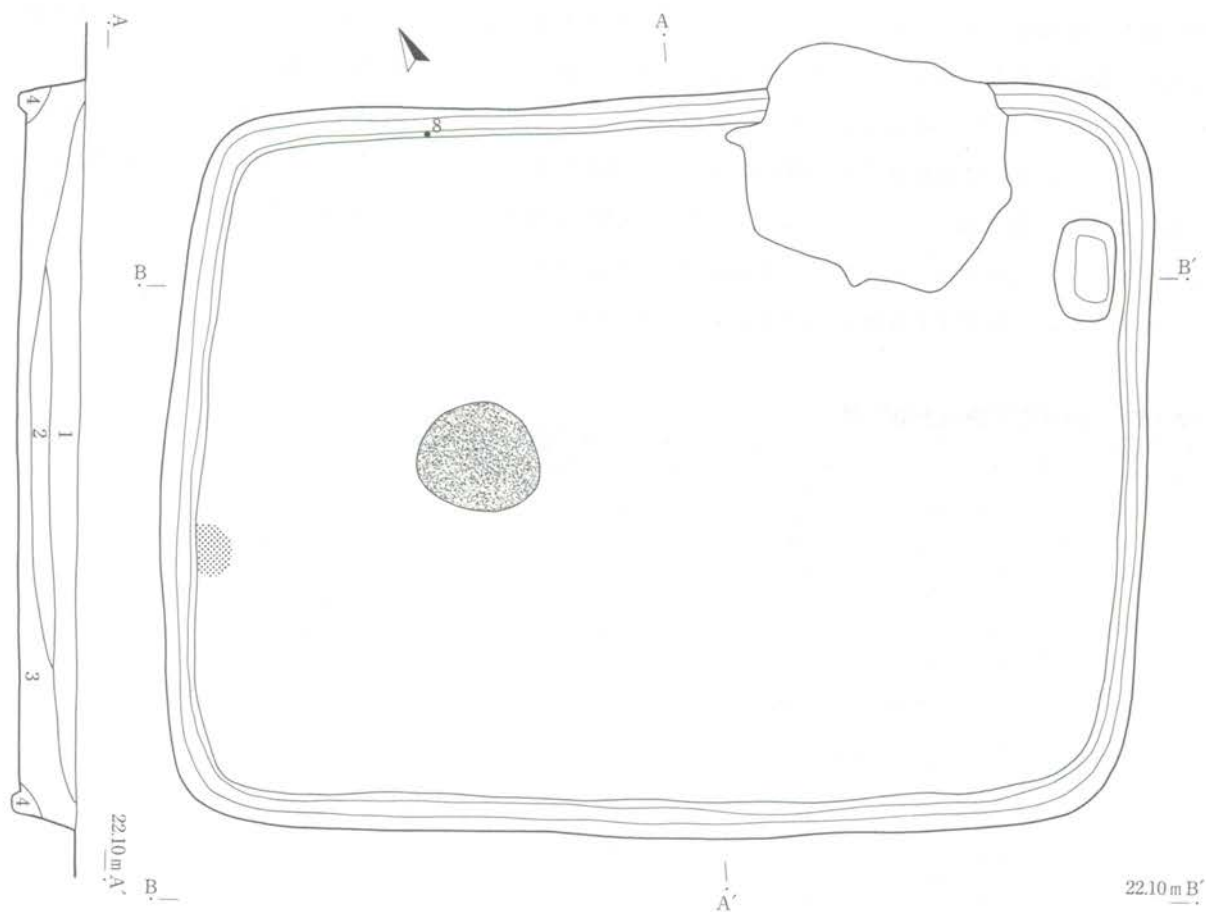
挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	2	甕	口径 22.4 底径 6.7 高さ 6.7 最大径	3%	ヘラミガキ-ヘラナデ- ヘラ切り・ハケ調整の後粗いヘラケズリ-ハケ調 整の後粗いヘラケズリ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
2	4	ミニチュア土器	口径 6.4 底径 3.15 高さ 4.05 最大径20.3	70%	ヨコナデ- -ヘラナデ-ヘラナデ ヨコナデ- -ヘラナデ-ヘラケズリ	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	褐色	良好
3	5	ガラス小玉	重さ 0.4g 孔径 0.2 高さ 0.65 最大径 0.8	100%	- - - - - -		藍色	



第184図 048号住居跡実測図及び出土遺物

049号住居跡 (第185図 第98表 図版81・113・114)

遺構 調査区中央部南寄り、039号住居跡の南東隣に位置している。008号炭窯と重複している。平面形は隅丸方形である。規模は7.81m×5.78mで、検出面からの深さは0.49mである。床面は平坦である。壁周溝、炉跡、貯蔵穴が検出された。壁周溝は全周する。幅0.15m～0.2m、床面からの深さは0.1m～0.15mである。炉跡は床面中央西寄りに位置している。楕円形で、1.0m×0.8m、床面への掘り込みは0.1mである。貯蔵穴は東壁下北寄りに位置している。長方形で、0.8m×0.5m、床面からの深さは0.75mである。西壁下ほぼ中央の床面に焼土が検出された。古墳時代前期の土器が出土している。

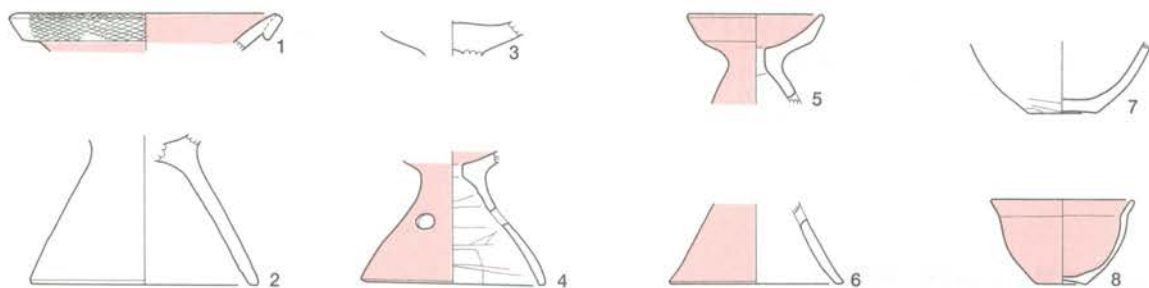


049

- 1 暗褐色土層 (I層)
- 2 黒色土層
- 3 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
- 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

049号住居跡実測図

0 2 m (1/60)



049号住居跡出土遺物

0 10cm (1/4)

第185図 049号住居跡実測図及び出土遺物

遺物 1は土師器壺の口縁部である。外反し、折り返し口縁である。2は土師器台付甕の台部である。直線的に開き、裾部がわずかに内弯する。3は土師器高坏の坏部下部である。やや小型と思われる。4は土師器器台の脚部である。外反して開き、裾部は内弯する。接合部に穿孔が施され、脚部には円形の透孔が3か所に施される。5は土師器器台である。裾部を欠く。器受部は小さな坏状である。脚部はわずかに内弯して開く。接合部に穿孔が施され、脚部には円形の透孔が3か所に施されると思われる。6は土師器器台の脚部である。裾部端がわずかに外反する。円形の透孔が施される。7は土師器小型壺の胴底部である。胴部上半を欠く。底部は平底である。胴部はほぼ球形と思われる。8は土師器小型鉢である。底部は、やや上げ底である。胴部は半球形で、口縁部は短く外反する。

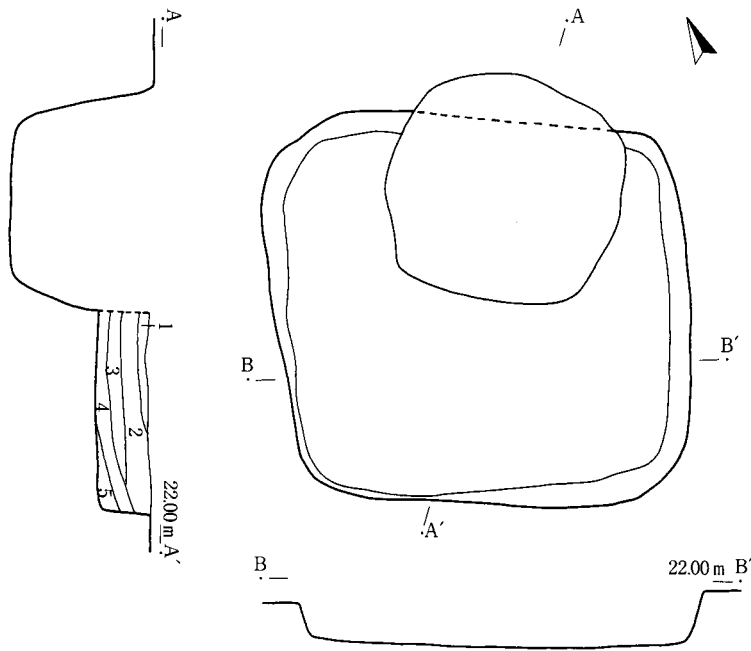
第98表 049号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎土	色調	焼成
1	8	甕	口径 13.5 底径 高さ 1.95 最大径	5%	ヘラミガキ - - - 網目状燃糸文・ヘラミガキ - - -	砂粒 白色鉱物 スコリア粒 微量	赤褐色 赤彩	良好
2	10	台付甕	口径 底径 11.2 高さ 7.8 最大径	4%	-ヘラナデ-ヘラナデ-ヨコナデ - -ヘラナデ-ヨコナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	赤褐色	良好
3	3	高坏	口径 底径 高さ 1.8 最大径	15%	-ヘラミガキ-ヘラナデ- -ヘラミガキ- -	砂粒, 白色鉱物 多量 赤色スコリア粒	暗赤褐色	良好
4	5, 8 11	器台	口径 底径 7.95 高さ 6.9 最大径	50%	-ヘラミガキ-ヘラナデ・ヘラケズリ-ヘラナデ -ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物, 赤色 スコリア粒少量	褐色 赤褐色 赤彩	良好
5	4, 8 9, 13	器台	口径 6.9 底径 高さ 4.6 最大径	35%	-ヘラミガキ-ヘラナデ- ヨコナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	赤褐色 赤彩	良好
6	8	器台	口径 底径 9.2 高さ 4.3 最大径	15%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物	褐色 赤褐色 赤彩	良好
7	2, 3 5, 6 8, 9	小型壺	口径 底径 3.6 高さ 3.7 最大径	15%	- -ヘラケズリの後粗いヘラミガキ-ヘラミ ガキ - -ヘラケズリの後ヘラミガキ-ヘラミガキ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 多量	黄褐色	良好
8	7	小型鉢	口径 7.25 底径 2.7 高さ 4.5 最大径	100%	ヨコナデの後ヘラミガキ- -ヘラミガキ-ヘラ ミガキ ヨコナデ・ヘラミガキ- -ヘラミガキ-ヘラケ ズリ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 赤彩	良好

050号住居跡 (第186図 図版82)

遺構 調査区中央部南寄り、049号住居跡の北隣に位置している。007号炭窯と重複している。平面形は隅丸方形である。規模は3.33m×3.02mで、検出面からの深さは0.42mである。床面は平坦である。柱穴などの内部施設は検出されなかった。重複のため炉跡は消滅したと思われる。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため図示できなかった。

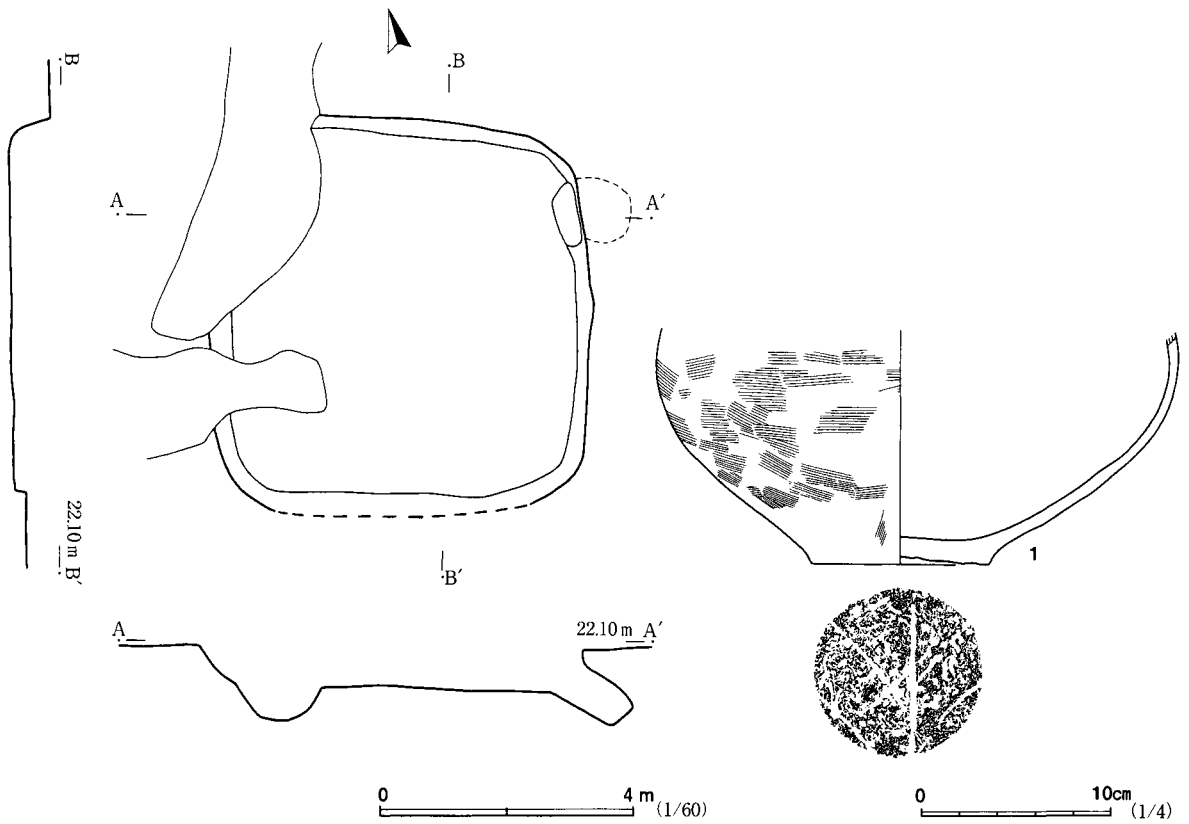


050

- 1 暗褐色土層 (I層)
- 2 黒色土層
- 3 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
- 4 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
- 5 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

0 2 m (1/60)

050号住居跡実測図



053号住居跡実測図

053号住居跡出土遺物

第186図 050・053号住居跡実測図及び053号住居跡出土遺物

053号住居跡 (第186図 第99表 図版82・114)

遺構 調査区中央部、032号住居跡の北隣に位置している。平面形は隅丸方形である。西壁の一部が攪乱を受けているが、規模は3.13m×3.07mで、検出面からの深さは0.32mである。床面は平坦である。貯蔵穴が北東隅に検出された。壁を掘り込んでつくられている。楕円形で、0.5m×0.3m、床面からの深さは0.25m、壁からの奥行きは0.4mである。ほかの内部施設は検出されなかった。古墳時代前期の土器が出土している。

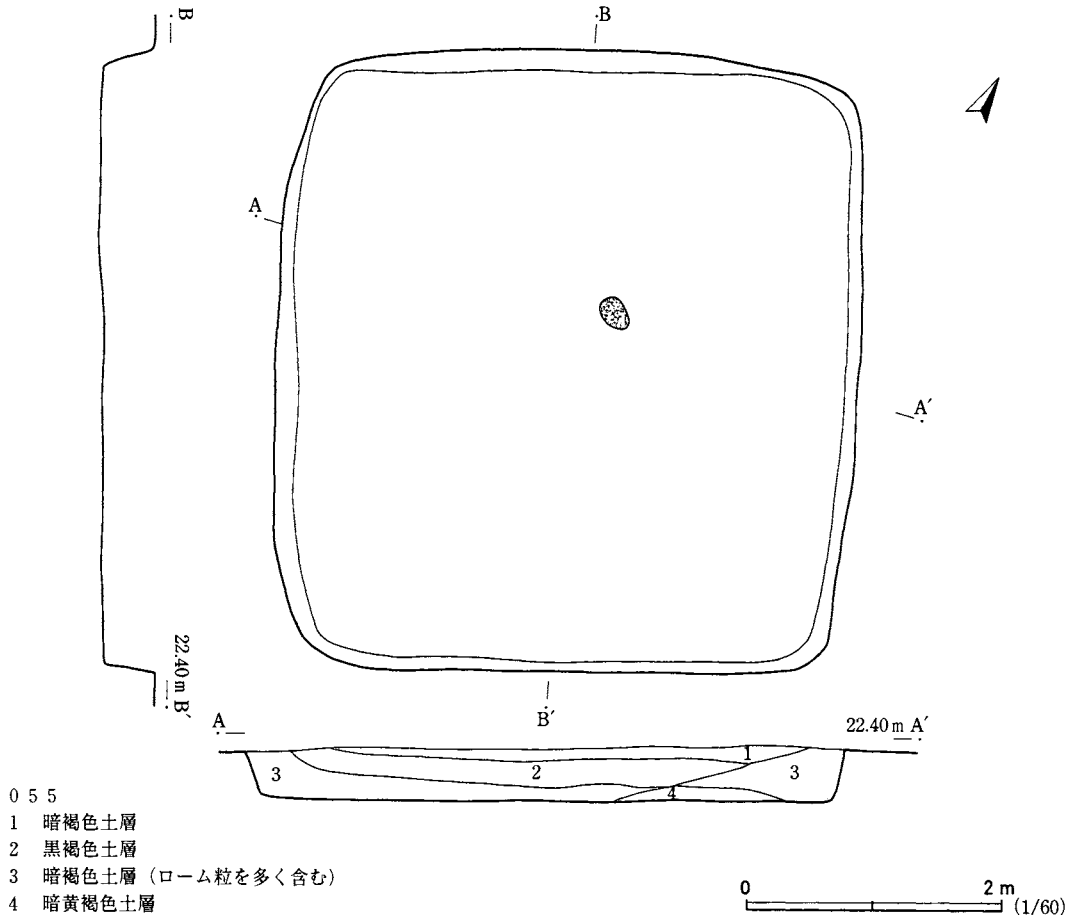
遺物 1は土師器壺の胴底部である。胴部上半を欠く。底部は平底である。胴部は下脹れのやや扁平な球形と思われる。

第99表 053号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎土	色調	焼成
1	2	壺	口径 9.3 底径 12.2 高さ 最大径	40%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ハケ調整の後ヘラミガキ-木葉痕	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色	良好

055号住居跡 (第187・188図 第100表 図版83・114・115)

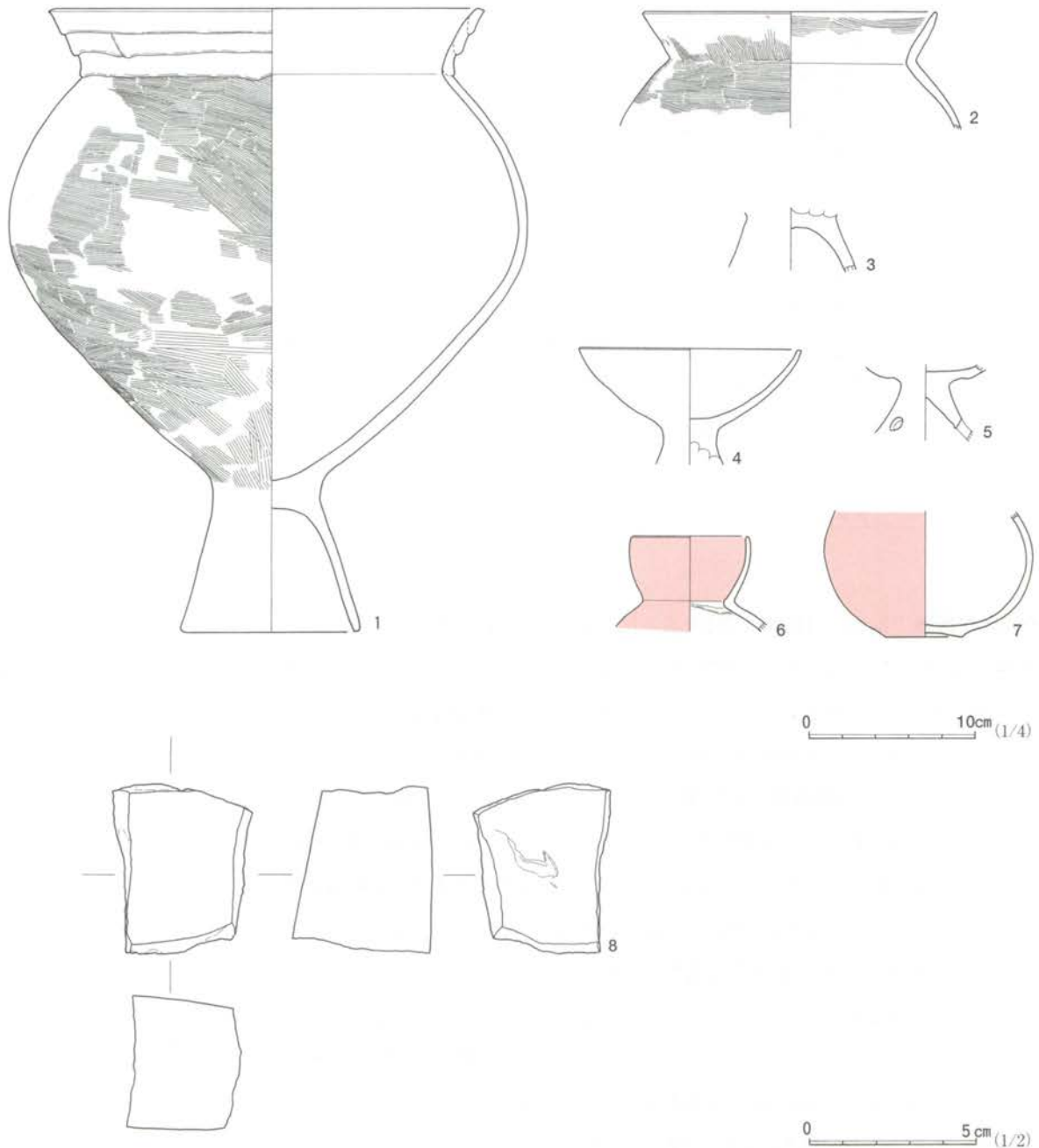
遺構 調査区中央部南寄り、053号住居跡の南東に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.85m×4.63mで、検出面からの深さは0.41mである。床面は平坦である。床面中央やや東寄りに炉跡が検出



第187図 055号住居跡実測図

された。楕円形で、0.3m×0.2m、床面への掘り込みは0.05m以下で、わずかに焼土化している。ほかの内部施設は検出されなかった。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 1は土師器台付甕である。台部は外傾して開き、端部はわずかに外反する。胴部はやや扁平な鶏卵形である。口縁部は外反し、口縁部端に至る。口縁部に3段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。2は土師器甕の口胴部である。胴部下半を欠く。胴部は球形と思われる。口縁部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部端はわずかに内弯する。3は土師器台付甕の台部である。外傾して直線的に開く。4・5は土師器高坏である。4は裾部を欠く。坏部は緩やかに内弯して開き、口縁部に至る。脚部は外反して開く。5は脚部である。外反して開き、円形の透孔が3か所に施される。6・7は土師器小型壺である。6は口胴部で、胴部の大半を欠く。胴部は球形と思われる。口縁部は



第188図 055号住居跡出土遺物

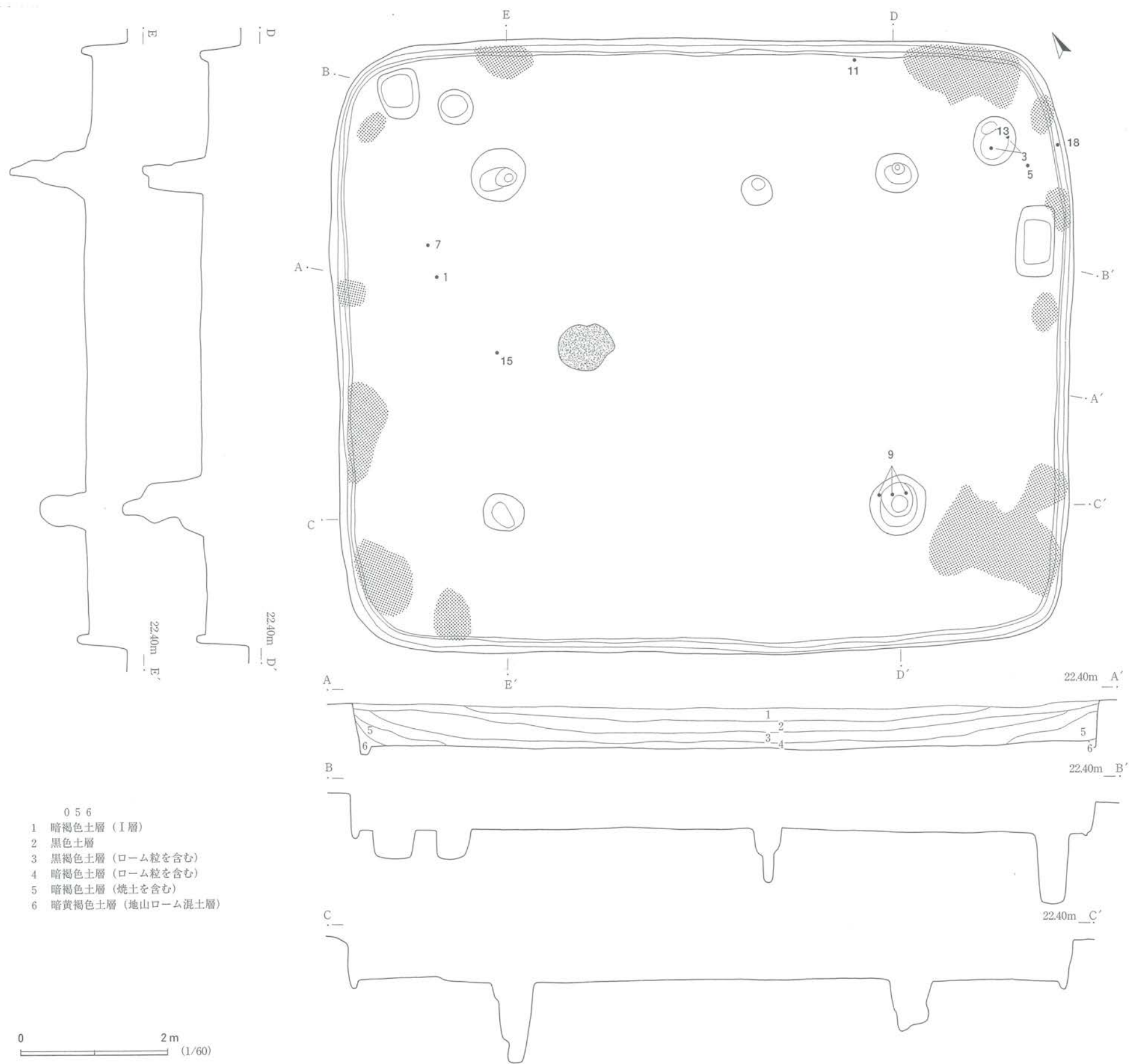
外傾して立ち上がり、緩やかに内弯して口縁部端に至る。口縁部端は内弯する。7は胴底部である。底部は平底で、胴部はやや扁平な球形である。

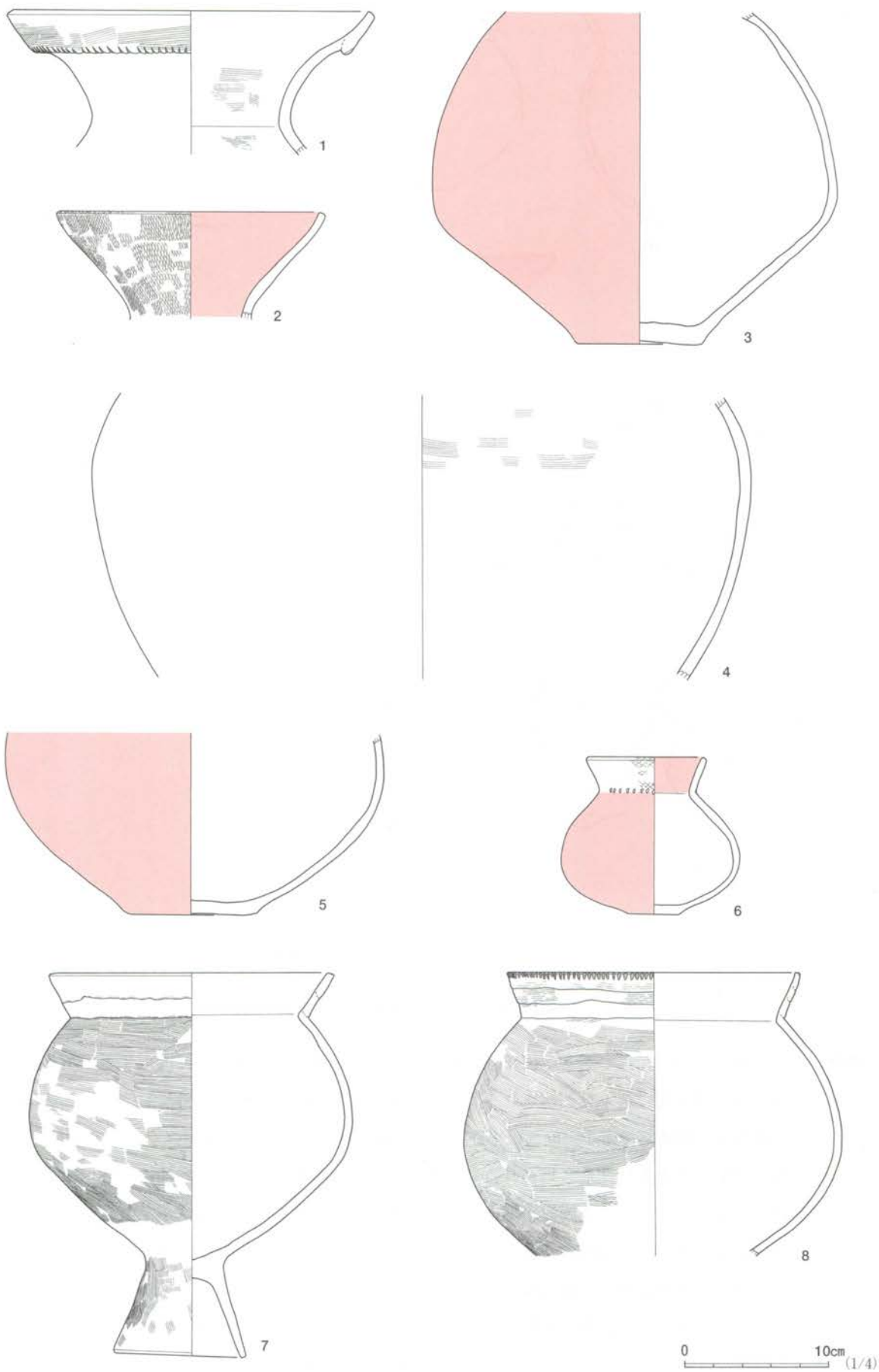
第100表 055号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	1, 2 3, 5	台付甕	口径 25.3 底径 9.9 高さ 36.85 最大径30.95	70%	ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ・ヘラ 切り ヘラ切り・ナデの後軽いヘラナデ-ハケ調整-ハ ケ調整-ヘラナデ	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
2	2, 4 未接 合1	甕	口径 17.4 底径 7.0 高さ 7.0 最大径	5%	ハケ調整の後粗いナデ-ヘラナデ- ヨコナデ・ハケ調整の後粗いナデ-ハケ調整- -	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	黒褐色	良好
3	1	台付甕	口径 底径 3.4 高さ 最大径	5%	- - -ヘラナデ - - -ヘラナデ	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗赤褐色	良好
4	4	高 杯	口径 13.35 底径 6.8 高さ 最大径	25%	ヘラミガキ-ヘラミガキ- ナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
5	1	高 杯	口径 4.5 底径 高さ 最大径	30%	-ヘラミガキ-ヘラミガキ- -ヘラミガキ-ヘラナデ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 少量	黄褐色 暗褐色	良好
6	4	小型壺	口径 6.9 底径 5.6 高さ 最大径	25%	ヘラケズリの後粗いヘラミガキ-ヘラナデ- ヨコナデ・ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	褐色 赤褐色 赤彩	良好
7	1.4	小型壺	口径 4.4 底径 7.5 高さ 最大径12.45	40%	-ヘラナデ-ナデ-ヘラミガキ -ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラケズリ	砂粒 白色鈹物、赤色 スコリア粒少量	褐色 赤褐色 赤彩	良好
8	6	砥石	長さ 5.0 幅 4.2 厚さ 3.2 重量 136.0 g	破片	表面研磨	砂岩質	灰色	

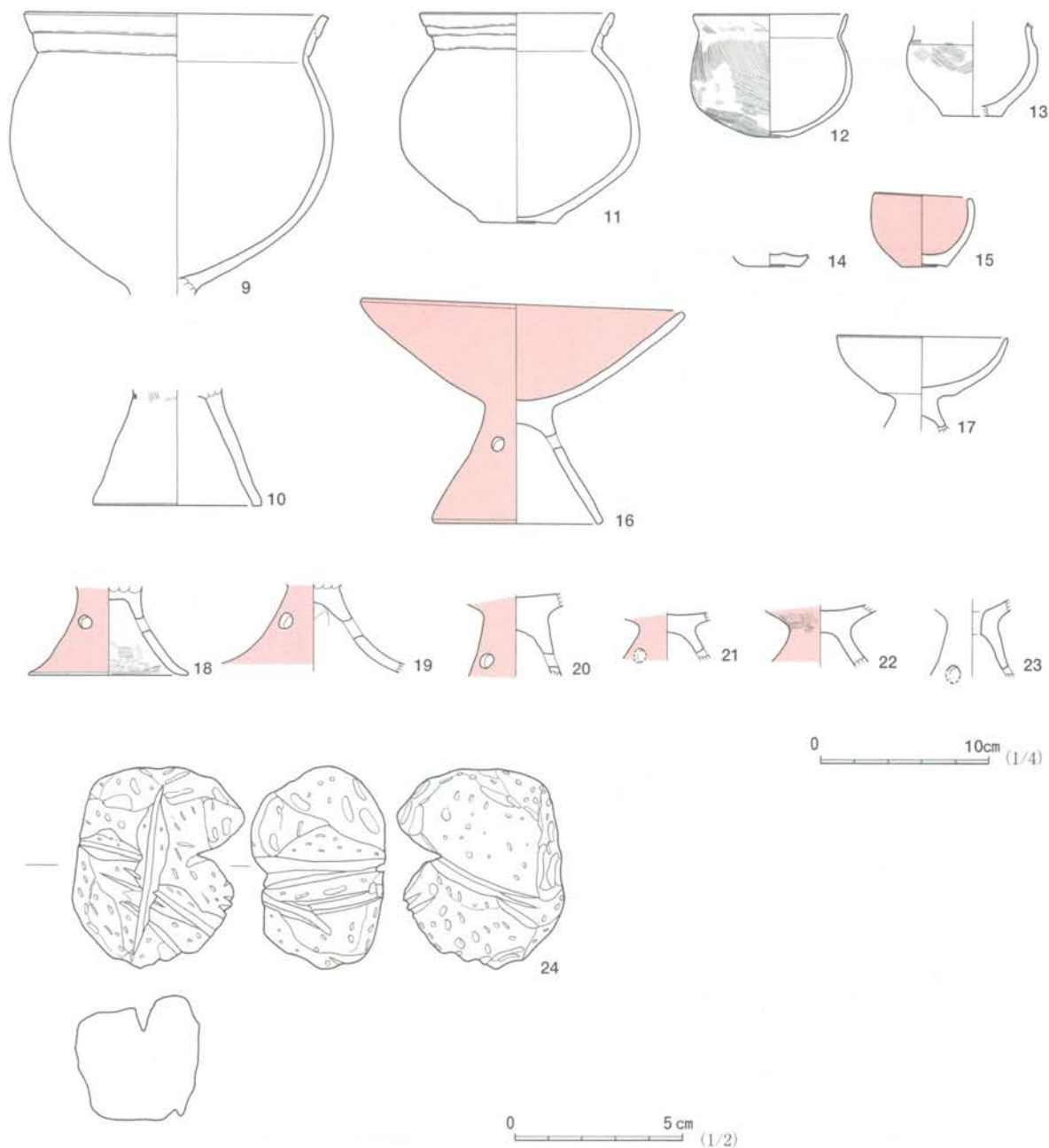
056号住居跡 (第189~191図 第101表 図版83・115~117)

遺構 調査区中央部南寄り、055号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は10.09m×8.34mで、検出面からの深さは0.54mである。床面は平坦である。壁周溝、柱穴、炉跡、貯蔵穴、ピットが検出された。壁周溝は全周し、幅0.1m~0.2m、床面からの深さは0.1m~0.15mである。柱穴は4か所で、住居跡のほぼ対角線上に位置し、柱穴中心から壁までの距離は1.7m~2.3mである。柱穴は円形で、径0.55m~0.8m、床面からの深さは0.6m~1.1mである。炉跡は床面中央やや西寄りに検出された。ほぼ円形で、径0.65m、床面への掘り込みは0.1mである。貯蔵穴は2基で、東壁下北寄り及び北西隅壁下に位置している。長方形で、各々1.0m×0.9m、0.65m×0.55m、床面からの深さは0.9m、0.35mである。ピットは2基で、床面中央北寄り及び北西隅である。径0.4m~0.5m、床面からの深さは0.4mである。また、北東隅に径0.7mの浅い窪みが検出された。床面に焼土が検出され、特に壁下及び四隅部分に集中している。炭化材が検出されないため、焼失住居ではないと考えられる。古墳時代前期の土器が出土し、床面及び貯蔵穴内から完形または完形に復元可能な土器が多く出土している。1の壺口頸部は倒位で、器台として使用されたと考えられる。7の台付甕は正位で押しつぶされた状態である。





第190图 056号住居跡出土遺物 (1)



第191図 056号住居跡出土遺物（2）

遺物 1は土師器壺の口頸部である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端は内弯する。折り返し口縁である。折り返し部下端に刻み目が施される。2は土師器壺の口縁部である。外反し、口縁部端は内弯する。3は土師器壺の胴底部である。底部は平底である。胴部は下脹れで、張りが強く、イチジク形である。4は土師器壺の胴部である。球形と思われる。5は土師器壺の胴底部である。底部は平底である。胴部はやや下脹れの球形である。6は土師器小型壺である。底部は平底である。胴部はやや下脹れの扁平な球形である。口縁部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部端に至る。7は土師器台付甕である。台部は外傾して開き、直線的に端部に至る。胴部はほぼ球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部に2段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。8は土師器台付甕の口胴部である。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線

的に口縁部端に至る。口縁部端は小さく内弯する。口縁部端に刻み目が施される。口縁部に3段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。9は土師器台付甕の口胴部である。胴部はほぼ球形である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端に至る。口縁部に2段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。10は土師器台付甕の台部である。外傾して開き、直線的に端部に至る。11は土師器小型甕である。底部は平底である。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。口縁部に3段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。12は土師器小型甕である。底部は平底で小さい。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、わずかに内弯して口縁部端に至る。13はミニチュア土器の甕である。胴底部で、底部は平底である。胴部はやや扁平な球形で、上部に稜を持つ。14はミニチュア土器の甕の底部と思われる。15はミニチュア土器の鉢である。底部は平底である。胴部から口縁部は半球形で、口縁部端は内弯する。16~22は土師器高坏である。16は坏部が外傾して大きく開きわずかに内弯して口縁部端に至る。脚部は外反して開き、裾部は直線的である。脚部は円形の透孔が3か所に施される。17は裾部を欠く。坏部は稜をもって開き、内弯して口縁部に至る。口縁部端は外傾する。脚部は円形の透孔が施される。18~22は脚部である。18は外反して開き端部に至る。円形の透孔が3か所に施される。19は端部を欠く。外反して大きく開く。円形の透孔が3か所に施される。20は外傾して開く。円筒状である。円形の透孔が3か所に施される。21は外傾して開く。円形の透孔が3か所に施されると思われる。22は外反して開く。23は土師器器台の脚部である。外反して開き、接合部に穿孔が施される。円形の透孔が3か所に施される。

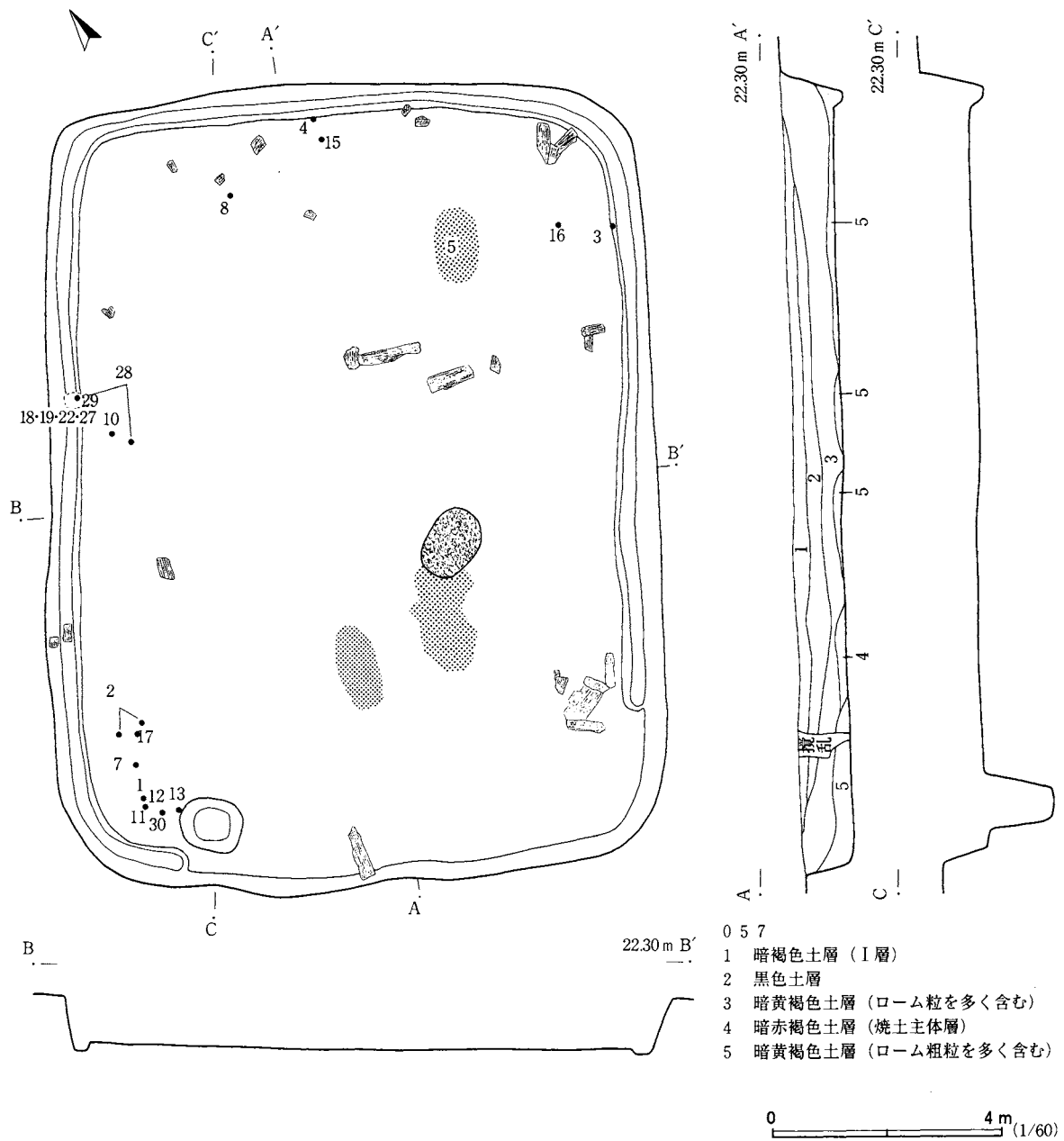
第101表 056号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	1.4 7.21 22	壺	口径 24.5 底径 10.1 高さ 10.1 最大径	15%	ハケ調整の後ヘラミガキ-ハケ調整の後ヘラナデ ハケ調整の後ヘラナデ- ヘラ切り・ハケ調整-ハケ調整の後ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色 黄褐色	良好
2	4.22	壺	口径 17.8 底径 7.35 高さ 7.35 最大径	12%	ヘラミガキ- - - 網目状燃糸文・網目状燃糸文- - -	砂粒 白色鉱物, 赤色 スコリア粒少量	赤褐色 (赤彩) 灰褐色	良好
3	11.40	壺	口径 8.5 底径 23.0 高さ 23.05 最大径23.05	70%	-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ -ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色 赤褐色 (赤彩)	良好
4	1.7 21	壺	口径 19.5 底径 45.8 高さ 19.5 最大径45.8	10%	- -ハケ調整の後ヘラナデ- - -ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色 暗褐色	良好
5	12	壺	口径 9.1 底径 12.5 高さ 26.25 最大径26.25	30%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラミガキ-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色 (赤彩)	良好
6	2.3 4.22 46	小型壺	口径 7.9 底径 3.5 高さ 10.8 最大径12.3	70%	ヘラミガキ-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ 網目状燃糸文-ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラケ ズリの後ヘラナデ	砂粒 白色鉱物	暗褐色 赤褐色 (赤彩)	良好
7	4.6 18	台付甕	口径 18.9 底径 8.55 高さ 26.1 最大径22.4	80%	ヘラナデ-ヘラナデの後粗いミガキ-ヘラナデの 後粗いミガキ-ナデ ヘラナデ・ナデ-ハケ調整-ハケ調整-ハケ調整 の後粗いナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
8	4.22	台付甕	口径 20.0 底径 19.4 高さ 26.3 最大径26.3	60%	ヘラナデ-ヘラナデの後粗いミガキ- - ヘラナデ・ナデの後粗いハケ調整-ハケ調整- -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	褐色 赤褐色	良好

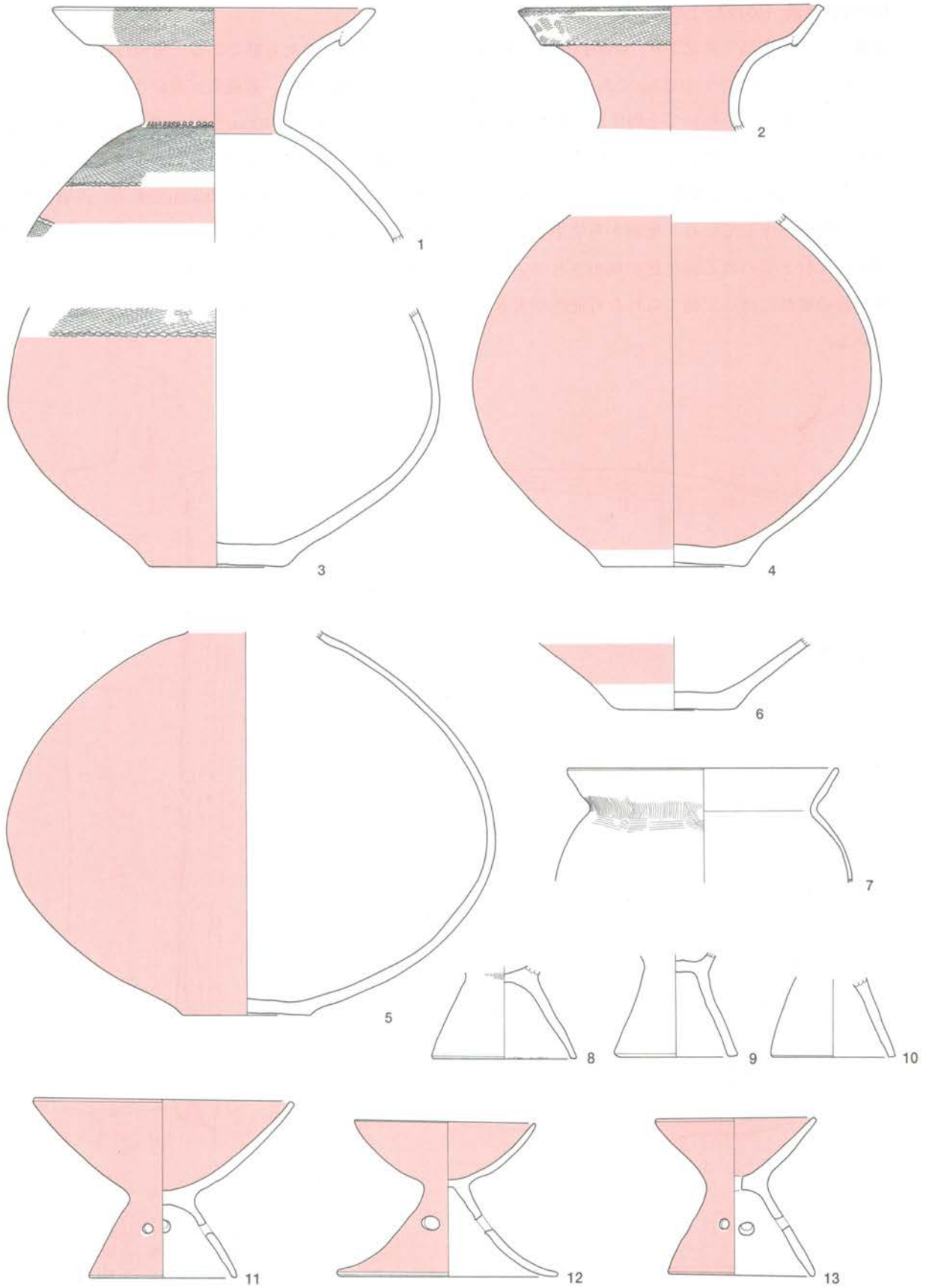
挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎 土	色 調	焼 成
9	2, 28 29, 30 33, 34	台付甕	口径 17.1 底径 16.8 高さ 19.1 最大径	70%	ヘラナデ-ヘラナデの後粗いヘラミガキ-ヘラナ デの後粗いヘラミガキ- ヘラナデ・ナデ-ヘラナデ-ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	暗褐色	良好
10	2, 21 31	小型甕	口径 10.0 底径 6.8 高さ 最大径	15%	- -ヘラナデ・ヨコナデ-ヘラ切り - -ヘラナデ・ヨコナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
11	9, 21	小型甕	口径 11.4 底径 4.5 高さ 12.6 最大径14.3	95%	ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデの後粗いミガキ- ヘラナデの後粗いミガキ ヨコナデ・ナデの後軽いヘラナデ-ヘラナデ-ヘ ラナデ-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物	暗赤褐色 赤褐色	良好
12	37	小型甕	口径 8.95 底径 2.1 高さ 7.3 最大径 9.5	80%	ハケ調整の後ヘラナデ-ハケ調整の後ヘラナデ- ハケ調整の後ヘラナデ-ハケ調整の後ヘラナデ ナデ・ハケ調整-ハケ調整-ハケ調整-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	褐色	良好
13	1	小型甕	口径 3.4 底径 5.6 高さ 7.8 最大径	35%	-ヘラナデ-ヘラナデの後粗いミガキ-ヘラナ デの後粗いミガキ -ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラケズリの後粗い ヘラミガキ-ヘラケズリの後ミガキ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色 暗褐色	良好
14	40	小型甕	口径 3.3 底径 0.8 高さ 最大径	10%	- -ヘラナデ - -ヘラナデ-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
15	16	小型甕	口径 5.5 底径 2.6 高さ 4.15 最大径	85%	-ヘラナデ- -ヘラナデ ヨコナデ-ヘラミガキ- -ヘラケズリ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩)	良好
16	3, 4	高 坏	口径 19.1 底径 9.8 高さ 12.7 最大径	70%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ-ナデ ヨコナデ・ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラミガ キ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩)	良好
17	37	高 坏	口径 10.1 底径 5.55 高さ 最大径	40%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ- ナデ・ヘラミガキ-ヘラナデ-ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色	良好
18	15	高 坏	口径 9.4 底径 5.2 高さ 最大径	35%	- -ヘラナデ-ハケ調整 - -ヘラミガキ-ナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色 赤褐色 (赤彩)	良好
19	1	高 坏	口径 5.2 底径 高さ 最大径	30%	- -ヘラケズリ・ヘラナデ- - -ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色 (赤彩)	良好
20	2	高 坏	口径 4.35 底径 高さ 最大径	30%	-ヘラミガキ-ヘラナデ- -ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩)	良好
21	32	高 坏	口径 2.8 底径 高さ 最大径	20%	-ヘラミガキ-ヘラナデ- -ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩)	良好
22	3	高 坏	口径 3.65 底径 高さ 最大径	30%	-ヘラミガキ-ハケ調整の後ヘラナデ- -ハケ調整の後ヘラミガキ-ハケ調整の後ヘラ ミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 多量	赤褐色 (赤彩)	良好
23	32	器台	口径 4.55 底径 1.3 高さ 1.0 穿孔径 上 下	20%	-ヘラミガキ-ヘラナデ- -ヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	褐色	良好
24	24	浮子	長さ 5.9 幅 5.1 厚さ 3.6 重量 26.0 g	100%	表面に砥ぎ痕がある。	軽石	黄白色	

057号住居跡 (第192~196図 第102表 図版84・85・117~121)

遺構 調査区南部中央北寄り、056号住居跡の南隣である。平面形は隅丸方形である。規模は6.94m×5.20mで、検出面からの深さは0.43mである。床面は平坦である。壁周溝、炉跡、貯蔵穴が検出された。壁周溝は南隅から南西壁下を除いて全周する。幅0.15m~0.2m、床面からの深さは0.05m~0.1mである。炉跡は床面中央やや南寄りに検出された。楕円形で、0.6m×0.45m、床面への掘り込みは深さは0.1mである。貯蔵穴は南西壁下の西隅寄りに位置している。長方形で、0.5m×0.4m、床面からの深さは0.55mである。古墳時代前期の土器が出土している。床面から完形及び完形に復元可能な土器が多く出土している。また、焼土及び住居の部材と思われる炭化材が検出されている。土器の出土状況は正位、横位、倒位と様々なので、住居廃棄後の焼却に伴って捨てられた可能性が大きい。ほかに、叩き石、大型の砥石、軽石製の浮子出土している。

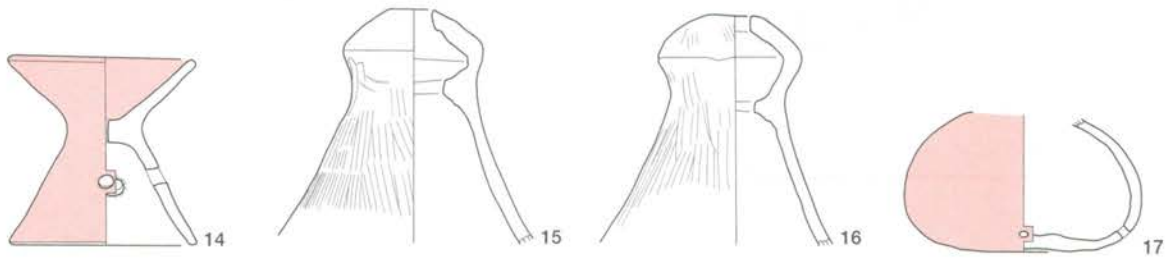


第192図 057号住居跡実測図

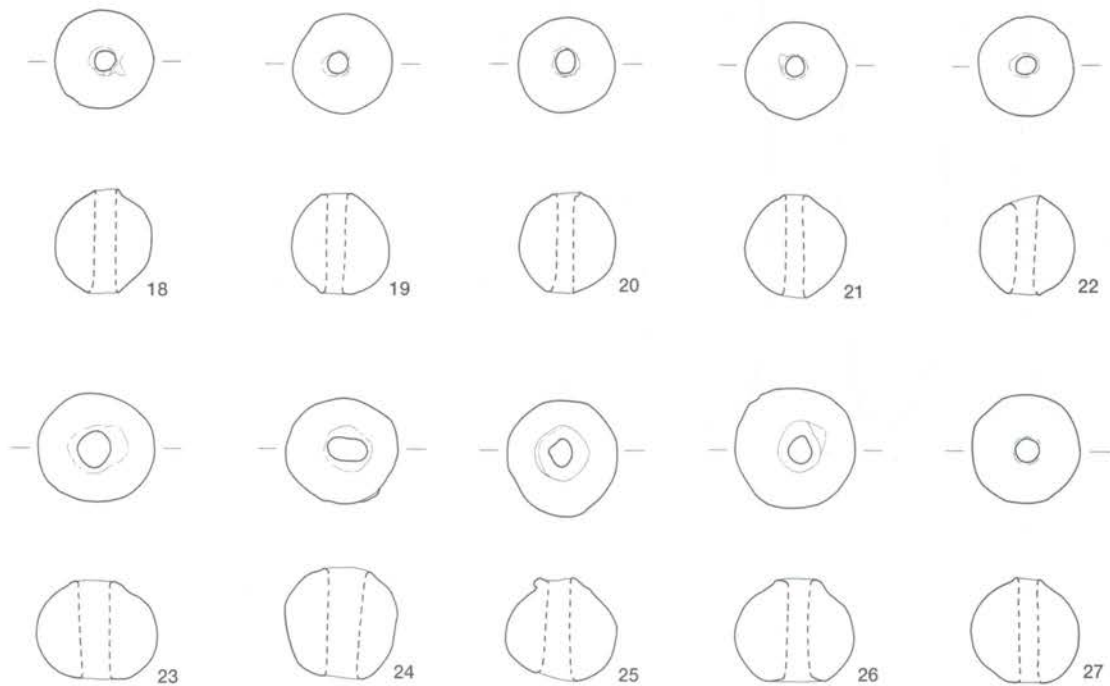


第193图 057号住居跡出土遺物 (1)

遺物 1は土師器壺の口胴部である。胴部下半を欠く。胴部はほぼ球形と思われる。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端は内弯する。折り返し口縁である。2は土師器壺の口縁部である。外反し、口縁部端は内弯する。折り返し口縁である。折り返し部下端に刻み目が施される。3～5は土師器壺の胴底部である。底部は平底である。3は胴部が下脹れのやや扁平な球形である。4は胴部がほぼ球形である。5は胴部がやや扁平な球形である。6は土師器壺の底部である。平底である。7は土師器甕の口胴部である。胴部下半を欠く。胴部はほぼ球形と思われる。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端は直線的である。8～10は土師器台付甕の台部である。8は外傾して開き、端部はわずかに内弯する。9はやや外反して開き、端部は直線的である。10は外傾して開き、直線的に端部に至る。11・12は土師器高坏である。11は坏部が外傾して立ち上がり、緩やかに内弯して口縁部端に至る。脚部は外傾して開き、わずかに内弯して端部に至る。脚部は円形の透孔が4か所に施される。12は坏部が外傾して立ち上がり、緩やかに内弯して口縁部端

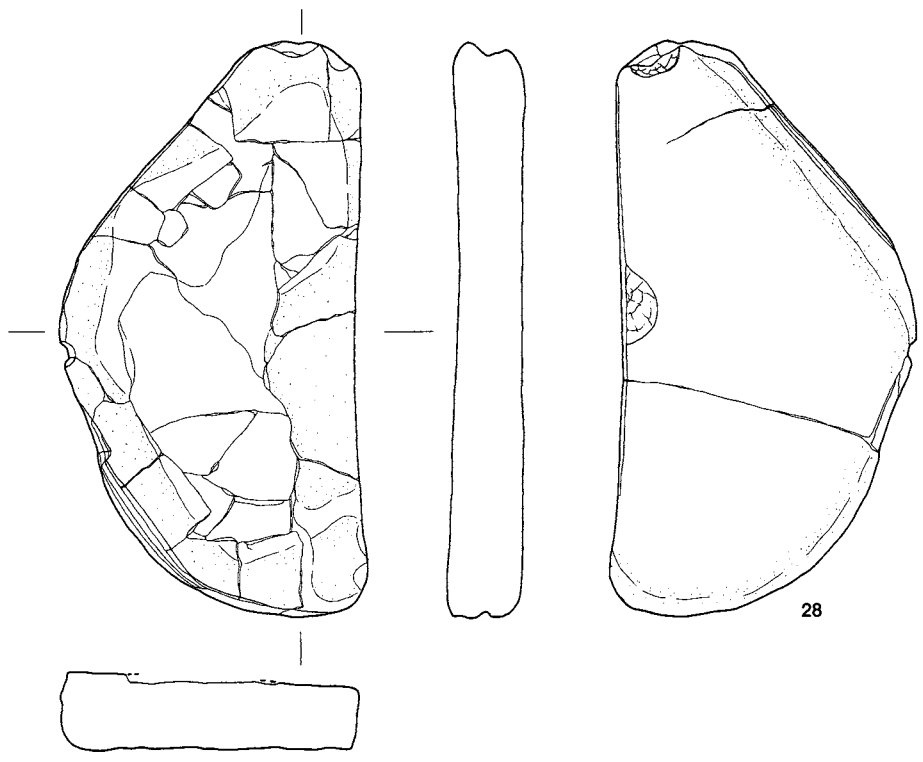


0 10cm (1/4)



0 5cm (1/2)

第194図 057号住居跡出土遺物(2)



28

0 10cm (1/4)

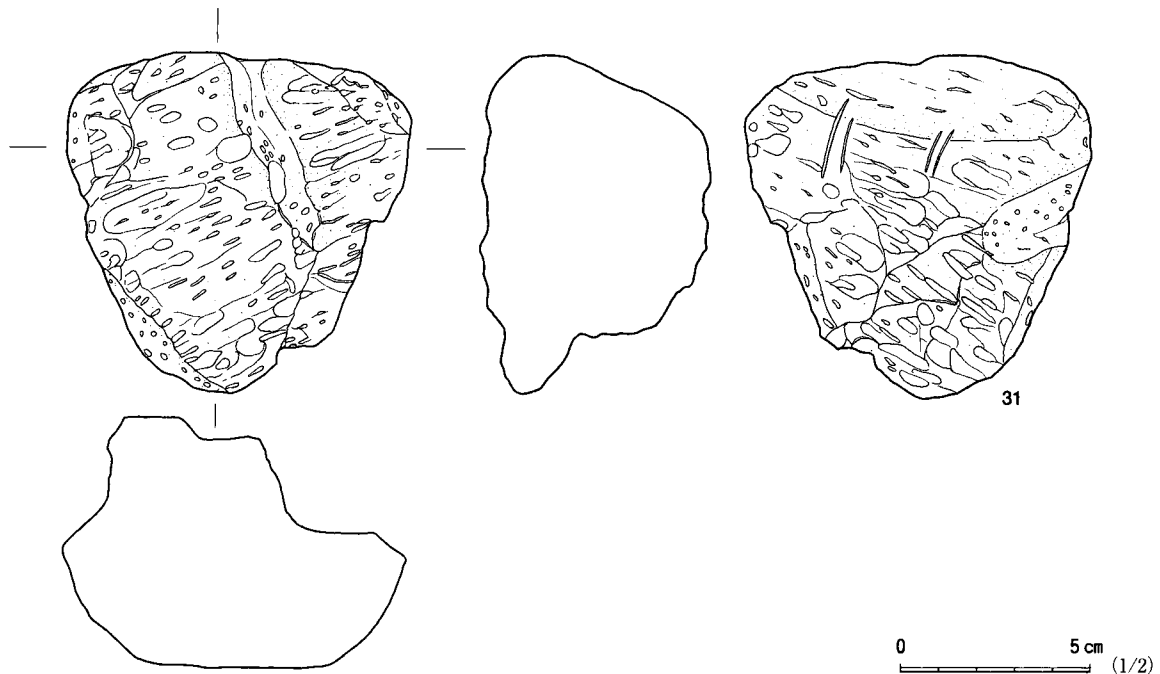


29

30

0 5cm (1/2)

第195図 057号住居跡出土遺物(3)



第196図 057号住居跡出土遺物（4）

に至る。脚部は外反して大きく開き、端部に至る。脚部は円形の透孔が3か所に施される。13・14は土師器器台である。13は器受部が外傾して直線的に立ち上がり、端部に至る。脚部は外傾して開き、端部は直線的である。接合部に穿孔が施され、脚部は円形の透孔が4か所に施される。14は器受部が外傾して直線的に立ち上がり、端部に至る。脚部は外傾して開き、端部はわずかに外反する。接合部に穿孔が施され、脚部は円形の透孔が4か所に施される。15・16は土師器器台形土器である。脚部端を欠く。器受部は丸みのあるソロバン玉状で、脚部はやや外反して開き、裾部は緩やかに外反する。器受部に孔がある。17は土師器埴の胴底部である。底部は平底で、胴部は扁平な球形である。胴下半部に焼成前に穿孔が施される。18～27は土玉である。ほぼ球形で、片側から穿孔が施される。28は大型の砥石である。熱を受けたためひび割れが激しく、薄く剥離している。29は叩き石である。円筒の棒状で、両端が使用されている。また、側面に成形のための敲打痕が見られる。30・31は軽石の浮子である。溝状の部分に縄をかけて使用したと考えられる。31には筋状の刻みがあり、砥石にも使用されたと思われる。

第102表 057号住居跡出土遺物表

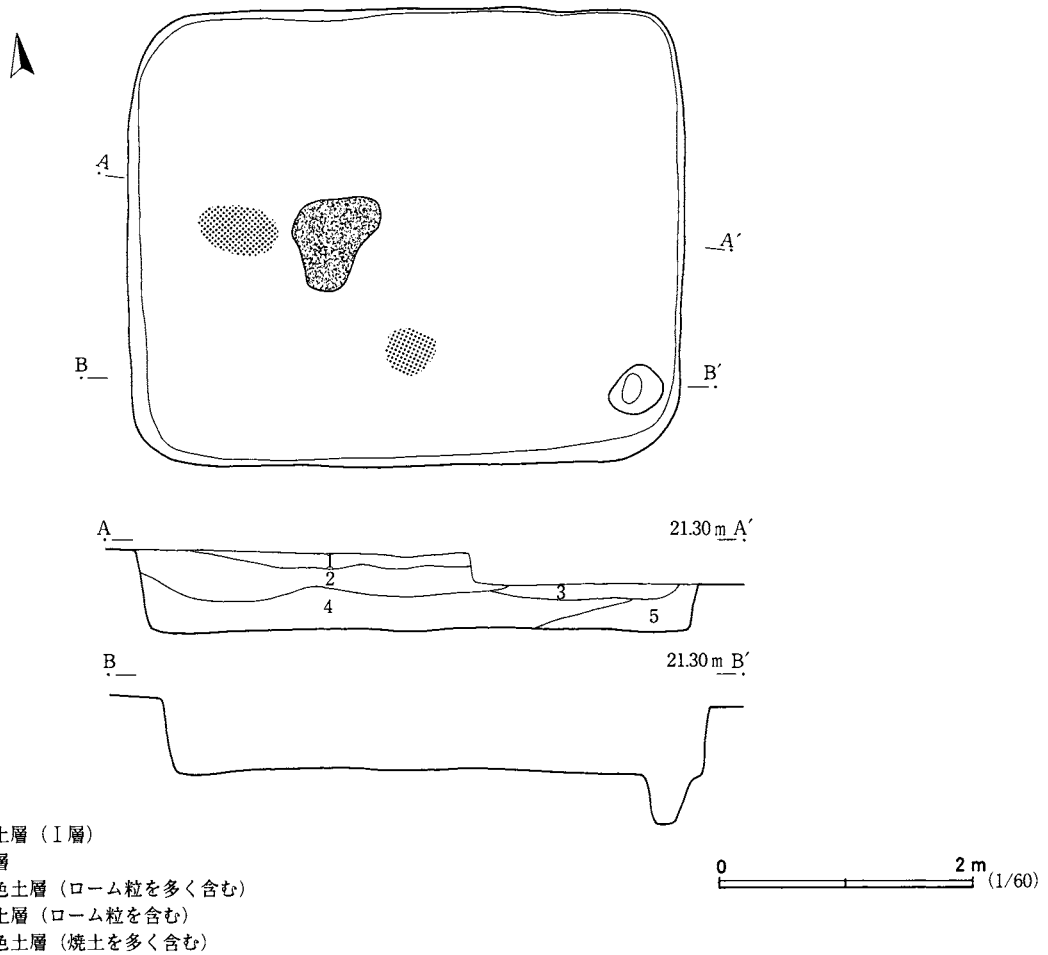
挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎土	色調	焼成
1	1, 4 7, 12 17, 21	壺	口径 21.4 底径 16.45 高さ 16.45 最大径	20%	ヘラミガキ-ヘラナデ- 網目状燃糸文・ヘラミガキ-網目状燃糸文・ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物	赤褐色 (赤彩)	良好
2	18, 24 25	壺	口径 25.5 底径 8.8 高さ 8.8 最大径	20%	ヘラミガキ-ヘラケズリ- 網目状燃糸文-ヘラミガキ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	赤褐色 (赤彩)	良好
3	7, 9	壺	口径 9.8 底径 18.0 高さ 30.3 最大径	20%	- -ヘラナデ-ヘラナデ -網目状燃糸文-ヘラミガキ-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	褐色 赤褐色 (赤彩)	良好

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) - 底部	胎 土	色 調	焼 成
4	2, 3 4, 5 6, 12	壺	口径 底径 10.0 高さ 24.5 最大径28.8	65%	-ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラミガキ -ヘラミガキ-ヘラミガキ・ヘラケズリ-ヘラ ケズリ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	赤褐色 (内外面 赤彩)	良好
5	17	壺	口径 底径 9.0 高さ 26.7 最大径34.4	80%	-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ -ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラケズリの後ヘ ラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色 (赤彩)	良好
6	8, 18	壺	口径 底径 8.8 高さ 5.0 最大径	5%	- -ヘラミガキ-ヘラナデ - -ヘラミガキ-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色 赤褐色 (赤彩)	良好
7	22	甕	口径 18.4 底径 高さ 7.9 最大径	10%	ヘラナデ-ヘラナデ- ヨコナデ・ナデ-ハケ調整・ハケ調整の後粗いヘ ラミガキ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
8	13	台付甕	口径 底径 9.3 高さ 6.4 最大径	15%	- -ヘラナデ-ヘラナデ・ナデ - -ハケ調整-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	黒褐色 明褐色	良好
9	30	台付甕	口径 底径 7.4 高さ 7.25 最大径	10%	- -ヘラナデ-ヘラナデ・ナデ - - -ヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 暗褐色	良好
10	15	台付甕	口径 底径 8.8 高さ 5.5 最大径	15%	- - -ヘラナデ・ナデ - - -ヘラナデの後ヘラミガキ	砂粒 白色鉱物	黒褐色 暗褐色	良好
11	21	高 坏	口径 17.9 底径 9.8 高さ 12.4 最大径	90%	-ヘラミガキ-ヘラナデ-ナデ ヨコナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ- 透孔4か所	砂粒 白色鉱物	赤褐色 赤 彩	良好
12	20	高 坏	口径 12.7 底径 15.4 高さ 10.75 最大径	80%	-ヘラミガキ-ヘラナデ-ヘラナデ ヨコナデ-ヘラミガキ-ヘラナデ- 透孔3か所	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 赤 彩 脚部内面	良好
13	19	器 台	口径 10.95 底径 9.9 高さ 10.9 穿孔径上 1.1 下 0.9	100%	-ヘラミガキ-ヘラナデ・ヘラナデの後粗いヘ ラミガキ-ナデ ヨコナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ- 透孔4か所	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 赤 彩	良好
14	29	器 台	口径 9.4 底径 9.3 高さ 9.75 穿孔径上 1.05 下 1.15	90%	-ヘラミガキ-ヘラナデ-ナデ ヨコナデ-ヘラミガキ-ヘラミガキ- 透孔4か所	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物少量	赤褐色 赤 彩	良好
15	11	器台形 土 器	口径 7.3 底径 高さ 12.1 最大径	80%	ヘラケズリ・ナデ-ヘラナデ-ヘラナデ- ナデ-ヘラケズリの後ナデ-ハケ調整-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
16	10	器台形 土 器	口径 7.75 底径 高さ 11.95 最大径	80%	ヘラナデ-ナデ-ヘラナデ- ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ-ハケ調整-	砂粒 白色鉱物	暗褐色	良好
17	23	罎	口径 底径 3.05 高さ 7.1 最大径12.45	80%	-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ -ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラミガキ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	黒褐色 赤褐色 (赤彩)	良好
18	27	土 玉	重さ 16.17 g 孔径上 0.55 下 0.65 高さ 2.7 最大径 2.55	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物	褐 色	良好
19	27	土 玉	重さ 16.79 g 孔径上 0.55 下 0.6 高さ 2.6 最大径 2.6	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物	褐 色	良好

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎 土	色 調	焼 成
20	4	土 玉	重さ 16.4 g 孔径上 0.65 下 0.6 高さ 2.6 最大径 2.55	100%	- - - - ナデ - -	砂粒 白色鉱物	暗褐色	良好
21	4	土 玉	重さ 16.36 g 孔径上 0.5 下 0.6 高さ 2.65 最大径 2.6	100%	- - - - ナデ - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	褐 色	良好
22	27	土 玉	重さ 15.78 g 孔径上 0.8 下 0.8 高さ 2.6 最大径 2.6	100%	- - - - ナデ - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	暗褐色	良好
23	4	土 玉	重さ 19.95 g 孔径上 0.85 下 0.8 高さ 2.55 最大径 3.05	100%	- - - - ナデ - -	砂粒 白色鉱物	暗褐色	良好
24	4	土 玉	重さ 23.3 g 孔径上 1.0 下 0.85 高さ 2.9 最大径 2.9	100%	- - - - ナデ - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
25	4	土 玉	重さ 21.37 g 孔径上 0.7 下 0.9 高さ 2.7 最大径 3.0	100%	- - - - ナデ - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
26	4	土 玉	重さ 24.88 g 孔径上 0.7 下 0.7 高さ 2.75 最大径 2.8	100%	- - - - ナデ - -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
27	27	土 玉	重さ 21.37 g 孔径上 0.7 下 0.9 高さ 2.65 最大径 3.1	100%	- - - - ナデ - -	砂粒 白色鉱物	褐 色	良好
28	2, 4 14B 14C 14D 16	砥 石	長さ 30.1 幅 15.6 厚さ 4.0 重量 2.7kg	95%	節理に従って薄く剥離する 被熱のためヒビ割れ	砂岩質	灰褐色	
29	14A	叩き石	長さ 12.3 幅 3.8 厚さ 2.9 重量 187.0 g	100%	両端及び側面に叩き痕	砂岩質	灰 色	
30	20	浮 子	長さ 7.3 幅 4.8 厚さ 3.2 重量 48.0 g	100%	全体に磨耗	軽石	黄白色	
31	26	浮 子	長さ 8.9 幅 9.0 厚さ 6.4 重量 98.0 g	100%	刻み目状の砥ぎ痕がある 全体に磨耗	軽石	黄白色	

058号住居跡（第197図 図版86）

遺構 調査区南部ほぼ中央に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.43m×3.36mで、検出面からの深さは0.60mである。床面は平坦である。炉跡、貯蔵穴が検出された。炉跡は床面中央やや西寄りに位置している。不整形で、0.85m×0.55m、床面への掘り込みは0.1mである。貯蔵穴は南東隅に位置している。楕円形で、0.5m×0.34m、床面からの深さは0.35mである。床面に焼土が検出され、床面直上の覆土にも焼



第197図 058号住居跡実測図

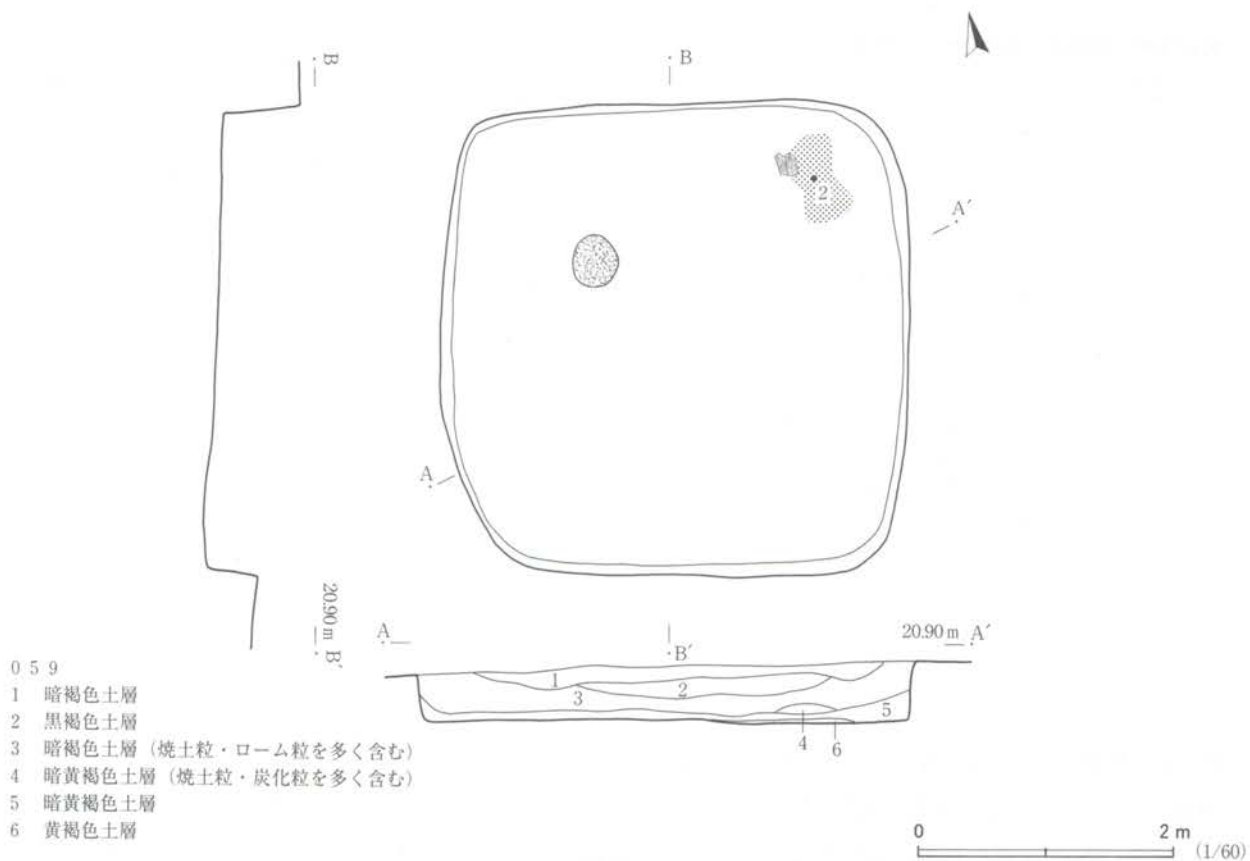
土が含まれている。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため図示できなかった。

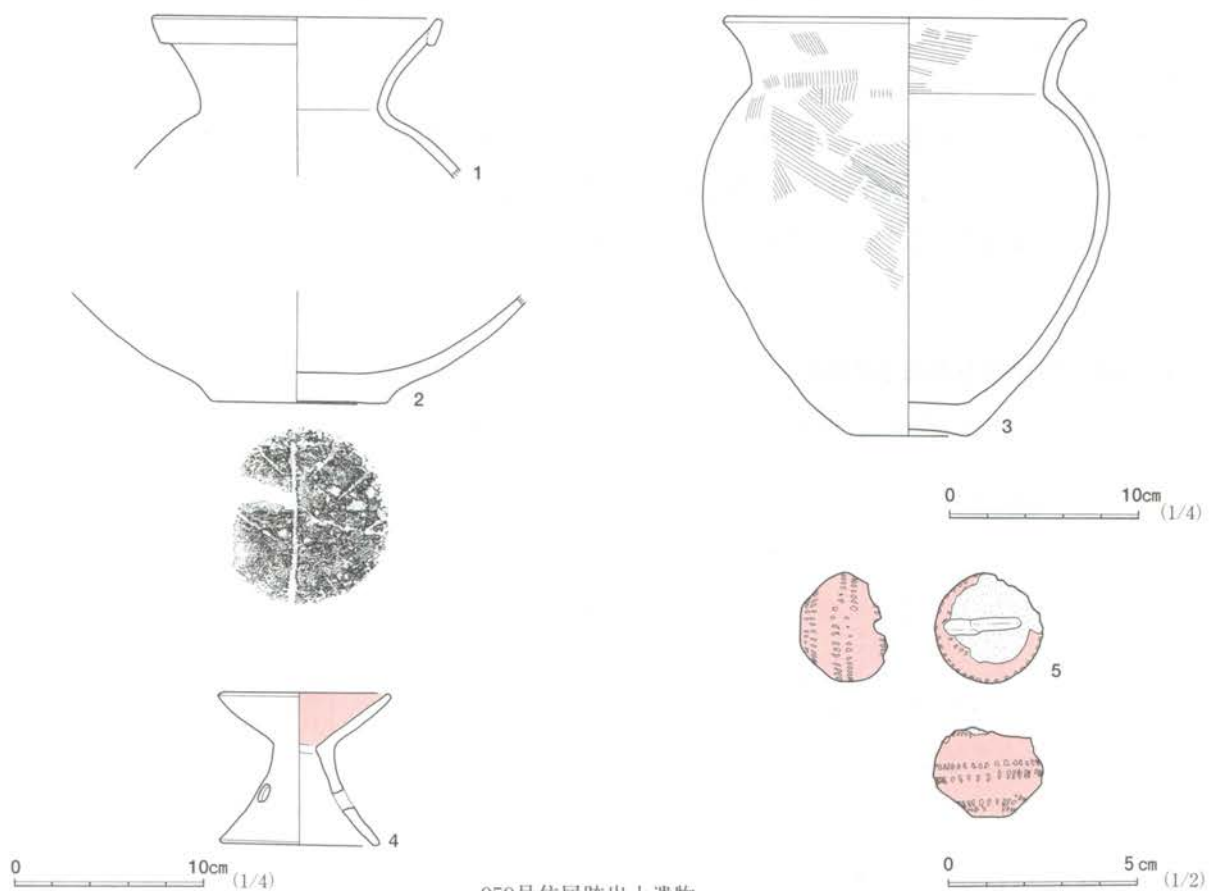
059号住居跡 (第198図 第103表 図版86・121・122)

遺構 調査区南部ほぼ中央、058号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.70m×3.69mで、検出面からの深さは0.48mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央北西寄りに検出された。楕円形で、0.4m×0.37m、床面への掘り込みは0.15mである。ほかの内部施設は検出されなかった。床面北東隅に焼土、炭化材及び器台が検出された。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 1は土師器壺の口胴部である。胴部大半を欠く。胴部はほぼ球形と思われる。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端は内弯する。折り返し口縁である。2は土師器壺の胴底部である。胴部大半を欠く。底部は平底である。胴部は球形と思われる。3は土師器甕である。底部は平底である。胴部はやや扁平な鶏卵形である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端に至る。4は土師器器台である。器受部は外傾して直線的に立ち上がり、端部に至る。脚部は外反して開き、裾部はやや外反する。接合部に孔を持つが、やや大きく、器形全体が鼓状である。脚部は円形の透孔が3か所に施される。5は土製品である。土玉状で、上端部に穿孔され、器面に細竹管による刺突が点線状に施される。



059号住居跡実測図



059号住居跡出土遺物

第198図 059号住居跡実測図及び出土遺物

第103表 059号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎 土	色 調	焼 成
1	2.7 8.12	壺	口径 14.7 底径 8.35 高さ 8.35 最大径	20%	-ヘラナデの後ヘラミガキ-ヘラナデ- ヘラ切りの後ヨコナデ・ナデの後ヨコナデ-ヘラ ナデ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
2	058-4 059-4	壺	口径 9.2 底径 5.8 高さ 5.8 最大径	10%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラミガキ-粗いヘラミガキ・木葉痕	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
3	1.12	甕	口径 18.5 底径 6.2 高さ 21.8 最大径21.25	50%	ハケ調整の後ヨコナデ-ヘラナデ-ヘラナデ-ヘ ラナデ ヨコナデ・ハケ調整の後ヨコナデ-ハケ調整-ヘ ラナデ-ヘラナデ	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	褐色	良好
4	13	器 台	口径 8.6 底径 7.8 高さ 7.8 最大径	100%	-ヘラナデの後ヘラミガキ-ヘラナデ-ナデ ナデ-ナデの後粗いヘラミガキ-ヘラミガキ-	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩) 褐色	良好
5	5	土製品	重さ 14.38 g 底径 1.0 高さ 2.2 最大径 2.8	70%	- - - -ナデの後刺突- -	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 微量	赤褐色 赤 彩	良好

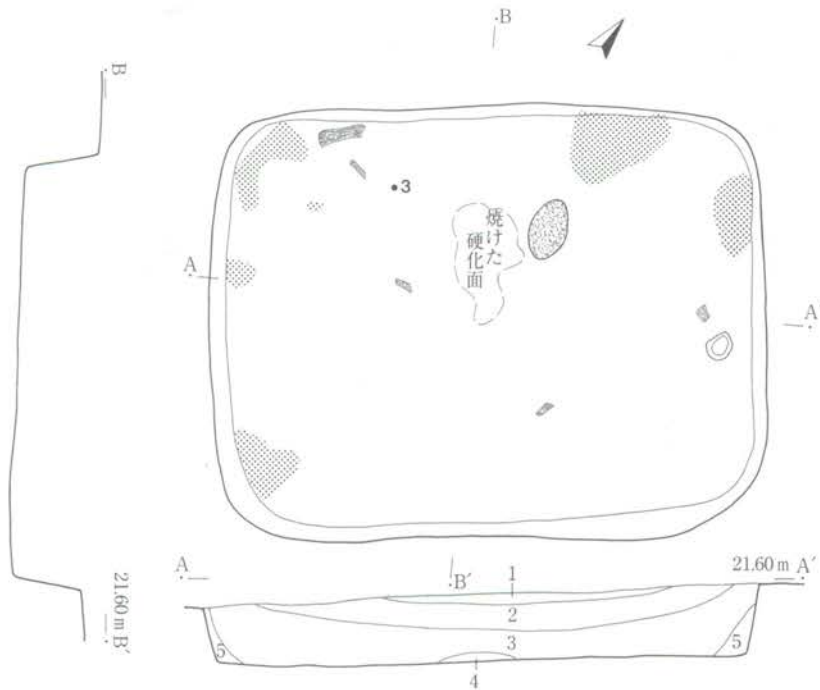
062号住居跡 (第199図 第104表 図版87・122)

遺構 調査区南部ほぼ中央、057号住居跡の南東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は4.43m×3.37mで、検出面からの深さは0.52mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央北寄りに検出された。楕円形で、0.5m×0.3m、床面への掘り込みは0.05mである。ほかの内部施設は検出されなかった。床面に焼土、炭化材が出土している。特に、焼土は壁付近に集中している。古墳時代前期の土器が出土し、床面からミニチュア土器の鉢が出土している。

遺物 1は土師器小型壺の口頸部である。口縁部が外傾して直線的に立ち上がる。2は土師器高坏の脚部である。外反して開き、裾部は大きく外反する。円形の透孔が3か所に施される。3はミニチュア土器の鉢である。底部は平底で、胴部は半球形である。口縁部は短く外反する。

第104表 062号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎 土	色 調	焼 成
1	3	小型壺	口径 11.4 底径 4.75 高さ 4.75 最大径	5%	ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラナデ- - ヨコナデ・ヘラミガキ-ヘラミガキ- -	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒 少量	黒褐色	良好
2	3	高 坏	口径 13.6 底径 5.9 高さ 5.9 最大径	30%	-ヘラミガキ-ヘラナデ・ヘラミガキ- -ヘラミガキ-ヘラミガキ-ナデ	砂粒 白色鈹物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩)	良好
3	2	ミニ チュア土 器	口径 5.15 底径 2.4 高さ 3.2 最大径	98%	-ヘラナデ- -ヘラナデ ナデ-ヘラナデ- -ヘラナデ	砂粒 白色鈹物	黒褐色	良好

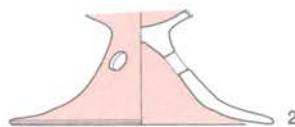
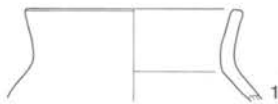


062

- 1 暗褐色土層 (I層)
- 2 黒色土層
- 3 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
- 4 暗赤褐色土層 (焼土を多く含む)
- 5 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

062号住居跡実測図

0 2m (1/60)



062号住居跡出土遺物

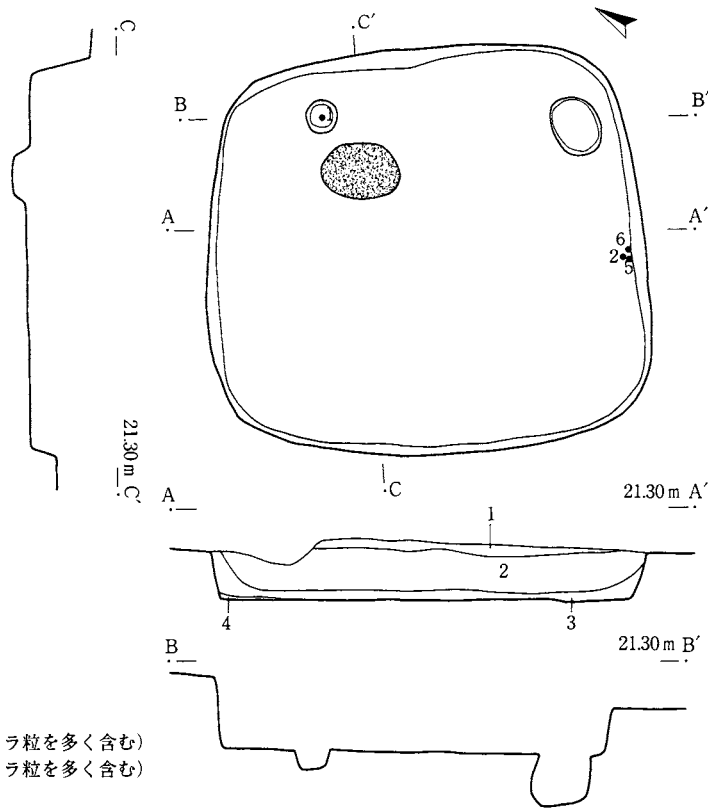
0 10cm (1/4)

第199図 062号住居跡実測図及び出土遺物

063号住居跡 (第200図 第105表 図版87・122)

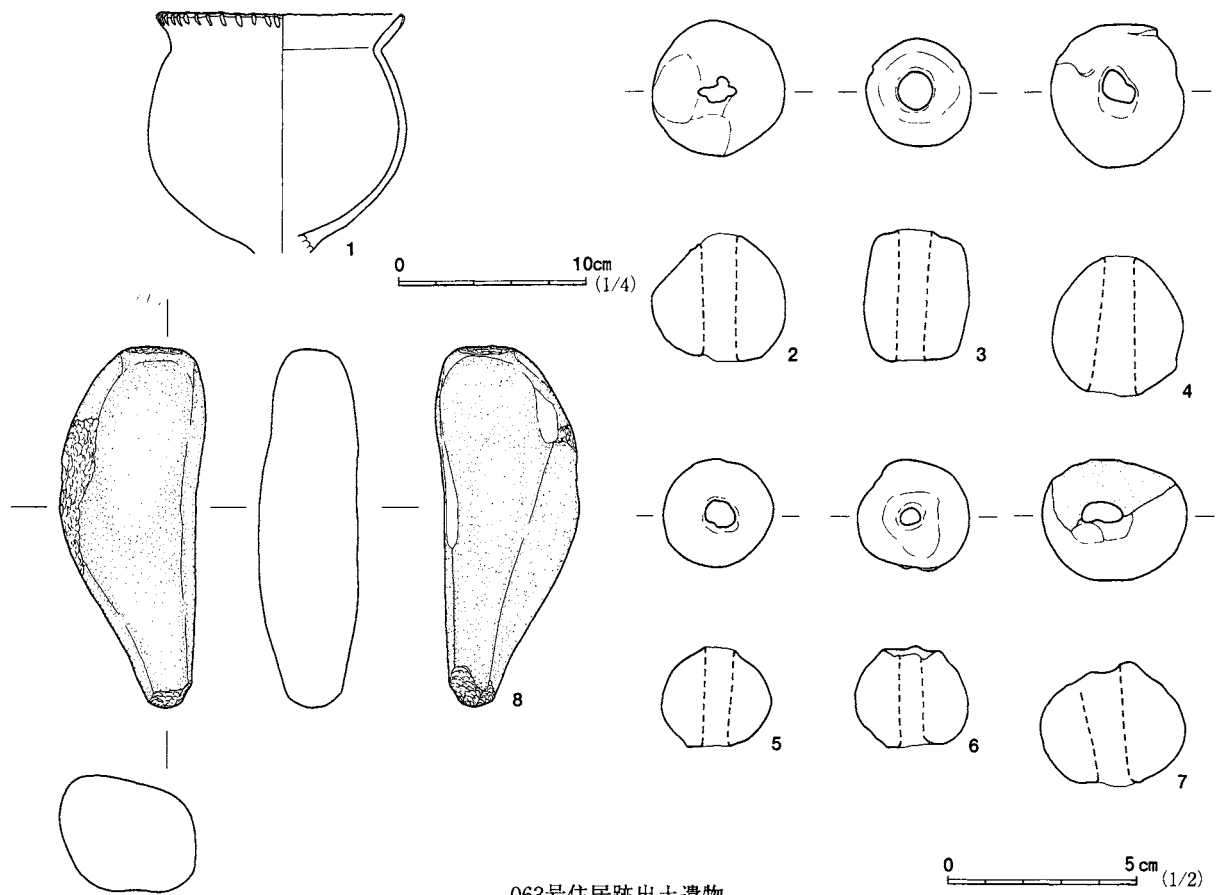
遺構 調査区南部ほぼ中央、062号住居跡の南西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.57m×3.20mで、検出面からの深さは0.47mである。床面は平坦である。炉跡、貯蔵穴、ピットが検出された。炉跡は床面中央北寄りに位置している。楕円形で、0.54m×0.45m、床面への掘り込みは0.12mである。貯蔵穴は東隅に位置している。楕円形で、0.48m×0.37m、床面からの深さは0.37mである。ピットは炉跡北隣に位置している。円形で、径0.35m、床面からの深さは0.15mである。古墳時代前期の土器が出土している。また、南壁下には土玉が集中して出土し、保管の状況と考えられる。

遺物 1は土師器台付甕の口胴部である。胴部は球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁部端はわずかに内湾する。口縁部端に刻み目が施される。2～7は土玉である。3は円筒形で、ほかは球形である。片側から穿孔が施される。8は叩き石である。尖った方の端がよく使用されている。



- 063
 1 暗褐色土層 (テフラ粒を多く含む)
 2 黒褐色土層 (テフラ粒を多く含む)
 3 暗黄褐色土層
 4 黄褐色土層

063号住居跡実測図



063号住居跡出土遺物

第200図 063号住居跡実測図及び出土遺物

第105表 063号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器 種	法 量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段－内面、下段－外面） 口縁－胴部（体部）－底部	胎 土	色 調	焼 成
1	2, 4 5, 10	台付甕	口径 12.6 底径 12.4 高さ 12.4 最大径13.55	40%	ヘラナデーヘラナデーー ヘラナデーナデーヘラナデー	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色 黒褐色	良好
2	8	土 玉	重さ 38.9 g 孔径上 0.95 下 1.0 高さ 3.3 最大径 3.35	100%	ー ー ー ーナデー ー	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
3	3	土 玉	重さ 27.6 g 孔径上 0.9 下 0.8 高さ 3.4 最大径 2.8	100%	ー ー ー ーナデー ー	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
4	3	土 玉	重さ 43.28 g 孔径上 0.9 下 1.3 高さ 3.7 最大径 3.8	100%	ー ー ー ーナデー ー	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
5	9	土 玉	重さ 21.35 g 孔径上 0.55 下 0.8 高さ 2.65 最大径 3.0	100%	ー ー ー ーナデー ー	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
6	7	土 玉	重さ 20.25 g 孔径上 0.8 下 0.8 高さ 2.6 最大径 2.9	100%	ー ー ー ーナデー ー	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
7	1	土 玉	重さ 33.77 g 孔径上 0.9 下 0.9 高さ 3.3 最大径 3.8	60%	ー ー ー ーナデー ー	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好
8	6	叩き石	長さ 9.8 幅 3.6 厚さ 2.7 重量 125.0 g	100%	両端に叩き痕 全体に磨耗	砂岩質	灰 色	

064号住居跡（第201図 図版88）

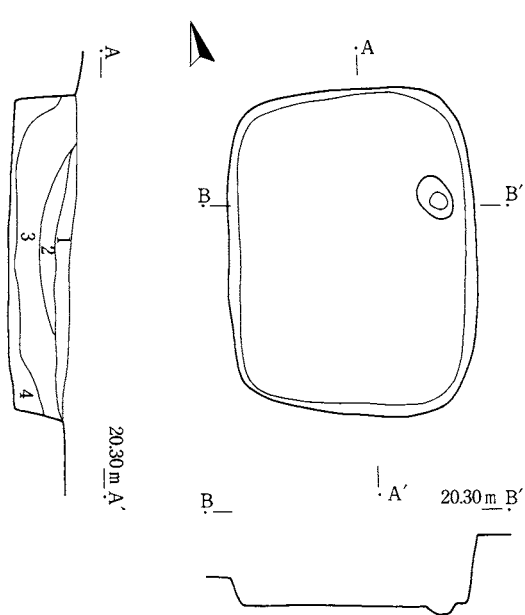
遺構 調査区南部東寄りに位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.61m×1.98mで、検出面からの深さは0.48mである。床面は平坦である。床面東壁下北寄りにピットが検出された。楕円形で、0.35m×0.25m、床面からの深さは0.12mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

065号住居跡（第201図 図版88）

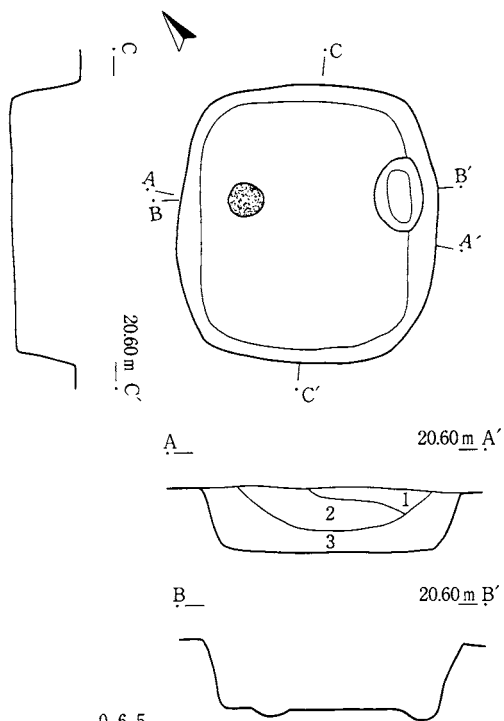
遺構 調査区南部東寄り、064号住居跡の北東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.11m×2.07mで、検出面からの深さは0.52mである。床面は平坦である。炉跡、貯蔵穴が検出された。炉跡が床面中央西寄りに位置している。円形で、径0.25m、床面への掘り込みは0.05mである。貯蔵穴は東壁下中央に位置している。楕円形で、0.8m×0.4m、床面からの深さは0.1mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。



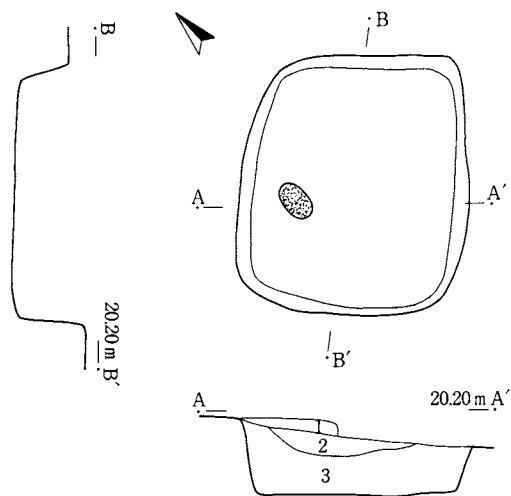
- 064
 1 暗褐色土層 (I層)
 2 黒色土層
 3 暗褐色土層
 4 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

064号住居跡実測図



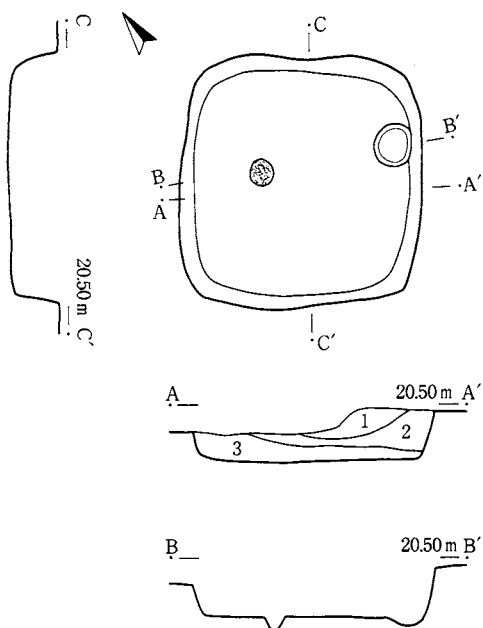
- 065
 1 暗褐色土層 (I層)
 2 黒色土層
 3 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)

065号住居跡実測図



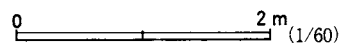
- 066
 1 暗褐色土層 (I層)
 2 黒色土層
 3 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)

066号住居跡実測図



- 067
 1 黒色土層 (焼土粒を含む)
 2 暗褐色土層 (焼土粒を含む)
 3 暗黄褐色土層 (ローム粒主体、焼土粒を含む)

067号住居跡実測図



第201図 064~067号住居跡実測図

066号住居跡（第201図 図版89）

遺構 調査区南部東寄り、065号住居跡の南東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.03m×1.83mで、検出面からの深さは0.44mである。床面は平坦で、中央部が堅く締まっている。炉跡が床面中央北西寄りに検出された。楕円形で、0.3m×0.18m、床面への掘り込みはほとんどない。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

067号住居跡（第201図 図版89）

遺構 調査区南部東寄り、065号住居跡の北東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は1.98m×1.93mで、検出面からの深さは0.33mである。床面は平坦で、中央部が堅く締まっている。炉跡、ピットが検出された。炉跡は床面中央北西寄りに位置している。楕円形で、0.22m×0.17m、床面への掘り込みは0.1mである。ピットは南東壁下中央北寄りに位置している。円形で、径0.33m、床面からの深さは0.07mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

068号住居跡（第202図 図版89）

遺構 調査区南部東寄り、067号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.90m×2.59mで、検出面からの深さは0.33mである。床面は平坦である。ピットが2基検出された。1基は東壁下中央北寄りに位置している。円形で、径0.35m、床面からの深さは0.05mである。ほかの1基は床面中央西寄りに位置している。楕円形で、0.38m×0.28m、床面からの深さは0.05mである。覆土に焼土粒が混入していたが底面の焼土化は認められなかったので、炉跡ではないと思われる。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

069号住居跡（第202図 図版90）

遺構 調査区南部東寄り、067号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.73m×2.00mで、検出面からの深さは0.40mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央北西寄りに検出された。楕円形で、0.32m×0.25m、床面への掘り込みは0.1mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

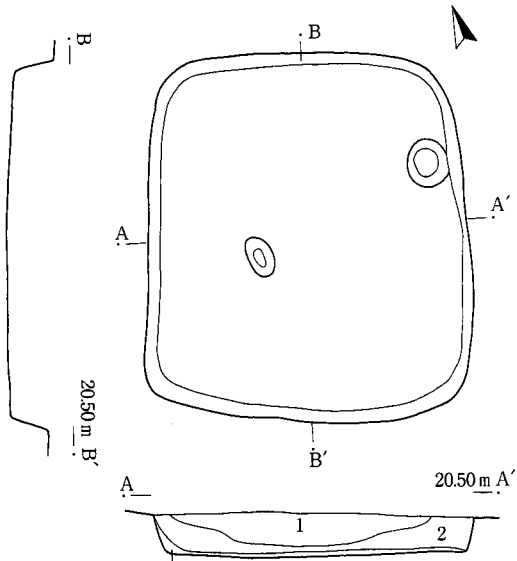
070号住居跡（第202図 図版90）

遺構 調査区南部東寄り、066号住居跡の南西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.55m×2.00mで、検出面からの深さは0.40mである。柱穴などの内部施設は検出されなかった。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

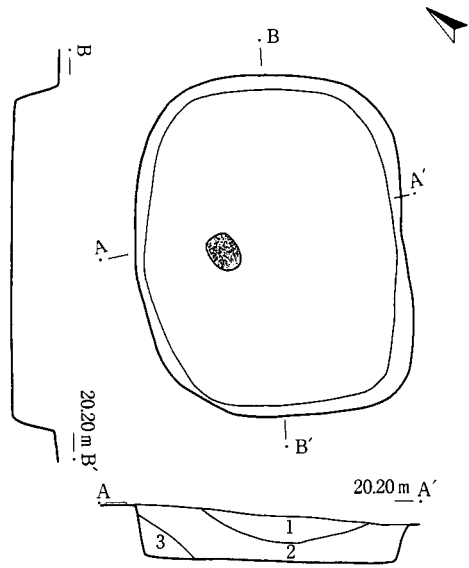
084号住居跡（第202図 図版90）

遺構 調査区中央部南寄り、066号住居跡の南西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.12m



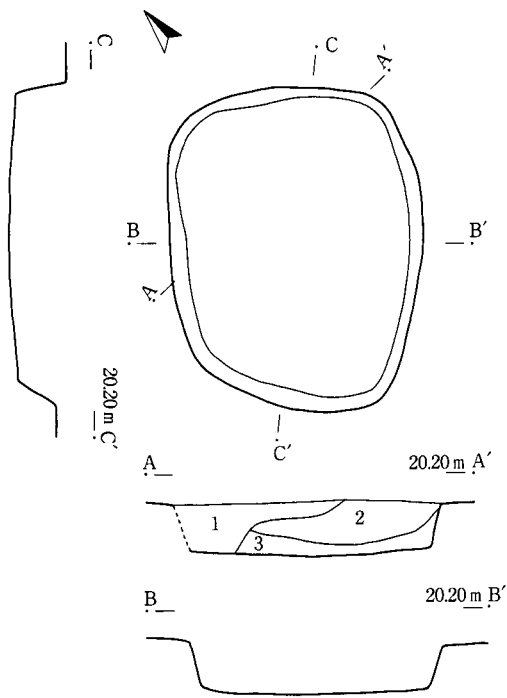
- 068
- 1 黒色土層
 - 2 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

068号住居跡実測図



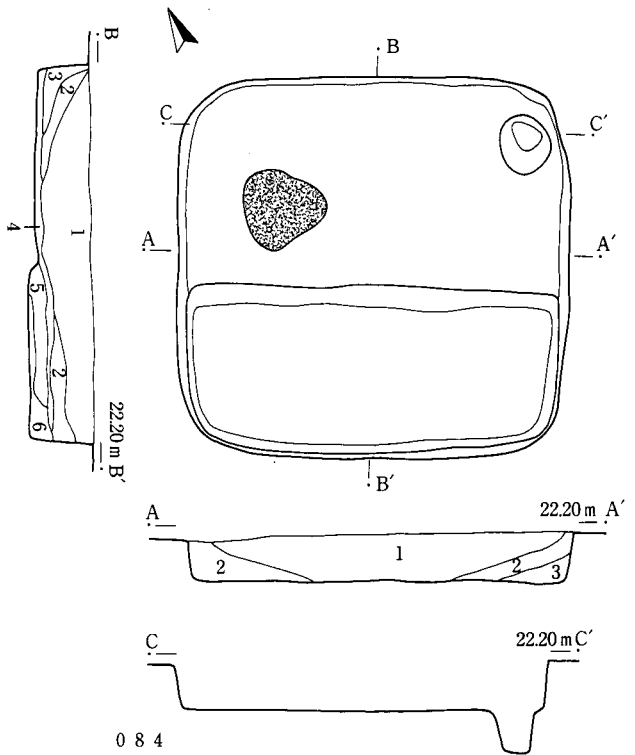
- 069
- 1 黒色土層
 - 2 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

069号住居跡実測図



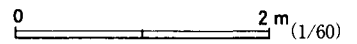
- 070
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 黒褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

070号住居跡実測図



- 084
- 1 暗褐色土層 (ロームブロックを含む)
 - 2 黒色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)
 - 4 黄褐色土層 (ローム粒主体、貼床で硬くしまる)
 - 5 暗黄褐色土層 (ロームブロックを多く含む)
 - 6 黄褐色土層 (ロームブロック充填層)

084号住居跡実測図



第202図 068~070・084号住居跡実測図

×2.99mで、検出面からの深さは0.50mである。床面は平坦であるが、南半部に貼り床が施される。炉跡、貯蔵穴が検出された。炉跡は床面中央北寄りに位置している。ややゆがんだ楕円形で、0.67m×0.62m、床面への掘り込みは0.05mである。ピットは床面東隅に位置している。ほぼ円形で、径0.4m、床面からの深さは0.37mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

085号住居跡 (第203図 第106表 図版91・123)

遺構 調査区南部、059号住居跡の南隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.53m×2.12mで、検出面からの深さは0.16mである。床面は平坦である。緩斜面に位置しているため、南壁が地山まで掘り込まれていなかった。炉跡、貯蔵穴が検出された。炉跡は床面中央北寄りに位置している。楕円形で、0.44m×0.33m、床面への掘り込みは0.05mである。貯蔵穴は炉跡の北西隣、北壁下中央に位置している。円形で、径55m、床面からの深さは0.15mである。古墳時代前期の土器が出土し、床面炉跡付近に台付甕、埴が出土している。埴は正位である。

遺物 1は土師器台付甕である。台部下部を欠く。体部は外反して開く。胴部はやや下脹れの球形である。口縁部は外傾して直線的に立ち上がり、口縁部端はわずかに外反する。口縁部に2段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。2は土師器埴である。底部は平底である。胴部はや扁平な下脹れの球形である。口縁部は外傾して立ち上がり、内弯して口縁部端に至る。口縁部端は内弯する。

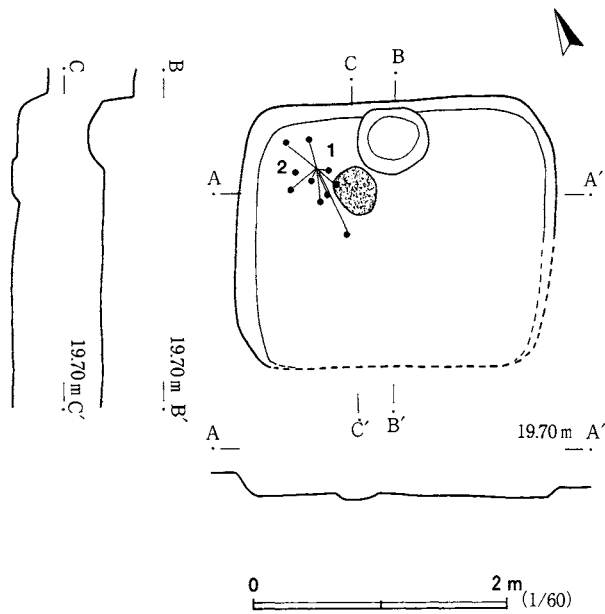
第106表 085号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部 (体部) -底部	胎土	色調	焼成
1	1, 2, 3, 5, 7, 8, 10, 11 12, 16 17, 18	台付甕	口径 11.2 底径 高さ 16.0 最大径14.8	70%	ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ- ナデ-ヘラナデ-ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	黒褐色	良好
2	4, 16	埴	口径 9.2 底径 4.8 高さ 14.95 最大径14.9	86%	ヘラナデの後粗いヘラミガキ-ヘラナデ-ヘラナ デ ヨコナデ・ヘラミガキ-ヘラミガキ-ヘラミガ キ-ヘラケズリ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	褐色 暗褐色	良好

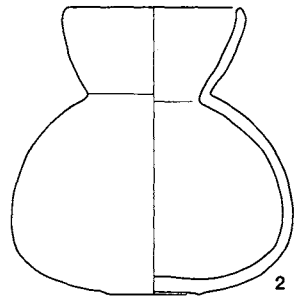
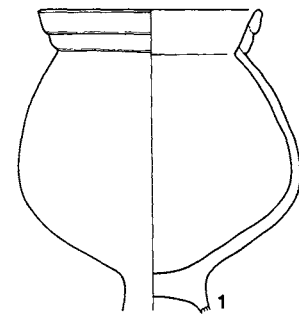
087号住居跡 (第203図 第107表 図版91・123)

遺構 調査区中央部北寄り、042号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.1m×2.95mで、検出面からの深さは0.74mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央北西寄りに検出された。ほぼ円形で、径0.35m、床面への掘り込みは0.05mである。古墳時代前期の土器が出土し、床面から壺胴底部、鉢が出土している。壺は倒位、鉢は正位である。

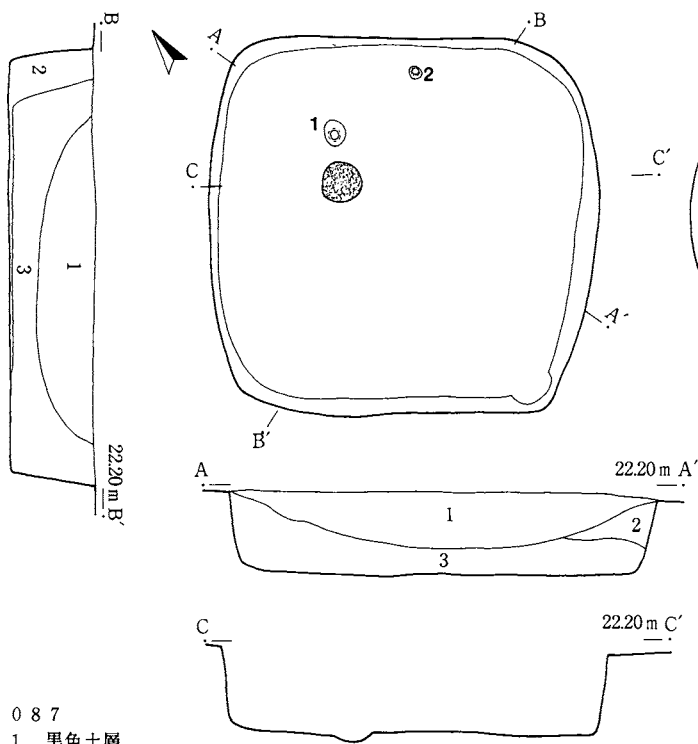
遺物 1は土師器壺の胴底部である。底部は平底である。胴部はやや下脹れの球形である。2は土師器鉢である。底部は平底である。胴部は半球形である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端は外反する。



085号住居跡実測図

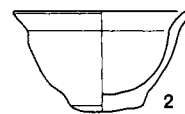
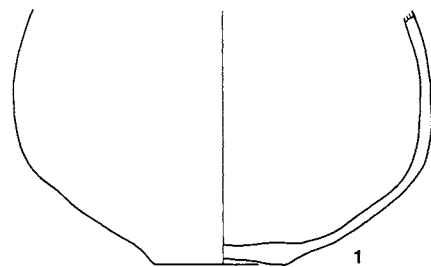


085号住居跡出土遺物



087

- 1 黒色土層
- 2 暗褐色土層
- 3 暗褐色土層 (焼土を含む)



087号住居跡出土遺物



087号住居跡実測図

第203図 085・087号住居跡実測図及び出土遺物

第107表 087号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段－内面、下段－外面） 口縁－胴部（体部）－底部	胎土	色調	焼成
1	1	壺	口径 底径 7.0 高さ 13.2 最大径22.05	40%	－ ーヘラナデーヘラナデ － ーヘラミガキーヘラケズリ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色 赤彩	良好
2	2	鉢	口径 9.1 底径 3.85 高さ 5.2 最大径	97%	ヨコナデーヘラナデー ーヘラナデ ヨコナデーヘラナデー ーヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好

088号住居跡（第204図 第108表 図版92・123）

遺構 調査区中央部北寄り、087号住居跡の南東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.62m×3.52mで、検出面からの深さは0.52mである。床面は平坦である。炉跡、貯蔵穴が検出された。炉跡は床面中央北東寄りに位置している。楕円形で、0.6m×0.43m、床面への掘り込みはほとんどない。貯蔵穴は3基で、各々、床面の北東隅、南東隅、南西隅に位置している。北東隅、南東隅の貯蔵穴は楕円形で、それぞれ、0.5m×0.44m、0.6m×0.63m、床面からの深さは両方とも0.2mである。南西隅の貯蔵穴は円形で、径0.68m、床面からの深さは0.22mである。古墳時代前期の土器が出土し、炉跡内から甕胴部が埋め込まれた状態で出土している。

遺物 1は土師器甕の胴部である。ほぼ球形と思われる。

第108表 088号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段－内面、下段－外面） 口縁－胴部（体部）－底部	胎土	色調	焼成
1	1.2. 3.7.	甕	口径 底径 9.9 高さ 9.9 最大径22.05	20%	ーヘラナデー ー ーハケ調整ー ー	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物	暗褐色 黒褐色	良好

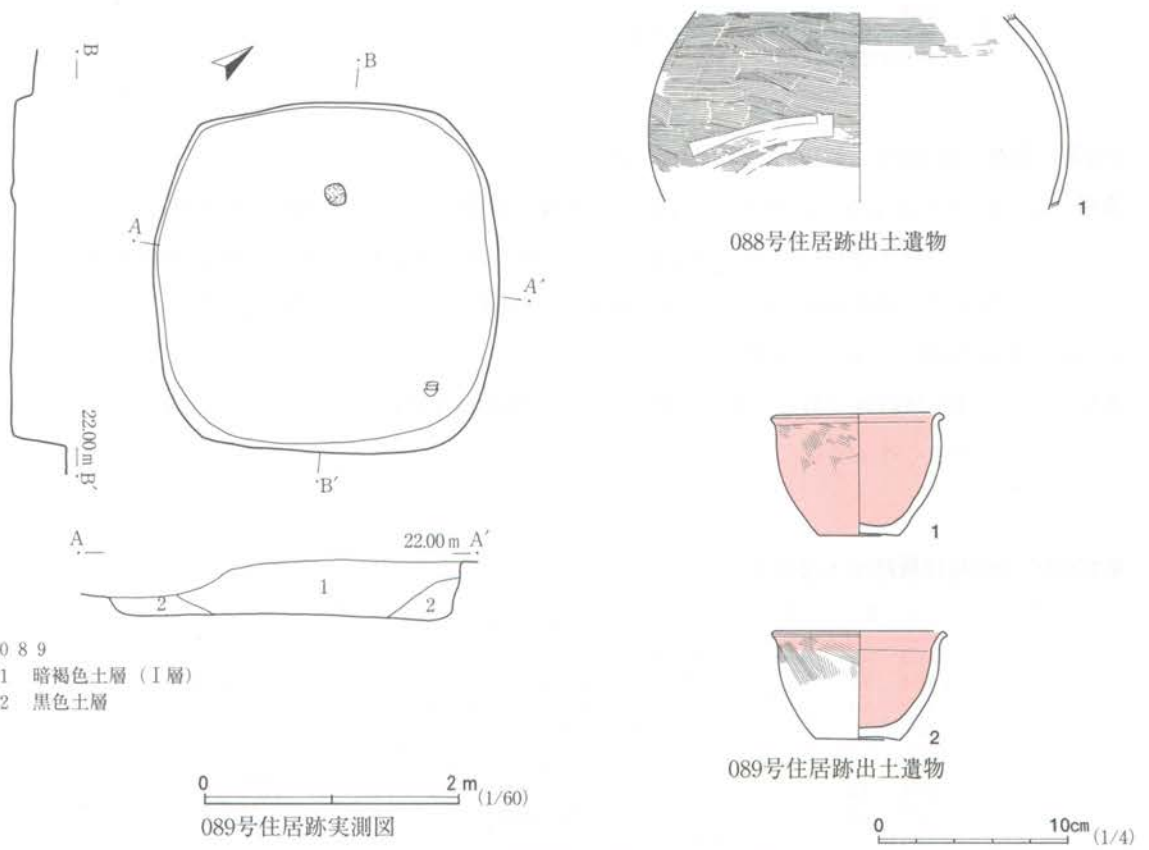
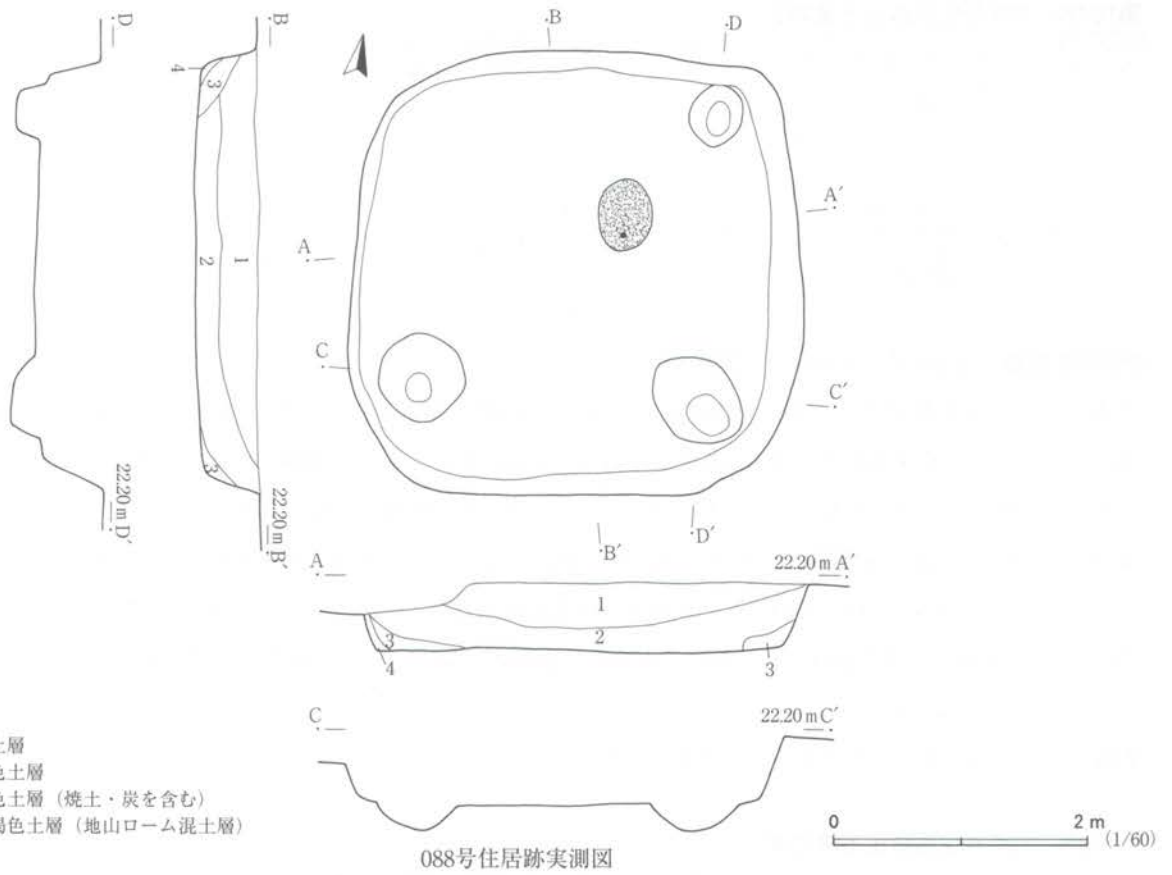
089号住居跡（第204図 第109表 図版93・123）

遺構 調査区中央部北寄り、088号住居跡の南西隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.76m×2.72mで、検出面からの深さは0.45mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央北西よりに検出された。ほぼ円形で、径0.18m、床面への掘り込みは0.05m以下である。古墳時代前期の土器が出土し、床面東隅から鉢が2個体、入れ子の状態で出土している。

遺物 1・2は土師器鉢である。底部は平底である。胴部は半球形である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端はやや強く外反する。

第109表 089号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段－内面、下段－外面） 口縁－胴部（体部）－底部	胎土	色調	焼成
1	1	鉢	口径 8.45 底径 4.2 高さ 6.3 最大径	100%	ハケ調整の後ヘラミガキー ーヘラナデの後ヘラ ミガキーヘラナデの後ヘラミガキ 面取りの後ヘラナデーハケ調整の後ヘラナデーヘ ラケズリの後ヘラナデーヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	赤褐色 赤彩	良好
2	2	鉢	口径 8.75 底径 4.4 高さ 5.65 最大径	100%	ハケ調整の後ヘラミガキー ーヘラナデの後ヘラ ミガキーヘラケズリの後粗いヘラミガキ ヘラナデーハケ調整の後粗いナデーヘラケズリ の後粗いヘラナデーヘラナデ	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 (赤彩) 赤褐色	良好

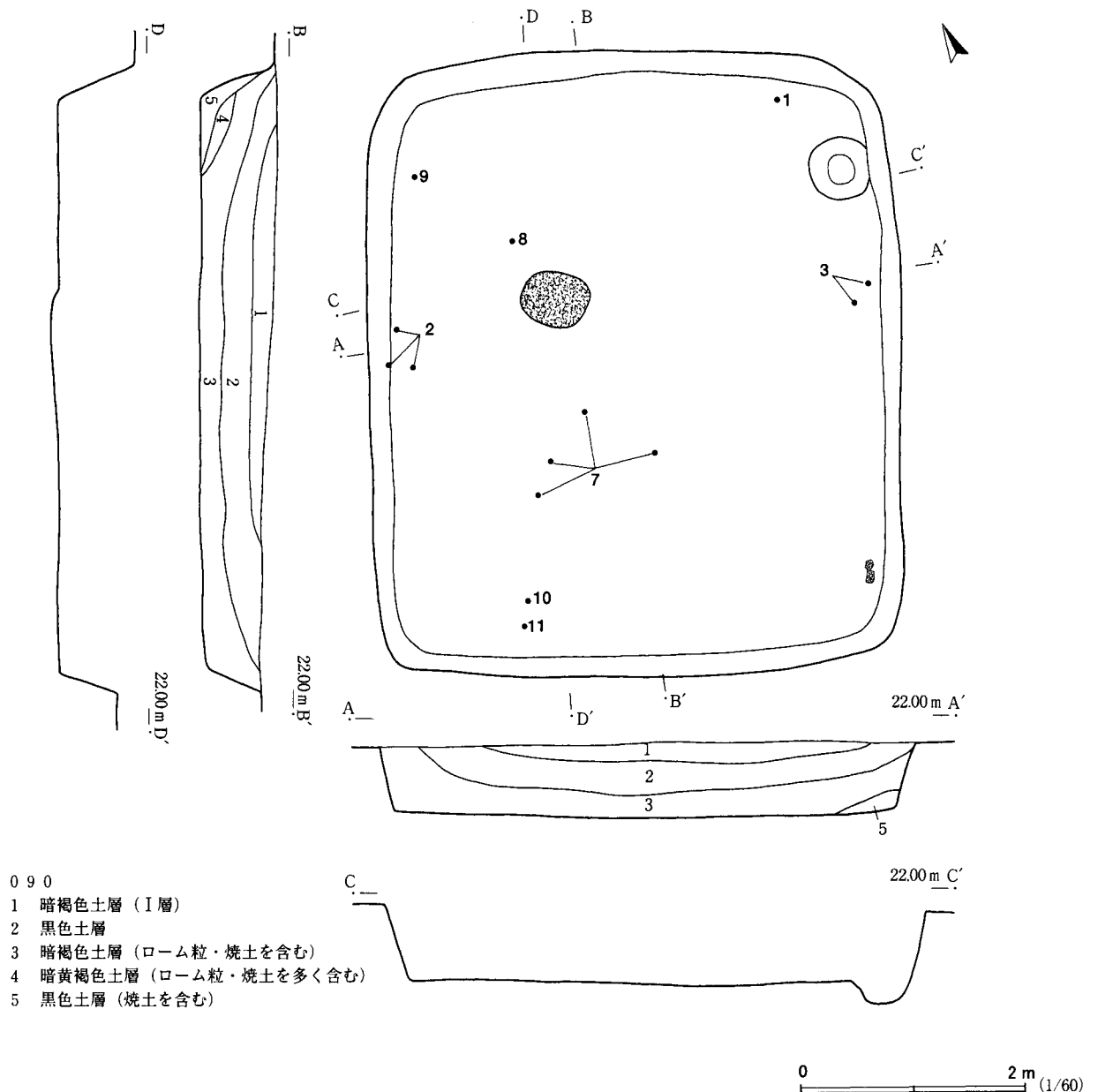


第204図 088・089号住居跡実測図及び出土遺物

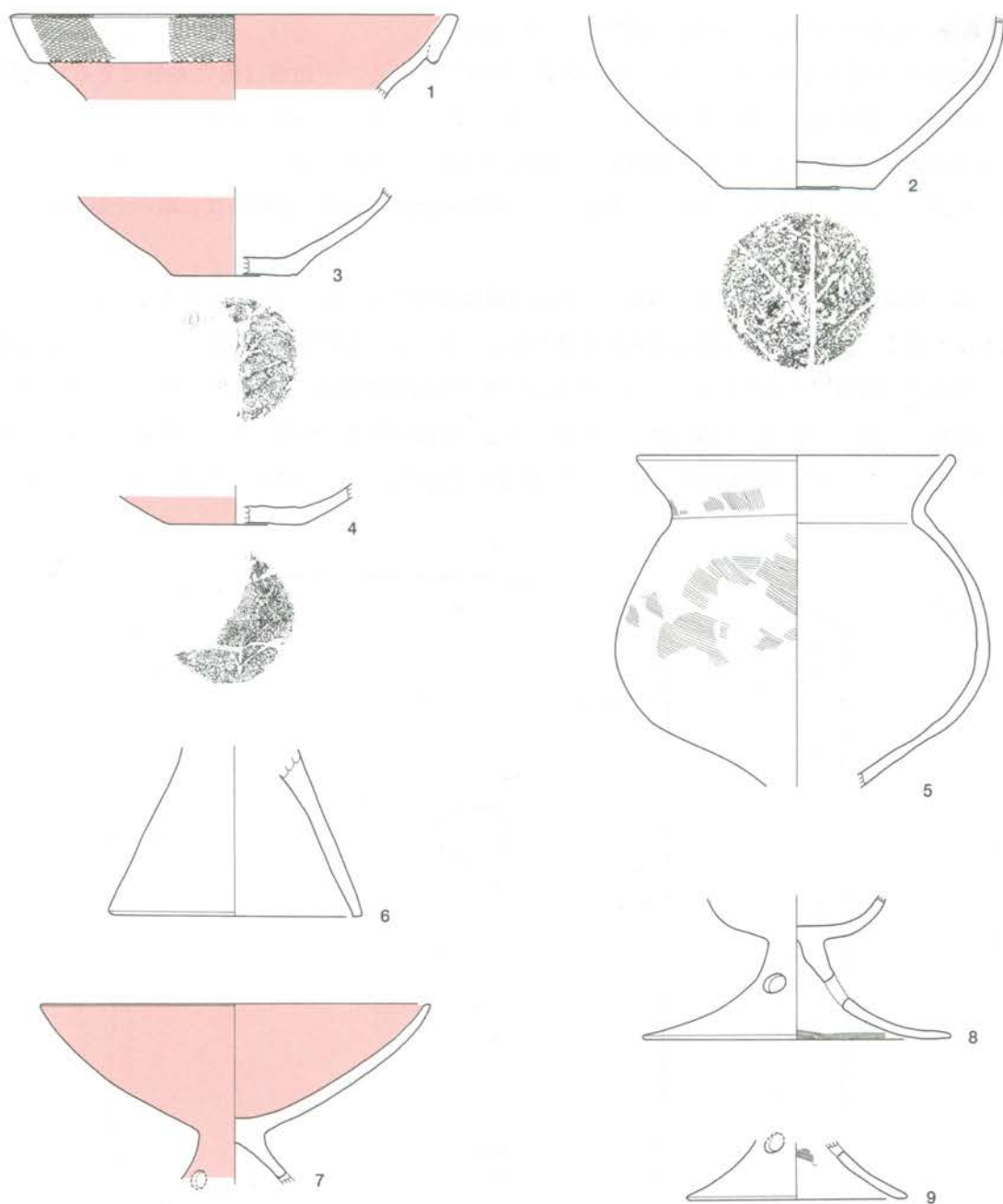
090号住居跡 (第205・206図 第110表 図版93・124・125)

遺構 調査区中央部南寄り、057号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は5.52m×4.87mで、検出面からの深さは0.67mである。床面は平坦である。炉跡、貯蔵穴が検出された。炉跡は床面中央部北寄りに位置している。楕円形で、0.65m×0.5m、床面への掘り込みは0.07mである。貯蔵穴は東隅に位置している。円形で、径0.5m、床面からの深さは0.22mである。古墳時代前期の土器が出土している。

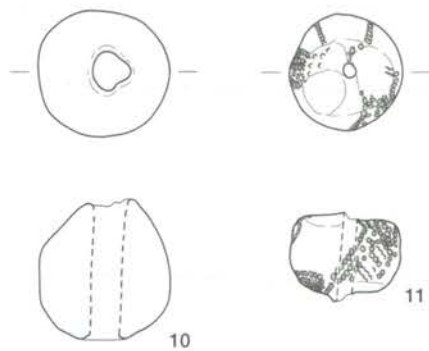
遺物 1は土師器壺の口縁部である。外反し、口縁部端は内弯する。折り返し口縁である。端部に網目状撚糸文が施される。折り返し部下端に刻み目が施される。2～4は土師基壺の胴底部である。底部は平底である。胴部はほぼ球形と思われる。5は土師器台付甕の口胴部である。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外反して立ち上がり、直線的に口縁部端に至る。6は台付甕の台部である。外傾して開き、直線的に端部に至る。7～9は土師器高坏である。7は脚部下半を欠く。坏部は外傾して立ち上がり、緩やかに



第205図 090号住居跡実測図



0 10cm (1/4)



0 5cm (1/2)

第206图 090号住居跡出土遺物

内弯して口縁部に至る。口縁部は内弯する。脚部には円形の透孔が3か所に施される。8は口縁部を欠く。坏部は内弯して立ち上がる。脚部は外反して開き、裾部は大きく開く。脚部には円形の透孔が3か所に施される。9は脚部である。外反し、円形の透孔が3か所に施される。10・11は土玉である。10はやや縦長の球形である。11はほぼ球形で、器面に細竹管による刺突文が施される。

第110表 090号住居跡出土遺物表

挿図 番号	遺物 番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	29, 55 59	壺	口径 24.2 底径 高さ 4.9 最大径	3%	ヘラミガキ - - - 網目状燃糸文・ヘラミガキ - - -	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物微量	赤褐色 赤彩	良好
2	37, 40 41, 42 44, 45 57	壺	口径 底径 8.6 高さ 5.1 最大径	15%	- -ヘラナデの後粗いヘラミガキ-ヘラナデ - -ヘラミガキ-木葉痕	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物微量	暗褐色 赤褐色 赤彩	良好
3	19, 22 24, 55	壺	口径 底径 7.0 高さ 5.1 最大径	10%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラミガキ-ヘラケズリの後ヘラミガ キ・木葉痕	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物微量	暗褐色 赤褐色 赤彩	良好
4	57, 58	壺	口径 底径 7.4 高さ 2.3 最大径	5%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラミガキ-ヘラナデ・木葉痕	砂粒 赤色スコリア粒 白色鉱物 少量	暗褐色 赤褐色 赤彩	良好
5	55, 57 58	台付甕	口径 17.8 底径 高さ 18.85 最大径21.3	60%	ハケ調整の後ヘラナデ-ヘラナデ-ヘラナデ- ナデ・ハケ調整の後ヘラナデ-ハケ調整の後ヘラ ナデ-ヘラケズリの後ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 赤褐色	良好
6	55, 56	台付甕	口径 底径 14.2 高さ 9.55 最大径	10%	- -ヘラナデ-ヨコナデ・面取りの後ナデ - -ヘラナデ-ヨコナデ	砂粒 白色鉱物	褐色 暗褐色	良好
7	5, 6, 7, 9, 11, 12 15, 16 56, 57	高坏	口径 22.1 底径 高さ 5.1 最大径	70%	-ヘラナデの後ヘラミガキ-ヘラナデ- ナデ-ハケ調整の後ヘラミガキ-ヘラミガキ- 透孔3か所	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	赤褐色 赤彩	良好
8	31, 32 33, 34 57, 58	高坏	口径 底径 17.6 高さ 8.2 最大径	50%	-ヘラミガキ-ヘラナデ・ハケ調整-面取りの 後ナデ -ハケ調整の後ヘラミガキ-ヘラミガキ- 透孔3か所	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
9	36, 58	高坏	口径 底径 12.2 高さ 3.3 最大径	15%	- -ハケ調整の後ヘラナデ・ヨコナデ-ヨコ ナデ - -ハケ調整の後ヘラミガキ- 透孔推定3か所	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	褐色 暗褐色	良好
10	4	土玉	重さ 35.39 g 孔径上 1.0 下 1.2 高さ 2.7 最大径 3.4	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物	褐色	良好
11	2	土玉	重さ 19.69 g 孔径上 0.3 下 0.4 高さ 2.35 最大径 2.95	100%	- - - -ナデの後刺突文- -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色	良好

091号住居跡 (第207図 図版94)

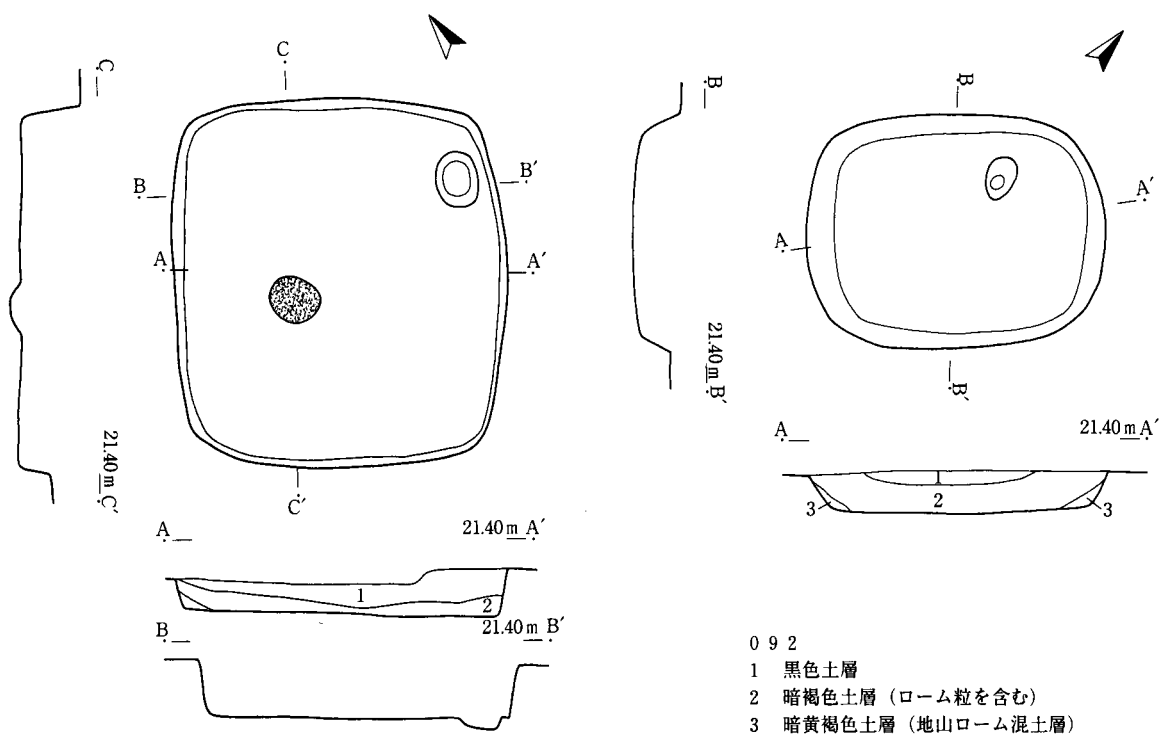
遺構 調査区中央部南東寄りに位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.85m×2.62mで、検出面からの深さは0.37mである。床面は平坦で、中央部が堅く締まっている。炉跡、貯蔵穴が検出された。炉跡は床面中央部西寄りに位置している。楕円形で、0.4m×0.35m、床面への掘り込みは0.1mである。貯蔵穴は

東隅に検出された。楕円形で、0.44m×0.33m、床面からの深さは0.1mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

092号住居跡 (第207図 図版94)

遺構 調査区中央部南寄り、091号住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.37m×

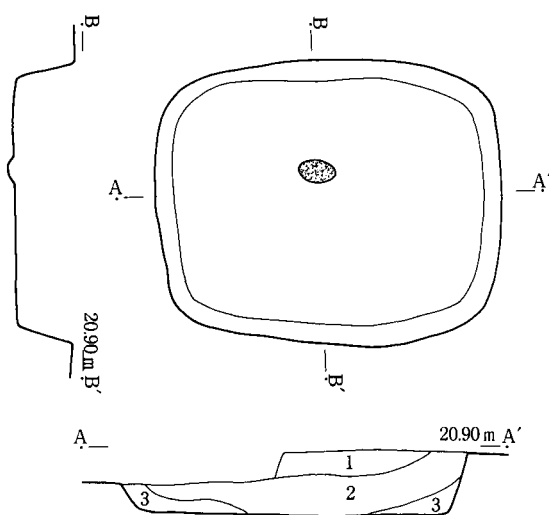


- 092
- 1 黒色土層
 - 2 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

092号住居跡実測図

- 091
- 1 黒色土層
 - 2 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

091号住居跡実測図



- 093
- 1 黒色土層
 - 2 暗褐色土層 (ローム粒・焼土を含む)
 - 3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)

093号住居跡実測図



第207図 091・092・093号住居跡実測図

1.82mで、検出面からの深さは0.34mである。床面は平坦である。ピットが床面中央北寄りに検出された。楕円形で、0.37m×0.24m、床面からの深さは0.5mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

093号住居跡 (第207図 図版94)

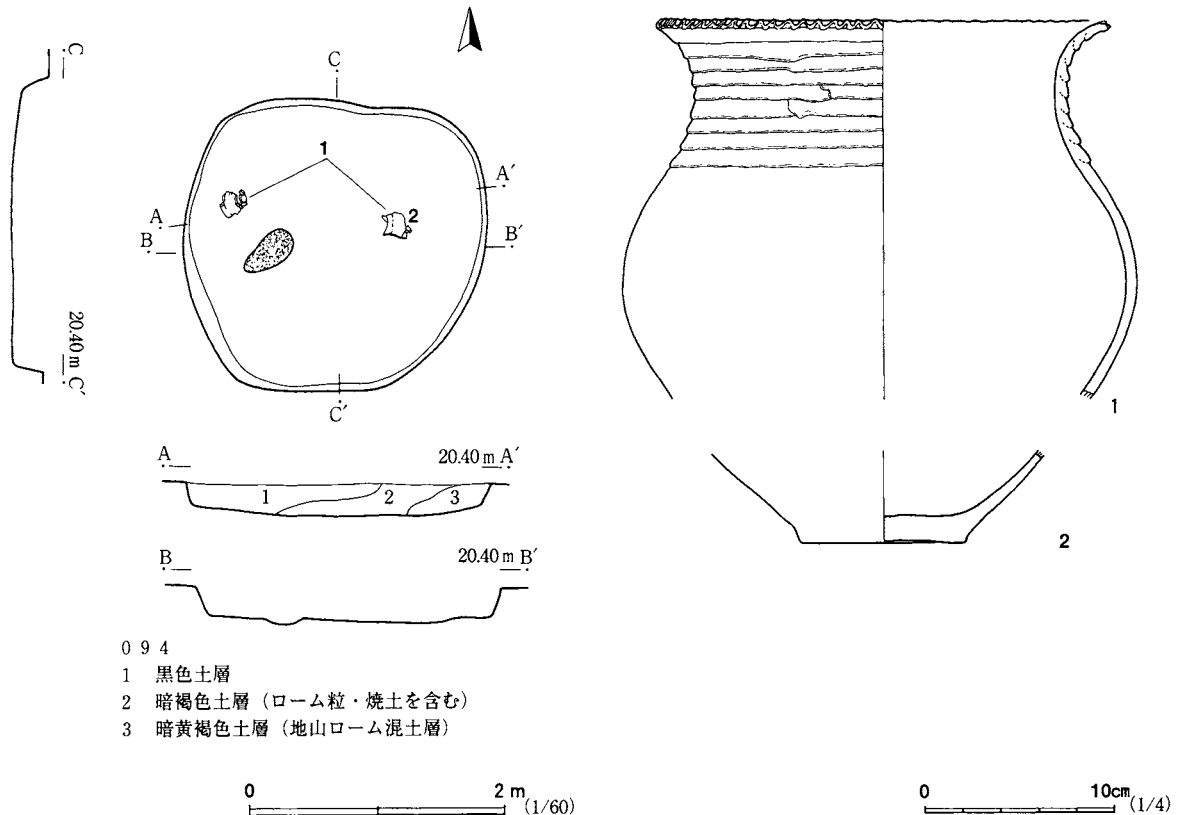
遺構 調査区南東部に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は2.76m×2.23mで、検出面からの深さは0.44mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央北寄りに検出された。楕円形で、0.3m×0.17m、床面への掘り込みは0.05mである。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 細片のため、図示できなかった。

094号住居跡 (第208図 第111表 図版95・125)

遺構 調査区南東部に位置している。平面形はやや不整な隅丸方形である。規模は2.39m×2.30mで、検出面からの深さは0.25mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央西寄りに検出された。楕円形で、0.43m×0.25m、床面への掘り込みは0.05mである。古墳時代前期の土器が出土し、床面から甕の破片が投棄された状態で出土している。

遺物 1は土師器甕の口胴部である。胴部はやや扁平な球形である。口縁部は外反して立ち上がり、口縁部端に至る。口縁部端は外反し、刻み目が施される。口縁部に9段の粘土紐の輪積み成形痕が残っているが、器面の装飾のために残したと考えられる。2は土師器甕の胴底部である。胴部大半を欠く。底部は平底



094号住居跡実測図

094号住居跡出土遺物

第208図 094号住居跡実測図及び出土遺物

である。胴部は球形と思われる。なお、1・2は接合しないが、同一個体と考えられる。

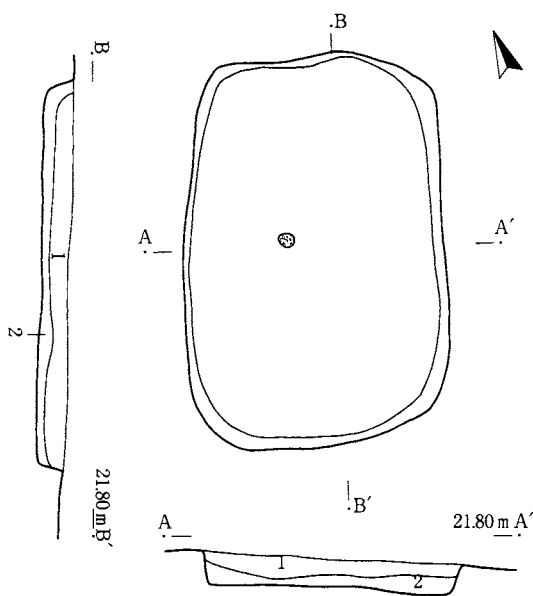
第111表 094号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法 (上段-内面、下段-外面) 口縁-胴部(体部)-底部	胎土	色調	焼成
1	1.9, 10	甕	口径 23.25 底径 19.7 高さ 19.7 最大径 27.05	35%	-ヘラナデ- 刻み-ナデの後ヘラナデ・ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 微量	褐色	良好
2	5.6, 8.9, 10	甕	口径 底径 8.7 高さ 4.8 最大径	10%	-ヘラナデ-ヘラナデ -ヘラナデ-ヘラナデ	砂粒 白色鉱物	暗褐色 赤褐色	良好

095号住居跡 (第209図 図版95)

遺構 調査区中央部南寄り、057住居跡の東隣に位置している。平面形は隅丸方形である。規模は3.07m×2.08mで、検出面からの深さは0.20mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央部西寄りに検出された。円形で、径0.14m床面への掘り込みはほとんどない。古墳時代前期の土器が出土している。

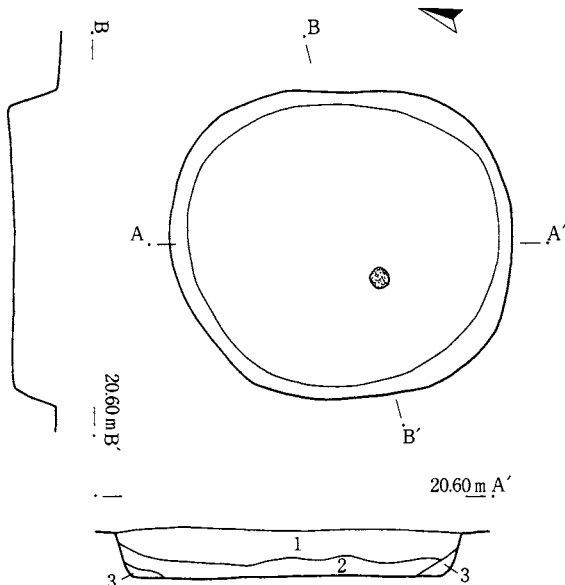
遺物 細片のため、図示できなかった。



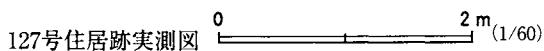
- 0 9 5
1 黒色土層
2 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)



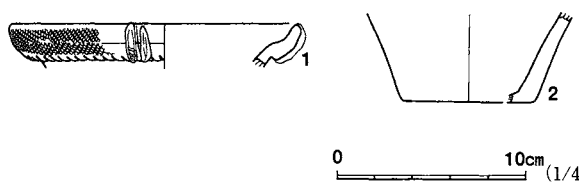
095号住居跡実測図



- 1 2 7
1 黒色土層 (II a層)
2 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
3 暗黄褐色土層 (地山ローム混土層)



127号住居跡実測図



127号住居跡出土遺物

第209図 095・127号住居跡実測図及び127号住居跡出土遺物

127号住居跡（第209図 第112表 図版95）

遺構 調査区南東部に位置している。平面形は円形に近い方形である。規模は2.75m×2.39mで、検出面からの深さは0.36mである。床面は平坦である。炉跡が床面中央部南西寄りに検出された。古墳時代前期の土器が出土している。

遺物 1は土師器壺の口縁部である。折り返しの有段口縁である。折り返し部下端に刻み目が施され、棒状浮文が施される。2は土師器壺甕の胴底部である。胴部大半を欠く。底部は平底である。胴部は外傾して立ち上がる。やや長胴と思われる。1・2は調整、胎土から同一個体と考えられる。

第112表 127号住居跡出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎土	色調	焼成
1	2, 3.	壺	口径 16.2 底径 2.3 高さ 2.3 最大径	5%	ヨコナデー - - 網目状燃糸文・棒状浮文・刻み目 - - - 2と同一個体と思われる。	砂粒 白色鉱物	明褐色	良好
2	1	壺	口径 6.7 底径 9.6 高さ 最大径	5%	- -ヘラナデ-ヘラナデ - -ヘラナデ-ヘラケズリ	砂粒 白色鉱物	明褐色	良好

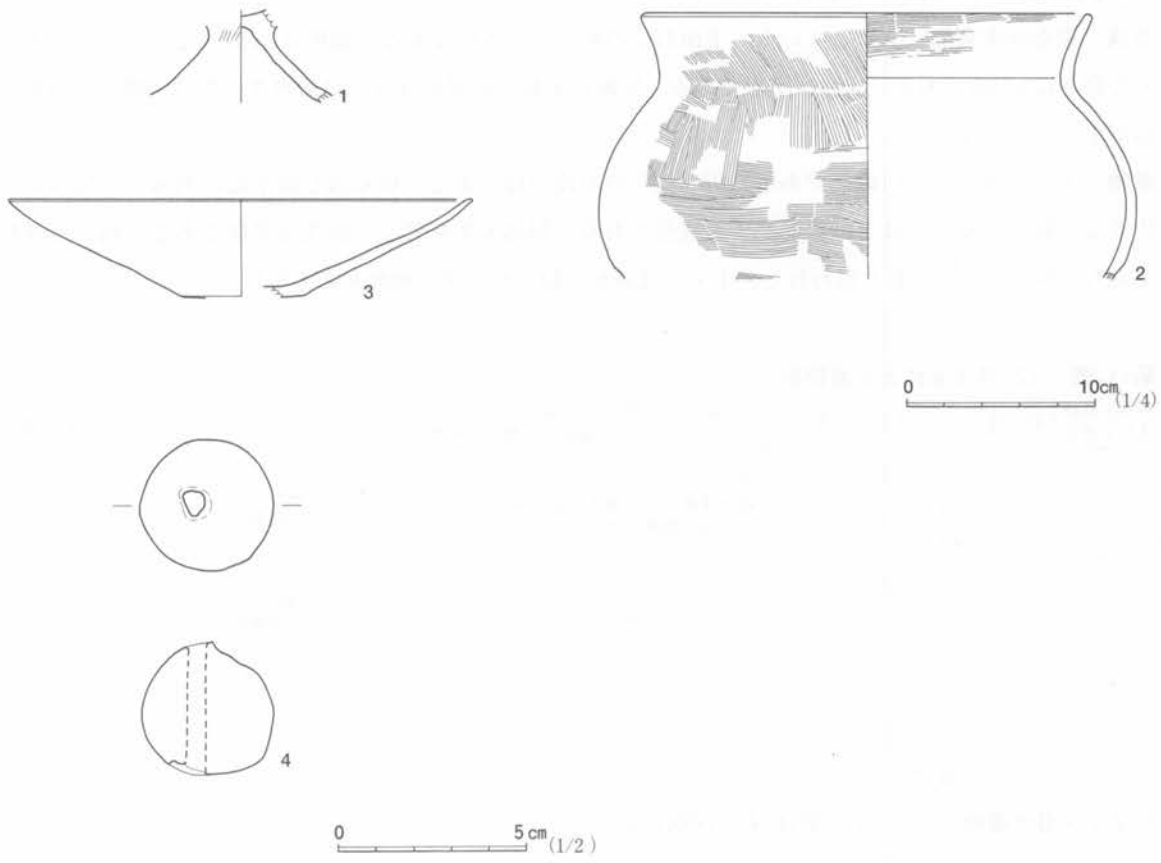
(2) その他の出土遺物

グリッド出土遺物（第210図 第113表 図版125）

1は土師器高坏の脚部である。大きく外反して広がり、坏部との接合部に、ハケ目が施される。2は土師器甕の口胴部である。やや偏平な球形の胴部から口縁部が外反して立ち上がる。口縁はやや角張っている。外面及び口縁部内面にハケ目が施される。3は土師器高坏の坏部である。脚部との接合部から大きく広がって立ち上がり、直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに内弯する。4は土玉である。ほぼ球形である。

第113表 グリッド出土遺物表

挿図番号	遺物番号	器種	法量 cm	遺存度	成形・調整方法（上段-内面、下段-外面） 口縁-胴部（体部）-底部	胎土	色調	焼成
1	11C-13	高坏	口径 5.0 底径 高さ 最大径	30%	-坏部ヘラナデ-脚部ヘラケズリの後粗いヘラナデ- - -ハケ調整の後ヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒 少量	暗褐色	良好
2	13J-3, 4.	甕	口径 23.4 底径 14.2 高さ 28.5 最大径	10%	ハケ調整の後粗いヘラミガキ-ヘラナデの後粗いヘラミガキ- ナデ・ハケ調整の後ヘラナデ-ハケ調整の後粗いヘラナデ-	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 黒褐色	良好
3	15H-4	高坏	口径 24.4 底径 5.15 高さ 最大径	20%	ヘラミガキ- - - ナデ・ヘラミガキ-ヘラナデ- -	砂粒 白色鉱物 赤色スコリア粒	暗褐色 褐色	良好
4	11D-2	土玉	重さ 37.80 g 孔径上 0.7 下 0.6 高さ 3.45 最大径 3.45	100%	- - - -ナデ- -	砂粒 白色鉱物少量 赤色スコリア粒	暗褐色	良好



第210図 グリッド出土遺物

4 近世ほか

近世以降と考えられる遺構として、炭窯が検出されている。また、時期は不明確であるが、溝、土坑、粘土採掘跡が検出されている。

(1) 炭 窯

炭窯は15基検出され、調査区の西部を除き、ほぼ全体に分布している。木炭以外の遺物は検出されなかった。

004号炭窯（第212図 図版126）

遺構 調査区の南西端部、斜面際に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は1.67m×1.58m、検出面からの深さは0.82mである。覆土中に木炭を多量に含む層が確認されている。

006号炭窯（第212図 図版126）

遺構 調査区の北部、舌状台地北側の緩斜面際に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は1.94m×1.79m、検出面からの深さは0.88mである。覆土中に木炭を多量に含む層が確認されている。

007号炭窯（第212図 図版126）

遺構 調査区の南西部に位置している。008号炭窯の北隣である。050号住居跡と重複している。平面形は隅丸長方形で、各壁の中央部に煙道が掘り込まれている。規模は1.84m×1.74m、検出面からの深さは1.19mである。覆土中に木炭を多量に含む層が確認されている。

008号炭窯（第212図 図版126）

遺構 調査区の南西部に位置している。007号炭窯の南隣である。049号住居跡と重複している。平面形は隅丸長方形で、北東壁及び南西壁の中央部に煙道が掘り込まれている。規模は2.0m×1.73m、検出面からの深さは1.15mである。覆土中に木炭を多量に含む層が確認されている。

009号炭窯（第212図 図版126）

遺構 調査区の南部に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は1.7m×1.64m、検出面からの深さは0.87mである。覆土中に木炭を多量に含む層が確認されている。

010号炭窯（第212図 図版126）

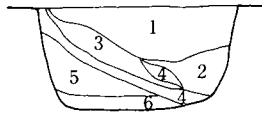
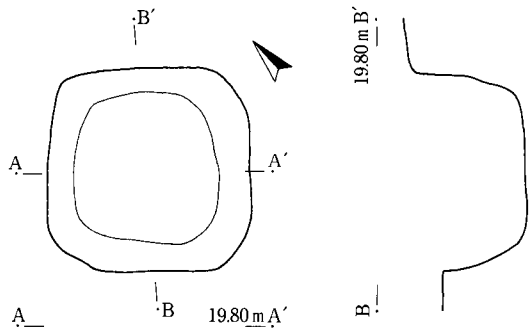
遺構 調査区の南西部に位置している。078号炭窯の北東隣である。平面形は隅丸長方形で、規模は1.63m×1.57m、検出面からの深さは0.93mである。底面直上に木炭を多量に含む層が確認されている。

078号炭窯（第213図 図版126）

遺構 調査区の南西端部、斜面際に位置している。010号炭窯の南西隣である。平面形は隅丸長方形で、規模は1.72m×1.41m、検出面からの深さは0.78mである。底面直上に木炭を多量に含む層が確認されている。

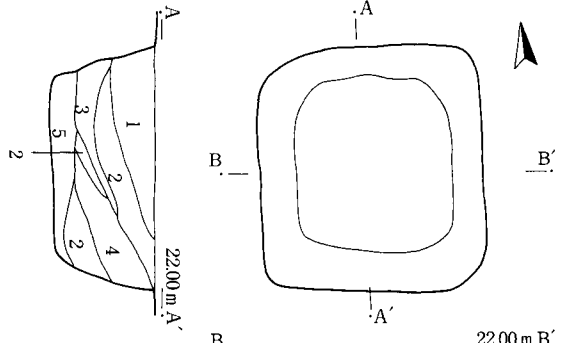


第211图 近世はた遺構分布图



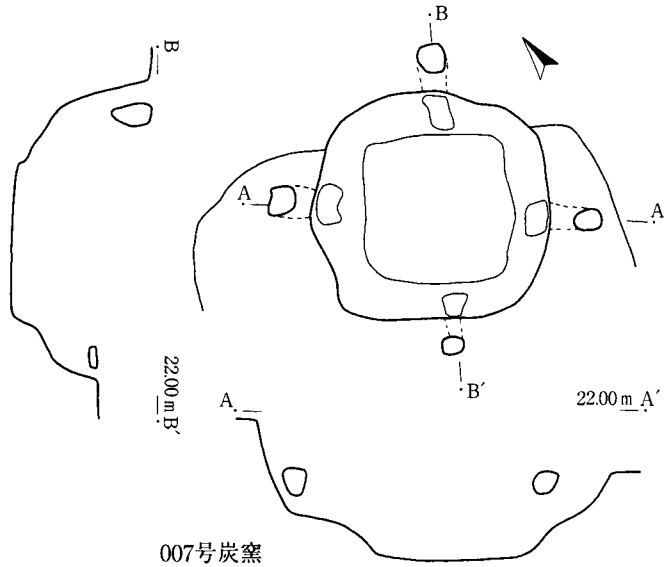
004号炭窯

- 0 4 4
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 褐色土層
 - 3 黒褐色土層 (炭を多く含む)
 - 4 木炭充填層
 - 5 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
 - 6 黒色土層

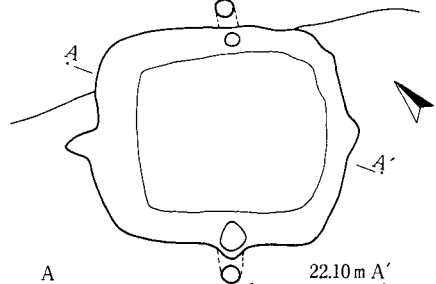


- 0 0 6
- 1 暗黄褐色土層 (ロームブロックを含む)
 - 2 木炭充填層
 - 3 黄褐色土層 (ロームブロックを多く含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (炭・ロームブロックを含む)
 - 5 暗褐色土層

006号炭窯

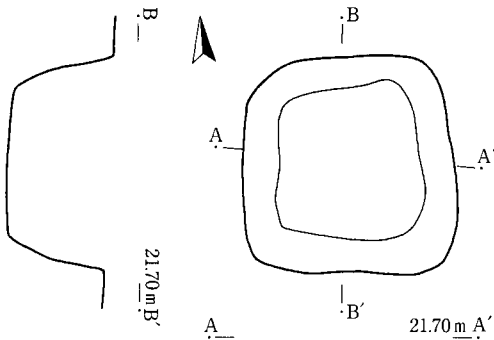


007号炭窯



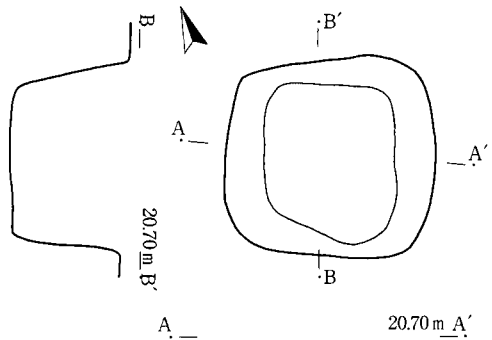
- 0 0 8
- 1 暗褐色土層 (I層)
 - 2 暗黄褐色土層 (炭・ロームブロックを含む)
 - 3 黄褐色土層 (ロームブロックを多く含む)
 - 4 木炭充填層

008号炭窯



- 0 0 9
- 1 暗黄褐色土層 (ロームブロックを含む)
 - 2 黒色土層
 - 3 黒褐色土層 (ロームブロックを含む)
 - 4 木炭充填層
 - 5 暗褐色土層

009号炭窯

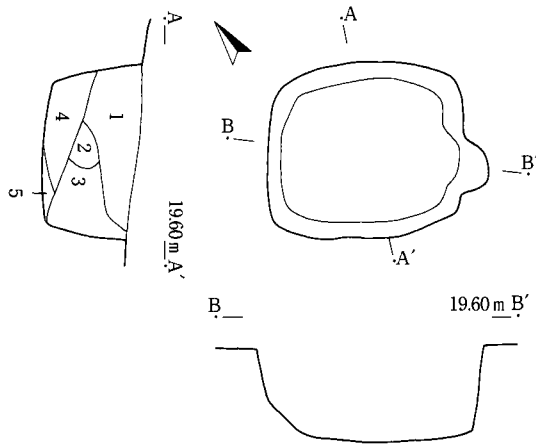


- 0 1 0
- 1 木炭充填層
 - 2 暗褐色土層
 - 3 暗黄褐色土層 (ロームブロックを含む)
 - 4 暗黄褐色土層 (炭・ローム粒を含む)

010号炭窯



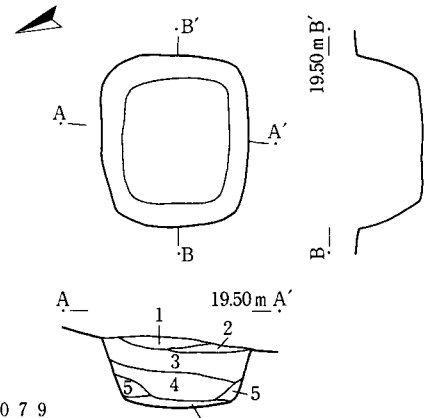
第212図 004・006~010号炭窯実測図



078

- 1 暗黄褐色土層 (ロームブロック・炭・焼土を含む)
- 2 黒色土層 (炭・焼土を含む)
- 3 黄褐色土層 (ローム粒主体、炭・焼土を含む)
- 4 黒色土層 (木炭充填層)
- 5 黒色土層 (炭を多く含む)

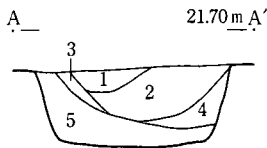
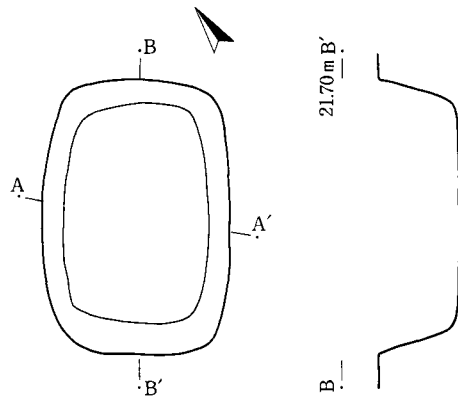
078号炭窯



079

- 1 暗褐色土層 (I層)
- 2 黒色土層 (炭を多く含む)
- 3 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
- 4 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
- 5 暗褐色土層 (ロームブロックを含む)
- 6 暗褐色土層 (炭を含む)

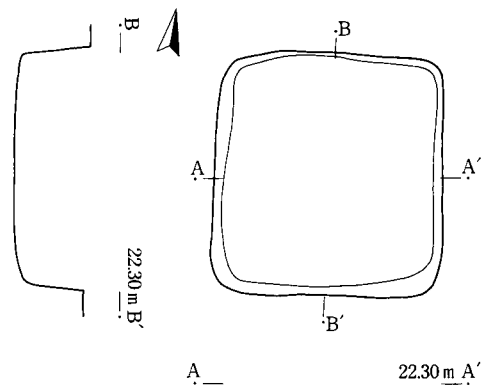
079号炭窯



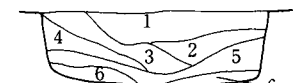
080

- 1 茶褐色土層 (ロームブロックを含む)
- 2 黒色土層 (炭を多く含む)
- 3 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
- 4 暗褐色土層 (炭・ローム粒を含む)
- 5 黒褐色土層 (炭・ロームブロックを含む)

080号炭窯



22.30m A'



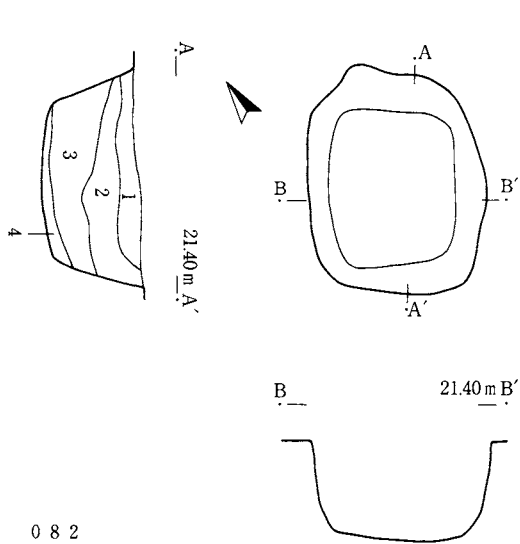
081

- 1 暗褐色土層 (ロームブロックを含む)
- 2 暗褐色土層 (炭・ロームブロックを含む)
- 3 暗黄褐色土層 (ロームブロックを多く含む)
- 4 黄褐色土層 (ローム粒充填層)
- 5 黒色土層 (木炭充填層)
- 6 黒褐色土層

081号炭窯

0 2m (1/60)

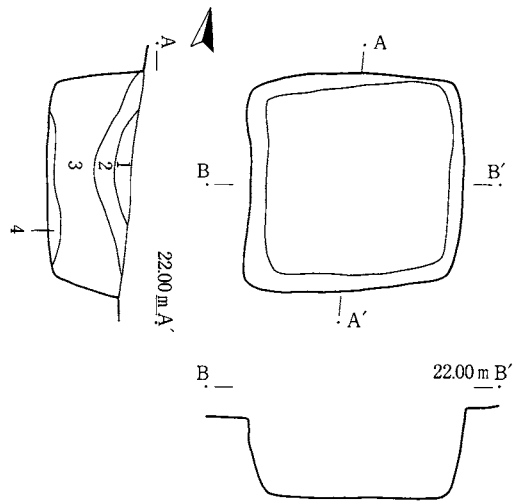
第213図 078~081号炭窯実測図



082

- 1 暗褐色土層 (I層)
- 2 黒褐色土層
- 3 暗褐色土層 (ロームブロックを含む)
- 4 黒色土層 (木炭充填層)

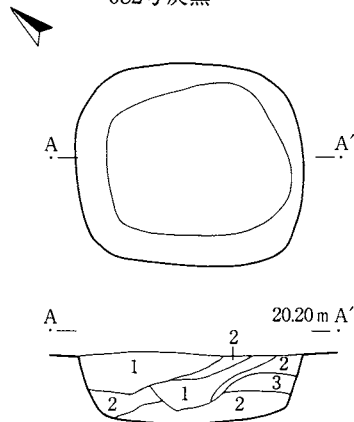
082号炭窯



083

- 1 黒色土層 (木炭充填層)
- 2 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
- 3 暗黄褐色土層 (ロームブロックを多く含む)
- 4 黒褐色土層

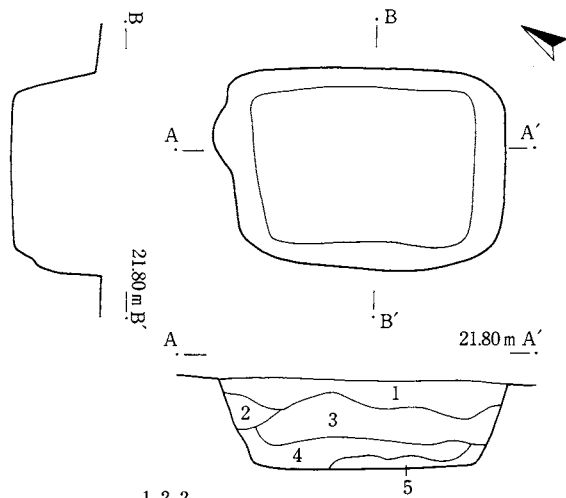
083号炭窯



097

- 1 暗黄褐色土層 (ローム粒を多く含む)
- 2 黒色土層 (炭を多く含む)
- 3 暗褐色土層

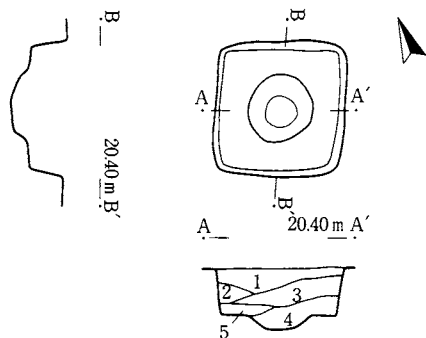
097号炭窯



122

- 1 暗黄褐色土層 (ロームブロックを多く含む)
- 2 暗褐色土層 (焼土を含む)
- 3 暗赤褐色土層 (焼土を多く含む)
- 4 赤褐色土層 (焼土主体層)
- 5 黒色土層 (炭を多く含む)

122号炭窯



121

- 1 暗褐色土層 (炭を含む)
- 2 暗褐色土層 (ローム粒を含む)
- 3 黒色土層 (炭を含む)
- 4 黒色土層 (炭・焼土を含む)
- 5 暗褐色土層 (炭・焼土を含む)

121号炭窯

第214図 082・083・097・121・122号炭窯実測図



079号炭窯（第213図 図版127）

遺構 調査区の南端部、斜面際に位置している。078号炭窯の東隣である。平面形は隅丸長方形で、規模は1.40m×1.17m、検出面からの深さは0.55mである。底面直上に木炭を多量に含む層が確認されている。

080号炭窯（第213図 図版127）

遺構 調査区の中央部やや西に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は2.13m×1.97m、検出面からの深さは0.63mである。底面直上に木炭を多量に含む層が確認されている。

081号炭窯（第213図 図版127）

遺構 調査区のほぼ中央部に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は1.93m×1.82m、検出面からの深さは0.56mである。覆土中に木炭を多量に含む層が確認されている。

082号炭窯（第214図 図版127）

遺構 調査区の南部に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は1.8m×1.39m、検出面からの深さは0.80mである。底面直上に木炭を多量に含む層が確認されている。

083号炭窯（第214図 図版127）

遺構 調査区の南端部、斜面際に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は1.74m×1.7m、検出面からの深さは0.68mである。覆土上面に木炭を多量に含む層、底面上に木炭層が確認されている。

097号炭窯（第214図 図版127）

遺構 調査区の南東端部に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は1.8m×1.57m、検出面からの深さは0.57mである。底面直上に木炭を多量に含む層が確認されている。

121号炭窯（第214図 図版127）

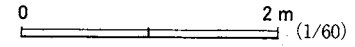
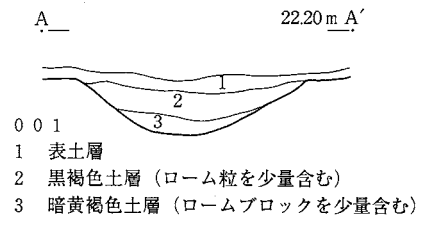
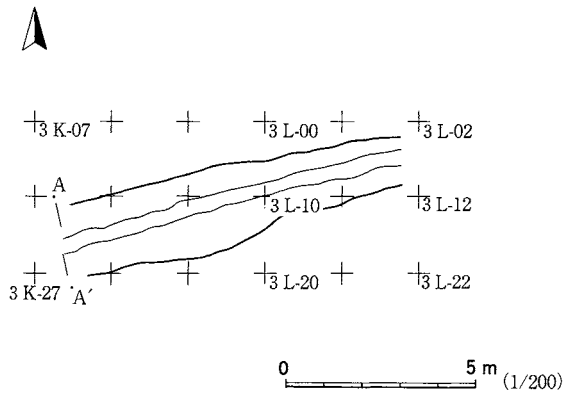
遺構 調査区の南東部に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は1.09m×1.03m、検出面からの深さは0.5mである。底面直上に焼土、木炭を多量に含む層が確認されている。底面中央にピットが検出された。円形で、径0.5m、底面からの深さは0.12mである。

122号炭窯（第214図 図版127）

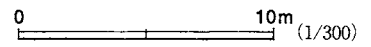
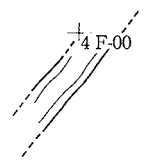
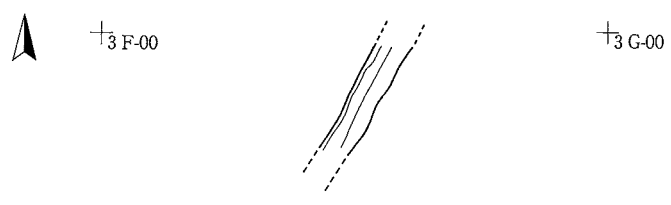
遺構 調査区の東部やや南に位置している。平面形は隅丸長方形で、規模は2.32m×1.57m、検出面からの深さは0.68mである。底面直上に木炭を多量に含む層が確認されている。

(2) 溝

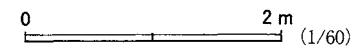
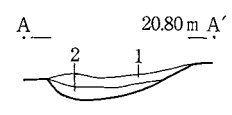
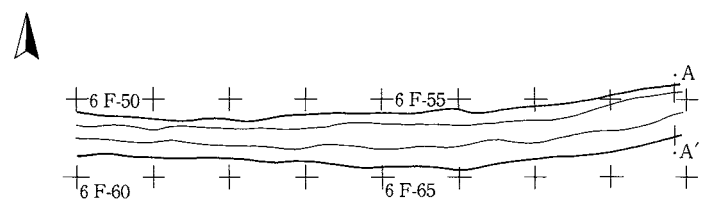
溝は3条検出され、調査区北端部の浅い谷の周辺に位置している。



001号溝実測図



002号溝実測図



003号溝実測図

第215図 001~003号溝実測図

001号溝 (第215図 図版128)

遺構 調査区の北端部、西から入り込む浅い谷の最奥部の斜面に位置している。規模は、検出長10.0m、幅1.0m、検出面からの深さは0.35mである。遺物は検出されなかった。

002号溝 (第215図 図版128)

遺構 調査区の北端部、西から入り込む浅い谷の谷口部の北側斜面に位置している。規模は、検出長30.0m、幅1.2m、検出面からの深さは0.22mである。遺物は検出されなかった。

003号溝 (第215図 図版128)

遺構 調査区の北端部、西から入り込む浅い谷の谷口部の南側斜面際に位置し、斜面にほぼ平行している。規模は、検出長12.0m、幅1.1m、検出面からの深さは0.18mである。遺物は検出されなかった。

(3) 土 坑

土坑は21基検出された。調査区の南半部に分布する。特に、中央部及び南東部に数基が集中している。遺物が検出された土坑もあるが、細片であり、縄文土器、土師器などが混在しているため、時期の決定は困難である。しかし、炭窯の分布と類似しているため、同時期(中・近世)の可能性はある。

017号土坑 (第216図 図版129)

遺構 調査区の西端部、斜面際に位置している。平面形は楕円形で、規模は0.63m×0.57m、検出面からの深さは0.37mである。覆土下部に焼土を多く含む土層が確認されている。遺物が出土している。

051号土坑 (第216図 図版129)

遺構 調査区の中央部やや南に位置している。052号土坑の東隣である。平面形は楕円形で、規模は0.97m×0.89m、検出面からの深さは1.4mである。遺物は検出されなかった。

052号土坑 (第216図 図版129)

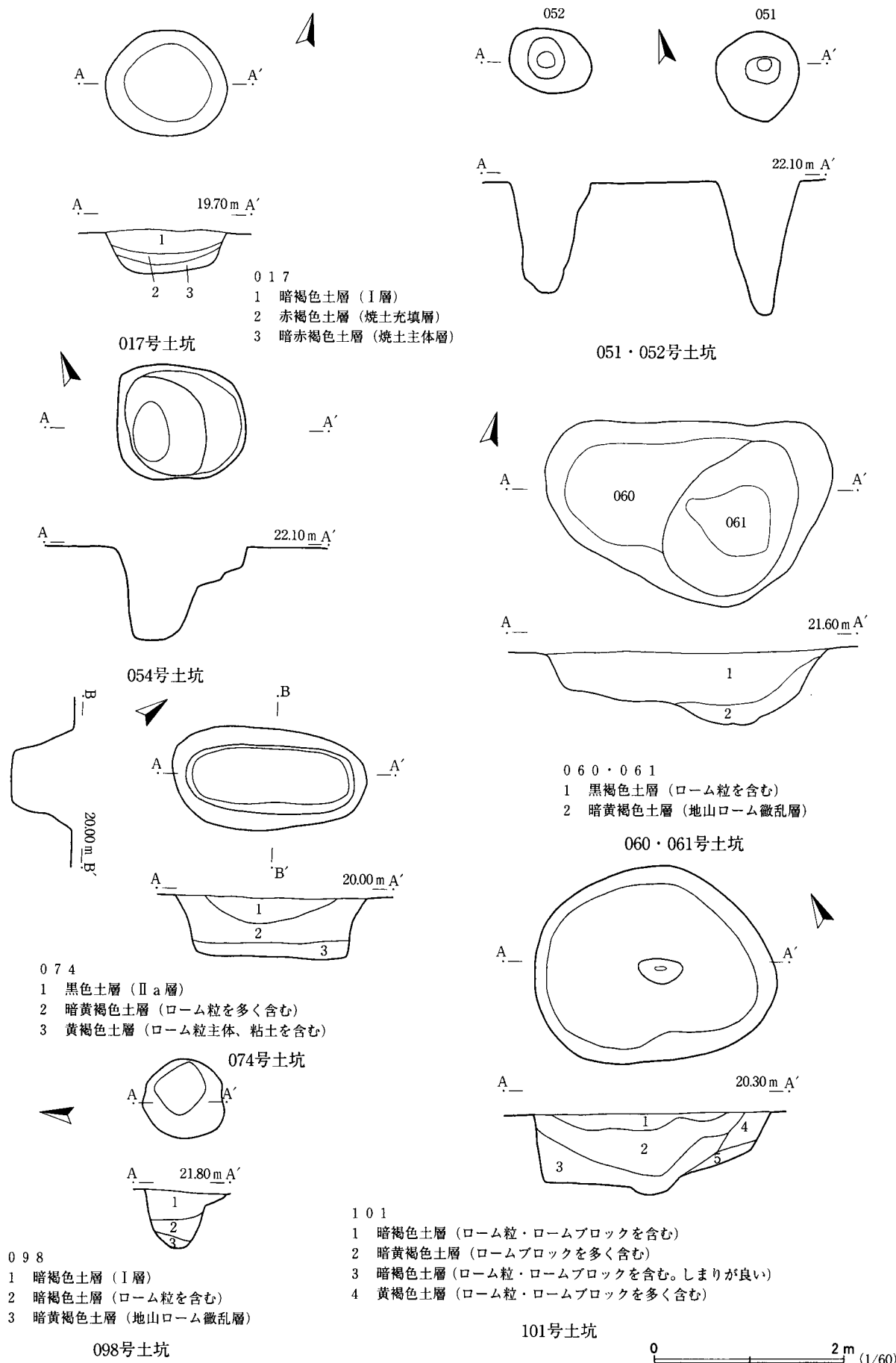
遺構 調査区の中央部やや南に位置している。051号土坑の西隣である。平面形は楕円形で、規模は0.9m×0.65m、検出面からの深さは1.15mである。遺物は検出されなかった。

054号土坑 (第216図 図版129)

遺構 調査区の中央部やや南に位置している。051号土坑の南隣である。平面形は楕円形で、規模は1.35m×1.2m、検出面からの深さは0.93mである。途中に段があり、段までの深さは0.4mである。遺物は検出されなかった。

060号土坑 (第216図)

遺構 調査区の南部に位置している。061号土坑と重複している。土層断面から060号土坑が新しい。平面形は楕円形で、規模は3.05m×1.62m、検出面からの深さは0.52mである。遺物は検出されなかった。



第216図 017・051・052・054・060・061・074・098・101号土坑実測図

061号土坑（第216図）

遺構 調査区の南部に位置している。060号土坑と重複している。土層断面から061号土坑が古い。平面形は楕円形で、規模は2.22m×1.9m、検出面からの深さは0.78mである。遺物は検出されなかった。

074号土坑（第216図 図版129）

遺構 調査区の西部に位置している。平面形は楕円形で、規模は2.03m×1.07m、検出面からの深さは0.67mである。遺物は検出されなかった。

098号土坑（第216図 図版129）

遺構 調査区の南部に位置している。平面形はほぼ円形で、径0.9m、検出面からの深さは0.6mである。遺物は検出されなかった。

101号土坑（第216図 図版129）

遺構 調査区の南東端部に位置している。平面形は楕円形で、規模は2.55m×2.03m、検出面からの深さは0.97mである。遺物が出土している。

102号土坑（第217図）

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は2.21m×1.87m、検出面からの深さは0.13mである。底面北東壁際にピットが検出されている。径0.26m、底面からの深さは0.2mである。遺物が出土している。

103号土坑（第217図）

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は2.53m×2.35m、検出面からの深さは0.3mである。底面南東部にピットが検出されている。径0.38m、底面からの深さは0.12mである。遺物が出土している。

104号土坑（第217図）

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は1.86m×1.5m、検出面からの深さは0.33mである。東壁中央にピットが検出されている。径0.5m、掘り込み面からの深さは0.18mである。遺物は検出されなかった。

105号土坑（第217図）

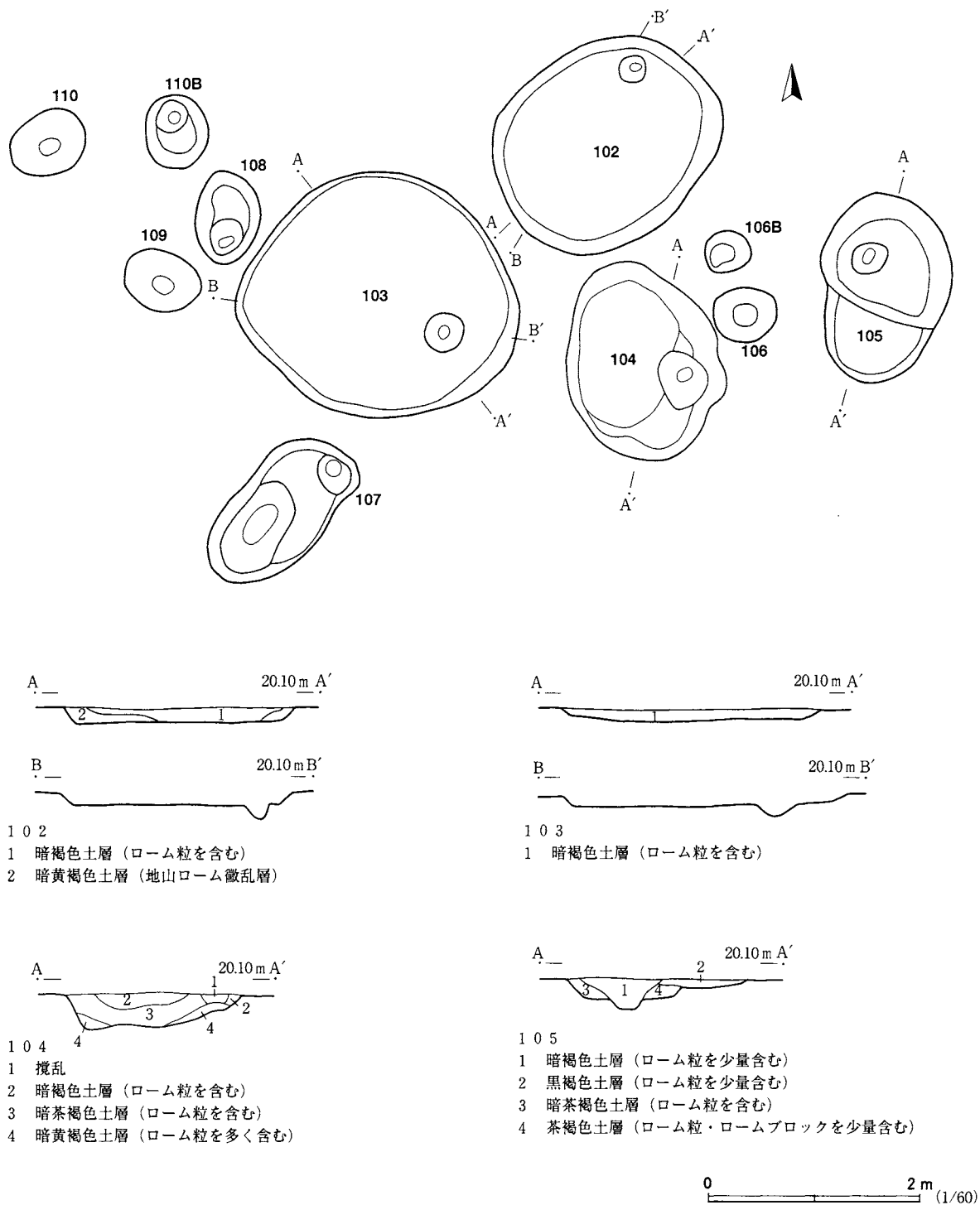
遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は1.81m×1.29m、検出面からの深さは0.3mである。底面にピットが検出されているが、土層断面から後世のものである。径0.3m、底面からの深さは0.1mである。遺物が出土している。

106号土坑（第217図）

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は0.6m×0.53m、検出面からの深さは0.18mである。遺物は検出されなかった。

106B号土坑（第217図）

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。106号土坑の北隣で



第217図 102～110号土坑実測図

ある。調査時の遺構番号はないが、報告書では106B号土坑とする。平面形は楕円形で、規模は0.47m×0.38m、検出面からの深さは0.18mである。遺物は検出されなかった。

107号土坑（第217図）

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は1.68m×0.9m、検出面からの深さは0.2mである。段があり、段までの深さは0.08mである。北東端部にピットが検出されている。径0.3m、掘り込み面からの深さは0.17mである。遺物は検出されなかった。

108号土坑（第217図）

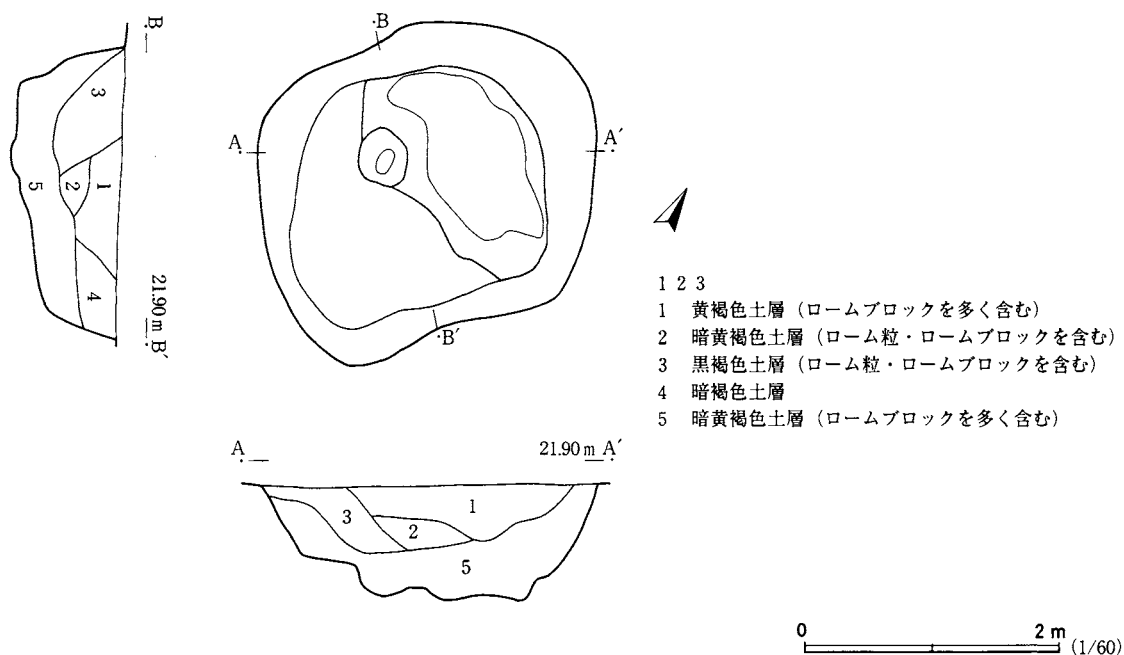
遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は0.9m×0.62m、検出面からの深さは0.32mである。段があり、段までの深さは0.2mである。遺物は検出されなかった。

109号土坑（第217図）

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は0.75m×0.58m、検出面からの深さは0.1mである。遺物は検出されなかった。

110号土坑（第217図）

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。平面形は楕円形で、規模は0.76m×0.59m、検出面からの深さは0.15mである。遺物は検出されなかった。



第218図 123号土坑実測図

110B号土坑 (第217図)

遺構 調査区の南東端部に位置している。102～110号土坑で群を形成すると思われる。110号土坑の東隣である。調査時の遺構番号はないが、報告書では110B号土坑とする。平面形は楕円形で、規模は0.7m×0.61m、検出面からの深さは0.18mである。段があり、段までの深さは0.15mである。遺物は検出されなかった。

123号土坑 (第218図 図版129)

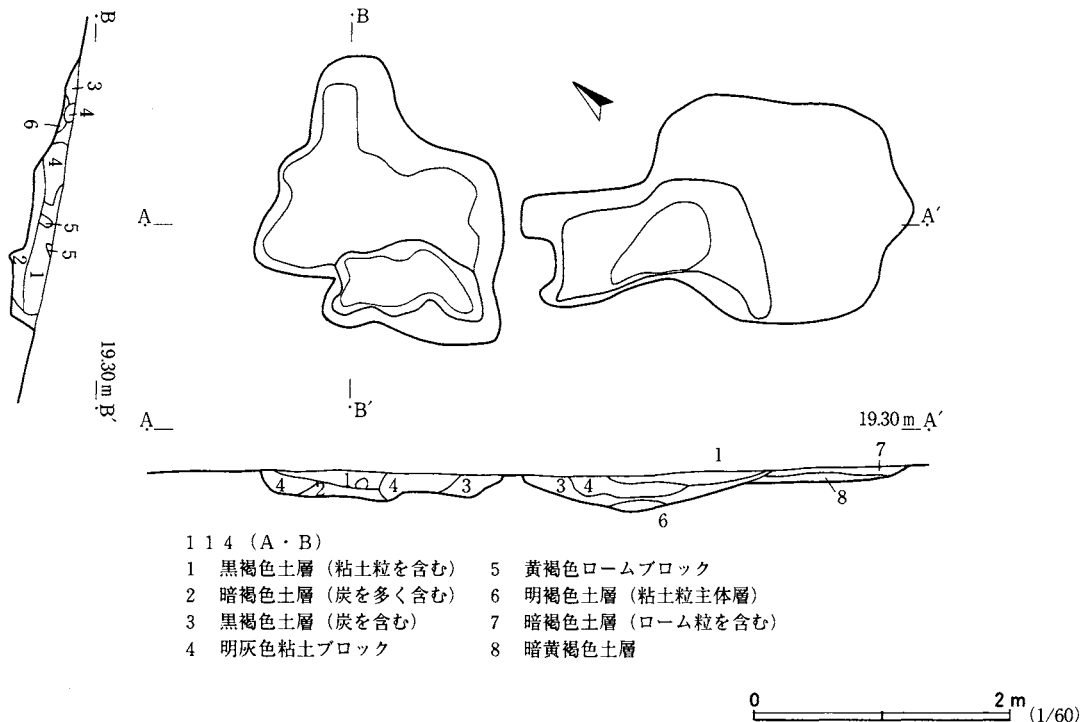
遺構 調査区の中央部やや東に位置している。平面形は楕円形で、規模は3.0m×2.69m、検出面からの深さは0.88mである。遺物は検出されなかった。

(4) 粘土採掘跡

粘土採掘跡と思われる土坑は調査区南東端部の斜面際に検出された。不整形の浅い土坑が2基並んで検出されている。底面に粘土層が露出しているため粘土採掘跡とした。

114A・B号粘土採掘跡 (第219図 図版130)

遺構 採掘坑と思われる土坑が斜面に平行して2基並んでいる。全体の規模は長さ5.2m、幅2.4mの範囲である。検出面からの深さは0.08m～0.28mである。遺物は検出されなかったが、覆土中に粘土ブロック層が検出されている。2基隣接しているため、地表からの掘削は溝状に行われた可能性がある。



第219図 114A・114B号粘土採掘跡実測図

Ⅲ まとめ

一本桜南遺跡の調査について、時代ごとに特徴等を要約し、まとめとする。

1 旧石器時代

一本桜南遺跡の調査で検出された石器集中地点は31地点を数え、それぞれを10層の異なる文化層に帰属することができた。

各文化層ともに、遺構の概要で記述した特徴があげられ、下総台地における旧石器時代の文化層の様相にそれぞれ対比できるものである。ここではまとめとして第8文化層とした第22～第25ブロックについて再考してみたいと思う。

第8文化層に属する各ブロックは、調査区南東部、谷津に挟まれた半島状に延びる台地の平坦部に互いに近接して検出されている。

一本桜南遺跡の所在する台地は、印旛沼に流入する神崎川の支流の最深部に位置し、また調査区北側0.4 kmには手賀沼に流入する亀成川の支流が存在し、手賀沼水系と印旛沼水系の分水嶺にあたる。台地平坦部という立地条件では、この二水系に挟まれた台地平坦部が調査区の北側に展開するが、この範囲からは第8文化層に属するブロックは検出されず、同一文化層に属するブロック群としては極めて狭い範囲に分布していることがわかる。

同一文化層にブロックではあるが、ブロック間での石器接合関係は確認されず、同時に形成されたブロックとしての確証はない。だが、ブロックの規模や使用される石材、石器組成に共通点が多く認められるため、ほぼ同時期に形成されたブロック群として考えるのが妥当であろう。

各ブロックの石器の分布は若干の差はあるものの、ほぼ直径8 mの範囲でそれぞれ完結している。ブロックの規模としては概して普遍的な大きさ、形状であるが、分布範囲のなかで特に石器が集中して出土するか所がみられる。

各ブロックともに2 mの範囲で石器が集中しており、この範囲内の遺物出土点数は、各ブロックの出土点数の78%～85%を占める。遺物分布範囲に対する集中区の位置はブロックの中心には位置せず、集中区ブロックの中心と仮定すると、第22ブロックは北東側、第23ブロックは南東側、第24・25ブロックは東側に分布が延びる様子が看取できる。この方向には小規模な埋没谷が存在するが、遺物の垂直分布の状況からは、地形的要因により遺物が移動しているような様子は窺えない。

出土した小礫全点及び剥片石器の一部が被熱するが、調査時にはブロックの範囲内や近辺から焼土の検出はなかった。また、被熱する石器についても著しい変化は認められず、断定はできないものの長時間にわたり熱を受けたものとは考えがたい。

各ブロックを構成する石器はほぼ小礫、もしくは破碎礫で占められ、出土点数の少ない第25ブロックの73.3%以外は90%以上が小礫、破碎礫である。破碎礫の割合が多いため明確ではないが、礫の大きさの平均値は3 cm内外と考えられ、4 cmを超える大きさの礫は含まれない。

剥片石器の石器組成はブロックごとに異なり、彫刻刀形石器のみ出土（第22ブロック）、彫刻刀形石器及び搔器を含むブロック（第24ブロック）、槍先形尖頭器及び搔器を含むブロック（第23ブロック）、削器及

び調整剥片を含むブロック（第25ブロック）と多様である。

同様の石器組成のブロックは、調査区東側、舌状台地を挟んだ高根北遺跡でも検出されており、破碎礫を共伴するブロックが一か所報告されている。破碎礫についての詳細は不明であるが、石器組成、石器石材に類似点がみられる。また距離を置くが、印旛郡本埜村に所在する角田台遺跡の最近の調査においても破碎礫を伴うブロック群が検出されている。未整理のため詳細は不明であるが、先に紹介した一本桜南遺跡の資料を含め、当時期の石器群の一様相を示す好資料となろう。

2 縄文時代

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡、炉穴群、陥穴が検出されている。すべて縄文時代早期に属すると考えられる。出土土器は、撚糸文土器、沈線文土器、条痕文土器である。ここでは、各遺稿の特徴を述べ、まとめとする。

住居跡は3軒検出されている。平面形は、円形または楕円形である。時期は、出土土器から早期と考えられる。土器は破片であるので、更に細かな時期の決定は難しい。もっとも古い土器は撚糸文土器であり、ほかに、沈線文土器、条痕文土器が出土している。出土土器の傾向から、撚糸文土器から沈線文土器の時期に営まれた可能性が大きいと思われる。

同時期の類例としては、早期の遺構、遺物を多く検出している新東京国際空港予定地内の発掘調査で検出されている。成田市の香山新田中横堀遺跡（空港No.7遺跡）¹⁾から、撚糸文期（井草Ⅰ式）の住居跡が検出されている。平面形は楕円形で、規模は4.85m×3.98mである。床面は中央部がもっとも深く、壁に近づくにしたがい浅くなる皿状を呈する。また、住居跡中央やや南に炉跡と考えられる隅丸形状の浅い彫り込みが検出されている。ピットは12個検出され、炉跡を囲むように、二重に配置されていると思われる。特に、外側の7個は柱穴と思われる。

一本桜南遺跡で検出された住居跡と比べると、平面形、柱穴の配置に類似点が見られるが、炉跡の有無など相違点も確認される。しかし、比較的検出例の少ない早期の住居跡の中で、一本桜南遺跡は類例の一つになると考えられる。

炉跡群は、千葉ニュータウン造成地内の遺跡発掘調査で多く検出されている遺構である。近隣の遺跡では、高根北遺跡²⁾、船尾白幡遺跡³⁾、泉北側第2遺跡⁴⁾で検出されている。一本桜南遺跡では16基検出されているが、炉床を複数有する炉穴を重複と考えるならば28基を数え、これらの調査の中で最も数が多い。平面形は楕円形がほとんどである。図示可能な遺物が出土した炉跡は16基中8基で、時期は、撚糸文期が3基、沈線文期が2基、条痕文期が3基と考えられる。これは、住居跡の時期とほぼ重なっている。周辺遺跡では、検出された炉穴の出土土器は、ほとんどが条痕文土器であり、また、条痕文期の明瞭な住居跡は検出されていない。

以上から、一本桜南遺跡の炉穴群の特徴は、早期を通して営まれたことと考えられる。

陥穴は6基検出されている。遺構説明でも述べたとおり遺物は検出されていないが、形状から縄文時代早期と考えられる。よって、住居跡、炉穴とほぼ同時期に営まれたと考えられる。同形のものが、高根北遺跡、船尾白幡遺跡、泉北側第2遺跡、船尾町田遺跡⁵⁾、谷田木曾地遺跡⁶⁾で検出されている。

石鏃製作跡については、計11地点のまとまりがみられるが（第135図）、出土地点の明確な石器を基に分

布範囲を図示しているため、各製作跡の詳細な遺物分布及び石器組成を提示することはできなかった。

これら製作跡について、分布を共にする住居跡等の遺構、土器がみられないため时期的な位置づけを行うことは困難であり、縄文前期という長い時期間に比定せざるを得ない。

同水系の神崎川上流に位置する復山谷遺跡では、时期的な差があり、また石鏃製作跡として報告されていないが、石鏃と共に多数の礫石器が出土している。この報告例を考慮すると、礫石器の出土が極端に少なく、磨石、石皿については全く出土していない点で、一本桜南遺跡の特徴としてあげることができる。現時点では一様相として止め、事例の増加を待って再考したいと思う。

3 古墳時代

一本桜南遺跡からは、古墳時代の遺構として、竪穴住居跡60軒が検出されている。出土土器からはほぼ同一時期に属すると考えられる。時期は古墳時代前期であるが、これらの遺構、遺物についての特徴を述べ、古墳時代のまとめとする。

すでに述べたように、住居跡以外の遺構は検出されていない。また、住居跡の重複はなく、すべて古墳時代前期に属すると考えられる。しかし、これらの住居跡を比べると、形状及び内部施設跡から大きく2グループに分けられると考えられる。

第1のグループは、比較的大型の住居跡である。これらは、炉跡、柱穴、貯蔵穴、壁周溝などの内部施設跡が明瞭に検出されたものが多い。第2のグループは、比較的小型の住居跡である。これらは、炉跡(床面の焼土化を含む)以外の内部施設跡が明瞭に検出されなかったものが多い。

このような集落跡の例は、八千代市萱田における権現後遺跡⁷⁾の調査にみられる。権現後遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して集落が営まれたことが確認されている。そして、弥生時代後期の集落にも住居の大小の差が見られる。権現後遺跡では、出土土器として、久が原、弥生町式と、印手式の形式的遍在性が一部で伴い、印手式が出土するのは主に集落内の小規模な住居跡であり、かつ継続的に用いられ、久が原、弥生町式と明確なセットかを見ないままに古墳時代前期(五領期)に至ったと思われるとのことである。そして、五領期における大型住居と小型の住居の存在は久が原、弥生町式と、印手式の所有をめぐる集落内の格差がそのまま引き継がれたと考えるとしている。

一本桜南遺跡では、弥生時代からの継続ではなく、また、権現後遺跡の時期よりもやや新しいと考えられるが、集落内の格差は継続していたことが推定できる。そして、古墳時代前期の集落跡である印西市泉北側第2遺跡においても、住居跡の大小が継続しているが、一本桜南遺跡よりも全体に住居跡が大型化し、格差が解消される方向にあると考えられる。

また、大きさによるグループ分けの基準を、住居の長さ×幅の数値(m単位)を基にすると、一本桜南遺跡は、極端に大きな056号住居跡を除いた59軒の平均値が13.34であり、これより大きな値の住居は056号住居跡を含めて24軒、小さな値の住居跡は36軒である。一本桜南遺跡よりもやや新しい時期の泉北側第2遺跡では、計測可能な70軒の住居の平均値は24.21で、全体として大型化している。そして、一本桜南遺跡の平均値(13.34)以下の住居跡は11軒であり、このことから住居の大型化、格差の解消の方向がうかがえる。

住居跡出土土器はほとんどが土師器であり、古墳時代前期に属する。古墳時代前期の土師器については、

古墳時代土器研究会⁸⁾により関東各地の土器編年及び、編年網の検討行われている。その中で、古墳時代前期はⅠ・Ⅱ・Ⅲの3時期の区分され、Ⅰを2時期に区分している地域が多い。

一本桜南遺跡の土師器は、この3時期区分の中のⅠ期に属していると考えられる。特に、041・057号住居跡出土土師器はこの時期の良好なセットを示していると考えられる。また、032号住居跡では、壺の口頸部を甕の器台として再利用している様子が窺われ、同時期の使用の根拠となると思われる。同様な出土状況は、千葉県関宿町飯塚貝塚遺跡⁹⁾の001号住居跡にも見られる。

一本桜南遺跡では、土師器の一般的な器種のほか、特徴のある土器（片口鉢、器台形土器、装飾土玉及び土玉形土製品）が出土している。

片口鉢は、043号住居跡から出土している。特徴としては、通常の坏（平面形が円形）に注ぎ口を付けた形ではなく、平面形が鶏卵形で、とがっている部分に注ぎ口が付く形である。

周辺の同時期の遺跡調査では検出されていないが、千葉市車坂遺跡¹⁰⁾の発掘調査において、片口形土器が第4号住居跡から出土している。時期は、出土土器から古墳時代中期（和泉期）である。住居跡は焼失住居で、炭化材が多量に検出されている。片口形土器は住居跡の床面に裏返しの状態で検出された。大きさは、長さ23.4cm、胴部幅11cm、底部7.3cm×5cm、高さ8.9cmである。平面形は胴部がやや鶏卵形の楕円形で、とがっている端に、くちばし状の注ぎ口が付く。内外面ともヘラミガキの後に赤彩が施される。一本桜南遺跡の片口鉢に比べて、やや大型で、注ぎ口と胴部との区別が明瞭である。

時的には一本桜南遺跡が古く（古墳時代前期）、車坂遺跡が新しい（古墳時代中期）が、出土例が乏しいので、土器としての一般的な形にはならなかったと考えられる。また、片口という形から、液体を入れるという機能が考えられ、主要な素材は、土器（製）ではなく、木器（製）であった可能性がある。

器台形土器は、039・041・057号住居跡から出土している。器台形土器は、「五徳」的用途が考えられ、炉用の支脚と解釈され、3個一組で使用されたと考えられている¹¹⁾。一本桜南遺跡においてもこれを裏付けるように041号住居跡から3個出土している。また、形態は台付甕の台部に下半部が似ている。

3個一組で使用される土製の支脚は、千葉県関宿町飯塚貝塚遺跡、千葉県多古町仲ノ台遺跡¹²⁾の古墳時代前期の住居跡から出土している。形態は円錐形又は烏帽子形である。これらは、伴う土器を比較すると一本桜南遺跡よりも新しいと考えられる。これらから、器台形土器は台付甕から土製支脚に変化する中間の形態とも考えられる。

装飾土玉及び土玉形土製品は045・059・090号住居跡から各1点、計3点出土している。045・059号住居跡出土は土製品、090号住居跡出土は装飾土玉である。形態、大きさは同じ住居跡及び他の住居跡から出土している土玉とほぼ同じである。装飾は3点とも細竹管を使った列点状の刺突文様で、各点は三日月状である。また、059号住居跡のものは赤彩が施される。090号住居跡出土のものは土玉と同様に中央に穿孔されるが、他の2点は、垂飾品状に端部に穿孔されている。周辺の同時期の遺跡調査では検出されていないが、無文様の垂飾土製品は関宿町飯塚貝塚遺跡の古墳時代前期住居跡から出土している。

一本桜南遺跡の古墳時代前期の出土遺物で、特に注目されるものは、041号住居跡から出土した壺に保管された状態の砂鉄である。この遺物については、すでに、財団法人千葉県文化財センター発行の研究連絡誌第25号¹³⁾に砂鉄の分析調査と共に報告されている。壺については、「肉眼の観察では在地の土器とみなされるが、今後整理作業が行われるときに搬入土器としての可能性にも留意しながら検討しなければならないであろう。」としている。形態的には千葉県内の古墳時代前期の素口縁で下膨れの胴部の壺に類似形があ

り、胎土についても、肉眼では、同一住居跡出土の土器とほとんど同じと思われる。

砂鉄については、金属的分析調査から「この砂鉄の性状は、川床酸性（真砂系）砂鉄で、全鉄分（Total Fe）60%、二酸化チタン（TiO₂）4.83%、五酸化燐（P₂O₅）0.072%、の高品位のものであった。」と分析された。そして、「千葉県の旭市外房海岸の採取砂鉄と、君津郡佐貫町砂鉄の…中略…両者は、二酸化チタン（TiO₂）が10%台で、五酸化燐（P₂O₅）が0.3%台であり、塩基性砂鉄（赤目系）に分類される。印旛郡内の採取砂鉄のデータがないので、一本桜南遺跡の砂鉄が何処のものか同定しかねるが他地域からの搬入も考慮しなければならない状態である。」としている。また他地域の分析は、「一方、県外の群馬県伊勢佐木市の西太田遺跡では、…中略…土壌から用途不明の砂鉄が検出されている。こちらは…中略…塩基性砂鉄である。全鉄分（Total Fe）59.8%、二酸化チタン（TiO₂）7.09%、五酸化燐（P₂O₅）0.31%である。推定年代は古墳時代後期とも云われている。」であり、一本桜南遺跡の砂鉄とは異なっている。しかし、同じ分析表に群馬県吾妻川採取の砂鉄（現代）の分析値が記載されている。二酸化チタン（TiO₂）五酸化燐（P₂O₅）は前記の3者より少なく高品位であるが、一本桜南遺跡の砂鉄よりは高い値が出ている。これは、一本桜南遺跡の砂鉄の高品位をよりよく示していると思われる。

研究連絡誌25号（平成元年3月）以降、千葉県内の砂鉄の出土例は増加しているが、すべて、製鉄関連遺構に伴うものである。しかし、それらは遺跡周辺から製鉄用に採取されたと考えられるので、それらの分析値を比較することにより、千葉県内の砂鉄の特徴及び、一本桜南遺跡出土の砂鉄の特徴がより明らかになるとと思われる。

第115表は、以前に一本桜南遺跡の砂鉄を分析したときの表に、それ以後の報告例の砂鉄の分析値¹⁴⁾を付け加えたものである。分析項目が若干増えていたが、増えた項目については比較できないので、省略した。

数値をみると、以前分析したときの結果がより明瞭に現れているのが確認される。

以上から、砂鉄を納めた壺は在地産であるが、砂鉄は、千葉県外からの搬入である可能性がさらに大きくなったといえるであろう。

注)

- 1 西山太郎・西川博孝・西口 徹ほか 『東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅳ 一No.7 遺跡一』 財団法人 千葉県文化財センター 昭和59年
- 2 中山吉秀ほか「1.高根北遺跡（CN406）」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 財団法人 千葉県都市公社 昭和51年
- 3 古内 茂ほか「7.船尾白幡遺跡（CN705）」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』 財団法人 千葉県都市公社 昭和51年
- 4 高橋博文「泉北側第2遺跡（CN613）」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』 財団法人 千葉県文化財センター 平成3年
- 5 田坂 浩ほか「第2篇 船尾町田遺跡（CN709）」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』 財団法人 千葉県文化財センター 昭和59年
- 6 及川淳一ほか「第3篇 谷田木曾地遺跡（CN411）」 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅷ』 財団法人 千葉県文化財センター 昭和59年

- 7 阪田正一 加藤修司 橋本勝雄 『八千代市権現後遺跡 ―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ―』
財団法人 千葉県文化財センター 昭和59年
- 8 古墳時代土器研究会 『土器が語る ―関東古墳時代の黎明―』 第一法規出版株式会社 平成9年
- 9 岡田光広ほか 関宿町飯塚貝塚遺跡 『一下総利根大橋有料道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告書―』 財団法人 千葉県文化財センター 平成元年
- 10 真下高幸 「2.車坂遺跡」 『京葉道路第四期一般国道16号線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
財団法人 千葉県都市公社 昭和48年
- 11 藤岡孝司 「粗製の器台状脚形土器について」 『研究連絡誌』 第2号 財団法人 千葉県文化財
センター 昭和58年1月
- 12 奥田正彦 『仲ノ台遺跡』 財団法人 香取郡市文化財センター 平成5年
- 13 郷堀英司 大澤正己 「一本桜南遺跡出土の砂鉄について」 『研究連絡誌』 第25号 財団法人
千葉県文化財センター 平成元年3月
- 14 大澤正己 「付章 第2節 岩山中袋遺跡（空港No.2遺跡）出土製鉄関連遺物の金属的調査」 『土
木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書 ―成田市三里塚御料牧場遺跡・芝山町岩山中袋遺跡（空
港No.2遺跡）―』 財団法人 千葉県文化財センター 平成9年
大澤正己 「第4章 第1節 2.製鉄関連遺物の金属的調査」 『新東京国際空港埋蔵文化財調査報
告書Ⅷ 取香和田戸遺跡（空港No.60遺跡）』 財団法人 千葉県文化財センター 平成6年
大澤正己 「第3章 第3節 製鉄関連遺物の金属的調査」 『新東京国際空港埋蔵文化財調査報告
書Ⅶ 南三里塚宮園遺跡（空港No.4遺跡） 木の根拓美遺跡（空港No.6遺跡） 香山新田中横堀遺跡
（空港No.7遺跡）』 財団法人 千葉県文化財センター 平成5年
大澤正己 「第4章 製鉄関連遺物の金属的調査」 『千原台ニュータウン V―押沼第1遺跡K地点
―』 財団法人 千葉県文化財センター 平成5年
大澤正己 「第Ⅲ章 製鉄関連遺物の化学分析調査」 『山ノ下製鉄遺跡 ―かずさアカデミーパー
ク建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（2）―』 財団法人 君津郡市文化財センター 平成7年

第114表 砂鉄分析値表

県別	遺跡名	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	酸化第一鉄 (FeO)	酸化第二鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO ₂)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	備考	
千葉	一本桜南	古墳前期	60.0	27.0	55.8	2.18	3.21	0.60	1.71	0.43	4.83	0.007	0.015	0.072	0.18	0.16	0.003		
	岩山中袋	7世紀末	52.82	24.31	48.30	3.75	2.35	0.33	2.39	0.62	16.50	0.09	0.01	0.06	0.13	0.28	0.005		
	取香和田戸	9世紀	58.90	28.02	48.99	2.94	3.13	0.26	1.74	0.50	10.90	0.05	0.018	0.02	0.34	0.32	0.001		
	香山新田中横堀	平安?	54.40	25.52	49.40	5.66	2.77	0.44	3.18	0.55	11.59	0.08	0.007	0.03	0.09	0.30	0.001		
	押沼第1遺跡K地点	9世紀後半	47.6	21.2	41.3	12.3	5.44	0.65	1.62	0.44	10.2	0.038	0.020	0.040	1.01	0.28	0.005		
	押沼第1遺跡K地点	9世紀後半	35.2	15.5	32.8	26.3	8.98	0.72	2.08	0.38	8.33	0.031	0.008	0.022	0.28	0.21	0.003		
	押沼第1遺跡K地点	9世紀後半	49.1	23.4	44.0	10.3	5.07	0.40	1.72	0.48	11.4	0.043	0.010	0.020	0.34	0.29	0.010		
	押沼第1遺跡K地点	現代	57.0	24.86	53.9	3.80	4.11	0.14	1.59	0.47	9.99	0.07	0.037	0.038	0.08	0.32	0.031		
	山ノ下製鉄遺跡	8世紀代	53.90	20.30	54.40	5.38	4.10	0.45	1.94	0.76	10.57	0.04	0.04	0.02	0.30	0.14	0.19	0.004	
	旭市外房海岸	現代	48.1	26.2	39.2	2.1	2.6	1.4	5.1	1.3	10.2	0.12	0.12	0.051	0.296	0.042	0.17	0.005	
	君津郡佐貫	現代	60.76	32.48	50.74	1.98	1.44	0.28	1.87	0.90	10.16	+	+	0.033	0.376	-	+	-	
	群馬	西大田	古墳後期	59.8	19.83	63.4	2.56	2.76	1.11	1.43	0.48	7.09	0.045	0.019	0.31	0.03	0.29	0.004	
		吾妻川	現代	51.66	24.45	64.70	9.0	3.8	0.82	2.9	0.54	5.3	0.037	0.027	0.238	0.074	0.35	0.038	

写 真 图 版



←本桜南遺跡

航空写真（平成9年撮影）



一本桜南遺跡





遺跡近景（東から）



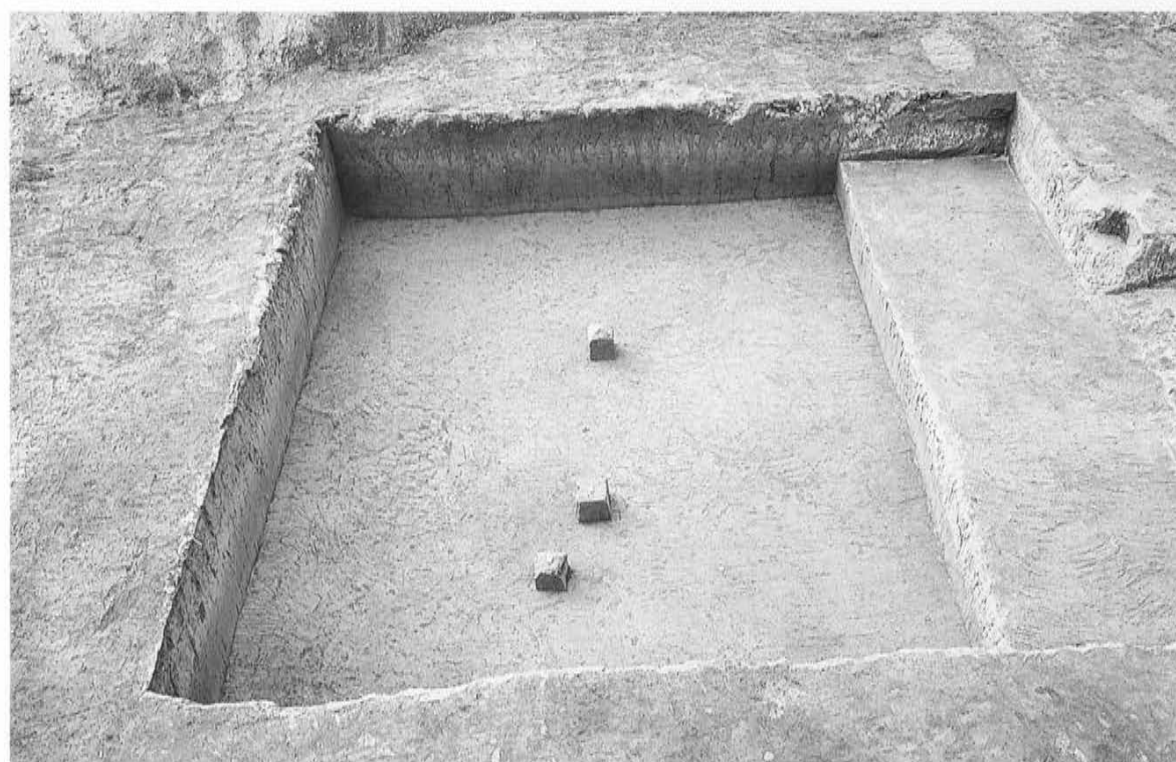
第1・4ブロック
石器出土状況（西から）



第1・4ブロック
土層断面



第1・4ブロック石器出土状況（西から）



第2ブロック
石器出土状況（東から）



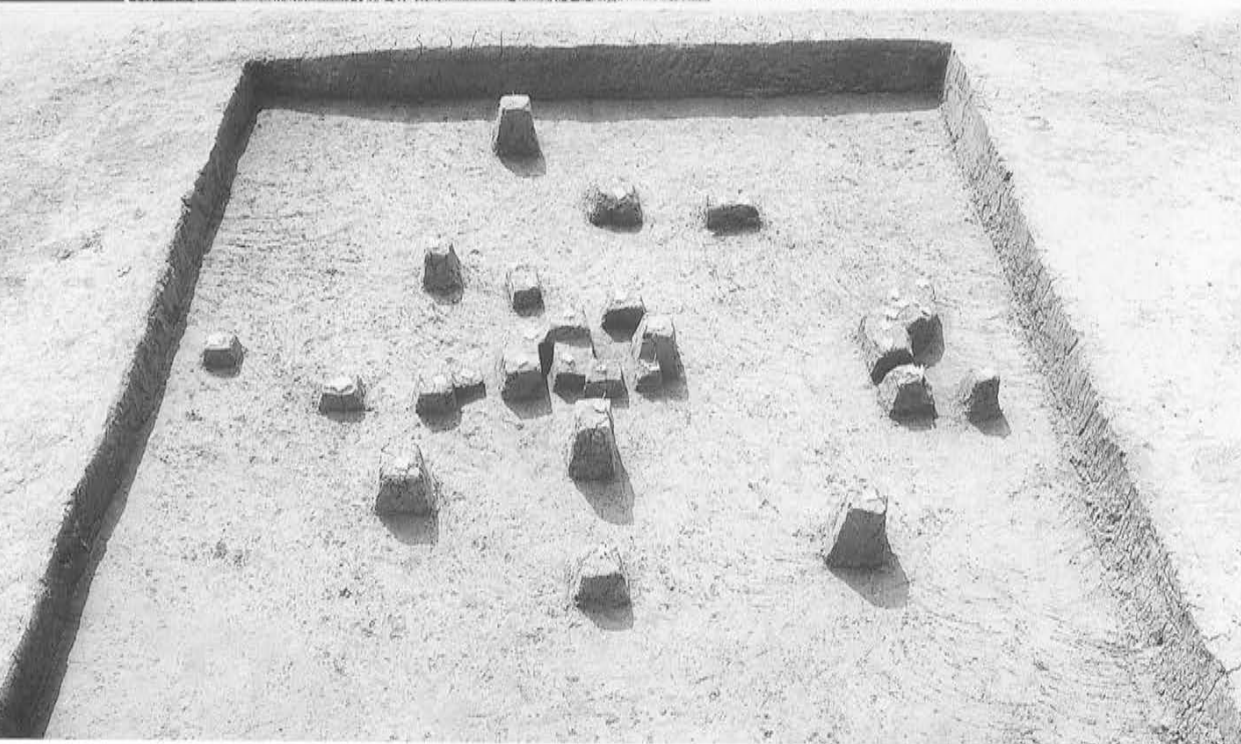
第2ブロック
土層断面



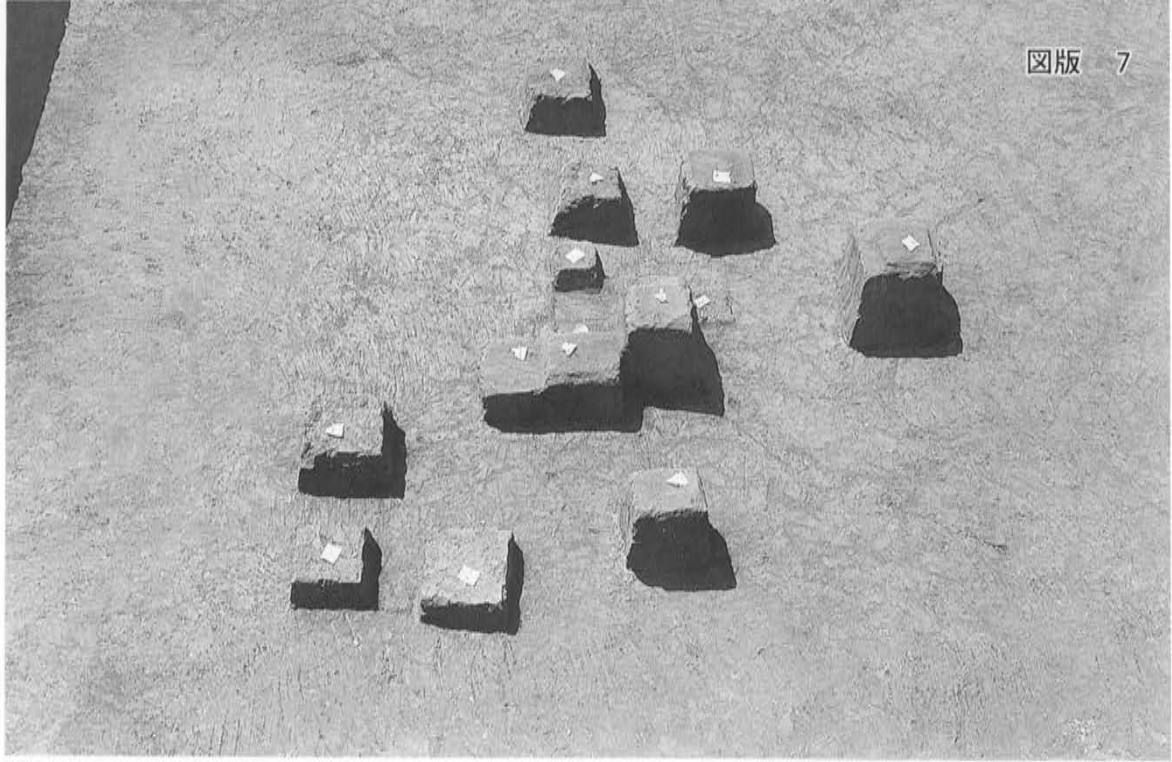
第3ブロック
石器出土状況（東から）



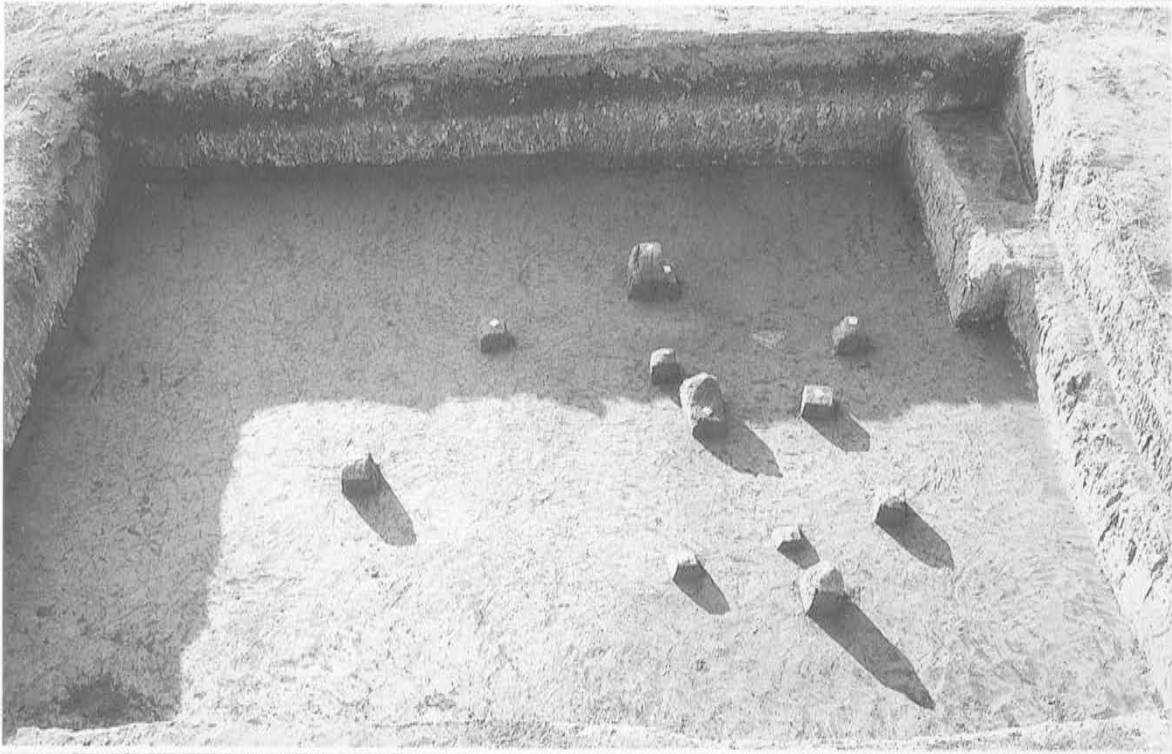
第3ブロック
局部磨製石斧出土状況（西側から）



第5ブロック
石器出土状況（東から）



第6ブロック
石器出土状況（北から）



第7ブロック
石器出土状況（東から）



第8ブロック
石器出土状況（北から）



第9ブロック
石器出土状況（南から）



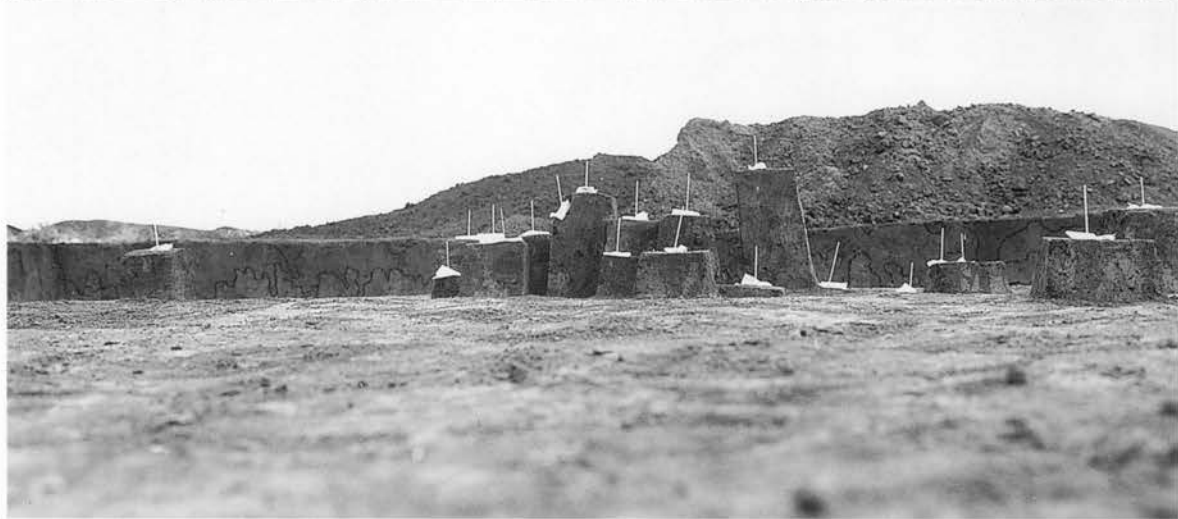
第10・27・31ブロック
石器出土状況（北から）



第12ブロック
石器出土状況（西から）



第13ブロック
石器出土状況（西から）



第13ブロック
土層断面



第14・15・16ブロック
石器出土状況（南から）





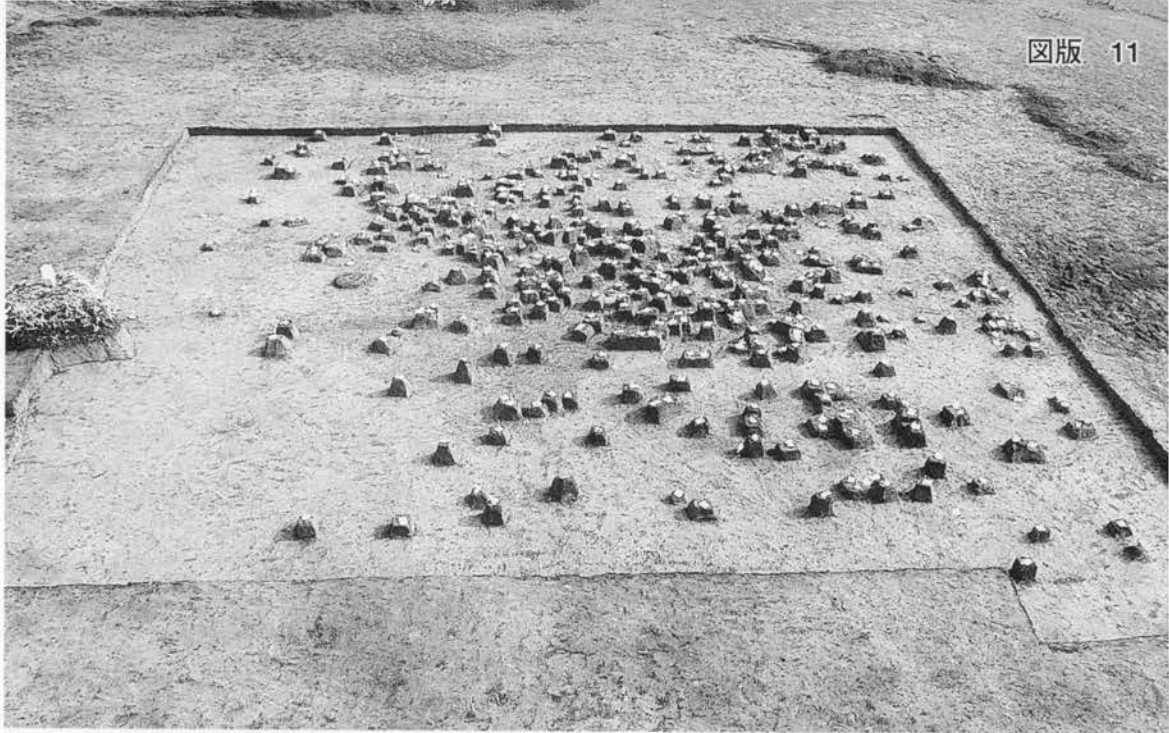
第14ブロック
石器出土状況（南から）



第15ブロック
石器出土状況（南から）



第16ブロック
石器出土状況（南から）



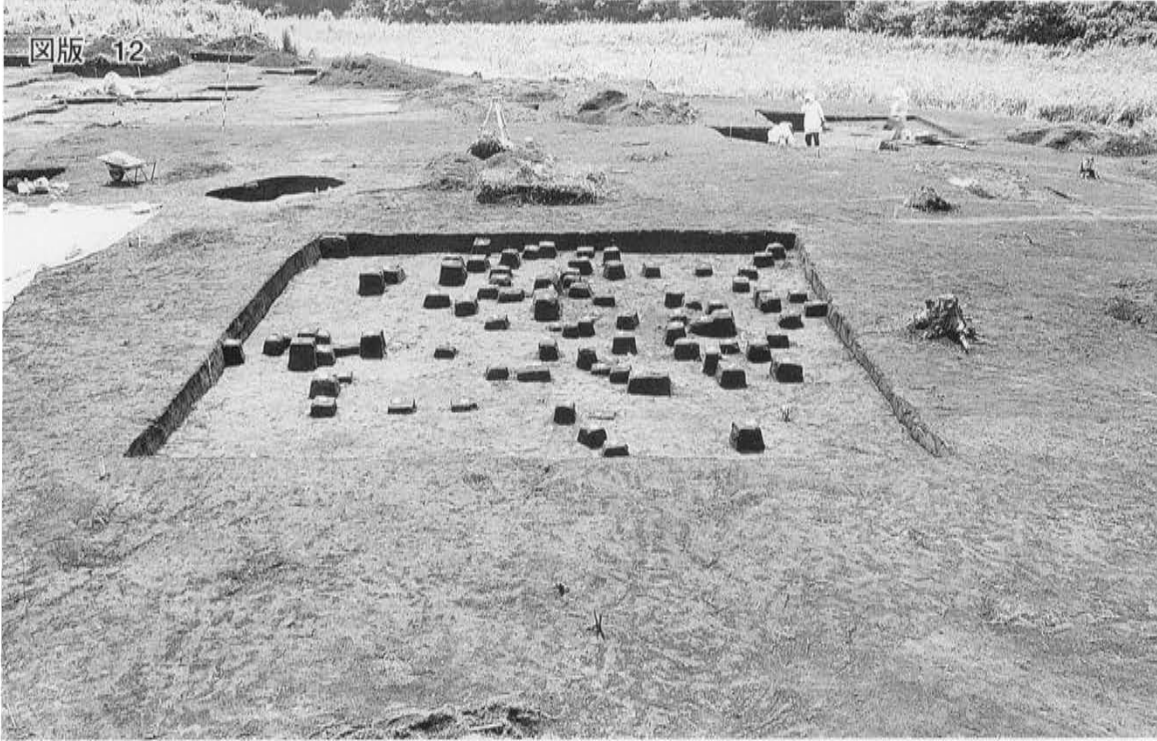
第17ブロック
石器出土状況（西から）



第18ブロック
石器出土状況（西から）



第18ブロック
土層断面



第19ブロック
石器出土状況（北から）



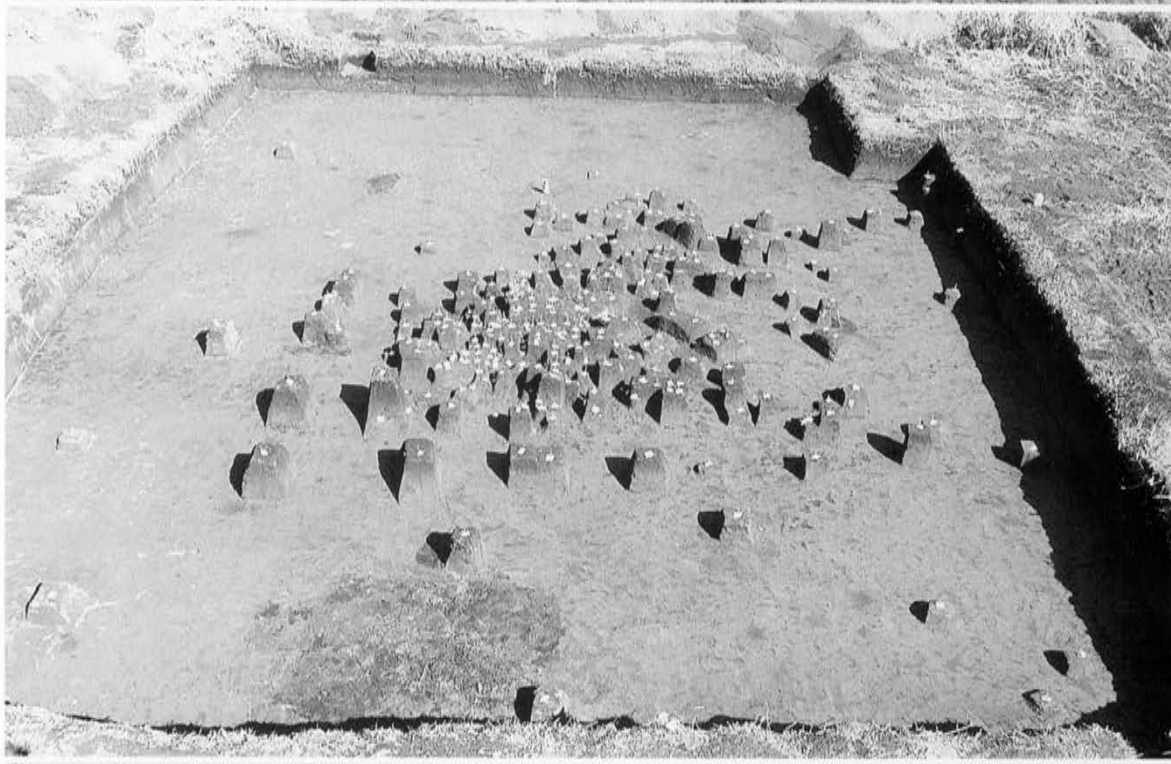
第20ブロック
石器出土状況（東から）



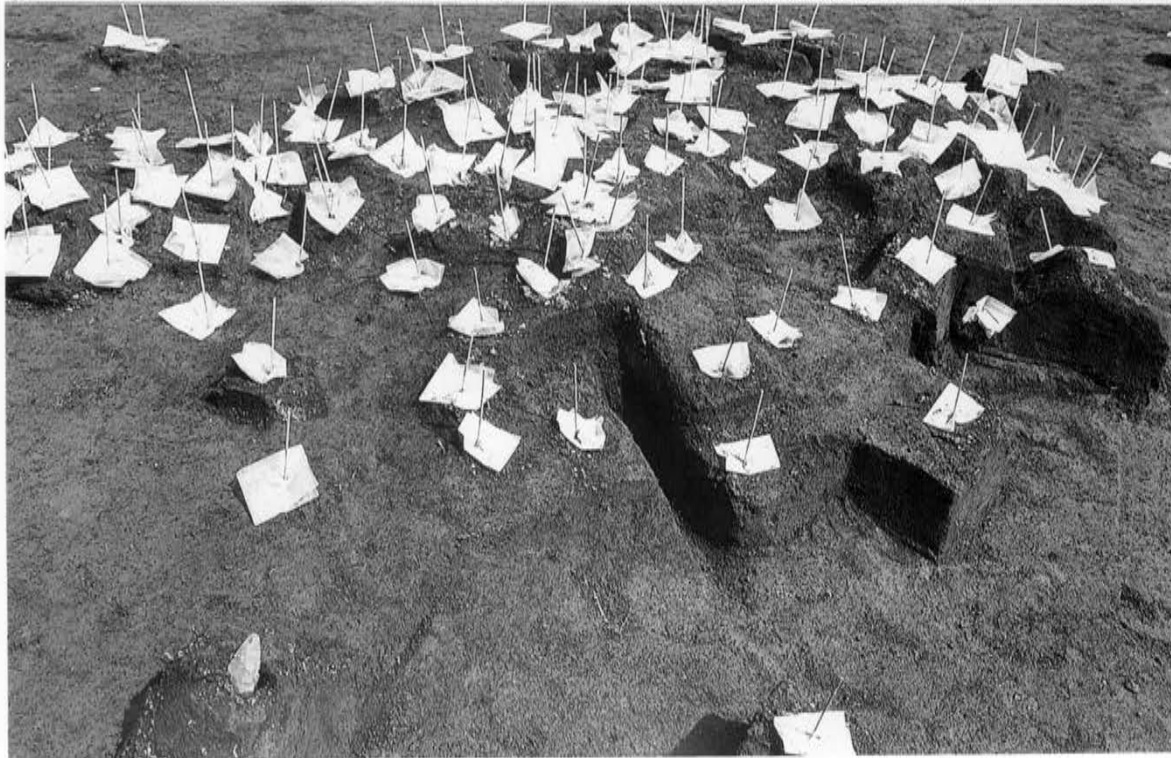
第21ブロック
石器出土状況（北から）



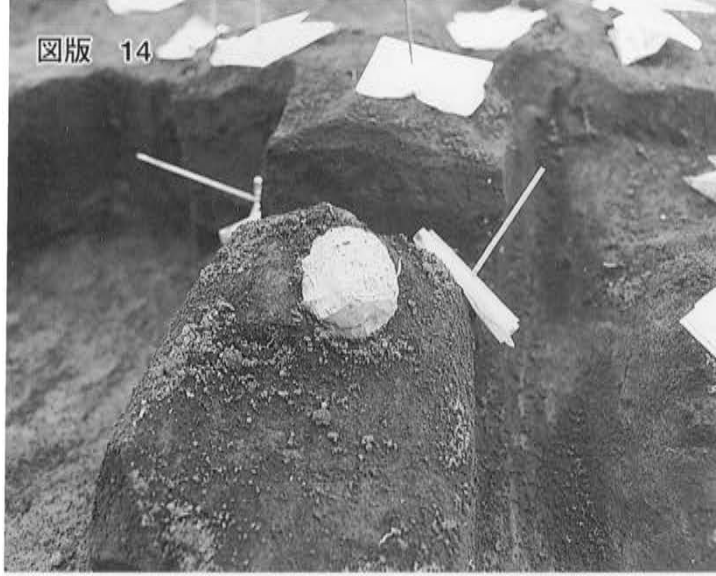
第21ブロック
石器出土状況（西から）



第22ブロック
石器出土状況（西から）



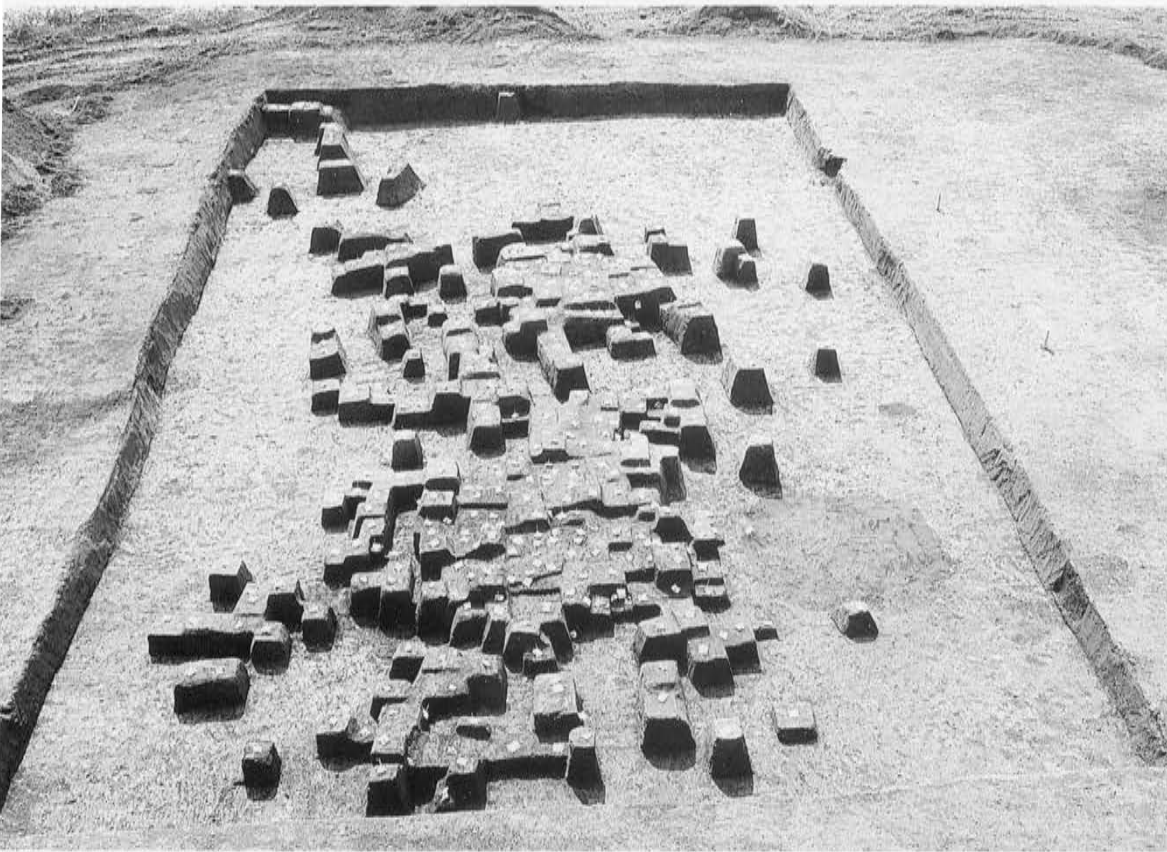
第23ブロック
石器出土状況（西から）



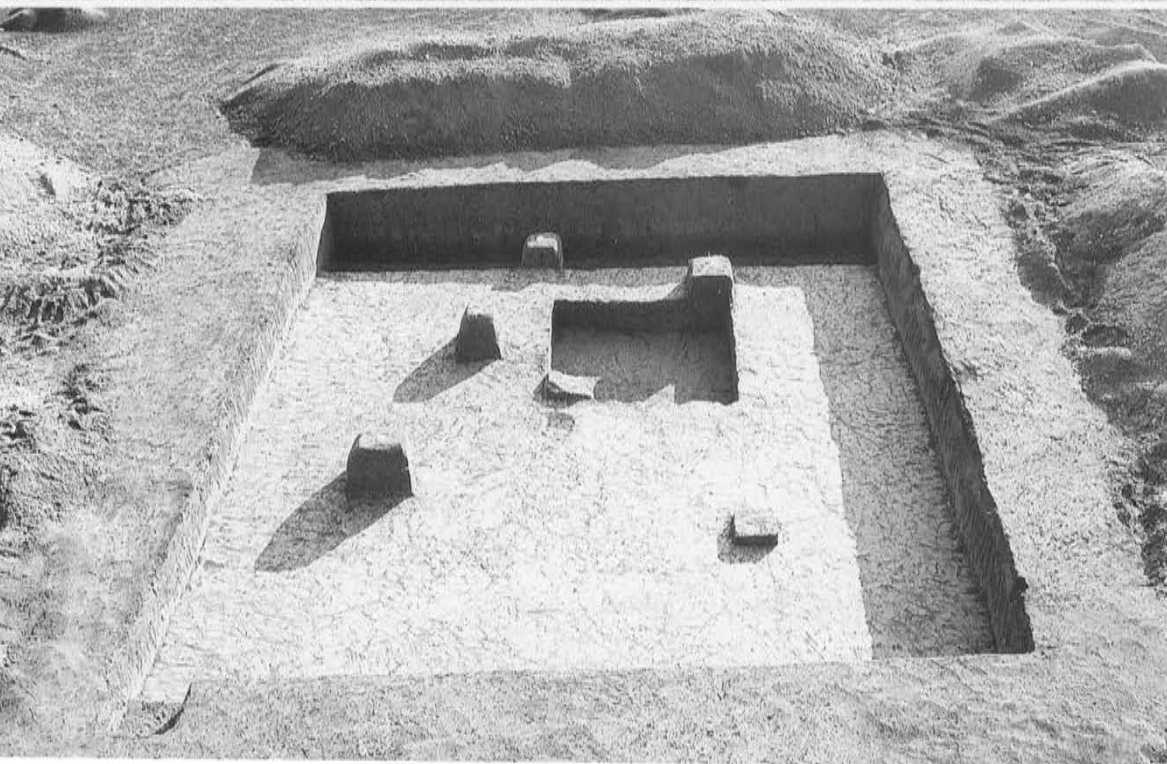
第23ブロック搔器出土状況（西から）



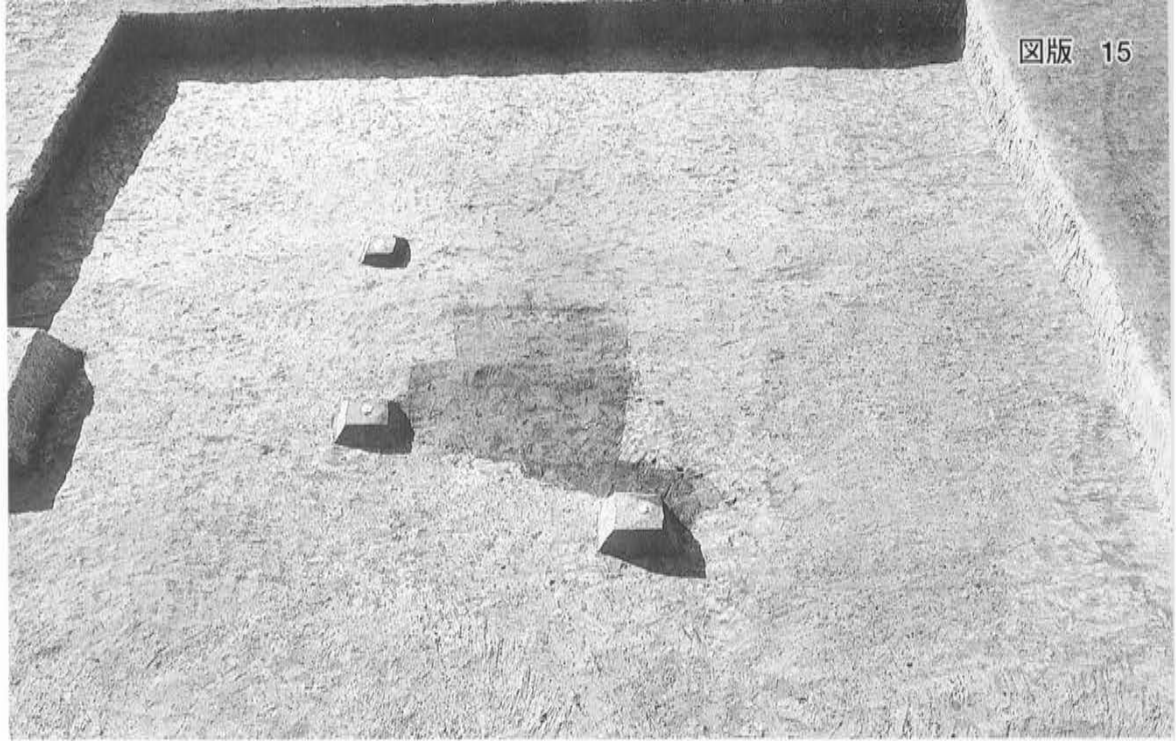
第23ブロック槍先形尖頭器出土状況（西から）



第24ブロック
石器出土状況（北から）



第26ブロック
石器出土状況（北から）



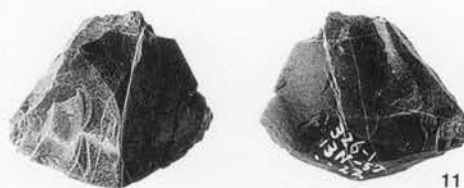
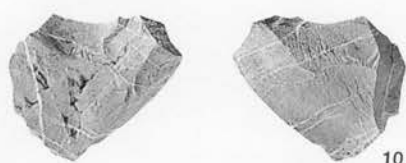
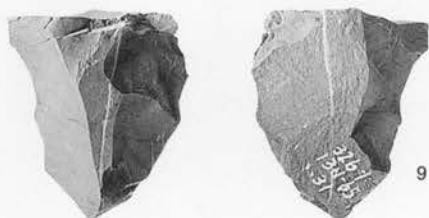
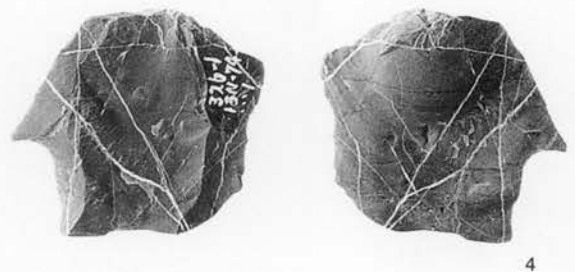
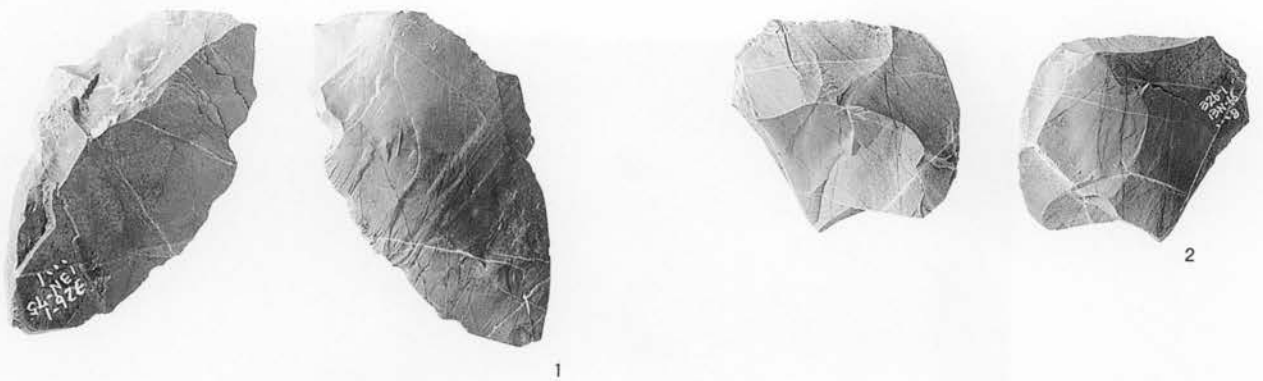
第28ブロック
石器出土状況（東から）



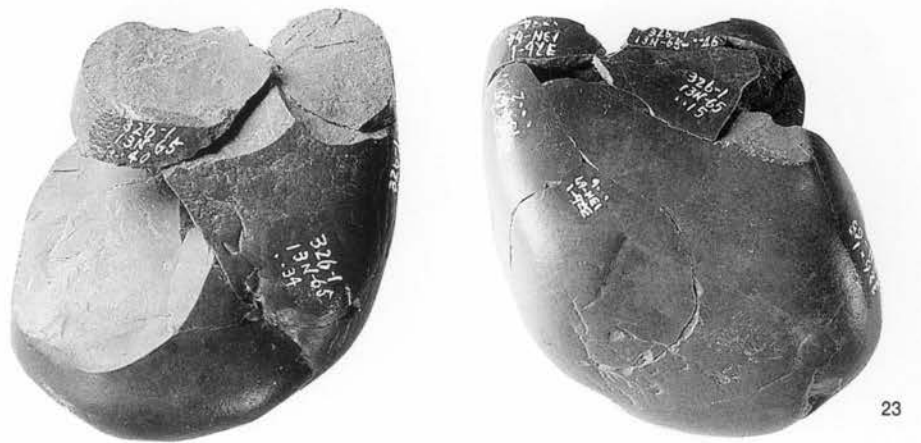
第29ブロック
石器出土状況（西から）

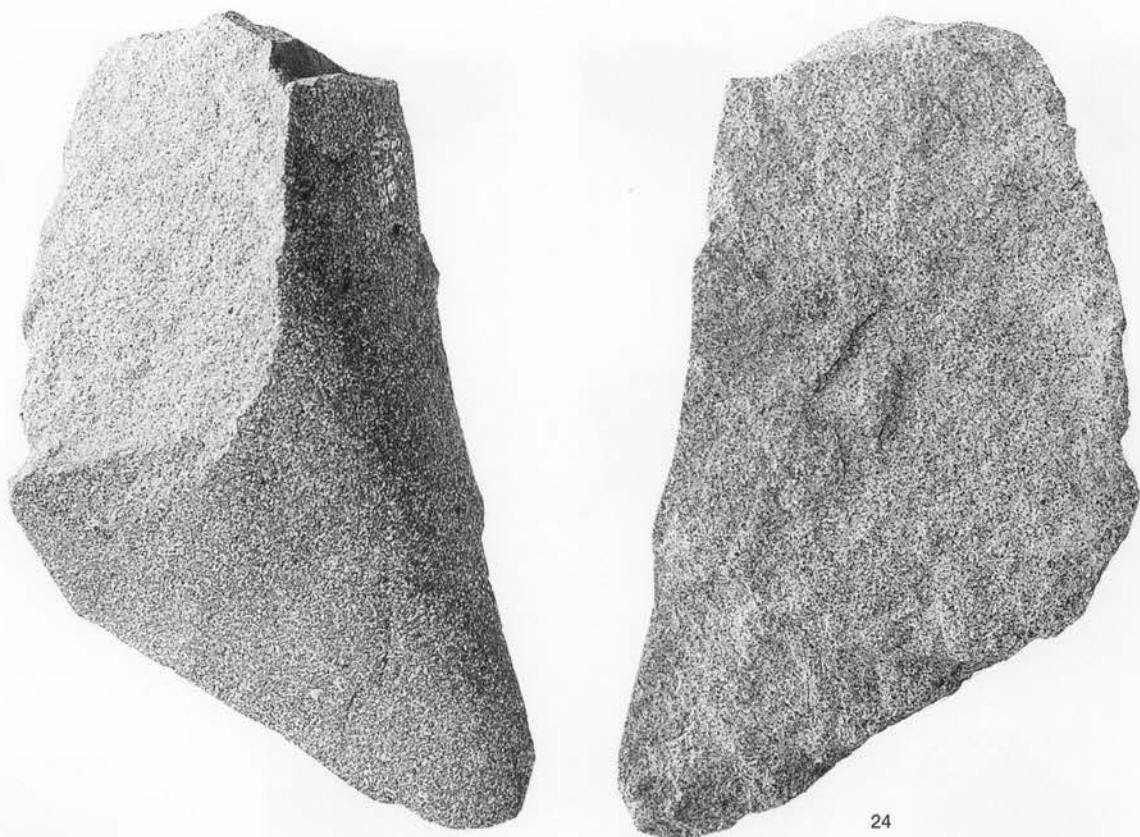


第30ブロック
石器出土状況（南から）



第1ブロック出土遺物 (1)





24

第1ブロック出土遺物 (3)



1

第2ブロック出土遺物



2

1

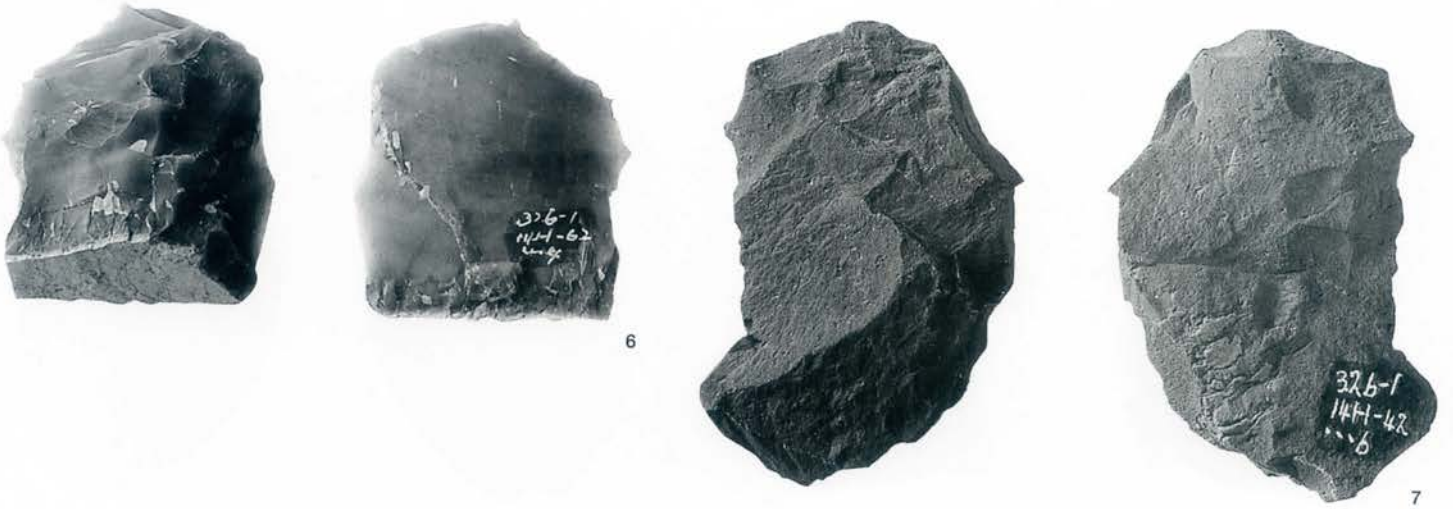
第3ブロック出土遺物 (1)



3

4

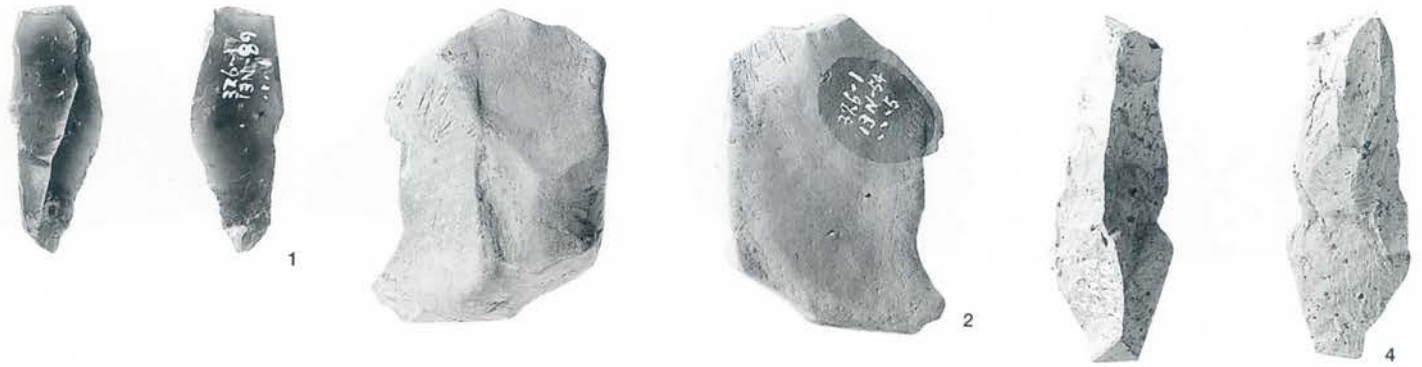
5



6

7

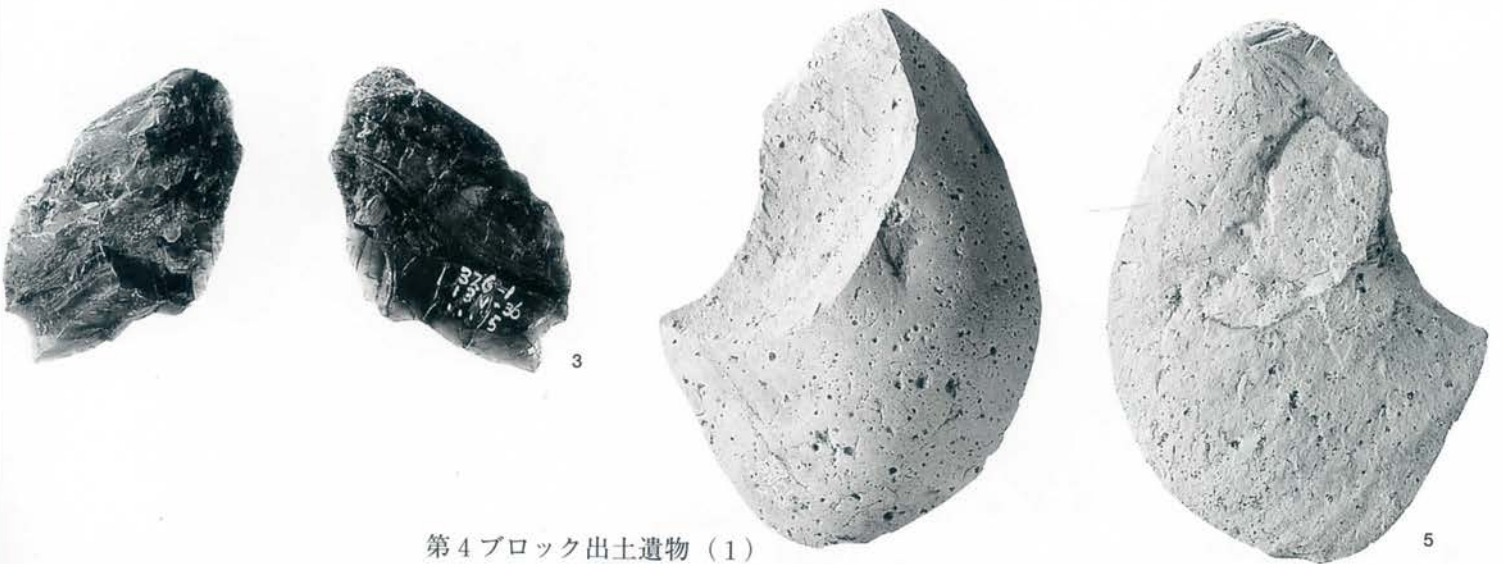
第3ブロック出土遺物 (2)



1

2

4



3

5

第4ブロック出土遺物 (1)



6



7



8



9



10



11



12



13



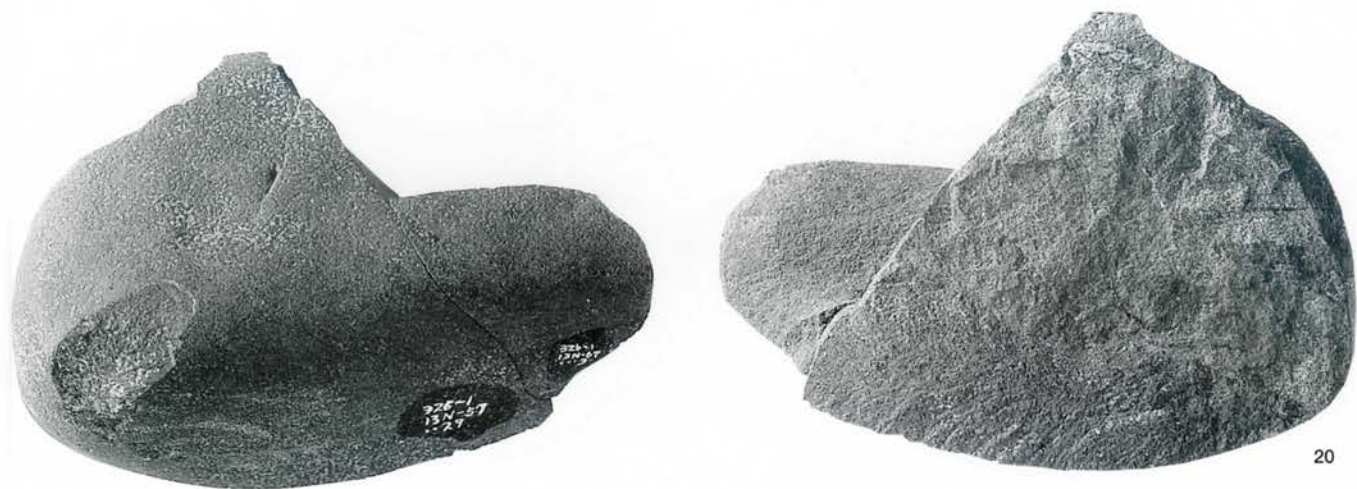
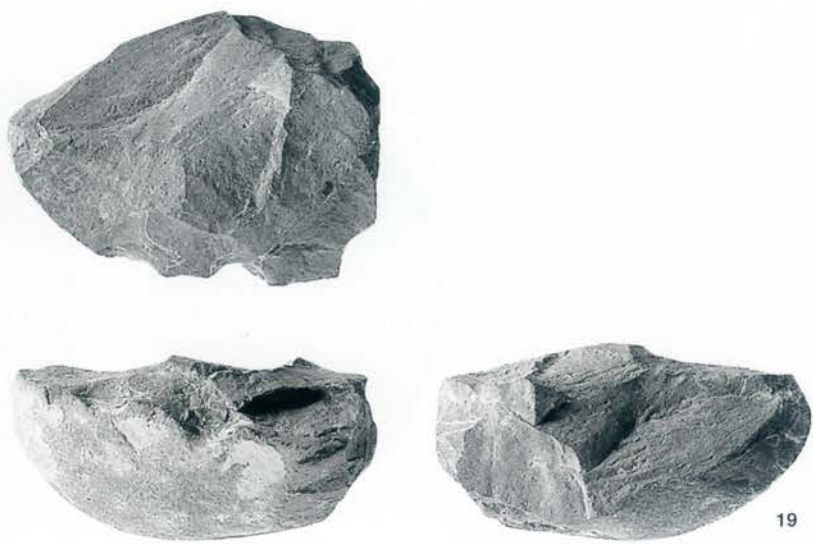
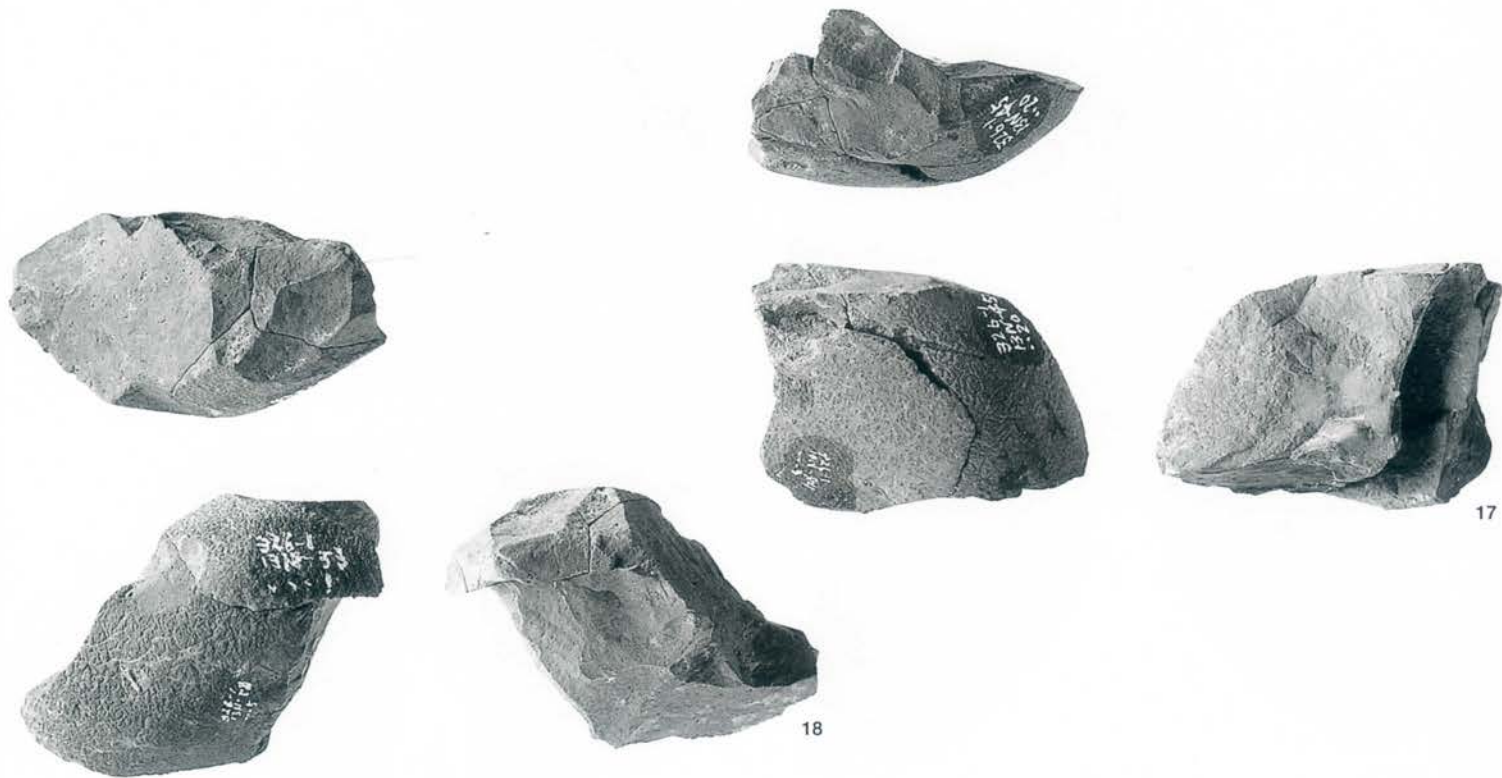
14

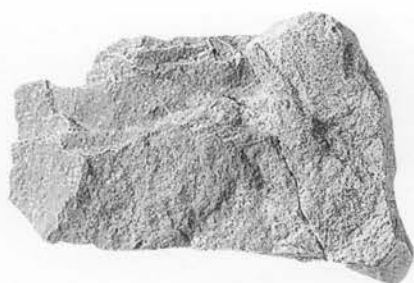


15



16





21



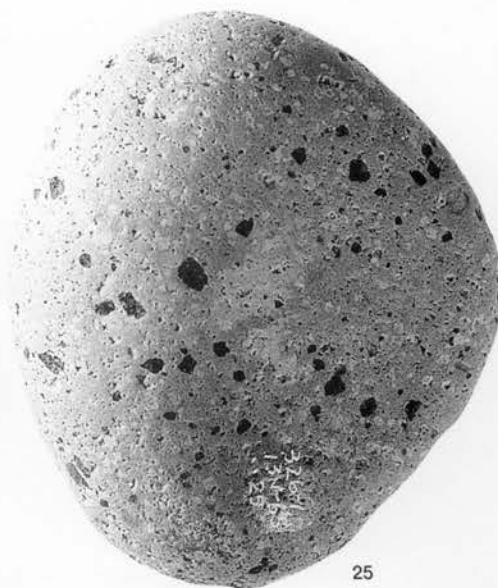
22



23

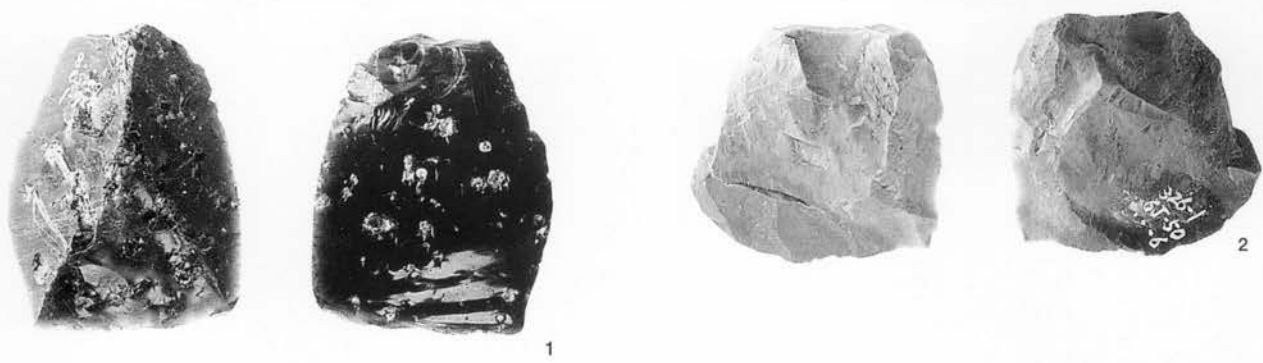


24



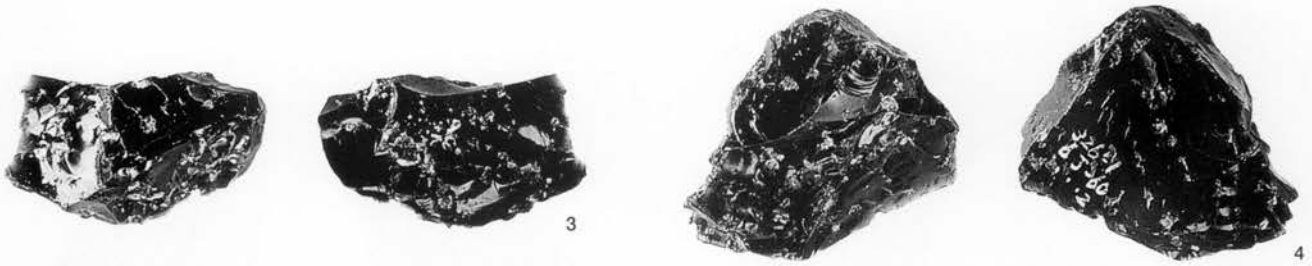
25





1

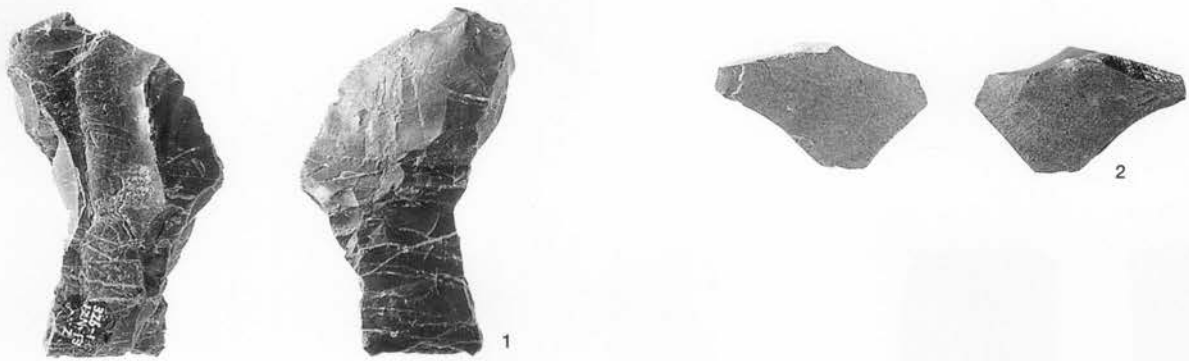
2



3

4

第6ブロック出土遺物



1

2

第7ブロック出土遺物



1

2

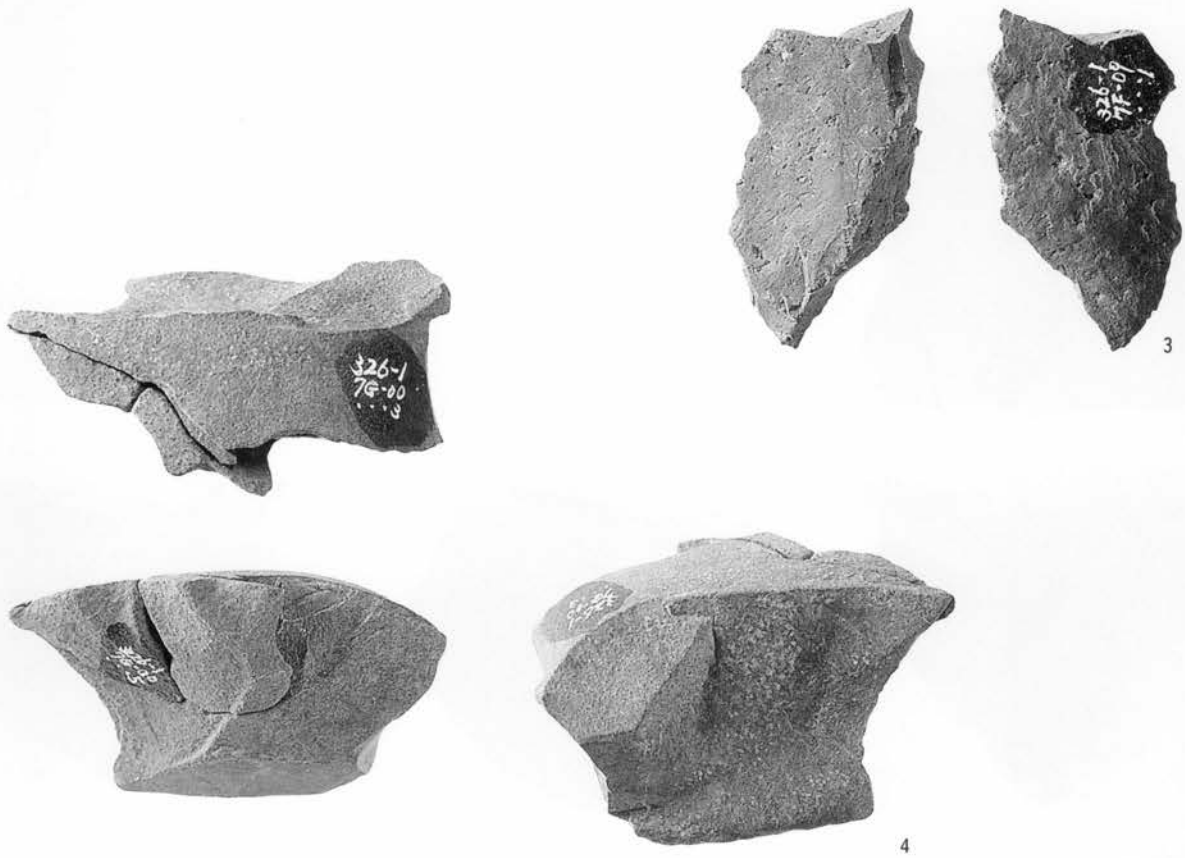
第8ブロック出土遺物



1

2

第9ブロック出土遺物 (1)



第9ブロック出土遺物 (2)



第10ブロック出土遺物



第11ブロック出土遺物 (1)



6



6 a



6 b



6 c



6 d



6 e



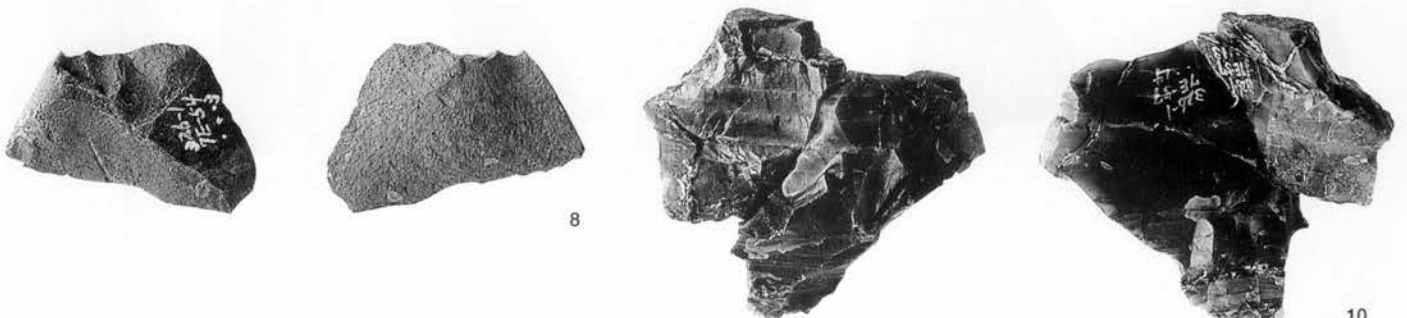
6 f



6 h



第11ブロック出土遺物 (3)

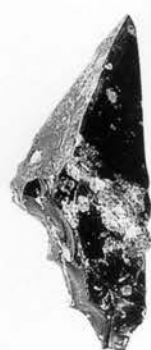


第12ブロック出土遺物 (1)



11

第12ブロック出土遺物 (2)



1



2



3

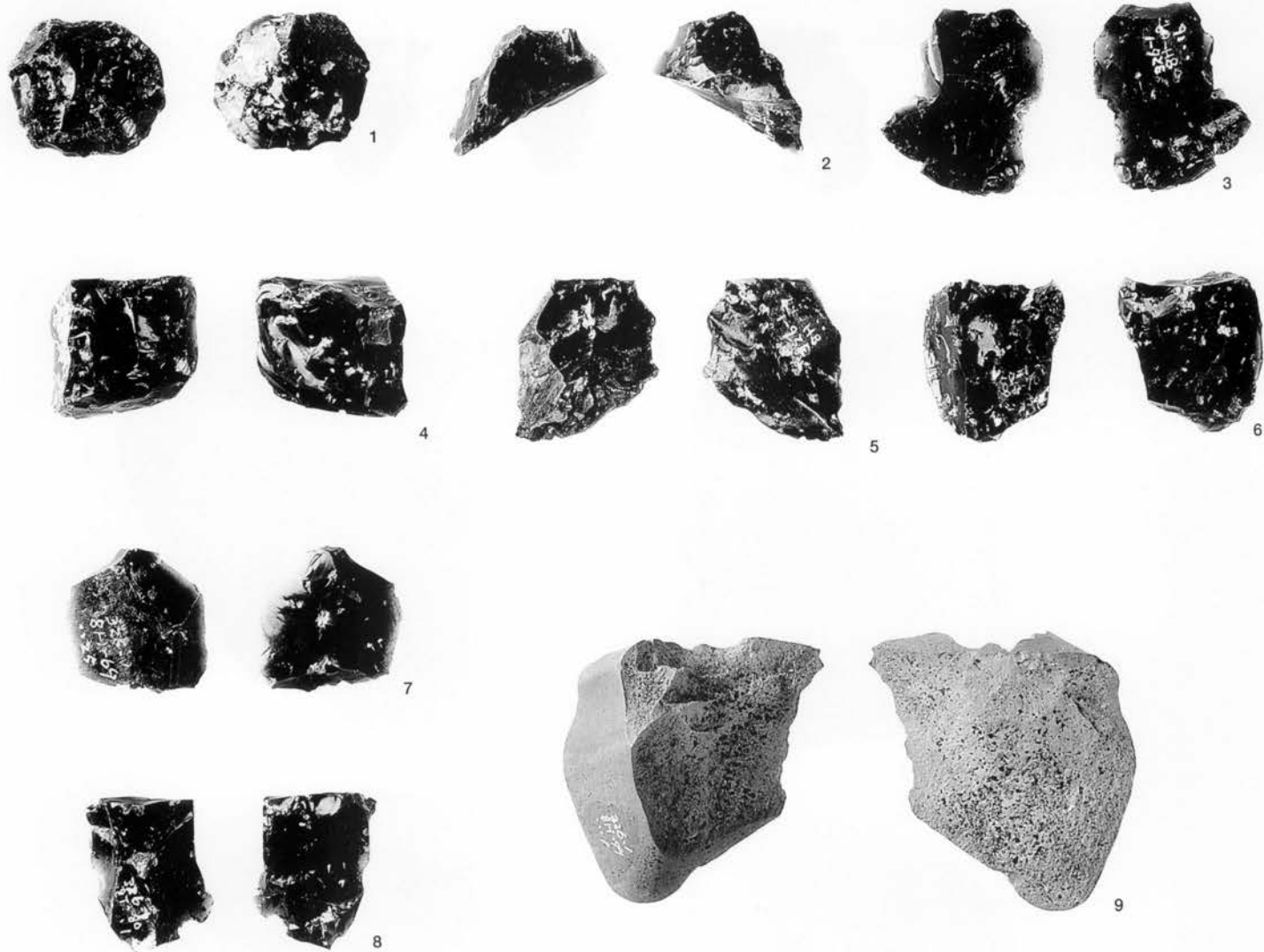


4

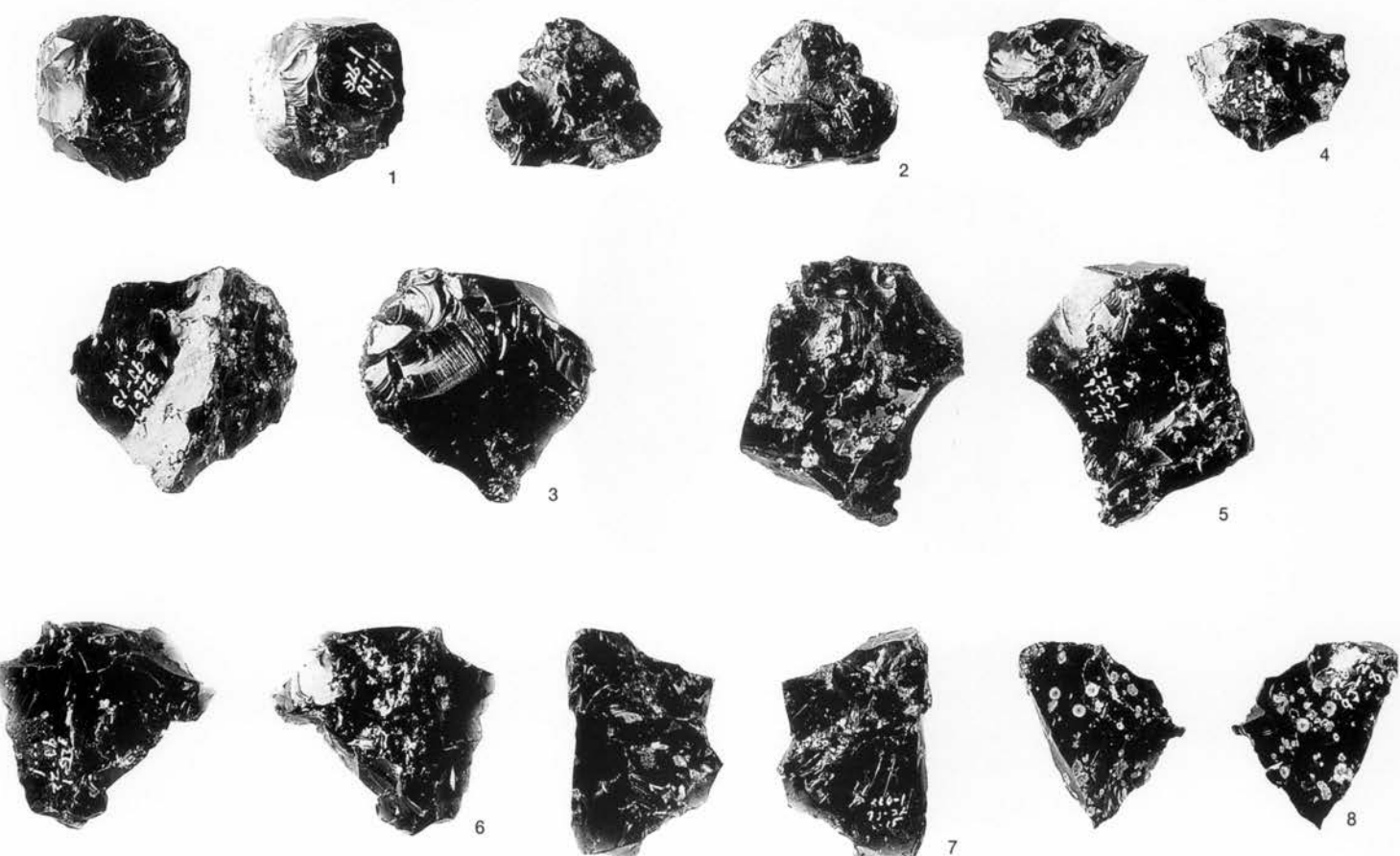


5

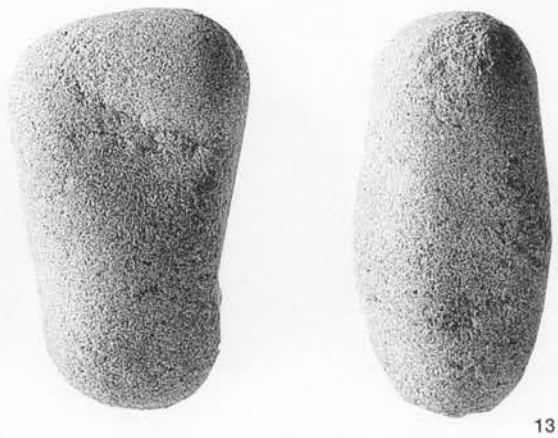
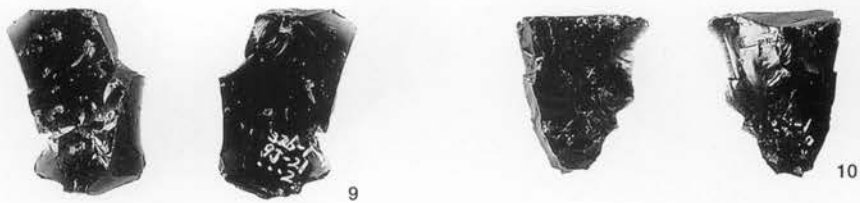
第13ブロック出土遺物

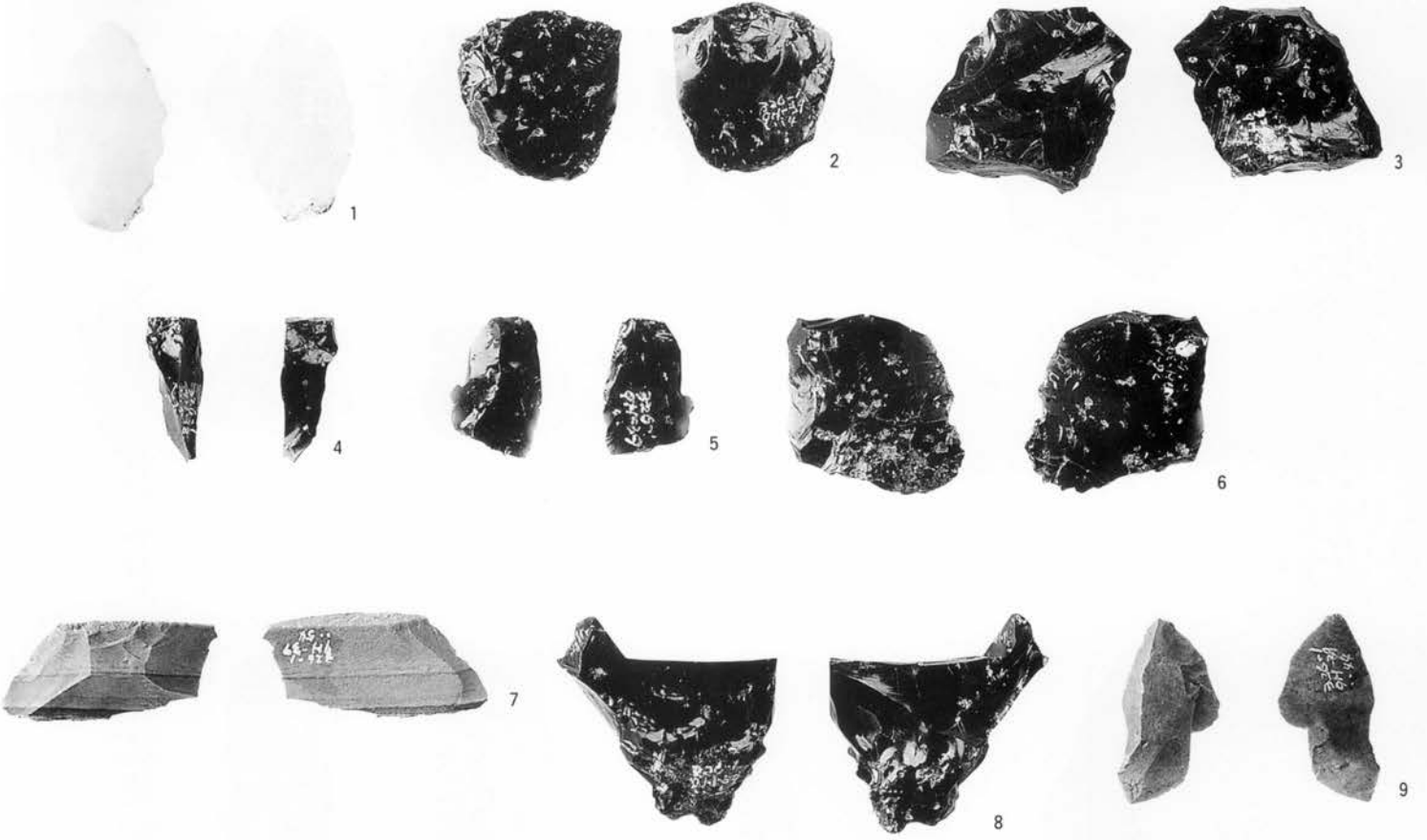


第14ブロック出土遺物

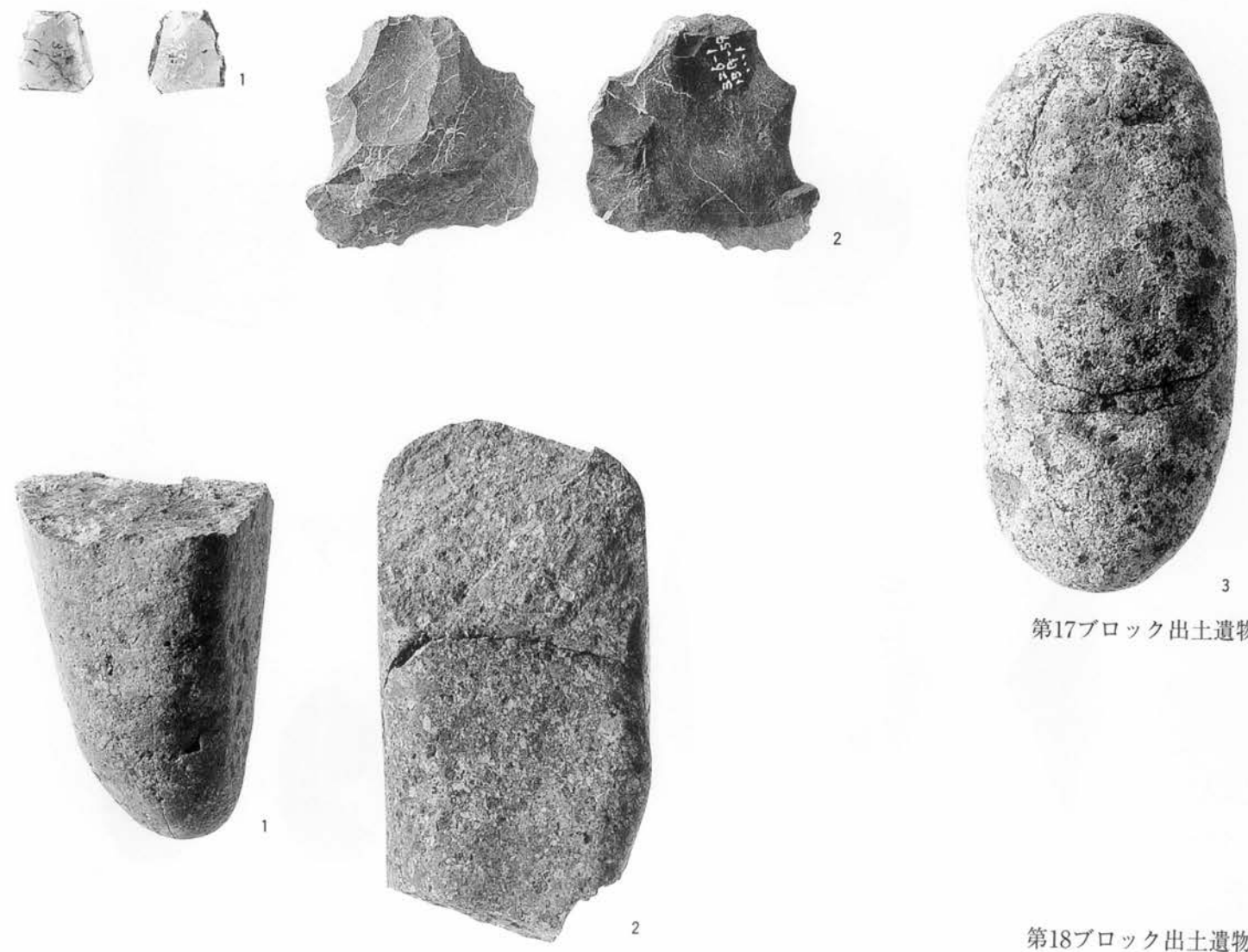


第15ブロック出土遺物 (1)



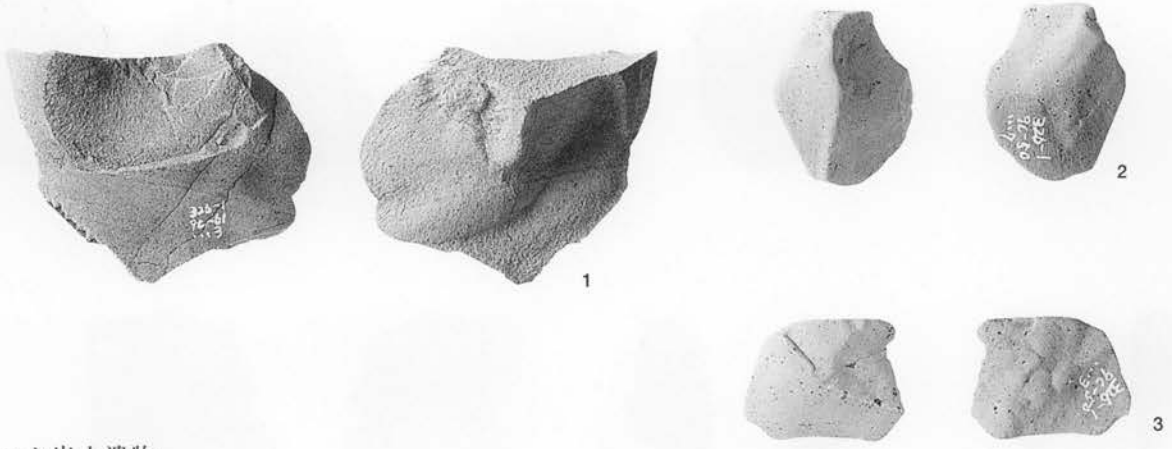


第16ブロック出土遺物

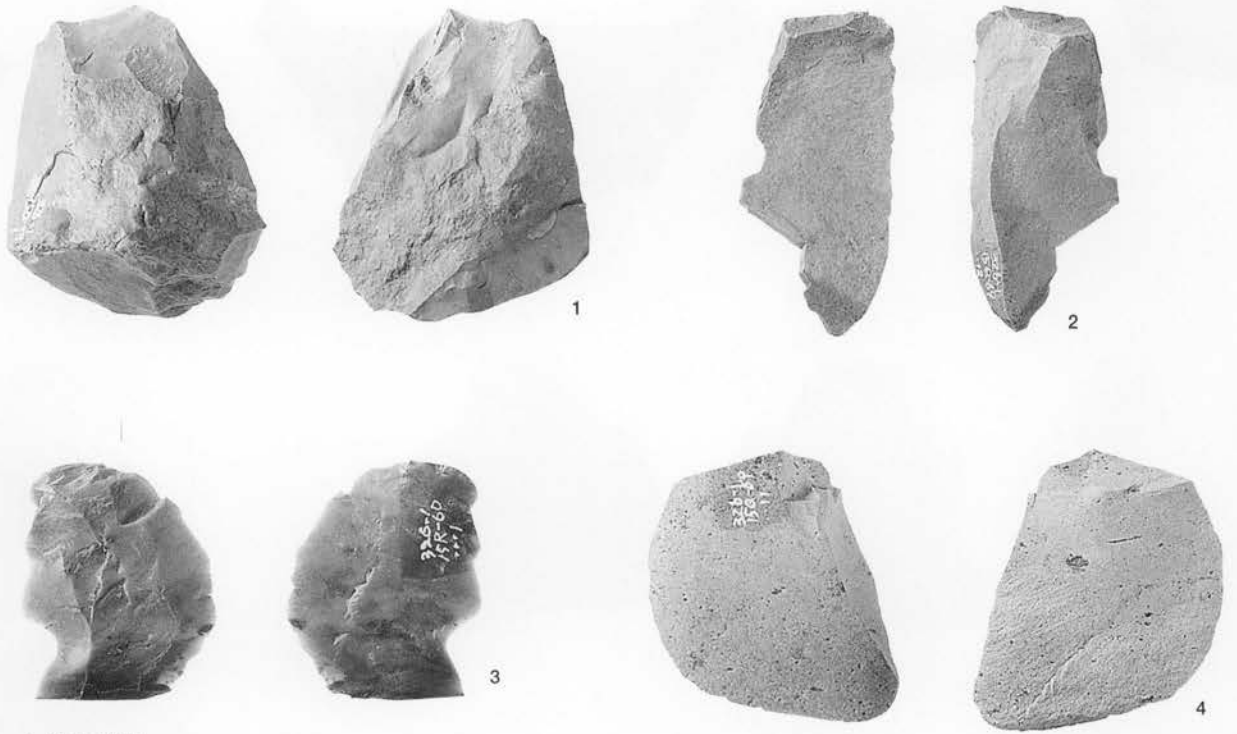


第17ブロック出土遺物

第18ブロック出土遺物



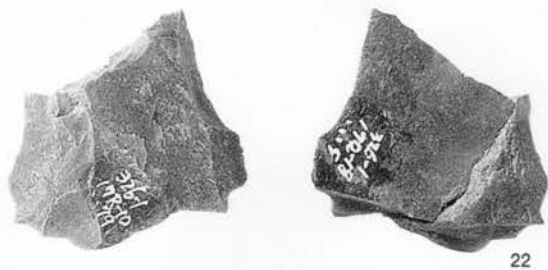
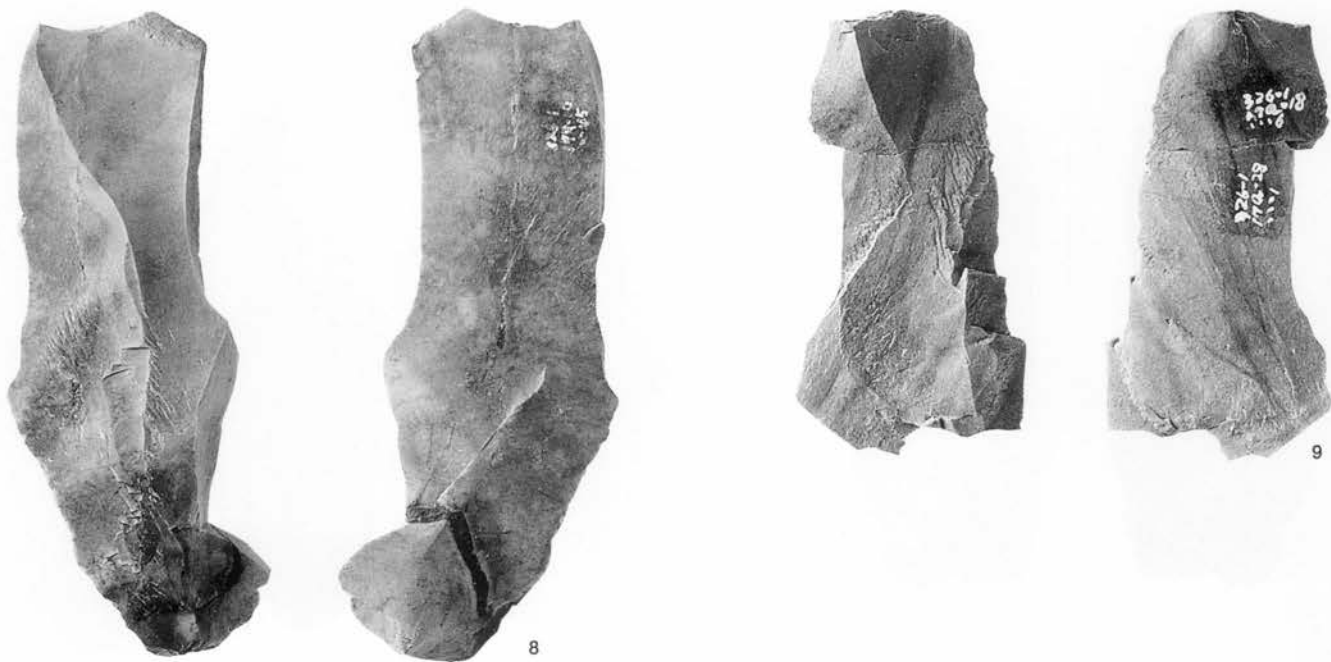
第19ブロック出土遺物



第20ブロック出土遺物

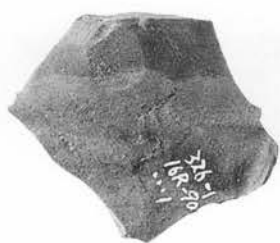


第21ブロック出土遺物 (1)





24



25



26



27



28



29



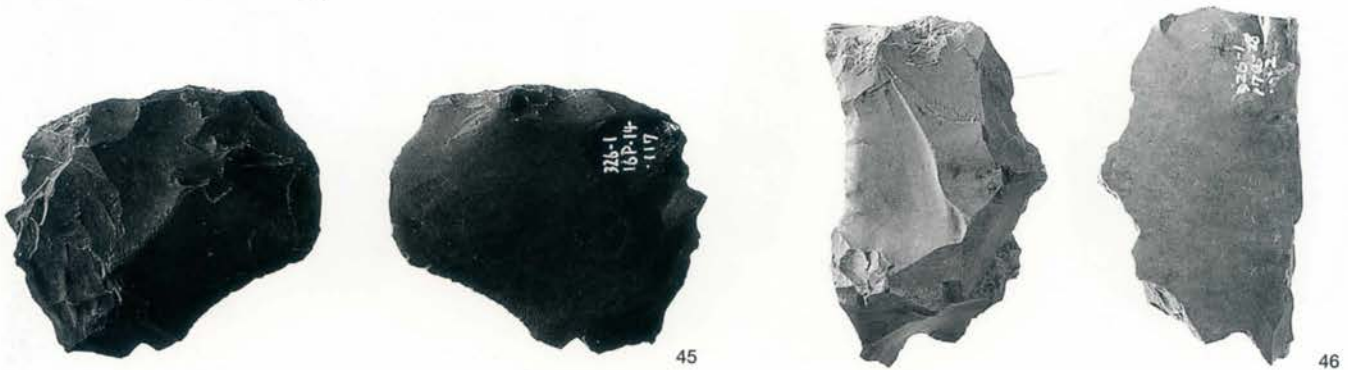
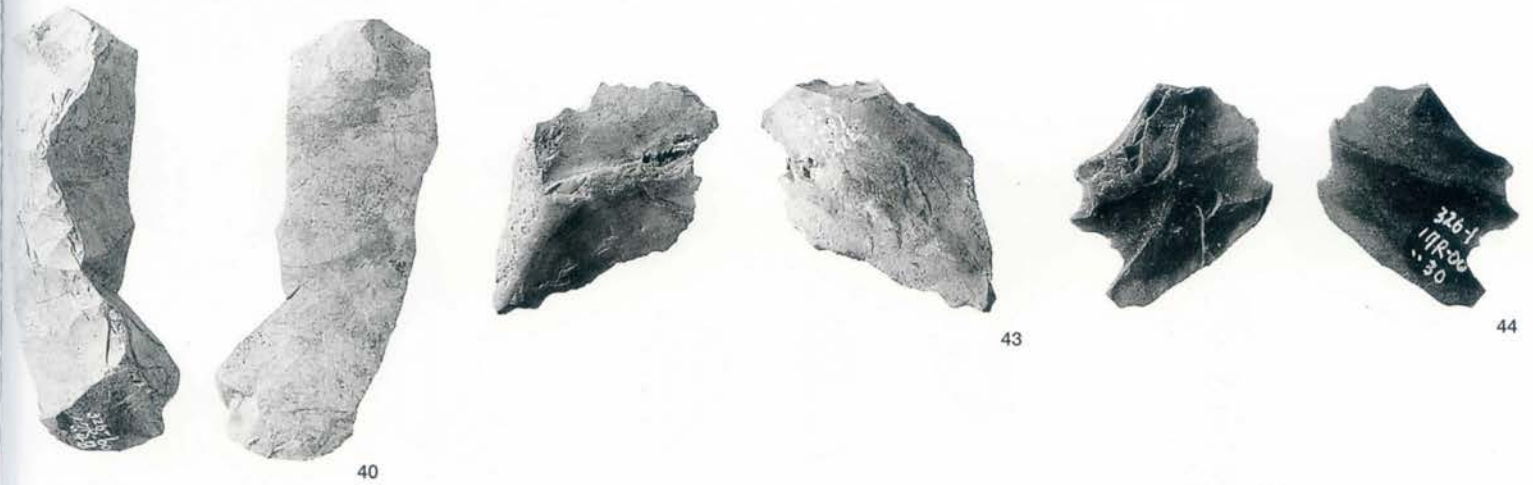
30

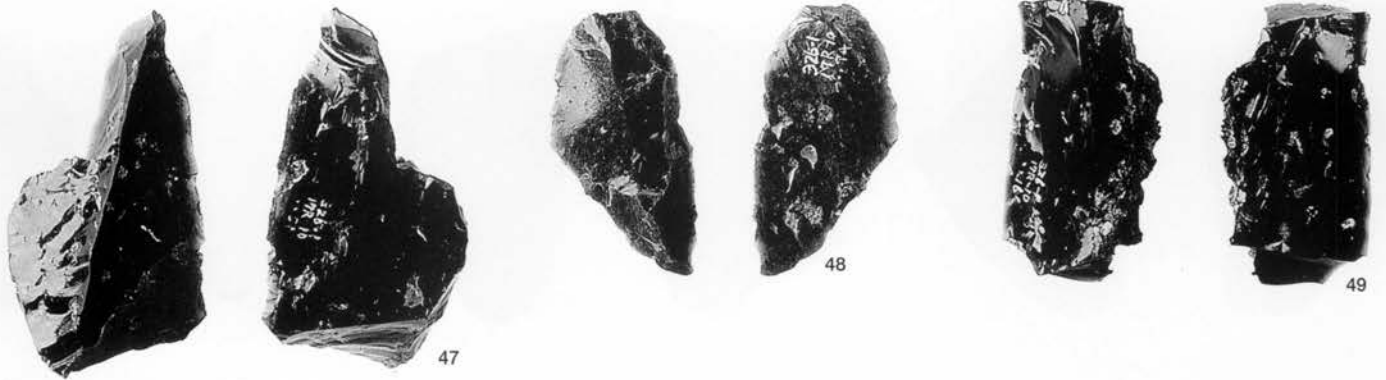


31



32

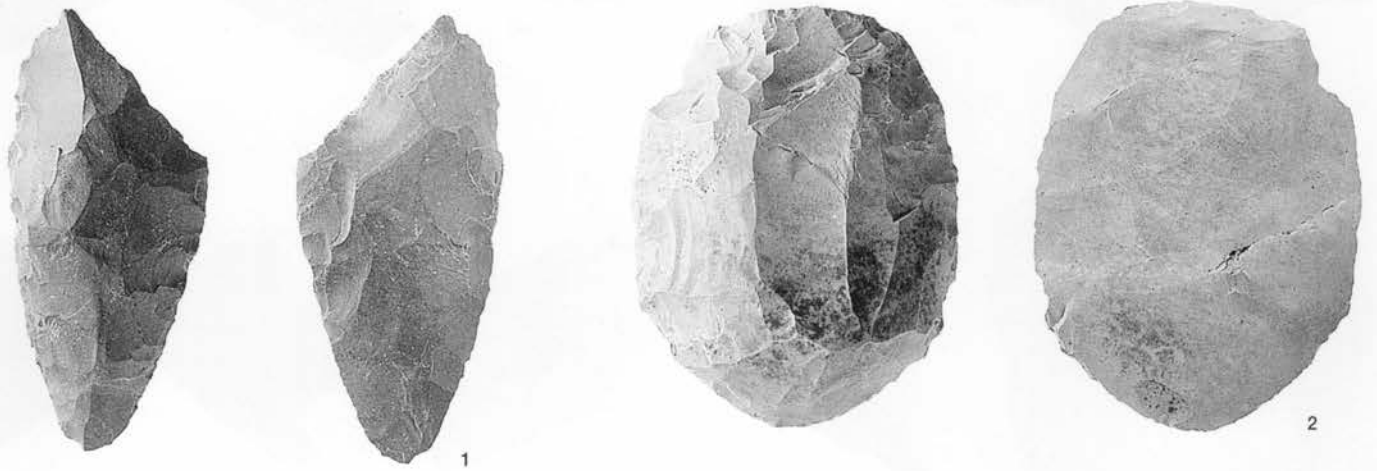




第21ブロック出土遺物 (5)



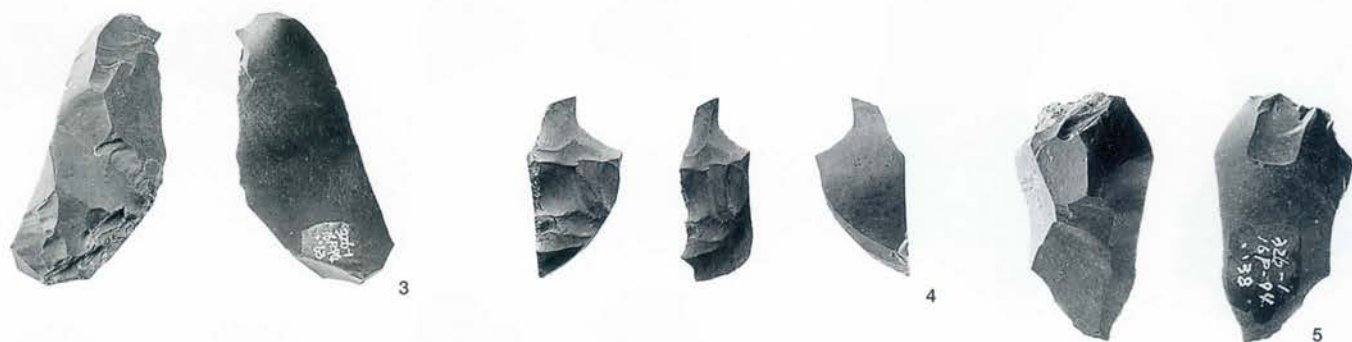
第22ブロック出土遺物



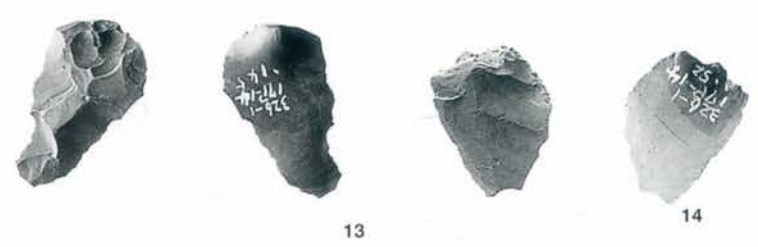
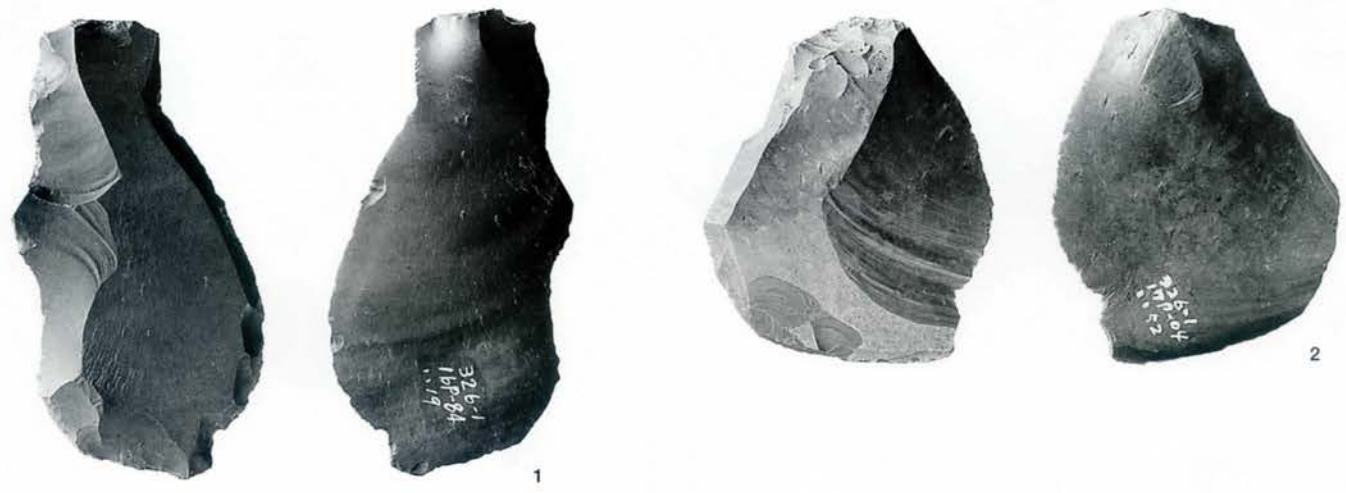
第23ブロック出土遺物 (1)



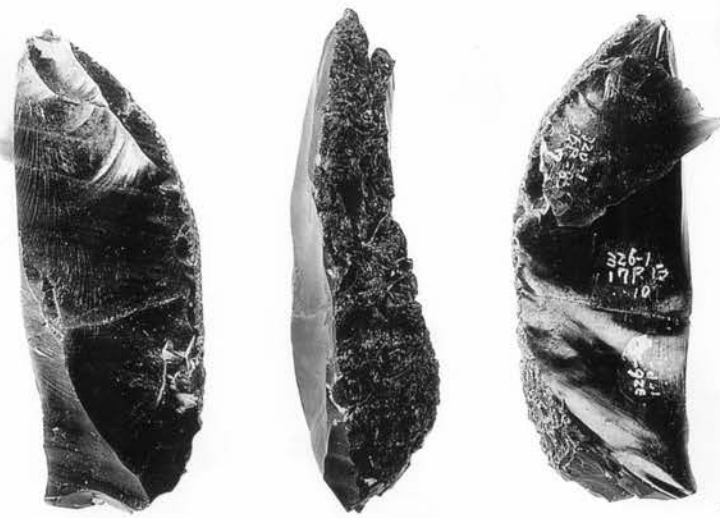
第23ブロック出土遺物 (2)



第24ブロック出土遺物



第25ブロック出土遺物 (1)

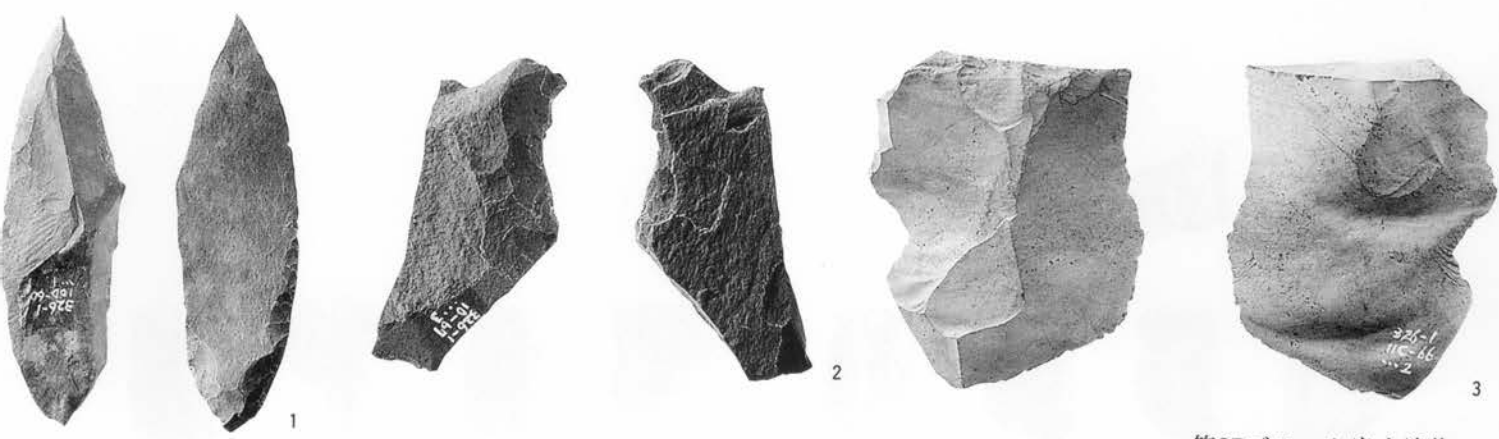


16

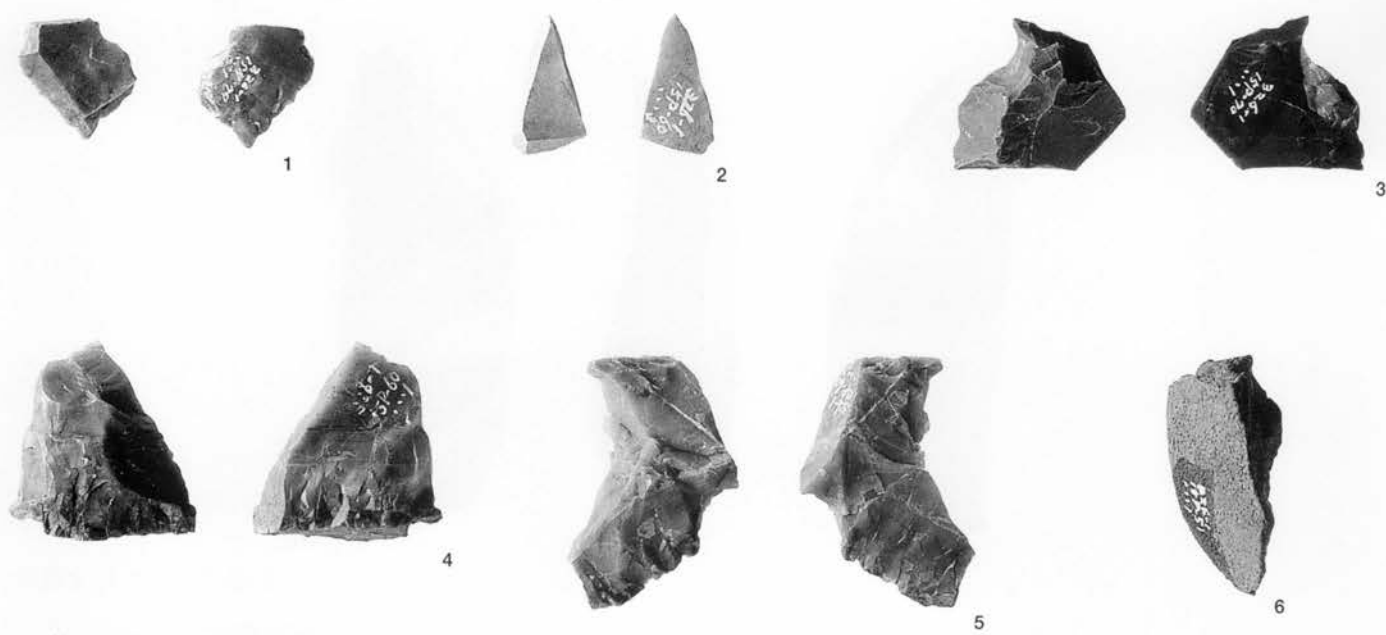
第25ブロック出土遺物 (2)



第26ブロック出土遺物



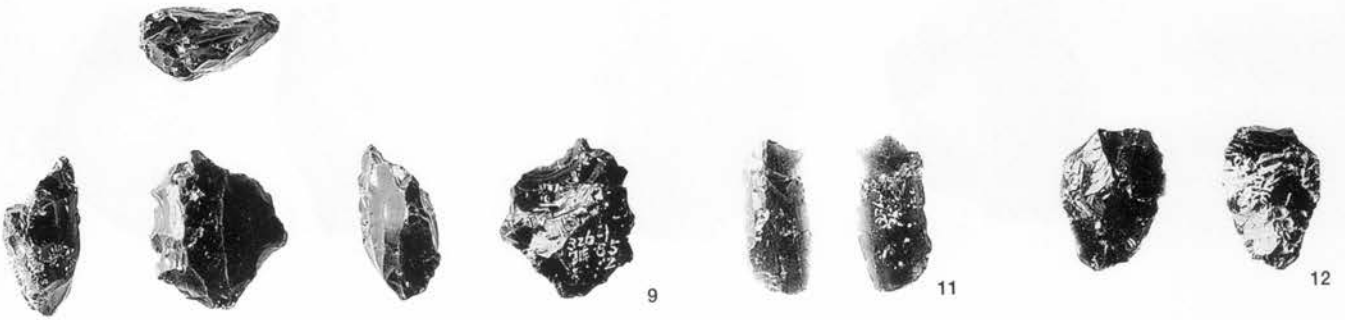
第27ブロック出土遺物



第28ブロック出土遺物



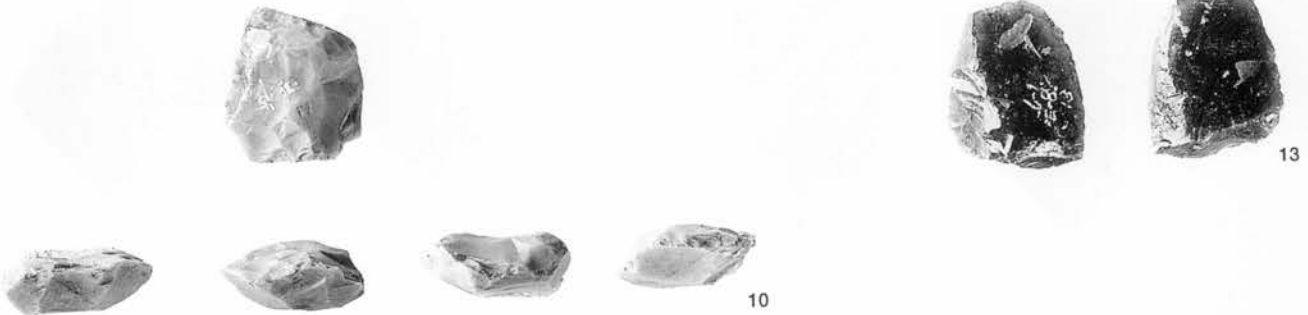
第29ブロック出土遺物 (1)



9

11

12



13

10



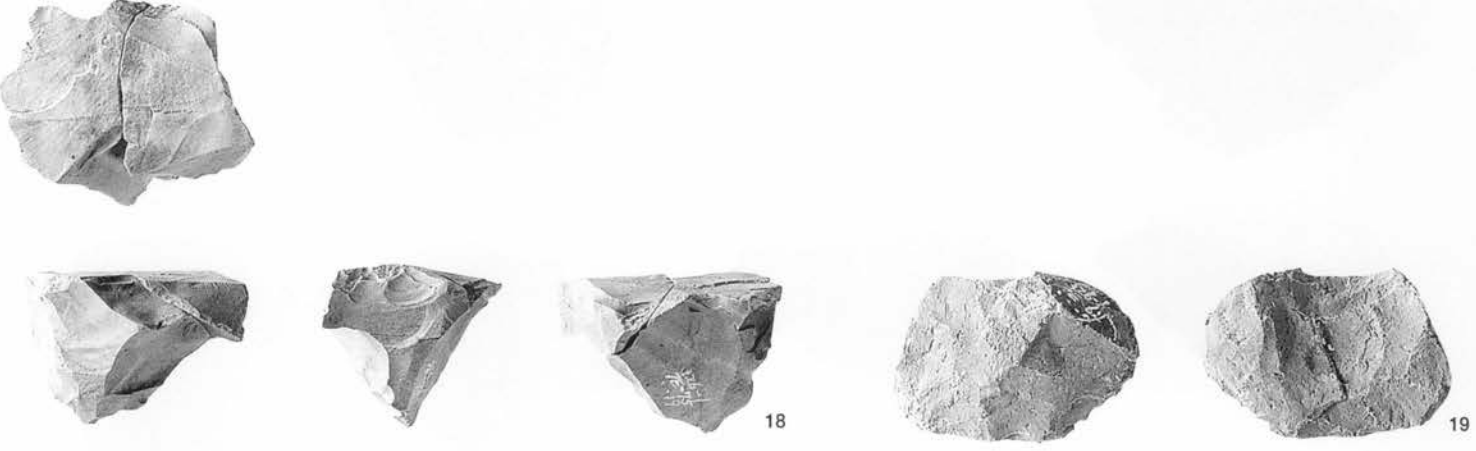
14



15

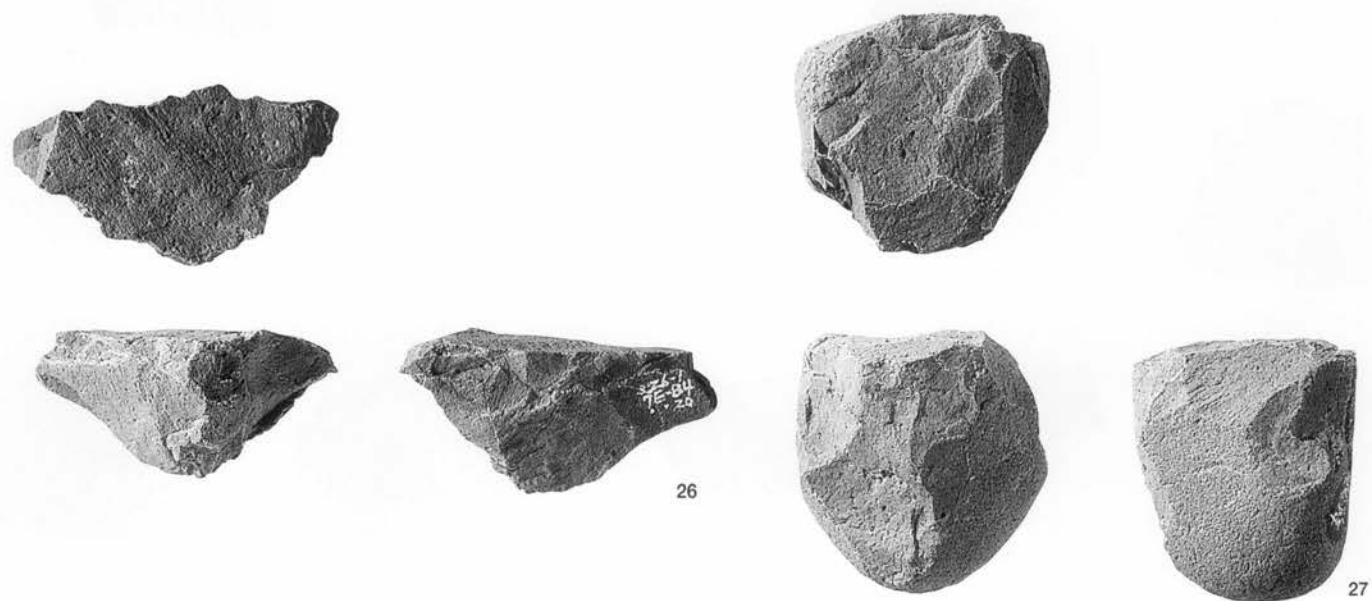
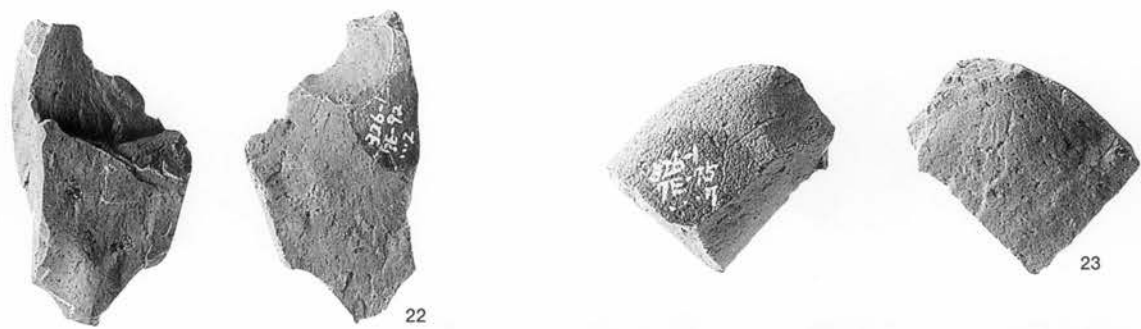
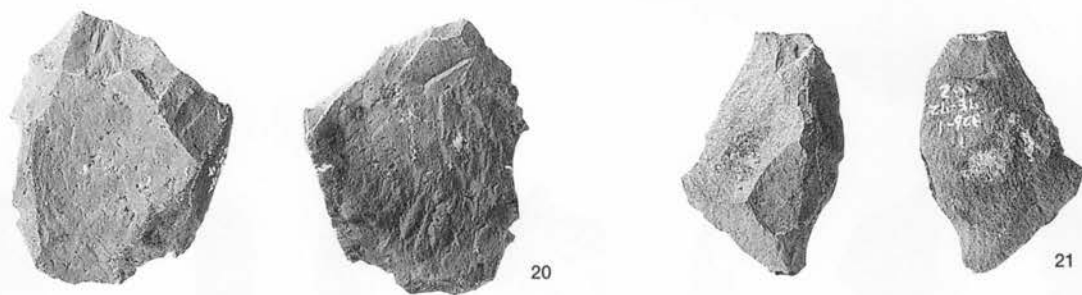
16

17



18

19

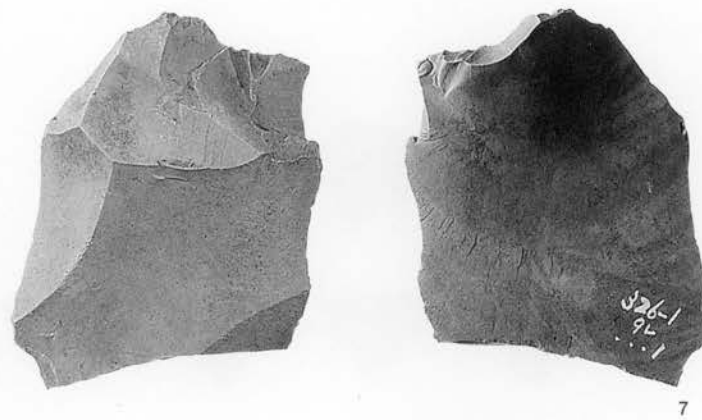
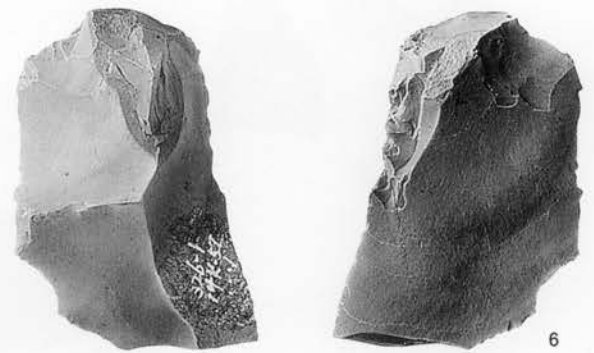




第30ブロック出土遺物



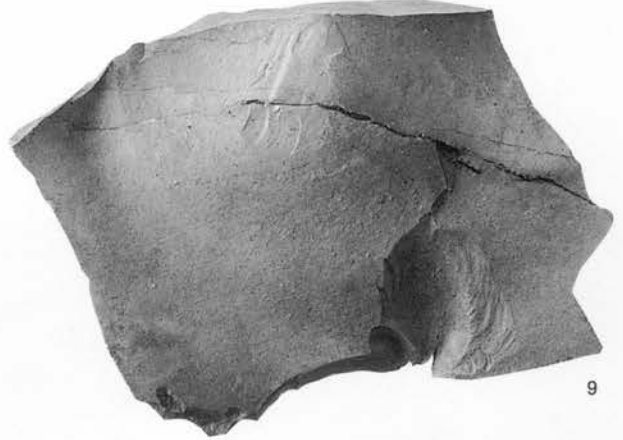
第31ブロック出土遺物



ブロック外出土遺物 (1)

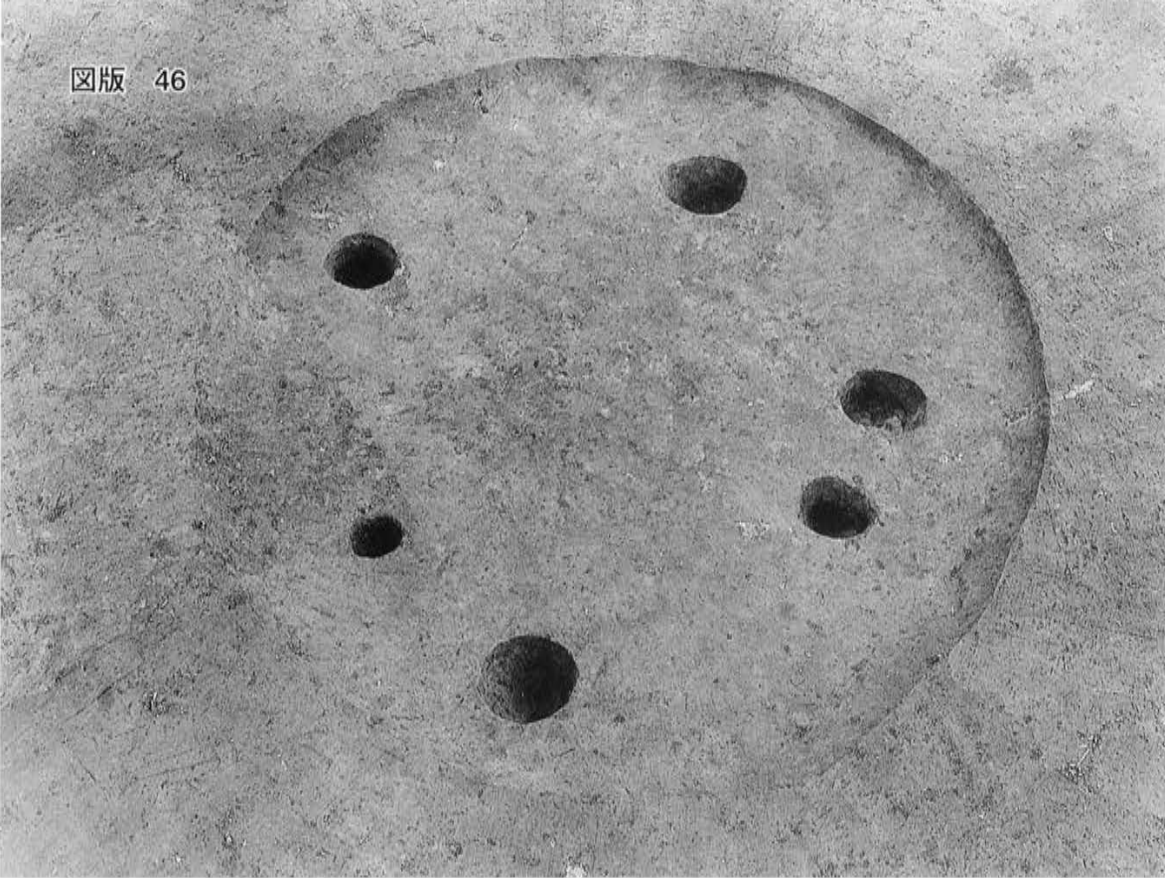


8

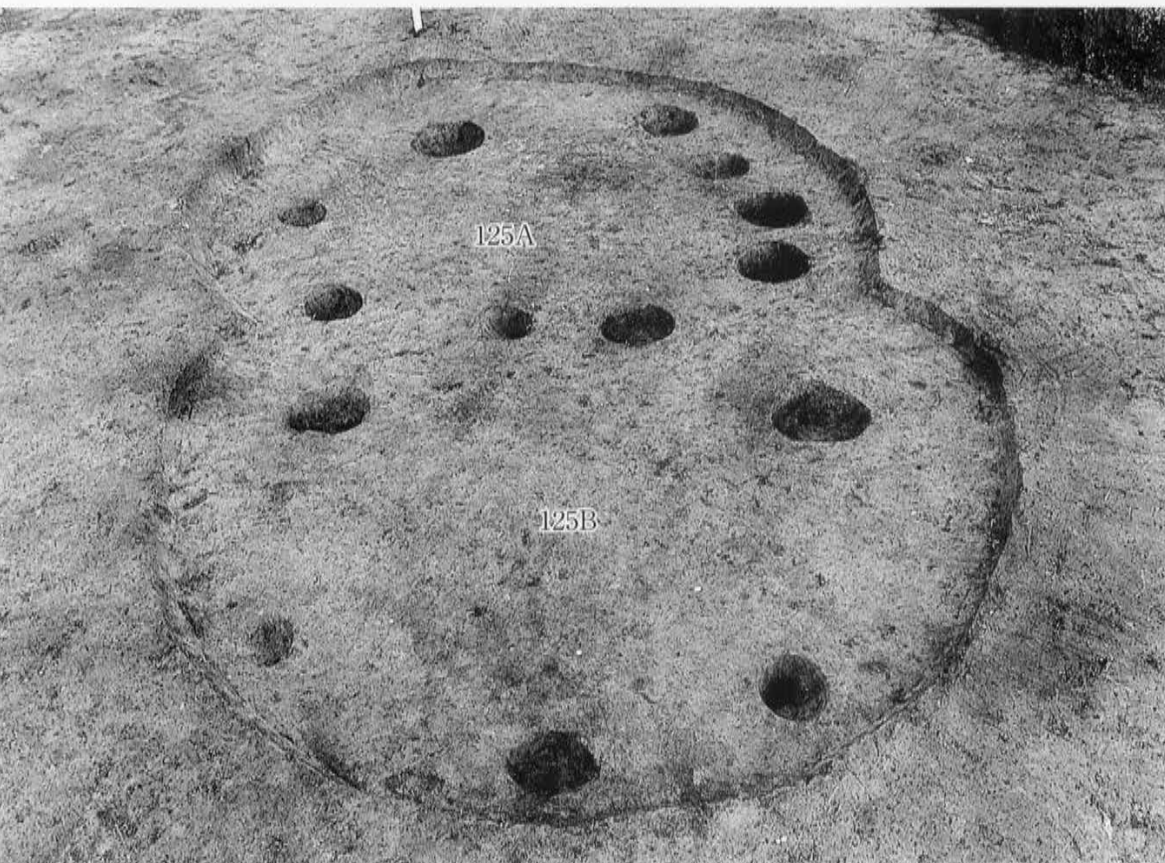


9

ブロック外出土遺物 (2)



099号住居跡全景（西から）



125A・B住居跡全景
（西から）



1



2



3

099号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



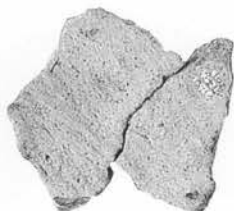
11



12



13



125A号住居跡出土遺物



1



2



3



4



5

125B号住居跡出土遺物



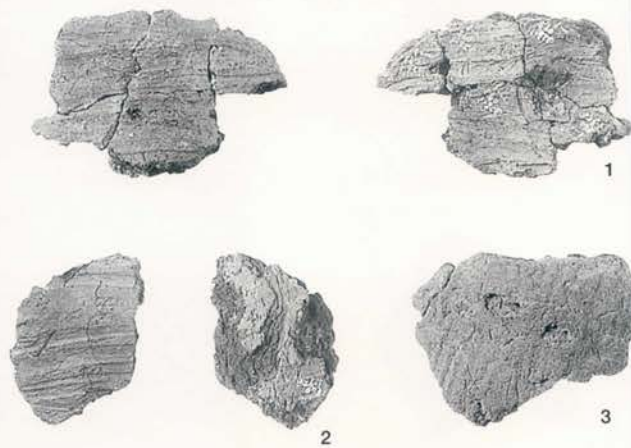
018A・B号炉穴（北から）



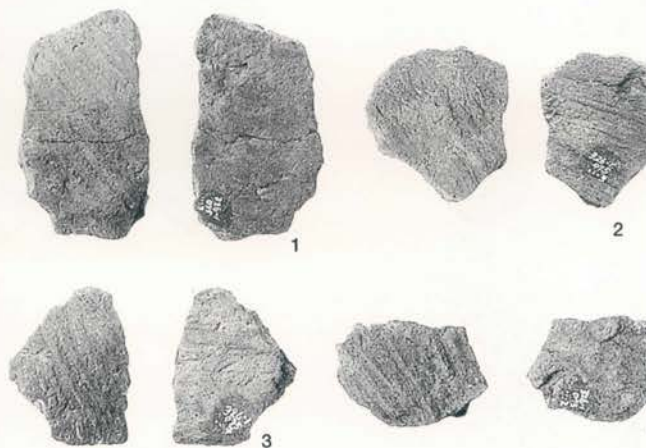
071・072号炉穴（北から）及び071号炉穴出土遺物



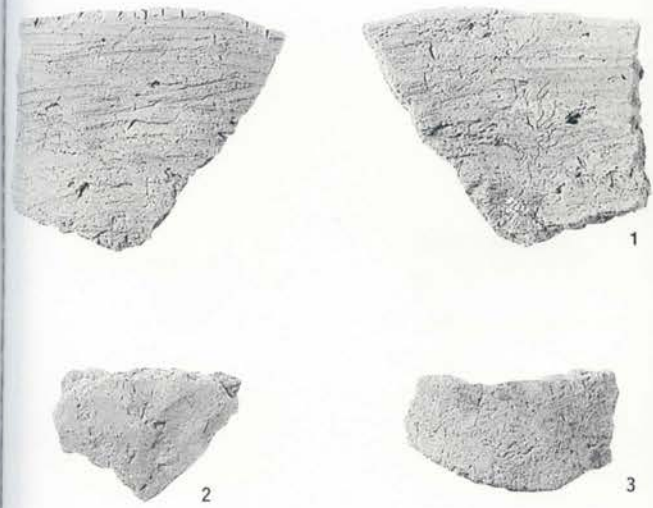
073号炉穴（西から）及び出土遺物



075号炉穴（西から）及び出土遺物



076号炉穴（西から）



077号炉穴（西から）及び出土遺物

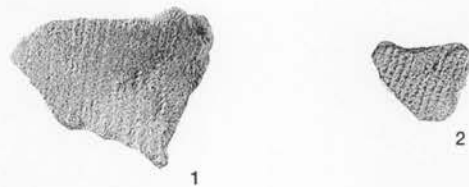


086号炉穴（北から）





096号炉穴（北から）及び出土遺物



100号炉穴（東から）及び出土遺物



115号炉穴（南から）及び出土遺物



117号炉穴遺物出土状況



117号炉穴 (南から)



117号炉穴出土遺物



120号炉穴 (北から)

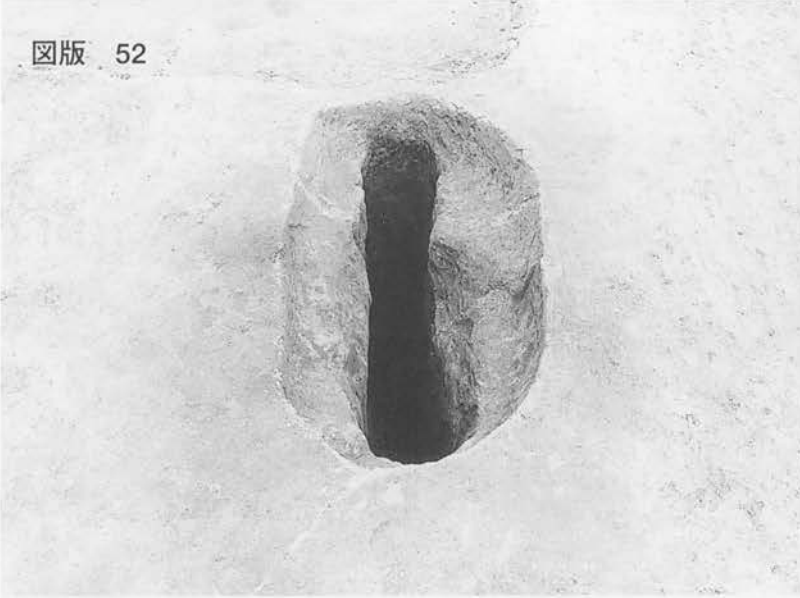


124号炉穴 (北から)



126号炉穴 (西から)





005号陥穴（南西から）



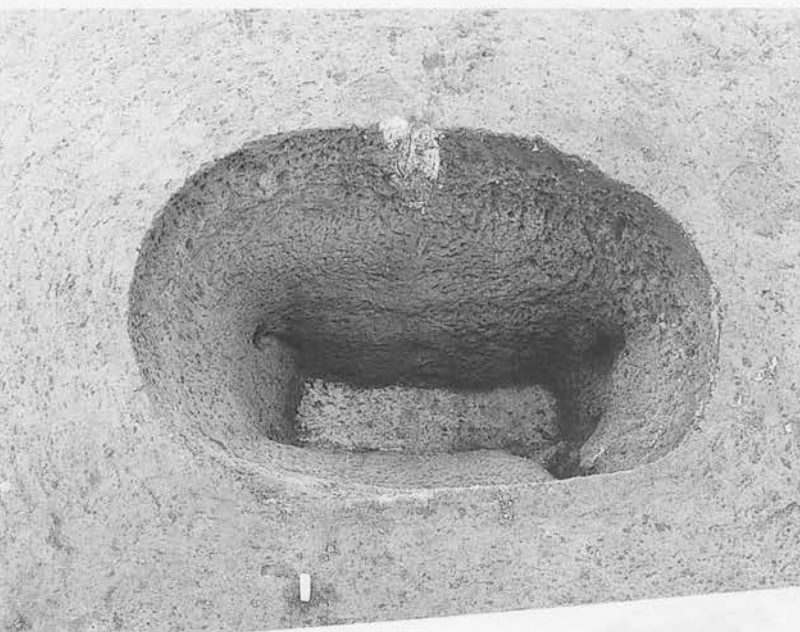
011号陥穴（南西から）



012号陥穴（南西から）



013号陥穴（北から）



037号陥穴（北西から）



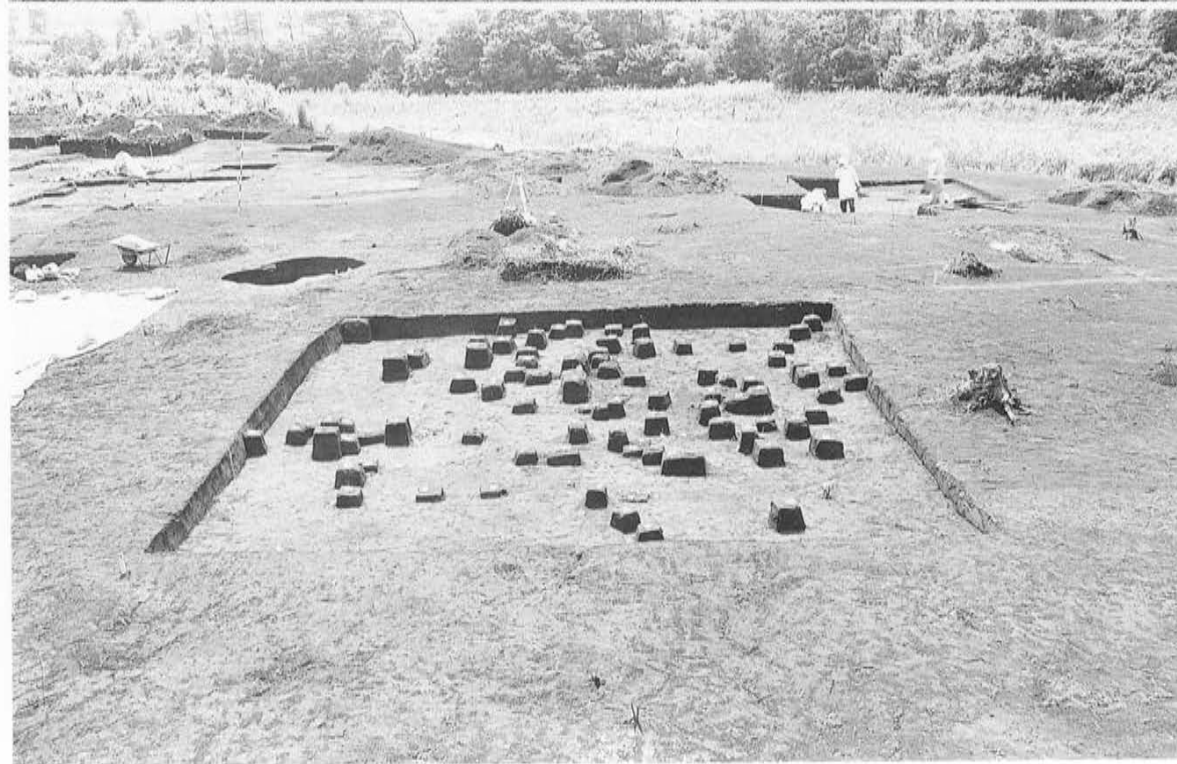
040号陥穴（北東から）



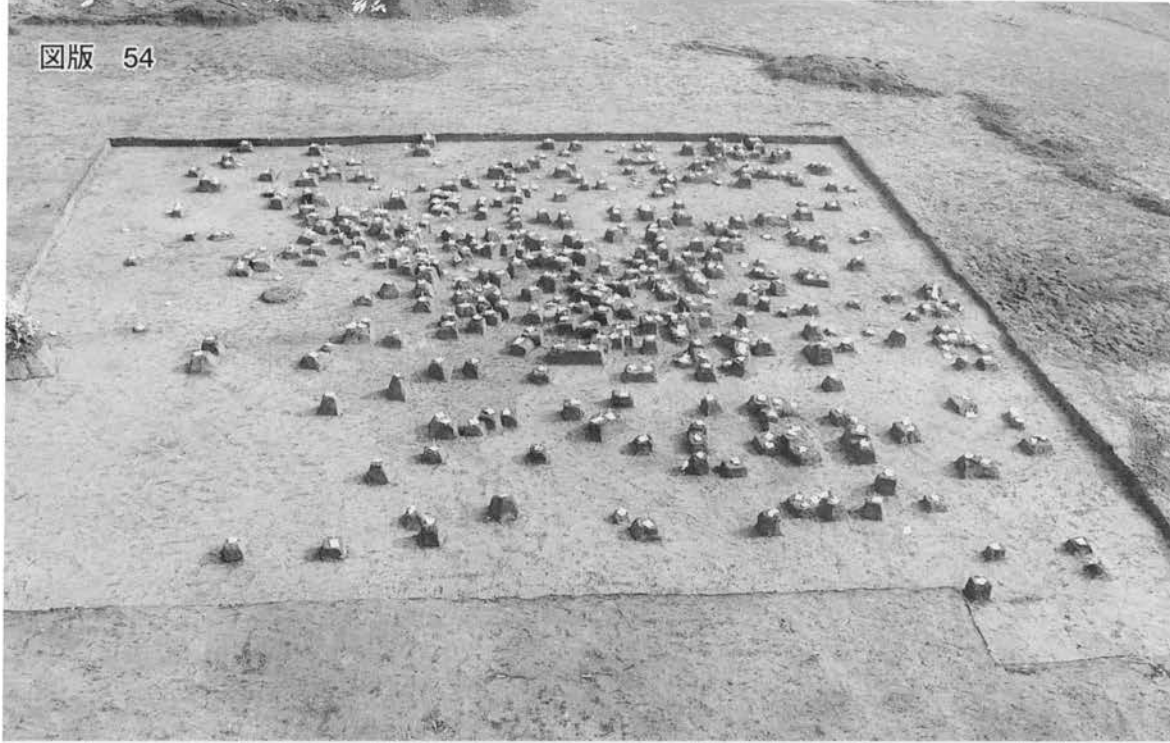
第1石鋤製作跡
遺物出土状況（北から）



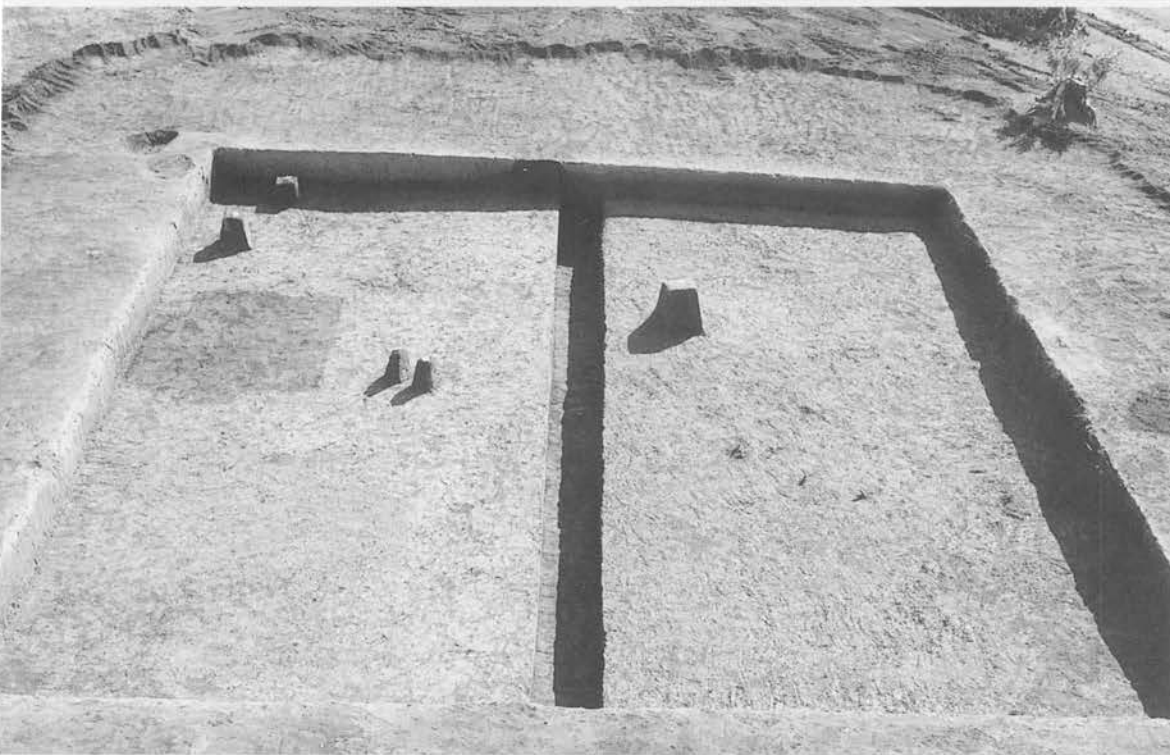
第2～7石鋤製作跡
遺物出土状況（北から）



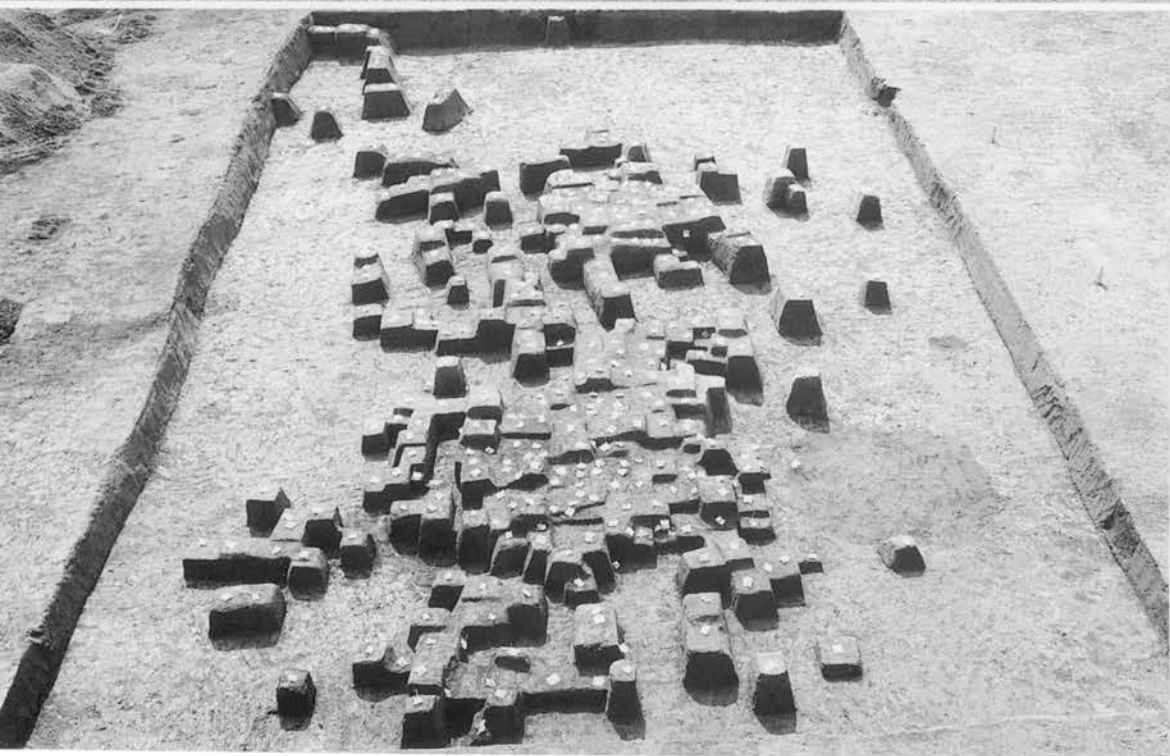
第8石鋤製作跡
遺物出土状況（東から）



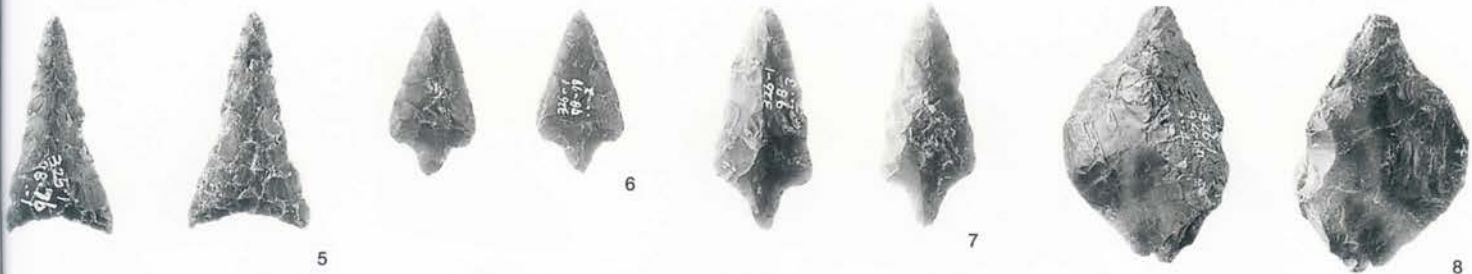
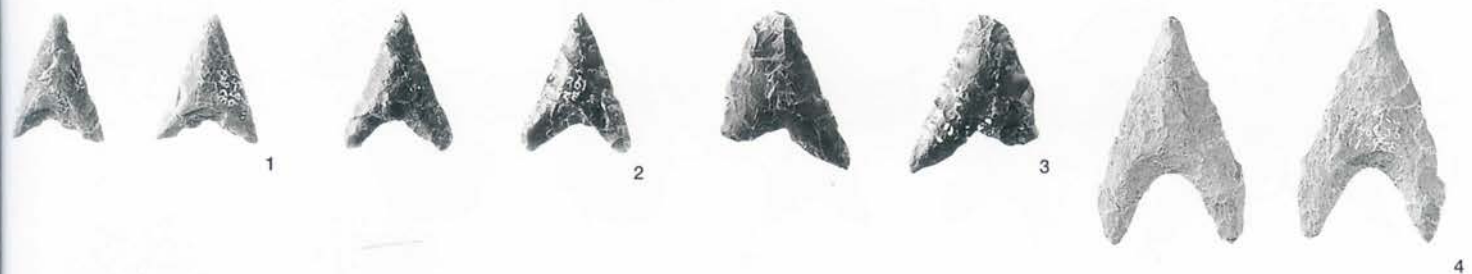
第9石鏃製作跡
遺物出土状況（西から）



第10石鏃製作跡
遺物出土状況（北から）



第11石鏃製作跡
遺物出土状況（北から）



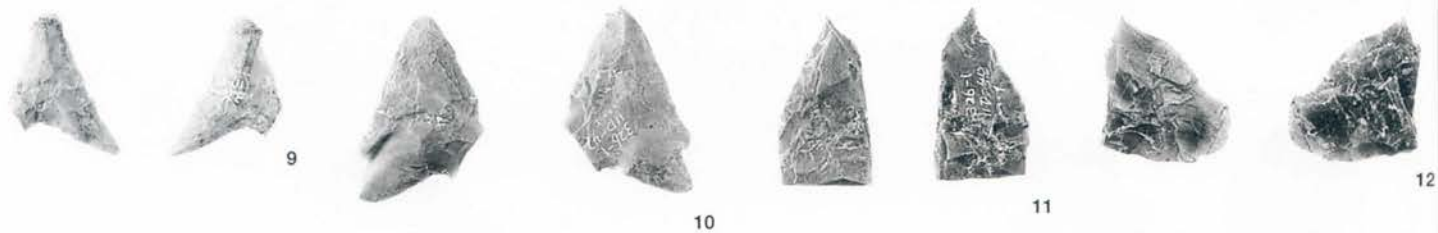
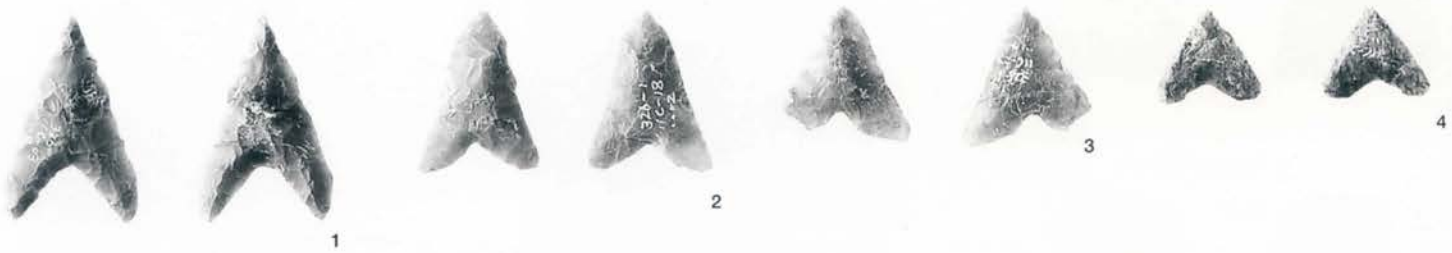
第1石鏃製作跡出土遺物



第2石鏃製作跡出土遺物



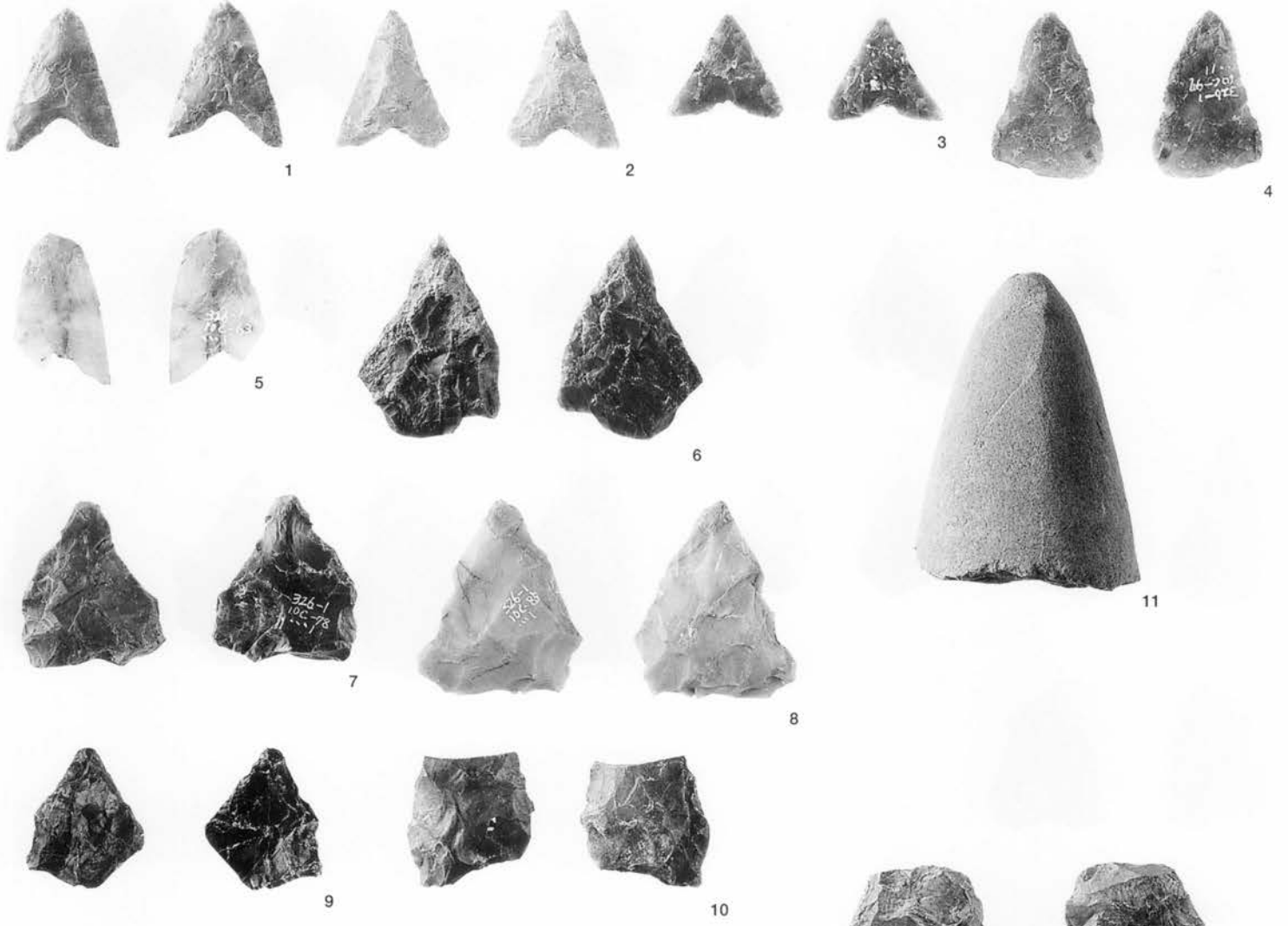
第3石鏃製作跡出土遺物



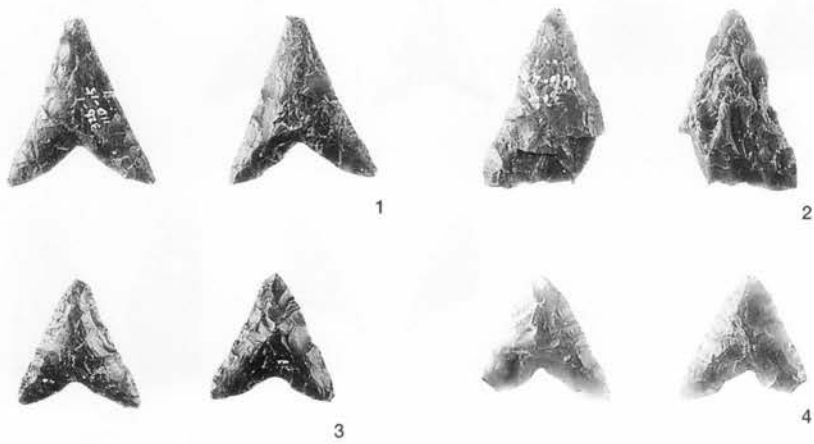
第4石鏃製作跡出土遺物 (1)



第4石鏃製作跡出土遺物(2)



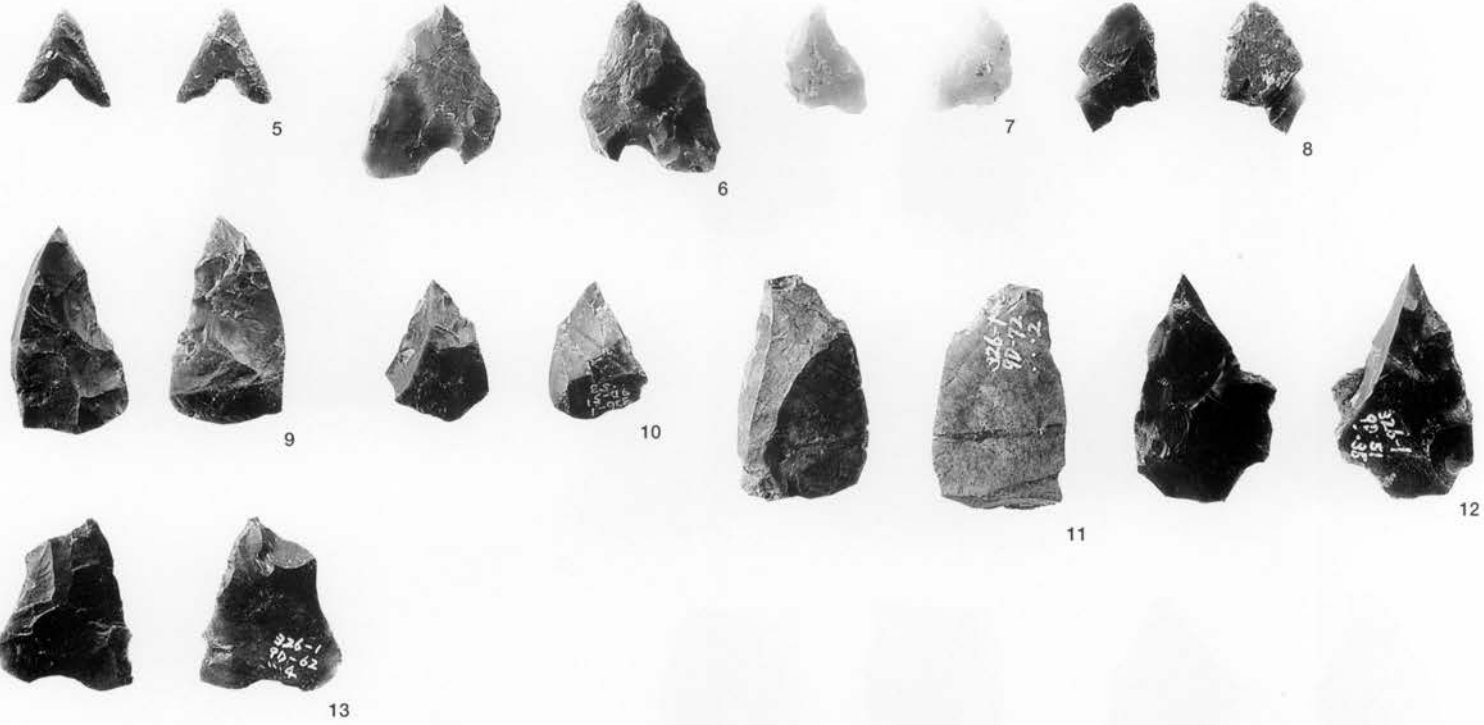
第5石鏃製作跡出土遺物



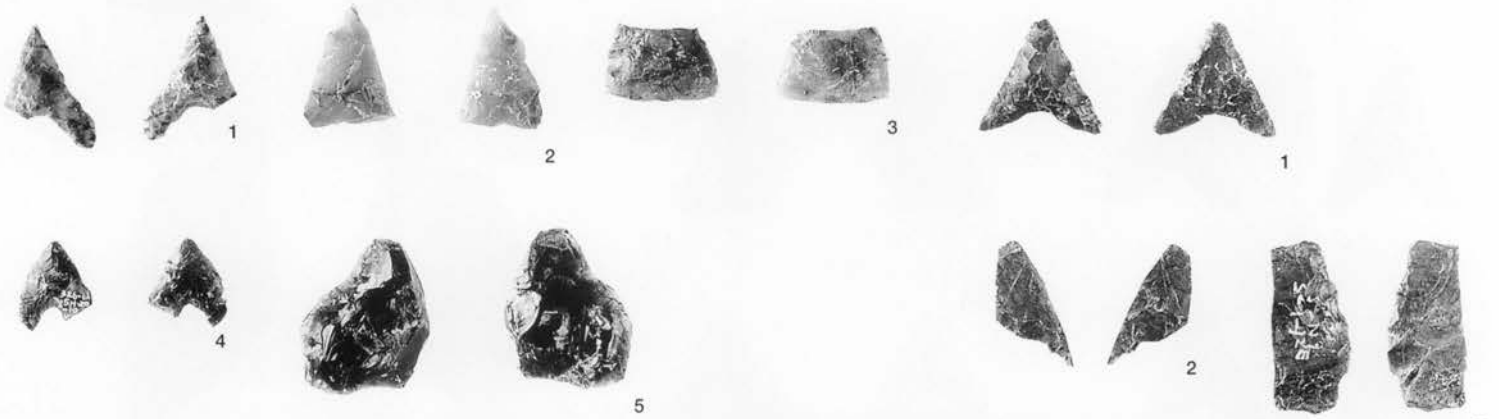
第6石鏃製作跡出土遺物



第7石鏃製作跡出土遺物



第8石鏃製作跡出土遺物

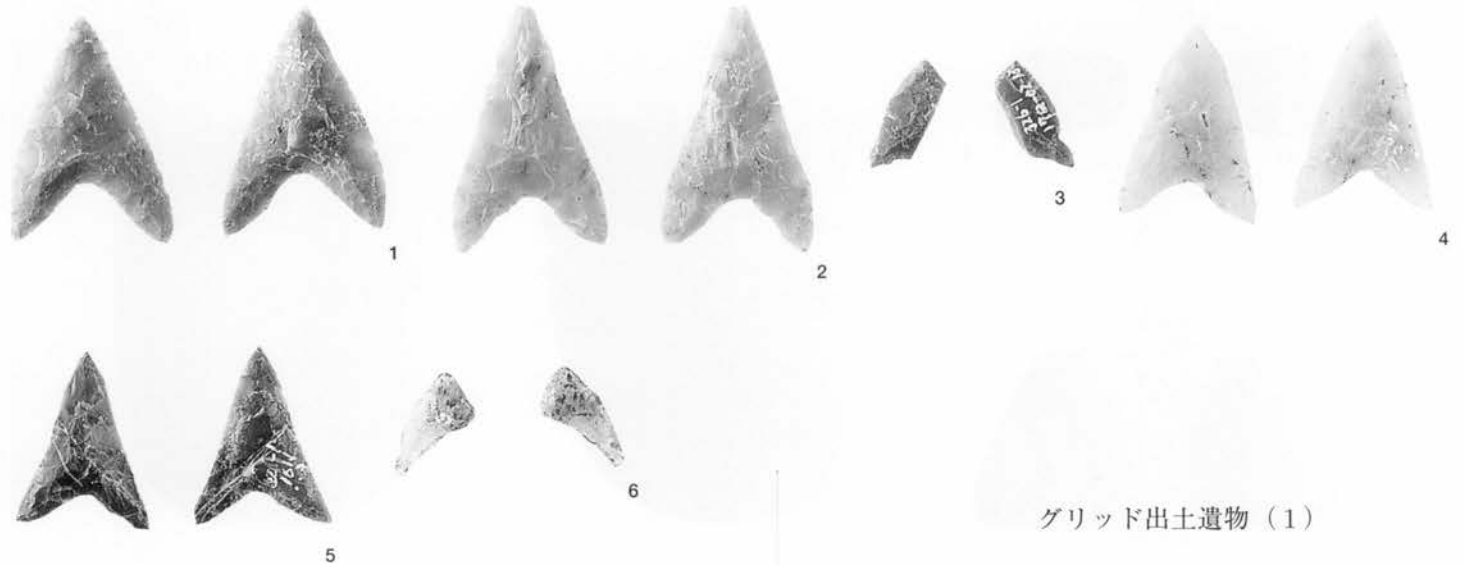


第9石鏃製作跡出土遺物

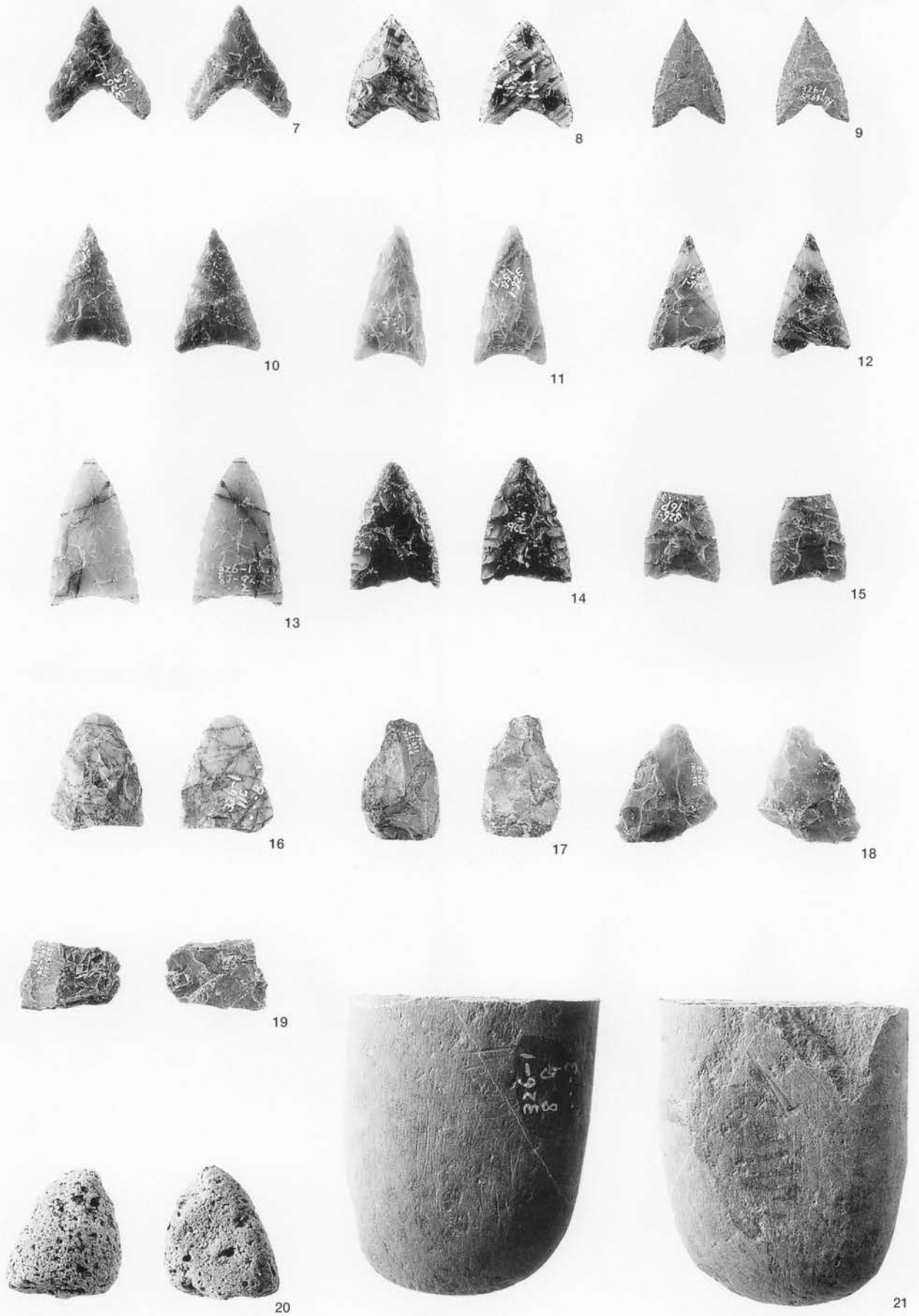
第10石鏃製作跡出土遺物



第11石鏃製作跡出土遺物



グリッド出土遺物 (1)





1



1



2



3



4



5



6



7



8



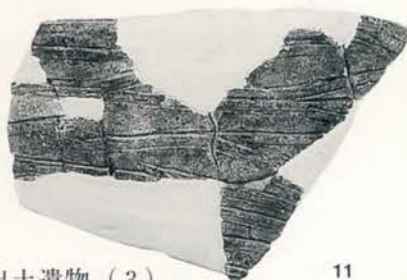
10



8



9



11

グリッド出土遺物 (3)



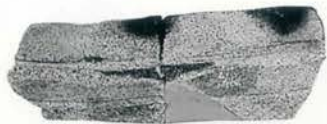
12



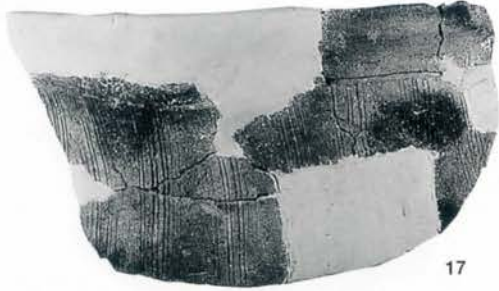
13



14



15



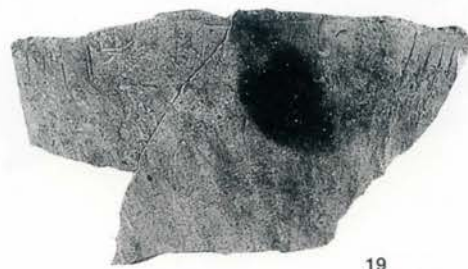
17



16



18



19



20



21



22



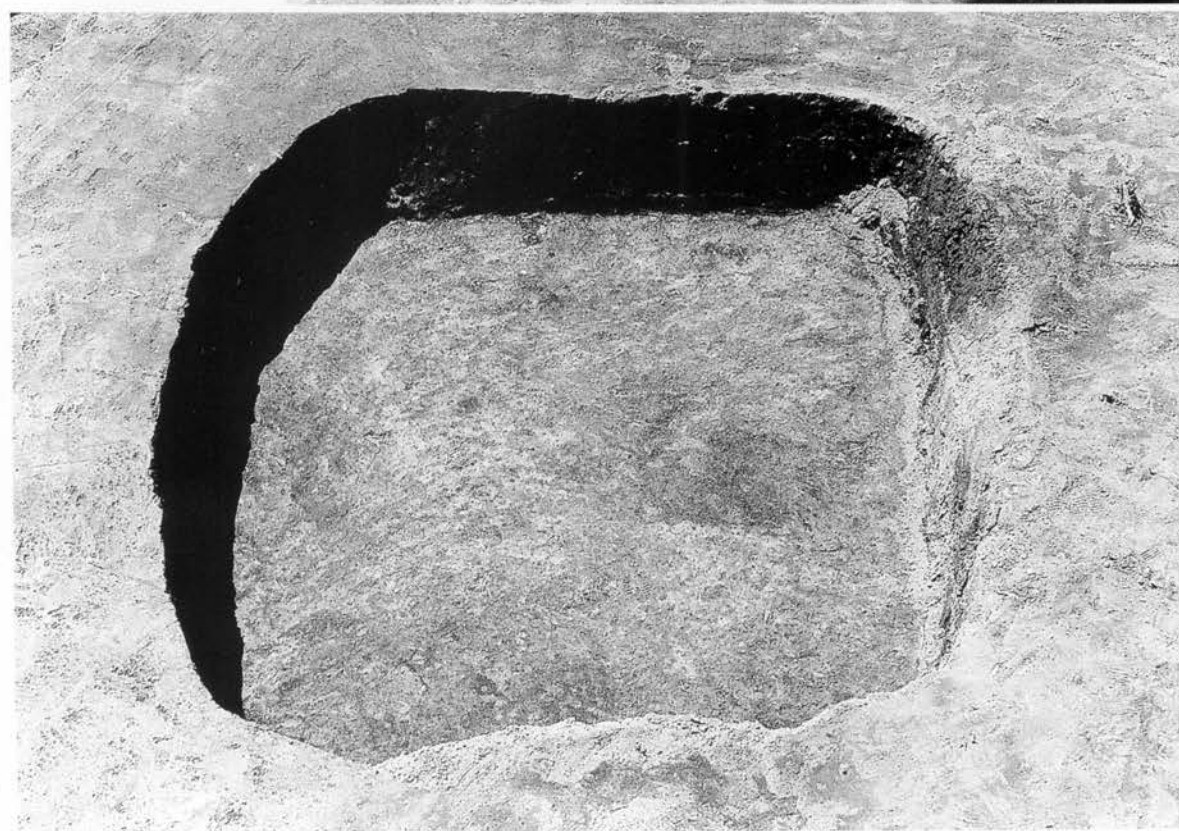
23



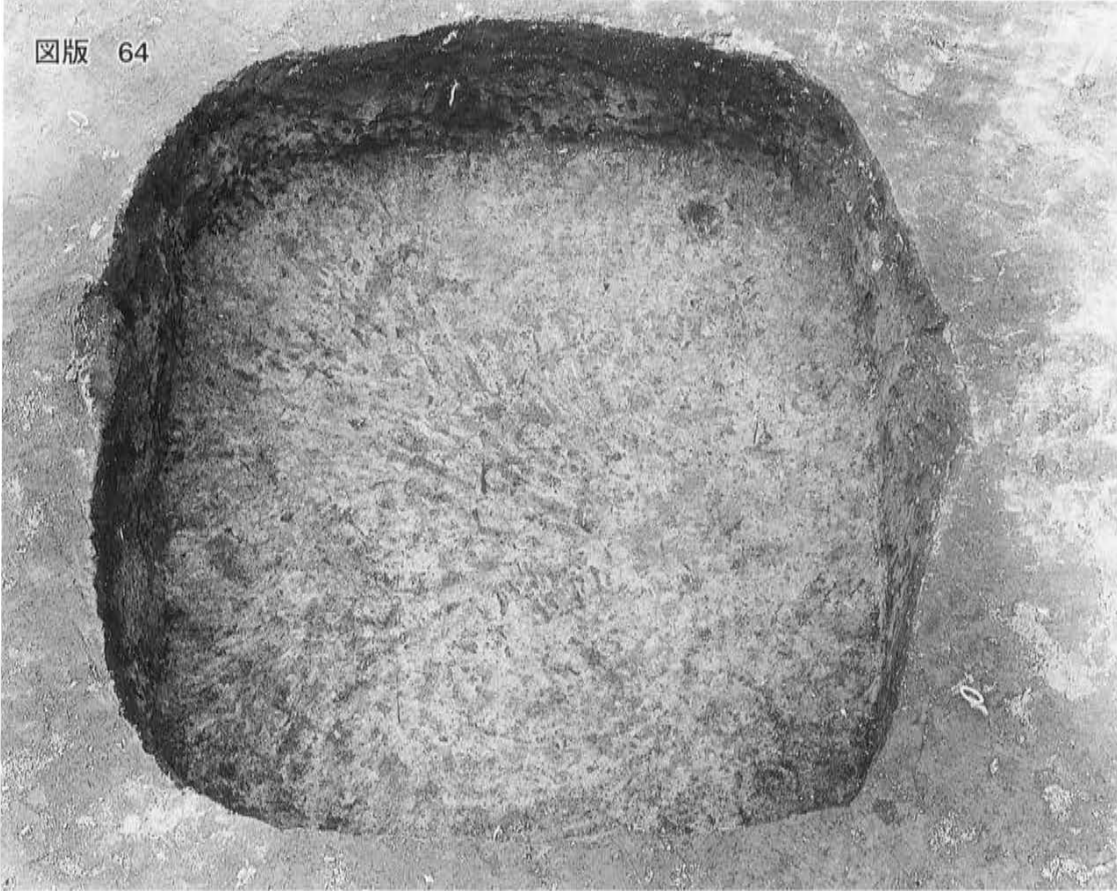
014号住居跡全景(東から)



014号住居跡遺物出土状況(東から)



015号住居跡全景(東から)



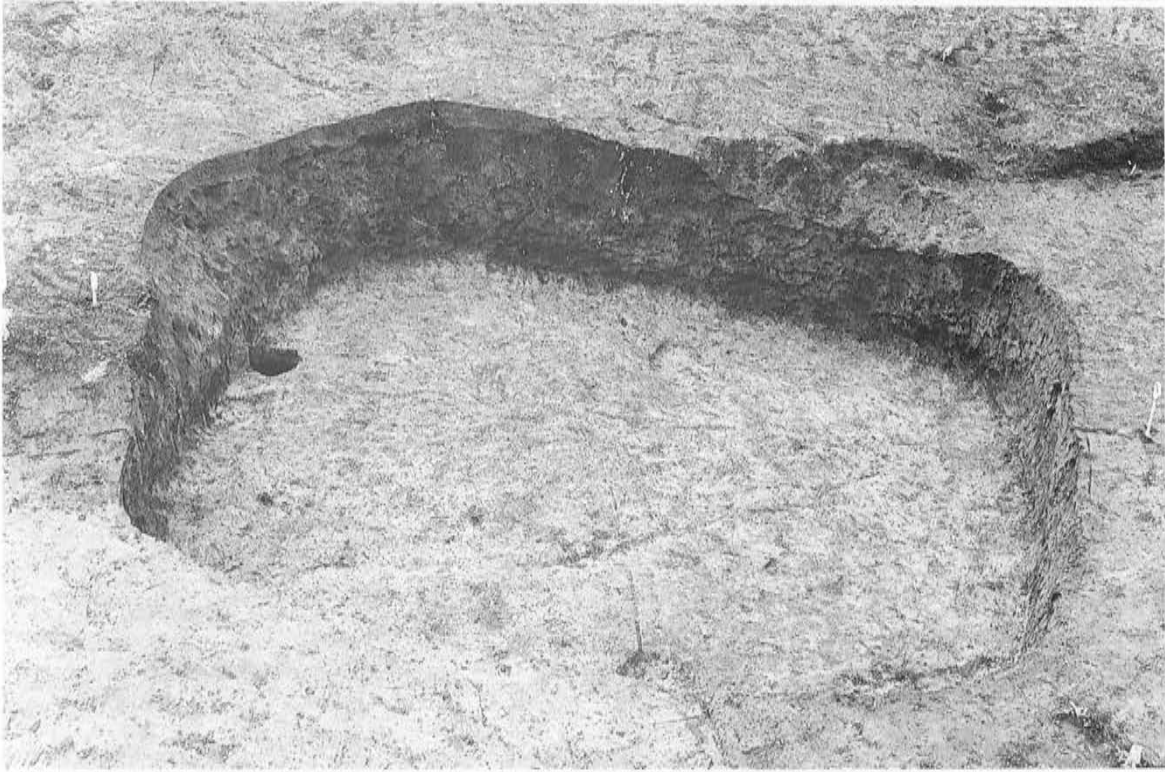
016号住居跡全景（北東から）



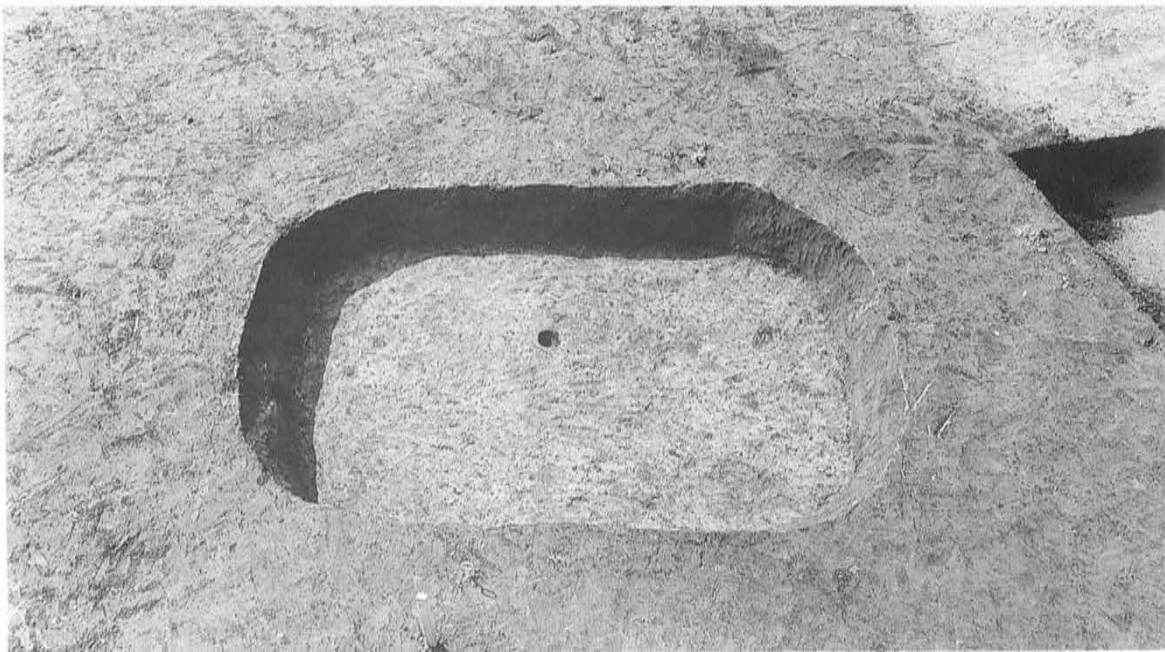
019号住居跡全景（東から）



020号住居跡全景（南東から）



021号住居跡全景（東から）



022号住居跡全景（東から）



023号住居跡全景（東から）



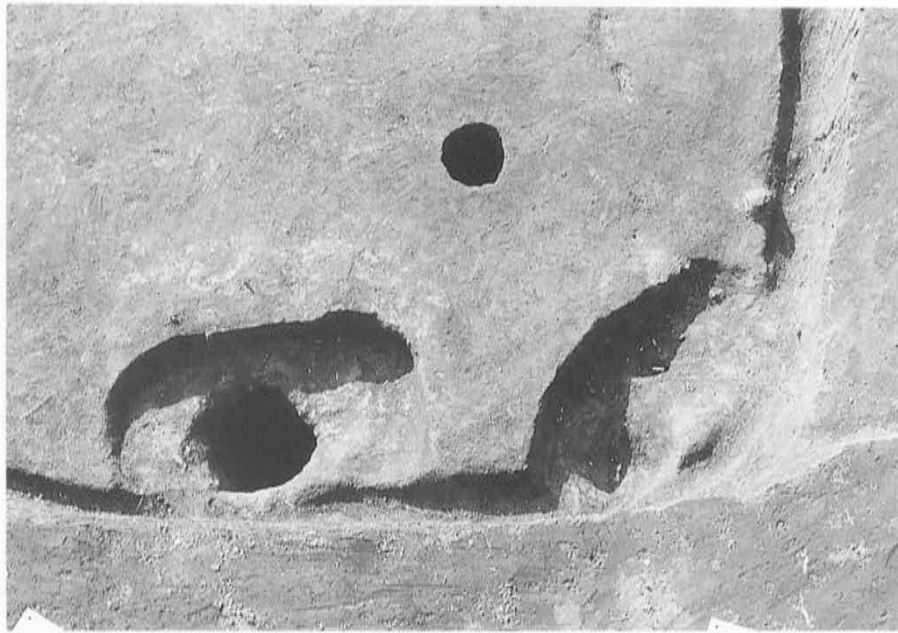
024号住居跡全景（東から）



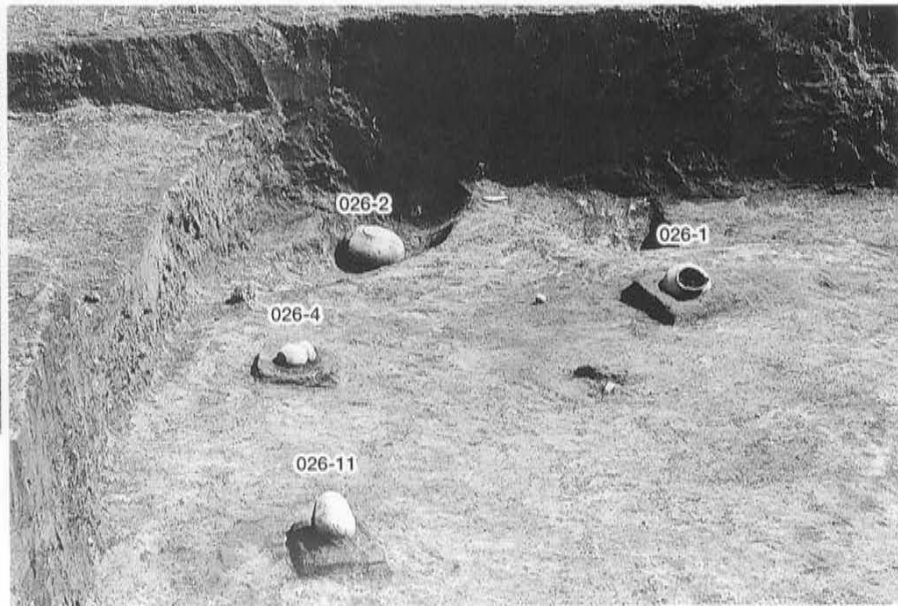
025号住居跡全景（東から）



026号住居跡全景（東から）



026号住居跡貯蔵穴部分（東から）



026号住居跡遺物出土状況（上・右）（西から）



027号住居跡全景（東から）



027号住居跡遺物出土状況（東から）



027号住居跡遺物出土状況（西から）



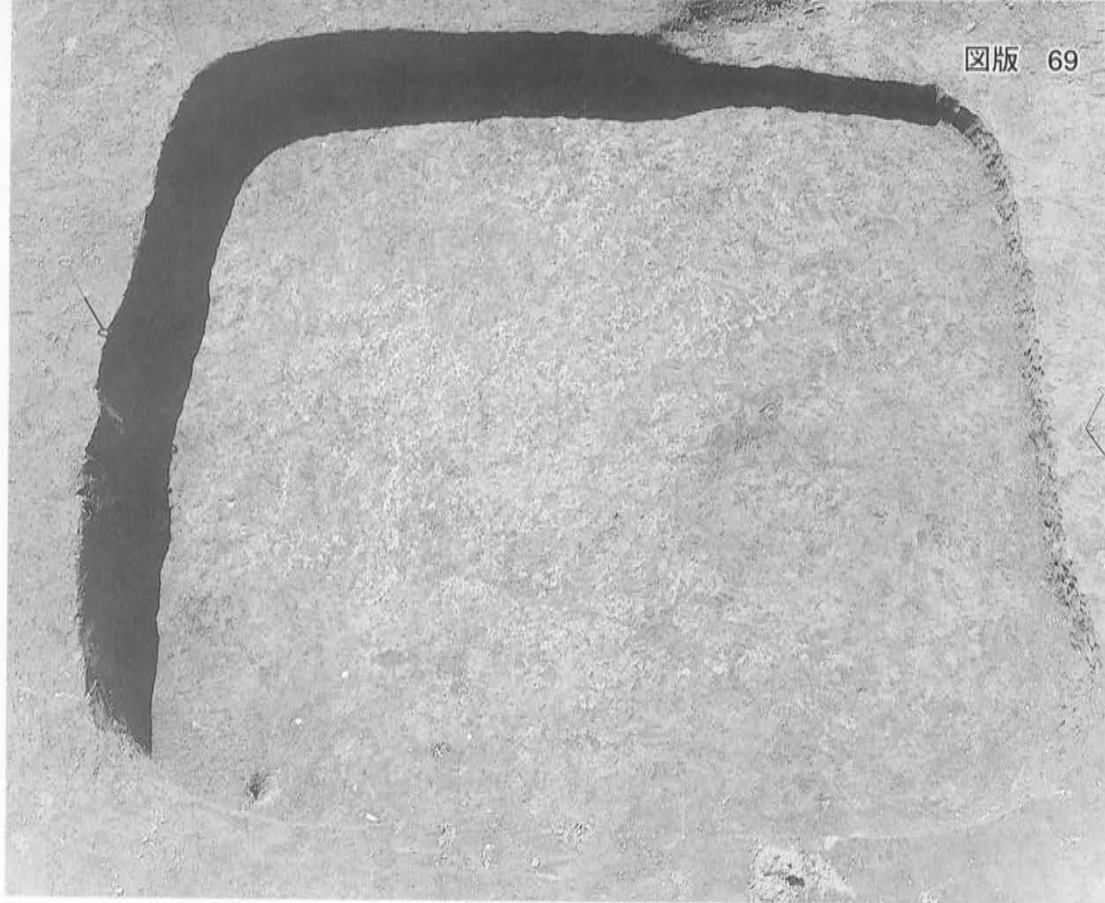
028号住居跡全景（左）（南東から）

028号住居跡炭化材出土状況（下）
（南東から）



028号住居跡遺物出土状況（北西から）





029号住居跡全景（北から）



030号住居跡全景（南東から）



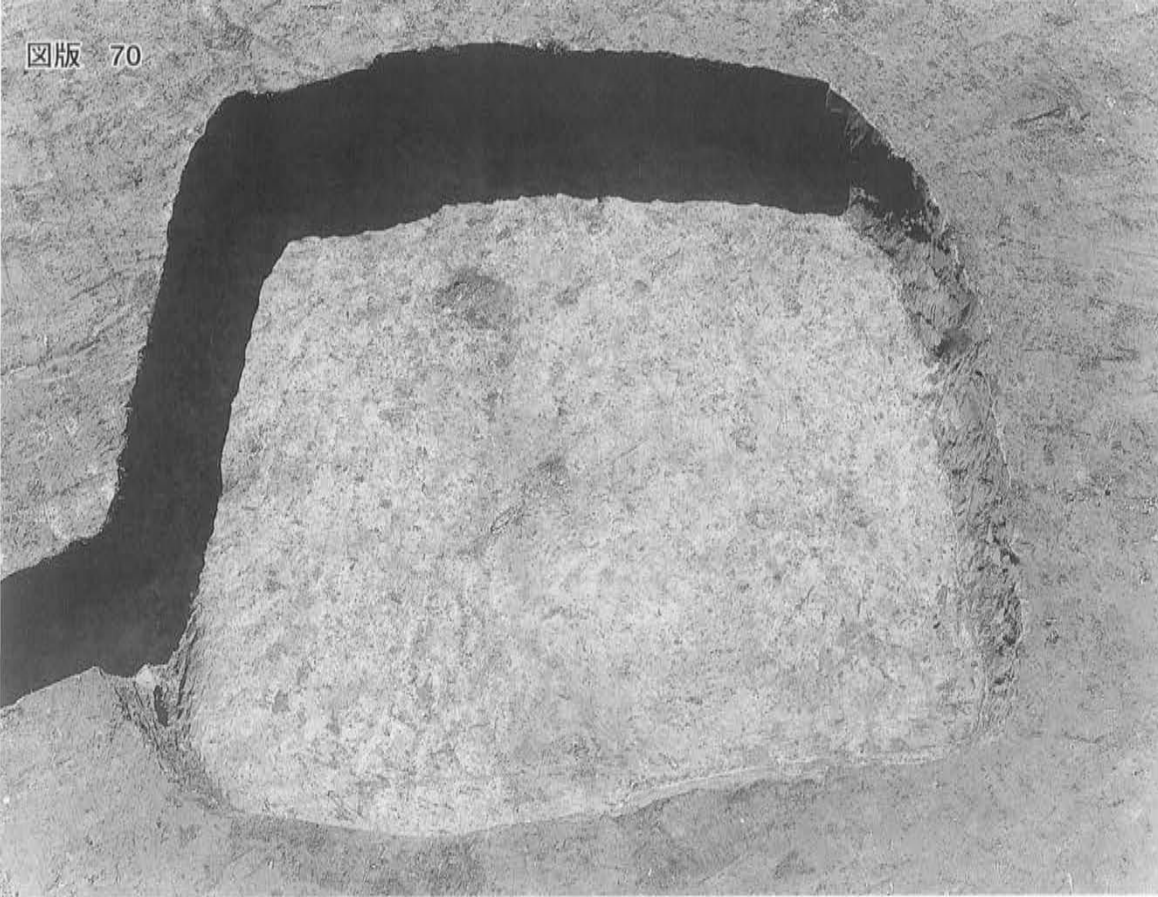
030号住居跡遺物出土状況
（北西から）



030号住居跡遺物出土状況（北西から）



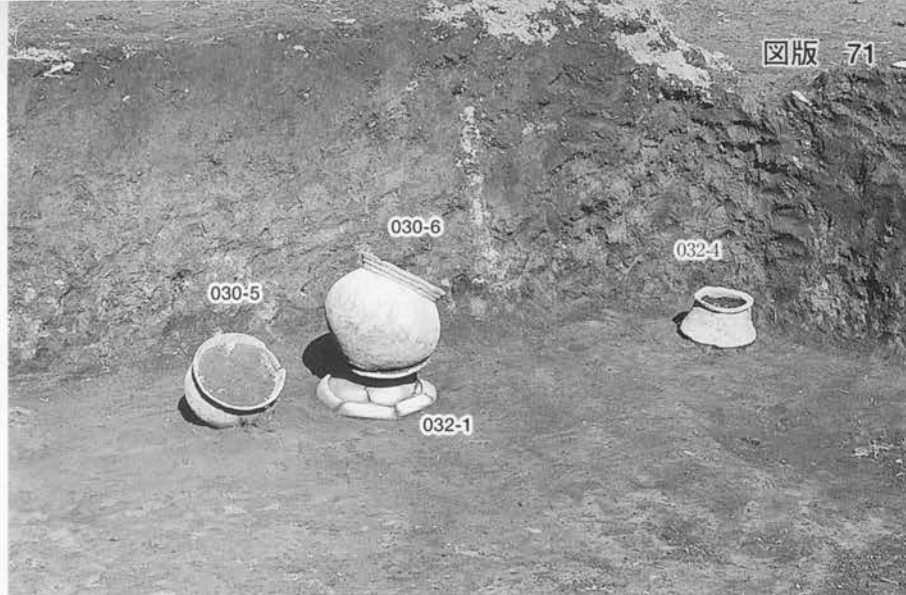
030号住居跡遺物出土状況（西から）



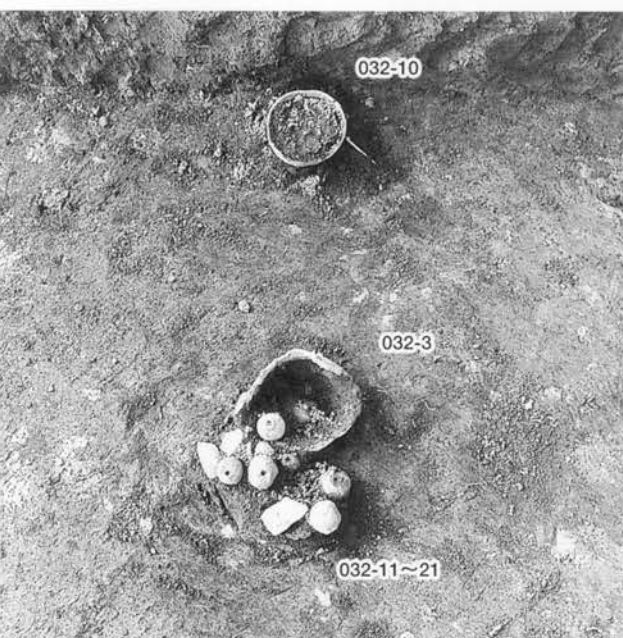
031号住居跡全景（北東から）



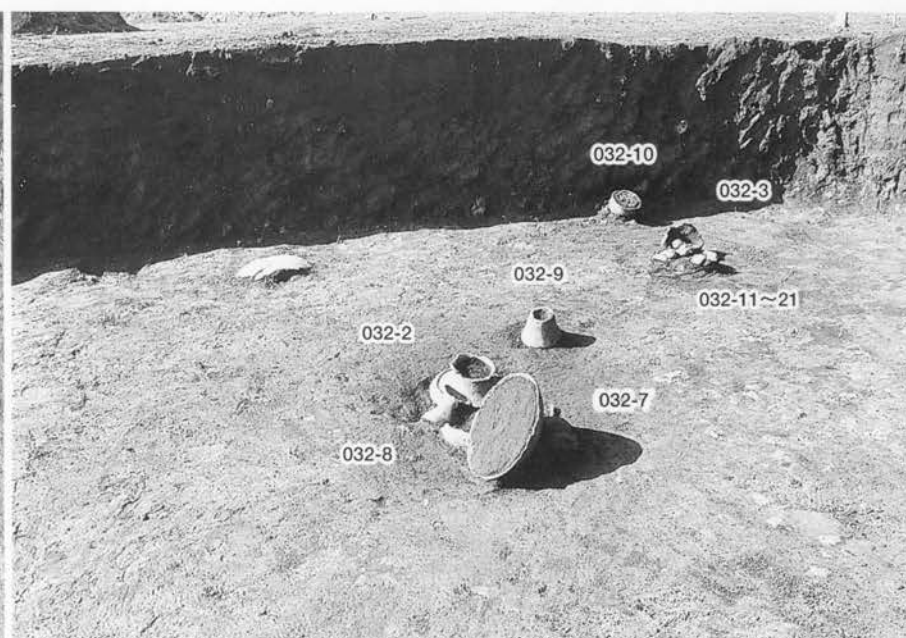
032号住居跡全景（南西から）



032号住居跡遺物出土状況（南西から）



032号住居跡遺物出土状況（南東から）



032号住居跡遺物出土状況（南から）



032号住居跡壁貯蔵穴（北西から）



032号住居跡炭化材出土状況（南西から）



033号住居跡全景 (西から)



033号住居跡遺物出土状況 (左) (北西から)

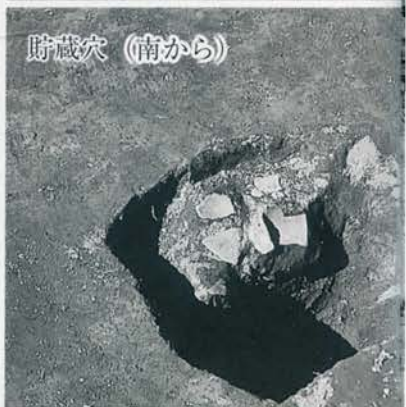


034号住居跡全景 (北から)



034-1

(東から)



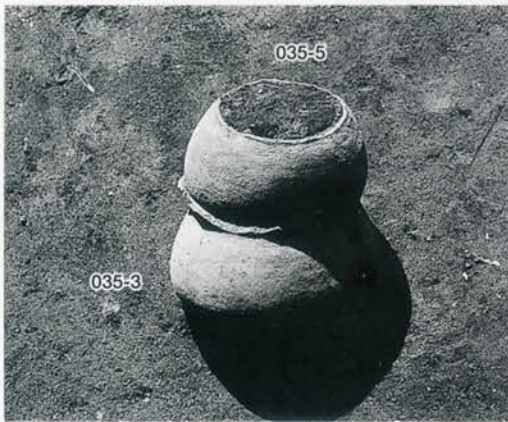
貯蔵穴 (南から)



035号住居跡全景（東から）



035号住居跡遺物出土状況（南西から）



035号住居跡遺物出土状況（東から）



035号住居跡遺物出土状況（南から）



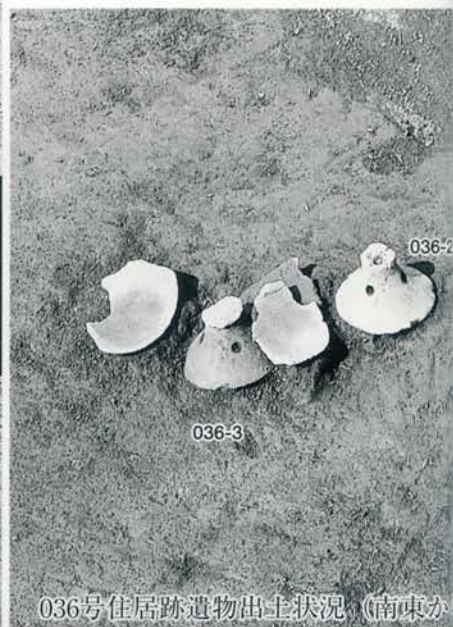
035号住居跡壁貯蔵穴（西から）



036号住居跡全景（南西から）



036号住居跡遺物出土状況（南西から）



036号住居跡遺物出土状況（南東から）



036号住居跡遺物出土状況（北東から）



036号住居跡遺物出土状況（南東から）



038号住居跡全景（北西から）



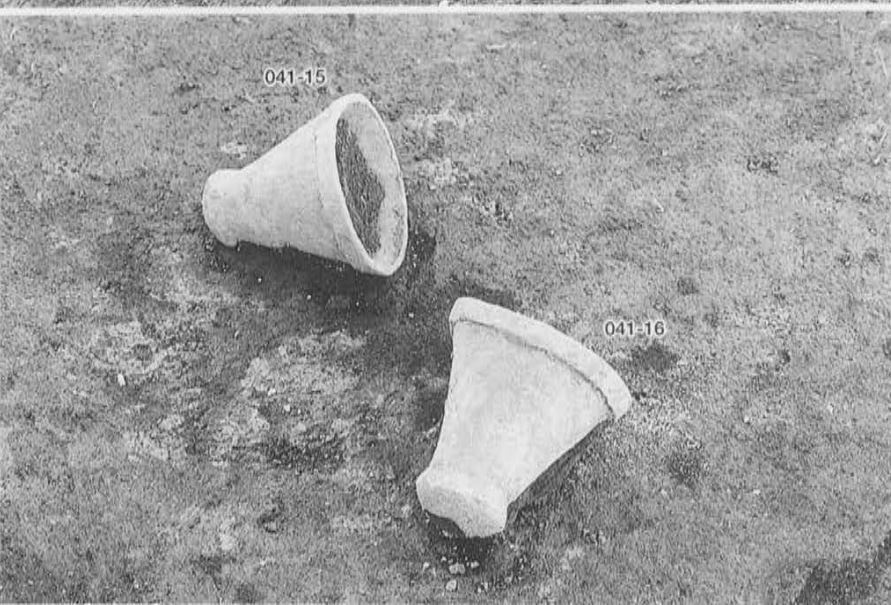
039号住居跡全景（南から）



041号住居跡全景（南から）



041号住居跡遺物出土状況（東から）



041号住居跡遺物出土状況（南から）



041号住居跡遺物出土状況
(南から)



041号住居跡遺物出土状況 (南西から)

041号住居跡炉跡 (下) (東から)



041号住居跡遺物出土状況 (下) (南東から)





042号住居跡炉全景（南から）



042号住居跡遺物出土状況（南東から）

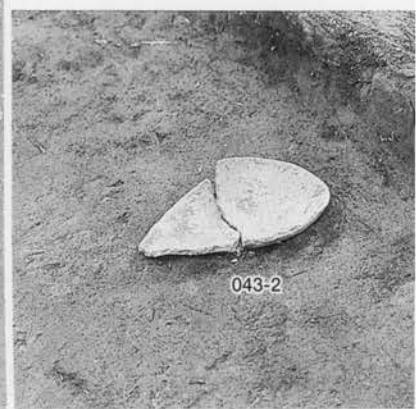


042号住居跡壁貯蔵穴（東から）

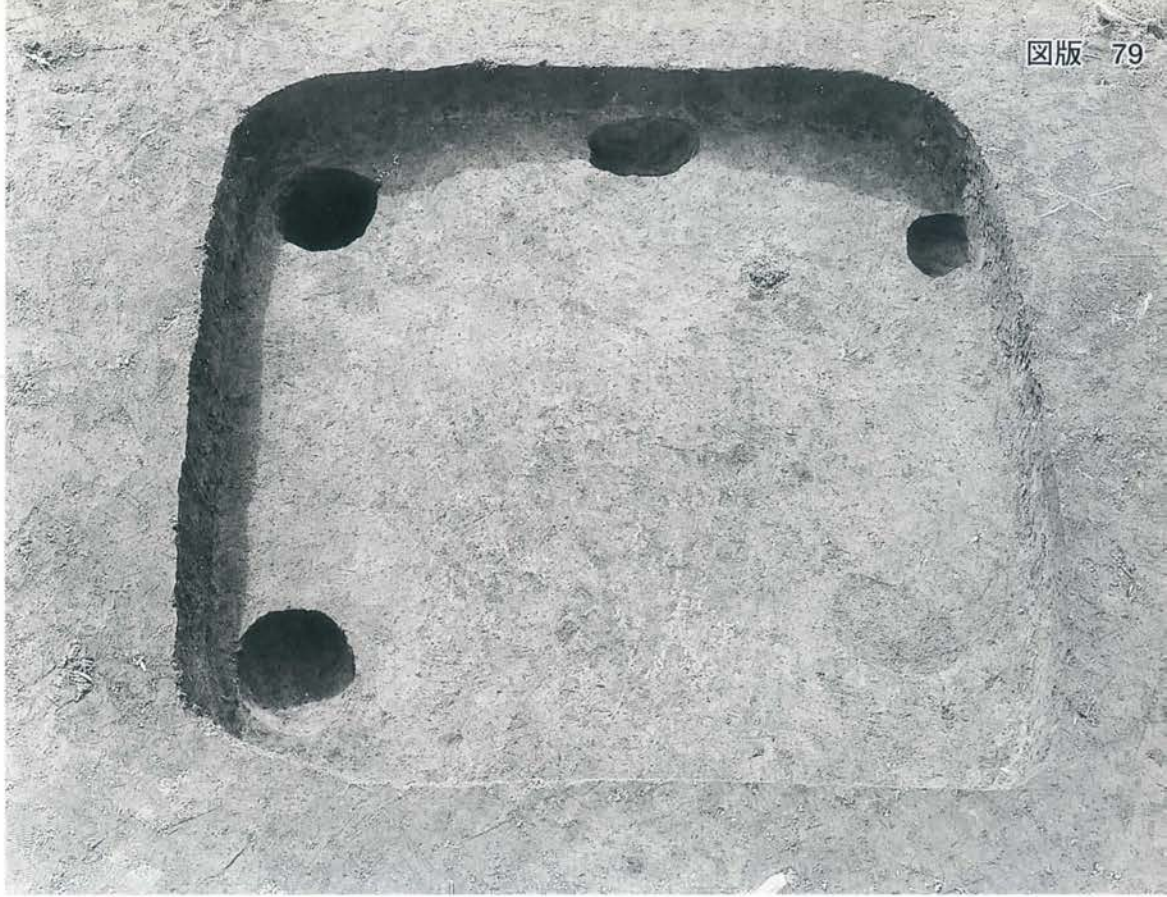


043号住居跡全景（左）（東から）

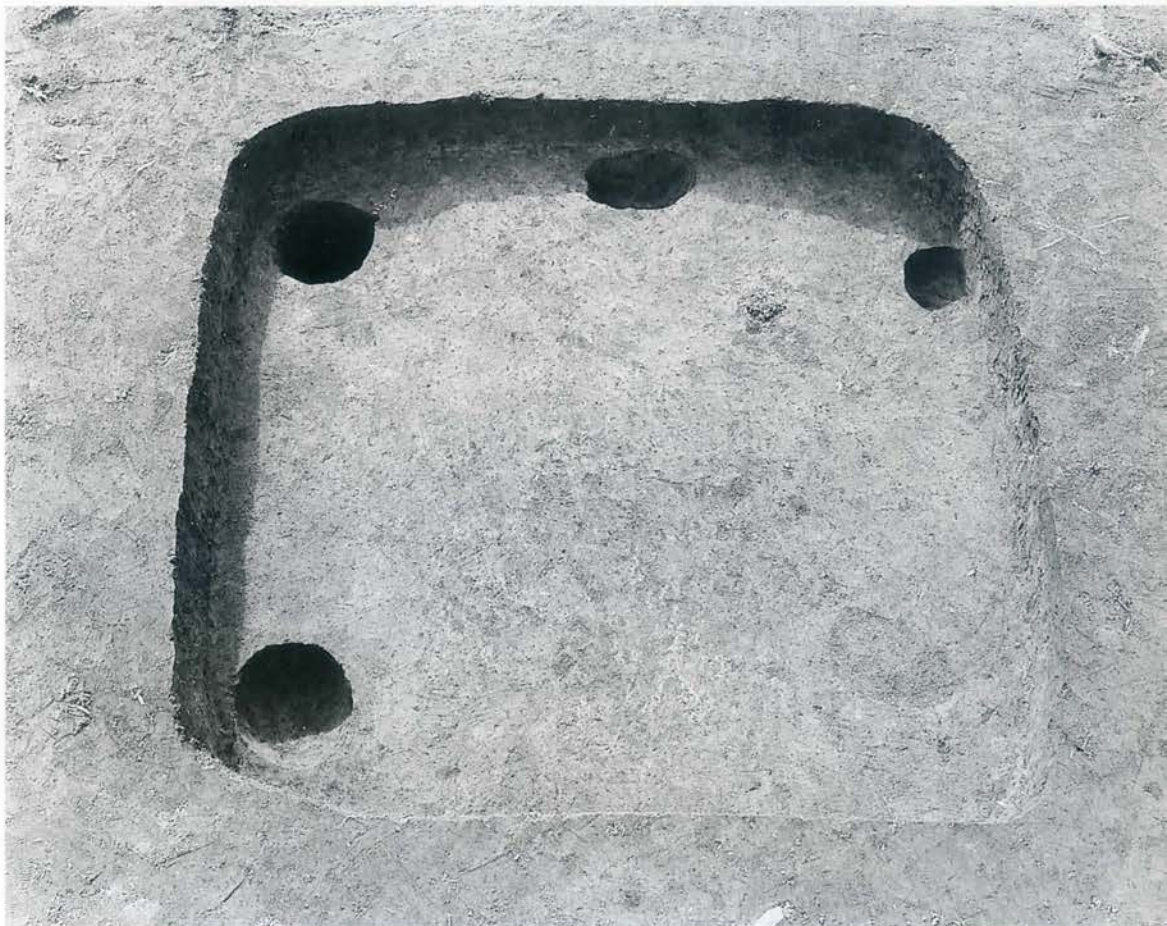
043号住居跡遺物出土状況（下）
（北東から）



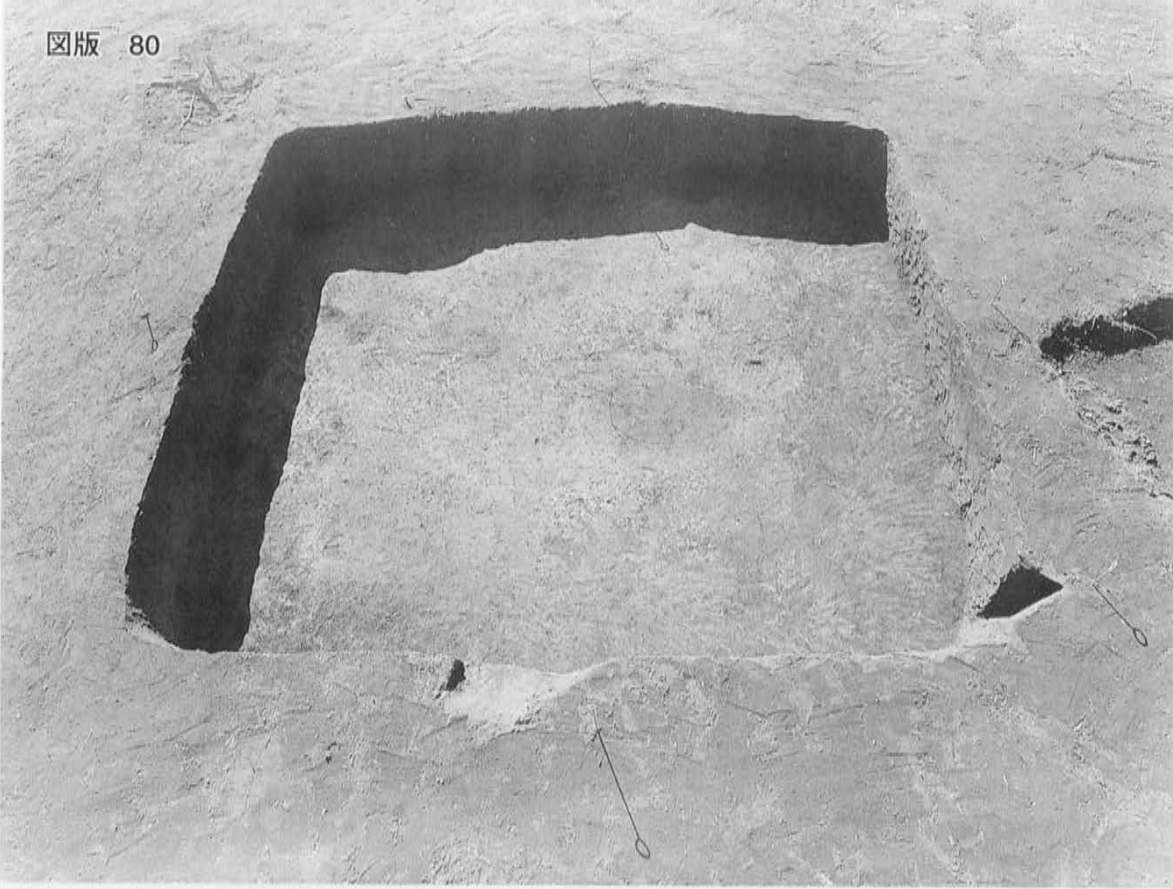
043-2



044号住居跡全景（北東から）



045号住居跡全景（南東から）



046号住居跡全景（北から）



(西から)



(東から)

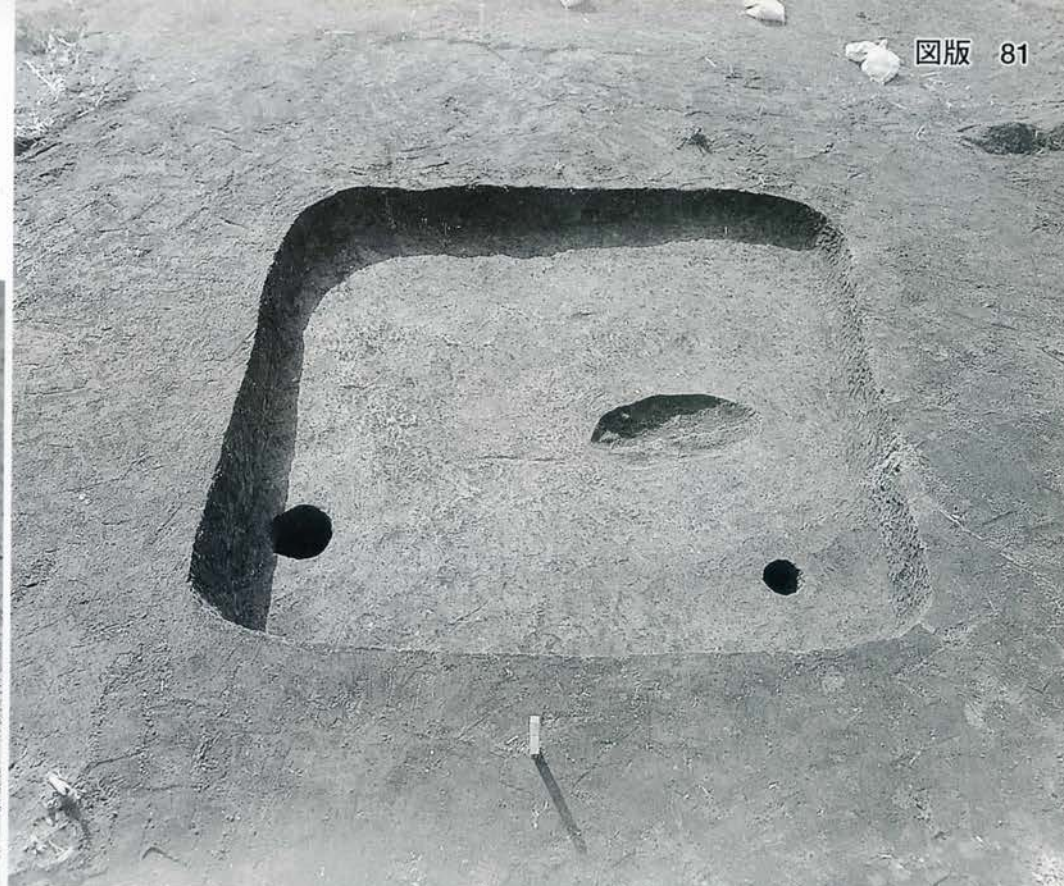
046号住居跡遺物出土状況



047号住居跡全景（北から）



048号住居跡遺物出土状況（北東から）



048号住居跡全景（北から）



049号住居跡遺物出土状況（南から）



049号住居跡全景及び008号炭窯全景（東から）



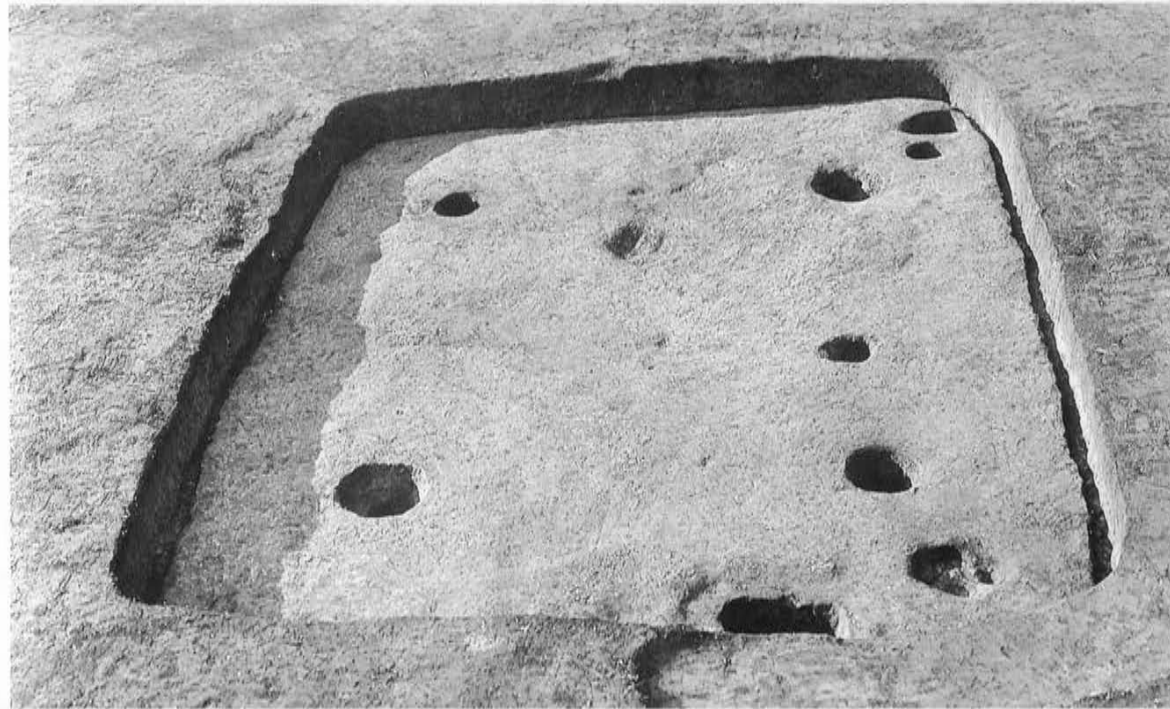
050号住居跡全景（東から）



053号住居跡全景（東から）

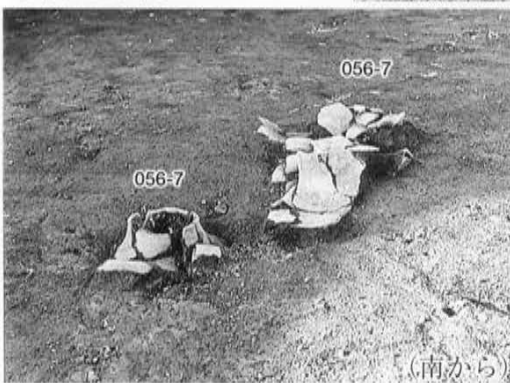


055号住居跡全景（北西から）



056号住居跡全景（東から）

056号住居跡
遺物出土状況



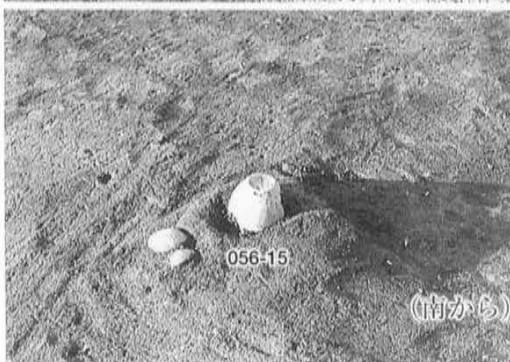
〔南から〕



〔西から〕



〔南から〕



〔南から〕



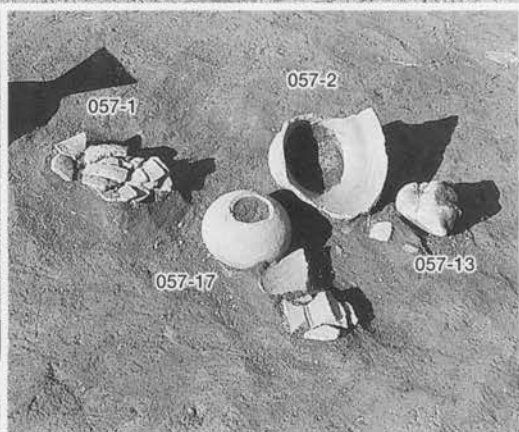
〔北東から〕



〔西から〕



057号住居跡全景（南東から）



057号住居跡遺物出土状況（東から）



057号住居跡遺物出土状況
(南西から)

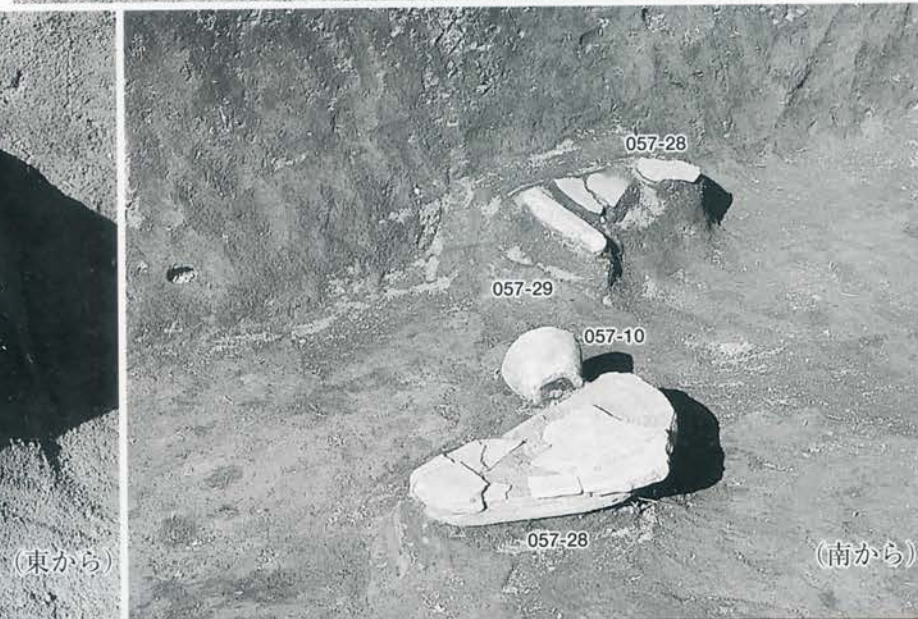


057号住居跡遺物出土状況 (右) (西から)



057号住居跡遺物出土状況 (右・下)

(東から)



(東から)

(南から)



058号住居跡全景（東から）



059号住居跡全景（東から）

059号住居跡遺物出土状況（下



（南西から）



（北東から）

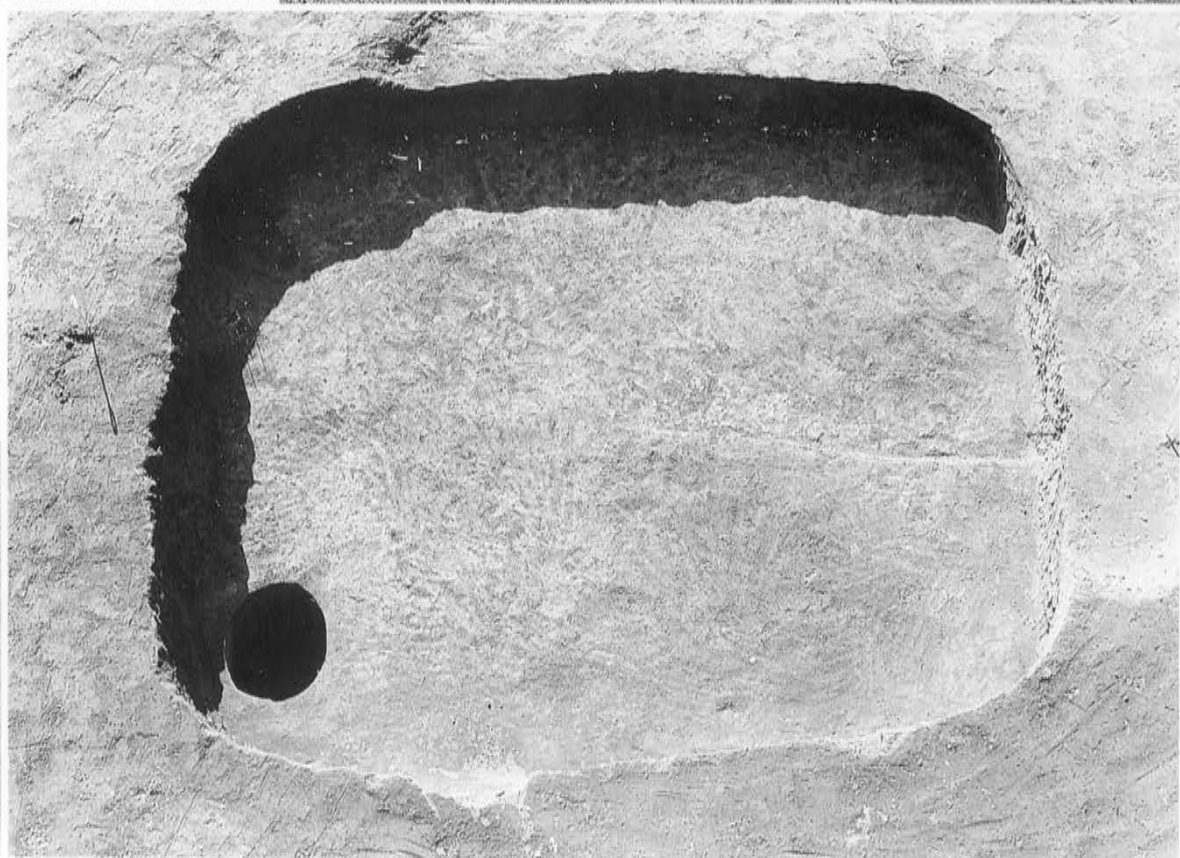


062号住居跡全景（南東から）



062号住居跡遺物出土状況（南から）

063号住居跡全景（右）
（北東から）



063号住居跡遺物出土状況
（下）（北西から）





064号住居跡全景（南から）



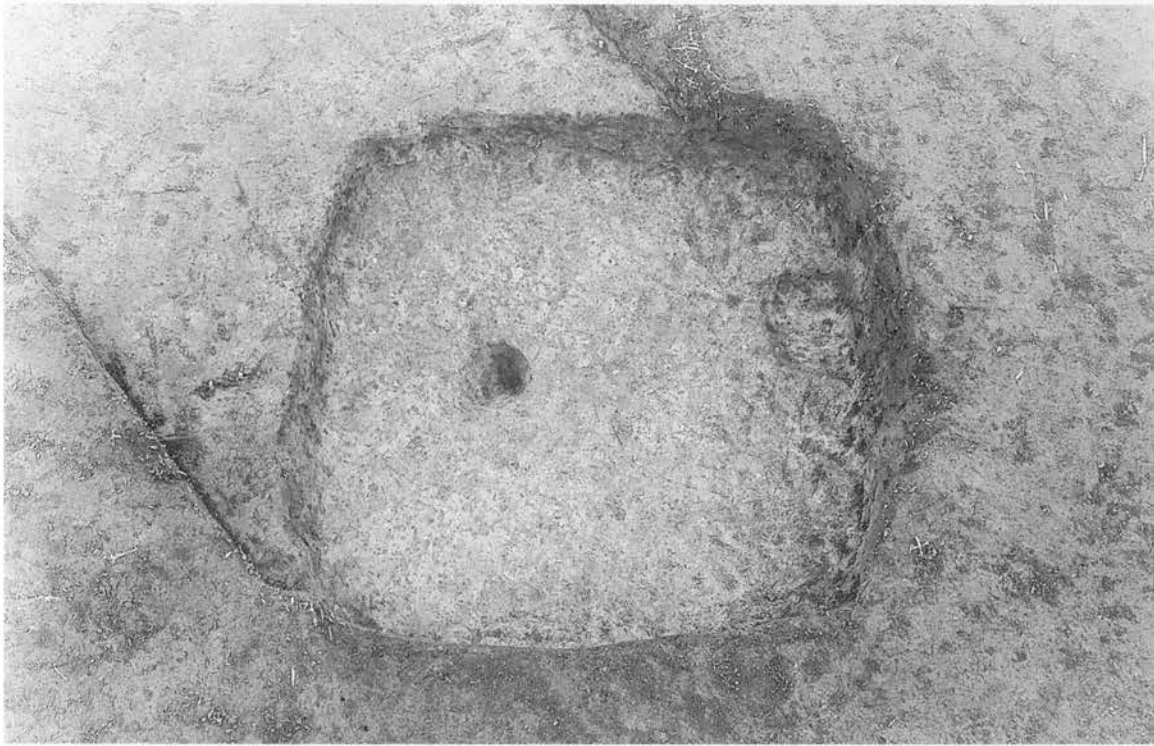
065～069号住居跡（南西から）



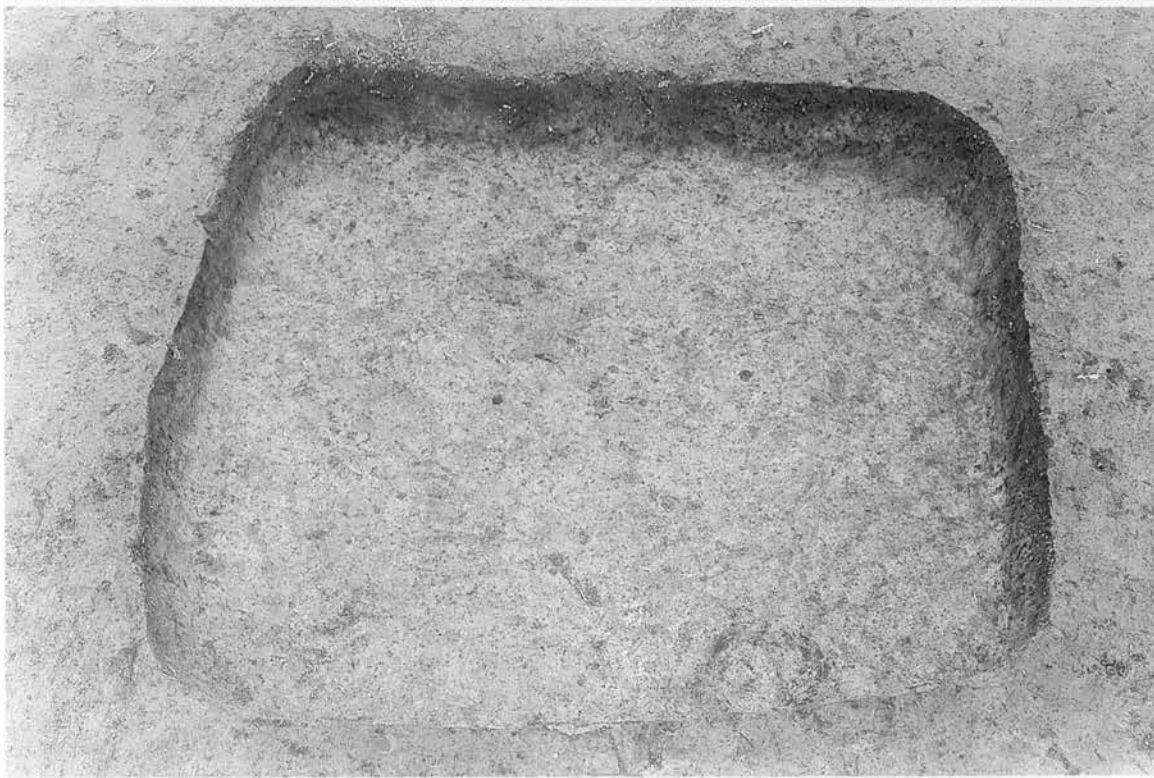
065号住居跡全景（南西から）



066号住居跡全景（南西から）



067号住居跡全景（南西から）



068号住居跡全景（東から）



069号住居跡全景（南東から）



070号住居跡全景（南西から）



084号住居跡全景（南から）



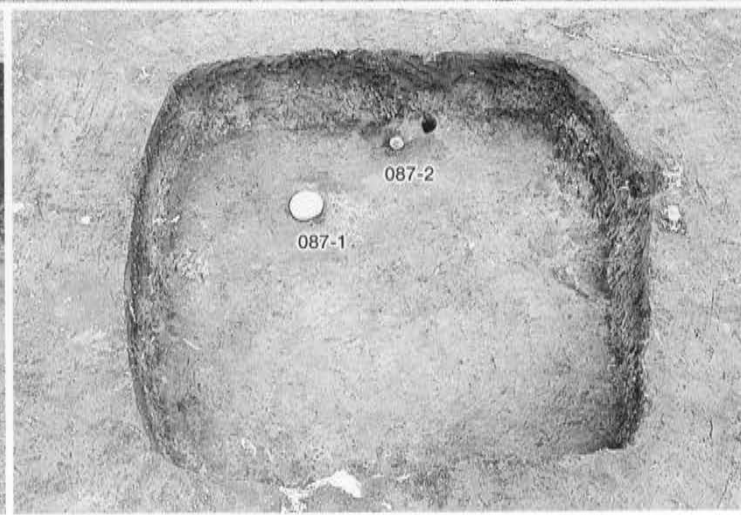
085号住居跡全景（南から）



087号住居跡全景（南西から）



087号住居跡遺物出土状況
（南西から）





088号住居跡全景（北から）



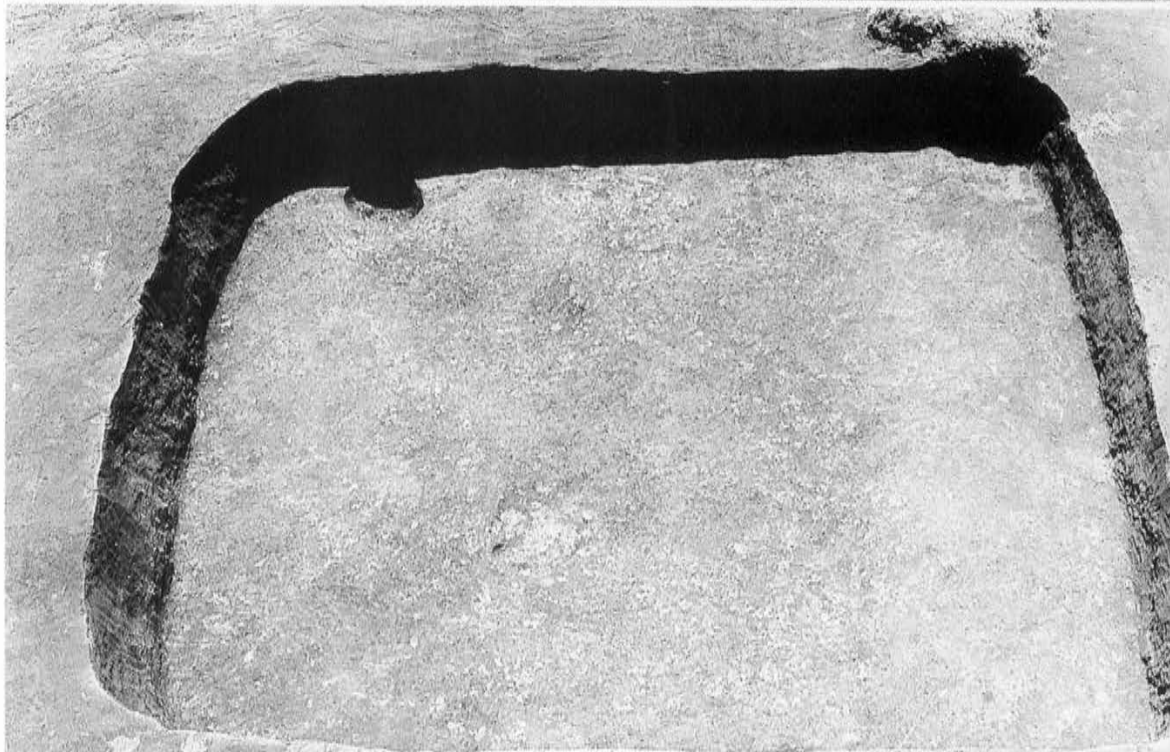
088号住居跡遺物出土状況（北から）



088号住居跡炉内遺物（北から）



089号住居跡全景 (南西から)



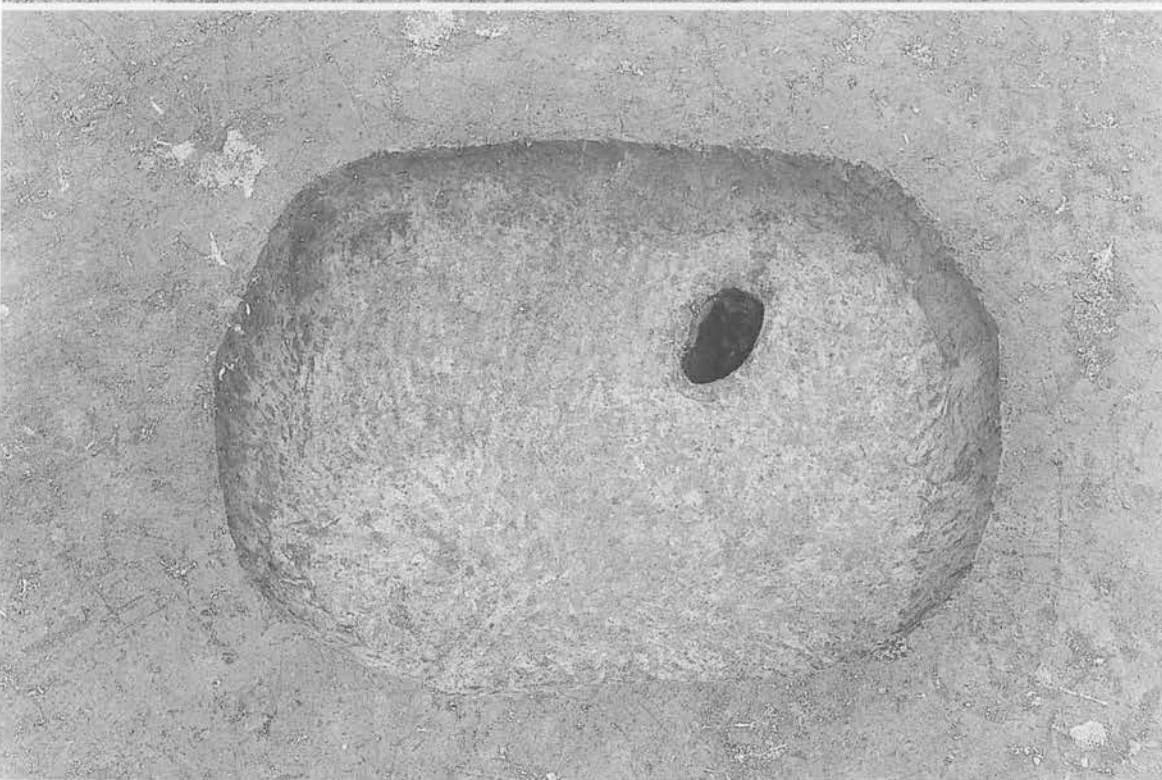
090号住居跡全景 (北西から)



090号住居跡遺物出土状況 (北西から)



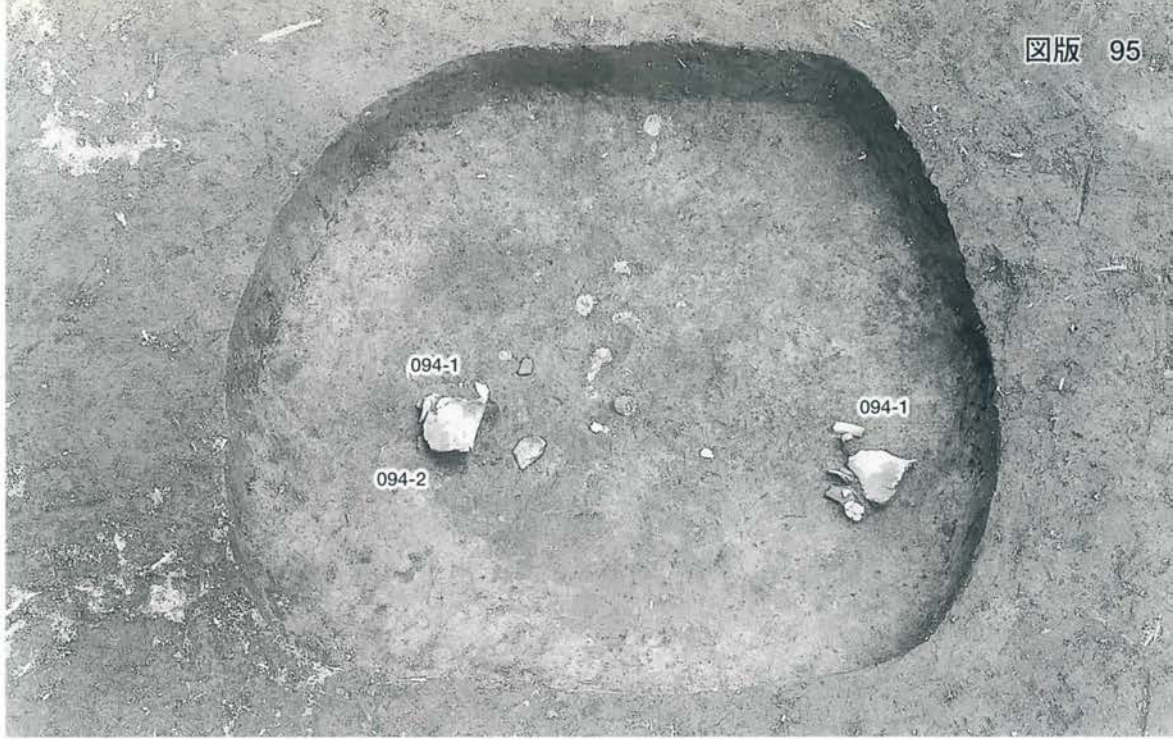
091号住居跡全景（南東から）



092号住居跡全景（南東から）



093号住居跡全景（北西から）



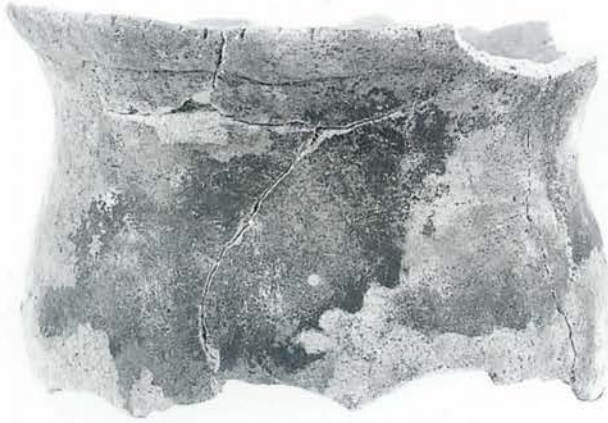
094号住居跡全景（南から）



095号住居跡全景（北西から）



127号住居跡全景（北東から）



014-1



015-1



021-1



026-2



026-1



026-3



026-1



026-4



026-5



026-6



026-8



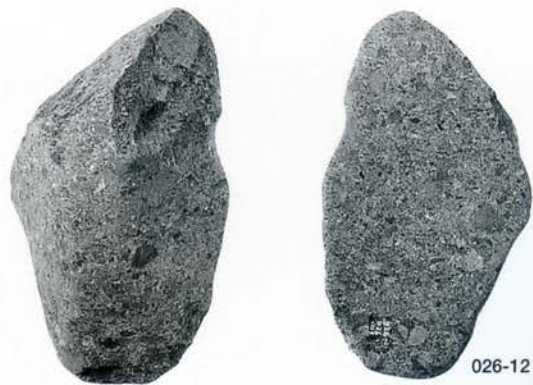
026-9



026-10



026-11

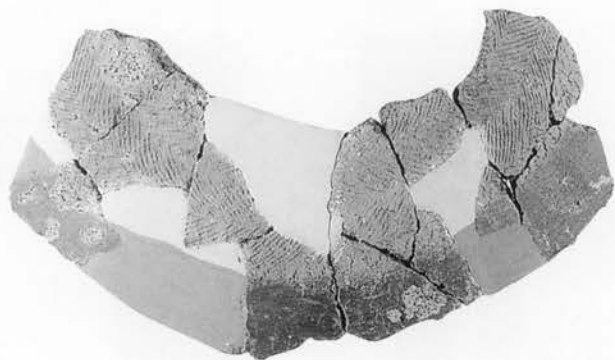


026-12

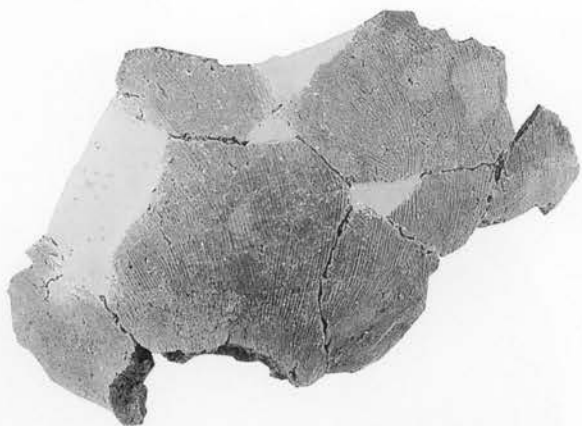
古墳時代住居跡出土遺物 (2) (026)



027-1



027-2



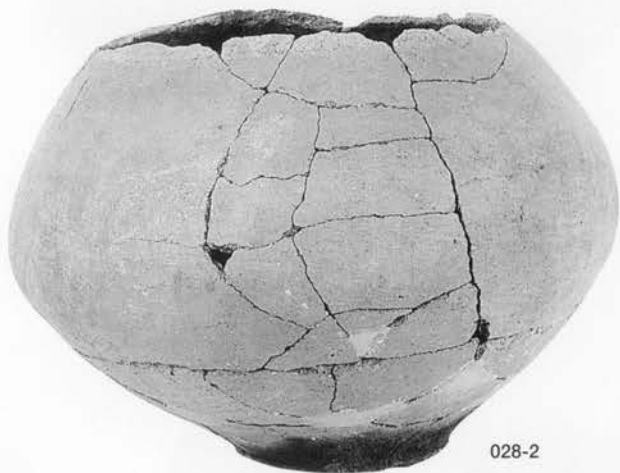
027-3



027-4



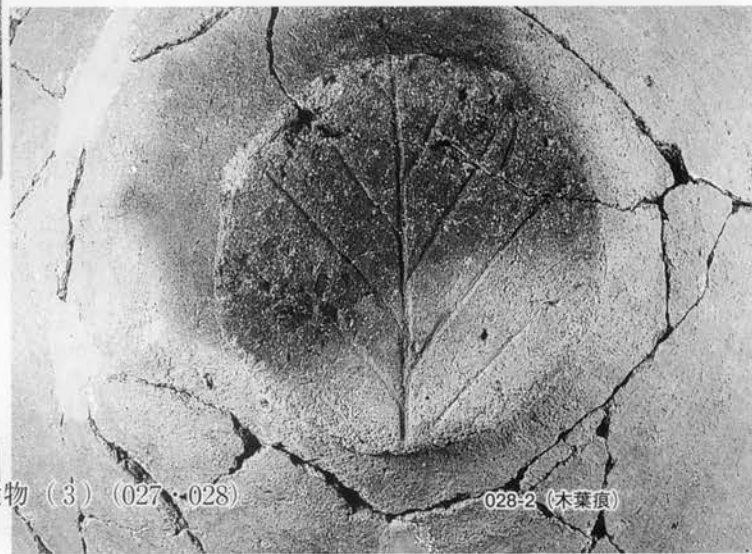
028-1



028-2



028-1 (口頸部模様)



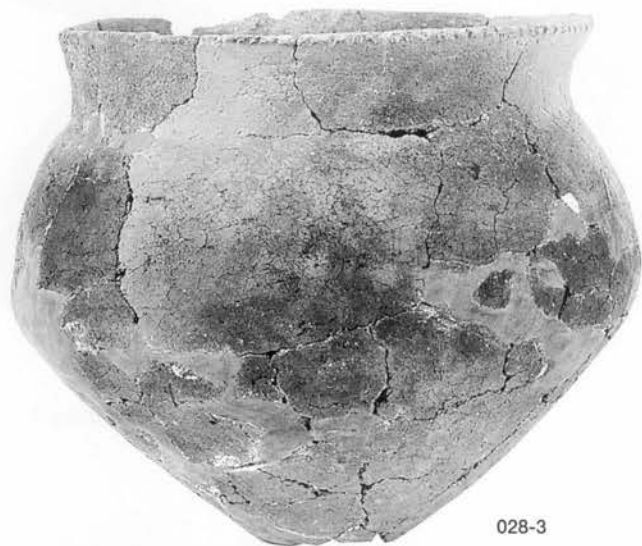
028-2 (木葉痕)



028-2 (胴部模様)



028-4



028-3



028-5



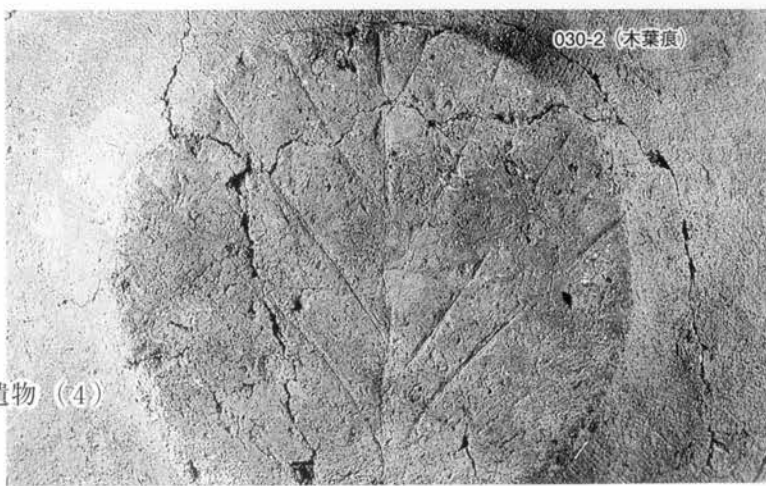
030-1



030-2

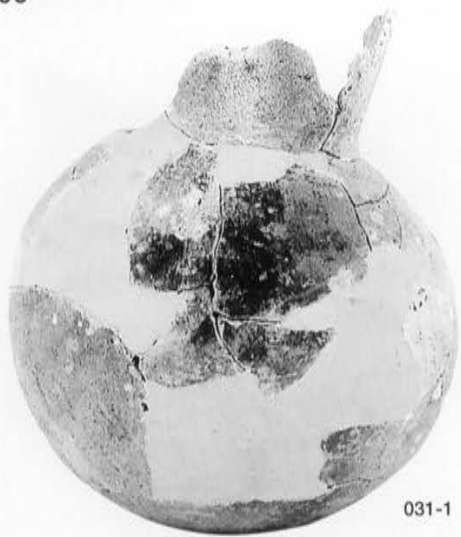


030-3



030-2 (木葉痕)

古墳時代住居跡出土遺物 (4)
(028・030)



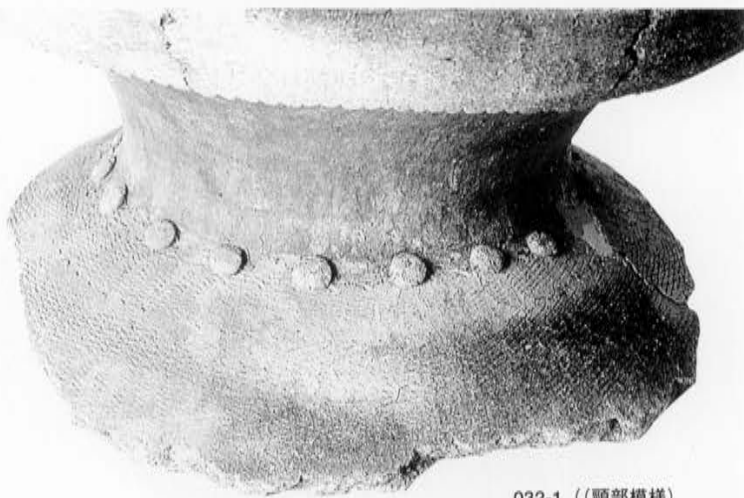
031-1



032-1



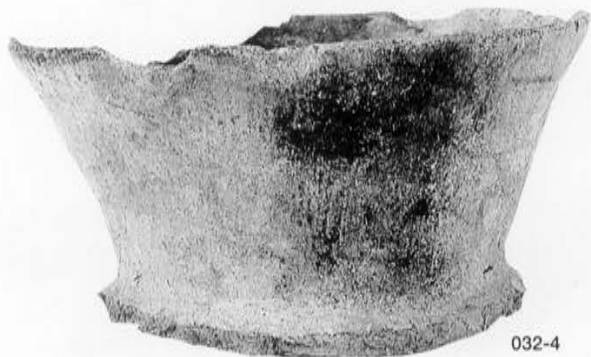
032-2



032-1 ((頸部模様))



032-3



032-4



032-5



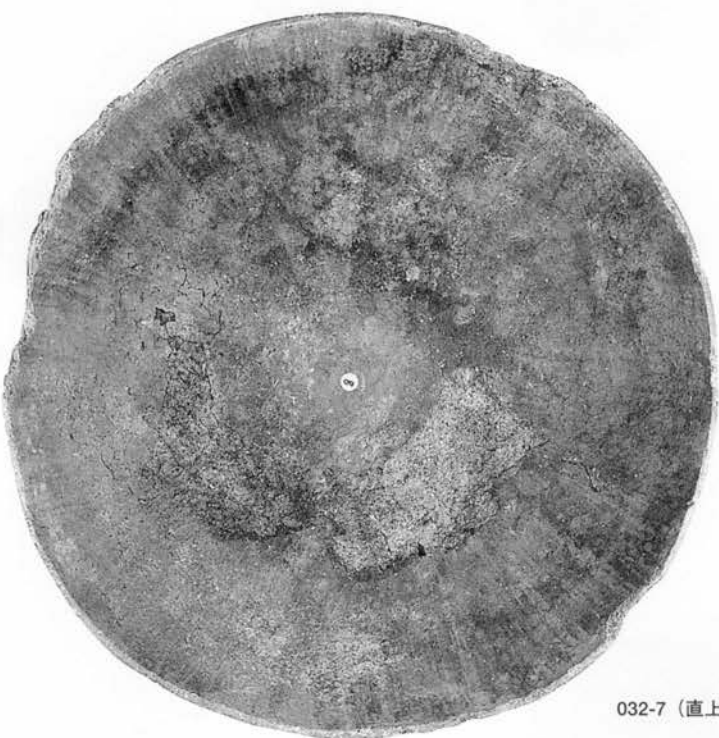
032-6



032-7



032-8



032-7 (直上)



032-8 (直上)



032-9



032-10



032-11



032-12



032-13



032-14



032-15



032-16



032-17



032-18



032-19



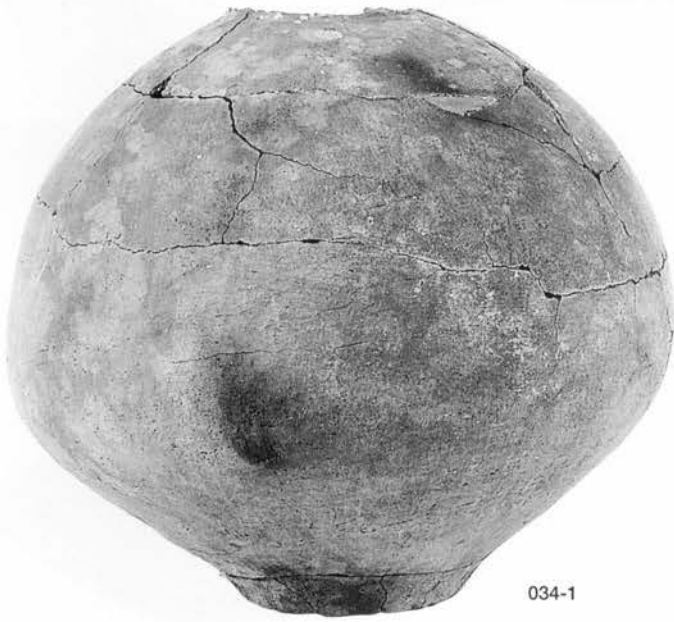
032-20



032-21



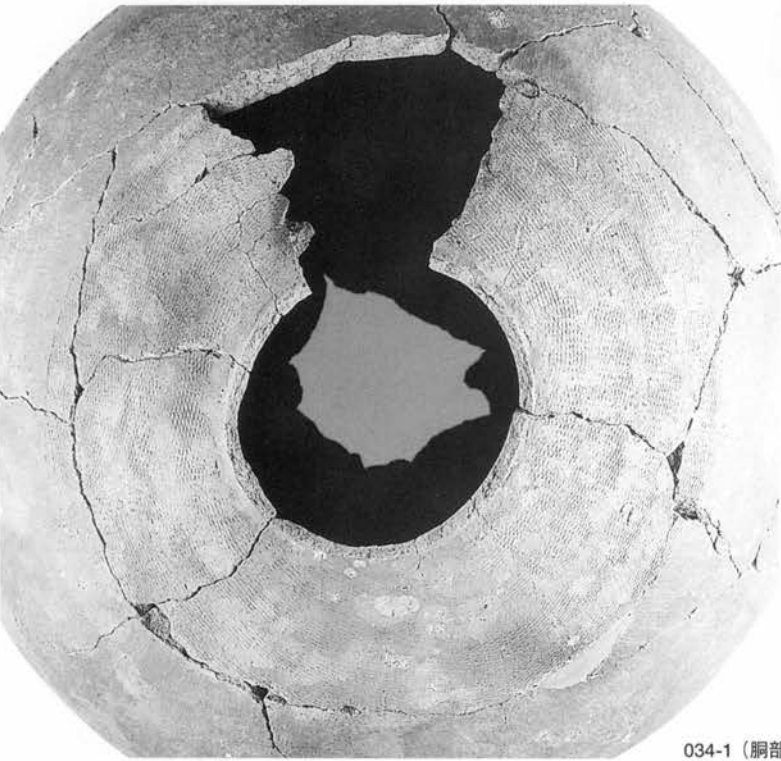
033-1



034-1



034-2



034-1 (胴部模様)



034-3



035-1



035-4



035-3



035-2



035-6



035-5



035-7



036-1



036-3



036-2



036-4



038-1



038-2



039-2



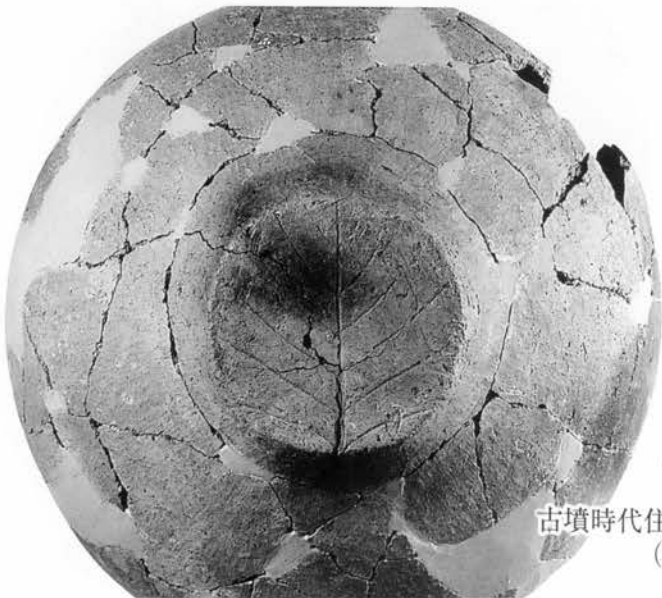
039-1



039-3



039-4
(直上から)



039-1
(木葉痕)



039-4

古墳時代住居跡出土遺物 (10)
(038・039)



039-5



041-1



041-2



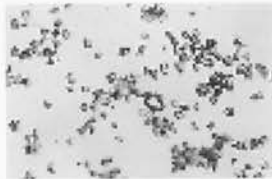
041-3



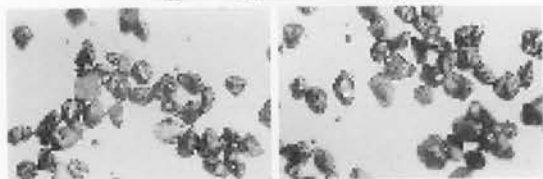
041-4



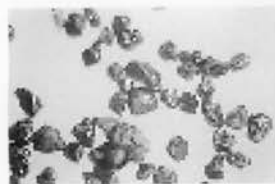
041-3内砂鉄



041-3内砂鉄
(X16)



041-3内砂鉄
(X40)



041-5



041-6



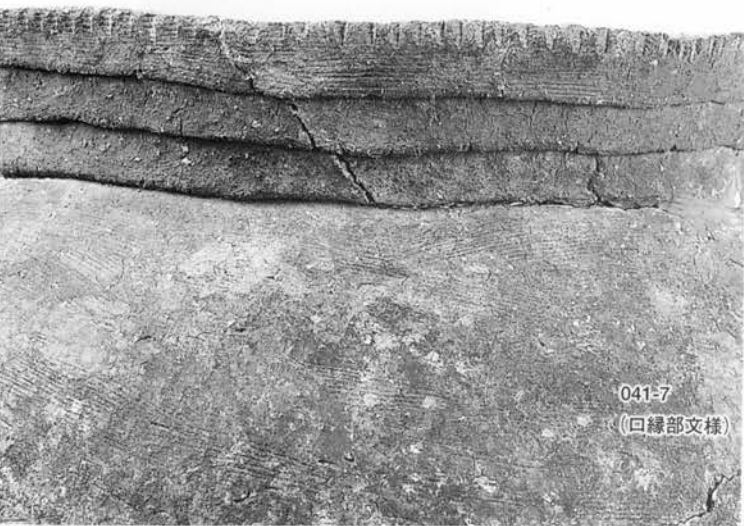
041-8



041-7



041-9



041-7
(口縁部文様)



041-10



041-11



041-12



041-13



041-15



041-14



041-16



041-17



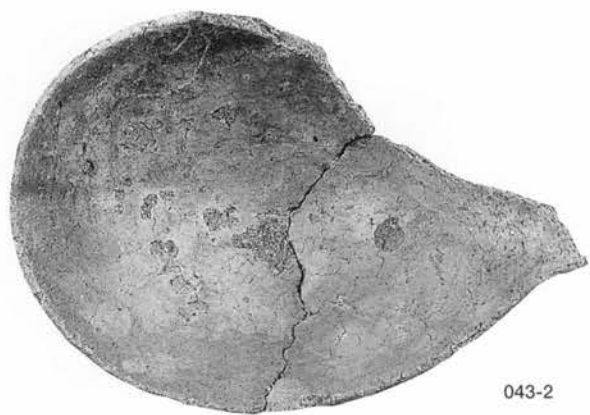
041-18



042-1



043-1



043-2



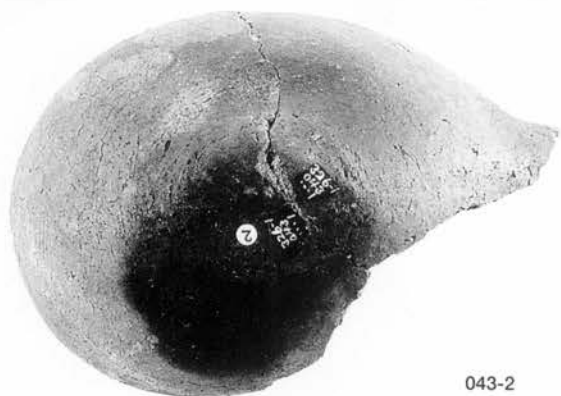
043-2



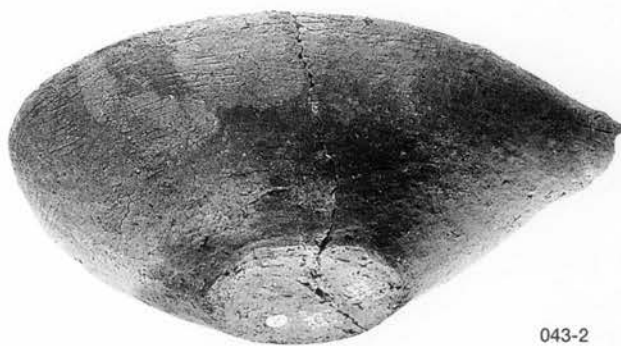
043-2



043-2



043-2



043-2



044-1



045-4



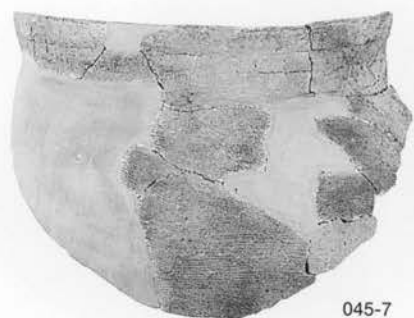
045-5



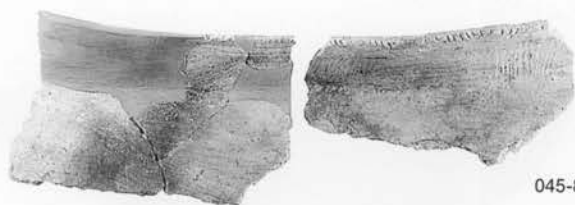
045-6



044-2



045-7



045-8



045-1



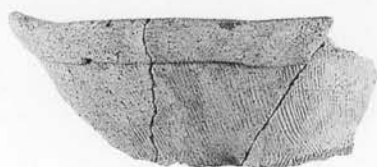
045-2



045-9



045-10



045-3



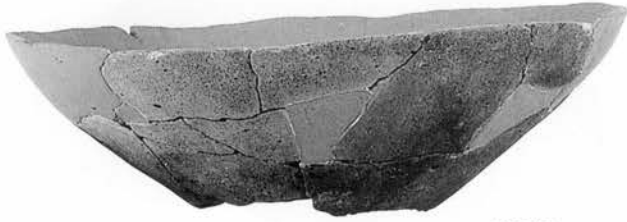
045-11



045-12



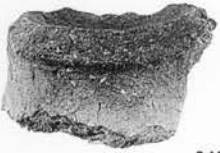
045-18



045-19



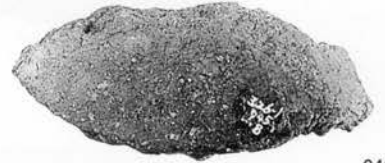
045-20



045-13



045-14



045-15



045-16



045-17



045-21

古墳時代住居跡出土遺物 (16) (045)



045-22



045-24



045-25



045-26



045-23



046-2



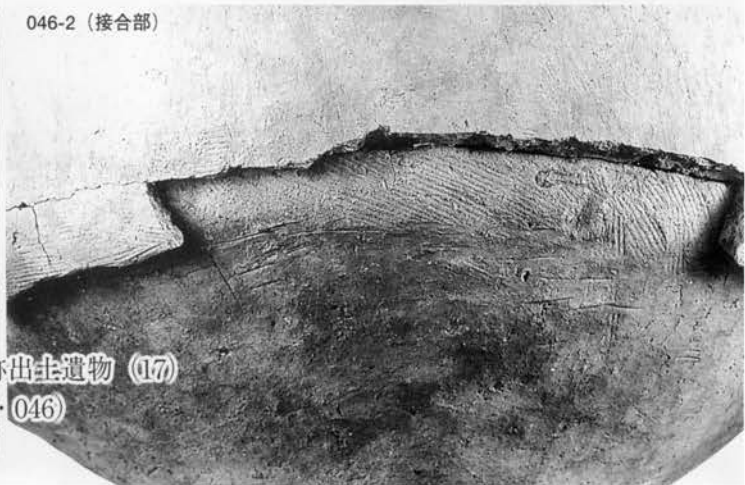
046-1



046-2
(木葉痕)



046-1 (胴部模様)



046-2 (接合部)



046-3



046-4



047-1



047-2



048-1



048-2



048-3



049-1



049-2



049-3



049-5

古墳時代住居跡出土遺物 (18)
(046・047・048・049)



049-4



049-6



049-8



049-7



053-1



055-1



053-1
(木葉痕)



055-2



055-4



055-3



055-5



055-6



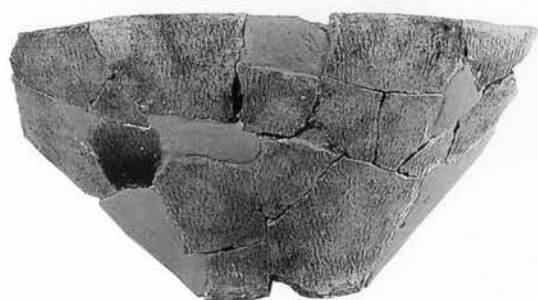
055-7



055-8



056-1



056-2



056-3



056-5



056-6



056-7



056-8



056-9



056-10



056-11



056-12



056-13



056-15



056-16



056-14



056-17

古墳時代住居跡出土遺物 (21)
(056)



056-18



056-19



056-20



056-21



056-22



056-23



056-24



057-1



057-4



057-2



057-3



057-5



057-6



057-7



057-8



057-9



057-10



057-11



057-13



057-12



057-13



057-14



057-15



057-14
(中央穿孔部)



057-16



057-11



057-18



057-19



057-20



057-21



057-22



057-23





057-24



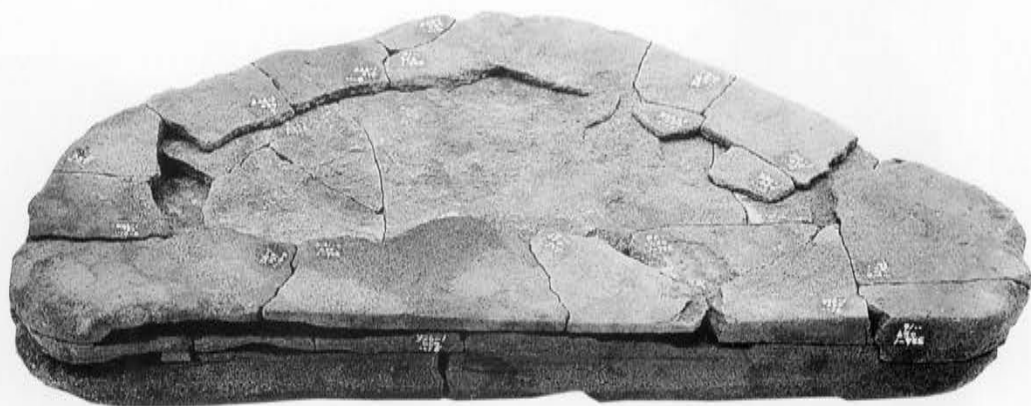
057-25



057-26



057-27



057-28



057-29



057-30



057-31



059-1



059-4



059-3



059-4
(中央穿孔部)



059-2



059-5



059-2
(木葉痕)



062-1



062-2



062-3



063-1



063-2



063-3



063-4



063-8



063-5



063-6



063-7

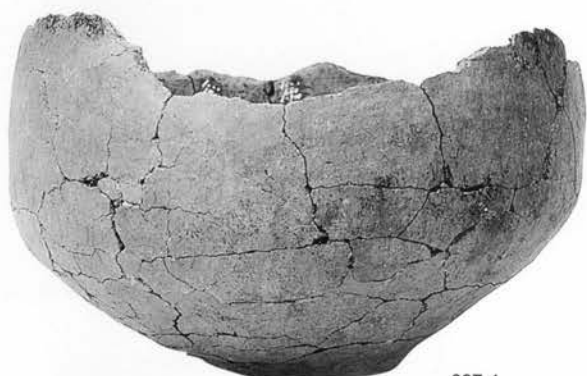




085-1



085-2



087-1



087-2



088-1



090-1



089-1



090-2



089-2



090-2
(木葉痕)

古墳時代住居跡出土遺物 (28)
(085・087・088・089・090)



090-3



090-4



090-3
(木葉痕)



090-4
(木葉痕)



090-6



090-5



090-8



090-7



090-9



090-10



090-11



094-1



094-2



グリッド-1



グリッド-3



グリッド-2

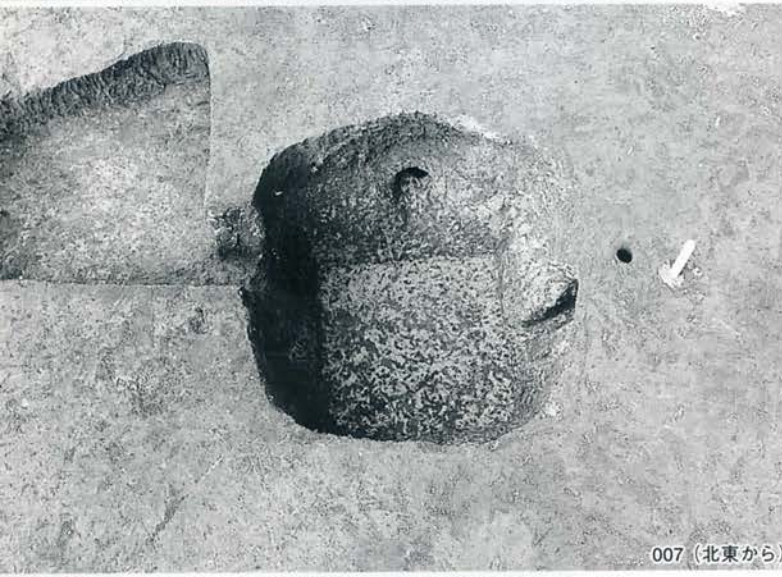
古墳時代住居跡出土遺物 (30) (090・094) 及びグリッド出土古墳時代遺物



004 (南西から)



006 (南から)



007 (北東から)



009 (東から)



007煙道部(南西から)



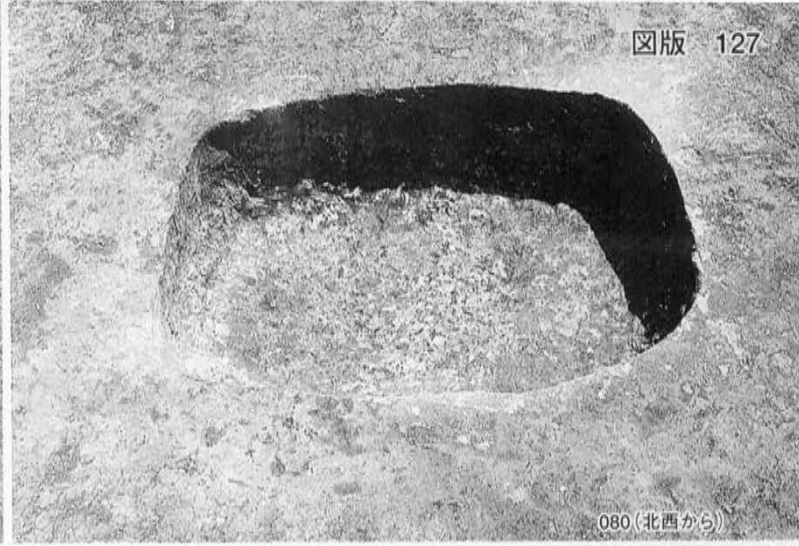
010 (西から)



078(北西から)



079 (西から)



080 (北西から)



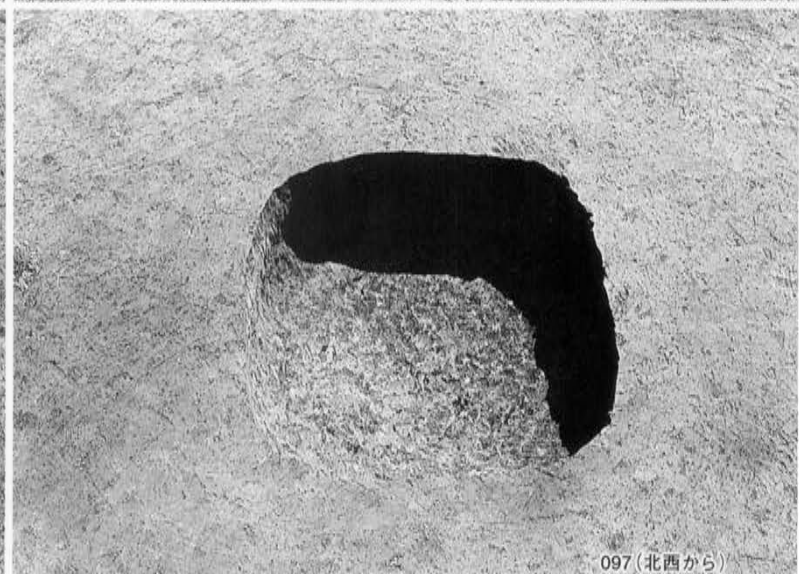
081 (西から)



082 (北西から)



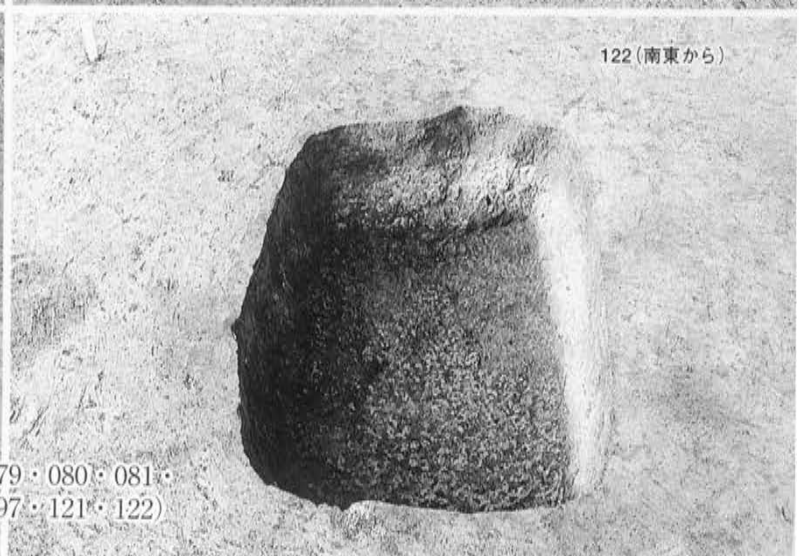
083 (南から)



097 (北西から)



121 (東から)



122 (南東から)

炭窯 (2) (079・080・081・082・083・097・121・122)



001号溝（東から）



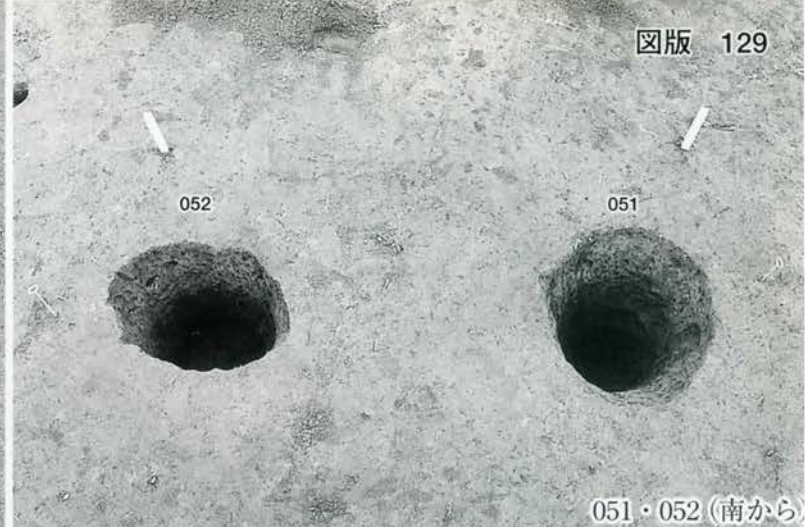
002号溝（北東から）



003号溝（西から）



017 (北から)



051・052 (南から)



054 (北から)



074 (南東から)



098 (南から)



101 (西から)

土坑 (017・051・052・054・074・098・101・123)



123 (北西から)



粘土採掘跡（北から）

報告書抄録

ふりがな	ちば まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅻ							
副書名	-白井町一本桜南遺跡-							
巻次	Ⅻ							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第318集							
編著者名	雨宮龍太郎 落合章雄							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いっほんざくらみなみ 一本桜南	ちばけんいんぼくしらいまち 千葉県印旛郡白井町 おおあざとよいちあざいっほんざくら 大字十余一字一本桜 52-8-3 ほか	326	001	35度 47分 58秒	140度 6分 38秒	19860401~ 19870331 19870401~ 19880325	26,732 19,924	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
一本桜南	包蔵地・ 集落跡	旧石器時代 縄文時代早期 縄文時代 古墳時代前期 近世 時期不明	石器ブロック	31か所	ナイフ形石器 搔器 槍先形尖頭器 剥片 縄文時代早期土器 石鏃 石鏃未製品 土師器 土製品 ガラス玉 砂鉄	Ⅲ層からⅨ層ま で10層の文化層 が確認された。 製鉄遺構、玉造 遺構を伴わない 砂鉄が土師器壺 内から検出され た。祭祀的なも のと考えられる。		

千葉県文化財センター調査報告第318集

千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 XII

－白井町一本桜南遺跡－

平成10年3月31日発行

編集 財団法人 千葉県文化財センター

発行 住宅・都市整備公団 千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部

千葉県美浜区中瀬1-3 幕張テクノガーデンD棟 19・20階

財団法人 千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809-2

印刷 株式会社 ライフ

成田市東和田595番地
